

埼連教  
二十年のあゆみ

埼玉県連合教育研究会

埼連教  
二十年のあゆみ

埼玉県連合教育研究会

## あ　い　さ　つ



埼玉県連合教育研究会長  
原田三郎

本会は、わが国が高度経済成長期を迎え、中教審に「期待される人間像」を諮問された直後の昭和39年に、それまでの県教育研究団体連絡協議会を発展的に解消して、新たに発足いたしました。

今年は、本会創立20周年の輝かしい歴史を迎えました。ここに「20周年記念誌」を刊行できることは、ご同慶にたえません。

当時の記録によりますと、全国民挙げて「教育の振興は教員一人ひとりの資質・指導力の向上にある。行政と現場教師とが一体となって研修と実践に努めることが現下の課題である。」と教員自らの意欲的な研究と修養の重要性を協調しております。

本県では、こうした文部省の意向を受けて、当時の県教育長峯岸政之助先生・指導課長中谷幸次郎先生・本会結成準備委員長高橋正吉先生をはじめ関係者のご努力によって、それまで各教科・領域別に活動していた研究団体を一本に統合して、「埼玉県連合教育研究会」として発足し、現在のこの充実した研究団体に発展できたのであります。創立期におけるご苦労が目に浮んでまいります。

今や、本会は19の県単位の研究団体と75の市町村単位のものと合わせて、実に94研究団体になっております。会員数3万3千8百名・運営費は会費および文部省と県当局からの研究補助金とで1,500万円になっております。研究内容も埼玉県独自の特色をもった年間計画のもとに地道な研究活動が行われ大きな成果をあげております。主なるものとして、授業研究会・児童生徒による研究発表会・教員研究発表会・全県一斉の学力調査及びその分析・指導資料法及び実技研修会・講演会・研究校の委嘱とその研究発表会・教育論文の募集・全国大会及び開ブロ大会の埼玉県での開催・研究紀要及び会報の発行等々であります。

また、このような成果は関東地区小中学校教育研究連絡協議会(構成メンバー：1都6県の正副会長・事務局長)でも特に高く評価されています。これは偏に、歴代の正副会長・事務局長並びに各研究団体長の皆さまのご熱意とご尽力のおかげでございます。

終りに、多難であった20年の来し方を顧み、本研究会に格別のご援助と暖かいご指導を賜わりました文部省並びに県教育委員会はじめ各市町村教委・県小・中学校長会・関係各位に心から深く感謝を申しあげます。今後も本会の大躍進と埼玉県教育の一層の向上のためにご援助をいただけますよう重ねてお願い申しあげます。

# 埼教連二十年のあゆみ

## あいさつ

埼玉県連合教育研究会長	原田 三郎	1
-------------	-------	---

## 祝辞・あいさつ

埼玉県知事	畠 和	7
埼玉県教育委員会教育長	長井 五郎	8
埼玉県都市教育長協議会前会長	小松崎兵馬	9
前大宮市教育委員会教育長	中藤喜八郎	10
埼玉大学教育学部長	先崎正次郎	11
埼玉県小学校校長会長	坂本友次郎	12
埼玉県中学校校長会長	田村 裕	13
埼玉県高等学校連合教育研究会会长	大河原拾三	14
埼玉県教育局指導課長	鈴木 獨二	15
教育局義務教育課長	長井 均	16

## 第1章 回想・展望

準備委員長	高橋 正吉	19
初代会長	中島 春義	20
三代会長	倉林嘉四郎	21
四代会長	高山 敏一	22
五代会長	福島 正	23
六代会長	飯田 豊	24
七代会長	石川 正美	25
八代会長	沓掛 義男	26
三代局長	柴崎 一	27
四代局長	吉岡喜代隆	28
二代・現事務局長	関根 升	29

## 第2章 座談会

埼玉県連合教育を語る座談会	33
---------------	----

## 第3章 沿革・組織・運営

会の沿革	47
会の組織	48
会の経緯昭和27~58	51
研究団体の基本	56
研究体制の確立	57

教育研究団体の現状と問題点	58
教育研究団体の事業計画についての文部省	60
経理事務	62
主な教育思想、情勢	64
関係諸団体との連携	65
本部関係事業の概要	67

#### **第4章 教科等研究部会**

国語科教育研究会	75
書写教育研究会	79
埼玉県社会科教育研究会	83
算数・数学教育研究会	86
理科教育研究会	90
音楽教育連盟研究会	94
美術教育連盟研究会	97
保健体育研究会	101
小学校家庭科教育研究会	105
埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会のあゆみと今後の課題	109
中学校英語教育研究会	113
道徳教育研究会	117
特別活動研究会	120
中学校進路指導研究会	124
学校視聴覚教育連絡協議会	128
教育心理研究会	132
埼玉県特殊教育研究会	136
埼玉県へき地教育研究会	140
学校図書館協議会	143

#### **第5章 地域教育研究会**

埼玉大学教育学部附属小学校教育研究会	149	鴻巣市教育研究会	180
埼玉大学教育学部附属中学校教育研究会	150	北本市教育研究会	182
浦和市教育研究会	151	上尾市教育研究会	184
川口市教育研究会	156	桶川市教育研究会	187
与野市教育研究会	161	伊奈町教育研究会	191
草加市教育研究会	164	川越市教育研究会	194
戸田市各教科領域等研究部会	165	所沢市教育研究会	196
鳩ヶ谷市教育研究会	169	飯能市教育研究会のあゆみ	198
志木市教育研究会	171	名栗村教育研究会	202
和光市教育研究会	173	入間市教育研究会	205
大宮市教育研究会	176	富士見市教育研究会	209

上福岡市教育研究会	212	寄居班教育研究会	274
坂戸市教育研究会	214	江南教育研究会	278
鶴ヶ島教育研究会	216	行田班教育研究会	281
越生班教育研究会	219	加須市教育研究会	284
大井町教育研究会	225	羽生市教育研究会	287
三芳町教育研究会	227	騎西・川里地区教育研究会	290
東松山市教育研究会	229	大利根地区教育研究会	292
比企郡小川町教育研究会	231	岩槻市教育研究会	294
菅谷班教育研究会	234	越谷市教育研究会	298
玉川班教育研究会	236	久喜市教育研究会	300
比企郡川島班教育研究会	239	八潮市教育研究会	303
吉見教育研究会	241	三郷市教育研究会	306
小鹿野地区教育協会	245	蓮田市教育研究会	310
皆野地区教育協会	247	幸手町教育研究会	314
東秩父教育協会	249	栗橋班教育研究会	319
本庄・上里教育研究会	252	庄和町教育研究会	320
児玉町教育研究協議会	254	杉戸町教育研究会	324
美里村教育研究会	256	吉川班教育研究会	327
神川・神泉教育研究会	258	白岡町教育研究会	329
熊谷市教育研究協議会	262	菖蒲町教育研究会	333
深谷地区教育研究会	266	宮代町教育研究会	336
妻沼町教育研究会	269	鷺宮町教育研究会	338

## 第6章 資料編

会費ならびに配分金補助金の変せん	345
予算の概要	347
昭和37年～38年教育研究団体国庫補助金	351
昭和39年度都道府県教育研究団体教育研究費国庫補助金交付申請書	352
役員及び運営機関	353
埼玉県連合教育研究会会則	354
埼玉県連合教育研究会教科等研究団体に関する規定	355
埼玉県連合教育研究会負担金に関する規程	355
歴代役員名簿	356
編集後記	374

**祝辞・あいさつ**



## 「20周年を祝して」

埼玉県知事 畑 和

このたび、埼玉県連合教育研究会が昭和38年の発足以来、輝かしい業績のうちに20周年を迎えたことを心からお祝い申し上げます。

昭和38年と申せば、わが国は東京オリンピックと東海道新幹線の開業を翌年に控え、いわば高度経済成長期の始まりの時期でもありました。その後、わが国は石油ショックに端を発した激動の時代に入り、政治、経済はもとより文化や教育の面においても大きな変動がありましたことは改めて申すまでもないことです。そして、いま、21世紀の新しい時代は、もう直ぐ近くに迫ってきています。

その21世紀は、正に、今日の若者たちの世紀であり、私たちの子ども達たちの活躍する時代であります。私たちは、現在抱えている様々な課題を解決し、次の世代に責任をもって引き継いでいかなければならぬと思います。

私は、4期目の県政を進めていくための大きな目標を「570万県民とともに21世紀をひらく6つの目標」として掲げましたが、そのひとつに、のびのびと個性と能力が伸ばせる教育と地域に根ざした文化の振興がございます。それは、次代を担う子どもたちの教育や青少年の健全な育成が極めて重要な課題であると考えるからであります。そして、家庭や学校や社会が何をなすべきかを皆さんとともに真剣に考え、価値観の多様化などが進む社会の中で、個性と能力が十分に伸ばせる教育環境を創っていくことが大切であると考えます。

これからの教育は、地域や学校や学級という集団の中での個別指導が重視され、一人ひとりの子たちの特性や能力を見極め、それに適応し

た指導が大切になってくるものと思われます。それは、これから職業は、めざましい科学技術の開発によってますます分業化、専門化され、創造性豊かな人材が必要とされるからです。と同時に、豊かな国際性を身につけた日本人の育成ということも極めて重要な問題です。国と国との相互依存の関係がますます深まり、いかなる国といえども世界の平和なくして自国の繁栄は望めない時代となるからです。その基本には、人間尊重と平和を愛する精神、人類愛に満ちた心情と教養、そして積極的に行動できる実践力を培うことが大切です。

私たちの埼玉県は、県民の平均年齢が全国屈指の若い県であり、また、全国第5位の580万人の人口を擁する大きな県に育ちました。

埼玉県の前途は、正に明るい活力にあふれた郷土としてますます発展していくことが大いに期待されております。そして、活力ある県づくりの源は、まず、「人づくり」であると確信いたします。

20周年をお祝い申し上げますとともに、皆様の今後ますますの御活躍と埼玉県連合教育研究会の御発展を祈念し、お祝いのことばといたします。



## 21世紀への展望に立つ 教育の推進を

埼玉県教育委員会教育長 長井五郎

このたび、埼玉県連合教育研究会が、昭和38年に創設されて以来、20周年を迎えられましたことに対しまして、心からお祝いを申しあげます。

顧みれば、昭和30年代の後半、経済の高度成長期と、その後の安定期を経て、現在に至るわが国の学校教育は、量より質への転換が求められ、「人間性豊かな児童・生徒の育成」をめざし、調和と統一のとれた教育過程による学校づくりが強調されるようになりました。

申すまでもなく、21世紀は目前に迫っています。いま、在学する児童・生徒は、次代を担う支柱となる青少年であります。私たちがたどってきた今世紀以上に変動の激しい時代を、生きていかなければならぬものと推察されます。その意味において、会員の皆さんには、未来に生きる日本人を育てるという長期的展望に立ち、義務教育の段階において、どのような教育を開拓しなければならないかを考え、実践していただきたいと思います。そのためには、教師自信の柔軟性のある思考と、果斷なる発想の転換が求められています。すなわち、知育偏重の教育から、体験を通じた勤労的学習、そして創造性に富んだ教育を推進しなければなりません。

いまや、科学技術の一層の進歩や、高度情報化社会に対していく技術を育成するには、主体性のある自己を確立させ、的確な目的意識に基づいた判断力と実践力を培っていかなければなりません。その実現を図るために、各学校では、「創意ある学校づくり」が必要であり、その過程において、一人ひとりの子どもたちの能力や特性を生かすことのできる場と機会を設定

し、成功感や充実感を味あわせることがとくに重視されなければなりません。

さらに、今後ますます緊密化、複雑化していく国際社会の中にあって、世界の平和と発展に貢献していくためには、国際人としての良識ある判断力、人類の幸福をめざして、協力・協調し合う日本人を育成することが必要です。

私は、かねがね、「ふるさとを知り、ふるさとを愛する心情と実践力の育成」をお願いしてまいりました。このことは、自分のまちを大切にすることが、郷土埼玉を愛する心情をはぐくみ、そして、先人の築いた文化や伝統を正しく理解し、これを尊重することにより、責任と誇りをもってこそ、わが国の発展に尽くそうとする自覚が生まれるものと確信します。その心が全世界、全人類へと視野を広げ、行動化することのできる豊かな人間となることが期待されるからであります。

このような願いを実現するために、関係各位の一層のご精進をお願いいたします。

終わりに、20年の長きにわたって幾多の困難を乗り越え、優れた実績を積み重ね、埼玉を担ってこられた先輩の方々や、会員のご勞苦に深く敬意を表するとともに、貴会の一層のご発展を祈念いたします。



## 20周年を祝して

埼玉県都市教育長協議会

前会長 小松崎 兵馬

埼玉県連合教育研究会が発足して20年がたちました。このたび記念誌の発刊ということになりましたことにおめでとうございます。20年間、それぞれの時代に即応しながら、課題解決に努力された研究の歩みをまとめることは、埼玉教育の進展のため極めて意義深いものがあり、この企画に心より賛意を表しますとともに代々の会長さんはじめ関係者の皆様に心より敬意と感謝を申しあげます。

戦後教育の39年間の流れを静かに回想しますといろいろな思い出もあります。なかでも、昭和30年代は、教育現場まで混沌を深くしたときでした。教育委員会二法の改正、勧説問題、特設道徳の問題、教育課程研究集会、学力調査の問題等対立抗争の時代だったと思います。教員が自らの指導力を高めるために研究するということは、特定の研究委嘱校を除いては、時間的にも精神的にもゆとりがありませんでした。しかし、教科によっては、全県的な組織をもって研究実践にはげんでいたりもいました。たまたま、昭和38年に文部省や県教育委員会の指導のもとに、これらが大同団結し埼玉県連合教育研究会が設立されました。浦和市のような地域の教育研究会も、従来は浦和市教育会という組織がありました。それから20年、役員や会員の先生のご努力で今日のように発展し、充実してまいりました。長い間のご苦労に心より感謝申しあげます。

さて、このたび臨時教育審議会が設けられ、委員の方も決定して教育の諸問題について議論がなされることになります。新聞等の伝えるところによれば、学校教育体制の見直し、教員の

指導力向上のための方途、生涯学習に関連して家庭教育や社会教育のあり方、国際化の進む中の教育のあり方などあります。

なかでも学校教育の充実を期すためには、教師の向上にあるとして、教員養成制度や現職教育についても話題となると思います。県教育委員会においても、新任研、5年次研、10年次研などを実施され、教員の研修体制を確立されました。しかし、ともすれば、これらの研修は、教師としての職務上どうしても絶え間ない講習となり受動的な立場での参加ということになります。

ところが、連合教育研究会の活動への参加は自分の興味や研究しようとする教科・領域への参加なので意欲性をもった参加となります。ここに県主催の研修を補完する意味で教育研究会の意義があると思います。教科・領域の研究会は、それぞれ研究の水準を高めるとともに、各地域の指導者の育成に力をかけてほしいと願うものであります。また地域の教育研究会は、役割分担として、学校内の実践に反映させるよう努力をお願いします。

20周年を契機として、埼玉教育推進のため貴会がますます発展されますことを祈念します。



## 先導的な役割を

前 大宮市教育委員会教育長 中 藤 喜八郎

埼玉県連合教育研究会が、創立20周年を迎え、その記念事業の一環として、このたび関係各位の熱意とご努力によって、記念誌が刊行されますことは、まことに意義深く心からお喜びを申しあげます。

埼玉県連合教育研究会については、昭和38年10月に、当時の関係者の方々の並々ならぬご尽力によって、従来別個に活動していた県単位の教科等研究団体と市町村単位の教育研究団体を統合して発足したと伺っておりますが、今、当時を振りかえってみると、日本の文化の総体が、情報化、国際化、大衆化の三つの大きな波に襲われた、まさに急激な社会変化のときでありました。そして、学校教育は、こうした社会の変化に対して、たえずその役割やあり方の発想の転換を求められていましたと言えます。本会がこのような状況の中で、埼玉県教育の充実と振興のための総合的な力として、連合体を発足させたことは画期的なことであり、また意義深いことありました。

以来、20年間にわたって、つねに時代的、社会的背景を洞察し、教育界の実態、課題等を明確に把握しながら、研究活動、研究会、研究発表会の事業をはじめ、教育に関する理論や実践、学術的な分析について、組織的な研究がなされ、たえず教育の向上と社会への貢献に寄与されました。輝かしい伝統を築かれたことは、まことにすばらしいことであります。現在、94団体、会員34,000名を数えて、ますます会の発展がなされていることともに、深く敬意を表する次第であります。

いまや、教育改革は社会的、国家的な課題となっており、意見、論議もきわめて盛んであります。そして、20世紀に生きていく「これから

の世代の教育」はどうあるべきかが問われております。たしかに、現在はこれらの課題に、まさに真剣に取り組まなければならない時であります。しかし、考えてみればいつの時代でも、教育の改革、次にくる世代の教育については、たえず問われてきております。なぜなら、学校教育は、つねに何歩か先を見る必要や、まだ達成されていない目標に子どもたちを向かせることを要請されるからであります。こうした意味で、本会が毎年刊行している研究集録をみると、毎号、将来の教育のあり方を展望した「これから」の教育に向けての研究主題が設定されており、しかもそれが、各教育研究団体との相互の連携のもとに、さらには学校の内からの教育実践に支えられた着実な歩みの成果となっており、この積み重ねが、本会の描かない伝統を築くとともに、過去、埼玉県の教育を充実と発展に導いた大きな力となったと思うであります。

社会は、絶えず後進者となる新しい世代を育てなければ維持発展していくことはできません。そして、学校教育は、この世代の継承者を育てるために、今後どのような教育活動を進めるべきか、観察を傾けて対応していかなければなりません。一つの示唆が大きな、優れた力を生むものと確信しております。どうか、埼玉県連合教育研究会が、学校教育を推進する先導的な役割を發揮され、埼玉県教育振興のため、ますます発展されることを祈念いたしまして、創立20周年のお祝いのことばといたします。



## 埼玉県連合教育研究会 創立20周年を迎えて

埼玉大学教育学部長 先 崎 正次郎

埼玉県連合教育研究会が早くも創立20周年を越えると聞きまして、私なりの感慨を覚えると同時に、心からお祝いを申上げます。

私事にわたって恐縮ですが、私は連合教育研究会の県単位の研究団体である埼玉県特殊教育研究会に、創立以来、今日まで参与という形でずっと関係をもってきました。同研究会は来年で創立35年を迎えますが、創立当初の情況を今もって鮮明に記憶しております。

当時はまだ連合国軍の占領下で、連合国軍事総司令部民間情報教育局の指示によって、昭和24年から、アメリカ本土から教育関係の学者を多数招へて教育指導者講座（I F E L）が開催されましたが、翌年の第5回 I F E L にはじめて特殊教育のコースが設けられ、私は埼玉大学から派遣されて受講しました。ところが同じ埼玉県から県教委指導主事の田村正雄先生が同じクラスに来ておられ、同先生と3か月間一緒に受講するという偶然的な出会いをしました。私も田村先生も特殊教育を専門的に勉強するのは初めてでしたが、受講しているうちに、全国の状況や埼玉県の位置づけが次第に判ってきて、埼玉県も何とかする必要があると、二人の認識は一致しつつありました。

他方、すでに県内では教育心理関係の活動が始まっています、現場では夏目米蔵、行平鹿太郎、福島吉郎の各先生たちが、知恵遅れを中心とする障害児の問題に取組んでほしいと県教委指導課にしばしば陳情に訪れていました。そこでとにかく研究会を作ろうではないかという機運が急速に盛り上がり、昭和25年9月に埼玉県特殊教育研究会として発足しました。

さて発足はしたものの、全県で10数人のメン

バーで文字通り同志的な組織にすぎず、各学校の分担金の配分をうける正式の研究団体としては認知されませんでしたが、県指導課の配慮で当時の「新教育振興費」の配分をうけ、何とか活動を続けることができました。その意味で田村先生が I F E L に派遣され、かつ、同先生の情熱的な努力がなかったなら、特殊教育研究会の発足はもっと遅れていたにちがいありません。またそれだけに、2年後の昭和27年正式の研究団体に指定された時の喜びは、今でも忘れることができないくらい大きなものでした。

県下の特殊学級が年次計画に基づいて次第に増加し、地区単位の研究組織もできて、全県的に特殊教育研究会の運営が軌道にのり、活動が活発になりはじめた頃、連合教育研究会の話が出てきたわけですが、各研究団体の主体性において相互に連携しながら全県的視野にたって研究活動をすすめると同時に、補助金等の受け皿としての役割も果す組織であるということで、加盟の提案が理事会と総会で満場一致で承認されたことを想い出します。

私個人のメモとしても、まだ書き残しておきたいことが沢山ありますが、紙幅の関係上、以上で創立20周年に対する私の感慨とお祝いのコトバといたします。



## 20周年記念によせて

埼玉県小学校校長会長 坂本 友次郎

埼玉県連合教育研究会が、ここに創立20周年を迎えたことは、誠にご同慶に堪えません。

またこの間、歴代役員の方々の並々ならぬ努力と、県内全域にわたる会員各位の、意欲的な研究への取り組みにより、輝かしい、伝統を築き上げられたことに対し、深く敬意を表するものであります。

考えてみると、私も連合教育研究会発足以前（昭和30年代）に、科学教育振興会に所属し、毎年行われた、科学教育振興展覧会・児童生徒・教師による研究発表会……等に積極的に参加したり、とりわけ夏休み中行われた長瀬の地学・生物の現地実習や、油っぽの臨海実習等に、時間を生み出して参加したことを、今更のように、思い出します。

この様な時代の私にとって、児童・生徒との強い結びつきや、真剣に研究に取り組んだ経験また、同僚・先輩との人間関係、更に師との出会い等は、40年という長い教師生活を、如何に楽しく、充実したものにしてくれたか、計り知れないものがあり、未だに感謝しているもののひとりです。

さて現在私たちの受け持っている子どもたちは、やがて21世紀初頭において、名実ともに成人となり、人類がはじめて体験するであろう、未知激动の時代（情報化・国際化・科学技術化・福祉化）に生きぬいていかなければならぬ、かけがいのない宝といえます。

県小学校長会は、この時にあたり、「学ぶ校長会」を標榜し、「理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である」と、自らの襟を正しながら研修部を中心に、鋭意研究を進めてお

ります。

「人間性豊かで実践力のある子どもの育成」についての研究成果を踏まえながら、本年度は新たに、「21世紀に生きる、日本人の育成をめざす小学校教育の創造」という主題を設定いたしました。

小学校教育が、知・徳・体の基礎基本を確実に身につけられるという基本的な方向をおさえながら、更に「生涯を自ら学びつづけ、絶えず自己を向上させようとする人間性豊かな児童の育成」という別題を掲げました。

今後これが研究について、県内各班・各地区の研究成果を集約したいと考えております。

折しも、行財政改革のもと教育界も厳しい条件に迫られております。また学校教育の内容や方法等の見直しの論議も活発になっております。

この様な時、教育界をはじめ、各界からの、連合教育研究会に寄せられる期待は益々大きいものがあると思います。

今後、県小学校長会は勿論、県内の各教育団体が緊密な連携を図りながら、むずかしい時代に対応すると共に、埼玉県教育進展のため、お互いに努力したいものと考えます。



## 時の重さを考える (連合教育研究会20周年によせて)

埼玉県中学校長会長 田 村 裕

振りあげ卒業式の3日前に旧海軍航空隊に入隊、予備学生としてのきびしい体験、20年8月15日終戦、同月28日復員して故郷での生活に入り9月1日より郷里の国民学校に復職、20歳の私の教壇生活はこのようにして始められたのです。そして、39年、いま還暦の年齢となり明年3月定年法施行の初年度退職という因縁をかみしめながら格別の思いの一日一日を過している私です。

戦中派の末座に位置づく私たち同期年齢のものは戦後教育のスタートとともに教壇生活を始め、いま教育改革の声はげしい中に40年の戦後教育(?)の功罪そのものを自らの生きた軌跡と観じ、自負といらだちの中でその教育史を閉じようとしているのです。

40年の時間の重さを確かめたい思いにかられます。国や国際情勢の流動・変遷そのままに私たちは20代、30代の教壇生活を生きてきました。その時の流れの上にともに働いた先輩の同僚、接した向百何千の教え子たちとの出合いを絶けながらこの人生を生き抜け、人間として悩み、楽しみ、夫となり妻となり、父に母に、そして祖父に祖母になってきた日々の連続の上に「いま」があることを思います。私たちは自らの生活史、自らの人生の日々をそれがどのようなものであろうとも、ある種の自負をもって反芻していくべきだと考えます。国がそうであったように戦後40年の時間の中に、ともかくも努め、悩み、求め、行動してきたことは事実なのです。

還暦を迎えて、「人に歴史あり。」の実感が身にしみるこのごろですが、ひとつの組織が生れ、活動し、維持されるためにはどれだけ多くの人の善意と努力がひたむきな責任感を土台として

蓄積され続けてきたかを、ささやかな体験の中から感じとができるようになりました。

埼玉県下94団体の研究組織を単位として構成された埼玉県連合教育研究会が発足して20年になられるとのことをお聞きし、38年以降の私自身の生活史と照らし合せながら会充実に努められたかたがたのご苦労に思いをはせるしたいです。発の発足をご指導いただいたという故峯岸教育長さんや高橋正吉先生は私も直接ご指導いただいた方ですので、思い格別のものがあります。

教員個々にとって直接関わるのは教科研究団体でありましょうが、県下全城を掩う組織として各団体を位置づけ、目的づけ、組織づけてその自主的活動を助長し方向づけてきた連合教育会の有形無形の存在意識を確認し、各種の制約のなかで組織発展に尽されたみなさまのご努力に対しお礼とお祝いを申しあげさせていただきます。

教育の真姿が求められ、いまこそ学び生きる教師のものとしての研究団体の意義も再確認される時、20年の時間の重さを生きぬいた連合教育研究会の生々発展を祈念してお祝のことばといたします。



## 祝辭

埼玉県高等学校連合教育研究会会長

大河原 拾三

埼玉県連合教育研究会がここに創立20周年を迎えたことは、まことに慶賀の至りであり、高連研を代表し、謹んで御祝いを申し上げます。

昭和38年発足以来發展の一途をたどり、今や傘下研究団体実に94、会員数34,000の威容を誇るとうけたまわりますが、今日に至るまでの間、本県教育の第一線に立つ先生方の総意を結集しつつ、その時々の困難な諸問題を克服して来られたその足跡は、まさに歴史的な歩みであり、埼玉県教育全体の真実の支えとしての役割を見事に果されたのであります。

私は、高連研の責任の立場に立ってから、事ごとにその活動を御手本とさせていただいてまいりましたが、それだけに、貴研究会が風雪に耐え、消えることのない固く鮮やかな20の年輪を刻まれたことをわが事のように喜ばしく存じ、また、敬長の念を新たにするものであります。貴研究会が成人の式を挙げる本年は、時あたかも、第三の教育改革が始動する年であります。どうか草創の理念をここに改めて高く掲げ、21世紀を指向する教育の一そうの發展のため、新たな歩みを力強く踏み出していただくよう、切望し期待いたします。

さて、貴研究会の20周年は、また、当方がみずからを顧る良い機会でもありますので、資料の整理などを心がけることにいたしました。そんな作業の中で古い研究誌を取り上げ、あれこれと拾い読みしながら、懐かしい人々と誌上で再会するなど感慨ひとしおなものがありますが、それは別として、ひと昔以上も前に取り上げられている問題の多くが、また今日的問題でもあることに気づくのであります。教育の問題はすべて古くして新しいものであること、した

がってその解決は長い時間の中での、多数の、さまざまな角度からの研究と実践の集積によってはじめて可能であるということを痛感した次第であります。技術的なことの研究や啓蒙もさることながら、そのような積み重ねの中で、一貫して変わらぬものが脈々として伝えられなければならないという思いもいたしました。それは、いうまでもなく、教育へのひたむきな情熱であり、こどもたちへの限りない愛情であります。それこそ教育の哲学の原理であるはずです。世の中が変り、制度がかわり、人も變ります。それもめまぐるしく変わって行きます。そんな動きにふりまわされて肝心なものが失われてはなりません。この、かけがえのないもの、をお互いの中にたえず確かめ合うことが連合教育活動の原点ではないでしょうか。

なお、小中高教育の一貫・連携が強く叫ばれておりますが、この点に関し、全体的には必ずしも十分ではありません。垣根があればとり払い、腕を組んで進むための行動を強めるべき時であると思います。

終わりに、貴研究会の限りない御發展を重ねて御祈りいたします。



## 教育研究団体結成黎明のころ

埼玉県教育局指導課長 鈴木 勲二

埼玉県連合教育研究会が、長い歴史をふまえ、着実な実践活動によって、本県教育の充実向上のため、多大な貢献をされてこられましたことに対し、心から敬意を表する次第です。

顧みますと、本会は、わが国が高度経済成長期を迎えた昭和38年に発足し、本年で20年目にあたるわけですが、発足までには、次のような経緯がありました。

昭和35年11月、文部省の内藤督三郎初中局長は、第5回全国校長会の席上、「教育の振興は、かかって教員一人一人の指導力にあり、教職員の資質の向上こそ現下の課題である。しかし、これらは文教行政の施策はもちろん、教師の側からも、教育研究団体の結成を期待したい。」と提言し、文部省が教育研究団体の育成のための経済的援助を図ることを示唆したのです。

これを契機として、教職員の研修意欲が一段と高まり、全国的にも統合された教育研究団体結成への気運が活発となりました。昭和38年8月、瀬尾弘吉文部大臣は、都道府県教育協議会の総会で、教育研究活動の助成の趣旨について、「教育の充実向上を期するための諸施策が、その成果を得るには、当局の努力はもとより、教職員をはじめ、国民各層の理解と協力が必要である。もとより、教師の熱意と努力は教育向上の原動力であり、この意味において、最近、ようやく教職員のなかに教師本来の使命感に立つ教育研究の意欲が高まりつつあることは、まさに喜ばしい限りである。国としても、教育研究に対する助成措置を強化し、一層の教育効果の向上に努めてまいりたい。」と述べておられます。

このような状況のもとで、本県においても、

当時の教育長岸政之助先生の意向を受けて、埼玉連教結成準備委員長高橋正吉先生をはじめ、多数の方々のご努力によって、それまで、各教科・領域ごとにあった研究団体が統合され、その名も「埼玉県連合教育研究会」として、既にも新たに発足したのであります。

昭和38年12月発行の県教委広報資料に、指導課長中谷幸次郎先生は、「教育研究団体所感」と題して、「教育研究団体は、本来、自然発生的なものであるが、そのままの姿ではあまりにも素朴すぎよう。それは、大地に種子があれば、その種子が芽ぶき、成長し、やがて結実するよう、種子が結実に至る全過程にわたって改良と育成が、常に外から加えられることが肝要である。」と、熱い期待の一文を寄せていらっしゃいます。

古い諺に、「一年の計は、穀を植えるにあり。十年の計は、木を植えるにあり、百年の計は、人を植えるにあり。」とありますが、教育こそ、国家百年の大計の基であり、本会は、本県教育を支える柱としての役割を果たしてこられました。

ここに、歴代埼玉連教の関係各位のご熱意とご精神に対し、敬意と感謝を申しあげ、貴会のますますのご発展を祈念してやみません。



## 研究と修養

教育局義務教育課長 藤井 均

埼玉県連合教育研究会が、ここに創立20周年を迎えたことを心からお慶び申しあげます。

さて、御承知のように、「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」(教特法)とされておりますが、このことは、単に法で義務づけられていること、などと解するよりも、教師自らの使命感や自覚に基づく、言わば教師の責任として受けとめるべきなのであります。事実、3万4千人の会員皆、そうした意味合いで「研究と修養」を積んでこられた筈でありますし、また、そうであったればこそ、今日の連合教育研究会の充実・隆昌があったのであると、確信しているところなのであります。

ところで、この「研究」についてであります。漢和辞典によれば、「研」とは“石の表面を何度もこすって平らにすること”の意だとあります。つまり“とぐ”“みがく”というわけです。1度や2度の話し合いをした程度では、あるいは2冊や3冊の専門書や指導書を読んだ程度では、およそ「研究」にはならないということになります。これでもか、これでもかと石が平らになるくらい、繰り返しこよごしが肝要なのであります。また「究」の字ですがこの字は「穴」と「九」(数のもととなる一から九のうち、最も高い数)とから成り立っているところから、“穴(物事)の最も深いところまできわめてつくすこと”の意だと言われます。こうしたことから「研究」とは“幾度も研ぐ(磨く)ことによって、物事の真理や奥義を究めること”とでも言えましょうか。私も1時間の研究授業の指導案を21回も練り直した新任の先生を知っていますが、まさに、こうした態度こそ

「研究」に値するものだと思います。

「研究」が“深く”ということを求められるのに対し、「修養」は、どちらかと言えば“広く”ということがなじみそうです。あるいは、前者が専門性に、後者が人間性や一般教養につながる、と言ってもよいかも知れません。先に亡くなられた岡登益蔵先生が新卒教員として赴任した小学校では、サークルがあって、互いに下宿を廻ったり、校長先生のお宅に押しかけたりして、「善の研究」や「出家とその弟子」などを読んだうえでの哲学論や文学論を、大いに戦わしたということがあります。こうした論議に加われない教員は、一人前として認めてもらえなかつたようあります。また、話し方の勉強のために、鈴木演芸場に足を運んだ教員もいたようあります(『日はまだ高い』——中央社——)。こういう姿が“広く”“修養”に励んでいる姿なのだと、私は考る所以あります。

教育界ほど「研究」「研修」を重視している世界はありますまい。○○研究会、研究授業、校内研修、研修視察……、どうぞ会員の皆様におかれましては、今後とも、ますます“深く広く”「研究と修養」に「絶えず」努められますよう、心から期待申しあげる次第であります。

終りに、貴会の御発展を祈念してやみません。

# **第1章**

# **回想・展望**



## 埼玉県連合教育研究会 設立に至る迄

準備委員長 高橋正吉

埼玉県連合教育研究会は、各地域の教育研究会及び各教科研究会等の連合によって組織されたものであります。

埼玉県國語教育研究会は、昭和6年に県内有志教員によって設立され、鶴和市高砂小学校に垣内松三先生を招いて講演を開き、初代会長に下山先生をいただきました。しかし事務局とか会費等は決められず、主として附属小学校訓導であった私がその任に当りました。会費はありませんから会員が如何かの会費を出しあって事業を進める程度で、会の運営は整然としたものではありませんでした。他の教科も大体このような組織で進められ、約13団体はあったと記憶しております。

各地域には教育研究会が設立され、市町村各PTAと連絡して研究を続けておりました。

昭和31年私が高砂小学校長となり県小学校長会長に就任した頃、地域団体と教科等研究団体との一本化を図る必要が叫ばれてまいりました。そこで各地域の研究会長が集まり県全体の教育組織を作り費用を拠出してこれを各教科等研究会に配布する事を計画しました。各地域団体長及び教科研究会長は賛成してくれましたが埼玉県教職員組合が、各教員諸君に主旨不徹底の趣があるということで、強い反対を申し出てきました。

そこで各地域の研究会長にお願いして一年の期間を置いて各教員諸君の賛成を得て、翌年結成を致す手順を進めましたが、埼玉教組の諸君はまだ不徹底であり、連合団体の組織も必要ではなかろうと賛成を得る事は出来ませんでした。

本連合教育研究会は、各学校の学級数に応じ

て拠出金を定め、県本部がこれを合計して各教科等研究会に配分する仕事をするのであって県教育研究の向上発展に寄与するところが大であると説明致しましたが、教組の了解をとる事が出来ず更に一年延長して各教員諸君ならびに埼玉教組の幹部と話し合いをして大方の賛同を得る事になりました。ところが教科等研究団体の中に新しく研究会を作る集団が出来て、拠出金の配分をどうするか困難を感じましたが、折角出来た研究団体であるのでなるべく連合会に加入を認めてまいりました。

私は準備委員長として県内各小中学校の児童数、学級数の一覧表を作り負担金を算定して各地域研究団体に配付して負担金の納入をお願いし、各教科等研究会長の集合を得てこれを配分致しました。

教組の諸君も次第にその主旨を理解され、連合教育会を支持するようになってまいりました。

昭和38年度から文部省も全国的に自主的教育研究の意義を認められ、これに対する補助金を交付され、39年に強固な研究団体が発足する運びとなりました。

私は昭和38年3月に退職致しましたので、準備の仕事をしたに過ぎませんが、本会は強固な組織をもって今日迄発展して来ている事に非常な喜びを感じております。



## 埼玉県連合教育研究会発足

初代会長 中島 春義

かねてから、自主的な教職員の研究団体が、一本化する機運が高まり、数年間その対策に、努力し、県並びに、教職員組合との、接觸を重ねた結果、民主的運営を行うことを条件として妥結を見たので、昭和39年1月18日、浦和市武藏野荘で、埼玉県連合教育研究会発会式が、盛大に行われ、その発足を見るに至ったのである。その時の規約は次の通りである。

(規 約) 一部抜粋

第2条(目的) 本会は埼玉県内における各種教育研究活動を促進すると共に相互の連絡を緊密にし、本県教育の振興を図ることを目的とする。

第3条(事業) 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 教科等の研究に関すること
- 2 教科等の調査に関すること
- 3 研究成果並に資料等の作成刊行に関すること
- 4 教職員の研修に関すること
- 5 地域教育研究団体並に教科等研究団体の連絡提携に関すること
- 6 その他目的達成に必要な事業

第4条(組織) 本会は県内地域教育研究団体並に教科等研究団体をもって組織する。

なお、当時の状況を新聞は次のように報じている。

「先生の研究会を一本化」  
県教育に総合力、助成金も増額へ  
県下の地域別、あるいは教科別などの教育研究団体を統合した、県連合教育研究会の発会式が18日午前10時半から浦和市武藏野荘で開かれた。県内には現在、地域に48団体、教科別など

で13団体、計61の教育研究団体があり、小中高教職員約2万3千人が参加しているが、それぞれ別個の活動をしていた。このため、さる34年ごろから、連合体にまとめようという動きが出ていたが、教組などから「教育研究の官制化」を警戒する声があり、実現をみていかなかった。

今回の発足にあたっても同日朝、埼玉県の海老島委員長らが同会準備委員らに会って民主的運営を要望、このため会則の付則にとくに「各構成団体の自主性を尊重する」ことをうたう事で了解しあった。

今後、同会は教科等の研究、調査、研究成果と資料の作成刊行など、教職員の研修活動を促進すると共に相互の連絡を緊密にして県教育の振興に総合力を発揮することになるが、同時にこれまで文部省の教育研究助成会の交付金をうける事になるので大幅な増額(従来50万円)も期待されるという。

なお事務局は大宮市立東中学校内に置く。

以上のような状況で県連合会が発足し、教科団体、地域団体の一体化により、統制が取れるに至ったが、小生、年度末に退職したので、活動は、次の会長の活躍を待つ事にした。



## 誕生のころ

三代会長 倉林嘉四郎

まず初めに、埼玉県連合教育研究会の今日の充実発展を喜び、役員のみなさんの御努力に対し感謝の意を表します。

この埼玉県連合教育研究会の前身は各教科等の研究団体と各地区単位の研究団体とを併せた連絡協議の組織でありました。が、これ等の組織団体はまちまちで、しっかりした基盤と組織をもったものから、名目のみのものまであって、教育研究の熱意は持ちながらも、連絡協議会として大きな成果を挙げるまでに至っていなかつたのが実情といつてもよろしいでしょう。各地区の研究団体が僅かな分担金を負担し各教科等の研究団体に配分して、細々と研究活動を続けるといった脆弱な予算しか持たない状況がありました。これに満足できなかった高橋正吉会長をはじめ、役員がたが心を痛めていた折に、文部省の教育研究団体制成のための手が差しのべられ、この両者が結びあって連絡協議の組織から連合会組織に変わったのが昭和38年でした。

この連合会組織に移る際の困難さは先輩会長の回想の中に述べられてあります。外部からの極めて強い批判に加えて内部の意見対立もあって、会議はいつも白熱したものでした。しかし最後には意見の一一致が図られて連合会組織の誕生をみることになり、初代会長に中島春義先生が就任されました。

連合会の誕生はみたものの誕生当初は、連絡協議会を一応連合会に改めただけで、財政基盤は連絡協議会時代そのままと言ってよいほどで、文部省からの助成もまことに些細なものでした。文部省の育成方針は、研究団体の予算が十分に確立され、それに応じた事業をするものに対する助成であります。自己財源が乏し

ければ助成金額も少ないとのことでした。そこで何とか連合会の財政基盤を強固なものにしたいというのが第二代、第三代の会長の意図でしたがこのことはまことに難事がありました。それに加えて、文部省の助成は事業のいずれにもなされるということではなく、真に助成に値する事業でなければならないということでしたので、各教科等の研究団体や本会自身の事業の吟味検討が大きな問題でもありました。これらの難問題も、幸いにして全会員・市町村当局の理解と県教委・文部省の適切な指導と全会員一丸となっての熱意によって、名実ともに連合教育研究会としての機能を果すよう成長したのですが、そうなるまでには何年かの年月が必要だったのです。

現在では、埼玉県連合教育研究会は確固として定着し、県下三万数千に及ぶ小中学校教職員が本会の発展充実に大きな期待をかけ、本会の活動に積極的に参加し研修に努められておられると思いますと、誕生当時副会長・会長の一員として関わりをもつたもの一人としてまことに喜びにたえない同時に、草創の頃のことを想い感慨一入のものを禁じ得ません。

最後に本会のますますの進歩を祈ってやみません。



## 埼玉県連合教育研究会の苦労と要望

四代会長 高山 敏一

先生方の研究研修の母体となる地域の教育研究会・全県単位の教科等教育研究会その全部がこの連合教育研究会を中心として活動し助成金を集め分配し、教科等の研究が効率的になされ自身また県の実態に即して研究テーマを設定し埼玉県教育水準の向上に貢献するよう物・心両面から最も有力な支柱となっている現在、その存在が認められず、その活動が停止されたとすれば、県教育は測り知れない苦境にたたされることは必至であろう。

私は退職までこの会長を勤めること五年、この仕事の意義深く、しかし苦悩の多いこともつぶさに体験した。その回想を含め、二十周年記念に当り、会長、事務局長に深甚の謝意をこめ関係方面に若干の要望を申し上げたい。

### 1. 経理面の事務処理、集録発行の苦労

国の補助金がある以上、その監査のあるのは当然である。ある年、会計検査院の検査があると予告された。教科等教育研究団体のこの検査に備えるための準備は予想以上のものがある。県もまた必死であった。二十を超す研究団体の収入、支出等記帳のあり方の根本すら、統一された正規のものにその形式を改めるなど多忙をきわめた。その形態が今用いている形式かも知れない。埼玉会館にての会計検査院の検査当日の印象は強く暗くいまなお忘れられない。会長事務局長がつきそって抽出にて行われる研究団体の責任者、事務担当者に発せられる、短くはあるが、えぐられるような急所を突く質問に汗を流す。また埼玉県連合教育研究会の研究集録ならびに名称がなければ、一切無効であったようだ。

まさに苦労の多い仕事である。

### 2. 会長の待遇について

端的にいえば、埼玉県連合教育研究会長の地位は、埼玉県小学校長会長以上のものがある。行政的に校長会長が勤けば、研究会長は教育内容で勤く。教師の研修に、実際活動に支障なく活動体制を整えるのがこの研究会長である。しかるに校長会長が文部大臣賞をいただいているのに、この研究会長には、何のお沙汰もない。校長会長が文部大臣表彰を受けるならば、連合教育研究会長は当然、いやそれ以上に表彰を受ける労苦と資格があると思うのだが、どうであろうか。

### 3. 事務局長の配置、事務所設置について

現在、会長所在校の事務官がこの事務局長を兼ねている、いや、やってもらわねばならぬ状況である。まさに敵務である。県は有能にして教育に明るい事務職員を選任でき、かつその事務所設置について特別助成をするよう具体的に配慮していただけないものであろうか。

教育界全般が何となくこの研究会の存在に無関心であるように思われて仕方がない。前記のように重要な役割をもっているこの研究会がさらにこの記念行事を機会に県教育のために画され、各層の関心を深めるための有効適切な実際活動をさらに強力に展開されるようお願いして、お祝いのことばをいたしたい。



## 回想の埼玉県連合教育会

五代会長 福島 正

### (1) はじめに

戦後各地域に統合と結成されてきた地域の教育研究会と、各教科分野の研究先達を中心にして出来た教科等の研究会は、その運営上の諸問題（組織拡大・経理等）をかかえ、その解決の一方途として、県教委の強力な指導援助と県下全研究団体の一団となっての有機的な組織一元化を求める声が、昭和30年前後より特に高くなつた。

これらの声に答えて、当時県国語教育研究会長であられた浦和の高橋正吉先生らを中心に、県下各教育研究会長等（教科・地域）が、浦和の武藏野荘（今の会館）に集り、埼玉県教育研究団体連絡協議会が結成され、これの統一組織体結成を目指して再三対策協議が行われた。私は、時の県社会科教育研究会連合会長の野上弥文先生（埼大教授）の代理の副会長として、最初からこれに出席していたので、この時の種々の熱氣溢れた情景は今なお忘れないものがある。その後これらの苦労が実を結んで今の連合教育研究会となつたのであるが、これらの経緯は関係先輩各位が述べられると思うのでここでは省略したい。

### (2) 本会運営に掌に当つて

昭和46年度に、東部代表としての行田の樋口日出男校長が勇退され、その後副会長に就任した。この年会長よりその年度の「研究集録」の編集を委嘱され、何回となく大宮指扇の印刷工場に校正その他に、年度末多忙時に指扇駅より歩いて通つたことを記憶している。

昭和47年6月に役員各位のご推せんにより、第5代の本会会長に就任し、47・48両年度の会務執行の責務を負うことになった。

先ず基本的には県下各地域、そして各教科研究団体の研究活動を助成して、県下教育陣の資質向上を目指すべきであるが、この面は各団体の活動充実をまつはかはない。

次に会全般の運営は、教職員会員の会費、市町村負担金と県・国の補助金助成金等をもって当てているので、これらに万一のミスがあつては申し訳ない。そして国及び県の経理監査に対しても整備を完全にしなければならない。幸いに私の学校の本会の事務局長にお願いした榮崎

一氏がこの面の達者であるので、既往年度の会務整理及び文書整理等の点検改善を頼み、各教科団体等の共通統一文書処理方式を定めてもらって、これらの完全を期したが、事務局員の協力によりその大部を実現し得た。

第三に地域研究団体理事である学校経営の当事者である県小中学校長さん達のご意見、教職員の研修、研究会、役員会等出張重複過多のための学級管理の問題等への教委・PTA等によるご指摘等への対応、限られた会費予算の有効利用の観点による、類似乃至同一教科範囲内の教科等研究団体の統合または合同の問題である。本会未加盟の任意団体とは関係ないが、一度加盟を承認した以上は、当該団体の意志もあり、自主性尊重の建前もあり、種々の解決案を立て、度々の役員会等で審議したが、その進歩は困難を極め、在任二カ年を終始した。苦労の甲斐があり、48年度末になって、該当団体役員諸士の多大のご理解ご協力により、その一部の団体（三団体）の連絡協議団体形式による統合の実現をみたのは、私の喜びとするところであった。

第四に関東地域全域にわたる同じ都県単位の連合研究会の連絡協議、運営の研究、情報交換等の問題である。これも私より他県へ呼びかけて、48年秋、秩父市において連絡協議会の結成をみ、会長に東京都の小学校教育研究会長である小山氏に就任して頂いた。この組織は現在も継続されて活発に活動しているとお聞き致し、創立に当ったものとして喜んでいる。

第五は本会加盟団体のその年度の研究集録の編集であるが、これは例年のとおりである。

### (3) 終りに

私といたしては、他の県単位、地方事務所単位の教育団体に多数その団体固有の事情、問題点解決、開プロ大会準備、人権法成立のための国会等対策運動等のため、寧ろ東奔西走の毎日であったが、上級官庁等のご指導、諸団体、役員、同僚職員の協力等により、大穀なくその任を全うすることが出来、思えば感恩と感無量を禁じ得ない。以上をもって駄文を獨筆する。



## ひとむかしまえのこと

六代会長 飯田 豊

埼玉県連合教育研究会が創立20周年を迎え、原田会長さんのお骨折りにより、記念事業が企画されましたことは、誠に意義深いことと存じますと共に心から敬意を捧げるものです。

私は福島正会長の後を受けて、その席を汚したものであります。当時、柏崎小学校は児童の激増期にあって、プレハブを建てたり、一度に二校を分離するための学区審議会などで、多忙な時代でした。しかし、事務局長の柴崎先生の本会によせるエネルギーな情熱に引きずられながら、どうやら、その責を果し得て、後任の石川会長に委ねることができました。

現在も各教科等や地域の研究団体は94とのことです、総括する会長及び事務局長のごくろうは大へんだろうと推察されます。当時も殆んどそのような状態であり、少しでも簡素化したいという考えを前会長も述べていましたので、早速実行しました。放送教育、教育機器、視聴覚教育の三団体を統合して新たに視聴覚教育研究会ができました。それぞれの会長さんが快よく諒解していただき、スムーズに誕生できました。更に会員構成の基礎資格が義務教育関係のみを条件としていましたので検討したところ、高校、大学関係の構成員も含まれている地域研究会というものがありました。会長は金井塚先生だったと思いますが、よく納得していただけて円満に別れることができました。文部省よりの補助金を受けている団体として、その構成基礎を明確にしたのであります。

関東ブロックの連絡協議会も年一回、駿馬わりで開催されました。各県ともそれぞれ連合研究会の性格が異り、小中学校が別個になっているところが多く、埼玉のように義務教育関係が一

本になっている県は少いようでした。創立に当っての大先輩の考え方や県教育委員会の助言もあったことでしょうが、最も充実した連合研究会であったようでした。研究成果の発表されている会誌の交換もしましたが、常に他県よりも立派なものでした。それにしても東京の番町小学校の高杉会長はじめ近県の会長さん方との交流によって多くの情報を得ることができました。

予算の配分や会誌の原稿集めには事務局として大へんな仕事でしたが、一年の研究成果が集録された会誌を県下各地にお届けするのは、毎年、春休み中になってしましました。教育事務所長さんのご協力を得ることができ、柴崎君の労をいとおしみながら、二日がかりでの県内めぐりも忘れられません。秩父から比企へゆく道筋の定峰峠を越える時は、見事な桜並木の蕾も開き初めて、木々の芽吹きも清々しく、車窓の眺めに心安らぐ想いでした。

十年前の思い出話になりましたが、埼玉の教育界も何かと異常な状態の中で、国際化、情報化、多様化の波にもまれています。この時こそ専門職としての研究が本会を中心として着実に推進されることを期待しています。この事業が次の十年へ、更に21世紀への確固たる踏み台となることを祈念しています。



## 昭和52年度前後の回想

七代会長 石川正美

このたび、埼玉県連合教育研究会が創立二十周年を迎えたことは、まことに、喜ばしい限りであり、連合教育研究会が果してきた意義の大きさを考えるとき、あらためて、輝く二十周年記念をお祝いし、この間、ご苦労を重ねられた方々に感謝の意を表し、今後のご発展を祈念いたします。

私は、昭和51年4月、春日部市立柏壁小学校長を命ぜられました。そのため、幸運というか思いがけずも、埼玉県連合教育研究会長という重責を担うことになりました。以来、昭和53年度まで3ヶ年この光栄に浴しました。当時、この役職は柏壁小学校長と一緒にありました。というのは、柏壁小学校長であった福島正氏が昭和47~48と2ヶ年、次の校長飯田農氏が昭和49~50と2ヶ年、続いて私が昭和51~53と3ヶ年この職にあったからであります。しかし、そのことは柏壁小学校が独占しているというより事務局長にその人を得なければ、正常な運営ができないということからであったと考えられます。この頃名事務局長といわれている柴崎一氏（現久喜中事務主査）が柏壁小学校にあって前記3代9年にわたる事務局長として手腕をふるわれ、関係事務を完遂してくださったためであります。

当時、本連合教育研究会管下の研究団体は、埼玉県国語教育研究会ほか18団体、地域の研究団体は64団体がありました。昭和52年度教科等の研究団体では、学校視聴覚教育連合協議会が関東甲信越研究大会を所沢市を中心に開催して多大の成果をあげられました。地域の研究団体でも、それぞれの地域の課題を取り組んで苦労を重ねておりました。地域の研究会長は、それ

ぞれの地域の研究会をまとめ、其の上、分担金を納入する。ですから総会などへも、よく出席しご協力をいただきました。一方、教科の研究会長は助成金を受取るだけで、自己の教科の運営で精一ぱいだったのか、総会にも出席がよくなく、この点などがすっきりしない所がありました。

連合教育研究会は、会自体として大きな事業を持たず、管下の研究会に助成を行い、その研究会の活動を願っていましたが、何か一つくらい、本会の事業はないものかと考え、広く会員から「教育論文」の募集を行うことを決定、昭和53年度から行いました。ささやかな足あとですが、いまも引っ張りでいて感慨無量であります。

いま一つ重大であったことは、昭和52年7月23日に、ゆとりと充実をめざす新教育構想が発表され注目を集め、この新教育構想の説明会などが3ヶ年計画で実施されることになりました。

本研究会も県教育局と深くかかわりあいながらこの事業の推進に当たったものであります。

以上、昭和52年度前後の埼玉県連合教育研究会の活動の状況を回想し、本会の今後の発展を祈念し筆を擱きます。



## 成果を目に見える形で

八代会長 善掛 義男

埼玉県連合教育研究会創立20周年に、かつてこのしごとにたずさわった者のひとりとして、心からご祝詞を申し上げます。県下の会員数はすでに3万4千の多きに達している由、この数は、県下の教育研究団体としては、おそらく、最大のものというべく、見方によつては、県下小・中学校における研究推進を間接的に網羅するものといつても過言ではありません。

傘下の19教科等研究団体、75の地域研究団体は、研究の領域およびその場をほとんど、カバーしていることになります。まい年、どこかの研究団体が、いろいろな規模の研究の委嘱をうけ、その組織を通して、鋭意、精進の歩を進めておられるのを想像するだけでも、この会の成果に思いを致すことができるのです。

記念誌を刊行するに当たり、一言というご依頼で筆をとりましたが、ここで、今後の連合教育研究会の発展について、思いつくまま、いくつか書き述べることにいたしましょう。

まず第一、前述しました各教科等・地域研究団体の研究成果を、連合体の活動として取扱、掌握する手だけを、今まで以上に講ずる必要があろうということです。連合研究会本部としては、現状では、事務的な補助金配分しごとに終始、研究の進行度や内容についてほとんど承知するところがありません。このような現状は、各団体の事務局特に会長と直接的に連絡を密にすること、そのような、いわば、会長を招集する会議を定例化することで、多分、かなり改善することができるのではないかでしょうか。

第二には、事務局の固定化を図ることです。現状では、会長かかわるたびに事務局も、その

勤務校に移動しなければならない、多額の予算をかかえ、配分のための煩瑣なしごとをこなさなければならない事務局員が、結果として、固定しない（専任でない）ということは、事務運営の円滑化を著しく妨げることになるのは言を俟ちません。事務局の固定化、専任職員の確保こそ将来の発展の布石となることでしょう。過日の座談会の折にも、現役、先輩を問わず、諸兄からこの件が強く要望されておりましたので、早晚実現するような見通しが立ちはじめているのは心強い限りであります。

第三、これは、当然第二の要件と関連いたしますが、傘下諸団体の研究実績、運営資料等は必ず、年次ごとに、手際よく整理・保存されねばならないということです。現在でも、おそらく事務局に、そのような資料が集められていると思いますが、それが、いつでも、必要なものを抽出利用できるようになっていることが必要であります。

現場における研修において大事なことは、その成果が、どういう形でも、目に見えるように想定されねばならないということ、これは、上記三点においても同様であります。会長さんはじめ、その前に当たられる方々のご健闘、ご努力を期待してやみません。



## 事務局長時代のひとりごと

三代局長 柴 崎 一

学校教育を推進するために必要な教育研究の中心的な役割をはたしてきた県連教も、20周年を迎えると聞いて、月日の経つ早さに今更ながら感心する。この記念すべき事業の末席に私の愚鈔がのせられる機会を与えられ、恐縮すると同時に、当時のことが、つい昨日のことのように脳裏をかすめる。

私が県連教の事務局長を依頼されたのは、昭和47年5月だと思う。当時、埼葛地区の中心的役割をはたしていた春日部市立柏原小学校に赴任したのが、この1ヶ月前の4月1日、内外とも様子が把握できず、四苦八苦の毎日で、やっと1ヶ月を経過した頃の出来ごとであった。

当時、私が担当していた市教研、埼葛連合教育研究会、全国学校事務研究会等を含め9団体の役職を兼ねていた関係で、仕事に対する不安から悩んでいたわけであるが、会長所在の学校に事務局を置くと云う“オキテ”らしいものがあつては、引き受けざるを得ない。また、校長を助けると云う気持からも辞退する理由が見当らなかったわけである。

私は、事務局長として何をすべきかを模索しつつ、先輩であり、前事務局長であった関根昇氏より、県教連の概要と仕事の内容について指導を受け、大変なものを引き受けてしまったと云う気持で引き継ぎを終了したものである。

私の手がけた最初の仕事は、それまでの資料及び文書類を分類整理すること、これによって、事務処理が容易であり、事務局が移動した場合もスムーズに引き継ぎができると云うメリットを考えたからである。しかし、整理したことが不幸にして、7年間、3代の会長に仕えると云う皮肉な結果になろうとは想像もしなかったこ

とである。

最初に仕えた福島正会長は、将来的展望と研究団体の公平な運営を考え、視聴覚3団体の統合、技術家庭科、保健体育、地域教育関係等について内容検討を進め、その資料収集を指示されたことがあった。しかし、時間的に実現を見せず、次の飯田豊会長時代に実現を見るわけで、引き継ぎの様子が今も記憶にこっている程、きわめて困難な課題であった。2人の会長に頭が下がる想いであった。

当時、事務局運営について、再三にわたって県教育局のいづれかの機関でと云う要望をしていたが、実現されず、代りに教員の増員と云う形で実現したのが、石川正美会長時代になってからで、福島会長時代より実に5年目であった。

私の仕えた3人目の石川会長もまた、県連教の存在理由の重要性をアピールし、教育研究の本流でなければならないとして、教育関係機関に指摘した人として印象に残っている。また、各教科研究団体長に対しては、「金をもらう団体長が会議に出席しないで、金を集めると云うのは、本末転倒である」とハッパをかけていたのが、今も思い出に残っている。



## 事務局長の誕生

四代局長 吉岡 喜代隆

私がこの研究会の事務局長を引き受けたことになったのは、昭和54～55年度の2年間でした。当時は、浦和市立高砂小学校に転勤して日も浅く、学事務職員の本来の仕事、そして学校の中の様子もまだ良く解らなかった頃でした。そんな時に昭和54年度の校長先生に、埼玉県連合教育研究会の会長をするようにもうすでに決っていたのでした。

そんな事も知らない私に突然に……。

そう、あれは、昭和54年4月中旬頃でした。当時の教頭先生に埼玉県連合教育研究会の会長にうちの校長がなったので、事務局長を引き受けてくれないかと相談されました。

その時、私は断った。理由は、事前に私に何の相談もなく一方的に事務局を引き受けたからでした。その後何回か相談を受けて、なれば、強制的に返事をさせられました。

いやいやながら連合教育研究会の仕事の内容の勉強をしました。かなりきつい仕事だと解った時は、二度ビックリしました。そんな時に、この連合教育研究会の事務の職員が配当されることになった。しかし、採用は6月にならなくては決まらないとのことでした。

その事務職員が採用になり、浦和市立高砂小学校に着任したのは6月1日でした。しかし、この事務職員は教員の免許を持っているからと、事務室には配置されず、職員室に配置、連合教育研究会の仕事は、片手間の仕事だということでした。その理由は教員免許を持っているから教員の身分で採用になったとのことでした。

それはおかしいので、教頭に相談した結果、まとまらず、今度は、その事務職員は体育の学校の出身で体育の免許があることから、保健室に配置、養護教諭の仕事の手伝いをする。その他に体育の授業を数時間受け持つことになっていました。私に事務局長をおきながらこの仕事、怒って私は教頭に再度相談したが、しばらく様子を見るとの返事が帰ってきました。ますます怒った私は、事務局長を引き受けないと云って相談に行ったら、答えは、それはこまる

であった。

しばらく事務局長の仕事をしないでいたら、教頭が事務局長の仕事を始めました。それは、連合教育研究会の総会を開催しなくてはならなくなってしまったからでした。

間もなくして前事務局長が文部省に予算要求をしなくてはならないとの事で仕事を仕事を教えてくれることでみえたのだった。

結局私がその仕事をしなくては前事務局長に申し訳が立たないことで、事務局長の職を事实上引き受けことになってしまいました。

それから教頭も理解を示し、事務職員は、保健の仕事はしない、そして事務室で勤務する。しかし、他の教員が体育の授業をどうしても、手伝ってくれとのことで体育の授業を数時間することで、納得して和解したのだった。

その後前事務局長にいろいろと仕事の内容を教えてもらって少しづつ軌道に乗ってきました。

どうやら事務局長としても、それらしくなってきたようでした。

これが浦和市立高砂小学校の連合教育研究会事務局長の誕生のいきさつです。思い起すに、この事務局長の仕事は、傍目には簡単に見えるが、実際にはかなりハードな仕事です。

このハードな仕事を県費事務局員に相談もなく引き受けざるを得ないことは、誠に残念です。

それに伴ってこの研究会があるために配当になる事務職員がその仕事に専従できない懸念にも問題がある。まだまだ問題は、多くありますが先日行なわれた座談会でも言いましたが、この研究会の事務局長及び事務局職員は、ある教育会館なりに専従で配置してスムーズな運営がなされることを願っています。

思いつくままに書きましたがこれが私の回想の一コマです。それではこの研究会の発展を願って筆を置きます。



## 事務局の設置について

二代・現事務局長 関根昇

私も高山会長の時に3年、原田会長と共に4年に亘り、本会の事務局を担当し微力ながら本県教科・地域等の研究会のお手伝いをさせていただきましたが、この事務局の組織について、若干述べてみたい。

年間の作業は各研究会長調査、総会準備、会費徴収、配分、団体長会、編集委員会などと、次から次へと流れてくる。当時は事務職員の特配もなく、学校事務と埼連教との両立でかなりの微務であった。どうして専任の事務職員の配置が出来ないのか、本県教育界の最大の研究組織でありながら……など、当時高山会長と議論をしたものである。今回20周年記念誌の刊行に当り、古い資料をひもといてみれば、設立当初から当分の間県教委で文書等かかわっていたようである。県教委から離れ、よちよち歩きながら独立した時点で県の代りの人員を配置して欲しかった。会長辞任に伴う後任候補についても難行する。専任事務職員不在のため会長は引受けけるが、その校の事務職員が不可、と云うことで大変後任には苦労したものである。やっとのことで後任者へ、専任職員の配置と関東地区の連携の二点を進めてほしいの二点をお願いしバトンタッチしたものである。

また縁あって56年より事務局を引受けた事になったが10年前と比し、県当局も若干考慮されていた。専任事務職の配置はあったが、この件についても一言触れてみたい。

県当局は、総会終了後でなければ発令できないと云う！しかし教育研究の業務は毎日続けられている。特に総会までの作業は年間の仕事量の過半数を占めている。この時点の事務職員の配当はない。せめて総会から次期総会までの

発令を希望する。また講師発令（臨採用）のため長くて1年限りの採用である。従って概略の仕事を覚えこれからと云う段階で転換されるこのような状態のなかで会の統轄が出来得ない。ちなみに本年度の採用は7/1～3/31までである。

関東6都県では独立した事務所を置き、事務局長以下専任の事務職員が2～3名配置されている、本県もぜひ考慮して欲しいものである。

また、会長の待遇についても同様である。小中学校教職員35,000名の会員を持つ県下最大の研究組織の団体長であるにも拘らず、小中学校長会の下位に位置づけされているのも不思議である。また底辺からの盛りあがりも少ない。これに対処するため事務局としては少い予算をさして会報年2回発行しPRに努めている。

本県教育研究会最大の小中学校教職員全員加入の研究会であり研究活動の指針となる研究会である。10年ひと昔と云うが20年を経た現在行政組織に何らの変化もみられず、ただ変化あるのみは年々増加する会員とこれに伴う仕事量の増大のみ、これらに対し、さまざまな角度から検討したのであるが、研究、実践が本務ではあるが、これらを統轄する事務局の設置と専任職員の配置こそ最大の急務ではなかろうか。一日も早く専任の事務職員の採用を望むものである。

# **第2章**

# **座 談 会**

# 埼玉県連合教育を語る座談会

S 59.7.23

## 出 席 者

準備委員長	高橋 正吉	現副会長	丹羽 尊照
39年度会長	中島 春義	44~47事務局長	開根 升
42~46 "	高山 敏一	56~59	大宮市教育委員会 小川 昌雄
42~45副会長	樋口日出雄		
47~48会長	福島 正	編集委員	井上喜代佳
49~50副会長	荻島 淳	"	柴田 房雄
51~53会長	石川 正美	"	野原 晃
54~55会長	菅掛 義男		
56 副会長	村田 茂雄	事務局幹事	池田 朗子
54~55事務局長	吉岡喜代隆	"	新島 佳子
56~59会長	原田 三郎		



## 原田三郎会長のあいさつ

きょうは、埼玉県連合教育研究会の歴代の会長・副会長・事務局長さんにお集まりいただきました。

公私ともにお忙しいところ、ご出席いただきありがとうございます。

今や、本会は皆さま方の過ぎし日のご努力とお力添えによって、埼玉県教育の充実と向上への強力な役割を果す研究団体に成長しております。

全国でも東京に次ぐ大世帯となり、会員数も実に3万4千名、94研究団体になっております。

本会は、今年でちょうど創立20周年を迎えました。過日の理事会、常任理事会および評議委員会の席上、20周年記念事業の実施が決議され、いま、記念誌発行などの準備をしているところでございます。きょうのこの座談会もこの事業の一環として、今後の大飛躍を念じております。

皆さまのご苦労をいたいた各年代毎の「あの時、あの事」、を中心としたエピソードなどを中心にお話をいただきたいと思います。

どうぞ、お気軽に、よろしくお願ひします。



高橋 本日は大変お忙しいなか、しかも暑いなか、お集まりいただきまして、ありがとうございます。先輩の先生方にお育ていただきました埼玉県連合教育研究会もお蔭様で立派な業績を残しつつ本年20周年を迎えることができました。本日の座談会は、この記念行事の一つであります記念誌『埼玉県連合教育研究会20年の歩み』(仮称)の重要な位置を占めるものであります。今までのご苦労いただいた大先輩の先生方の御恩に報いたいということ、また、会の発足当初の事などまだまだ不明確な部分を明確にして次に引き継いでいきたいと思います。

そして、現在の研究団体がさらに飛躍する機会になればということで、この四つを主旨に開かせていただいた座談会であります。よろしくお願ひいたします。

## 発 足



司会 (丹羽) 発足当初、地域の研究団体が48、教科等の研究団体が13団体のことですが、現在は、それが地域75、教科等19、合計94団体、会員34,000名に達しております。これだけの団体の横の連絡となりますと、なかなか大変なものであります。おそらく本会発足当初も、この横の連絡ということについては大変なご苦労をなされたのではないかと思います。

まず、本会の発足の動機、発足当時の御苦労などを、発足のための準備委員長でいらっしゃった高橋先生からお話をいただけます。

高橋 私の時には、いわゆる埼玉県連合教育研

究会というものが、しっかりとできたわけではないで、その前に、県に各研究会ができました。たとえば、中島先生は算数数学教育研究会をおつくりになり、私は国語研究会をつくり、あるいは社会科の研究会ができ、いろいろな研究会ができました。この会員というのがはっきりわかるようなわからないような状態で、会員は会によつて違い、会員を取つたり取らなかつたりしていました。たとえば、国語研究会などは、会長副会長はおつても、事務局というものは、あまりはつきりしていなかったのです。12~13の研究会があったと思うのですが、会費を取らないで、研究会の会場校の備品、消耗品などを使わせてもらっていたようです。それではしようがないので全部の学校に入会してもらって、各学校から会費を出してもらおうということになりました。各都市にできてきた地域教育団体の会長さん、あるいはその代理の人に、浦和の高砂小に集まつてもらい、横の連絡の会を作ろうじゃないかということになりました。確か昭和33年だったと思います。しかし、なかなか主旨が浸透せず、また各地域、各教科にもどして検討してもらい、3年後昭和35年1月に「埼玉県教育研究団体連絡協議会」の発足にこぎつけたわけです。本部を高砂小に置き、会費は各校の学級数でいくらづつ集めるかを決め、各教科等の団体へ平等に分配することになりました。各地域の教育団体の会長さんに集金してもらい、本部に集め、本部から各教科等の研究団体へ分配する形をとったわけです。ここまでくるまでに大変苦慮しました。県からは補助金をもらわなかつたと思いますが、そのへんはどうだったでしょうか……。

司会 ありがとうございました。昭和35年に、本会の母体である「埼玉県教育研究団体連絡協議会」をおつくりいただいたということですが、大変なご苦労をいただいたこと

がよくわかりました。それを受けて、正式に本会「埼玉連合教育研究会」をおつくりになった中島先生、そのへんの御苦労などお話をいただければと思います。



中島 高橋先生がお骨折りいただきて、その準備をして下さいましたので、私はそれにのつとりまして研究会一本化の責任者ということで推薦されました。昭和

39年1月18日のことでした。会則もこの時作りましたが、埼教組の要望で付則に「各構成団体の自主性を尊重する」ことをうたうことで了解し合つたことを覚えております。会長に中島春義（大宮・東中校長）副会長に小学校から飯野政秋柏原小学校長、中学校から高橋昇熊谷荒川中学校長がそれぞれ決りました。発足の年でありましたので、研究会の統合ということが大きな目的がありました。どういう事業を進めていくかについては、むしろ第二年目からということになったわけです。

司会 ありがとうございました。大先輩のお二人の先生から、本会がスムーズに滑り出すまでのご苦労をお聞きいたしますと、まさに20年の重みというものを感じますが、開根先生何かお伺いすることができますか。

開根 はい。中島先生、文部省から補助金をもらう前の段階として、県の指導課の方で音頭をとったように思われるのですが。申しますのは、古い資料によりますと、各教科の団体長会議ならびに講演会等の派遣申請が、県の教育長の名前で出されているのです。これを見ますと、県の指導課がかなり本会の設立に働きかけたのではないかと思うのですが。

中島 その通りですね。一本化することについて県から相当な指導がありましたね。

司会 高橋先生のときはいかがだったですか。

高橋 私のときは、発足当時の事情の報告は、

その都度いたしましたが、指導課の方から補助金をもらったりはしなかったよう思います。

司会 中島先生のときは、新聞記事に「文部省は今年度50万円の交付金をだしているが、来年度はこの一本化によって大幅な増額が見込まれている。」とありますので、県を通して補助金をもらっていたわけですね。

中島 はい。もらいました。



樋口 そうでしょうか……。というのは、39年に視聴覚の開拓大会があるのだけれども埼玉は引き受けられなかつたのです。42年には受けたのですが……。その時も補助金をもらわなかつたように思うのですが……。県からは補助金を20万もらつたのですが、国から補助金をもらつた覚えはないのですが。

福島 国から補助をもらつたのは、高山先生の時からでは？

司会 高山先生いかがですか。



高山 たぶん、そうですね……。飯野先生が生きておられて、音楽教育連盟の理事長をやつておられて、「今年度から補助金が20万か26万か出るようになった。」と言われたのがたぶん昭和40年だったと思います。

樋口 おそらく最初は文部省で「(連合教育研究会を)つくらなければ補助金は出せない。その場合、小・中は別につくれ」というようになつていています。埼玉は小中一緒の会ですから。その後、中学校から、小中別にしようという話もありましたから。ところが、当時中学校の統合問題が出てきて、児玉などは、7つか8つぐらいの数になつてしまつわけです。そういうところでは会が盛り立たないというわけで、止むを

得ず今のように小中連合のままきたわけです。

高山 やはり40年から補助金をもらつたのだと思います。この補助金の問題で指導課とやり合つたことを覚えてますから。

間根 39年に一応配分はしてあるんです、各教科へ。

高山 そうですか。その時は県からの補助金はなくて、会費からだけですか。

間根 いえ、県からも若干あります。発足すれば金をだすということのようですから。ところが、この金が出るが、他の県もそうなのですが、みな3月なのです。それが現在もそういう状態ですから――。

司会 会の運営、特に経費のことに関しては現在においても大変御苦労があるというお話をあります……。福島先生、会長としてどんな御苦労があつたでしょうか。



福島 その前に、歴代の会長のことですが、初代が中島春義先生、二代が飯野政秋先生、次が倉林嘉四郎先生、次が高山先生ですね。

司会 そうですね。そのところが今まで明らかにされていなかったところです。昭和39年が中島先生、40年が飯野先生、41年が倉林先生、42~46年が高山先生ということ。この座談会のお蔭でこのことがはっきりいたしました。ありがとうございます。

福島 そして研究集録を作るようになつたのが高山先生の時からですね。

高山 そうそう、これを作らないと補助金がもらえないんですね。各教科も作れということで今のような形になつたんです。

福島 その補助金が遅いんですよ。ですから、会費で前半を何とか間に合わせようとするんですが、これもまた市町村のお金とか、地域によっては個人負担のところもあつて、なかなか集まりが悪いんです。



高橋 ああそうですか。発足当初、お金をどう集めるかというところで、教員からは取れないで、PTAか市町村からもらうということになったんです。その後も市町村からもらったのではないですか。

福島 それが千差万別なんです。

高橋 現在もそうなんですね。公費負担、個人負担、研究会負担、と三つの種類があるんですね。ですから会費値上げが大変難しいところなんですね。

原田 そのとおりなんですね。90%は公費負担なのですが……。

高山 公の事業なんだから、当然公費から出すべきなんでしょうね。現在でもそんな状態ですか。

司会 高山先生、会長当時はいかがでしたか。

高山 一番苦労しましたのは事務局の問題です。会計をはじめとする事務処理をどうしたらよいかということですね。つまり事務員の問題です。教育センターへ研修に見えていた方に週3回来てもらって事務を執っていたいただいたこともあります。大宮東中の関根先生に頼んだら、「俺を殺す気か」(笑い)といわれましたね。小中学校校長会には事務員がいるのに、研究団体の様の下の力持ちである連合教育研究会に事務局がないというのは情ないが、事務局を置けば、

それだけ経費がかかる。すると各研究団体への配分金が少なくなる。これに悩みましたね。現在はどうですか。

司会 現在は正式に一人県費負担の事務員がおりますね、関根先生。

高橋 はい、あります。

司会 いつからそうなったのでしょうか。

石川 私が辞める時に、小学校長と、連合教育研究会に一人ずつ付けるということになったのです。もちろん県費負担の……。

高山 そうですか。それは大進歩ですね。

司会 しかし、それがまだうまくいっていないようなんですが……。着任が7月1日頃なんですね。ほんとうに忙しいのは年度末から年度当初までですからね。ですから、関根先生のように会長の学校の事務の係の人が大変な忙しさになってしまふのですね。4月当初の発令だと助かるということを関根先生もおっしゃっています。

福島 その年の会長が誰になるか分からないので4月当初はだめなのでしょうね。どの学校に配置したらよいか分からないということでしょうね。



斎掛 そのことですが、石川先生がおやりになっていた時は、校長会長と兼任のような形だったでしょう。私のところから校長会長と研究会長が別になったものですから、きっと両方に一人ずつ事務を置くことになったでしょうね。もちろん、それは石川先生がそのようにして下さったからでしょうが……。54年度からということですね。吉岡さん、何月頃だったでしょうね。専任の事務の人が来たのは。

吉岡 6月の18日だったと思います。

斎掛 次の年も同じ頃ですか。

吉岡 はい、そうです。同じ頃です。

司会 今年はどうですか。

関根 7月1日付けです。これまでが忙しいので

す。たとえば、各地域の75団体の会長とか副会長を調べたり、各教科団体のそれを調べたり、総会行事までの事務が山積しているのです。総会が終ってからの発令では遅いんです。そして3月で終ってしまい、その人は1年限りということです。同じ1年なら、せめて総会から総会までにしてほしいものです。他県の状況を見ますと、もっと事務局がしっかりしているのです。教育事務所長が事務局長になったり、正式の事務職員を3,4人もかかえていたりする県もあるのです。本県はどうもこのところが大変弱いわけです。県当局に強く要望したいところです。

高山 それから大変だったのは、補助金をもらっている関係で会計検査院の検査があるということでしたね。これによって今までの各研究団体の会計の整理の仕方が大きく変わらざるを得なくなってしまったのです。関根さんと一緒に県の指導を仰ぎながら、会計事務の改訂をせざるを得なかつた。何度も会計担当者会議を開いて徹底させるべく努力しましたね。43年頃でしたかね。埼玉会館の一室に呼ばれて、会計検査院の厳しい検査を受けたことは忘れられません。抽出された教科の会計担当者が階場に控えている羊の如く別室に控えている姿が今でも思い出されます。そこで痛感したのは、会計事務等に精通した事務員を置かなければならぬということですね。

これに無関係ではないと思いますが、もうひとつ感じたことは、連合教育研究会長の待遇ということです。というのは、会長になり手がないのではないかという危惧があるからです。一般は「そんな連合教育研究会などというものがあるんかい」という認識の程度なんです。それが証拠に、かつて学芸大の大島教授を招いて「教育課程の改訂について」という講演会を本会で開いたのですが、参加者が全県から何と80人し

か集まらない状態でしたからね。事務局の設置といい、事務員の配置といい、連合教育会長はもっと尊重されなくてはならないということを声を大にして申し上げたいですね。文部大臣賞を受けるくらいの位置に置かなければ会の発展に結びつかないと思います。

関根 同感ですね。私も高山先生時代に3年間、原田現会長時代に4年間、事務局長をやらせていただいているが、県内の小中学校の教員34,000人という会員をもつ連合教育研究会の会長は、いわば小中学校長会長よりも格が上であつてよいと考えますね。事務局員の配置といい、もっともっと高い待遇であつてしかるべきだと思います。従つて事務局としては会員の認識を高めるために、今まで年1回の会報発行を年2回発行に踏み切ったわけです。会員皆様の意識向上を図ろうとしているわけです。何としても事務局の実態が現状のままでは、本会の事業も思うにまかせないのが現状です。

高山 教育の荒廃ということが言われていますが、管理の前に指導がなければならない。そのための研究推進ということを考えれば連合教育研究会は重要な役割を果しているわけです。そういう意味でも、もっと尊重されなければならないと思います。



石川 現状のままであると、連合教育研究会が大きな、重要な仕事をしているという認識が薄いんですね。というのは、会員が直接かかわる教科研団体とか地域研究団体の方が目に見えた事実上の仕事をしていますからね。本会は会費を集め、補助金をもらって、それ配分しているだけだという認識もあるわけです。

高山 もし、本会がないとすれば……。

石川 そうです。ないとすれば大変なことになるわけです。

沓掛 ですから1年くらい補助金をストップしてみると、よく分かるでしょう。『空気』がないと大変だというように。そういう存在なんですね、一般には。

司会 34,000の会員一人一人が連合教育研究会というものがあるということさえ知らないのではないかと思えることもありますね。私自身も特活研究会の事務局をやってはじめて、連合教育研究会との接触がふえて、こんなに厳しい会計もあるのかということを覚えたり、研究集録を出しながら、いかに本会が重要な位置にあるかを知りました。また全国大会を埼玉で開いて、本会から補助金をもらうという恩恵を受けてはじめて、連合教育研究会というのはありがたいなあと思いましたが、この『ありがたいなあ』という意識が底辺までいっていないんですね。重要な役割を果たしながら、その存在さえ認められないという現状。どこかに溝のようなものがあるのではないかでしょうか。その溝をどううめていくかということが今後の問題となると思います。

司会 連合教育研究会の役員をした者は連合教育研究会の重要さを意識しているが実際に下までおりていくと、その間が欠けてしまう。任された研究会の中では、それぞれ機能を果たすべく努力をしているが連合教育研究会との結びつきとなると補助金をもらうだけでいいという形になり事務処理をきちんとやっておけばいいというぐらいのことになってしまう。そのへんの溝をうめるので高山先生あたり大変御苦労なさったよう、専任の事務をおくとか、その発令を4月1日から3月31日にできないのか、しかし、会長がはっきりしないから県の発令もおくれるんだろうとか——休憩時間にも話し合ったんですが——。後半、連合教育研究会が占める役割、位置、35,000人の教員一人ひとりそういうものがあればこそ県の教育全体が大きな推進になっているんだと

いう意識をどう高めたらいいか、ということに焦点をしづめていきたい——。

座談の柱の4——今後の課題、連合教育研究会がかかえている問題も含め、あるいは今後どうあるべきか話を進めていきたい。前半に歴代の会長さんの御苦労を伺ってきたんですが副会長さんにも推進のために御発言をいただきたい。

樋口先生、先程おっしゃった小学校中学校を分けようという話は文部省の指示があつたわけですか。

樋口 私は高山先生が会長の時に副会長だったんですが。今では補助金も大分たくさんいただいているが、ぼくらの時は多くて26~7万、その後減ったのではないかと思う——。関プロ大会やいろいろな大会をやる所へ少し余計にやって、何もない所は少なく。

かつては、そういう僅かな金で会計検査はうるさいということで遠慮しちゃって——、会費を集めてだすという空気が強かった——それでは困る——是非これはとつてもらわないと困る——文部省とすれば小中別にしてほしい——埼玉は他と比べ補助金が少ないような感じさえうけた——

司会 高橋先生がおつくりいただいた時、小中一緒にですか。

高橋 ええ、一緒にです。

司会 中島先生の時も一緒にですね。

中島 一緒にです。

司会 全国的には、どうだったんでしょうか。

高橋 埼玉県をまとめるんだって3年かかった。

司会 高山先生の頃に補助金の問題をうんとやられた時、小中分けた方が文部省の配分は合計すると多くなる——そんな空気ですか。

高山 いいえ、それは感じません。

司会 文部省の研究助成金の補助団体になり得るには、なかなか厳しい。小中合同の方がいろんな面でいいんですけどね。今後そう

あるべきだと思うし。

原田 実質的には、小中一緒になっている。関東地区の各都県でも初期の段階には小学校が強かった。最近は大体小中一緒にやっています。

関根 小中別れているのは、神奈川・東京・栃木の3県、関東ブロックの時に提案して、中をいれるのに、2年かかった。

司会 望ましいのは、小中合同の連合教育研究会がいいということですか。

沓掛 そうなったのは、中の代表者がそこに参加したことですか。

関根 いや、その会則ができるでしょう。だから埼玉提案をもっていったわけです。小学校だけが参加している所は、ある程度問題があったわけです。1年間の有余期間をおいて、各県へ帰って中学校と話し合って結論をだしてほしいとお願ひして埼玉で審議、千葉で結論、初めて小中合同となつたわけです。

司会 埼玉方式がとりいれられたわけですね。

石川 校長をやめて、私立学校の幼稚園の補助金の係になっている方の調べによると、「幼稚園の補助金が1,000万円からかかっている—それなのに、埼玉県の連合研究会に255万きりない。」

石川 1年会長をやってみて2年めに小学校の会長をやった。両方兼任は大変なので自分の後任を探した。本人はやってもいい。事務のやりてがない。止むを得ず私は小学校の会長も一緒にやった。

茨城も岐阜も教育会館の中に教育研究会の事務局がある。そこに県から指導主事を1名ないし2名派遣している。校長会として教育会館を作つほしいという要望を運動しようと。それに校長会もPTA連合会も給食会もみな入つて、そういう運動をおこした。1年経つたが、駄目だった。

事務局を早く設定することが大切である。

司会 高橋先生の頃から事務局が懸案になって現在も懸案になっているわけです。

沓掛 自分がやっている時も緊急の問題であった。他の県を視察した。千葉県では千葉教育会館の中にひとつ部屋をもち、事務室をおき現職の教頭が配置され専任の事務職をついている。教頭は2~3年で交代というやり方で事務職一人の給料は会が負担していたと思う。

栃木県も立派な教育会館をもつていて、小学校長会と中学校長会の事務室、県の教員組合の事務室をもつていて—小中別で小学校研究会の事務局は小学校校長会と一緒に部屋を使つていて。中学校研究会の事務局は中学校校長会の部屋を使つていて。そして、人件費を半々だすやり方、茨城県水戸市には校長会館があつて、その事務室の中で校長会と研究会の事をとる、事務職の費用は折半にする、会長は小中交代である、そういうやり方でやつていて、事務職一人に200万ぐらゐの人件費を会で確保していると聞きました。

石川 地域によっては年間120円の会費を240円にするには大変である。下部組織が複雑ですね。

司会 会の活動を盛り上げるには事務局の態勢をきちんとする、会で事務職をやるというわけにはいかない、県の姿勢ですか。

沓掛 千葉のような場合があり得るということは県もそういう了解を示しているという事。

福島 事務局の看板を一枚、どこにあるか分からぬ—。

司会 会長になりたくても、なれない。

村田 事務局の問題を常任理事会にあげかけたが参加する人が会費の値上げになるから反対した—。

沓掛 集まつてくる人が、そのような重大な問題を相談できる人が集まつてこない、会長のような人は少数だから80何人集まるわけなのに、まことに少ない。



村田 校長会には出席しても研究会はカットするような意識をぬぐい去らない限り駄目である。

斎掛 各研究会の細かいスケジュール、実際にやっていることを連合教育研究会長に提出するような方法をとらねばいけない、としたら。各会に連合教育研究会長が出られるといいですが、とてもそれもできない。

司会 校長会の上に連合教育研究会を位置づけられが必要で、そして全員にそれを意識づけることが必要なことですね。



吉岡 事務局の職員が一番重要と思います。事務局をまずしっかりさせる、そこから会も発足し発展する。二年間やってまことに大変ではありました。

高橋 事務所を一か所にまとめることは出来ないですか。前は小学校長会と中学校長会は一つの部屋でやっていた、小学校が独立したので、そこが空いたからそこへ連絡をもっていくということはどうですか。

関根 歴代の先生方に大きな力ぞえをいただければ県当局もきっと考える、おそらく現職の会長が行つてもすぐにできるというわけにはいかない。今後の課題ですね。

高橋 中学校長会の方で一緒になってもいいとなればできないことは無い。7月から3月31日までの実績を今もっているわけだから、それを4月1日から3月31日までにしてもら

って、事務所をちゃんとここに置くというふうにすれば、そこに発令すればいいんだから、誰が会長になつても事務員がそこにいるんだからかまわないと思う。

関根 そのように事務局がはっきりしてもらえば、次期の会長も問題なく解決するのではないかと思う——。高山会長から福島会長にバトンタッチする時も、ある程度会長を引き受けてもいいという方はいたが、その学校の事務職がお断りという事で柴崎氏に白羽の矢をたててお願いした。そういう事でもっていった。要するに春日部が3代続いたというのは、おそらく次期の会長のなりてがいても事務職員がお断りしたという経過が相当あるんではなかろうかと思う。ですから事務局がしっかりとしていれば、どの会長が来ても会の運営はスムーズにいくわけですね。ですから、今後の課題として本会事務局の設置と講師発令でなく専任事務職員の配当をお願いしたい。本年度も講師として7月1日発令で総会時の多忙な期間は空白である。過去の3年間を振り返ってみても、仕事にある程度理解できてきた3月31日で配置転換である。せめて発令後の1年間は専任職として雇用させてほしいというのが本意である。

今回も、原田会長が本年度退職という事で事務局をどこへお願いしようかと苦労しているわけです。

高橋 誰が会長になつても事務所はここだという事が決つていれば、県だってそこへ配置ができるわけですね。

斎掛 事務職二人とも県の方の手当をあてにするわけにはいかないですね。一名はどうしたって会でもたなければなりません。会で何年も仕事をして熟達した人がいて、やつていかなければ駄目ですね。

高山 事務所を固定するという事は条件があると思うが——事務に当る人が熟練していること。

石川 事務職員で経験のある方で、退職した方でも事務局長にしてですね。

司会 たとえば、関根先生が、何年か前に――。



村田 私がやっている頃、一生懸命盛り上げようという意識が強いから、なるべく欠席しないで出ていくつて、いろいろ申し上げる方向をとった。帰って来て地域に波及していくんですけど、地域のバランスがうまくとれない。今思ったのは、理科研究会長をして理科物語など発刊したわけですが、その時に、なぜ連合教育研究会長の挨拶というものをもってこなかったかなという事を、今ここで反省します。こういう認識不足が連合研究会の盛り上げを非常に欠いているという事を、自分の経験上、思いますね。

もうひとつは、市町村の研究会と連合教育研究会の関係。自分達の研究会の組織をつくっていて、それから会費を収めたり、そこから分担金を連合研究会に取めるグループと市町村には研究部会はあるけれども、それはお仕着せの研究会であって、自分達の研究会とは違うんだという認識の市町村があるわけで、そういう所は市町村からの分担金でまかなう、まだ埼玉はそういう複雑な所があって、その点で事務員を一人頼みたいんだといった時に会費の問題が必ずからまつてくる。

連合教育研究会の存在を私が本当によく知ったのは、理科の研究会で会長になってからで――自分を考えてみて、そういう認識不足が県下にはびこっているという事――。

著者 会長になって、そういう事を考えてくれる、しかし、役員以外の人はそういう事を考えない、それでも支障はないから。お金は事務局担当がもらってきててくれるし――。

司会 私も反省します。特活も23集研究紀要をだしていますが、いまだに県の連合研究会長の挨拶をもらった事はありません。表紙だけは埼玉県連合教育研究会、埼玉県特活研究会と入れますが、あれだけは入れなければなりませんから。20周年の時には、連合教育研究会の会長さんというのをこういう位置づけがあるということを連絡したり、全国大会をやった時も共催の名をおかりした、こういう事を19の研究団体の会長になつたら意識してどこかに位置づけていくような形でないといけませんね。私も24集から入れますけど――。

司会 表紙だけは義理でいれますけどね。――。

小川先生如何でしょう。



小川 大宮の教育委員会の学務課長をやっております。本来、指導課長さんあたりがでてくると中みがよく分るのではないか、という印象をもちますけれど――、私研究集録の編集委員を去年やりましたかんけいで、ここへ出て来たわけですが、感想と今後の課題ということで申し上げますと――。

この会の発足が連絡協議会であったということ、その後、連合教育研究会となつたいきさつはありますけれども――。この連合教育研究会の目的をみますと、「各種研究団体の活動を促進すると共に相互の連絡を緊密にし本県教育の振興をはかることを目的とする」こういう目的が明瞭にでているわけです。そういう意味で先生方のお話を聞いていたわけなんですけれども、事務局の問題があつて、やや影が薄いんだという事はありますけれども、大変立派なお仕事をやっているんだなという事を感じます。団体の促進とか相互連絡とか、あるいは立派な研究集録、こういったものは極めて立派な成果であると感じます。

事業団体ではありませんから、そういうふた宿命は当然あるわけですけども立派な仕事をやっている団体であるという事を強く印象として受け止めています。

市教育委員会の立場として、大宮市に教育研究会があります。連合教育の傘下にあるわけですけども年に2回大きな会合をもっています。一つは総会、一つは研究会という事でやっております。この連合教育研究会を見まして大変立派だなと思ったのは研究主題というのがあります。「学ぶ喜びを味わうことの出来る授業の…」とありますて、設定の理由と方針というところに、「このような原点から本年度の研究主題を設定した」とあります。その後に本県連合教育研究会は県単位の19と市町村単位の教育研究団体75との連絡を図りつつ研究を深めて研究主題にせまっていく方針であると明瞭な事柄が書かれています。市教育委員会は市研究会と密接な連携をやっている、そういう事実があるわけです。私も過去市研究会に何回も出ていますが、その時に県の連合教育研究会の影が今ひとつ薄いなという感じをもつわけです。先程挨拶をというお話もありましたが、私はひとつの迫り方としてすばらしい研究主題と設定の理由と方針がございますから——県の連合研究会が市町村へ、そういう方向から入っていくという事が必要ではないかという感じがします。

いってみれば、市教育委員会と市町村の教育研究団体とは連携があるわけです。ところが県の連合教育というのは間接的に関係がありますが直接的には関係がない——そういう意味から言いますと市町村の教育研究会に連合教育のPR、挨拶とか市の研究テーマを決めるにしても大変立派な原田校長先生の挨拶があるわけです。こういうひとつの迫り方が大事ではないかという感じがしたわけです。大変立派な事業をおや

りの団体で事務局の問題はありますが連合会の宿命みたいなものがございますので、そんな迫り方はどうかと強く感じたわけです。

高山 研究会長のなりたてに私は指導課との連携をもっと強くするようにしたことは、県の連中と合同視察を続けた。伊良湖の方へ行ったり五色沼の方に行ったり、そういう事も出来得る訳、もうひとつは県の指導課長の態度によって左右される。教育行政の中において連合教育推進という事についてどちらかといえば校長会というものだけいれておいて研究団体そのものを指導しない。

今日的課題というものを地域の研究団体長ならびに教科団体長が原点にすえての研究課題というものを設定してもらいたい、地域の研究団体は会計係だけ出すようではいけない、今日的な埼玉県の課題は何であるかという事を根底においたところの——例えば基礎学力、国公立の共通一次に受けた受験率は埼玉県が最低、全国平均16%、埼玉県は10.6%、その上が新潟県、受験率がそうですから——。そういう学力の水準が570万人の人口でありながら学力は低い。指導課の指導姿勢、行政というものが教育推進をどうさせるかもう少し考えなおさせる必要がある。これが小川先生の言われた課題設定である。こういう課題を根底においたところの地域の研究団体のやり方、それから教科の研究課題を設定したい、理論がない実際はない。理論的に設定してもらいたい事を現職の研究団体長にお願いしたい。

司会 いろいろとありがとうございました。

古きを尋ねて新しきを知る、という形で今後本会を本当に実のあるものにしていく為には、もう少し積極的に連合教育研究会を地域の研究会の方へも出していくように、研究団体の方からも歩み寄っていくように、それに加えつ行政の方の姿勢も大切である。という御意見だったように思います。

# **第3章**

# **沿革・組織・運営**

## 会の沿革

埼玉県連合教育研究会は昭和28年、埼玉県教育研究団体代表者連絡協議会として発足、各教科活動を主体に教科独自の研究のみで、全県下の教員を対象としたものではなかった。従って全県下の教員を対象にした、研究組織を作り連絡を密にし本県教育の振興を図るということで、昭和35年3月10日に、埼玉県教育研究団体連絡協議会と名称を変更、会則案（別紙参照）を作り、教科別の研究活動を続けていたが、昭和39年3月に埼玉県教育委員会のご指導とご協力により、県下大同団結、埼玉県連合教育研究会と名称変更現在に至っております。（別紙埼玉新聞・東京新聞（39. 1. 19号）

連絡協議会から埼玉県連合教育研究会への発展の引き金となった条件の一つに文部省補助金の問題があった。当時弱小団体には補助金をカットする動向があり、補助金ですら自主財源がなければ補助的対象にもならないし、自主的財源が少なければ当然補助金も少額なわけである。従って埼玉県としても強固な団体として、よりよい教育研究を深めることと、補助金増額を考え、発展的に従来の連絡協議会から連合体としての教育研究会への切替えを準備して別紙の会則案を作り関係機関に接渉しつつ活動をつづけていたようである。

ただ、この会設立についての各地域からの反対意見も多く、各地域研究団体では会則案に基き下部討議を重ねたが多くの地域では、補助金を多く受けることにより教育研究の主体性、及び自主性が拘束される。教育研究団体は、自主的かつ民主的団体であるので、連合教育研究会への発展は不賛成であるとの意見が大勢を占めていた。このような状況の中で各地域研究会の役員の皆様方のご苦労は大変なことだったろうと推察するわけである。

戦後6・3・3・4制の学制の施行とともに教育現場では、新教育の理念の導入とその展開について、敗戦の荒廃のなかから日本の教育の復興の運動が始まった。新生日本の創造、平和と民主主義、個々の尊厳をしっかりとらえることが教育を愛するものの悲願であった。戦前、戦中の教育に比して自由主義思想に支えられた教育はまさしく180度の転換であった。

それだけに自主的な研究会や研修意欲をもった教師のサークルが県内各地で結成されていたようである。この現状に対応すべく全県的視野に立って連合体としての教育研究会を設立する準備会が有志により開かれたのである。

すなわち、教育の充実発展を期し、個人及び教科研究団体の育成を教育施策の重点目標に第一歩をふみだしたようである。

昭和35年11月、経済成長による国の財源の拡大に伴い文部省は地方教育研究団体の育成をめざし、一定の組織と運営をもつ適性規模の教育団体に対して補助金を交付するよう大蔵省に予算要求をした。しかし教職員組合は抵抗の姿勢を示し教育研究会の設立はかなり困難があったように見受けられた。

このような県の情勢に文部省は昭和37年9月以降、県教委に対し教育研究団体の結成及び育成について強力な指導を開始した。

このような情勢から有志による埼玉県連合教育研究会の結成についての発足を呼びかけたものと思われる。この埼玉県連合教育研究会のための打合せは日程的にも余りなかったようだ。また当時の記録も無く、さだかではないが

ただ短期間のうちに埼玉県連合教育研究会が結成されたのは、文部省からの補助金を受け入れるための大きな団結であったと思われる。

つまり、組織、運営面からも財政的な面から

も、かなり多くの課題を抱えていたようである。発足当時の文書をみても埼玉県連合教育研究会の会議の招集、または講師の依頼など、すべて県教委で行っていたようである。(別紙文書参照)

発足した昭和39年当時の会費は学校負担金として学級数により県内市町村教育研究会より納

入することになっていた。

従って当初の研究会の財源は文部省・埼玉県・市町村教育研究団体よりの会費の三本立てで運営されていたのである。

この補助金受領を契機に自主的立場を堅持しつつ年々増え続ける会員とともに組織的に充実した研究団体として現在に至っている。

## 会 の 組 織

昭和38年、準備委員のお骨折りと各教科研究団体長、地域研究会長の御協力により発足した埼玉県連合教育研究会も国語教育研究会以下社会、数学、科学(理科)、音楽、美術、書道、特殊教育、教育心理、放送教育、外国語、特活道徳の13教科により活動は開始された。

翌年には視聴覚、進路、へき地教育の3教科を加え16教科、翌40年には保育、図書館、中学校技家、小学家庭を加え20教科、44年には地域、45年には教育機器を加え22教科となり会員数も年々増加し、運営面等で相当苦慮することとなつた。(会員増と教科研究会増にもかかわらず補助金の増額は見送られた)

その後、年々教育活動の充実と教科活動の活性化に伴い任意団体の要務も多く、加えて行事の稍選などもあり、同様教科の吸收合併の気運も高まり昭和49年度には、放送、視聴覚、教育機器の3教科が合併し新たに視聴覚となり、51年度には地域研究会が廃され、現在19教科で研究活動が行われている。

### 当時の文書

40埼連教発第3号

昭和40年5月14日

各教育研究会長殿

各小・中学校長殿

埼玉県連合教育研究会長 飯野政秋

埼玉県連合教育研究会講演会の開催について

のことについて、下記により開催することとなりましたので、貴研究会役員(貴校該当者)の出席についてご配慮願います。

なお、この講演会に先き立ち、午前中は、各研究会(部会)の理事会等(別記のとおり)に充てていただき、午後、全員打ち揃って、この講演会に参加下さるようお願いします。

また、この件については、各研究会長より該当役員に対し、別途通知があることと存じますが、この通知により予めご承知ください。

### 記

- 1 日時 昭和40年6月1日午後1時~3時半
- 2 会場 埼玉大学付属中学校講堂
- 3 主催 埼玉県連合教育研究会  
埼玉県教育委員会
- 4 日程 1) 開会  
2) 会長あいさつ  
3) 県教育長祝辞  
4) 講師紹介  
5) 講演  
6) 質疑応答  
7) 閉会
- 5 講師 国立教育研究所長平益徳先生

### ◎別記

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 国語教育研究会   | 埼玉銀行本店会議室 |
| 2 社会科研究会連合会 | 埼大付属中学校   |
| 3 数学教育会     | "付属中学校    |
| 4 科学教育振興会   | "付属小学校    |

5 音楽教育連盟	安田信託銀行
6 美術教育連盟	付属中学校
7 外国語教育研究会	白幡中学校
8 特別教育活動研究会	三井信託銀行
9 道徳教育研究会	教科書供給所
10 特殊教育研究会	岸町小学校
11 教育心理研究会	岸町小学校
12 放送教育研究会	仲本小学校
13 進路指導研究会	県立図書館ホール
14 へき地教育研究会	常磐小学校
15 視聴覚教育研究会	白幡中学校
16 図書館教育研究協議会	県立図書館ホール
17 保健体育研究会	付属小学校

40教指発第594号

昭和40年5月21日

埼玉県連合教育研究会長殿

同さん下各教育研究会長殿

各小・中学校長殿

埼玉県教育委員会教育長 峯岸政之助

埼玉県連合教育研究会講演会の講師について  
埼玉県連合教育研究会講演会の開催については、さきの同研究会長通知（昭和40年5月14日付け、40埼連教発第3号）のとおりであります  
が、講師は、東京教育大学教授唐沢富太郎氏に確定しましたのでお知らせします。

なお、同氏の都合により講演は正1時につき開始いたしたいので、午前中の各研究会の理事会、役員会等の終了時刻は、それぞれの会場から講演会場付属中学校までの所用時間等を考慮し、適宜お決めいただくようお取りはらい下さい。

参考までに唐沢氏の著書を示せば次のとおり  
 ○親鸞の人間観・教育観 ○日本教育史  
 ○教師の歴史 ○教科書の歴史  
 ○世界の道徳教育 ○世界の理想的人間像  
 ○最近の著書に日経新書・あすの日本人

はしがき

長い間の懸案だった本件の教育諸団体が円満裏に統合されて、ここに埼玉県連合教育研究会

が別紙の会則に基づいて結成されることになった。

ここに至るまでは、高橋前会長を始め、歴代の地域研究団体、教科等研究団体の代表者の方々の一方ならぬお骨折りによることが多く、ここに深甚なる謝意を表する。

ことに本年度の各教科研究諸団体の代表者各位の本会結成に対する決意はすこぶる堅いものがあり、一本化のムードも強固に醸成され、更に県指導課の適切な指導助言を得て、今日この成功をもたらすことができたのであって、関係各位に対して、心から敬意と感謝を捧げる次第である。

さて、自主的な研究団体が整理統合されて、その運営が合理的に近代化されつつあるのは、全国的な時代的すう勢であって、本県教育諸団体がこの一転換期に立って、この大勢に即応し積極的に本会の結成に踏み切り、力強く発足できましたことはまことに喜ばしい限りである。ここに本会結成にあたり、これを記念してその要項を刊行し、各構成団体の今後の自主的な運営の推移に資すると共に、本会の使命に鑑みその充実した活動をはかり、わが埼玉教育の力強い前進に寄与することを期す次第である。

昭和39年2月

会長 中島春義

39教指発1525号

昭和39年12月4日

各教育研究団体長殿

埼玉県教育委員会教育長 峯岸政之助

教育研究団体長研究協議会の開催について  
このことについて下記により開催することになりましたので貴職または代理者の出席についてご配意ねがいます。

記

1 趣旨 各教育研究団体の本年度の実績について回顧、今後の活動について情報交換するとともに研究団体の望ま

	しい在り方について研究協議する。	
2 日時	昭和39年12月12日10時～12時	開会 9:30
3 会場	浦和市安田信託銀行浦和支店	教育長あいさつ 9:30
4 参加者	各研究団体長または代理者	研究会長あいさつ 9:40
	二つの連合教育研究会はその構成、各部会長（各研究会長）も出席されたい。	指導課長説明 9:50
5 日程	あいさつ 指導課長 10:00 現況説明 担当指導主事 10:20 情報交換 各研究団体長 10:50 ～12:00	研究会代表説明 10:10 担当指導主事説明 10:30 協議 10:50 閉会 11:00

#### 40教指発第63号

昭和40年1月25日

関係各教育研究団体長殿

埼玉県教育委員会教育長 峰岸政之助  
教育研究団体、教育局指導課  
合同研究協議会の開催について

のことについて、下記により開催することになりましたので貴職（ご都合つかないときは副会長）にご出席いただきたくお願ひいたします。

#### 記

1 矢旨 本県教育研究団体中、中核をなし、かつ最も有力である二つの連合教育研究会の望ましいあり方と発展の方途ならびに来年度事業について、会長、さん下研究会長と指導主事が合同して研究協議と、あわせて随意な意見交換をなし本県教育の振興に資しようとする。

2 主催 埼玉県教育委員会  
埼玉県連合教育研究会  
埼玉県高等学校連合教育研究会

3 日時 昭和40年2月6日（土）9:30～12:00

4 会場 県庁 5階 大会議室

5 日程 受付 9:00～9:30  
1) 全体会 9:30～11:00

開会	9:30
教育長あいさつ	9:30
研究会長あいさつ	9:40
指導課長説明	9:50
研究会代表説明	10:10
担当指導主事説明	10:30
協議	10:50
閉会	11:00
2) 分科会	11:00～12:00
	埼玉県連合教育研究会、埼玉県高等学校連合教育研究会ごとに、各研究会単位別に、会長、担当指導主事協議

#### 6 出席者

埼玉県連合教育研究会——会長、副会長さん下16研究会長  
埼玉県高等学校連合教育研究会  
会長一副会長、さん下19研究会長  
埼玉県小学校長会——会長、副会長  
埼玉県中学校長会——会長、副会長  
埼玉県高等学校長協会——会長、副会長  
県教育局指導課 指導課長  
担当指導主事全員

#### 教育研究団体に対する県教委の方針

- ・育成強化に努めてきたが今後もこの方針に変りはない。
- ・県費補助金は次の通りである。  
38年 100万 39年 340万 41年 574万
- ・研究団体の諸活動についての指導助言は惜しまない。

研究団体は、県教委の教員の研修についての事業を代行しているものと考えている。

任意団体とはいえ、他の任意団体とは性格を異にしており、本県教育の振興をおし進めるものと考えている。

研究団体の事業で集会を要するものは次の

通りである。

1 文部省へ提出の事業計画書による国庫補

助対象事業となるもの

ア 研究大会

イ 研究調査

ウ 研究成果刊行

エ 研究図書購入

2 事業計画書には明記されていないが上記  
アイウを実施するための準備委員会、小委  
員会、編集委員会、研究委員会等がある。

3 事業計画書には記載されず、かつ非補助  
対象事業であるが、研究団体運用のため絶

対必要とされるもの 理事会監査会幹事会  
等

研究団体の集会について

「学校職員の任意団体の用務による旅行の取  
り扱いについて」の運用と関連する。

ア 研究大会（このための準備委員会等含  
む）

イ 研究調査（このための研究委員会等含  
む）

ウ 研究成果刊行のための諸集会（編集委  
員会等）はすべて共催がよい。

## 会 の 経 緯 昭27～58

新教育の導入とその展開が現場の大きな課題  
となる。

県教委は教育施行の重点目標として教育研究  
団体の育成を指導する。

以後各種の教科研究会が設立される。

昭和27年

・全国市町村教育委員会設置

昭和28年

・教員給与三本建法公布

・学校図書館法、理科教育振興法公布

昭和30年

・教育二法、日本学校給食会法公布

昭和31年

・地方教育行政の組織及び運営に関する法律公  
布

・教育委員が公選制より任命制へ

・全国抽出学力調査実施

昭和32年

・教育課題審議会、小中学校教育課程の改善に  
ついて答申（3. 15）

・道徳の特設時間決定 ・勤評問題各地で

・全国小中高一斉学力テスト ・松永文部大臣

へ

・学校教育法施工規則を一部改正し教頭の設置  
を規定（12. 4）

昭和33年

・公立学校の校長に始めて管理職手当を支給  
（4. 1）

・学級編成及び教職員定数の標準に関する法律

・学校保健法公布（4. 1）

・文部省小中学校の新学習指導要領を公布  
（10. 1）

昭和34年

・各市町村教委に社会教育主事必置

・文部省、教育白書発表

・第1回教育課程研究協議会開催（8. 7）

・中央教育審議会、特殊教育の充実振興答申  
（12. 7）

昭和35年

・日本学校安全会設立

・教頭に管理職手当を支給

・文部省は地方教育研究団体の育成をめざして、  
一定の組織と運営をもつ適性規模の研究団体  
に対して補助金を公布することを決定し予算  
要求をする（11. 11）

昭和36年

- ・5年制高等専門学校設置
  - ・本年度より小学校で新教育課程全面実施となる(4.1)
  - ・荒木万寿夫、文部大臣留任(7.18)
  - ・文部省 全国学力調査実施(国算英)(9.26)
  - ・" (国社数理英)(10.26)
- 昭和37年
- ・義務教育諸学校の教科用図書の無償に関する法律公布
    - ・中学校で新教育課程全面実施となる(4.1)
  - ・荒木文部大臣、教育研究団体の育成強化と財政的援助の方針を打ち出す
  - ・文部省、各都道府県教委に教育研究団体の育成について強力な指導を開始する。
- 昭和38年
- ・県教育長、新教育研究団体の結成を要請する。
    - 既存の各教科研究団体と発展統合し、県としてまとまった教育研究団体を結成してほしいと、また一定の組織と運営をもつ適性規模の研究団体に対して國の方針にのっとり補助金の公布をしたいと。
    - これを受け関係機関で慎重な討議を重ねる。
- 昭和39年
- ・教科研究会長を招集し会議を重ね連合教育研究会の趣旨を説明、協力を得る。
  - ・教科研究会16教科をもって本会を結成する会長中島春義氏(大宮東中学校)
  - ・国語、社会、数学、科学(理科)、音楽、美術、書写、特殊、心理、放送、外国语、特活、道徳、進路、視聴覚、僻地
    - ・教育研究団体を統合し研究活動の一層の充実をはかる。
- 昭和40年
- ・ILOドライヤー調査団訪日
  - ・会長 飯野政秋氏(柏壁小学校)
  - ・保育、図書館、中学校技家、小学校家庭、本会に加入し20教科となる。
  - ・ILO代86号条約の批准、地公法の改正により管理職(校長)が組合を離脱する。
  - 次いで人事院、教頭を管理職と指定
- ・中教審、期待される人間像 最終報告
  - ・教育研究会長会議
  - ・小、中別研究大会
  - ・講演会
  - ・研究調査
  - ・評議員会
- 昭和41年
- ・会長 倉林嘉四郎氏(川口本町小学校)
  - ・教科研究団体の増加により会費値上げ
  - ・中教審が後期中等教育で答申
  - ・小、中別教育研究大会並びに総会
  - ・評議員会
  - ・編集委員会
  - ・教科団体長会議
  - ・“教育研究のすすめ方”研究会
  - ・研究集録2号発行
- 昭和42年
- ・第一学年教科書無償給付(国)
  - ・会長 高山敏一氏(大宮東中学校)昭和42年～46年まで
  - ・埼玉県小中学校教育推進に関する研究協議会開催
  - ・県教委、県連合研究会共同主催による研究發表並びに講演会
  - ・中学校学習指導に関する研究会講演会開催
  - ・教科等研究団体長及び会計事務担当者会議
  - ・評議員会
  - ・教育研究団体長会議研究協議会
  - ・地域教育研究団体長会議
  - ・会報創刊号発行
  - ・教育研究団体長会議
- 昭和43年
- ・教科審、中学校の教育課程の改善答申
  - ・小学校新学習指導要領公示
  - ・各部会別研究発表会
  - ・部会別研究協議会、全体研究発表会並びに講演会
  - ・教科等研究団体長会議
  - ・研究団体長および経理担当者会
  - ・研究集録編集委員会

- ・教科等研究団体長会議
  - ・小中学校教育研究推進に関する研究協議会
  - ・教科等教育研究団体会計事務担当者会議
  - ・会報 2 号発行
  - ・教育研究意識調査（全県）
- 昭和44年**
- ・中学校新学習指導要領公示
  - ・地域研究団体加入、21教科となる。
  - ・評議員会
  - ・会計事務担当者会
  - ・各教科部会別研究発表
  - ・教育研究団体推進の教育調査（福島県教委）
  - ・教育研究団体の事務視察（高松市）
  - ・会報 4 号発行
- 昭和45年**
- ・教育機器研究会加入、22教科となる。
  - ・教科書裁判に違憲判決出る
  - ・埼玉県小中学校教育推進に関する研究協議会開催
  - ・会計事務担当者会議
  - ・評議員会
  - ・他県教育研究活動状況視察
  - ・放送教育及び学校視聴覚研究等のアンケートの結果報告について
  - ・研究集録編集委員会
  - ・組織検討委員会
  - ・会報 5 号発行
- 昭和46年**
- ・小学校新教育課程、全面実施となる。
  - ・埼玉県、生まれて100年式典
  - ・会報 5 号の配布方依頼
  - ・評議員会
  - ・会計検査院の会計監査
  - ・研究集録配布
  - ・会報 6 号発行
- 昭和47年**
- ・中学校新教育課程、全面実施となる。
  - ・会長 福島正氏（柏壁小学校）
  - ・評議員会
  - ・第1回教科団体事務担当者会議
- ・負担金納入に関する依頼文書発送
  - ・県連合教育研究協議会
  - ・教科等事務担当者会
  - ・県外教育団体視察（岐阜）
  - ・研究集録編集委員会
  - ・保健体育研究会配分金について協議
  - ・視聴覚等研究団体統合案件について
  - ・第1回会長、副会長会議開催
  - ・会計事務担当者会
  - ・評議員研究協議会
  - ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会（仮称）、結成準備会
  - ・研究集録配布
  - ・県外視察（熱海、伊豆方面）
- 昭和48年**
- ・県教育局、同和教育課新設
  - ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会の結成準備会開く（2. 17）
  - ・第1回評議員研究協議会
  - ・負担金納入に関する依頼
  - ・理事会
  - ・研究集録編集委員会委嘱
  - ・教科等事務担当者会
  - ・本会顧問ご就任方ご依頼並びに第一回顧問会開催
  - ・会長、副会長、理事合同会議
  - ・研究集録編集委員会
  - ・評議員研究協議会
  - ・県外団体視察（神戸市）
  - ・県外教育研究活動視察（浜松市）
  - ・研究集録配布
  - ・教科担当者会議
  - ・会報配布
- 昭和49年**
- ・放送、視聴覚、教育機器の3教科団体が統合し視聴覚教育研究会となる。
  - ・会長 飯田豊氏（柏壁小学校）
  - ・関東地区小学校教育研究会初めて開催さる各都県教育研究会の諸問題について
  - ・本県主催にて 会場長静にて

- ・第1回評議員会 " 那須
  - ・県連教活動方針打合せ会
  - ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会（赤城  
教育会館）
  - ・会計担当者会議
  - ・補助金増額に関する陳情協議
  - ・県外教育研究団体研究視察（滋賀県）
  - ・第2回評議員会
  - ・第1回理事運営委員会
  - ・編集委員会
  - ・顧問会議
  - ・研究集録、会報配布
- 昭和50年
- ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会 会場千葉
  - ・" " 秩父
  - ・第1回地域、教科等研究団体長（評議員）会
  - ・第1回県連合教育研究会理事会
  - ・第1回教科等研究団体事務担当者会議
  - ・第2回県連合教育研究会理事会
  - ・第2回地域、教科等研究団体長（評議員）会
  - ・研究集録編集委員会
  - ・第2回教科等研究団体事務担当者会議
  - ・顧問会議
  - ・教科等研究団体決算、予算検収会及監査会
- 昭和51年
- ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会 会場茨城
  - ・" " 横浜
  - ・会長 岱掛義男氏（高砂小学校）昭和55年ま  
で
  - ・事務局総会（評議員会）準備会
  - ・県連教第1回理事研究協議会
  - ・第1回評議員研究協議会
  - ・第1回各教科等研究会長及会計事務担当者会
  - ・第1回研究集録編集委員会
  - ・第2回理事、評議員研究協議会
  - ・第2回教科会計担当者会
  - ・第2回研究集録編集委員会
  - ・第3回研究集録編集委員会
  - ・第4回研究集録編集並びに会報編集委員会
  - ・第5回研究集録編集並びに会報編集委員会
  - ・第6回研究集録編集並びに会報編集委員会
  - ・各教科等研究会の事業及び会計監査
  - ・会報発行
- 昭和52年
- ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会 会場東京

- 昭和55年
- ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会
  - 会場水上
  - ・ " " 塩原
  - ・第1回理事会及評議員会
  - ・会計検査院による監査会
  - ・第1回各教科等研究団体長及会計担当者会
  - ・研究集録編集委員会
  - ・第2回理事会及評議員会
  - ・第2回各教科等研究団体長及会計担当者会
  - ・第2回研究集録編集委員会
  - ・臨時理事会及評議員会
  - ・研究集録及び会報発行
- 昭和56年
- ・関東地区小学校教育研究会連絡協議会
  - 会場東京
  - ・ " " 秩父
  - ・関東地区小学校教育研究会に中学校を挿入することを提案する（埼玉）
  - ・会長 原田三郎氏（大宮東中学校）昭和59年まで
  - ・本部関係会計監査会
  - ・第1回理事会及評議員会（事務局総会）
  - ・第1回各教科等研究団体長及会計担当者会
  - ・第1回研究集録編集委員会
  - ・第2回理事会及評議員会
  - ・第2回各教科等会計担当者会
  - ・第2回研究集録編集委員会
  - ・第3回各教科等会計担当者会
  - ・研究集録及び会報発行
- 昭和57年
- ・関東地区小中学校教育研究会連絡協議会
  - 会場千葉
  - ・ " " 茨城
  - ・会報年2回の発行
  - ・第1回理事会及評議員会
  - ・第1回各教科等研究団体長及会計担当者会
  - ・第1回研究集録編集委員、各教科会計事務担当者（編集委員）会
  - ・第2回理事会及評議員会
  - ・第2回教科等会計事務担当者会
  - ・第2回研究集録編集委員会
  - ・第3回研究集録編集委員会
  - ・第3回教科等会計担当者会議
  - ・第4回研究集録並びに会報編集委員会
  - ・各教科等研究団体の監査
- 昭和58年
- ・関東地区小中学校教育研究会連絡協議会
  - 会場東京
  - ・ " " 伊香保
  - ・埼連教特別記念事業として20年のあゆみの発刊が承認される
  - ・会則の一部改正（昭和59年度より会費月額20円とすることが承認される）
  - ・埼玉県教育公務員弘済会より研究助成金として200万円受領
  - ・会報第18号発行
  - ・第1回理事会及評議員会
  - ・第1回教科等会計担当者会
  - ・第1回研究集録編集委員会
  - ・第2回理事会及評議員会
  - ・第2回各教科等会計担当者会
  - ・第2回研究集録編集委員会
  - ・会報第19号発行
  - ・第3回研究集録編集委員会
  - ・第3回教科等会計担当者会
  - ・第4回研究集録編集委員会
  - ・各教科等研究団体の監査

# 研究団体の基本

- 1 名称 埼玉県連合教育研究会(略称埼連教)
- 2 目的 教科の研究及び調査、研究資料の作成、教員研修、教科、地域研との連絡調整
- 3 構成 埼玉県内小中学校教員
- 4 役員 本部 会長1名  
副会長4名(東西南北の四地区)  
事務局長1名  
幹事 若干名  
常任理事9名(各教育事務所)  
理事 5名  
評議員92名 教科会長  
地域研究会長
- 5 経費 国庫補助金、会員よりの会費を充てる

本団体は上記の基本を基に教育の中立性をめざし純粹に真実を求めて行く教育的良心に基づいた研究団体を理想として発足した。

教育の真実を求め教育者としての資質の向上と埼玉県学校教育の振興を図るために共通の広場である。当時、中央では教育課程審議会が小中学校の教育課程の実現、学校教育の現代化、科学技術教育の振興をめざしていた。

この近代化への活発な動きは教育現場にVTR、OHP、LLなどの視聴覚教育機器を導入し、急速な教育技術の進歩をもたらした。

このような、めざましい技術革新に即応するためにも埼玉県連合教育研究会の結成は誠に当を得たものであり、時代の要請や、県教育界の要望に応えるものであったのではなかろうか。

研修の基盤は、自己啓発に基づく自己研修にあるが、本団体は管理職も、一般教員も、ともに一体となり集団研修を通じて会員相互の教育能力や資質を高めることによって、埼玉教育の振興を図かるものであった。

発足に当り次の諸点を重点目標とする。

1. 会員意識の向上と研究意欲の向上  
・県下小中養学校教員の全員参加
2. 教科研究会、地域研究会の研究組織の整備と研究活動の推進
3. 財政基盤の確立と経理形態の合理化  
・会費の徴収と補助金、助成金の増額
4. 適性な人的構成、動ける機構づくり
5. 関係機関、諸団体との密接な連絡提携
6. 会報、集録の定期発行(内容の充実)

以上の重点目標に添って運営されてきたのであるが、

- 1 の会員意識の向上については若干物足りない面もある。研究意欲の向上と小中学校教員の全員加入については良としたい。
- 2 の教科地域研究会の研究等については、19教科及び74市町村教育研究会とも活発な研究活動を開催している。
- 3 の財政についてであるが、本県教育会の中核である教科活動の円滑な運営のために過去会費の値上げ等をして各教科への配分をしてきたが補助金等については年々減額の傾向にある。従って本年も若干の会費の値上げを評議員会に提案し59年度より実施の予定である。
- 4 の人的構成と動ける機構については一考を要する。過去20年間の活発な研究活動と大きな成果を挙げている本会の人的構成は甚だ不満にたえない。というのは専任の職員が皆無にひとしいからである。近年になり会長所在の学校には時期おくれ6月中旬に講師の職名で一名の配当があるが臨採のため正規の勤務は9ヶ月程度であり年度末には他校へ転任という形態である。会の運営は休むことなく続けられているのであるが、空白の期間は誰がやるのか。また、はじめから仕事の内容を新

採に教えるということを毎年、毎年くり返している。関東六県の充実した機構に比して、本県の機構はお話にならない。これらは本県教育研究会のために何とか早急に改善して行きたいものである。

5 の関係機関との連絡提携は、毎年1回の文部省との話し合い、及び関東都県の正副会長、事務局長会議年2回の開催によって行われ、情報交換等の話し合いが行われている。

6 会報についてであるが57年度より年2回35,000名の会員のお手許にお届けし会員意識の啓蒙に一役買っている。例年4月には本県連合教育研究会の重点目標と各教科の研究主題、設定の理由及び方針等を、10月には各教科の活動状況、次年度へ向けての方針等を記載し本県教育界の指針の方向を会員各位に周

知させている。なお各研究部とも毎年3月に教科別的研究集録を作成し、本部では各教科及び地域研究会、個人研究発表等を掲載した研究集録を作成し、県当局、関係機関、県内小中学校全校に配布している。

#### 研究会の重点目標の推移

本研究会の20年間の重点目標の推移をみると、教育思想に大きく関りながら、昭和42年小学校、昭和51年中学校の2度にわたる、教育課程の改善の基本方針をふまえて変化したきていることがわかる。20年にわたって終始一貫、変わることなく毎年度の重点目標が掲げられていることは、大規模研究団体のかかえている宿命というべきである。

## 研究体制の確立

本会の主たる目的は、会則第3条に規定されているように（教科研究・調査・成果刊行・研修・連絡提携）会員の研究を推進し、本県小中学校教育の振興を図ることである。

従って本部は発足の当初から地域研究団体、教科研究団体の主体制・独自性を尊重しながらそれぞれの地域・教科の研究活動をいかに充実させ、発展させていくかを大きな課題としてきた。

ただ発足以来20年も教科活動をしているにも拘らず会員ひとりひとりの意識が薄いのではないかと思われる。各教科の研究主題と会員との関係、教科役員と地域役員との交流の問題、教科別研究大会や研修会の運営等多くの課題が山積しているようである。

本部としてはこの問題を解決すべく、研究活動の進め方や組織運営上の問題点を明らかにするとともに、その改善策について研究協議を進め、研究体制の確立に努めているが会員ひとり

ひとりの協調性に期待している。

本会の事業を大別すると研究大会、研究調査、研究成果刊行の三つがある。研究団体としてやらなければならないことは何か、研究団体としてできないものは何かを明確にして行く必要があるのではないか、一般に研究の特色としては、①自主的 ②自由性 ③子供のために、と言う現場的発想で研究ができる。研究と研修の概念を明確にしていく必要がある。研究とは教育上の問題点を見い出し、それを解明し創造していくプロセスである。研修とは教師自身が指導力を高めるため、あることをめざして自己改造していくことである。研究と研修とは別のものではなく一つのサイクルとして考えられる。

本会も自主的で自由な研究団体であるが、会員にとって常に魅力的な団体であることが要請されている。そのためには会員の要請に応えることが大切である。

現在、本会は会員数35,000人有余の多数の会

員で構成され、各種各領域にわたっているので容易ではないが会員の意向に応えるべく努力を重ねている。ただ、多い会員と、広範囲にわたる地域のため全会員の意向を反映して会員の参加意識を高めることがむずかしく運営上の問題点となることが多い。これらに対処すべく本部としては苦しい財政にも拘らず会員ひとりひとりに本会の活動、指針等を掲げた会報を年2回発行し、本会の活動等について周知させている。

また各種研究大会への参加については二つに大別できるのではないか。

その一つは参加することにより新しい情報や

刺激を得て自己改造ないし自己伸長を図ることである。

他の一つは自己の研究成果を発表して活用したいとするものである。前者は経験の少ない若年層であるのに対し後者は経験を積んだ熟年層が研究熱心な教員であろう。したがって参加者の意図に添った会場運営もなされるべきである。また全会員を対象にした大会も現在では会場の関係もあり不可能である。したがって代表者参加制も工夫し、代表者によって会員の意向が反映され、会の内容が詳細に報告されるシステムの工夫も考えられる。

## 教育研究団体の現状と問題点

### 1 統合の効果

- 従来、一教科内のわくの中で進められていた研究が教科全般の立場から位置づけることができるようになった。
- 全県的研究テーマを組織的に体系づけて、とりくむことができるようになった。
- 小規模団体、組織の薄弱な団体も統合により、すべての教科領域にわたってバランスの取れた研究が行われるようになった。
- 財政の増大に伴い、予算の重点配分ができ、計画的な研究活動が実施できるようになった。
- 教職員相互の研究交流が拡大され、全県的な交流、交換が行われるようになった。

### 2 研究活動の動向

- 学校現場における授業の確保に重点をおく研究活動が行えるよう調整する。
- テーマの設定については前年度から選定にかかり現場からの積み重ねをまって県段階のものを精選、これに基づき研究実践に移る。
- 行事の調整、研究団体の行事を行うために

特定の日を設ける。夏休み、冬休み期間中に重点をおく研究活動をすすめる。

- 研究成果物の刊行に力をいれる。

### 3 研究団体運営上の問題点

- 一応統合によって、名と実が完全に一致したと思われる。

### 4 会費の問題

- 会費は研究団体を支える根源である。会員一人一人が積極的に拠出することにより、財政の裏付けはもとより会員の意識の高揚、研究活動の活発化が期待される。
- 自発的な意思によって結成された研究団体は会員自ら拠出する資金によって運営されるのがすじである、他に援助を求めるのは決して好ましいことではない。最終的には会員個々人が負担すべきである。

### ○経理を明確にするための一案

- 国庫補助金の経理に当っては「教育研究費補助金の執行については、常に適性に執行するとともに、補助事業に要する経費につ

いて、収入、支出を記載した帳簿及び関係書類を備え、他の経費と区分して経理の状況を明確にしておくこと……」（教育研究費補助の交付条件）を念願におき、次の点をよく理解しておく。

- 補助事業に要する経費については、その用途を常に項目別に明確にしておく。
- 研究団体の経理規程（経理手続き）を定めておくこと。会計に関する会則、細則等をはっきりさせておくとともに、旅費、謝金等の共通なものについては与給規程を設けておくこと。
- 本部と教科とでは別経理（主として委任経理）の場合は、絶えず連絡を行なって教科の経理状況をはあくするとともに、決算時には関係帳簿、証拠書類等を本部でとりまとめること。

- 次に備えつけておくべき帳簿を示すと次のとおりである。

- イ 金銭出納簿（元帳）
- ロ 収入支出科目別帳簿（仕訳帳）
- ハ 備品台帳
- ニ 入金伝票、出金伝票
- ホ 郵便料受払簿

#### ○科目的設定

各科目は、教育研究費補助金にかかる補助対象事業と補助対象科目によって分類したものであるが特に必要があれば、他の科目を設定してもさしつかえない。

帳簿は各科目毎に別葉とし、それぞれに、見出しをつけておく。

収入、支出科目表

収入科目		支出科目	
会 補 寄 寄 雜 緣 そ	費 助 付 收 越 の	研究大會費 謝 旅 借 資 通 そ	謝 旅 借 資 通 そ
補 助 付 入 金 他	金 金 入 金 他	金 費 料 室 信 費	金 費 料 費 信 費
		研究調査費 謝 旅 資 通 貸	研究調査費 謝 旅 資 通 貸
		金 費 料 費 金	金 費 料 費 金
		その他	その他
		研究成果刊行費 資料費 通信運搬費	研究成果刊行費 資料費 通信運搬費
		その他	その他

#### ○科目別帳簿の様式及び記載例

##### 収入支出の例

- 4/10 前年度繰越金50,000円を引きつぐ
- 4/15 4月分会費30,000円入金
- 4/20 研究大会用資料印刷代50,000円支払う
- 4/22 研究大会案内状発送の切手代2,000円支払い
- 4/25 4月分会費150,000円入金
- 4/27 ○○から50,000円借り入れ
- 5/ 5 研究大会会場費50,000円  
講師旅費4,000円 謝金10,000円支払

##### 金銭出納簿（元帳）

月日	科 目	摘要	収入	支出	残高
4.10	繰 越 金	昭和58年度繰越金	50,000		50,000
15	会 費	会費○○市○校分	30,000		80,000
20	研究大會費	大会資料印刷代		5,000	75,000
22	"	切手代(大会案内発送)		5,000	73,000
25	会 費	会費○○市○校分	150,000		223,000
23	借 入 金	○○から借入	50,000		273,000
5. 5	研究 大 会	会場使用料		50,000	223,000
"	"	講師旅費○○先生		4,000	219,000
"	"	*謝礼 "	10,000		209,000

月は順に出納状況を記載する。

科目は前述の科目に応じた科目を記入する。

### 収入科目別帳簿（仕訳帳）

月日	摘要	収入	累計	残高
4.15	当初予算	2,300,000	2,300,000	
4.15	会費〇〇市〇校分	30,000	30,000	2,270,000
20	" 〇〇市〇校分	150,000	180,000	2,120,000

収入科目別帳簿は科目ごとに別葉とする。

収入帳簿の場合は支出額欄を累計欄とし、残額欄で、当初予算と実収入額との相殺した

額を記入しておくと収入状況を知ることができます。

- これらの帳簿で、収入支出のつど、各科目に分類し記帳することにより
  - イ) 随時各科目毎の予算額、執行額、残額を的確に把握することができる。
  - ロ) 事業実施報告、決算報告に必要な収支計算書をかんたんに作成することができる。

## 教育研究団体の事業計画についての文部省

### 地方課に対する口頭説明中の質問事項

○昭和41年度教育研究団体の事業計画について昭和41年5月10日、文部省会議室において、地方課 川崎補佐、飯島係長ほか2名に対し口頭説明をした。説明というよりは地方課員の質問に対する口頭解答というようなものである。

それらのなかで今後の教育研究団体の在り方に参考となるべきものについて若干のべよう

#### 1 事業計画の審査

事業計画については審査基準的なものを持ち、これにもとづき充分な審査が必要であるようである。

#### 2 補助対象団体を従来通りとした理由

他県の多くは小中高等学校の学校種別の教育研究団体を基準としている。

本県では11団体であるがなお統轄の必要があることをほのめかしていたようだ。

#### 3 教育研究団体に対する指導助言について

例えは小中校長会等に対して充分意志の疎通が図られているか

総予算の補助対象経費が若干低率ではないか。

#### 4 教育研究団体のあるべき姿について

いくつかの団体のなかには研究団体が何

なのかを理解していないのではないか、

#### 5 昭和41年度にみられる研究団体の特色や動きはどうか、

会費の個人負担、小中学校または教科別研究会を考える。

#### 6 成果刊行物の利用

研究集会等において、一つの有力な資料として活用されたい。

#### 7 研究大会の持ち方

連合教育研究会の研究大会は下部から盛りあげ、末端からの積み上げはどうか、

#### 8 研究調査の実状如何

日常の研究、調査こそ必要なもの、これらに予算計上し調査研究の持ち方、指導が欠けていないいか、

#### 9 研究調査の推進と授業時数確保の調整はどうか、

研究調査、研究大会のために授業は欠けていないか、行事を持たない日の調整

### 埼玉県連合教育研究会の今後の課題

○さん下教科研究会と地域研究会と密な連携のもとに合同研究発表大会がもてたら。

○関東七都県の研究会の実態に比し、埼玉県の事務局の貢献度、事務局は会長所在の学校ではなく教育センターのような独立した

所へ置くべきである、また予算もかなりの額に達しているので専従の事務局職員が配置され事務の集中管理ができるようすべきである。関東地区の各都県には専従の事務職員の配置がされている。

#### 研究課題の設定

- 教育研究集会には、国及び県の研究課題があつて独自の課題を年度始めに設定し会員がこれに取り組むときにこれが生まれる。

#### 国庫補助金のたてまえ

##### 1) 補助は県の区域を結成単位とする。

- 教育研究団体を育成し、その活動を促進しもっと初等中等教育の教育効果を高め、その振興を図ることを目的とする。

##### 2) 補助対象事業は、教育研究団体の助成事業

- 県から支出される補助対象科目は研究団体の研究大会、研究調査、研究成果の刊行に要する経費のうち、きめられた科目にあてられる。

##### 3) 補助団体の資格

- 組織、役員の構成が適正で財政及び団体の経営が堅実であること。
- 研究計画、研究実績が適正であること
- 会費収入が15万円以上であること
- 研究団体の財源は、会費（個人）によるべく、その足らざる分を県が補助し、その半額について国が補助するということである。

##### 4) 国の補助金を増額させる方法

- 国は、これを各都道府県に配分するに当って、一律配分はしないこととし、事業計画書、各研究団体の基盤、收支予算書、個案会則、前年度の実績等を総合判定して行っている。收支予算、会則、前年度実績が大きくものをいっているようである。

昭和42年会報創刊号 43、3、5発行

あいさつ 会長 高山 敏一

このたび埼玉県連合教育研究会としまして、

埼玉県教育研究の振興をはかり、その成果を期待しながら、このように「埼玉教会報」を各年度1回ないし2回発行し、埼玉県教育研究の実情を報告申しあげ、会員の方々の意見をおきし、会員の皆さんのご期待にそよう努力したいと存じます。

会員の皆さんには、これらにより埼玉県の実態をよくとらえられ、各地域研究会の助長に、各教科研究団体行事への参加に積極的態度をおとりになり、ご自分のためにも、また各地教科のためにも、ご研究くだされるようお願ひいたします。

#### 当時本県教育研究会の課題

##### 1) 会員意識を育てる

- 自分の研究会を育てるためには、自分が会員意識を深くもつことが当然考えられる。

##### 2) 教育研究事務の能率をたかめる

- 県教育局でもこの点については、事務職員の配置等考慮されているので、その体制ができるものと思う。

##### 3) 研究方向の能率をたかめる。

- 県全体から眺めてどうあつたらよいか。正しい方向を、むだをはぶきマンネリにおちいることなく指向していくための研究と組織が必要となる。

##### 4) 地域研究団体を育てる。

- 他県に比し本県での地域研究団体を育てる必要を認める。

##### 5) 研究団体の組織をどう考えたらよいか

- 連合組織を実際的統合にもちこむか、
- さらに小中学校別に分離していくか、
- いずれも教育研究によりよい姿をめざしていく論にはかならないが、いろいろの条件を考え、どうやつたらよいか大きな課題である。

# 経理事務

本会の經理は本部事務局及び各教科団体長、各教科研究会事務局長が担当している。

本部では經理の適性化を図るために例年団体長、事務局長の合同会議を2～3回程度開催し本部からの原案に基づき（事業報告書、決算書、金銭出納簿、事業計画書、予算書等の作成のしかたについて）説明会を開催している。

また会計事務担当者用の事務処理の手引きを作成し団体長、事務局長に配布し經理事務の万全に努めている。

## 1 教科研究会の經理事務

現在19教科の研究団体は振興会からの国庫補助金十県補助金十会費からの配分金を財源に事業を進めている。

例年10月頃事務局長会を開催し補助金等にかかる留意点等について話し合いを行い、翌年の2月中旬に本年度の統轄と新年度の事業計画予算書等について具体的な話し合いが持たれてい る。

本部では3月中旬に3日間にわたり各教科事務局長を招集し、教科別に会計監査会を実施し各教科より提出された事業報告、決算書及び次年度の事業計画、予算案等を集約するとともにこれらについて科目別に集計し3月25日頃に埼玉県教育委員会指導課に提出している。

以上のような事務手続きを経て、補助金の交付が行われているのである。

申請した事業等一連の書類の審査が県教委で行われ振興会に送付されて認可されると補助金が決定し交付される。補助金は例年では翌年の1月～2月頃交付されるのが通例である。

従って各教科の事業が終了してから補助金が交付される形となるため、各教科等渡り資金に苦慮してきたが、納入された会費より各教科へ

各20万程度の資金を9月下旬に配分するので財政面での苦労も薄らいできた。

各教科の經理事務については、その都度説明会を開催しながら統一されたシステムで処理されており混乱はない。

## 2 本部の經理事務

本部事務局の經理で最も頭を痛めているのは各市町村教育研究会の会員数の掌握と会費の納入についてである。

この会員数が正確に把握できないと本会の予算書の立案ができない。本部では止むを得ず昨年の会員数に若干の人数を加えて立案しているのが通常の形態である。

また会費の納入についても例年6月末日までに納入されることになっているが、なかなか、期日が守られていない。おそいのは翌年に遡ることも市町村教育研究会もある。これらを如何に軌道に乗せるかが今後の検討課題である。

ただ幸いなことに年度末の3月中旬に3日間にわたり教科の事務局長を招集し、会計監査と書類審査を実施しているが、この出席及び書類の提出等は順調である。

この書類に基づき、本部会計事業等も加えて研究大会、研究調査、研究成果刊行など教科別事業別、科目別に集計整理し、净書した書類を定められた期日（例年3月25日頃）までに、県教育局及び全国教育研究活動振興会まで提出しなければならないが例年書類作成の期間が短く困惑している。

### 補助対象経費について

#### 1 研究大会

##### イ 謝金とは

○会員以外のものに委嘱した講師及び助言

- 者に支払われる礼金
- 会員以外のものに委嘱した会場の整理人等に支払われる礼金
  - 会員以外のものに委嘱した速記者等に支払われる礼金
- 旅費
- 会員以外のものに委嘱した講師助言者の出席旅費（宿泊日当を含む）
  - 研究団体の役員（会長副会長理事等）の出席旅費（宿泊日当を含む）
  - 研究発表を行う会員の出席旅費（宿泊日当を含む）
- ハ 借料・損料・会場使用料
- マイク・録音装置・証明器具・幻燈機・ピアノ・机・椅子等の使用料
  - バスの借上料（大会参加者への送迎用）
- ニ 資料費
- 開催案内状・実施要項・研究収録の印刷製本費
  - その他大会に必要な資料作成に要する印刷製本費
- ホ 通信運搬費
- 大会に必要な印刷物を送付する郵便料、運搬費（荷造り費を含む）
  - 事務連絡のための郵便料、電話料
- 2 調査研究費**
- イ 謝金
- 会員以外のものに委嘱した講師または助言者に支払われる礼金
  - 研究調査に協力したものに支払われる礼金（研究助成金も含む）
- ロ 旅費
- 会員以外のものに委嘱した講師助言者の旅費（宿泊日当も含む）
  - 教育研究団体指定研究者の調査旅費
- ハ 資料費
- アンケート実態調査及びこれらの要項の印刷製本費
  - 研究成果をまとめたものを刊行するための印刷製本費
- ニ 通信運搬費
- 研究調査に必要な印刷物を送付する郵便料及び運搬費（荷造り費を含む）
  - 事務連絡のための郵便料、電話料
- ホ 賃金
- 会員以外のものに委嘱した研究調査に必要な集計整理等を行う場合に支払われる礼金
- 3 研究成果刊行費**
- イ 資料費・印刷製本費
- 印刷代・用紙代・製本代など
- ロ 通信運搬費
- 上記の資料費で印刷した刊行物を送付する郵便料、及び運搬費
- ※補助事業の中の経費には補助対象にしない科目（その他）の経費がある。この経費に含まれる代表的なものには会議費・消耗品費等があるが、なるべく多額の計上はさけている。
- 4 備えつける諸帳簿と書類**
- 1) 帳簿
- イ 金銭出納簿
  - ロ 収入・支出科目別帳簿（仕訳帳）
  - ハ 郵便切手等受払簿
- 2) 関係書類
- A 収入関係
- イ 入金伝票（収入伺）本会規定用紙
  - ロ 借用書
  - ハ 預金通帳
- B 支出関係
- イ 出金伝票（支出伺）本会規定用紙
  - ロ 見積書（10万円以上のものは相見見積書）
  - ハ 納品書
  - ニ 請求書
  - ホ 領収書（出金伝票へ添付）
  - ヘ 契約書
- C その他関係書類
- 事業計画書 ○予算書 ○発送・収受文

## 書類 ○事業実施状況報告書

- 前年度の決算書等

### 収支について

#### 1 収入の部

- イ 会 費 会費収入の年間総額を記入  
ここでの会費とは団体が会員から一定の金額を恒常に徴収するものであり、大会などで臨時に徴収するものは含まれない。
- ロ 補助金 国庫補助金 県費補助金予定額
- ハ 寄付金 寄付者名と金額

ニ 雑収入 預金利子 出版物の販売等による収益、その他の雑収

ホ 練越金 練越金を生じた理由

#### 2 支出の部

- 補助対象事業（研究大会、研究調査、研究成果刊行）に要する経費  
非補とは非補助対象経費の略である。
- イ 研究大会費 各事業に要する経費
- ロ 研究調査費
- ハ 研究成果刊行費
- ニ 上記支出のうち補助 8 非 2 が本会の割合である。

## 主な教育思想、情勢

### ①教育課程審議会

- 小学校の教育課程の改善について(42.10.19)
- 調和のとれた統一ある教育課程の実現
- 指導内容と基本的な事項に精選集約し、児童の個性、能力に応ずるようにする。
- 教育課程の弾力化
- 科学技術教育の振興と現代化

### 中学校の教育課程の改善について (43.6.6)

- ②小学校新学習指導要領公示される(43.7.11)
- 授業時数を最低から標準授業時数に改め、弾力的な運用が図れるようになる。
- 特別教育活動と学校行事等の内容と整理統合して特別活動とした。
- 算数、数学、理科を中心[new]に新しい概念を取り入れる現代化が行われた。
- 道徳教育、総則 3 体育の重視
- 言語環境の整備と児童の言語活動の適正化
- 視聴覚教材教具の積極的な利用
- 特殊教育の重視と適切な指導
- 学習評価の重視と指導の改善
- 1 単位時間は45分を常例とする。
- 低学年における合理的な指導の導入

### ③中学校新学習指導要領公示される(44.4.14)

- 地域や学校の実態及び生徒の心身の発達と特性を十分考慮して適切な教育課程を編成する。
- 各教科・道徳・特別活動は、いずれの学校に於いても取り扱う。
- 全体的に調和のとれた指導計画を作成し、発展的、系統的な指導を行う。
- 外国語については第1学年から履修
- 授業時数年間240日以上 (35週以上)
- 1 時間単位は50分を常習とするが55分とすることも考慮する。
- 自主的、自発的な学習
- 生徒の態力、適性等の的確な把握と適切な進路指導を行う。
- 生徒指導の充実を図る
- 視聴覚教材の適切な指導
- 学習評価の重視と適切な指導

### ④小学校新教育課程全面実施となる (46.4.1)

- ⑤交通事故の激増に伴い、交通安全教育が重視される。
- ⑥特殊学級の設置と特学担当教員の養成

- ⑦生徒指導の強化と教育相談の重視
- ⑧小学校の増設と教員の配置
- ⑨中学校新教育課程全面実施となる（47.4.1）
- ⑩学校安全教育の重視
- ⑪学習指導法の改善（探求学習、プログラム学習）など
- ⑫偏差値、学習塾に世論の関心が高まる
- ⑬教科の構造化の重視
- ⑭知育偏重の学校教育に対する批判高まる（落ちこぼれ等）
- ⑮学習評価の重視
- ⑯5段階の相対評価に対する反省と絶対評価の加味
- ⑰教務・学年・生徒指導等主任制の設置
- ⑱自ら正しく判断できる力の育成をめざし
  - 小中高等学校の教育課程の基準の改善について答申（51.12.18）
  - 人間性豊かな児童、生徒を育てること
  - ゆとりある、しかも充実した学校生活が送れるようにする。
  - 国民として必要とされる基礎的、基本的内容を重視するとともに児童生徒の適性や、能力に応じた教育が行われるようにする。
- ⑲児童生徒の登校拒否が問題となる。
- ⑳小中学校新学習指導要領公示（52.7.23）
- 小学校
  - 児童の人間として調和のとれた育成をめざし、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階と特性を充分考慮して適切な教育課程を編成する。
  - 道徳教育及び体育の重視
  - 授業時数の改善
  - 学校運営における時間の工夫（裁量時間）
  - 合理的な指導の積極的な推進
- 中学校
  - 選択教科の履修方法の改訂
  - 生徒始動の一層の充実
- ㉑義務学校の義務化はじまる（54.4.1）
- ㉒40入学級一部の地域で実現する。
- ㉓小学校新教育課程全面実施（55.4.1）
- ㉔中学校新教育課程全面実施（56.4.1）
- ㉕青少年の非行化と校内暴力が問題となる。
- ㉖同和教育の重要性がさけられる。
- ㉗英語科の授業時数週当たり3時間が問題となる
- ㉘観点別評価が導入される（指導要録改訂）

## 関係諸団体との連携

本会は発足当初より文部省・全国教育研究活動振興会・埼玉県教育委員会・各市町村教育委員会・埼玉県教育局指導課・埼玉県教育センター・埼玉大学教育学部・各教育事業所等の関係機関ならびに関東地区小中学校教育研究会・埼玉県小中学校長会・埼玉県教育公務員弘済会等の関係団体の物心両面にわたる特別のご指導、ご援助をいただきながら県下最大の教育研究団体として充実発展している。

文部省

本会発足当時より国庫補助金をいただいている

る。また各教科の研究大会には教科調査官を講師としてご派遣いただき、教育指導行政の専門職としてのご指導と助言をいただき、埼玉県連合教育研究会発展のための大きな役割を果してきた力となっていることは感謝にたえない。

### 全国教育研究活動振興会

昭和53年度より文部省からの補助金は、この振興会を窓口として交付されるようになった。以後、本研究会は例年7月度補助金交付申請表を本教育局指導課を経由して提出し、その認可を得て国庫補助金の交付を受けている。

この国庫補助金、県よりの補助金は19教科研究会の重要な財源となっている。

#### 埼玉県教育委員会

本会が結成される以前から結成に至るまで当時の県教育長峰岸政之助先生は大変なご尽力をいただいた。本会設立については専門的な立場から直接、間接に何かとご指導とご助言をいただき、かつ県内補助金についてもご協力をいただき広く高い次元からご挨拶をいただいた。

また全国、関プロ等の研究大会の開催については、いつも共催か、後援をお願いし絶大なるご協力をいただいている。

#### 各市町村教育委員会

各市町村教育委員会からは、地域研究会の発展のために毎年多数の研究助成金をいただきおるばかりでなく、地域の研究発表大会の開催に当っては講師、助言者として市町村教育委員会の指導主事を派遣していただき地域や現場の実態に即応した適切なご指導をいただいている。

#### 埼玉県教育局

県教育局の指導課は本研究会の指導官庁であり、本会の結成に当っては格別のご協力とご支援をいただき、その組織・運営は申すに及ばず研究活動の方向性や研究推進のあり方などに細部にわたり種々の指導助言をいただきてきた。

特に財政的な基盤としての国及び県の補助金の確保とその増額については特段のご配慮をいただくとともに、その申請・交付等に関する諸表法の作成手続き等にも格別のご指導をいただいている。

加えて、指導主事各位には 各教科、地域の研究大会等にご出席いただき、それぞれの担当教科領域において専門的立場から理論的実践的なご指導をいただき本研究会の活動に大きな指針を与えていただいている。

年々本会が充実発展してきたのも指導課あげての全面的なご協力とご指導のたまものであった。また他の教育局各課からも貴重な研究資料や情報を提供していただき、ご協力いただいて

いる。

#### 埼玉県教育センター

研究活動の推進にあたっては県教育局指導課とのタイアップにより本会の果すべき役割りや研究活動の進め方について種々のご指導をいただいている。

特に本会事務局については 教育センター職員を何度も派遣していただき、組織・運営等幅広い視野からご指導をいただいた。

#### 埼玉大学教育学部

本会の各教科研究活動の推進にあたっては、絶えず埼玉大学教育学部と深い連携を保ちながら進めてきた。

特に各教科の研究大会のメイン講師は教授であり教育学者の立場から権威あるご指導をいただいている。

#### 各教育事務所

県下には教育局の出先機関として、9地区に教育事務所が置かれている。

教科が地域の研究発表会には教育事務所長を来賓としてお招きし、研究活動に対して幅広い立場からのご指導とご助言をいただきてきた。

また所轄教育事務所の指導主事各位については、それぞれの教科領域についての専門的な立場から地域や、現場の実態に即応して適切な指導をいただいている。

#### 関東地区小中学校教育研究会

この会は、昭和48年2月17日に関東地区一都六県の各研究会の相互連絡と研究協議を行うため結成された。この会は年2回各都県の研究会長・副会長・事務局長などで構成され、各都県と持ち回りにより開催されている。

この会議は、各都県それぞれの研究団体の組織運営・研究活動の推進及びその研究成果について、相互に情報を交換し、各都県それぞれの研究団体の充実を期するとともに、文部省の教科調査官を講師に招き、教育課程実践上の諸問題

等について研究している。

#### 埼玉県教育公務員弘済会

埼玉県教育公務員弘済会は、埼玉県小中高等学校の教職員の福祉・共済を目的とした会である。

創立以来、県内教職員の福祉向上に尽力され県内教職員を対象に教育研究助成事業として、

個人研究、共同研究などの研究助成を行っている。

本研究会も昭和58年度より埼玉県教育公務員弘済会の特段のご配慮により教育研究助成事業の思慮にあざかり本県教育研究活動推進の大きな財源となっている。

## 本部関係事業の概要

### 昭和39年度

39. 5. 23 総会並に講演会  
39. 6. 25~26 小学校教育研究発表大会（県教委、埼大附小と共催）  
39. 7月～8月 研究調査（地域教育研究団体の活動状況について）  
39. 9. 30 評議員会（浦和武藏野荘）  
39. 12. 12 教育研究団体長研究協議会（浦和、安田信託銀行）  
40. 2 教育研究団体、教育局指導課合同研究協議会（県庁5階、大会議室）

### 昭和40年度

40. 5. 6 教育研究会長会議  
40. 5. 26 研究大会（埼大附小）  
40. 6. 1 講演会（埼大附中）  
40. 6. 14 研究大会（埼大附中）  
40. 7～8月 研究調査（熊谷西小）  
40. 9. 10 評議員会  
41. 3. 10 校長あて、配付  
41. 3 研究成果刊行発行

### 昭和41年度

41. 6. 1 小学校教育研究大会並びに総会（附中）  
41. 6. 7 中学校教育研究大会（附中）  
41. 9. 20 評議員会（大宮小）  
41. 9. 26 編集委員会（川口、本町小）  
41. 12. 22 教科等研究団体長会議  
42. 1. 24 “教育研究のすすめ方”（武藏野荘）

42. 3. 8 教科団体長会議、編集委員会

42. 3 研究集録2号発行

### 昭和42年度

42. 5. 31 埼玉県小中学校教育推進に関する研究協議会開催  
42. 6. 19 県教委・県連合教育研究会共同主催による研究発表会ならび講演会（埼大附中）  
42. 7. 5 中学校学習指導に関する研究会講演会開催  
42. 11. 27 教科等研究団体長会議、会計事務担当者会議（大宮小）  
43. 1. 20 第3回評議員会（大宮小）  
43. 2. 12 教育研究団体長会議研究協議会（教育センター）  
43. 2. 15 会計担当者会議（大宮北中）  
43. 2. 23 地域教育研究団体長会議（大宮北中）  
43. 3. 5 会報、創刊号発行  
43. 3. 12 教育研究団体長会議  
昭和43年度  
43. 6. 10 各部会別研究発表会  
43. 6. 12 部会別研究協議会、全体研究発表会ならびに講演会  
43. 1. 5 研究団体長および経理担当者会（大宮小）  
43. 7. 10 会計検査院の検査について（文書発送）  
43. 9. 25 会報2号発行

43. 10. 29 研究集録編集委員会
43. 12. 20 教科等研究団体長会議（大宮北中）
44. 1. 24 小中学校教育研究推進に関する研究協議会（太陽銀行、大宮支店）
44. 1. 28 教科等教育研究団体会計事務担当者会議（大宮北中）
44. 3 各教育事務所長  
昭和44年度
44. 5. 23 第一回評議員会
44. 6. 16 各教科部会別研究発表
44. 12. 18 会計事務担当者会
45. 1. 23 評議員会（埼玉銀行）
45. 3. 17 教育研究団体推進の教育調査（福島県教委）
45. 3. 27 教育研究団体の事務視察
45. 3. 28 研究集録配布
45. 3. 31 会報 4号  
昭和45年度
45. 5. 23 埼玉県小中学校教育推進に関する研究協議会開催
45. 7. 15 会計事務担当者会（大宮東中）
45. 10. 26 評議員会（大宮小）
45. 10. 28～30 他県教育研究活動状況視察
45. 11. 27 太陽銀行、大宮支店
45. 12. 22 会計事務担当者会議（大宮東中）
46. 1. 16 放送教育及び学校視聴覚研究等のアンケートの結果報告について
46. 2. 9 研究集録、編集委員会
46. 2. 9 組織検討委員会
46. 3. 5 組織検討委員会
46. 3. 31 会報 5号  
昭和46年度
46. 4. 27 会報 5号の配布方依頼
46. 5. 25 評議員会（第1回）（埼玉銀行、大宮支店）
46. 9. 6 会計検査院の会計監査（埼玉会館）
46. 10. 19 評議員会（第2回）
47. 3. 22 研究集録、配布依頼
47. 3. 31 会報 6号発行  
昭和47年度
47. 5. 23 評議員会
47. 6. 16 会報、配布依頼
47. 7. 15 第1回教科団体事務担当者会議（群馬銀行）
47. 9. 20 負担金納入に関する依頼文書発送（大宮支店）
47. 10. 17 県連合教育研究協議会（太陽銀行、大宮支店）
47. 11. 20 教科等事務担当者会（群馬銀行、大宮支店）
47. 12. 19～20 県外教育団体視察（岐阜）
48. 2. 2 研究集録編集委員会（上尾小）
48. 2. 6 保健体育研究会、配布金について協議（柏壁小）
48. 2. 7 視聴覚等研究団体統合案件について（柏壁小）
48. 2. 15 会計事務担当者会（太陽銀行、大宮支店）
48. 2. 15 評議員研究協議会（〃）
48. 2. 15 第1回 会長・副会長会議開催（太陽銀行、大宮支店）
48. 2. 17～18 関東地区小学校教育研究会連絡協議会（仮称）  
結成準備会開催（鬼怒川温泉）
48. 2. 28 研究集録配布
48. 3. 10～11 県外視察（熱海、伊豆方面）
48. 3. 20～25 研究会会計監査会（22団体）（柏壁小）
48. 3. 26 会報県内発送（各教育事務所へ県内各教育事務所、自動車で配達）
48. 3. 30 昭和48年度各教科事業報告、S49年度各教科研究団体事業計画書、決算報告書、予算書提出、各教科研究集録提出、研究集録発送準備及配布事務  
昭和48年度
48. 4. 25 会計監査（柏壁小）
48. 6. 9 評議員会（大宮小）
48. 7. 20 理事運営協議会（武蔵野銀行、久喜支店）
48. 7. 26 各教科会計予備監査会（大宮東中）

48. 8. 6 会計検査院会計監査会（埼玉会館）
48. 9. 7 会計担当者会（富士銀行、大宮支店）
48. 9. 11 国庫補助金に伴う県費負担分、増額  
陳情書協議会（柏壁小）
48. 9. 12 顧問会議（県立職員クラブ）
48. 10. 3 理事運営協議会及陳情者提出（桜木  
小）（県教育局、知事部局、議会事務  
局）
48. 10. 17 研究集録、編集委員会（大宮小）
48. 11. 8 視聴覚三団体会長会議（柏壁小）
48. 12. 1 評議員会
49. 1. 24 関東地区小学校連合教育研究会設立  
準備会（柏壁小）
49. 2. 5 関東地区小学校連合教育連絡協議会  
設立総会（宇都宮くろかみ荘）
49. 2. 26 会計事務担当者会議
49. 3. 2 会報、編集委員会（柏壁小）
- 昭和49年度**
49. 6. 15 第1回評議員会、大宮婦労会館（午  
後、歓送迎会、大宮釜重）
49. 7. 9 県連教活動方針打合せ会（県教育局  
指導課）
49. 7. 15 関東地区小学校教育研究会連絡協議  
会（赤城教育会館）
49. 9. 5 会計担当者会（大宮婦労会館）
49. 10. 15 「負担金未納に関する依頼」につい  
て（文書発送）
49. 11. 13 補助金増額に関する陳情書
49. 12. 3 関東地区小学校教育研究会連絡協議  
会（秩父一中）
49. 12. 11~11 県外教育研究団体研究視察（滋  
賀県）
49. 12. 19 第2回評議員会（大宮婦労会館）
50. 2. 4 会計担当者会議（大宮婦労会館）
50. 2. 7 編集委員会（大宮婦労会館）
50. 3. 11 顧問会議（大宮婦労会館）
50. 3. 20 研究集録配布依頼
50. 3. 27 会報配付依頼
- 昭和50年度**
50. 5. 20 関東地区小学校教育研究会連絡協議  
会（千葉青雲閣）
50. 6. 28 第1回地域、教科等研究団体長（評  
議員会）（大宮婦人労働福祉会館）
50. 6. 28 第1回県連合教育研究会理事会（大  
宮婦人労働福祉会館）
50. 5. 12 第1回教科等研究団体事務担当者会  
議（大宮婦人労働福祉会館）
50. 11. 12 関東地区小学校教育研究会連絡協議  
会（茨城県校長会館）
50. 11. 26 第2回県連合教育研究会理事会（柏  
壁小）
50. 12. 9 第2回地域、教科等研究団体長（評  
議員）（大宮小）
51. 1. 28 研究集録編集委員会
51. 2. 28 第2回教科等研究団体事務担当者会  
議（大宮婦人労働福祉会館）
51. 3. 11 顧問会議（柏壁小）
51. 3. 18~22 教科等研究団体決算、予算検収  
会及監査会（柏壁小）
- 昭和51年度**
51. 6. 19 地区、教科等研究団体長（評議員）会
51. 6. 19 理事会
51. 9. 8 教科等研究団体事務担当者会
51. 11. 11 社会科研究学力調査委員会
51. 11. 24 地区、教科等研究団体長（評議員）会
51. 11. 24 理事会
51. 11. 27 中学進路指導研究会専門委員会
51. 12. 4~5 関東地区連合教育連絡協議会
51. 12. 21 中学校英語学力調査分析委員会
52. 1. 14 教科等研究団体事務担当者会
52. 1. 25 研究集録編集委員会
52. 2. 22 中学校進路指導研究会専門委員会
52. 3. 3 研究集録編集委員会
52. 3. 4 "
52. 3. 19 教科等研究団体決算・予算検収会及  
監査会
52. 3. 22 "
52. 3. 23 "
52. 3. 末 研究集録発行
52. 3. 末 会報発行

- 昭和52年度**
- 52. 5. 6 本部会計監査会（柏壁小）
  - 52. 6.21 第1回評議員会（柏壁小）
  - 52. 6.21 理事会
  - 52. 7.11 第1回関東地区小学校教育連絡協議会（東京・国立教育会館）
  - 52. 9.14 教科等研究会長及び事務担当者会（柏壁小）
  - 52. 12.16 理事会（柏壁小）
  - 52. 10.21 関東地区小学校教育連絡協議会（栃木県那須町）
  - 52. 12.16 第2回評議員会（柏壁小）
  - 53. 1.31 研究集録編集委員会（柏壁小）
  - 53. 1.24 教育等研究会長及び事務担当者会（柏壁小）
  - 53. 2.17 会報編集委員会（柏壁小）
  - 53. 3.15～16 会報配付事務（県内各事務所）
- 昭和53年度**
- 53. 6.24 第1回評議員研究協議会（柏壁小）
  - 53. 6.16 第1回関東地区小学校教育連絡会（千葉市）
  - 53. 6.16 会費納入依頼事務（柏壁小）
  - 53. 9.13 教科等研究会長及び事務担当者会（柏壁小）
  - 53. 10.20 第2回理事研究協議会（柏壁小）
  - 53. 10.20 第2回評議員研究協議会（柏壁小）
  - 53. 10.21 関東地区小学校教育連絡協議準備会（秩父）
  - 53. 12.3～4 関東地区小学校教育連絡協議会（秩父）
  - 54. 1.17 研究集録編集委員会（柏壁小）
  - 54. 1.18 教科等研究団体長及事務担当者会（柏壁小）
  - 54. 2.14 会報編集会議（柏壁小）
  - 54. 3.1～3 会報校正及研究集録第2回校正（柏壁小）
  - 54. 3.12～14 各教科等研究会の事業及び会計監査会（柏壁小）
  - 54. 3.19～20 会報配付事務
- 昭和54年度**
- 54. 5.21～22 事務局総会（評議員会）準備会（柏壁小）
  - 54. 6. 2 教科等教育研究会、地域教育研究会（役員名報告依頼）（柏壁小）
  - 54. 1.20 県連教第1回理事研究協議会（柏壁小）
  - 54. 6.28 第1回評議員研究協議会（高砂小）
  - 54. 6.29 第1回関東地区小学校教育連絡会（水戸市）
  - 54. 9.28 第1回各教科等研究会長及び会計事務担当者会（高砂小）
  - 54. 10.17 第1回研究集録編集委員会（高砂小）
  - 54. 10.24 第2回理事・評議員研究協議会（高砂小）
  - 54. 11.13 第2回関東地区小学校教育連絡会（横浜市）
  - 54. 12. 6 第2回研究集録編集委員会（高砂小）
  - 55. 1.17 第2回教科会計担当者会議（高砂小）
  - 55. 1.24 第3回研究集録編集委員会（高砂小）
  - 55. 2.20 第4回研究集録編集並びに会報編集委員会（高砂小）
  - 55. 2.27 第5回研究集録編集並びに会報編集委員会（高砂小）
  - 55. 3. 5 第6回研究集録編集並びに会報編集委員会（高砂小）
  - 55. 3.11～13 各教科等研究会の事業及び会計監査（高砂小）
  - 55. 3.28 会報配付事務（高砂小）
- 昭和55年度**
- 55. 6.11 第1回理事会（高砂小）
  - 55. 6.18 第1回評議員会（高砂小）
  - 55. 7.16 負担金納入依頼（高砂小）
  - 55. 7.29 会計検査院による監査会（武藏野会館）
  - 55. 9.26 第1回各教科等研究団体長及会計担当者会（高砂小）
  - 55. 10.15 研究集録編集委員会（高砂小）
  - 55. 10.22 第2回理事会及評議会（高砂小）
  - 55. 11.19 第2回各教科等研究団体長及会計担当者会（高砂小）

55. 12. 9	第2回研究集録編集委員会(高砂小)	東中)
56. 3. 17	臨時理事会及評議員会(高砂小)	昭和58年度
56. 3. 25	研究集録及会報発送(高砂小)	58. 4 会報第18号発行
昭和56年度		58. 6. 10 第1回理事会、評議員会
56. 5. 7	本部関係会計監査会(大宮東中)	58. 9. 16 第1回教科等会計担当者会
56. 6. 5	第1回理事会及評議員会(事務局総会)(大宮東中)	58. 9. 17 第1回関東地区小中学校教育研究会連絡協議会(東京)
56. 9. 9	第1回各教科等研究団体長及会計担当者会(大宮東中)	58. 10. 19 第1回研究集録編集委員会
56. 10. 24	第1回研究集録編集委員会(大宮東中)	58. 10. 28 第2回理事会、評議員会
56. 10. 27	第2回理事会及評議員会(大宮東中)	58. 11. 11~12 第2回関東地区小中学校教育研究会連絡協議会(群馬)
56. 11. 7	第2回各教科等会報担当者会議(大宮東中)	58. 11. 26 第2回教科等会計担当者会
56. 12. 3~4	関東地区正副会長(秩父)	58. 12. 16 第2回研究集録編集委員会
56. 12. 5	第2回研究集録編集委員会(秩父)	58. 12. 16 会報第19号発行
57. 1. 22	第3回各教科等会計担当者会議(秩父)	59. 1. 24 第3回研究集録編集委員会
57. 3. 末	研究集録及会報発送(秩父)	59. 1. 15 第3回教科等会計担当者会
昭和57年度		59. 2. 21 第4回研究集録編集委員会(論文入選者表彰)
57. 5. 1	昭和56年埼玉県連合教育研究会監査会(大宮東中)	59. 3 各教科等研究団体の監査
57. 6. 4	第1回理事会、評議員会(大宮東中)	
57. 9. 7	第1回教科等研究会長及び会計事務担当者会(大宮東中)	
57. 10. 23	第1回研究集録編集委員、各教科会計事務担当者(編集委員)会(大宮東中)	
57. 11. 2	第2回理事会、評議員会(大宮東中)	
57. 11. 10	第2回教科等会計事務担当者会(大宮東中)	
57. 12. 9	第2回研究集録編集委員会(大宮東中)	
58. 1. 22	第3回研究集録編集委員会(大宮東中)	
58. 2. 18	第3回教科等会計事務担当者会議(大宮東中)	
58. 3. 4	第4回研究集録ならびに会報編集委員会(大宮東中)	
58. 3. 16~18	各教科等研究団体の監査(大宮	

# **第4章**

# **教科等研究部会**

# 国語科教育研究会

## 1 会のあゆみ

昭和24年6月、県下各地域の熱心な要請に事務局を埼大附属小学校内に置き埼玉県国語教育研究会は発足した。

当初は会による研究委嘱校の研究発表と研究発表大会が主な事業であった。しかし、県文集の編集・発行、漢字学習ノートの編集等、時の課題に応じたものを加えると、事業も相当に幅広く、当初からの意欲的な取り組みであった。

以来、会員の意欲的な研究活動と、積極的な事業への参加により、内容についても、その運営についても、年々改善が図られて今日に至った。以下、41年度から研究集録に基づき、活動の概要を述べる。

## 2 主たる活動と事業

### (1)昭和41年度

#### ①夏期国語研修大会(昭和41年8月22・23日)

ア会場 大宮市立大宮東中学校

イ内容・全体会 提案者…小中6名

・分科会 " …小中12名

・講演 教育大学 倉沢栄吉氏

埼玉大学 井上敏夫氏

・参加 延べ 1200名

#### ②国語教育研究発表大会(昭和42年2月16日)

ア会場 熊谷市民ホール

イ内容・研究発表と協議(発表小中各5名)

・中学校学力検査の結果発表

・文集コンクール入賞者の表彰

・講演 東京大学 藤堂明保氏

ウ参加 300名

#### ③研究委嘱校研究発表

ア国語科における読書指導 大宮小学校

イ読解過程における練習学習 深谷明戸小

ウ作文指導について 川角小学校

エ中学校における作文指導 昭和中学校

オ中学校における漢字指導 大原中学校

④第8回中学校学力検査の実施 11月18日  
(昭和34年から実施)

⑤文集コンクール。 応募数182 2月8日

#### ⑥編集等の事業

ア「わたしたちの話しことば」編集刊行。  
(高学年を対象とした読み物)

イ県文集「さいたま」10号発行

(小学校低中高、中学校の4種)

ウ会報「さいたま国語」の発行

#### (2)昭和42年度 ——以下主な活動——

研究主題「国語教育の本質をめざして」

年間の研究主題が設定され、夏期研修会、冬期発表大会を通して、主題を追求していくこととなった。また、年間事業が前記5事業に固まるとともに、実施の時期や、内容及び規模が一定した。

#### (3)昭和45年度

研究主題「新学習指導要領の実施に伴う諸問題」

夏季研修会、冬期発表会、研究委嘱校年間事業に読書指導の領域が多く扱われている。新指導要領の実施を次年度に控えて、この領域に対する関心が高まっている。

#### (4)昭和48年度

小学校作文教育研究発表会

ア期日 昭和49年2月26日(火)

イ会場 熊谷市立石原小学校

ウ研究主題 表現の本質にたつ作文指導  
エ発表会の内容

・公開授業と研究発表

・低中高学年別分科会

48年度は冬期研究発表会を二会場とし、  
本会場は作文教育に関する研究であった。

## (6)昭和53年度

### ①研究委嘱校の研究

ア読む力と書く力の関連指導

一読む力を育て表現力に転移させる—

イ熊谷市立西小学校

#### ウ概要

読解指導の過程において、作文力を育てる意図のもとに書く活動を導入すれば表現力をも育てられるという意欲な、かつ実験的な研究。

### ②第20回、中学校学力検査

参加校125校、1、2、3年 計69,536名

問題作成と検査結果の集計と分析という作業を重ねて、本年で20回となった。

## (6)昭和54年度

### ○ブロック別授業研究会

年間事業の中に新に加えられた。なお、研究会による研究校の委嘱を制限した。

ア東部 昭和55年2月20日 杉戸町杉戸小

イ西部 昭和55年2月26日 川越霞ヶ関小

ウ南部 昭和55年2月5日 桶川川田谷小

エ北部 昭和54年11月15日 深谷市大寄小

### (7)昭和56年度活動概要

#### ①研究主題と事業計画等について 6月24日

#### ②夏季研修大会打ち合わせ 7月25日

#### ③夏季研修大会 8月20日

会場 附属小、小中9分科会、参加800名

#### ④冬期研究発表大会打ち合わせ 12月26日

#### ⑤文集審査 57年2月5日

#### ⑥冬期研究発表大会 57年2月17日

○会場 川越 小中3分科会 参加600名

○学力検査結果報告、文集コンクール表彰

#### ⑦ブロック別授業研究会

○東部 越谷新方小 西部 嵐山菅野小

○南部 大宮北小 北部 深谷大寄小

### (8)昭和57年度活動方針

研究主題「確かな国語学力の定着をめざす国語科指導」

#### ①活動方針

○会員の国語教育に対する資質を高める。

○児童生徒の国語学力の定着をめざす。

○県下の国語教育の振興を図る。

○組織の充実と会員相互の理解を図る。

#### ②事業計画

方針の実現のため次の事業を行う。

○夏季研修大会（会場 埼玉大附属小）

○冬季研究発表大会（会場 岩槻福祉社会館）

○文集コンクール（会場 岩槻福祉社会館）

○中学校国語学力検査（11月実施）

○ブロック別授業研究会（東西南北の4会場）

### (9)昭和48年度活動概要

#### ①新旧合同理事会 58年6月22日 附属小

○研究主題・事業方針・事業内容について

#### ②常任理事会 58年7月1日 附属小

○夏季研修大会について（指導者等の決定）

#### ③夏期研修大会打ち合わせ。 7月13日

#### ④夏季研修大会 8月18日附属中

○分科会 小学校6、中学校3、提案18名

○全体会 講演 国立国語研究所齊賀秀夫氏

○参加者 700名

#### ⑤中学校学力検査 58年11月

○参加校97校 参加者61170名

#### ⑥常任理事会 58年12月8日 附属小

○冬季研究発表大会発表者選考、大会運営

#### ⑦冬季研修大会打ち合わせ 1月18日 附属小

#### ⑧常任理事会 59年2月8日 熊谷市

○文集コンクールの文集審査

#### ⑨冬季研究発表大会 59年2月17日

○会場 熊谷市勤労会館分科会、小3中1

○提案者 小9名、中3名参加者、450名

○全体会 講演 文部省視察官渡辺富美雄氏

#### ⑩地区別授業研究会

（期日は、11月から2月までに行われた。）

○東部 桜田小 西部 吉見西中小

○南部 尾山台小 北部 東秩父中

## 3 特色ある活動

#### ①第18回全国国語教育研究協議会・埼玉大会

①期日 昭和44年10月29・30・31日

#### ②大会概要

○主催 全国大学国語教育学会・全国国語教

育研究協議会・埼玉大学・埼玉県教育委員会・埼玉県市町村教育連合会・浦和市教育委員会・埼玉県連合教育研究会・埼玉県国語教育研究会

○大会内容

ア第1日（10月29日） 会場 労働会館

○開会式・研究発表とシンポジューム・講演  
シンポジューム“先人の遺績を探る”

「芦田恵之助」 古田拡氏他 2人

講演 文学と風土 埼玉大学 長谷章久氏

イ第2日（10月30日）

○会場・全体会 埼玉会館 大ホール

分科会 附属小・高砂小・本太小・  
針谷小・附属中・本太中・

○講演 文学と教育 作家 小島信夫氏

○シンポジューム

“国語における伝承と創造”

石井庄司氏 他 3人

○公開授業 小学校13名、中学校 7名

○発表者 小学校18名、中学校 9名

分科会場は小中学校領域別に分散し、これ  
に応じた公開授業と研究発表が行われた。

ウ第3日（10月31日）

○会場 分科会 小学校部会 埼大附属小

中学校部会 埼大附属中

○実験授業 小学校 教育大附属小

青木幹友氏

中学校 石川台中 大村はま氏

○シンポジューム（小学校）

“国語科教育の前進” 神沼新十郎氏他 3人

○シンポジューム（中学校）

“国語科教育の改造” 斎藤広一氏他 3人

○講演（小学校） 教育大 倉沢栄吉氏

（中学校） 学芸大 望月久貴氏

※ 大会は全国各地から延べ2,000人もの参  
加を得て行われた。県小中学校長会をはじめ  
地元浦和市・川口市・大宮市の後援のも  
とに国語研究会の総力を挙げてこれに当り、  
結果は予想以上の成果と好評を得た。

(2)「埼玉の国語教育を語る」座談会

①期日 昭和50年9月20日・11月1日

②趣旨 国語教育研究会発足以来20余年を経  
過した。そこで、本県国語教育の歩み  
を知り、今後の国語教育の指針とする。

③第1回 9月20日 会場 県職員クラブ

出席者 高橋正吉氏他歴代会長

第2回 11月20日 会場 附属小学校

出席者 新井静夫氏他 7人

④全関東地区中学校国語教育研究協議会

①期日 昭和55年11月12日

②大会概要

○主催 全関東地区中学校国語教育研究協議  
会・埼玉県教育委員会・浦和市教育  
委員会・大宮市教育委員・川口市教育  
委員会・埼玉県国語教育研究会

○会場 埼玉大学教育学部附属中学校

○内容

主題 豊かな人間性を培う国語教育の実践

分科会 6分科会 授業と提案及び協議  
（本県より6人の授業者、12人の提案者）

講演 「日本人の言語活動」 柴田武氏

○参加者 500人

※ この研究協議会は関東地区内の都県国語  
教育研究会で組織され、会場持ち回りとな  
っている。また、毎年、提案者、司会者、  
指導者を傘下国語教育研究会から派遣して  
いる。

④編集・刊行

「埼玉のむかし話」 昭和48年度刊行。

編集委員の3年間に及ぶ編集によるもの  
なお、昭和59年から、「埼玉文学風土記」  
の編集に取り組むこととなった。

#### 4 運営上の問題点

県下各地においては、日々の実践に意欲を  
燃やしている方々が多い。この人達に機会を  
与え、共に伸びていくことが研究会本来の意  
みである。

そこで、夏季研究大会と冬期の研究発表大  
会では、新人を提案者、発表者の候補者とし  
て選んでいる。しかし、もれなく各地域から

選ばれているかどうか、組織の網の目をいかに細かにしていくかに苦心している。

時の教育課題について普及徹底を図ったり各地域、各校の実践の成果を収集することは大事な仕事である。国語教育研究会でも、研究会場を持ち回りにしたり、地区別授業研究会等を試みてはいるが、もう一つという心配がある。組織が増大した現在、いかに情報を収集するかという点について、心を労している。

## 5 昭和59年度の研究活動

### (1)研究主題と方針

主題「確かな国語学力の定着を図る授業の創造」

- 児童生徒の国語学力の定着をめざし実践的研究を行う。
- 会員の国語教育に対する資質を高める。
- 相互の理解を深め、活動の充実を図る。

### (2)活動の概要

#### ①夏季国語教育研修大会

ア期日 昭和59年8月20日（月）

イ会場 埼玉大学教育学部附属中学校

ウ内容 小学校 6月分科会 提案と協議  
中学校 3分科会 提案と協議  
講演 埼玉大学教授 緒形暢夫氏

#### ②地区別授業研究会

ア期日 昭和59年10月～昭和60年2月

イ会場 東部 埼玉・北埼地区内小中学校  
西部 入間・比企地区内小中学校  
南部 北足立南北地区内小中学校  
北部 秩父・児玉・大里地区内

#### ③冬季国語教育研究発表大会

ア期日 昭和60年2月22日（金）

イ会場 川越市福祉会館 県立川越図書館  
ウ内容 研究発表と研究協議（予定）

分科会 小学校2 中学校1

全体会 講演

#### ④中学校学力検査と結果の分析

ア問題作成 昭和59年6月～10月

イ検査実施 昭和59年11月

ウ結果分析 昭和59年12月～1月

エ結果発表 昭和60年2月22日

#### ⑤文集コンクール

ア審査 昭和60年2月6日（水）

イ結果発表 昭和60年2月22日

#### ⑥研究集録の編集・会報の発行

## 6 今後の課題

夏季研修大会や冬期発表大会における参加者は、700名もしくは500名と、人数の上ではいかにも盛会である。しかし、会員の激増している今日からみて、真に会員の必要や期待に応えた課題であったかどうか、また、研修の方法が適切だったかどうか、不透明さからもたらされる一種の不安が感じられる。先にも指摘したとおり、情報収集力の弱さである。今後一層の組織の充実化を図り、会員相互の意志の疎通を図っていきたい。

会員の資質を高め、国語教育の一層の充実を図るためにには、質の高い研修を必要とする。

特に国語教育推進上の課題や、評価の問題等、今日的課題については、深めたい研修の課題である。

今後の事業の構想に先立って、先ず、自らが学ぶ姿勢を大切にしていく意味から、理事研修会等、会の運営にたずさわる者の研修会を積極的に進めていきたい。

# 書写教育研究会

## 1 会のあゆみ

埼玉県書写教育研究会の発足については、昭和41年度埼玉県書写教育研究会決算書の付記に次のように記されている。

41年度から連合教育研究会の中の書写教育研究会として補助を受けることになった。  
書連と書写研が年度途中において分かれることになった。

すなわち、昭和41年度に書写教育研究会として、連合教育研究会の確立にともない仲間入りをしたわけで、上記文章中の「書連」とは、埼玉県書道書写教育連盟のことであり、書写教育研究会発足以前から、埼玉県の書道・書写教育に関しては、この書道書写教育連盟を中心となって活動を進めてきたことがうかがえる。

この埼玉県書道書写教育連盟のあゆみについて簡単にふれてみると、第25回全日本書写書道教育研究会埼玉大会の研究集録に次のように述べられている。

埼玉県では小・中・高における現場ではいちはやく意のある者が立ちあがり、特に、毛筆による文字表現の教育に力を注ぐべく組織作りをし、「埼玉県書道書写教育連盟」を結成したのである。そして、昭年22年4月1日付をもって「埼玉県書道書写教育連盟規約が発効したのである。規約の第2条では「書写ならび書道教育の振興発展を図る」と目的を唱えている。とにもかくにも教育現場の一隅にでも確たる書写書道教育の場を再現したいものであるという気迫は隠しきれなかったようである。

昭和41年に発足した埼玉県書写教育研究会の性格については、初代会長の長岡佳治先生（昭和41～43）が昭和42年度の研究集録（5号）の巻頭のあいさつで次のように述べています。

今回から研究集録は書写教育研究会で編集することになりました。現場の皆さんのが貴い体験、熱心に研究された貴重な成果が収められていますので、小中学校の書写教育の進展に大いに貢献することと存じます。

特に本年度は小学校教育課程改善の中間発表があり、20年来の吾々の宿願であった「毛筆の書写必修」がとりあげられました。まことに輝かしい年であります。これで小中学校とも書写は必修となり、小中書写教育の系統ある学習内容も計画的に考究され、書写教育の進展が大いに期待できると思われます。

この中間発表によれば、「書くことのうち毛筆を使用する書写の学習については、中学年からすべての児童に履習させること」とのこと。またその説明には、

(1)国語科教育の一環としての目標で指導すること、そしてその目標をさらに具体化して、(2)字形を正しく認識するために指導する。(3)文字に対する意識を深めるために、毛筆を使用する。(4)指導内容としては文字を正確に整えて書くように指導する。など、文字意識を養いさらに深めるといった事が、述べられています。又、その指導時数については、国語科の各学年の授業時数全体のうえから調和のとれたものであるようにすると記されています。

ここに毛筆の書写教育を考えますと、昔

の習字の復活であってはならないと深く考えさせられます。

現在の国語授業時数は、非常に少なく、その中から書写の授業時数を考えますので時間数も多くとれず、この少ない限られた時間内で効果を挙げなければならぬと思います。従って、硬、毛の関連をよく考究し、学習内容の精選、指導法の研究など、大いに努力、研さんしなければならないと痛感いたします。

つまり、書写教育研究会は、「国語科書写の中で、正しい文字指導はいかにあるべきか」ということを中心に考え、研究を重ねてきているわけである。

これ以後、会長は、配島新太郎先生（昭44～50）、高坂良助先生（昭51～52）、栗原肇先生（昭53）、新井好一先生（昭54～現在）と引きつがれています。

## 2 主たる活動とその特色

### ○研究発表会

研究発表には2通りある。一つは、毎年5月下旬に開催されるもので、内容は、小学校、中学校より各1名の発表者で研究発表を行うものである。

もう一つは、書写教育研究会委嘱地区による研究発表である。これも、公開授業を行う授業発表と研究集録への誌上発表の2通りがある。昭和40年代は、毎年のように授業発表が行われていたが、県教育局の指導を受け昭和53年度の行田地区（行田下忍小）を最後に授業発表はなくなり誌上発表となった。

### ○講演会

上記の研究発表会の時に、講演会が持たれていた。講師は、文部省、大学、書道書写教育連盟の方におもにお願いをした。

続木敏郎氏（元東京芸術大学教授、現在日本書道書写教育研究会副会長）には6度にわたり、以下のような演題で講演をしていただ

いた。

「書写（毛筆）の価値と系統的な指導方法について」（昭和41. 5. 20）

「小中学校新教育課程国語科（書写）について」（昭和42. 5. 26）

「だれにでもできる、だれにでもできなくてはならない毛筆指導」（昭44. 5. 27）

「効率を高める書写の学習指導」  
（昭和47. 2. 24）

「効率を高める書写書道の指導法」  
（昭48. 5. 30）

「書写書道教育の一貫性と指導内容の精選  
（愛される書写書道教育）」（昭50. 5. 17）

### ○研修会

小中学校の教員を対象とした書写実技研修会で、毎年、夏季休業中に開催される。

楷書、行書、仮名、条幅を2日間で履修するもので、会場、講師の関係で100名の定員で実施しているが、毎年希望者が多く、受講者の感想も良好である。

### ○展覧会

毎年6月下旬に開催される硬筆展覧会と1月下旬に開催される書きぞめ展覧会がある。これは、中央展覧会で、各地区ではこの前に地方展覧会を開催している。

硬筆・書きぞめ展覧会の趣旨は、「県下小・中・高等学校及び特殊教育諸学校の児童生徒の硬筆（書きぞめ）作品を募集し、各都市町ごとに地方展覧会を実施、その優秀作品を一會場に集めて中央展覧会を開催し、県内書写書道教育の振興を図る。」というもので、今年で、硬筆は第23回、書きぞめは第37回を迎えたという歴史のあるものである。

また、展覧会の参考手本は、県内の教職員から募集し、その中から選定している。

## 3 運営上の問題点

書写教育研究会のあゆみが、書道書写教育連盟の基盤の上に成立してきたものであり、書写教育研究会の活動が書道書写教育連盟の活動と

重複することが多いのが現状である。

したがって、書写教育研究会としての独自の活動をこれからどのように展開していくことができるのかが最大の問題であるといえる。

#### 4 昭和59年度の研究活動

##### ○研究発表会の概要

###### (1)小・中・高書写書道教育研究会

○期日 昭和59年5月25日

○会場 川越市立川越小学校

○研究主題 「文字意識を高め、表現力を育てる書写書道教育」

○研究発表者と発表テーマ

① 大宮市立桜木小学校 斎藤悦子

「名前の実態と指導の手立て」

② 鶴ヶ島町立栄小学校 内野郁子

「低学年における字形指導」

○講演

・演題 「用筆について」

・講師 東京学芸大学教授 中村直之

###### (2)第25回全日本書写書道教育研究会

埼玉大会

○期日 昭和59年8月22日、23日、24日

○会場 川越市立川越第一小学校 川越市立川越小学校 川越市立初雁中学校

埼玉県立川越高等学校 川越平安閣 川越市民会館 川越氷川会館

大会主題 「文字意識を高め表現力を育てる書写書道教育」

・小学校テーマ

「文字意識を高め基礎能力を養う書写指導」

・中学校テーマ

「文字表現力を高める書写指導」

○公開授業

小1(硬)川越市立川越第一 小阿泉多恵子

小1(硬)川越市立川越小 小林 紀子

小2(硬)川越市立川越小 鈴木 友子

小3(毛)川越市立川越小 藤山麻里子

小3(毛)川越市立大塚小 岩上 清

小3(毛)川越市立川越第一小 小室 秀子

小4(毛)川越市立月越小 関根みどり

小4(毛)川越市立仙波小 江原 幸江

小4(毛)川越市立川越小 桜井 保江

小5(毛)川越市立川越小 新井美智子

小5(毛)川越市立川越第一小 奈良 燐夫

小6(毛)川越市立川越第一小 松村 美恵

小6(毛)川越市立川越第一小 長島 法子

小6(毛)川越市立川越小 石田 幸子

特殊(毛)川越市立川越小 二上 圭子

松本 英雄

中1(硬)川越市立霞ヶ関中 益田 達

中1(毛)川越市立南古谷中 山口 幾子

中1(毛)川越市立名細中 石井 茂

##### ○分科会提言

「文字意識を高め書く喜びを得させる書

写指導」 行田市立中央小 横田知子

「文字意識を高め、文字を正しく整えて書くにはどう指導したらよいか」

春日部市立大畑小 稲見修央

「書写指導の効率化——転移性を重視した書写指導——」

新座市立栗原小 三好 節

「中学書写『行書』指導の課題」

狭山市立狭山東中 鶴 憲次郎

##### ○講演

・演題 「政治の現状と課題」

・講師 NHK解説委員 岡村 和夫

##### ○研修会の概要

###### (1)書写教育実技研修会

○期日 昭和59年8月9、10日

○会場 浦和市立南浦和小学校

○参加人数 100名

###### ○研修内容及び講師

・楷書 前書教連会長 佐藤 五郎

・行書 高萩中学校長 新井 好一

・仮名 元大宮高校 荒井 勇

・条幅 埼玉大学講師 市川 芳雄

○展覧会の概要

(1)第23回硬筆展覧会中央展

○期日 昭和59年6月30日 7月1日 2日

○会場 羽生市立羽生北小学校

○出品点数

・推薦賞	小学校	346点
	中学校	161点
・特選賞	小学校	1037点
	中学校	483点
・優良賞	小学校	2074点
	中学校	966点
	合計	5067点

(2)第37回書きぞめ展覧会中央展

○期日 昭和60年1月26日、27日、28日

○会場 所沢市

○出品点数

・推薦賞	小学校	172点
	中学校	80点
・特選賞	小学校	515点
	中学校	240点
・優良賞	小学校	1031点
	中学校	480点
	合計	2518点

(3)昭和60年教職員書道展覧会

○期日 昭和60年1月26日、27日、28日

○会場 所沢市

○出品点数 75点

国語教育研究会との連携を十分にとりながら、正しい文字指導について研究を進めていくことが大切である。

(2)中学校での書写教育

中学校における書写教育のあり方において、国語科書写であることから、当然、国語担当の教師が書写の授業を担当するのが本来的なあり方である。

しかし、実際の場では、職員の担当時間の平均化の道具にされている現状も見られる。これでは、小中の一貫した書写能力の伸長を期待することはできないと言える。

さらに、国語科書写から高校の芸術科書道へ移行する過渡的位置にあることをしっかりとおさえる必要がある。

(3)授業研究会

書写教育に限らず、教育研究の大切な柱に授業研究がある。書写教育研究会でも、昭和40年代には、毎年のように授業研究会が持たれ多くの授業公開があり、活発な研究討議がなされていた。

しかし、最近の委嘱地区の研究発表は、授業発表ではなく、誌上発表になっている。今後は、書写教育の現場では、授業研究を通じた実際的な研究を進めていく必要がある。

## 6 今後の課題

(1)国語教育研究会との連携

書写教育のねらいは、文字を正しく整えて書き、日常の生活や学習に役立てていくことにある。そして、これは国語科の中で指導するよう位置付けられている。

すなわち、国語科における書写指導であり、書写教育を実践していく場合に、国語教育をぬきにしては考えられないわけである。しかしながら、国語教育研究会との連携はとられていないので現実である。したがって、今後、

# 埼玉県社会科教育研究会

## 1 埼玉県社会科教育の動向と研究会の歩み

### (1)昭和20年代の歩み

昭和22年は、六・三制による教育改革が進められた年である。社会科の授業は、この年の9月から、まったく新しい教科として誕生した。当時、社会科は、戦後の教育改革、新しい教育実践の先駆として脚光をあびていた。「川口市新教育研究会」に統いて、昭和23年には、大宮、坂戸、狭山、深谷、寄居、妻沼、江南、昭和24年には、飯能、名栗、日高、昭和25年に熊谷、庄和と地域の社会科研究会の結成が行われ、研究委嘱校の研究推進活動と相俟って本県社会科の歩みは進んだ。

このような状況下にあって、各地域に結成されてきた研究会を全県的にまとめる「埼玉県社会科研究会連合会」(初代会長、村本精一氏・川口市立西中学校)が昭和24年11月に発足した。そして、昭和27年には、第1回研究発表会(小・中・高・大貫の研究会)が開催され、研究活動の充実していく様子を見ることができる。

また、のちの埼玉県地域研究会に発展する地理学会(昭和23年)地方史研究会(昭和27年)考古学会(昭和29年)も20年代に発足している。

### (2)昭和30年代の歩み

昭和30年代は、昭和26年ごろから振興がうたわれていた道徳教育の強化をはじめ、基礎学力の向上や科学技術教育の向上が叫ばれ、道徳教育についての社会科の担うべき役割の明確化、指導内容の精選と整理、発展的効果的な学習の工夫、日本の地理や歴史などについての基礎的理解の深長を図ることなどが強く要請された。同時に、中学校社会科の分野制がいっそう確かなものとなつた。

このような中央の動きに対応して、本県社会

科教育も広範かつ活発な研究・実践が展開された。県では第2回目の「埼玉県基準教育課程」の編集や、「教育課程研究協議会」を開催し、指導要領改訂の趣旨の普及徹底を図った。

地域や郷土に立脚した学習が、研究・実践対象として大きく取り上げられるようになったのも、30年代になってからである。中学校では、地理的分野の郷土学習の展開や、郷土史に眼をむけた研究が取り上げられた。また、小学校社会科でも、地域や学校の実態に応じた郷土学習のための副読本の編集が、先進的な市町村でなされるようになってきた。

本研究会は、このような中央や県の動向を十分に受けて様々な実践を行っている。

研究発表大会では「基礎学力の諸問題——第3回」、「社会科における道徳教育——第4回」、「道徳教育の考え方——第6回」などを掲げ、指導要領の普及徹底の一翼を担っている。また、昭和31年には会報第1号が発行され、昭和34年には現地研修会が行われるなど、事業の内容も多彩になっている。さらに、昭和38年には、埼玉県連合教育研究会の傘下となるとともに、全国小学校社会科研究協議会が結成されると同時に、これに加入するなど幅広い活動が行われるようになった。

### (3)昭和40年代の歩み

昭和40年代には、「基本的事項の精選」が強く叫ばれ、これが研究のテーマとして取り上げられ、すぐれた実践が報告された。また、小学校では、「能力の育成」が強調されるようになり、思考力、観察力、資料を活用する能力を育成する研究がさかんに行われるようになった。

昭和40年代になって、教科の特質上社会科教育に大きな期待がかけられ、真摯な研究と実践

が進められたものに、同和教育と公害教育がある。いずれも基本的人権の尊重にかかわる問題であり、学校や地域ぐるみの研究が進められたり、副読本や手引き書の発行が行われたりした。

小学校3、4年の郷土学習や中学校の地理的分野における身近な地域の学習については、その取り扱いについての研究論文が相ついで発表された。また、市町村の社会科研究会では、郷土資料の教材化の研究や3年生の副読本づくりがさかんになってきた。

このような動向に応えて、本研究会では、昭和42年に「第1回郷土学習研修会」を実施した。また、昭和45年には、「第1回基礎学力調査」を実施して、社会科に於ける基礎学力の調査研究を進めた。

昭和46年には会の名称を「埼玉県社会科研究会」と改め、昭和47年には、これまで小、中、高、大一貫の研究発表会を、小、中のみとし、

「第1回埼玉県社会科教育研究発表大会」が開催された。さらに、昭和48年からは、県内を東西南北の4ブロックとし、それぞれに副会長をおくなど、様々な改革が行われた。

#### (4)昭和50年代

昭和50年代に入り、文部省は教育課程の基準を改善し、学習指導要領の改訂を行い、小学校では昭和55年度から、中学校では56年度から完全実施の運びとなった。

この改訂学習指導要領に基づき、県ではとくに新教育課程に強調されている各学校の創意工夫を援助する考え方から、従来の「埼玉県基準教育課程」を「教育課程編成要領」と改め、各学校における教育課程の編成に有効な資料を提供了した。

また、特に学習指導要領の改訂が著しい小学校3、4年の地域学習に当って欠くことのできない副読本は、県段階、市町村段階においてそれぞれ精力的な編集活動が行われた。さらに、低学年の合科指導が取り上げられ、この研究に着手する学校が見受けられたことや、テレビ埼

玉の開局に伴って、特に中学年の社会科学習に放送番組が活用されるようになってきた。

このような50年代の動向の中で、本研究会では、学習指導要領の改訂に先んじて、昭和50年度以降「わかりやすい社会科学習」、昭和53年度からは「わかる授業、楽しい学習」を研究主題として設定し、昭和50年度から実施したブロック別授業研究会」や「研究発表大会」を開催してきた。ここでは、多くのすぐれた研究授業や実践例が提示されている。

また、本会は昭和54年度をもって発足30周年を迎えたことを記念し、同年11月に岩槻市福祉会館において研究発表大会、記念講演会を開催するとともに、社会科発足後32年間にわたる「埼玉県社会科教育の歩み」を編集刊行した。さらに、これまでの会報の編集方針を研究誌的色彩を強く打ち出すよう改め、その名称も「会誌」として第一号を刊行した。

現在、本研究会は昭和55年度に「埼玉県社会科教育研究会」とした名称のもとに、「学ぶ力を育てる社会科学習——昭和59年度」を設定して、各種事業を企画、実践し、県下社会科教育の充実のために寄与すべく活動している。

## 2 主たる活動と事業

年 度	主 た る 活 動 と 事 業
24	○ 埼玉県社会科教育連合会設立される。 初代会長——村本 順一（川口西中長）
27	○ 第1回研究発表会（小、中、高大一貫の研究会。以後毎年開催され、第20回まで続く。）
29	○ 第2代会長に野上弥文（埼大附属中学校）氏が就任する。
31	○ 会報第1号発行、以後、毎年度発行。
38	○ 埼玉県連合教育研究会の傘下となる。 ○ 全国小学校社会科研究会協議会が結成され、本会も加入する。 ○ 第3代会長に村田孝之（川口青木北小長）氏が就任する。
39	○ 研究紀要第1集を発行。以後毎年発行される。
42	○ 第1回郷土学習研修会が熊谷市で開催される。小学校中学年担当教員を対象と

	した。以後毎年開催される。
44	○ 第4代会長に新井消寿（飯能第一小長）氏が就任する。
45	○ 第1回基礎学力調査を実施。（小・中希望校）
46	○ 会の名称が「埼玉県社会科研究会」となる。 ○ 第5代会長に福島正（柏壁小長）が就任する。
47	○ 第1回埼玉県社会科教育研究発表大会が開催される。（小、中のみとなる）
49	○ 第6代会長に田島尚（大宮南中長）が就任する
50	○ 研究主題を「わかりやすい社会科学習」とする。（50、51年度）
52	○ 研究主題を「わかりやすく楽しい社会科学習」とする。（52、53年度）
53	○ 第7代会長に長島均（浦和木崎小長）氏が就任する。 ○ 研究主題を「わかる授業・楽しい学習」とする。（58年度まで）
54	○ 第8回埼玉県社会科教育研究発表大会（会発足30周年記念大会）を開催する。 ——岩槻市——
54	○ 記念講演、福島正氏「本県における社会科教育実践の歩み」 ○ 「会誌」第1号発行（従来の「会報」と「研究紀要」を統合したもの）
55	○ 30周年記念事業の一環として埼玉県社会科教育の歩み」を編集・刊行する。 ○ 第8代会長に岩上 進（蕨第一中長）氏が就任する。
56	○ 第9代会長に橋栄一（浦和・原山中長）氏が就任する。
58	○ 第1回中学校地域学習研修会を開催する。
59	○ 研究主題を「学ぶ力を育てる社会科学習」とする。

### 3 特色ある活動

#### (1) 研究発表大会

○県内小・中学校社会科教育の実践研究の発表等を通して、社会科学習指導の改善について協議し、関係教員の資質の向上を図るものである。研究発表は小・中別分科会で行い、全体会では例年講演会を実施している。

#### (2) 地域学習研修会（小学校）

○自分たちが住む市、町、村や県が学習の対象となる小学校第3、4学年社会科を指導するのに必要な基礎的内容について研修会を開いている。

#### (3) 地域学習研修会（中学校）

○中学校で社会科を担当している教員を対象（募集人員約100名）に、中学校社会科における身近で具体的な地域教材の内容及びその扱い方についての研修会を開いている。

#### (4) ブロック別授業研究会

○県内を4ブロックに分け、各ブロックごとに授業研究会を実施し、実際の授業を通して、社会科教育における指導法と指導内容の研究を深めようとするものである。

#### (5) 基礎学力調査

○児童・生徒の基礎学力の実態を調査し、社会科指導の改善・推進の資料とするものであり、県下採用希望校で実施している。（一部50円——教師用、要・準要保護児童分は無償）

#### (6) 研究委嘱校

○研究テーマにそった研究を委嘱するものと、水に関する研究（水の週間実行委員会委嘱）の協力校に委嘱するものがある。

#### (7) 刊行物

○毎年会誌（各学校と関係諸機関に配布）と、基礎学力調査結果報告書（採用校と関係諸機関に配布）を刊行している。会誌は希望者に分ける用意もある。（実費負担）

### 4 運営に当っての問題点

本研究会では、県内を4つのブロックに分けて、研究・研修の充実及び、諸連絡の徹底を図ろうとしている。しかし、各ブロック毎の組織の確立が不十分であるため、その目的を十分に達成できないことが多い。

## 5 昭和59年度の研究活動

### (1)研究発表大会

昭和60年1月18日(金)——熊谷市

### (2)地域学習研修会

○小学校・昭和59年8月22・23・24日——

県立博物館、水の施設見学(24日)

○中学校・昭和59年8月20日——県立文書館

### (3)ブロック別授業研究会(59年9月現在)

○東部——杉戸第二小、春日部豊春小

○西部——吉見東第二小、上福岡第三小

上福岡第二中

○南部——大宮小、戸田篠目中

○北部——未定

### (4)第15回基礎学力調査(一学期実施済み)

### (5)研究委嘱

○狭山・御狩場小学校

○浦和・常盤小学校(水の研究協力校)

昭和60年2月1日発表

○戸田・戸田市中学校社会科研究会(水の研究)

(6)刊行物——会誌・基礎学力結果報告書

## 6 今後の課題

本研究会では昭和62年度に関東地区社会科研究大会(小・中関プロ・埼玉大会)の開催を予定している。この大会を成功させることができ。本研究会の大きな発展につながるものと考えている。大会を成功させるための当面の課題は、現在の会の組織をさらに充実させること及び、研究の内容と方法を深めていくことである。

# 算数・数学教育研究会

## 1 埼玉県算数数学教育研究会の発足

昭和41年度に、第21回関東都県数学研究大会を本県に迎えた。この研究大会の推進母体となった埼玉県数学教育会は、昭和43年5月輝しい20年の業績を残してその活躍に終止符をうった。引き続き、この業績を継承すべく発足したのが現在の埼玉県算数数学教育研究会である。なお本研究会は、小学校部会、中学校部会の二部会により組織されている。

## 2 小学校部会の活動と事業

本部会では、発足以来、次の事業を計画し実施してきている。

### (1)算数教育夏期研修会

(2)算数教育研究協議会(各教育事務所単位県下9地区)——県との共催による——

### (3)算数教育研究発表大会

### (4)算数教育研究協議会用テキストの作成

### (5)研究集録の作成

### (6)理事会及び理事研修会

### (7)研究委嘱校の発表

また、昭和58年8月4日から6日までの3日間、研究主題「新しい算数・数学教育の実践と将来への展望(真実感と充実感を味わわせる指導)」のもと、日本数学教育学会第65回総会及び全国数学教育研究(埼玉)大会が開催された。大宮市、蕨市を中心約3500名の参加をみた。小学校部会は、大宮市立大宮小学校を会場として、熱心な研究協議がなされた。

これらの活動、特に(4)(7)について概括することとする。

### ○算数教育研究協議会用テキスト

第1集から第17集までの主題を掲げ、テキスト編集17年間の歩みを概観する。

昭和43年度

第1集「現代化のための数学」

昭和44年度

第2集「算数教育現代化とその指導」

昭和45年度

第3集「算数教育現代化とその指導方法」

昭和46年度

第4集「算数教育現代化の方法と実践」	11月18日 本庄東小
昭和47年度	テーマ「発見的・創造的な学習指導」
第5集「算数教育現代化の指導と実践」	昭和49年度
昭和48年度	2月13日 鴻巣市立鴻巣東小
第6集「算数科における学習指導法の現代化」	テーマ「数学的な考え方を伸ばす学習指導 —集合の考え方を生かして—」
昭和49年度	昭和50年度
第7集「現代化における学習指導の実際」	10月28日 蓼田市立黒浜小
昭和50年度	テーマ「日常の事象を数理的にとらえる能 力や態度の育成」
第8集「学習指導の現代化の方法と強調 点」	昭和52年度
昭和51年度	6月29日 行田市立西小
第9集「学習指導法の改善—既習事項の活 用一」	テーマ「数理を創る楽しさを追求させる学 習指導」
昭和52年度	昭和53年度
第10集「新しい学習指導のあり方」	11月10日 大宮市立大砂土東小
昭和53年度	テーマ「算数教材のもつ意味とつながりの 追求—学び方学習をめざして—」
第11集「基礎的・基本的な内容を重視した 学習指導」	昭和54年度
昭和54年度	6月28日 飯能市立加治小
第12集「個性や能力に応じた学習指導」	テーマ「わかる喜びをもつ算数の学習」
昭和55年度	昭和55年度
第13集「個性や能力に応じた学習指導の展 開」	12月3日 吹上町立小谷小
昭和56年度	テーマ「ひとりひとりの能力を高める算数 指導—評価を生かした数と計算の指 導—」
第14集「充実した学習指導をめざして—指 導法の改善一」	昭和57年度
昭和57年度	6月25日 羽生市立川俣小
第15集「充実した学習指導の展開をめざし て」	テーマ「自ら考え、課題解決のできる子を 育てる算数指導」
昭和58年度	12月7日 深谷市立藤沢小
第16集「楽しさを味わわせる学習指導」	テーマ「すじ道を立てて考え、主体的に学 習する児童の育成」
昭和59年度	3 中学校部会の活動と事業
第17集「楽しさを味わわせる学習指導の展 開」	本部会発足以来、主に次のような事業を計画 し、毎年実施してきた。
第10集まで、算数教育現代化研修用テキス ト、第11集より、算数教育研究協議用テキス トと名称が変わる。	(1) 数学教育研究発表会
○研究委嘱校の発表及びテーマ	(2) 数学教育研究協議会（県との共催）とそ のためのテキスト作成
昭和46年度	(3) 研究委嘱校の発表会

- (4) 県基礎学力テストの問題作成とその実施  
 (5) 理事研修会  
 (6) 会の研究活動等のまとめを中心とした、  
     数学教育会誌の編集、発行  
 これらの活動の概要を、それぞれの事業につ  
 いて年度ごとに述べる。
- (1) 数学教育研究発表会
- 昭和39年度 5月28日於春日部女子高  
 ・研究発表「数量関係の指導上の問題点」  
     大宮東中 奥山和夫  
 ・講演 「貿易の自由化と日本の工業」  
     埼大教授 武井 武
- 昭和40年度 5月24日於：川越女子高  
 ・研究発表「一元一次方程式の指導」  
     松山中 森屋勝由  
 ・講演 「函数と関数について」  
     東工大教授 矢野健太郎
- 昭和41年度 5月26日 於：熊谷女子高  
 ・研究発表「図形教材の関数的取扱いについ  
     て」  
     熊谷富士見中 須賀 実  
 ・講演 「日本の風土について」  
     気象研究所長 荒川秀俊
- 昭和42年度 5月18日 於：大宮高校  
 ・研究発表「図形における関数的な見方・考  
     え方」  
     大宮東中 角田 樹  
 ・講演 「論理の指導について」  
     埼大教授 伊藤 武
- 昭和43年度 5月20日 於：春日部高校  
 ・研究発表「教育課程埼玉試案について」  
     埼大附属中 河井 徹
- 昭和45年度 6月10日  
 ・研究発表「連立方程式の指導」  
     大宮植竹中 静井真治  
 ・講演 「月の岩石」  
     埼大教授 関陽太郎
- 昭和46年度 6月3日 於：熊谷富士見中  
 ・研究発表「集合論理の指導」  
     熊谷富士見中 玉国守広
- ・講演 「数学教育とコンピューター」  
     埼大教授 久保応助  
 昭和47年度 6月13日 於：久喜中  
 ・研究発表「位相的な見方考え方の指導」  
     蓮田平野中 田村俊一  
 ・講演 「アメリカの教育工学」  
     埼大教授 中村次郎
- 昭和48年度 6月12日 於：松山中  
 ・研究発表「論理の指導について」  
     東松山松山中 新井啓久  
 ・講演 「郷土の歴史について」  
     埼大教授 小野文雄
- 昭和49年度 6月5日 於：与野市役所  
 ・研究発表「位相指導について」  
     草加中 速水孝悦  
 ・講演 「白根県令と明治初期の埼玉の教  
     育」  
     郷土史家 堤塚一三郎  
 2月18日 於：県立教育センター  
 ・研究発表 12編
- 昭和50年度 6月25日 於：熊谷東小  
 ・研究発表「事象を数理化する能力と態度の  
     指導」  
     熊谷富士見中 玉国守広  
 ・講演 「自然科学における探究のための  
     科学の方法」  
     埼大教授 金山廣吉  
 2月18日 於：県立教育センター  
 ・研究発表 10編
- ・講演 「今後の数学教育の方向」  
     埼大助教授 町田彰一郎
- 昭和51年度 5月25日 於：久喜中  
 ・研究発表「演算の指導について」  
     久喜中 成田 瑛  
 ・講演 「これからの数学教育」  
     文部省視学官 沢田和佐  
 2月18日 於：県立教育センター  
 ・研究発表 10編
- ・講演 「指導過程における評価について」  
     教育大教授 和田義信

昭和52年度 6月21日 於：川越第一中

- ・研究発表「計算力を高めるための指導」

毛呂山川角中 内野隆好

- ・講演 「人の染色体と遺伝」

埼大教授 須甲鉄也

2月17日 於：県立教育センター

- ・研究発表 8編

- ・講演 「数学教育への提案」

埼大教授 町田彰一郎

昭和53年度 6月9日 於：常盤公民館

- ・研究発表「学力の実態について」

浦和大谷場中 大前雄一郎

- ・講演 「数学と物理の間」

埼大教授 小暮陽三

2月9日 於：県教育センター

- ・研究発表 8編

- ・講演 埼大教授 梅沢敏夫

昭和54年度 6月22日 於：鴻巣中

- ・研究発表「図形指導における基礎的理論」

川越第一中 岡部巖

- ・講演 「稻荷山古墳と辛亥銘鉄劍」

県立博物館・学芸部長 大村進

2月19日 於：ときわ会館

- ・研究発表 8編・講演 埼大教授菊池矢一

昭和55年度 6月17日 於：杉戸中

- ・研究発表「柔軟な見方・考え方を育てる」

杉戸中 奥原正美

- ・講演 「記号としての文学」

埼大教授 日沼滉治

2月24日 於：県立教育センター

- ・研究発表 8編

- ・講演 埼大教授 菊池兵一

昭和56年度 6月19日

於：東松山中央公民館

- ・講演 「学習指導改善の諸観点」

埼大助教授 仲田紀夫

2月24日 於：県立教育センター

- ・研究発表 14編

- ・講演 埼大助教授 仲田紀夫

昭和57年度 2月23日

於：県立教育センター

- ・研究発表 14編

- ・講演 「数学教育における真実感と充実感」  
埼大助教授 菊池兵一

昭和58年度 2月22日

於：県立教育センター

- ・研究発表 14編

- ・講演 「数学からみた数学教育」  
埼大教育学部長 木村信夫

### (2) 数学教育研究協議会のためのテキスト作成

本テキストは昭和45年第1集を発行して以来毎年1集ずつ刊行し、本年は第15集を数える。毎年異なるテーマのもとに、50名を越える編集者、執筆者により慎重な審議、検討を経て作成されている。本年度のテーマは「評価を生かした学習指導」である。

### (3) 研究委嘱校の発表会

毎年1校、原則として2年継続の研究委嘱を行い、中間発表と本発表の機会を設けている。過去10年間の研究委嘱校は次の通りである。

- ・50年 秩父荒川中「意欲的に取り組ませる」
- ・51年 川越第一中「わかる喜びをもつ指導」
- ・52年 幸手中「自ら学ぶ態度を育てる指導」
- ・53年 草加谷塚中「ひとり学びのできる…」
- ・54年 寄居中「ゆとりある充実した数学指導」
- ・55年 毛呂山川角中

「一人ひとりの個性、能力」

- ・56年 杉戸中「充実感を味わうことのできる」
- ・58年 川口上青木中

「数学の楽しさを見つける」

- ・59年 大利根中「未定」

### 4 昭和59年度の主な事業計画

(小学校部会)

8月 算数教育夏季研修会

10月～11月 算数教育研究協議会

11月 研究委嘱校発表 川口市立並木小

テーマ「意欲的に課題に取り組み、数学的な考え方を伸ばす指導法」

2月 算数教育研究発表大会

(中学校部会)

10月 数学教育研修会  
10月～11月 数学教育研究協議会  
未定 研究委嘱校発表 川口市立上青木中  
　　テーマ「数学の楽しさを自ら見つけ出  
　　させる学習指導」  
2月 数学教育研究発表大会

なお、第66回日教福井大会（8月4日～8月6日）第39回関プロ長野大会（10月12日13日）へは、本研究会より多数参加する予定である。

最後に、日頃本研究会のためご指導いただいている方々に心から感謝の意を表します。

## 理科教育研究会

### I 会のあゆみ

(1) 会の前進、埼玉県科学教育振興会の発足  
昭和21年、文部省の中に科学教育局が誕生した。そして、小学校・中学校の科学教育が重視され、理科担当者の資質の向上のための機構が整備されつつあった。

このような情勢の中にあって、埼玉県理科教育研究会の前進であった「埼玉県科学教育振興会が発足した。

昭和22年10月10日

埼玉県小・中・高校理科担当者をもって科学教育振興会を創設する準備会を、常盤小学校（浦和市）で開いた。

〔準備委員〕 荒井富之（常盤小長） 松本与三郎（浦和市） 小池喜雄（本庄高） 渋谷宣二（附属中） 松原 勝（浦和高） 河辺源之助（浦和・谷田小） 田中嘉平（大宮二中） 栗原貞雄（川越一中） 新井一郎（越生小）

昭和22年10月22日

都市代表によって規約の審議

昭和22年10月27日

埼玉県教育会理事会において、科学教育振興会の規約を審議、承認される。

昭和23年2月9日

埼玉県科学教育振興会、創立総会

〔会場〕 埼玉師範学校附属小学校講堂

〔会長〕 松原 勝 〔副会長〕 小沢国平 荒井富之

〔幹事〕 栗原貞雄 渋谷宣二

〔会則〕 (例) 第4条 (本会の目的)

- ① 科学教育振興に関する企画及び協力体制の協議。
- ② 会員相互の研究発表、指導法の研究。
- ③ 見学視察実験実習採集調査等。
- ④ 講習会・展示会等の開講。
- ⑤ その他必要な事業。

昭和23年以降の本科学教育振興会の主な事業

- 科学技術講習会（実技、講演）
- 理科教育研究校の指定と発表
- 科学教育振興展览会（昭和25年11月より）
- 科学スライドの製作「山の科学」全五巻 「三原山火山」「鶯の生態」
- 三原山火山巡検 ○ 海洋講習会など。

(2) 埼玉県理科教育研究会

本会が現在の名称になったのは、昭和42年4月のことである。

昭和42年4月28日

埼玉県科学教育振興会を改組して、埼玉県理科教育研究会を発足させるための準備会を開き、規約の検討、会の組織化、会の運営について協議した。

（42年度 埼連研「研究集録」より）

埼玉県科学教育振興会を改組したのは、次の事由による。

科学教育振興会は、大学・高校・中学校・小学校の教員で組織されていて、当時も会の活動としては、むしろ、今で言う小・中・高・大学

の一貫した教育研究や交流がスムーズに行われていた。

しかし、補助金の対象が、大学・高校・義務教育学校（小・中）に三分されることになって、各種の研究団体との関連が問題になり上述の手

続きで発展的に現在の埼玉県理科教育研究会となつたのである。

本会が現在行っている科学教育振興会をはじめ、諸事業が高校や大学と共に開催することが多いのも、この経緯を物語っている。

## 2 主たる活動と事業

### (1) 科学展・研究発表会（教員・児童生徒）・学力調査（中学校）の実績と開催地区予定表

年度	会員名	科学展(中央展)会場	教員発表会場	児童生徒発表会場	学力調査
42年	渋谷 宜二	本庄・本庄西中	本庄・本庄東中	本庄・本庄東中	
43年	"	川越・第一中	県立教育センター	埼大・附属小	
44年	"	東松山・第一中	" (浦和支部)	熊谷東小・富士見中	第1回
45年	"	秩父・野上中	"	川越小・川越一小	2
46年	小林 太郎	久喜・久喜中	"	東松山・新明小	3
47年	"	羽生・羽生中	"	上里・上里小	4
48年	台 知道	熊谷・東小	"	行田市中央公民館	5
49年	"	所沢・所沢小	久喜・太田小	埼大・附属中	6
50年	松岡 雄	本庄・本庄西小	県立教育センター	県立秩父農工高	秩父支部
51年	"	大宮・大宮小	川越・川越第一小	春日部・柏崎小	比企 "
52年	"	東松山・松山第一小	県立教育センター	深谷・深谷小	児玉 "
53年	"	秩父宮記念市民会館	蕨市立中央公民館	狭山労働センター	埼葛 "
54年	村田 茂雄	春日部・上沖小	県立秩父農工高	本庄・本庄西小	川口 "
55年	"	羽生・羽生南小	春日部・大畑小	与野・大戸小	大里 "
56年	"	熊谷・石原小	羽生・西中	東松山中央公民館	北埼 "
57年	小野田舜司	毛呂山・毛呂山小	鴻巣・鴻巣中	県立秩父農工高	比企 "
58年	"	本庄・中央小	熊谷福祉センター	鶴宮・鶴宮東中	北足立北
59年	"	蕨・蕨東小 (比企支部)	(入間支部) (児玉支部)	(北埼支部) (大里支部)	入間支部 (秩父)
60年			(北足立南支部)	(入間支部)	(児玉)
61年					

### (2) 研究委嘱校発表会・講演会刊行物等

#### 42年度

- 委嘱校発表会 久喜・江面第一小学校  
久喜・江面第二小学校

- 講演会 秋葉鎌太郎氏（東大宇宙研）  
「日本のロケットと人工衛星」

- 講習会（教育センター研修行事と共に）

- ①生物臨海実習（真鶴）
- ②植物現地研修（県内各地）
- ③動物現地研修（秩父）

#### ④地学現地研修（秩父）

- 表彰 埼玉理科教育賞（第2回）
- 刊行物 「教員の部理科研究発表集録」  
「児童生徒の部理科研究発表集録」

#### 43年度

- ※前年度と同じ継続事業は省略。
- 発表会 鴻巣・馬室小学校  
「理解過程に即した学習指導法の研究」  
所沢・山口中学校  
「実験観察の基礎操作における基本的

### 事項の指導

- 講演会 霧田光一氏（東京大学教授）  
「エレクトロニクスの進歩と理科教育」
- 刊行物 「会報」第1号発行  
(児童生徒の部研究表集録の刊行中止)
- 研究調査
  - ・小学校理科ノートの研究
  - ・中学校理科学力テストの研究

### 44年度

- 発表会 北埼玉・南河原小学校  
「物の見方・考え方を育てる理科指導」  
浦和・上木崎小学校  
「子どものわかり方とわからせ方」  
北埼玉・大利根中学校  
「わかる理科学習はどうあるべきか」
- 講演会 小林 茂氏（ソニー常務）  
「創造性の開発について」
- 会報（第2号）  
この号より、5回にわたって、松原勝氏（当時・武南高校長）が「埼玉県理科学教育研究会沿革史」を連載。
- 刊行物
  - ・中学校理科学力テスト結果の分析
  - ・小学校改訂指導要領による指導事例集  
(44年・低学年、45年・中、46年・高)

### 45年度

- 発表会 熊谷・熊谷東小学校  
「新教材の取り扱いと単元構成」
- 講演会 金山広吉氏（埼玉大学教授）  
「理科学教育現代化の動向」(総会にて)  
和達清夫氏（埼玉大学学長）  
「公害問題について」

### 46年度

- 発表会 北埼玉・北川辺東小学校  
「新しい内容の効果的な指導について」  
狭山・狭山東中学校  
「効果的な実験指導はどのようにした  
らよいか」  
久喜・久喜中学校  
「科学の方法を身につける理科授業」

### 岩槻・岩槻中学校

- 「科学の方法を重視した理科指導」
- 講演会 小暮陽三氏（埼玉大学助教授）  
「理科学教育の現代化のために」  
村野賢哉氏（組織工学研究所）  
「現代社会と科学教育」
- 研究調査（県教委と共同事業、48年まで）  
・埼玉県の動物誌作成のための調査

### 47年度

- 研究大会  
第7回関東甲信越地区中学校理科学教育研  
究大会・埼玉大会（11月9～11日）  
主題「創造性の育成をめざす理科学教育」  
会場 大宮・植竹中学校  
浦和・岸中学校  
埼玉大・附属中学校
- 講演会 牛木弥太郎氏（埼玉大学教授）  
「現代理科教育上の諸問題について」  
竹内 均氏（東京大学教授）  
「大陸は移動する」
- 講習会  
(県立教育センターの事業へ)

### 48年度

- 発表会 入間・高萩小学校  
「主体的な実験・観察のさせ方」
- 講演会 新井重三氏（埼玉大学教授）  
「地学教材の指導上の問題点」  
(県立教育センターと共に開催した講演会は  
本年より中止)

### 49年度

- 研究大会  
日本初等理科学教育研究会・第14回全国大  
会・埼玉大会（11月5日～6日）  
主題「問題解決の深化」  
会場 浦和・高砂小学校  
大宮・大宮小学校  
久喜・久喜小学校
- 講演会 中村次郎氏（埼玉大学助教授）  
「理科学教育の今日的課題」

### 50年度

- 発表会 入間・越生中学校  
「科学の方法の習得と評価」
- 講演会 小川瑞穂氏（埼玉大学教授）  
「動物の行動とホルモン」
- 51年度**
- 講演会 永野 岩氏（埼玉大学教授）  
「森林の更新とその教材化」
- 52年度**
- 発表会 坂戸・城山小学校  
「意欲的に理科学習にとりくむ子」
- 講演会 荒野久男氏（埼玉大学教授）  
「染色体と植物の進化」
- 53年度**
- 発表会 春日部・春日部中学校  
「ゆとりと充実をめざす授業の実践化」
- 講演会 須甲鉄也氏（埼大・名眷教授）  
「埼玉県の動物相とその変遷」
- 刊行物 図説・小学校理科指導事例集  
(53年・I集、54年・II集、56年III集)
- 54年度**
- 発表会 大滝・上中尾小学校  
「感動をもって自然を探求する理科学習」
- 講演会 小暮陽三氏（埼玉大学教授）  
「理科教育と物理」
- 55年度**
- 発表会 鴻巣・鴻巣北中学校  
「理科を身近に感じさせるにはどうしたらよいか」
- 講演会 奥井智久氏（文部省教科調査官）  
「ゆとりのある充実した授業について」
- 「会報」を「研究集録」と改称。  
小学校と中学校の指導法委員会の研究成果を隔年に掲載する。
- 56年度**
- 発表会 越生・蒲生南小学校  
「子どもの発想を生かした学習指導」
- 講演会 近藤広光氏（埼玉大学教授）  
「バクテリアと磁気」
- 刊行物 「埼玉の理科ものがたり」
- 57年度**
- 講演会 矢島敏彦氏（埼玉大学教授）  
「関東平野周辺の山々」
- 埼玉県版・理科TP「自然のしくみ」作成——「流水のはたらき」「地層」
- 58年度**
- 発表会 草加・高砂小学校  
「児童自ら考え、意欲的に解決する力を育てる理科指導」
- 講演会 下沢 陸氏（埼玉大学教授）  
「日本と外国との理科教育の比較」
- 授業研究会（中学校） ※本年度より  
広島中（杉戸） 上大久保中（浦和）

### 3 昭和59年度の研究活動

- (1)理事研修会  
5/12、6/15、7/6、9/19、1/11、3/2
- (2)埼玉県科学教育振興展覧会(地区・中央展)  
中央展(蕨・東小学校、11月10日～12日)
- (3)教員・理科研究発表会 12月5日  
会場(入間・飯能第一小学校)
- (4)児童生徒・理科研究発表会 2月13日  
会場(北埼・行田中央公民館、行田市役所)
- (5)各種委員会
  - ①小学校・指導法委員会
  - ②中学校・指導法委員会(研究集録担当)
  - ③中学校・学力調査委員会
- (6)研究委嘱校・本発表 和光・第三小学校  
12月7日
- (7)授業研究会(中学校・2校)
- (8)講演会 「これからの理科教育」  
6月15日 蛯谷米司氏(福山大学教授)

# 音楽教育連盟研究会

## I 会のあゆみ

本連盟の創設は昭和25年4月1日に始まり歴代理事長は下記のとおりである。

- 初代 池田 浩 (昭25~31)
- 第2代 黒須明治 (昭32~33)
- 第3代 山田晴重 (昭34~37)
- 第4代 飯野政秋 (昭38~40)
- 第5代 高山敏一 (昭41~46)
- 第6代 湯橋孝夫 (昭47)
- 第7代 熊倉正利 (昭48~51)
- 第8代 峰尾良平 (昭52~53)
- 第9代 奥原精哉 (昭54)
- 第10代 関根二郎 (昭55)
- 第11代 小山 伸 (昭56~57)
- 第12代 吉田元治 (昭58)
- 第13代 茅 尚男 (昭59)

また、会報「音教連会報」は第1号が昭和39年度に初刊され、本年度は第21号におよんでいる。

関東音楽教育研究大会は第1回が昭和31年1月21日、神奈川大会・横須賀会場で始まり本県の会場は昭和35年度、第6回、秩父市会場、昭和46年度、第13回、大宮市大会、昭和53年度、第20回、熊谷市大会に続き、来年度(昭和60年11月8日)第27回を蒲和市で開催しようとしている。

## II 主たる活動と事業

本連盟当初の活動方針に次のような記録があるが、主たる活動と事業として、現在もなお、この精神が生かされているものが多い。

- (1) 組織の強化をよりはかり、各班における音楽研究・指導の活動を活発にして各校への浸透を期する。
- (2) 埼玉県基準教育課程(現在では、教育

課程編成要領、教育課程指導資料、学習達成度評価資料)等の実践活同につとめ各領域のバランスを考えた有機的な学習活動の展開につとめる。

- (3) 実技向上のため授業研究会、実技講習会、研修会等を開催し、音楽担当教員の資質の向上をはかる。
- (4) 歌唱音楽会、器楽音楽会の実施を積極的に行い、音楽教育水準の向上をはかる。
- (5) 研究成果、実態調査のまとめ等を刊行配布して広く活用をはかる。(主として会報に掲載する。)

## III 特色ある活動

上記の活動方針を受けて現在実施している主な活動を昭和58年度の行事からあげてみたい。

### 1 研究主題と方針

#### (1) 研究主題と方針

「豊かな音楽性を養い、音楽を愛好する心を育てよう」の主題をもとに、次のような副題を掲げ、研究の推進に努めている。

- 小学校低学年——リズムにのって楽しく学習しよう
- 小学校中学年——旋律の美しさを感じながら進んで学習しよう。
- 小学校高学年——和声の美しさを味わいながら進んで学習しよう。
- 中学校——豊かなひびきやまとまりの美しさを求めて意欲的に学習しよう。

#### (2) 研究主題のめざすもの

「基礎指導を充実しなければならない」

「児童・生徒の音楽愛好の心情を大切にしなければならない」「これまでのテーマをいっそう深めていきたい」などの声をもとに、標記の主題が設定された。音楽そのものが楽しめる授業であるならば、子どもは喜んで、意欲的に学習するし、そこから課題を追求する姿勢が生まれ、成功の喜びへつながり、音楽性の向上へと発展する。

例えば、楽器の演奏が上手になったと自覚できた時、楽譜をみて自分の力で旋律が歌えた時などの、喜びがあげられる。その喜びが自信となり、さらにまた意欲となって自ら音楽を求める心が育っていく。このような過程を経て、基礎能力は高まっていくと考えられる。そしてこのことは基礎指導の充実と一致すると考えている。

「音楽愛好心」と「音楽性の向上」とは深い関係にある。そのためには「より美しい音楽」を子どもに与えていくことや、子どもの音楽的な発達段階をしっかりとおさえて学習指導をすすめる必要がある。今後も本質に根ざした音楽教育のあり方を解明していきたい。

## 2 活動の状況

本連盟創立以来、恒常に実施しているものに次のような事例がある。(昭和58年度の例)

(1) 理事会 (於 埼玉大学附属小学校)  
5月18日、6月14日、9月16日、1月20日、年4回、内容は略す。

(2) 歌唱音楽会  
(北足立) 6月17日 埼玉県商工会館

○実施委員長  
田口 晃 (浦和・大谷場小)  
○指導者  
清水隆雄 (川越・高階中)  
中島静江 (熊谷・石原小)  
○概況及び協議内容

- ・参加校 小13校、中12校
- ・全般的に発表態度、鑑賞態度が良かった。
- ・発声・音程についてはひと工夫がほしい
- ・小学校中学年に輪唱を多くとり入れ、合唱の導入としたい
- ・中学生のアルトの発声について
- ・生徒の指揮と伴奏について

〈入間〉 6月24日 所沢市民会館

○実施委員長  
茗 尚男 (川越初雁中)  
○指導者  
熊谷高三 (入間教育事務所)  
強瀬洋一 (熊谷玉井小)

○概況及び協議内容  
・参加校 小14校 中12校  
・高音域と変声期の発声について  
・合唱指導のポイントについて

〈比企〉 7月1日 東松山文化会館

○実施委員長  
吉野武治 (東松山・唐子小)  
○指導者  
茗 尚男 (川越・初雁中)  
石井豊子 (秩父・原谷小)

○概況及び協議内容  
・参加校 小13校  
・参加学年がほとんど高学年であり低学年がほしかった。  
・曲のまとめ方の工夫について  
・指揮法について  
・中学生の女声の発声について

〈児玉〉 6月28日 本庄文化会館

○実施委員長  
中林喜典 (児玉・本泉小)  
○指導者  
清水昭雄 (児玉・教育委員会)  
小島好美 (八潮・八潮三中)  
江森啓三 (行田・長野中)  
○概況及び協議内容

- ・参加校 小8校 中5校
- ・ステージでの並べ方
- ・発声・発音・曲想表現の指導上の  
基本的視点
- ※ 秩父、大里、北埼、埼葛は略す
- (3) 器楽音楽会
  - 〈秩父〉 11月25日 秩父市民会館
    - 実施委員長 石井典子 (秩父・原谷小)
    - 指導者 田中誠一 (本庄・南小)  
菊池 忠 (志木・宗岡中)
    - 概況及び協議内容
      - ・参加校 小14校 中3校
      - ・楽器の特色を生かした演奏
      - ・打楽器の指導は低学年で徹底を
  - 〈大里〉 11月25日 妻沼公民館
    - 実施委員長 強瀬洋一 (熊谷・玉井中)
    - 指導者 田口 晃 (浦和・大谷場小)  
江田七男 (名栗少年自然の家)
    - 概況及び協議内容
      - ・参加校 小7校 中5校
      - ・打楽器、シンセサイザーの音量の  
バランス
      - ・指揮法の基本と応用について
  - 〈北埼玉〉 11月18日 行田文化会館
    - 実施委員長 関根章子 (羽生・新郷一小)
    - 指導者 梅沢重次 (浦和・道祖土小)  
石川初男 (与野・南中)
    - 概況及び協議内容
      - ・参加校 小12校 中9校
      - ・楽器の編成について
  - 〈埼葛〉
    - 実施委員長 奥原精哉 (幸手・東小)
    - 指導者
- 清水 和 (草加・花栗南小)  
坂本照子 (埼玉大学・付属中)
- 概況及び協議内容
  - ・参加校 小13校 中13校
  - ・曲のテンポのとり方に注意
  - ・リコーダーの奏法について
  - ・リズム楽器の指導法について
  - ※ 北足立、入間、比企、児玉は略す
- (4) 音楽会中央大会
  - 〈県南(歌唱)〉 11月29日 埼玉県商工会館
  - 〈県北(器楽)〉 11月30日 深谷市民文化会館
- (5) 夏期講習会
  - 上記音楽会と同じく、県下を8会場  
にわけて、その地区的実態に応じた技  
術、実技講習会を開催している。
- (6) 授業研究会
  - 研究委嘱校 大宮市立植水中学校
  - 授業者 同校教諭 中村和江
  - 研究主題 音楽を愛好する心情を  
育てる鑑賞指導

#### IV 運営にあたっての問題点

- (1) 上記「特色ある活動」の中での6月に  
実施する歌唱音楽会、11月に実施する器  
楽音楽会の会場について古くは各小中学  
校の体育館で実施してきたが、音響効果  
の点と各地にホールの新設がありそれを  
利用することになってきているが、会場  
を予定した日にとることが非常に困難で  
ある。
- (2) 同音楽会にかかる経費は、当該市町村  
主催のものであると無料か減免の処置が  
とられるが、主として教育事務所単位の  
音楽会であるので高価な使用料となり、  
経費の捻出に困難をきたしている。
- (3) 同音楽会の参加に対しても各校とも非  
常に積極的であるが、児童生徒の派遣、  
楽器の輸送にも問題点がある。

## V 昭和59年度の研究活動

本年度は昭和60年11月8日、第27回関東音楽教育研究会埼玉大会が浦和市内、小学校4会場、中学校2会場で開催されようとしている前年度である。この大会は開催地だけのものではなく、県下全体の音楽教育の水準の向上でなくてはならない。そこで次のような主題を掲げ本年度の研究活動としている。

### ◇研究主題

「音楽の美しさ楽しさを心から味わえる子どもを育てよう」

### ◇各学年目標

#### ○小学校低学年

リズムにのって楽しく活動する子どもを育てよう

#### ○小学校中学年

ふしの美しさを感じながら楽しく活動する子どもを育てよう

#### ○小学校高学年

ひびきの美しさを味わいながら、すんで活動する子どもを育てよう

#### ○中学校

音楽の美しさを求め、意欲的に活動する生徒を育てよう。

## VI 今後の課題

1 当面の問題としては前記の第27回関東音楽教育研究会埼玉大会に向って全組織をあ

げてこれを成功させることにある。そのためには、県下全域に研究主題及び各学年の目標を浸透させ、授業者だけでなく全音楽教員の理解と実践が必要であると思う。

2 昭和59～60年度は上記の目標をもって進みたいが、終了後の昭和61年度以降はこの大会を誠実に評価し、更に音楽科指導の発展、充実に期することが大きな課題となるであろう。

3 地区音楽会（6月に歌唱、11月に器楽）及び中央大会では、主題として「豊かな音楽性を養い音楽を愛好する心を育てよう」とあり、副題として“学級全員の喜びを高める歌唱(器楽)指導”となっているが、本県の特色として学級単位の出場ということは問題点もあるが、重視していかなければならないと思う。

4 授業研究会を東西南北、県下4地区に分けて実施しているが、これを続行実施していきたい。

5 夏期講習会を夏期休業中に県下8会場で実施しているが、会場ごとに非常に多くの参加を得ている。休業中でもあるので当該地区の参加に限らず、更にどの地区へでも参加できるという門戸をひろげた研修会にしたい。

以上のことをおさえながら、今後の埼玉県音楽教育連盟の発展と向上を期したい。

## 美術教育連盟研究会

### I 連盟の歩み

埼玉県美術教育連盟の沿革をさかのぼると、昭和19年発足の美術教育研究会にはじまる。当時、埼玉師範学校の竹野谷仁重氏を中心にして、町田源三郎氏や篠田喜与志氏、付属小学校の森田芳一氏、平井充氏、斎藤誠氏、更に浦和市内

の新井邦雄氏や田中実氏が、月1、2回集まって、日ごろの実践に基づく研究の発表や作品の研究などを中心に、グループによる自立的な研究活動が行われた。話題は浦和市内のことから次第に全県的なものとなり、昭和22年5月全県的な自主的研究組織としての埼玉県美術教育連

盟が創設されるに至った。

以来、38年、団体等との緊密な連携を図りながら研究活動を推進して今日に至っている。

その歩みは、荒廃と窮屈の中から立ちあがった戦後教育の歩みと軌を一にしたものと言うことができる。また、学校教育法の公布施行とともに、教育課程に位置づけられた图画工作科や美術科の研究と実践が、県下各地域、各学校に浸透していく過程で本連盟が果たした役割は特記するものがあったと言うことができよう。

創設当初の活動は、児童生徒の写生コンクールや美術展等であるが、昭和25年5月、現行の会則の原型に当たる連盟規約が制定された。以来、規約（会則）に基づいて、またそれらに改善を加えながら、創造的、発展的に、また、計画的、組織的に目的達成のための活動を展開してきた。特に、近年の急速な社会の進展と教育環境の変化の中で、組織や運営について積極的な積付を加えながら、一層の充実と進展を期して今日に至っている。

## 2 主なる活動と事業

昭19 美術教育研究会発足

昭22 5月 埼玉県美術教育連盟発足  
連盟長 竹野谷仁重

昭24 児童生徒写生コンクールと研究会開催  
昭25 児童生徒美術展を岩槻・熊谷で開催  
5月 連盟の規約を制定

○規約第2章目的および事業に第4条で、本会は美術教育の振興を図るをもって目的とする。

第5条で、本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

・講演会 ・研究会 ・見学 展覧会  
・写生会 ・制作会 ・美術教育に関する図書および用材の収集、紹介、展示。 関係機関への意見具申。・美術教育振興団体との連絡。  
・その他目的達成に必要な事業。等とした。

昭26 指導要領講習会、児童生徒美術展、  
研究指定校の指定。

○研究指定校は以来、毎年度2校程度ずつ指定され、その研究成果を公表し今日に至っている。

昭27 県下8地区に分かれて巡回展を開催。

鑑賞評価の研究会、研究指定校研究発表会を開催。

昭30 中学校图画工作研究協議会。第8回全国图画工作研究大会へ参加。個人研究発表会。

○以降、全国大会や関プロ大会については、指導者等の大会役員や、提案、司会等の協力者を派遣するとともに、研修の機会として一般の参加を奨励してきた。

昭31 版画講習会の開催

○以降、実技講習会は、各年度の重点的な事業として開催してきた。

昭32 研究発表会、付属小。身体障害者福祉のための児童生徒美術展。

昭33 中学校美術振興対策、時間数2、2、2の確保。

昭34 第1回小中学校图画工作科ゼミナール。

S S画用紙の研究とこれに基づく第1回身体障害者福祉のための美術展。

昭35 第1回埼玉県小中学校児童生徒美術展を県下8会場で開催。第2回身体障害者福祉のための美術展。

第2回小中学校图画工作科教育研究協議会（改 図工ゼミナール）。

○創設当初は、写生コンクールと研究会から出発して、県下1、2会場の美術展、続いて地区に分かれての巡回展を実施してきたが、改訂された新教育課程全面実施の年度に当り、県教育行政の重点事業の一環として美術展が推進されることになり、教育事務所単位に開催され、今日に継続されている。

昭36 連盟長 町田源三郎

昭37 第4回埼玉県美術教育研究大会（改 小中学校图画工作科教育研究協議会）

昭38 第1回デザイン工作指導者研修会。  
風景写生実技講習会。

○デザイン工作指導者研修会は、學習指導要領の改正に伴う新しい内容を中心にして、特に、地域において指導的役割を果たす人材の育成を

目的として開催され、以降、47年度まで実施された。

昭41 連盟長 斎藤誠。埼大の町田源三郎、篠田喜与志、沢井平三郎、内藤定昭の各氏が役員から退く。

第1回郷土を描く会並びに郷土を描く児童生徒美術展を共催、県下各地域で推進。図工・美術科設備基準を作成。会報を刊行。

昭42 設備基準による実態調査。

昭43 連盟長 新井邦雄。小学校图画工作科教材実技研修会を県下2会場で開催。第10回関プロ研究大会研究推進。

○小学校图画工作科教材実技研修会は、日ごろの教室での授業に連結した教材の実技研修で、主としてデザイン工作実技研修会参加者がその指導に当たった。

昭44 第11回造形教育研究大会。

昭45 第10回関東甲信越静地区造形教育研究大会を第12回県大会と併催で、浦和市、川口市、大宮市で開催。

昭46 小学校图画工作科教材実技研修会を10会場で開催。

昭47 中学校图画工作科教材実技研修会を7会場で開催。

昭48 小中学校児童生徒版画案を編集。

昭50 会則改正。

昭51 連盟長 須藤嘉彦。関プロ大会研究。

昭52 第31回全国大会のプレ大会として、第19回造形教育研究大会を開催。

昭53 第31回全国造形教育研究大会、第18回関東甲信越静地区造形教育研究大会20回埼玉県造形教育研究大会を併催で、浦和市川口市で開催。

昭54 連盟長 高山靖男。第21回造形教育研究大会。

昭55 会則改正。地区並びに市町村代表者による研究協議会の開催。第21回小中学校児童生徒美術展。

昭56 第28回造形教育研究大会。第22回小中

学校児童生徒美術展。地区、市町村代表者研究協議会。第16回郷土を描く会、美術展の推進。

昭57 第24回造形教育研究大会。第23回小中学校児童生徒美術展。地区、市町村代表者研究協議会。第17回郷土を描く会、美術展の推進。

昭58 第25回造形教育研究大会。第24回小中学校児童生徒美術展。地区、市町村代表者研究協議会。第18回郷土を描く会、美術展の推進。

### 3 特色ある活動

#### 1 研究大会の開催

当該年度の連盟の研究主題を大会主題として、必要な分科会を構成し、参加者は、地域、学校教育における日ごろの実践を持ち寄って研究協議する。会場地は、県下各地を巡回している。運営については改善を加えながら今日に至った。第1回以来の大会主題等次のとおりである。

(回)(年度) (大会主題) (分科会数)

- |    |    |   |
|----|----|---|
| 1  | 34 | 図工教育推進のための諸問題 (5)                         |
| 2  | 35 | 教育課程改訂に伴う諸問題 (4)                          |
| 3  | 36 | 教育課程改訂に伴う諸問題 (6)                          |
| 4  | 37 | 小中学校において、地についた作品を作り出させるための指導は如何にあるべきか (5) |
| 5  | 38 | 表現を深めるための指導はどのようにあるべきか (6)                |
| 6  | 39 | 今日の図工美術教育について反省し今後のあり方を考えよう。(4)           |
| 7  | 40 | 図工・美術教育における材料・用具資料について話し合おう。(5)           |
| 8  | 41 | 图画工作科における評価はどうあればよいか。                     |
| 9  | 42 | 物の見方、感じ方を深め、追求する態度を養う指導はどのようにしたらよいか (7)   |
| 10 | 43 | 造形教育指導上の問題点をその実践を持ち寄って討議しよう。(7)           |
| 11 | 44 | 造形教育における基本的内容とその                          |

- 指導。(17)
- 12 45 今後の造形教育の基本的内容とその指導(24)
- 13 46 図画工作科・美術科年間指導計画の改善と学習指導法の研究。(11)
- 14 47 効率的な指導の研究。(12)
- 15 48 表現力を高めるための指導はどのようにしたらよいか。(12)
- 16 49 表現力を高めるための指導はどのようにしたらよいか。(12)
- 17 50 図工・美術科における学習指導法の研究。(13)
- 18 51 よろこびと自信を持たせるための造形教育。(13)
- 19 52 造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか。(17)
- 20 53 造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか。(24)
- 21 54 造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか。(16)
- 22 55 明日をになう子供のための、造形教育。(8)
- 23 56 明日をになう子供のための、造形教育。(7)
- 24 57 図画工作・美術科における指導の深化と充実。(11)
- 25 58 図画工作・美術科における指導の深化と充実。(8)
- 26 59 表現の意欲と能力を高める指導と評価。(8)

## 2 児童生徒美術展の開催

教科の性格から、学習結果、指導結果としての作品を研究(鑑賞・評価)することは、極めて重要な意義を持つことになる。事業の主体者や組織・運営等の面で、いろいろな返還をたどっているが、美術展の開催は、創設以来、年度の重点事業として位置づけられ、その教育的意義は高く評価されている。

## 3 会報の刊行。

昭和34年度に第1回図工ゼミナール記録集を

刊行以来、昭和40年度までの7年間は各年度ごとに研究大会記録集を刊行。昭和41年度以降は、大会の記録ばかりでなく、年度の活動の概要も集約した会報を各年度ごとに刊行して今日に至っている。

## 4 運営に当たっての問題点

近年、教育センター等研修施設が整備され、また、行政レベルの研修体系が整備されるとともに、各種情報の入手が容易になった中で、会員の自立的な要求に対応できる研修の機会としての活動をどのように展開したらよいか。

## 5 昭和59年度の研究活動

### 1 運営方針

会則第2条並びに第3条の規定に基づいて関係機関、団体との緊密な連携のもとに、会員相互の連帯を深めるとともに、教職員としての資質の向上と美術教育の振興に努め、学校教育の充実を図る。

### 2 努力事項

- (1) 事業の組織的、計画的、重点的な推進。
- (2) 研究主題に基づく実践的な研究の推進。

### 3 研究主題

- (1) 表現の意欲と理解力を高める指導と評価。
- (2) 設定の理由及び方針

学校指導における指導と評価は表裏一体であり、指導の深化、充実を期するためには、的確な目標と評価が準備されなければならない。過去の年間、「図画工作、美術科における指導の深化と充実」を主題として研究を推進してきたが、本年度は、特に評価の研究に焦点を当てることとした。

研究大会や美術展等の事業と相まって研究と実践を推進する。

### 4 具体的な事業について

#### (1) 研究大会

##### ○ 第26回埼玉県造形教育研究大会の開催

- ・ 大会主題 表現の意欲と能力を高める指導と評価。
- ・ 分科会及び協議内容

小中学校共通 1 鑑賞

- 小学校 3 絵画、彫塑、デザイン・工作  
 中学校 3 絵画、彫塑、デザイン・工芸
- ・期日 12月4日
  - ・会場 北本市文化センター
- 第24回関東甲信越静地区造形教育研究長野大会への協力、参加。
    - ・大会主題 心おどらせてとりくむ造形
    - ・期日 10月25日～26日
    - ・会場 長野県戸倉町
- (2) 美術展
- 第26回身体障害者福祉のための児童生徒美術展の共催。
  - 郷土を描く会の推進と第19回郷土を描く児童生徒美術展の共催。
  - 第25回埼玉県小中学校児童生徒美術展を9会場で開催。
- (3) 研究調査
- 58、59年度研究委嘱校、大宮市立指扇中学校研究発表会の開催
- ・ 研究主題 豊かさとは——造形活動を通して人間形成を目指す美術科の指導と実践  
 期日 10月30日
- 59、60年度研究委嘱校、熊谷市立籠原小の研究援助
  - (4) 研究協議会
  - 地区代表者研究協議会 5月18日 8月10日 1月18日
  - 市町村代表者研究協議会 6月5日 8月28日 2月20
  - (5) 会報の刊行
- 6 今後の課題
- 事業を一層充実して効率的に展開するために、全県レベルの活動と地区レベルの活動について組織や運営、事業の内容等の視点から検討を加える必要がある。
- この場合、特に県行政との連携や地域教育研究会との連携を一層緊密にすることがたいせつであろう。(文責 高山)

## 保健体育研究会

### 1 会のあゆみ

保健体育研究会は、小学校体育連盟と中学校体育連盟を母体として昭和40年1月に発足し、昭和40年度に連合会に加盟した。

初代会長は、須永九重氏（狭山市入間川小）、副会長は加藤雅信氏（北足立桶川中）、理事長には浅香久氏（川口市青木中）がそれぞれあたった。現在は、小学校部会と中学校部会の二つに分かれており、どちらも活発な活動を行っている。

### 2 主たる活動と事業

本研究会は、埼玉県における小中学校の保健体育の振興をはかることを目的として設立され、次のような事業を行ってきてている。

#### (1) 保健体育に関する理論および実技、指導

法並びに教材教具の研究

- (2) 保健体育に関する諸調査および統計資料の作成
- (3) 研究会・協議会・講習会の開催
- (4) 他の研究団体・機関との連絡提携
- (5) その他目的達成に必要な事項

### 3 特色ある活動

現在は、小・中学校部会とも県教育委員会、小・中学校体育連盟と共に、研究協議会を中心活動している。そこで各年度の研究主題をまとめ、ふりかえってみるとした。

#### 〔小学校部会〕

- 第8回 昭和41年2月23日 羽生市立羽生小
- ①ボール運動の効果的指導法(ドッヂボール・ポートボール)  
 その他運動の効果的指導法
  - ②保健体育的行事の企画・運営の問題点

- 第9回 昭和42年2月23日 川越市第一小  
 ①サッカー、ソフトボールの効果的指導法  
 ②徒手体操の効果的指導法  
 ③準教科書の効果的指導法
- 第10回 昭和43年3月1日 熊谷市石原小  
 ①表現の効果的指導法  
 ②準備運動の効果的指導法  
 ③水泳の効果的指導法
- 第11回 昭和44年2月21日 労働会館  
 ①かけっこ効果的指導法について(低学年)  
 ②リレーの効果的指導法について(中学年)  
 ③リレー・持久走の効果的指導法について(高学年)
- 第12回 昭和45年2月27日 労働会館  
 昨年度からの継続研究
- 第13回 昭和46年2月8日 労働会館  
 ①学習指導要領総則第3「体育」の企画と運営をどのようにしたらよいか。  
 ②遅れている子や進んでいる子の指導をどうしたらよいか。
- 第14回 昭和47年2月8日 労働会館  
 昨年度からの継続研究
- 第15回 昭和48年2月9日 労働会館  
 ①体操の特性に応じた指導はどのように進めたらよいか。  
 ②ボール運動の特性に応じた指導はどのように進めたらよいか。
- 第16回 昭和49年2月8日 労働会館  
 ①体操の特性に応じた指導はどのように進めたらよいか。  
 ②器械運動の特性に応じた指導はどのように進めたらよいか。
- 第17回 昭和50年2月7日 労働会館  
 ①一人一人の子どもを伸ばす陸上運動の指導  
 ②表現指導の段階をどうおさえ、どう指導するか。
- 第18回 昭和51年2月6日 労働会館  
 「児童に、運動についての課題を解決させるための学習指導はどのようにすればよいか」  
 ①水泳
- ②ボール運動
- 第19回 昭和52年2月8日 労働会館  
 ①体操の学習指導の効果を高めるための学習の評価について  
 ②ボール運動の学習指導の効果を高めるための学習の評価について
- 第20回 昭和53年2月8日 労働会館  
 「学習指導の効果を高めるための学習の評価について」  
 ①陸上運動 ②ボール運動
- 第21回 昭和54年2月8日 労働会館  
 「子ども達が生き生きと活動する授業の計画と実践」  
 ①基本の運動 ②体操
- 第22回 昭和55年2月8日 労働会館  
 テーマは継続研究  
 ①ゲーム ②器械運動
- 第23回 昭和56年2月10日 教育センター  
 テーマは継続研究  
 ①基本の運動 ②ゲーム
- 第24回 昭和57年2月9日 教育センター  
 テーマは継続研究  
 ①基本の運動 ②表現運動
- 第25回 昭和58年2月10日スポーツ研修センター  
 「その運動のもつ楽しさを十分味わわせる授業の計画と実践」  
 ①模倣の運動・表現運動  
 ②走の運動(基本の運動)
- 第26回 昭和59年2月9日スポーツ研修センター  
 テーマは継続研究  
 ①模倣の運動・表現運動 ②ゲーム・ボール  
 [中学校部会]
- 第3回 昭和41年2月8日 労働会館  
 ①校内体育行事をどのように進めたらよいか  
 ②ダンス指導において動きを豊富にするにはどのようにしたらよいか。  
 ③準備運動の効果的指導について  
 ④バレーボールの評価について
- 第4回 昭和42年2月17日 労働会館  
 ①体育学習時に担当教師が欠ける場合の対策

をどうしたらよいか。

②スポーツテストの実施を効果的にするにはどうしたらよいか。

③2年女子バスケットボールの応用技能の指導をどのようにしたらよいか。

④徒手体操の技能の評価をどのようにするか

#### 第5回 昭和43年2月15日 労働会館

①学習効果を高めるために学習の過程や結果についての記録をどのようにとったらよいか。

②運動技能の向上を図ると共に、体力を高める指導はどのようにしたらよいか（器械・ダンス）

③教科時外の体育活動において体力を高める効果的な方法はどのようにしたらよいか。

④球技の態度の評価はどのようにしたらよいか。

#### 第6回 昭和44年11月20日 労働会館

①教科時において生徒の実態に応じて体力を高めるための指導はどのようにしたらよいか。

②教科時外の体育活動において体力を高めるための効果的な方法について。

③望ましい体育主任のあり方について。

④学習効果を高めるために、学習の過程や結果の記録をどのようにとったらよいか。

⑤技能効果を高めるために、学習の過程や結果の記録をどのようにとったらよいか。

⑥三年男子の二学期の評価をどうするのか。

#### 第7回 昭和45年2月17日 労働会館

①格技指導において安全の管理をはかり学習を効果的に進めるにはどうしたらよいか。

②女子生徒の走り幅とび・走り高とびの効果的な指導はどのようにしたらよいか。

③バレー・ボールのレシーブとカバーリングの効果的な指導はどのようにしたらよいか。

#### 第8回 昭和46年2月19日 労働会館

①改訂学習指導要領総則第3「体育」を各学校の実態に即してどう具体化したらよいか。

②体操の効果的な指導について

③保健体育科の年間授業時数をどう編成したらよいか。

#### 第9回 昭和47年2月17日 労働会館

①体操の効果的指導について

②特別活動におけるクラブ活動の運営

③特別活動における学校行事（体育的行事）をどのように計画し、実践したらよいか。

#### 第10回 昭和48年度2月16日 労働会館

①体操の効果的な指導について

②特別活動におけるクラブ活動（体育的クラブ）の指導はどのようにしたらよいか。

③格技（柔道、剣道、相撲）の特性に応じた効果的な指導はどのようにしたらよいか。

#### 第11回 昭和49年2月14日 労働会館

①生徒が意欲的に取り組む一単位時間の体操の効果的な指導はどのようにしたらよいか。

②初步的段階におけるバレー・ボールのゲームの指導はどのようにしたらよいか。

③格技における初步的段階の対人的技能の効果的指導をどのようにしたらよいか。

#### 第12回 昭和50年2月14日 労働会館

①陸上競技の効果的指導について

②サッカーの効果的指導について

③ダンスの効果的指導について

#### 第13回 昭和51年2月17日 労働会館

①器械運動（鉄棒）の技能をより高めるための効果的指導はどのようにしたらよいか。

②水泳における個人差に応じた効果的指導。

③バスケットボールの効果的なゲームの指導

#### 第14回 昭和52年2月17日 労働会館

①器械運動（鉄棒）で多くの生徒ができるようにして体力・技能を高めるための指導。

②生徒が意欲的に取り組む陸上競技の効果的な指導はどのようにしたらよいか。

③バスケットボールにおける集団技能（3：3）の効果的な指導はどのようにしたらよいか。

#### 第15回 昭和53年2月17日 労働会館

①効果的な体育的行事の計画とその運営。

②集団行動の効果的指導について。

③陸上競技における走の技能をより高めるための効果的な指導はどのようにしたらよいか

か。

#### 第16回 昭和54年2月16日 労働会館

- ①効果的な体育的行事の計画とその運営
- ②球技の学年選択種目とその学習指導
- ③体操の効果的指導法について

#### 第17回 昭和55年2月13日 労働会館

- ①集団的スポーツの特性をふまえた指導と評価の方法について
- ②体操の特性をふまえた指導と評価の方法
- ③ダンスの特性と単元年間計画作成上の諸問題について

#### 第18回 昭和56年2月17日 教育センター

- ①総則3の趣旨の具現化を目指す体育経営
- ②個人的スポーツ（器械運動）の特性をふまえた指導法について
- ③ダンスの特性をふまえた指導法（楽しさを味わい活力に満ちた授業の展開を目指して）

#### 第19回 昭和57年2月16日 教育センター

- ①個人的スポーツ（器械運動）の特性をふまえた指導法と評価について
- ②個人的スポーツ（陸上競技）の特性をふまえた指導法について
- ③ダンスは昨年度からの継続研究

#### 第20回 昭和58年2月15日 スポーツ研修センター

- ①個人的スポーツ（陸上競技）の特性をふまえた指導法（女子の長距離走の指導法）
- ②集団的スポーツ（バスケットボール）の特性をふまえた指導法について
- ③選択教科「保健体育」の趣旨を生かした指導の実践

#### 第21回 昭和59年2月10日 スポーツ研修センター

- ①体操の動きのねらいに基づく適切な動きの方法を工夫し、課題をもって自己の体力を高める指導について
  - ②集団的スポーツ（バスケットボール）の特性をふまえた指導法と学習評価について
  - ③選択教材「保健体育」の趣旨を生かした効果的な指導と評価について
- 以上小・中学校部会の各年度の研究主題をあげてみたが、これらの内容についてはそれぞれ

保健体育研究会「紀要」に詳細にまとめてあるのでぜひご参照下さい。

#### 4 昭和59年度の研究活動

小・中学校部会とともに昭和60年2月に行われる研究協議に向けて活動している。

##### 〔小学校部会〕

###### (1) 研究主題の決定

理事会を年度はじめに開催し、県教育委員会の指導を合わせて、どの学校にも共通した問題点としてつぎの二つのテーマを決定した。

そして各テーマごとに分科会を組織して協議を進めることにしている。

###### (2) 研究主題

「その運動のもつ楽しさを十分味わわせる授業の計画と実践」

- 模倣の運動・表現運動
- ゲーム・ボール運動

###### (3) 研究協議会までの日程

項目	日 時	会 場	備 考
資料交換会	60.1.18 (金) 13:30~16:00	埼大附属小	資料 270部
指導者・司会 助言者打合せ	60.1.25 (金) 10:00~16:00	埼大附属小	担当分科の 資料持参
研究協議会 (当 日)	60.2.7 (木) 9:30~16:00	県立スポーツ 研修センター	8分科会 (予定)

###### (4) 事後の処理1

協議会の成果については、記録係が責任執筆を担当して、年度末に研究紀要として発行するのでぜひ参考されたい。

##### 〔中学校部会〕

(1)昨年度のアンケート結果を参考にし、研究常任委員会で検討し、教育委員会の指導を加えて以下のように本年度の主題を決定した。

###### (2) 研究主題

- ①「体操」領域における動きのねらいに基づく適切な動きの方法を工夫し、課題をもって自己の体力を高める学習指導と学習に役立てる評価について
- ②「個人的スポーツ（水泳）」の特性に基づく効果的な指導法について——女子生徒の泳力を伸ばす指導の実践——

③「格技」の特性を踏まえた学習指導の実践について

(3) 研究協議会までの日程

① 資料交換会

参加者に事前に資料を配布し、事前に研究を深めてもらうために行っている。

○日 時 昭和60年1月25日(金)

○会 場 県スポーツ研修センター

○参加者 各地区の代表者

② 指導者・司会者打合せ会

研究協議会の内容を高めるとともに運営を円滑にするために行っている。

○日 時 昭和60年2月1日(金)

○会 場 県スポーツ研修センター

○参加者 各分科会の指導者・司会者

③ 研究協議会(当日)

○日 時 昭和60年2月8日(金)

○会 場 県スポーツ研修センター

三分科会をさらに三つの小集団に分けで行う予定である。

## 小学校家庭科教育研究会

### 1. 会のあゆみ

戦前の家事裁縫教科が、昭和22年4月より家庭科と改められ、戦後の新教育を担うにふさわしい教科として発足した。以来、埼玉県産業教育振興会小学校家庭科部として組織され研究が積み重ねられて來たが、昭和39年に埼玉県小学校家庭科教育研究会結成の動きが活発となり数回の理事会の協議を経て昭和40年第1回の総会を開催し本会が発足した。

#### (1) 歴代会長

初代	山本せつ	(昭和40~41年度)
第二代	若田せつ	(昭和42~53年度)
第三代	塙勝和子	(昭和54~56年度)
第四代	村田美代	(昭和57~58年度)
第五代	湯本トヨジ	(昭和59年度)

#### (2) 主たる活動と事業

年 月 日	事 項
40 42. 6. 7	埼玉県小学校家庭科教育研究会発足 文部省、県教委指定研究発表 昭和41、42年度(テーマ略)(深谷市立幡羅小)
43. 6. ~ 6 7	小学校家庭科初任者研修会
43. 7. 11	小学校家庭科学習指導要領第3回改定 発明創意工夫展・児童研究発表会 (川口市立幸町小)
43. 10. 28	小学校家庭科教員研究発表会 (大宮市役所)
44. 2. 7	

44. 5. 1	小学校家庭科施設設備現有状況調査
44. 6. 11	小学校家庭科初任者研修会 (川越市立川越第一小)
44. 8. 1	学習帳の検討編集始まる
44. 9. 30	発明創意工夫展・児童研究発表会 (春日部市立柏壁小)
44. 11. 28	県教委指定研究発表 昭和43・44年度 (テーマ略) (八潮町立八潮第三小)
45. 3. 6	小学校家庭科教員研究発表会 (大宮市民会館)
45. 3. 11	埼玉県基準教育課程の改訂
45. 5. 1	小学校家庭科施設設備現有状況調査
45. 6. 25	小学校家庭科研究協議会(入間・比企参加) (東松山市立新明小)
45. 6. 30	同上(北足立・秩父・児玉・大里参加) (大宮市立大宮小)
45. 7. 3	同上(北埼、埼葛参加) (春日部市立柏壁小)
45. 10. 22	発明創意工夫展・児童研究発表会 (鴻巣市立鴻巣中)
46	昭和43年度学習指導要領に基づく学習指導の実施
46. 2. 19	県南北部地区研究発表(改訂をふんだんに領域別指導法の研究)(大宮市立大宮小)
46. 5. 1	小学校家庭科施設設備現有状況調査
46. 10. 20	発明創意工夫展・児童研究発表会 (所沢市立文化会館)
46. 11. 15	県教委指定研究発表45・46年度(主体的学習の高まりを求めて一食物領域一) (行田市立太田東小)

47. 2. 10	県北部地区研究発表（効率を高める学習指導法の研究）（熊谷市立桜木小）	53. 8	習指導）（東松山市立高坂小）
47. 5. 1	小学校家庭科施設設備現有調査	53. 11	常任理事夏季宿泊研修会（国立婦人教育会館）
47. 6. 28	小学校家庭科初任者研修会 （大宮市立大砂土小）	53. 11	発明創意工夫展、児童研究発表会（埼玉会館）
47. 7. 5	同上（吉川町立旭小）	53. 11	東部地区研究発表会（豊かな人間性をめざして実践的態度を育てる家庭科指導一被服領域一）（羽生市立南小）
47. 10. 21	発明創意工夫展・児童研究発表会（熊谷市民会館）	54. 8	常任理事夏季宿泊研修会（国立婦人教育会館）
48. 1. 30	家庭科教育研修会並びに講演会（改訂学習指導要領の実施に伴う小中高の一貫性）（県教育センター）	54. 11. 16	発明創意工夫展、児童研究発表会（所沢文化会館）
48. 2. 7	県西部地区研究発表（教科の本質をおさえた指導過程の研究）（川越市立川越第一小）	54. 11. 28	県南南部地区研究発表会（豊かな人間性をめざして実践的態度を育てる家庭科指導一食物領域一）（新座市立新座小）
48. 6. 26	小学校家庭科初任者研修会（大利根町立原道小）	55. 4. 1	新教育課完全実施
48. 7. 3	同上（杉戸町立杉戸小）	55. 8	常任理事夏季宿泊研修会（国立婦人教育会館）
48. 9. 11	同上（越生市立蒲生小）	55. 11. 7	文部省指定小学校家庭科教育課程研究発表会（テーマ略）（越谷市立大袋東小）
48. 10. 27	発明創意工夫展・児童研究発表会（大宮商工会館）	55. 11	発明創意工夫展、児童研究発表会（埼玉会館）
48. 11. 28	県教委指定研究発表会 47. 48年度（家庭科における創造性を育てる指導を求めて）（北本市立南小）	55. 11	県南北部地区研究発表（主題前年度に同じ一被服領域一）（桶川市立桶川西小）
49. 2. 28	県東部地区研究発表（創造性を育てる学習指導はどのようにすすめたらよいか）（幸手町立幸手小）	56. 3	小学校教育課程編成要領完成
49. 6. 19	県教委通達（中性洗剤の扱いについて）	56. 8	常任理事夏季宿泊研修会（国立婦人教育会館）
49. 9	小学校家庭科初任者研修会（秩父地区）	56. 11	発明創意工夫展、児童生徒研究発表会（越ヶ谷ミニティーセンター）
49. 9	同上（大宮地区）	56. 11	北部地区研究発表会（主題前年度に同じ一被服領域一）（神川村立青柳小）
49. 11	同上（入間地区）	57. 6	小学校家庭科教育専門委員会設置
49. 11. 21	発明創意工夫展、児童研究発表会（埼玉会館）	57. 8	常任理事夏季宿泊研修会（国立婦人教育会館）
50. 2. 5	県南南部地区研究発表会（主体を育てる家庭科教育）（浦和市立常盤小）	57. 10. 13	発明創意工夫展、児童研究発表会（蕨市民会館）
50. 11. 14	発明創意工夫展、児童研究発表会（川越福祉会館）	57. 11	西部地区研究発表会（主題前年度に同じ一食物領域一）（坂戸市立浅羽野小）
51. 2. 10	県南北部地区研究発表会（実践的態度を高めるための家庭科指導はどのようにしたらよいか）（大宮市立日進小）	58. 8	常任理事等夏季宿泊研修会（国立婦人教育会館）
51. 11. 18	北部地区研究発表会（実践力を高める食物領域の指導）（秩父市立西小）	58. 9	消費生活関連家庭科指導資料小学校編の伝達講習会
51. 12. 2	発明創意工夫展、児童研究発表会（埼玉会館）	58. 10	発明創意工夫展（行田市商工センター）
52. 11. 15	発明創意工夫展、児童研究発表会（熊谷中央公民館）	58. 11. 22	児童研究発表会（行田市中央公民館）
52. 11	西部地区研究発表会（主体性を高める学		第1回関東地区小学校家庭科教育研究大会、埼玉大会（豊かな人間性をめざして実践的態度を育てる家庭科指導の探究）

59. 8. ~ <sup>16</sup> <sub>17</sub>	一食物領域一) (春日部市立宮川小) 常任理事等夏季宿泊研修会 (国立婦人教育会館)
59. 10. 26	第21回全国小学校家庭科教育研究大会(宮崎大会)に於て本県代表者が研究発表
59. 10. 28	発明創意工夫展 (埼玉水上公園)
59. 10. 30	児童研究発表会 (上尾市福祉会館)
59. 11. 19	埼玉県産業教育研究発表会 (埼玉会館)
59. 11. 30	埼玉県産業教育振興会100年記念式典 (埼玉会館)
60. 1. 29	県南南部地区研究発表 (主題前年度に同じ一住居と家族領域一) (川口市立本町小)

## 2. 特色ある活動

### (1) 初任者研修会

毎年県教委の依頼を受けて各地区毎に初任者の指導力向上のための研修会を開催し成果をあげた。50年代に入って、これが指定地区研究の中に包含され初任者を含めて研究が推進された。

### (2) 研究大会

本研究会では「一人の百歩より百人の一步」をモットーに家庭科担当者全体の指導力の向上をめざして、県下全域を下記の5地区に分け5年で1サイクルの研究指定地区方式により各地区での共同研究の成果を会場校で授業を中心に発表して来た。昭和45年度の県南北部地区の発

(研究指定地区)

県南南部地区=北足立南部  
県南北部地区=北足立北部  
北部地区=大里、秩父、児玉  
西部地区=比企、入間  
東部地区=北埼、埼葛

表を皮切りに本年度は第15回、即ち3サイクルの年輪を重ねるに至った。

中でも昭和58年度東部地区(北埼埼葛)の発表は第1回関東地区大会を兼ね、研究主題「豊かな人間性をめざして実践的態度を育てる家庭科指導の(副題)基礎をおさえる生活に生かす指導の工夫」を掲げ、春日部地区を中心として北埼埼葛全域の家庭科担当者が、こぞって研究に参加し、会場校、春日部市立宮川小学校において盛大に発表した。この際、関東各都県より

約700名の参加者があり、全員から絶賛の評価を得たことは、会場校、宮川小の全校をあげての協力と、長年積み重ねて来た地道な指定地区研究の成果の賜であると考えられる。

### (3) 研究集録の発行

研究指定地区の研究内容を年度毎に約28頁にまとめ、研究発表日に県下全小学校に配布している。この集録は翌年度の研究の足掛かりともなり、水先ともなっていると共に本研究会の研究の積み重ねであり、研究歴でもある。

### (4) 常任理事専門部組織と活動

昭和56年度より常任理事の研修、執行機関の位置づけを明確し、全常任理事の活動を効率化するため次の4つの専門部を組織した。

庶務部=庶務会計を司り、会の円滑な運営をはかる。

研修部=毎年度の研修内容を検討し、企画運営する。

調査研究部=家庭科教育推進の立場から学習帳を検討編集し、学習指導の効率化に役立てる。

広報部=本研究会の事業と活動を全会員に周知徹底するため資料を集め広報を作成し県下各小学校に配布する

### (5) 専門委員会の設置

昭和57年度より設置。県下全域の家庭科教育の水準、家庭科担当者の資質の向上を図るために各教育事務所単位に1~2名の専門委員を選出し、2年間の任期で組織し研究を推進している。その研究成果を研究集録第1集としてまとめた。

### (6) 発明創意工夫展、児童研究発表会

県産振の恒例行事で毎年秋に行われるが本会も、これに積極的に参加し、児童の創造的実践力の育成に努力している。

### (7) 消費生活関連家庭科指導資料の普及

昭和48年度より県教委並びに県消費生活課発行の消費生活関連家庭科指導資料小学校編の普及活用に努めている。これにより自律的行動のできる賢明な消費者の育成をめざした消費者教育の推進を期待している

### (8) 常任理事等夏季宿泊研修会

昭和53年度より実施、会場を国立婦人教育会館とし1泊2日の終日研修を実施し、常任理事等相互の人間関係を深めると共に地域指導者との資質の向上をはかることを目的とする。

#### 主な研修内容

- ・指定地区研究内容の発表と検討
- ・実技研修会（食物、被服等）

### 3、運営に当っての問題点

#### (1) 常任理事会について

常任理事は県下全域より2年間の任期で選出しているが、地区によっては1年で交替する地区もあり、また欠席がちな常任理事もあり会議の決議内容が徹底しない地区もある。

#### (2) 資金面について

研究集録作成の印刷費に予算の大半を支出するため、研究大会運営費、通信費等に乏しく、これらの予算執行に苦慮している。

### 4、昭和59年度の研究活動

#### (1) 講演会（6.13）於埼玉県労働会館

- ・演題「家庭科における消費者教育について」
- ・講師 埼玉県立鴻巣女子高等学校長

藤井正子先生

#### (2) 常任理事等夏季宿泊研修会（8.16～17）

#### 実技研修会

#### ・研究主題「加熱調理の意義方法を考える」

- ・講師 静岡大学教授 赤井チサト先生

#### 研究発表並びに研究協議会

#### ・本年度指定地区研究内容について（川口地区）

・本年度全国大会（10.25～26於、宮崎市）における本県の研究発表内容について「生活の中に生きて働く力を育てる学習指導」をテーマに3名の代表者が発表した。

#### ・57.58年度専門委員会の研究内容について。

テーマ「食物領域における基礎、基本の追求と指導法」について2年間の研究成果を発表

#### (3) 発明創意工夫展（10.28～11.4）

本年度は産振100年記念産業フェアとして開催され、県下全域より子供らしいアイデアのあふれた作品が選出され展示されていた。

#### (4) 児童研究発表会（10.30）

県下13地区の代表者が生活中からそれぞれ問題点を発見し、テーマも児童自ら設定した創造性に満ちた研究が発表された。

#### (5) 指定地区研究の推進

本年度は川口地区が県南南部地区を代表して指定を受け、前年度発表と同主題「豊かな人間性をめざして実践的態度を育てる家庭科指導の研究」により「住居と家族」領域の研究を推進し、昭和60年1月29日に川口市立本町小学校に於いて5、6年各1学級ずつ授業を公開し2つの分科会で研究協議を行う予定である。

### 5、今後の課題

研究指定地区方式により全県下における家庭教育水準の底上げをはかっているが地区によってまだ格差がみられるので、落ち込み勝ちな地区へ本会として一層の指導助言が必要である。常任委員会、専門委員会、指定地区研究会等の活動及び研究が、本会の目的達成に向かって今後益々有機的かつ統合的に機能し合うことにより本県小学校家庭科の向上発展が期待できるものと考えられる。

# 埼玉県中学校技術・家庭科教育研究会 のあゆみと今後の課題

## 1、あゆみ

産業教育振興法に基づく文部省指定の産業教育研究学校が昭和27年実施されて以来、昭和30年には研究学校の数も30校余りとなった。そこでこの機会に指定校相互の研究情報の交換、連絡などを目的として、昭和30年11月、比企郡八和田中学校において、埼玉県産業教育連盟が結成された。その後職業・家庭科が技術・家庭科になるについて昭和37年5月、埼玉県技術教育連盟と改称した。その後昭和40年5月に埼玉県教育研究会への加入を機会に技術・家庭科研究会と改称し現在にいたっている。

なお、この会は、県行政と一体となり、技術・家庭科本来の目標に向かい、先見的な活動を行い、本教科の発展に寄与している。また現在は61年度関プロ大会を目前にして、全県的に活発な研究が推進されている。

## 2、主たる研究活動と事業

本研究会は、教科指導の研究と教科の振興を図ることを目的として、次の事業を行なっている。

総会、支部長会、理事会、専門委員会、作問委員会、発明創意工夫展、各種委員会、教員研究発表会、生徒研究発表会、会報、研究紀要、生徒研究発表会の刊行及び学力調査の実施。

昭和40年以降本研究会として取りあげた研究テーマと概要を以下にまとめる。

### (1) 昭和40年前後

「基礎的事項の精選と学習内容の位置づけ」と「自作教具の製作」

教育内容をどうとらえ、その基本的事項をどう精選集約したらよいか検討が加えられた。また、実際には実習例にとらわれた指導になりやすく、到達目標、評価項目があいまいであったため、基礎的事項を分析し、それが学習指導の段階で、どう位置づけられているかについて研究がなされた。

また、抽象的になりやすい原理、法則を理解させるためには、教材・教具が必要である、との観点から、日常の学習指導を通して考えられた教具の自作に熱心に取り組んだ。

どんな方法で学習指導を展開していくべきか（例）（40年度）

概念	事 実	教 具	法 則	技 能	学習段階
木材の性質 ・組 成 纖維組織	・木材は細胞で構成されることをたしかめる	・樹木断面標本 ・木材標本	・木材は含水率の変化によって膨脹収縮などの変形を起すことを知る	・用途に適した材料選定ができる	・木工の考案設計

### (2) 昭和41～42年頃

「基礎的事項の系統化」と「学習場面での教具の活用」

技術の理論を感性的な思考に訴え、平易な形に具体化して理解させるため、各校で自作教具の開発が盛んに行われてきた。往々にして実験のための実験となったり、教具そのものの学習

を目的とするような混乱がみられたので、一つの題材の流れにそって、どんな教具を、どこでどのような形で取り上げたらよいかという研究が進められた。また、学習活動の到達のめやすを「知る・考える・作る」の三つに分けて教具を使った指導の展開も試みられた。

8分節から眺めた基礎的事項の到達のめやす（42年度）

分野のねらい	大項目	中項目	分節							
			技術に関する記号規則術語	技術の理論	材料用具に関する知識・技能	作業の計画に関する理解	作業の安全に関する理解	作業の正確さに関する理解	工業製品の選択、使用に関する知識	技術をめぐる社会的経済的な理解
	製図	図の書き方	・製図用具について知る	・製図用具の種類と検査法を知る	・製図用紙の種類と大きさを知り、用紙を正しくはることができる	・面図の大きさ図面の配置のしかたを理解する	・製図用具の安全な使い方、保管のしかたを知る	・製図のきまりに基づいて製図することができる	・JISマークについて理解する	・青写真について知る

(3) 昭和43～44年頃

「転移力を高めるための学習指導の実証的研究」

学習指導の研究を、より深化・発展させるため研究主題の設定にあたっては授業研究の中から今までの歩みを基本として主題をつかもうと意図し、授業研究会を積み重ねた。生徒にどんな力を手渡させるか——そのための教育内容・

指導法・生徒の活動など——について研究し、各分野の学習指導を進めていくうち、その指導内容を構造的につかむことの重要性を新たに認識すると共に、精選の必要性を知り、教科の本質をふまえた学習指導法のあり方について一つの方向を見出すことができた。

関プロ(埼玉大会)における指導案の形式(44年度)

本時の指導〔例〕

(1) 内容

(2) 位置

(3) 目標(上位・中位・下位生徒別到達目標)

(4) 展開

学習過程	学習内容	時間	教師の働きかけ	生徒の活動			指導上の留意点	評価	資料・準備
				知る	考える	実践する			
			発問1 演示						

(4) 昭和45年～46年

埼玉大会主題についての継続研究

—「授業のやま場」

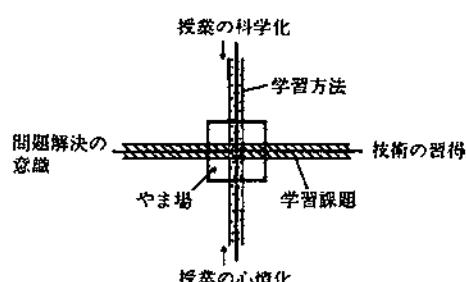
より高次の学習指導はどんな指導、展開をしたらよいかとの観点から、教師の指導の場、思考させる場を明確にした。生徒の心の動きをと

らえ、思考場面を設定していく解決の過程——手法——が“やま場”であり主体的な課題解決の心の高まりを重視することが必要であると考え、授業の流れの中に、中心的位置(やま場)を設定することについて討議・研究を重ねた。

(5) 昭和47～48年

学習指導の改善——授業のやま場の実証的研究

単位時間において教材の価値があり、しかも生徒の問題意識が強烈に盛り上がる接点を学習課題設定場面と考え、そこに焦点を当てた授業展開を実践すべきであろうとの共通理解のもとに、各領域にわたって綿密な学習課題の洗い出しが進められ、その課題にそった授業分析が行なわれた。



〔例〕

## 学習課題をいかに設定したらよいか〔例〕

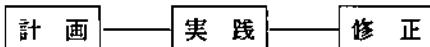
指導内容	とりあげるとこ	学習	課題	根拠	備考
		Ⓐ 知的理解面での課題	Ⓑ 行動的な面での課題		
力を伝える装置ア、リンク装置 イ、カム装置	○	Ⓐ リンクを目的にそって動かすためには、何がわからればよいか。		(4)のイ、カ (5)のア、ウ	・リンク装置は簡単なしかけて機械の最も基本的（活用面大）な機構であることを知らせる。

指導要録

## (6) 昭和49～51年

学習指導のシステム化——授業モデルの研究  
学習指導上のカンやコツをベテランといわれる教師の行動分析から見つけ、一般化し、その結果、子供の学習意欲を盛り上げる問題意識をどう持たせるかの研究を進め、教師の側、生徒の側から勘案した授業パターンを作成し、そのモデルを考え実証研究を進めた。

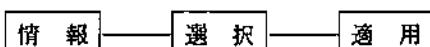
①基礎的知識や技能を習得させる意図を持つ内容（What型）技能習得の一般的な過程であるPlan do Seeの考え方を基本として、次のような過程を想定した。



②科学的根拠の解明に意をそそぐ内容（Why型）科学的探究の方法として、教科の特色である生活化とのかかわりを考慮して次のような過程を想定した。



③目的に対して最適な手法を見出し、その解決に意をそそぐ内容（How型）目的に最も合ったものを選ぶ最適化の考え方を生かして、次のような過程を考えた。



更に、これらの学習内容を指導するに当たり教

師の位置によって、生徒に解決の方途を発見させてゆくものと、教師が誘導して課題を解決させていくものという2つの型が考えられる。

## (7) 昭和52～56年

「課題解決にせまる基本的学習過程の研究」——新学習指導要領をふまえて。

新学習指導要領が公示され、現場の対処のしかたが当面の課題と考え、全国大会、埼玉大会から学んだものをもとにし、研究を深めた。

①新学習指導要領の内容の読み取りと共通理解。

②領域選択に関する諸問題。

③題材の検討と選定、及び題材の開発。

④今までの研究の洗い直しと再検討。

⑤学習内容の精選と題材の位置づけを含めた適切な指導計画の作成。

など8項目にわたる研究内容で研究推進をした。

## (8) 昭和57年～

昭和61年度に行なわれる関プロ埼玉大会をめざして構想を確立し、9領域ある専門委員会でそれぞれに研究主題を設け、授業研究を中心とした実証的研究を進め、組織の再編成などと共に、研究体制を整え、関プロに向けての研究活動が開始された。

## 3、特色ある活動

## (1) 研究大会

①関東甲信越地区 中学校技術・家庭科研究大会 埼玉大会

ア 研究主題 転移力を高めるための学習指導

## の実証的研究

イ 期 日 昭和44年11月20日（木）21日（金）

ウ 会 場 第1日 全体会 埼玉会館

第2日 分科会

県下10分科会場

②全日本中学校技術・家庭科研究大会

関東甲信越地区 中学校技術・家庭科研究大会

埼玉大会

ア 研究主題 課題解決にせまる基本的学習過程の研究

イ 期 日 昭和51年11月4日（木）5日（金）

ウ 会 場 第1日 全体会 埼玉会館

第2日 分科会13

県下13分科会場

③関東甲信越地区中学校技術家庭科研究大会

埼玉大会

ア 研究主題 自ら考え、意欲と実践力を高める学習指導法の研究

イ 期 日 昭和61年11月頃

ウ 会 場 第1日 全体会（会場未定）

第2日 分科会14

県下11分科会場

④研究発表会及び発明創意工夫展

①教員研究発表会

技術・家庭科担当教員の日常の研究実践を発表し、広く情報の交換と、相互の啓もうを図り、現場の指導に役立てている。29年以降毎年行われている。

②生徒研究発表会

27年度より産振13支部の代表生徒による発表会が毎年行なわれている。教科内容に関連した研究が多いが、省エネルギーがさけばれると、それに関する研究が出るなど時代を反映したものも見られる。

③発明創意工夫展

我が国産業の発展を図るには、発明考案の奨励とその工業化が極めて必要である。との観点から、本県においても34年を第1回として毎年開催されている。県段階で上位に入賞した作品の中には全日本発明創意工夫展において入賞し

た作品も見られた。

また、これは、児童生徒の部、教職員の部とあり、教職員の部においても毎年優秀な作品が多数出品されている。

## 4、運営にあたっての問題点

本会は極めて組織率が良く、県下12支部にはそれぞれ支部長が置かれ、地区研究推進の中心となっている。また、年数回行なわれる支部長会、専門委員会を通じ各種印刷物等については配布され、更に地区で送便等を利用して配布されている。

地区から選出される専門委員が毎年変わることもあり、地区としての意欲的高まりはあるものの、県全体の研究推進、研究の継続といった観点からは、やや問題を呈しているようである。

更に、近年、専門委員等の若返りがあり、前回の研究大会時に基盤となった研究推進において、新風が吹き込まれるといった良点はあるものの、温故知新的考え方がやや薄れてきている点は否めない。

## 5、昭和59年度の研究活動

現在、昭和61年度開ブロに向けての研究推進が行なわれている。

### ①主な活動

ア 6月13日（火） 埼大附属中

・総会、専門委員会、本年度研究推進に関わる組織作りを行う。

・県内を東西南北四つのブロックに分け、ブロック毎に研究領域を決め更に支部に分けた。

・専門委員の仕事としては、各領域の研究活動の推進的役割。ブロック間の情報交換及び調整を行なう。

### ・研究テーマの決定

イ 8月30日（木） 埼大附属中

・専門委員会を行う、研究発表校の決定。

研究テーマへの具体的な迫り方の研究

この他に各ブロック、支部毎にブロック会、企画委員会などを開き、研究推進が行なわれており、12月に予定されている教員研究発表会で

は中間発表が行なわれる。

#### 6、今後の課題

本会は当面、61年度関プロ大会に向けての研究推進が中心となる。今回は地区研究活動の盛り上がりを生かせる組織作りをしたこともあり今まで以上に地区研究活動が活発に行なわれる

と思う。また今回導入されたブロック体制により、全県レベルでの研究の歩調も合わせられると思われる。理論構成の59年から実践、実証へと流れる60年へ向けて、いかに各種活動をスムースに進めるかが、今後の課題といえる。

## 中学校英語教育研究会

### 1 会のあゆみ

#### (1) 立派に成人した埼中英研

昭和39年に県立浦和高校体育館で、埼玉県外国语教育研究会を母体として埼玉県中学校英語教育研究会が誕生した。初代の会長（昭和39年～42年の4年間）には、故山中論吉先生、二代の会長（昭和43年～46年の4年間）には、故篠田茂章先生、三代の会長（昭和47年～50年の4年間）には大野政己先生、四代の会長（昭和51年～55年の5年間）には原田三郎先生そして、五代の会長（昭和56年～）には田島光治先生が推された。それぞれの会長が、英語教育への卓越した考えと情熱を持ち、埼玉の中学校における英語教育発展のために献身的な努力をなされた。その恵沢を受け、中英研は、草創期、躍進期、充実期を経過し、今では能率的かつ機能的な会の組織、運営、各行事の執行、調査研究などが、20年の歴史の上に力強く推進されている。

#### (2) 楽しい英語授業の創造のための20年

生徒ひとりひとりが喜んで、楽しく、そして真剣に取り組む授業の創造を目指して数々の研究や調査がこの20年間でなされた。

#### ① 英語学力調査 — 昭和41年から19年継続

19年間の長きにわたり、指導要領の趣旨を十分反映させ、理想の調査問題（作成）を求め、生徒の英語学力の実態を正確に理解するために、県下一致に調査を行った。その結果を分析し、授業などに生かす実践を繰り返した。

#### ② 関東地区中学校英語教育研究会発祥の地、

### 埼玉（埼中英研）

豪まじい程の情熱を英語教育に傾注した三代大野会長の東奔西走の尽力により、1都6県の関東地区中学校英語教育研究大会が、昭和50年に埼玉で呱呱の声をあげた。そして昭和58年には、中英研発足20年を記念するが如く、埼玉で2回目の関東甲地区の研究大会を開くことができたことは大変意義深い。

#### ③ 「継続は力なり」英語教員研究発表会

外国语教育研究会時代の英語教員研究発表会も通算するとなんと23回もの開催を数えることができる。数多くの若手の英語教師の発表が目立っている。

その他英語弁論・暗唱大会は通算36回である。

### 2 主たる活動と事業

発足以来の主たる活動と事業の足跡を列挙すると次の通りである。

#### ▽ 昭和39年度

- ・埼玉県中学校英語教育研究会創立 39・6
- 昭和25年創立の埼玉県外国语教育研究会が中学、高校とそれぞれ発展的に独立。
- ・弁論暗唱大会（第14回） 10. 29 浦和高  
外国语教育研究会から通算すると14回目の開催となる。

#### ▽ 昭和40年度

- ・連合教育研究会総会 6. 1 付属中
- ・弁論暗唱大会（第15回）10. 29 浦和常盤中
- ・教員個人研究発表会 41. 3. 18 羽生中

#### ▽ 昭和41年度

- ・連合教育研究会総会 6. 2 付属中
  - ・教員研修会 8. 23~26 労働会館  
夏季休業中に開催される教員研修会は、この後、継続して行われている。
  - ・弁論暗唱大会(第16回)10. 29 浦和常盤中
  - ・学力調査実施(第一回) 11. 18 2、3年  
これまで、各地区、各学校、各団体で学力調査が行われてきたが、当研究会として、この年度より、県下一齊に継続して実施することになった。
  - ・教員個人研究発表会
- ▽ 昭和42年度
- ・弁論暗唱大会(第17回)10. 30 浦和常盤中
  - ・学力調査実施(第2回) 11. 15 2、3年
  - ・教員研究発表会
- ▽ 昭和43年度
- ・弁論暗唱大会(第18回)10. 31 浦和常盤中
  - ・学力調査実施(第3回) 11. 15 2、3年
  - ・教員研究発表会43. 1. 17 秩父市民会館
- ▽ 昭和44年度
- ・総会 6. 27 大宮東中
  - ・弁論暗唱大会(第19回)10. 31 浦和大原中
  - ・学力調査実施(第4回) 2、3年
  - ・教員研究発表会45. 1. 28 岩槻青年の家  
発表者 9名、参会者約120名
- ▽ 昭和45年度
- ・総会 6. 5 大宮桜木中  
講演「これから英語教育」 小川芳男先生
  - ・弁論暗唱大会(第20回10. 30) 浦和大原中
  - ・学力調査実施(第5回) 11. 17 2、3年
  - ・20周年埼玉県英語教育研究大会  
11. 26、 大宮市民会館  
昭和25年に埼玉県外国语教育研究会が発足して以来20年を経過したことを記念して行われたものである。
  - ・教員研究発表会46. 1. 14 東松山青年の家  
発表者 9名 参会者120余名
- ▽ 昭和46年度
- ・総会 6. 9 大宮桜木中  
研究発表ならびに講演会を持つ。
- 講演「現下英語教育の諸問題」  
大沢 茂先生(青山学院大学教授)
- ・弁論暗唱大会(第21回)10. 29 浦和大原中
  - ・学力調査実施(第6回) 9. 28 2、3年
  - ・教員研究発表会47. 1. 19本庄市福祉会館  
発表者11名 参会者120余名
- ▽ 昭和47年度
- ・総会 5. 30 大宮東中  
講演「現下の英語教育」  
納谷友一先生(東京電機大学教授)
  - ・学力調査実施(第7回) 9. 29 2、3年
  - ・弁論暗唱大会(第22回)10. 27 浦和大原中  
教員研究発表会48. 1. 17 大宮市立公民館  
発表者11名 参会者150余名
- ▽ 昭和48年度
- ・総会 5. 27 浦和大原中
  - ・学力調査実施(第8回) 9. 28 1、2、3年  
この年度から3学年実施することになる。
  - ・弁論暗唱大会(第23回)10. 26川口産業会館
  - ・教員研究発表会 1. 18 加須市  
発表者10名 参会者 約120名
- ▽ 昭和49年度
- ・総会 5. 30 付属中  
総会にひきつづき中英研創立10周年記念式展を開催。
- 記念講演内容
- 「日本英語教育史」大村喜吉先生(埼玉大学教授)「最近の欧米をめぐりて」百瀬甫先生(元外国语教育研究会長、明星大学教授)
  - ・学力調査実施(第9回) 9. 27 1、2、3年
  - ・弁論暗唱大会(第24回)10. 29大宮市民会館
  - ・教員研究発表会 59. 1. 17 川越市民会館
- ▽ 昭和50年度
- ・総会 5. 27 付属中  
講演 「英語教育の諸問題」  
安田一郎先生(成城大学教授)
  - ・学力調査実施(第10回) 9. 26~2、3年  
11. 28~1年 この年度から実施時期を分けて、1年の実施を遅らせて、作問の便宜を図った。

- ・弁論暗唱大会（第25回）10.29 付属中
  - ・第一回関東地区中学校英語教育研究協議会  
埼玉大会開催 12.2～3
  - 第1日 12月2日（火）付属中  
        全体会、講演会、分科会
  - 第2日 12月3日（水）  
        授業実演 研究協議 講演会 付属中  
        授業実演 研究協議 講演会 大井中  
        講演  
        第1日「わが国の英語教育の動向について」  
            佐々木輝雄先生（文部省教科調査官）
  - 第2日「日本の英語教育一回顧と展望一」  
        大村喜吉先生（埼玉大学教授）  
        「音声英語の指導について—文法と  
            音法一」 東後勝明先生（早稲田大  
            学講師）
- ▽ 昭和51年度
- ・総会 6.26 付属中  
    講演 「中学英語の難しさ」  
        小笠原林樹先生（文部省教科書調査官）
  - ・学力調査実施（第11回）  
    10.26～2、3年 11.26～1年
  - ・弁論暗唱大会（第26回）10.29浦和市民会館
  - ・教員研究発表会52.1.26 深谷青年の家  
    発表者12名、 参会者150名
- ▽ 昭和52年度
- ・総会 5.10 小川東中  
    この年度から行事開催会場を各支部持ち回りとすることになった。
  - ・弁論暗唱大会（第27回）10.25上尾福祉会館
  - ・学力調査実施（第12回）10.23 1、2、3年
  - ・教員研究発表会53.1.18 行田中央公民館  
    午後は、分科会形式の協議形態をとることになった。 発表者12名、 参会者150名
- ▽ 昭和53年度
- ・総会 5.23 秩父第一中
  - ・弁論暗唱大会（第28回）10.26 川越図書館
  - ・学力調査実施（第13回）10.28 1、2、3年
  - ・教員研究発表会54.1.17 岩槻市福祉会館  
    発表者11名、 参会者150名
- ▽ 昭和54年度
- ・総会 5.22 本庄西中
  - ・弁論暗唱大会（第29回）10.26 東松山中央公民館
  - ・学力調査実施（第14回）10.31～2、3年  
    1.19～1年
  - ・教員研究発表会 55.1.18志木市立公民館  
    発表者11名、 参会者150名
- ▽ 昭和55年度
- ・総会 6.4 深谷中  
    講演「英語教育の回顧と展望」  
        大村喜吉先生（埼玉大学教授）  
        模範授業 深沢秋雄先生（川本中教諭）
  - ・弁論暗唱大会（第30回）10.28秩父市民会館
  - ・学力調査実施（第15回）10.29～2、3年  
    1.19～1年
  - ・教員研究発表会56.1.19吹上中央公民館  
    発表者13名、 参会者120余名
- ▽ 昭和56年度
- ・総会 6.4 羽生西中  
    講演 「英語教育の諸問題」  
        渡辺益好先生（埼玉大学助教授）
  - ・弁論暗唱大会（第31回）10.28本庄福祉会館
  - ・学力調査実施（第16回）10.29～2、3年  
    1.19～1年
  - ・教員研究発表会57.1.20 川越南公民館
- ▽ 昭和57年度
- ・総会 5.19 越谷富士中  
    講演「英語教育と英文学」  
        柴崎武夫先生（群馬県立女子大教授）
  - ・弁論暗唱大会（第32回）10.26深谷青年の家
  - ・学力調査実施（第17回）10.29～2、3年  
    1.19～1年
  - ・教員研究発表会58.1.18東松山中央公民館  
    関東地区中学校英語教育研究協議会埼玉大  
    会中間発表会として開催。 参会者140名  
    講演「ひとりひとりが生き生きと取り組む  
        授業の創造」  
        和田 稔先生（文部省教科調査官）
- ▽ 昭和58年度

- ・総会 5. 31 新座中  
講演「ひとりひとりが生き生きと取り組む授業のための指導案はどうあるべきか」  
和田 稔先生（文部省教科調査官）
- ・弁論暗唱大会(第33回)10. 18行田商工センター
- ・学力調査実施（第18回）11. 25—2、3年  
1. 19—1年
- ・第7回関東甲地区中学校英語教育研究協議会埼玉大会開催 11. 8～9 大宮市  
第1日 全体会11月8日(火)大宮市民会館  
全体指導「望ましい英語教育をめざして」  
和田 稔先生（文部省教科調査官）  
講演「転換を求められている英語教育」  
安田一郎先生（成城大学教授）  
第2日 分科会、公開授業、研究発表  
会場 大宮東中学校、大宮南中学校  
大宮北中学校、大宮桜木中学校  
主題 望ましい英語教育をめざして  
——ひとりひとりが生き生きと取り組む授業の創造——

### 3 特色ある活動

#### (1) 研究大会

##### ①教員研究発表会

外国语教育研究会から通算すると23回を数える中英研の中心をなす研究大会である。午前の部が全体会での個人発表、午後の部は分科会形式の研究協議をとり入れているのが特色といえる。

##### ②関東甲地区中学校英語教育研究協議会

埼玉を発祥の地としており、今年度東京大会開催をもって8回目を数え、隆盛の途にある研究大会である。

##### ③中高連絡協議会

各支部ごとに行われている中高英語教育の連携を深める有意義な協議会といえる。近年中高の連携が叫ばれ、活発化している。

#### (2) 広報活動

##### ① 埼玉県中学校英語教育研究会紀要

発足以来、継続して刊行している研究集録である。教員研究発表会発表要項を中心に、

弁論暗唱大会の記録、学力調査問題、授業研究会協議録などが収められ、年々充実したものになっている。

##### ② 中英研だより

これまでに20号を発行している広報誌である。中英研の活動を中心に、年度に3回発行しており、会員の間で好評を博している。

### 4 運営にあたっての問題点

運営が民主化され、円滑に活動が推進されているが、次の問題点があげられる。

- ① 学校運営上の問題もあり、出張回数も制限されるため、集会が持ちにくい。このため活動の機会の制約を受ける。
- ② 補助金の額に制約があり、活動資金が十分とは言えない。
- ③ 学校数の増加に伴い、事務処理の負担が増している。

### 5 昭和59年度の研究活動

昭和59年度の事業は次の通りである。

- ・総会 5. 29 鴻巣西中
- ・弁論暗唱大会 10. 26 越谷富士中
- ・学力調査実施 10. 30—2、3年、1. 19—1年
- ・教員研究発表会 1. 18 本庄中央公民館
- ・常任理事会 2. 16ゆとり(秩父郡皆野町)

### 6 今後の課題

中英研の活動は年々活発化しており、民主的な組織のもとに隆盛の途を歩んでいる。とりわけ59年度は組織の一部改革があり、若干の常任幹事が委嘱された。支部活動の推進者としての活躍が期待される方々である。支部活動の推進エネルギーこそが中英研活動の核となりうるものであろう。この意味で、各支部の研究活動の一層の充実が今後の課題といえる。

# 道徳教育研究会

## 1. 研究会の概要

埼玉県は、道徳教育について熱心な地域であり、戦後の新教育の中にあって民主的な人間のあり方としての道徳性の育成について、他に先んじて幾多の研究・実践が積み重ねられ道徳教育の振興に大きな役割を果してきたのである。が、道徳の時間が特設されてから、それらの研究は一層活発となり、大きな成果も見られるようになった。しかし、個人研究や個々の学校による研究には限界があり、広い視野に立ち、豊かな実践を素材として共同研究、或は講演会等による理論的な究明には及びがたい点が多く見られた。教師の道徳教育についての研修を深化し、道徳教育をより充実したものにするためには、全県的な研究組織をつくり、衆知を集めての研究が必要である。そういう声が次第に高まって有志によって研究会設立準備が進められ、昭和38年2月15日創立総会をあげ、ここに埼玉県道徳教育研究会が発足した。

埼玉県道徳教育研究会は道徳教育について研究し会員の資質の向上と道徳教育の振興をはかることを目的とするものであって、発足以来20年、県下の有志の先生方と手を携え道徳教育の向上発展のために努力してきた。

研究会の組織は、

「埼玉県における小学校・中学校の教職員をもって組織する」と会則にのべられており、小・中学校が一体となっての研究会である。義務教育である小・中学校において、一貫した道徳教育が必要である。こうした観点に立脚した研究会である。

主な組織は理事会、常任理事会、専門部会である。

理事会は、県内に分かれている市町村、また

は班の地域教育研究会の道徳教育研究の代表者小・中各1名によって構成され、常任理事会は理事の互選によって各教育事務所単位から選出された常任理事によって構成される。

専門部会は総務部、研究調査部、研究推進部に分かれ、研究活動を分担する。専門部員は理事及び、地域研究会の中から道徳教育に対して熱意をもって研究し、実践に努めておられる方の中から会長が委嘱することになっている。

このことは県全体の総力を結集して充実した研究活動を推進したいという考え方と、研究実践者の層を厚くして底辺を広げ、地についた研究者を育てたいという念願を持っているのである。道徳教育の振興にとって重要なのは、少数の研究者の育成でなく、多数の道徳教育の実践者を得ることである。

専門部による研究活動は本研究会の特色でもあり、また推進力ともなっている。

## 2. 研究会の研究活動

### (1) 研究大会の開催

昭和38年研究会の設立以来研究大会を毎年開催している。設立当初は会の基礎がまだ確立していなかったし、独立して研究大会を開催できる気運になっていたいなかったので、研究会の研究委嘱校の研究発表会に併せて開催する形をとらざるを得なかった。しかし、道徳教育に対しての関心を高め、研究意欲をもりあげ、更に道徳教育に対しての理論的な研究を推進するために、一流講師を招いての講演会を数多く開催するという方法をとった。

研究大会が文字通りの独立した行事となつたのは、昭和43年度(昭和44年1月31日)

川越市民会館で開催された研究大会以降である。この研究大会も回数を重ね第23回研究大会が深谷市において開催するのが、昭和60年1月22日で感無量というべきものがある。

## (2) 道徳教育に関する研究委嘱

本研究会では道徳教育の振興をはかるために、設立以来毎年道徳教育に関する研究を委嘱し、その学校の研究を中心として会員の道徳教育についての研修を深めると共に、県全体の充実発展をはかってきた。

研究委嘱校は、県教委及び文部省の研究指定校とした。それぞれ小・中学校2校ないしは3校であったが、委嘱の傾向が変化したため昭和55年以降は中断されたが本年度よりその希望も高まってきたので、この委嘱をはかりたいと思っている。

昭和38年より研究委嘱校の研究内容は道徳の時間における指導過程のあり方を求めての研究が中心であったが、その他に

- 年間指導計画
  - 道徳の時間の指導における道徳性の内面化について
  - 発達段階に即した指導法
  - 授業分析の研究
  - 他領域との関連をはかった道徳の時間の指導
  - 年間指導計画の学級化
  - 道徳の時間の資料とその活用
  - 学級づくりと道徳教育
  - 表現活動を通しての道徳教育
- 等、多面的な研究が行われている。

昭和49年度に入り道徳教育に関する研究が一層高められ

- 道徳的心情を深める指導
- 自作資料を中心として話し合いを深める指導過程
- 基本的行動様式の育成を目指した道徳教育
- 共感的理解を深める指導

- 多様化時代における道徳的価値観の育成

- 道徳の変容をめざす道徳の授業

研究内容は質的に深められ、多様化していくように感じられる。埼玉県の道徳教育はこれらの研究委嘱校の研究を核として年毎に深められ、広められ、多数の研究実践者が輩出している。

そして全県的に底辺の広い研究が進められているのである。特に特筆すべきは、中学校における指導過程は全国を風靡じた「同質、異質論」井上理論は本県が生み出したものである。

当時川口仲町中が文部省指定校となり、中学校として、誰れでもできる道徳の時間を、との願いをこめて研究し、日夜研究につとめ、斎藤有雄指導主事を中心として、この理論が実践授業として全国発表にその成果を問うたのである。この成果こそ、道徳に志向された県下の先生の誇りというべきである。

## (3) 研究主題の設定

埼玉県における道徳教育推進上の課題をふまえて研究の焦点化をはかるためには、共通の研究目標を設定し、衆知を集めて協力して研究に取り組む必要がある。そこで埼玉県道徳教育研究会では、昭和44年度から研究会としてのその年度の研究主題を定め、会の総力をあげてその解明に当ることとなった。

いままでの研究主題は次の通りである。  
昭和44年・45年度

道徳の時間における資料ならびに指導過程はいかにあるべきか。

昭和46・47年度

豊かな人間性を培う主題構想はいかにあるべきか。

昭和48年・49年度

学校全体における道徳教育と道徳の時間の指導はいかにあるべきか。

昭和50年度

学校全体における道徳教育と道徳の時間の指導はいかにあるべきか。

昭和51年度

実践力を育てる道徳教育をどのように進めたらよいか

昭和52年・54年・55年度

人間理解に基づく道徳的実践力の育成をどのようにしたらよいか。

昭和56年・57年度

人間性豊かな児童・生徒を育成する道徳はいかにあつたらよいか。

昭和58年・59年度

豊かな心を育てる道徳教育はいかにあつたらよいか。

——道徳的実践力を育て実践する児童  
生徒をめざして——

#### (4) 研究成果の発表

本研究会では会の設立以来研究の成果をまとめこれを発表し、会員の研修と県全体の道徳教育の振興に役立てたいと考えている。

##### ○ その概要を記すと

昭和39年度

道徳内容基底表

年間指導計画

道徳ノートの編集（小学校中高学年用・中学校用）

昭和41年度

道徳教育研究論文集

昭和42年度

道徳教育研究論文集

この年度からもっと現場にとっての課題や研究主題にともなったものの研究を集録すべきとの考え方から方向性を変え道徳教育の研究というタイトルとして第一集として発刊した。

昭和42年度 道徳教育の研究（第一集）として現在に至っている第16集までに至り昭和59年度は、現に現場における課題を取り上げ、県指導課で作成した郷土資料の実践展開例及び課題についての解答等をあげ研究の一層の深化を目指した研究集録をも

くろんで目下作業中である。

#### (5) 道徳教育に関する実態調査

埼玉県における道徳教育の現状はどうなっているのか、どこに問題点があるのか、道徳教育振興に対して学校や地域の要望はどこにあるのか等について明確に把握し、それに対応した方策をたてる事はきわめて重要である。

そこで本会は昭和40年度より全県的な規模において道徳教育に関する実態調査を実施してきた。

この調査結果は道徳教育振興ならびに推進に大きな役割を占めている。

#### (6) 地域道徳研究会の研究助成

埼玉県では、教育事務所単位に或は市、班単位によって全地域に道徳教者研究会が組織され、それぞれの特色ある研究活動を展開している。本県の道徳教育振興のためには地域各研究会の研究活動が活発になり、その成果もまた向上し、県全体の道徳教育研究会との有機的な関連を深め、相互の関係を保つことにより、一層充実が期待できると考えられる。そこで本会では地域道徳研究会の充実発展のために研究助成を行っている。年を追う毎に地域道徳研究会の研究が深められていることは喜ばしい限りである。

#### (7) 全国小学校研究会・全国中学校道徳研究会との関連について

小学校・中学校の各全国道徳研究会の結成に当っては、それぞれに発起者の一員としてその結成に当って中心的な役割を果している。全国小・中道徳教育研究会の国民教育上果す役割を考え、その健全な発展に寄与するために積極的な協力活動を行なうこと、及びその研究活動に参加することによって研修を深めることはきわめて重要である。

本会は次のような研究大会の開催を行なっている。

昭和45年度 全国小学校道徳教育研究会  
関東ブロック研究会開催  
昭和45年8月7日～8日  
飯能市東雲亭

昭和49年度 全国中学校道徳教育研究会  
関東ブロック研究会埼玉大会  
昭和49年8月26日～27日  
飯能市東雲亭  
(地方大会としては第一回の研究  
大会である)

昭和50年度 全国小学校道徳教育研究会  
関東ブロック研究会埼玉大会  
昭和50年8月11日～12日  
秩父三峰

昭和53年度 全国中学校道徳教育研究会  
第12回全国大会  
昭和53年10月27日～28日  
越谷市立中央中学校

昭和56年度 全国小学校道徳教育研究会  
関東ブロック研究会埼玉大会  
昭和56年8月18日～19日  
浦和市民会館

毎年度開催される全国大会、関プロ大会に  
際しては、提案者、助言者、司会者を送り会  
員が多数研究協議に参加し、研修を深めると  
ともに、埼玉県の道徳教育の水準の高さは全  
国的に認められている。

### 3. 今後の方向

道徳教育に課せられた期待は益々高まってい  
る。しかし乍らその実態はと、問われる時必ず  
しもベターとは言えないのが実情であろう。

指導要領改訂に伴う人間志向の教育は、正に  
道徳の果す役割の重要性を物語ると言つても過  
言ではなかろう。一言一心、子どものふれあい  
こそ、大切な時期はない。この時期を今一度見  
直し、豊かな心、豊かな人間性の形成に一段の  
努力と研究に推進していきたいと願っている。

終りに本会設立にあたって今日の埼玉県道徳  
教育研究会をお育ていただいた

初代会長 笹井義一先生、二代会長

河野敏雄先生が昨年他界された事は誠に残  
念で、この20周年記念にあたり心から感謝と哀  
悼の意を表する次第である。

## 特別活動研究会

### 1. 会のあゆみ

昭和37年1月、埼玉大学付属中学校において、  
「埼玉県特別教育活動研究会」として結成大会  
が行なわれ、初代会長には、倉林嘉四郎先生が  
就任された。

当時は、昭和34年に、新たに学習指導要領が  
改訂され、「特別教育活動」の内容が初めて明  
示された。昭和36年、埼玉県基準教育課程（小  
中学校編）が、県教委より示された。そんな状  
況のなかで本研究会が発足したのである。

その後、研究組織の編成・改革・会務処理の  
ための事務局編成など、着実に発展を続けてき  
た。研究実践については、毎年、研究集録の刊

行を続け、本年第24集を数えるに至った。また、  
本会の活動を県下各地に紹介するため、昭和42  
年、会報の創刊号を発刊した。

また、昭和53年9月に“月例研究会”を発足  
させ、6年目を迎えた。特活を真に愛する人た  
ちが、毎月、大宮婦人労働福祉会館・浦和市内  
を会場として、実践の成果を持ち寄って研修を  
積んでいる。

さらに、昭和57年11月、埼玉県特別活動研究  
会、20周年記念事業として、記念誌発刊記念式  
典及び、記念講演会、祝賀会を挙行した。記念  
講演には、県教育長、長井五郎先生の「教育雑  
感」と題するお話をいただいた。

本研究会の発展と充実に貢献された歴代会長は、以下の通りである。

- ・初代会長 倉林嘉四郎先生（昭和36～41年）
- ・二代会長 柴崎 栄一先生（〃42～45年）
- ・三代会長 加藤 雅信先生（〃46～51年）
- ・四代会長 杉田 犀作先生（〃52～54年）
- ・五代会長 丹羽 尊照先生（〃55～58年）
- ・六代会長 木村 恵俊先生（昭和59～）

## 2、主たる活動と事業

### (1) 研究大会（全国大会）

・47年8月 第16回全国特別活動研究協議埼玉大会（大宮市民会館）

大会テーマ「望ましい人間形成に果たす特別活動の役割」

・51年6月 第5回全日本中学校特別活動研究協議埼玉大会、（浦和市、桶川市）

大会テーマ「特別活動のあり方とその指導法の見直し」

・58年8月 第10回全国学校行事研究大会埼玉大会（川口市） 大会テーマ「創造性を育てる学校行事」

### (2) 研究発表校（研究委嘱）

・37年6月 「特別教育活動の在り方」を発表、深谷市立大寄中学校

・37年7月 「特別教育活動——児童会・学級会・クラブについて」を発表、鴻巣市立東小学校

9月 「学級活動の進め方とその実践」を発表、日高町立高萩中学校

12月 「JRCと特別教育活動について」を発表、川越市立中央小学校

・38年2月 「特別教育活動の実践的な研究」を発表、熊谷市立成田小学校

・38年6月 文部省実験学校として、特活全般にわたって発表、鴻巣市立東小学校

・38年9月 特活全領域の合同研究発表

加須市内小中学校

・39年10月 「学級活動の計画と実践」を発表、浦和市立大原中学校

・42年11月 「学活における基本的な指導の

あり方」を発表、大宮市立日進北小学校

・44年9月 「学年に応じた話し合いの進め方」を発表、川里村立共和小学校

・44年10月 「自主的に考え発表し、実行する能力を養う学級会活動」を発表、神泉村立阿久原小学校

・44年10月 「学級活動の問題点とその改善——学級会活動と学級指導のあり方を求めて——」を発表、宮代町立須賀中学校

・45年9月 「学級会活動の改善—特に学級指導との関連をふまえて—」を発表、久喜町立江面第一小学校

・45年10月 「生徒の主体性を伸ばすこれからの特別活動——調和のとれた新しい特別活動の経営——」を発表、行田市立埼玉中学校

・46年1月 「意識を深め、自主性を高める学級会活動——実施計画立案の指導—」を発表、志木市立宗岡小学校

・46年10月 「必修クラブ活動の展開上の諸問題」を発表、浦和市立大原中学校

・46年11月 「学級指導の研究」を発表  
小川町立八和田中学校

・46年12月 「調和と統一のある教育課程を編成する上に、特別活動をどのように位置づけたらよいか」を発表、寄居町立寄居中学校

・47年12月 「学級指導の効果的な指導」を発表、春日部市立内牧小学校

・48年10月 「学級会活動、学級指導の推進」を発表、川越市立第一中学校

・50年1月 「学級会活動の効果的運営」の発表、深谷市立常盤小学校

・52年11月 「連帯感のある自主性の向上をめざす集会活動」を発表、大宮市立別所小学校

・53年10月 「ゆとりの時間をどう活用するか—特別活動を中心として—」桶川市立桶川中学校

・55年11月 「ひとりひとりを正しく理解し、伸ばす学級指導」を発表、三郷市立彦成中学校

・55年11月 「自主性を育てる学級会活動」

を発表、浦和市立沼影小学校

・57年2月 「一人一人を伸ばす生徒指導のあり方——生き生きと学習する生徒の育成をめざして——特別活動の実践をふまえて」を発表、八潮市立第三中学校

・57年11月 豊かな人間性の育成をめざす指導法の研究——明るく生き生きとした学級を育てる学級会、学級指導」を発表、川越市立川越第一小学校

・58年12月 「生徒ひとりひとりの自己実現を図り、中学生生活に張りと喜びを持たせる生徒指導」を発表、羽生市立東中学校

以上のように、毎年一校ずつ研究委嘱をして研究の推進を図っている。

### (3) 研究集録の発刊

本研究会が編集委員を選んで、研究集録の刊行をしたのは、第3集（昭和40年）からである。それ以前は、県教育局指導課と、本会の発足に加わった人たちで編集し、県指導課名で刊行している。第3集からは、本会が編集し、研究集録を毎年刊行し、現場の先生方の実践に役立てている。

#### ・第3集 [昭41年3月]

「望ましい学級活動の指導事例集（74頁）」を刊行

#### ・第4集 [昭41年5月]

「小学校における特別教育活動指導事例集（30頁）」

#### ・第5集 [昭42年3月]

「学活を高める基本事項の指導事例（130頁）」

#### ・第6集 [昭43年3月]

「学活の流れとその資料（180頁）」

#### ・第7集 [昭44年3月]

「埼玉県における特別教育活動の実態（80頁）」

#### ・第8集 [昭45年3月]

「学級会活動・学級指導のすすめ方（156頁）」

#### ・第9集 [昭46年2月]

「学級指導のすすめ方（170頁）」

#### ・第10集 [昭46年2月]

「特別活動の推進（40頁）」

なお、専門委員会レポート第1号（18頁）を同時刊行する。

#### ・第11集 [昭47年2月]

「これからの特別活動のすすめ方—全国大会記念特集号—（200頁）」

専門委員会レポート第3号（39頁）を昭48年2月刊行する。

#### ・第13集 [昭49年3月]

「特別活動・その問題点の克服（180頁）」を刊行。

#### ・第14集 [昭50年2月]

「特別活動・その基本的指導法をさぐる（182頁）」

#### ・第15集 [昭51年2月]

「指導法を開発する実践事例（190頁）」

#### ・第16集 [昭51年6月]

「特別活動のあり方とその指導法の見直し——全中特活全国大会記念特集号（172頁）」

#### ・第17集 [昭53年2月]

「学級集団活動を高める日常の指導（150頁）」

#### ・第18集 [昭54年2月]

「ゆとりと充実をめざす特別活動の計画と展開（100頁）」

#### ・第19集 [昭55年3月]

「新教育課程における特別活動の指導計画（136頁）」

#### ・第20集 [昭56年3月]

「特別活動の効果的な指導法（192頁）」

#### ・第21集 [昭57年2月]

「新教育課程における特別活動の展開——実践上の問題点とその改善（152頁）」

#### ・第22集 [昭58年2月]

「ひとりひとりを生かす特別活動の実践——生徒指導に生かす特別活動（175頁）」

#### ・第23集 [昭59年2月]

「充実した学校生活を支える特別活動の展開（172頁）」を刊行

### (4) 会報発行

昭和42年12月10日発行の創刊号「会報」から更に「特活」へと名称の変遷をしながら、現在

まで第34号を数えるに至った。本会の会報は、研究内容や組織、運営、今日的な特活の課題等を網羅した豊かな広報誌である。

#### (5) 合宿研修会

本会では、毎年3回の専門委員会の最終日は、合宿研修会として実施している。内容は第1、2回の研修会から提案者を選び、発表し、それをまとめていく方法をとっている。記録では、昭和45年12月、飯能市観山荘が第1回の合同研修会で、本年、第15回目を迎える。会場は主として国民宿舎を利用。

#### (6) 月例研究会の発足と発展

じっくりと特活の実践を語り合い、深め合う、そんな機会を作ろうという発想で、第1回の月例研究会は、昭和53年9月、大宮市立大宮小学校図書室を会場として発足した。

本年、10月20日開催の月例会で第42回を数えるまでに至っている。

その間、専門委員を中心とした多くのすぐれた研究実践が提案された。提案は、主として、本会専門委員が、それぞれの実践を出し合い、研究協議をし、その後、指導者から、指導助言を受けるという形をとっている。期日は毎月の第三土曜日、午後2時30分から5時近くまでとしている。会場は、県の中央部を選び、大宮市立婦人労働福祉会館（氷川神社横）や、浦和市立常盤小学校をお借りしている。

指導者として、県立南教育センター経営研究部長兼道徳特別活動研究室長・杉田義作先生、本会前会長・丹羽尊照先生、越谷市教育委員会学務課長（本会常任参与）・近藤敏先生、北教育センター指導主事・横山彰先生を要請し、本会特別活動の質を高め、層を広げるのに適切なご指導をいただいている。

### 3、運営上の問題点

#### (1) 専門委員会の適切な研究協議の会場が得にくい。

年間三回の専門委員会では、全体会で100名を超える参加者と、四つの専門委員会ごとの分科会を開催できる会場（小中学校を主として利

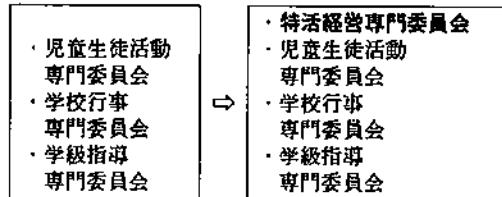
用させてもらっている）が得にくいので、苦慮している。

#### (2) 専門委員会の研究内容を深めにくい。

毎年、研究テーマを決め、専門委員会ごとに研究に当り、翌年、研究集録にまとめる手順をとっている。しかし、年間三回の専門委員会開催という制約があり、研究を深めきれないくらいがある。

### 4、昭和59年度の研究活動

#### (1) 専門委員会の組織の拡大



上記のように、本年度、新たに特活経営委員会を設け、従来の三つの委員会では、取り上げられない内容や、特活全般にわたる課題等の研究を推進することになった。

#### (2) 研究テーマ

##### 「特別活動の本質をふまえた実践課題」 ——各内容の実践上の中心的課題——

#### (3) 研究委嘱校の発表

・北本市立栄小学校 期日 11月8日  
・テーマ「ひとりひとりを高め、生き生きとした学級・学校集団の育成——学級会・児童会活動を通して——」

(4) 研究集録第24集「特活の基礎・基本」の刊行（昭和60年2月頃）

(5) 会報、「特活」第36.37号の発行

#### (6) 全国大会参加

・全国特活東京大会 8月3, 4日（日比谷）  
・全中特活静岡大会 8月9, 10日（静岡市）

# 中学校進路指導研究会

## 1、会のあゆみと主な活動

### 昭和37年度（会長・鈴木仲治郎）

進路指導が「職業・家庭科」第6群から「特別教育活動」に位置づけられ、いわゆる「三理解一知識」がその内容とされた時代であった。

県教育局、関係諸機関等の後援をえて、全県的な組織づくりに取り組んだ。

各地区ごとの研究会の開催、進路指導研究推進校の委嘱と支援（川本村立川本南中）を行い、「進路学習ノート」の発行についての計画を検討した。

### 昭和38年度（会長・鈴木仲治郎）

理事会を中心にして、組織づくりと支部活動の確立のための活動に力を注いだ。埼玉県連合教育研究会発足の年であるが、本研究会の活動も組織的になり、各地区で進路指導講演会、実践研究発表会等が行われるようになった。

副読本「中学校の進路」の普及活動、進路学習帳の作成と普及活動、進路指導の手引の発行に取り組んだ。

### 昭和39年度（会長・鈴木仲治郎）

中学校進路指導の実践的研究事例集第1集として、研究紀要「進路指導における発達評価の試み——特に学級活動における進路指導によって生徒はどのように発達したか——」を刊行した。

### 昭和40年度（会長・鈴木仲治郎）

研究紀要「埼玉県中学校進路指導実態調査・学級活動における進路指導事例集第2集」を刊行した。主な内容——中学校進路指導のあり方、学級活動における進路指導の効果的実践、進路相談の実践研究等。

### 昭和41年度（会長内田忠義、理事長宗像憲治）

この年に専門委員会発足。専門委員は各支部2名を標準に25名をもって組織すること、理事

会が推薦し会長が委嘱することとし、研究主題について調査、研究活動を計画的に行い、研究紀要の作成にあたることになった。「中学校生活と進路」埼玉県版の編集、学習帳と手引書の作成を行うとともに、研究紀要「昭和40年度卒業者の進路適応調査とその考察」を刊行した。

県下2会場（熊谷・浦和）で研究協議会を開催。テーマ「学級活動における進路指導の学習効果の向上について」

#### 研究委嘱校 所沢市立柳瀬中(11月21日発表)

### 昭和42年度（会長内田忠義、理事長宗像憲治）

中学校における観察指導の強化が中教審答申で示され（41・10）、中学校進路指導において生徒の能力・適性をより適確に把握する方法の研究開発が重要となってきた時期である。

専門委員による研究推進校の視察と観察指導の研究を行った。研究紀要「進路指導個人研究集録」、「観察記録のとり方、学習成就値の考察、進学後の調査」を刊行。

#### 研究委嘱校 豊里村立豊里中、加須市立東中

### 昭和43年度（会長須賀清一、理事長宗像憲治）

中学校観察指導調査研究に関する協力者会議から「中学校における進路の指導について（報告）」が出され、進路指導の方向が示唆された。観察指導を中核とする進路指導研究会が、加須東中、豊里中で開催された。

研究紀要「教え子の3年後」の刊行。中高連絡協議会の開催。研究委嘱校 豊里中、加須東中、浦和市立大原中。 昭和44年度（会長須賀清一、理事長宗像憲治）

観察指導を基盤とした進路指導の研究（生徒理解のための実践的研究）を研究主題として取り組んだ。

研究紀要「教師の進路指導に関する意識調査および教え子の卒業後の追跡調査」の刊行。全

国進路指導振興全国大会での研究発表。中学生生活と進路学習帳（1年）刊行。

研究委嘱校 豊里中、大原中、川越市立東中。

昭和45年度（会長・宗像憲治）

研究主題を「進路指導をめぐる諸問題の解明と学級指導における進路指導」とし、研究紀要「進路指導の諸問題と学級指導の展開例（第1学年）」を刊行した。

進路指導の手引（1、2年）、中学生活と進路学習帳（2年）を刊行。

この年から、中学校進路指導研究協議会を開催するとともに、本研究会の会報の発行を開始した。研究委嘱校 宮代町立百間中、所沢市立柳瀬中。

昭和46年度（会長・宗像憲治）

研究主題を「進路指導の実践的研究」とし、進路指導は教科・領域で具体的にどのような姿で実践されるべきかを解明しようとした。

研究紀要「進路指導の諸問題と学級指導の展開例（第2学年）、（第3学年）」の刊行。特別活動ハンドブック（1、2、3年）、中学生活と進路学習帳（3年）の刊行。会報3、4、5号。

研究委嘱校 小川町立小川西中

昭和47年度（会長・宗像憲治）

研究主題「進路指導の実践的研究——学級担任が効果的に進路指導を進めるにはどうしたらよいか——」のもと、改訂された指導要領の趣旨を生かした進路指導のあり方の研究に取り組んだ。

研究紀要「学級指導の展開例とその指導（第1学年）、（第2学年）、（第3学年）」の刊行。会報6、7、8、9号発行。

研究委嘱校 毛呂山町立川角中学校

昭和48年度（会長・宗像憲治）

前年と同じ研究主題による研究活動で、全教育活動で行われる進路指導の補充、深化、統合の役目を果たすのが学級指導であるという考え方方に立って、現場で役立つ学級指導の展開案を作成した。

研究紀要「進路指導を核とした学級指導の展開」（1年、2年、3年の3分冊）を刊行。実務教育出版より出版した。

研究委嘱校 騎西町立騎西中学校。特別活動ハンドブック学級ノートの刊行。会報10号発行。

昭和49年度（会長・桝田勝次）

研究主題を「進路指導における父母との提携をいかに進めるか」とし、父母との提携・協力の方法については各校の独自性を生かしながらそれらに共通して必要とされる資料づくりに取り組んだ。この年から、宗像憲治常任顧問就任。

研究紀要「進路指導に際し父母との提携をいかに進めるか」の刊行。会報11、12号発行。

研究委嘱校 吹上町立吹上中。

昭和50年度（会長・遠藤晃司）

研究主題「子どもの進路を考えよう」。進路指導は入学時より計画的・継続的に積み上げられ、卒業時の具体的な進路決定に生かされることが重要であり、そこには父母の積極的な姿勢が必要であるとの立場から、前年度の研究紀要の改訂をすすめた。

研究紀要「子どもの進路を考えよう」の刊行。会報13、14号発行。研究委嘱校（吹上中）の研究発表。

昭和51年度（会長・遠藤晃司）

研究主題を「子どもは自分の進路をどう考えているか」として研究に取り組んだ。高校進学率94%というなかで不適応をおこす生徒の増加、6%の各種学校・就職生徒の眞の幸福を願い、生徒の胸中を作文的手法によって、生のかたちで探ろうとした。

研究紀要「子どもの考える子どもの進路」、会報15、16、17号発行。

研究委嘱校 松伏町立松伏中

昭和52年度（会長・遠藤晃司）

前年度の研究をひきつぎ、研究紀要「子どもの考える子どもの進路」の改訂に取り組んだ。会報18、19号発行。研究委嘱校 松伏中。

昭和53年度（会長・利根栄次）

研究主題「進路指導の体系化をはかる――

### 一人一人に定着するために——」

本研究会15年の歴史を振り返るとともに、県下各地区、各学校の進路指導の研究・実践を総括し、「進路指導の体系化をはかる」ことをめざし、「進路指導の全体像」を描こうと研究活動をすすめた。

研究紀要「進路指導の体系化をはかる——一人一人に定着するために」の刊行。会報20、21号発行。研究委嘱校 熊谷市立荒川中。

### 昭和54年度（会長・柿沼定雄）

前年度と同じ研究主題のもと、研究紀要の改訂に取り組んだ。

11月2日、熊谷市立荒川中学校において、第5回関東甲信越地区中学校進路指導研究協議会埼玉大会を開催した。1都9県からの多数の参加者をえて大会を開催し、7分科会の全てに埼玉からの研究報告を行うとともに、全体会において「進路指導の体系化をはかる」のテーマで研究発表を行った。埼玉の進路指導が中学校教育の中に深く浸透し定着しているとの評価を受けた。研究紀要「進路指導の体系化をはかる——一人一人に定着するために」、会報22号発行。「十五周年記念誌」を発行。

### 昭和55年度（会長・堀内伊勢治）

研究主題「豊かな人間性を育てる進路指導——その具体策——」。各学校現場すぐに役立つ実践指導資料を編集し、毎年実施してきていく進路指導研究協議会等を活用して普及をはかり、もって県全体における進路指導の充実、進展をめざした。

研究紀要「すぐに役立つ進路指導案と学習ノート」を刊行。会報23号発行。

### 昭和56年度（会長・堀内伊勢治）

前年度からの研究主題のもとで、研究紀要の改訂をすすめた。研究協議会等で、進路学習にふり向けられる時数が少なく、指導が難しいという意見が多いことをふまえ、3年間の学級指導のなかでこれだけは指導しようという最低線を示しながら「すぐに役立つ進路指導案と学習ノート」を完成させた。会報24号発行。

### 昭和57年度（会長・堀内伊勢治）

研究主題「豊かな人間性を育てる進路指導」のもとで、教育活動全体を通して行う進路指導の具体的な内容を明らかにすることをめざした。学習指導要領の総則の趣旨を、各教科・領域の指導でどう具体化するのかを視点に研究に取り組み、研究紀要「進路指導の実践——教育活動の全体を通して——」をまとめた。

26地区進路指導研究協議会の発足。研究会発足以来数多くの研究協議会を行い、特に昭和45年以降は県教育委員会と共に県下2会場、4会場で研究協議会を毎年開催してきた。その成果のうえに、さらに進路指導の実践の広がりと深まりを求めて、県下26会場で研究協議会を実施することとした。「26地区中学校進路指導研究協議会報告書」刊行。会報26号。

### 昭和58年度（会長・鈴木正治）

57年度に継いで、教育活動全体を通して行う進路指導の内容や方法について研究をすすめた。進路指導は教育活動全体を通して行うと言われながら未解明のところが多い、全国的にも例を見ない困難な課題であったが、研究紀要「改訂版進路指導の実践——教育活動の全体を通して——」をまとめることができた。

26地区進路指導研究協議会は、第2年目を迎えて、一層の広がりと質の高まりを見せてきた。生徒たちの感想の中に「役立った」「もっとこうした授業があるとよい」などの評価がみられた。学級指導における進路指導が、子どもたちの進路発達、進路先決定に有效地に作用している証拠とみることができる。「報告書」作成。

会報27号発行。

## 2、昭和59年度の研究活動

(1) 「豊かな人間性を育てる進路指導——その具体策——」を研究主題に、次の7部会で研究をすすめている。

- ① 昭和58年度研究紀要改訂作業部会。
- ② 自己理解部会……日々変容し成長していく生徒の理解はどうしたらよいか。資料の収集や記録はどうすればよいか。生徒に自己理解を得

させる指導はどうあればよいか。

③ 進路情報部会……進路の選択にあたっては多くの情報、知識が必要だが、情報不足によって正しい進路選択が妨げられたり不適応を起こしている例が多い。情報の収集、提供等はどうすればよいのか。

④ 進路相談部会……生徒ひとりひとりが自己理解を深め、将来の進路選択が計画的にできるようにするための進路相談はどうすればよいのか。いつ、どこで、どんなことを、だれがどのように行ったらよいか。

⑤ 保護者との連携部会……生徒が、自らの意志と責任をもって生きぬき、なにをなすべきかを考え、卒業後の第一歩を誤りなくふみだせるようにするには、保護者と教師はどうすればよいのか。

⑥ 進路先との連携部会……卒業後もひき続き指導・援助の手をさしのべ、在学中の進路指導を評価するためにも、進路先との連携は不可欠であるが、具体的にどうすればよい。

⑦ 3年生の指導検討部会……3年生の進路選択の指導・援助をどうすすめたらよいか。

(2) 26会場における中学校進路指導研究協議会の実施。全県的に定着しつつあるが、3年目を迎えてさらに充実発展するよう努力している。

(3) 研究委嘱校 富士見市立勝瀬中

### 3、今後の課題

昭和58年11月に発表された中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告は、高校入試に關し、「生徒の能力、適性、進路希望等に即し……中学教育に過度の重圧とならないよう検討する必要がある」として、中学校進路指導の改善を求めている。中学校において、偏差値のみを重視することなく、生徒の能力、適性、進路希望等を十分ふまえた、適切な進路指導の推進を求めている。

これを受けるかたちで、高等学校入学者選抜方法の改善に関する検討会議の報告書が出され、学校教育法施行規則の一部改正が行われた。

こうしたなかで、全教員による主体的な校内

進路指導体制を整備し、入学時からさまざまな教育活動を通して生徒の能力・適性や進路希望等を的確に把握するとともに、生徒が将来への展望にたって自らの進路を主体的に選択する能力や態度を十分育成することが望まれている。

これらは、本研究会の、発足以来の進路指導のあるべき姿を求めての研究と実践が適切な方向で取り組まれていたことを証明するとともに、今後の本研究会の任務の重要性を示しているとみることができる。

当面、本研究会としては、中学校の教育活動全体を通して行う進路指導の内容と方法を具体的に明らかにしていくことで課題に応えることになるであろう。全県的な取り組みとして定着しつつある26地区における進路指導研究協議会を、全県の先生方の支援・協力をいただいてさらに充実させ、子どもたちの成長、豊かな人間性の育成をめざす埼玉の進路指導の充実発展のために努力したい。

# 学校視聴覚教育連絡協議会

## 〈埼玉県放送教育研究会〉

### 1、会のあゆみ

本研究会は、大里郡幡羅小（現深谷市立幡羅小）での研究会が契機となり、終戦間もない昭和22年11月発足した。その後40年近く活動の歩みを続けている。この中で特筆されるものは、昭和57年11月に、延2万余名という記録的な参会者を集めて開催された第33回放送教育研究会全国大会（埼玉大会）とその成果を関係者から高く評価されていることである。

○歴代会長（　）内は最終勤務校・現任校名

栗原 勇蔵先生	（川口幸町小長）	昭22～26
岸田菊之助先生	（浦和白幡中長）	27
閔根 登先生	（岩槻中長）	28～30
君塚啓太郎先生	（浦和仲本小長）	31～43
竹内 栄助先生	（南浦和中長）	44
台 知道先生	（大利根中長）	45～49
越阪部三郎先生	（所沢東中長）	50～52
田村 武久先生	（深谷小長）	53～55
原 真次先生	（浦和善前小長）	56～

### 2、主たる活動と事業

- (1) 昭25年 第1回埼玉県放送教育研究会
- (2) 昭29年 第5回放送教育研究会関東甲信越地方大会（大宮桜木小他）
- (3) 昭31年 第1回埼玉県放送教育夏季研修
- (4) 昭36年 従来の幹事制から事務局制にして活動の充実を図る。
- (5) 昭39年 第15回放送教育研究会関東甲信越地方大会（熊谷東・西小他）
- (6) 昭47年 第1回埼玉県視聴覚・放送合同大会開催（川越市）
- (7) 昭50年 第26回放送教育研究会関東甲信越地方大会（三峰）
- (8) 昭53年 環境教育と「テレビ」（みどりの地球）研究発表会（浦和市）
- (9) 昭57年 第33回放送教育研究会全国大会

（浦和・川口・大宮他）

### 3、特色ある活動

#### (1) 夏期研修会

昭和31年度より県内の青年の家・国民宿舎等を会場とし1泊2日を原則とした研修会である。県教委、大学教授、全放連、NHK等より講師を招き、全体会、分科会で研究協議を重ねているが、53年度より県教委と共に開催になり、夏季放送教育研究集会と名もあらためて、主に国立婦人教育会館を会場として開催している。

#### (2) 委員会活動

昭和30年代施設委員会、40年代教科等研究委員会、家庭視聴委員会、これらの活動が50年代の小中専門委員会、さらに放送教育の理論の構築と意義づけを実践的に確かめようと研究している現在の研究開発委員会につながり研究活動の充実、深化を図っている。

#### (3) その他の事業・活動

発足以来、その年度の活動や研究の概要を研究紀要にして、県下全小中学校に配布している。昭和49年度以降は、視聴覚教育連絡協議会として、学視連・教育機器研究会と合同で発行している。また、県教委・NHKともに研究委嘱校の研究活動への協力、さらに昭和54年度から県小中学校児童生徒校内放送コンテストを実施し、校内放送の充実を図っている。

### 4、運営に当たっての問題点

予算総額が少なく、研究成果刊行費の占める割合が大きいので、研究会として最優先すべき研究活動等を制限せざるを得ない点問題であろう。

### 5、昭和59年度の研究活動

#### (1) 研究主題

豊かに生きる人間の形成をめざした放送学習の実践をとおしてその効果を明らかにする。

## (2) 主な活動

5/30 研究協議会、7/27~7/31 全小放  
・全中放特研参加、8/17~18 夏季放送教育  
研究集会、10/18~19 関プロ、11/15~16  
全国大会参加、12/25 第6回校内放送コンテ  
スト、2/下 理事研究協議会・校内放送コン  
テスト表彰式、研究開発委員会の研究（通年）、

紀要刊行等。

## 6、今後の課題

多様化する学習方法の中、放送の果たす役割  
を再確認し、豊かに生きる人間育成に貢献でき  
る研究活動の拡大と深化を図られねばと考える。

（文資 副会長 原田四郎）

## 〈埼玉県学校視聴覚教育連盟〉

### 1、会のあゆみ

本研究会は、視聴覚メディアの拡大や、それ  
に伴う教育方法の改善が叫ばれてきた昭和36年  
度に、すでに結成された入間地区からの呼びかけ  
によって発足した。

特に、本会では、学習指導の改善を意図した  
視聴覚教育のあり方を追求することを基盤にし、  
日本学校視聴覚教育連盟と共に、学習指導要領  
に準拠した教育映画作製や利用研究に委員を派  
遣するなど積極的に活動してきたほか、地域の  
視聴覚ライブラリーの設置や充実に大きな貢献  
を果たしてきた。

### 歴代会長

初代 小山 辰吉先生 昭38年度

第2代 若旅 進一先生 昭39、40年度

第3代 橋口日出雄先生 昭41、42、43、44  
45年度

第4代 山田 利平先生 昭46、47、48年度

第5代 篠塚 保先生 昭49、50年度

第6代 越阪部三郎先生 昭51、52年度

第7代 新井 英彦先生 昭53、54、55年度

第8代 河野十四郎先生 昭56、57年度

第9代 折原 浩一先生 昭58年度

第10代 小久保幸郎先生 昭59年度

### 2、主たる活動と事業

本研究会は、各市町村教育研究団体の視聴覚  
教育研究部を基として、各地区（教育事務所）  
単位の学校視聴覚教育連盟を母胎として構成し

ている。したがって、各地区の学校視聴覚教育  
連盟の諸活動についての指導にあたっては、各  
教育事務所の視聴覚教育担当指導主事の先生方  
を指導委員としてご依頼申し上げ大層お世話に  
なっている。

また、県学校視聴覚教育連盟に、その各地区  
の連合体として組織され、県教育局指導課の視  
聴覚教育担当指導主事の先生方、及び教育放送  
課の指導主事の先生方を指導委員にお願いし、  
① 視聴覚教材教具による学習指導法の研究、  
② 教材の選定・評価・効果測定、③ 視聴覚  
教育の企画・製作の促進、④ 加盟団体の視聴  
覚教育設備の完備とライブラリーの拡充等の活  
動を実施してきた。

特に、昭和51年度までまでは、「学習指導改  
善のための視聴覚教材の利用」をテーマに、未  
来社会に生きる子ども像を見通し、科学の発達  
と共に開発される視聴覚メディアのシステム化  
と新しい教育方法の開発を意図し、① 学習指  
導改善の方途の研究、② 視聴覚機器の整備と  
操作技術の向上、③ 地区研究活動の重視と情  
報活動の活発化等、指導者研修会、研究協議会  
等の研究活動を通じ、具体的に研究してきた。

### 3、特色ある活動

#### (1) 第25回関東甲信越地区大会

昭和52年11月8、9日の両日、所沢市内小中  
学校を会場にして開かれた研究大会では、34分  
科会、約2,700名の参加者となる大規模なもの

となった。この大会では、「わたしにも、ぼくにもできた」喜びの味わえる学習指導」をテーマにし、子ども達が真に学ぶ喜びのある学習をめざした学習指導を追求し、ひとりだらのできる学習のための視聴覚教育のあり方を実践し発表していただき、「これから教育を意図した画期的研究」と文部省視聴覚教育課長補佐岩山正成先生、県教育局参事鳥塚恵和男先生からおほめいただくと同時に、参加者からも大好評の言葉をいただいた。

これを契機に、子ども達の自己実現を図る授業とすべての子どもの特性をひきだす視聴覚教育の実践に主眼をおくことにしてきている。

## (2) 研究集会

先生方の研究開発のための実践報告と理論研究のための研究集会を、埼玉大学教授中村次郎先生を迎えて、58年8月11、12日に入間郡越生町の県厚生年金休暇センターで初めて開催した。多数の参加者を得て深い研究がなされた。

## 4、昭和59年度の研究活動

### (1) テーマ

昭和58年11月15日に発表された中教審中間報告では調和のとれた人間性豊かな児童生徒を育成するために、知育面では、思考力・判断力・創造力を基本とするとしている。行動できる子ども、自己教育力を身につけ真に自己実現が図れる子どもの育成のための感性を含めた教育実践と、視聴覚教材教具の果たす役割りを見直すため、「豊かな人間形成をめざし、充実した学習を成立させるための視聴覚教育（教材）の役割りを研究する」と設定した。

### (2) 夏期研究集会

8月20日、大宮市民会館において、多数の先生の参加を得て実施した。

### 5、今後の課題

指導事項を精選し学習目標を明確化した体験交流の学習への視聴覚教材の果たす役割りを、もっと広く深く研究していくことが要求される。

（文責 事務局 鮎津益帆）

## 〈埼玉県教育機器研究会〉

### 1、あゆみ

本会は昭和42年6月、シート式磁気録音機（シンクロファックス）を学習指導の中に導入し、一人一人を生かす学習指導法の研究を意図して「埼玉県シート学習研究会」として発足した。

その後、学習指導に活用される機種の多様化にともない、会の名称を「埼玉県教育機器研究会」と改称し、昭和45年5月には埼玉県連合教育研究会の加入を認められ、補助金の交付も受け名実共に正式な研究団体となった。

全日本教育システム工学研究協議会（前「全日本シート教材研究協議会」）には、本会からも常任理事を送り、常に連携を密にし、夏季研修会等の講師依頼や講習会への参加等をはじめ本会の充実、発展のための指導を仰ぎ、今日に

至っている。

夏季研修会はようやく定着し、会場を県内各地に移し、意欲旺盛な先生方の参会が数多いことに意を強くしている。

### 歴代会長

第1代 宗像憲治先12生（現埼玉県教育公務員弘済会常務理事）

第2代 12持田茂雄先生（現皆野町教育委員長職務代理者）

第3代 角田 樹先生（12現埼玉県教育局指導課指導主事）

### 2、主たる事業

昭和48年度、全日本シート教材研究協議会の全国大会を、第9回全日本授業システム研究大会埼玉大会と銘打って浦和市及び大宮市を中心

に開催した。

全体会（パネルディスカッション及び講演会——「システム工学における最適化の考察」——東大教授 渡辺 茂）、分科会（小学校～5、中学校～6、高校～1、全体～2）及び公開授業（浦和市立大原中学校、大宮市立南中学校）の二部構成を中心とし、なお見学校として川越市立第一小学校と埼玉県立久喜工業高等学校に協力をお願いし、希望者に参観して頂いた。

### 3、活動状況

#### (1) 研修会の開催

毎年8月下旬に夏季研修会を開催する。県内各地に会場を移し、その地区的盛り上がりをねらっている。

講演会と研究報告・提案・研究協議の2部構成とし、県内各地から熱心に実践研究を積んでいる先生を推薦して頂き、発表を依頼している。

#### (2) 研究集録の発行

研修会の発表資料等をもとに集録を作成し、県内各小・中学校に配布し、ご高覧を頂いている。

(3) 埼玉県聴覚・放送研究合同大会への参加（毎年11月に開催）

#### (4) その他

### 4、昭和59年度の夏季研修会概要

#### (1) 趣旨

教育現場、教育現場を踏ました中で、習熟度に応じた学習の成立をめざすとき、教育機器の活用をもとに学習指導の効率化について研究協議し、学習指導の一層の改善と充実をはかる。

(2) 期日 昭和59年8月24日（金）

(3) 会場 越谷市立図書館

(4) 内容

ア 講演 「海外における教育機器の活用」  
講師 文教大学教授 金子孫市

イ 研究報告

「形式的評価のマイコンによる処理—完全習得学習をめざして」

（深谷明戸中 久木健志先生）

ウ 提案

### 「VTRを利用した理科指導」

（吉川南中 阿島文男先生）

「理科指導における学習の効率化をめざした教育機器の活用」

（越谷桜井南小 大塚正幸先生）

### 5、今後の課題

小規模な会ではあるが、全会員が研修意欲旺盛で、相互に刺激し合っている。

次代を担う若手会員の補強が本会の課題であるが、そのためには現場教師の要求に答え得るような充実した研修会の開催を継続することが必要である。

（文責 会長 玉之内 淳）

# 教育心理研究会

## 1、会のあゆみ

埼玉県教育心理研究会には、現在のところ、創立以来の足跡を総括したものがない。そこで、本会の顧問の先生方のお話をもとに、あゆみの概要を記してみる。

### ① 昭和27年に本会創立される。

昭和23年10月31日に規則で、埼玉県教育研究所が設立された。所長木村先生、所員は橋本・中川・三好・宗像先生のわずか4人でスタート。当時、そこでは何を研究するのか問われた、教育研究現場に即して学校の先生方が、こんなふうにすれば、子どもがよくなるであろうというを作るのが研究所であると考えられていた。

そして、4年後、教育心理の研究をされた所員の村上先生を旗頭に、現場とのつながりを強くして研究所の研究が生きるように、教育心理研究会を作つて、その人たちと一緒にになってやって行こうと考え、本会が設立された。

初代会長は、たしか、当時の校長会長の高橋先生であった。会の運営の中心は研究所の所員であった。例えば、故河野敏雄先生も研究所員で幹事として活躍された。従つて、本会は教育研究所の分身であったともいえよう。そして、本会は教育実践・教育評価などの研究を経て、学級経営と教育相談を中心に現場の課題にこたえてきた。

### ② 文部省の助成研究団体に。

年度は不明であるが、文部省が一県に対し2百万円～3百万円の助成金を研究団体に出すことになった。その時、本研究会にも（他県にはあまりない）助成金が交付され今日に至っている。このことは、埼玉県教育研究所の所員が中心となって教育心理研究会を設立し、立派な研究活動をしてきた賜ものである。

### ③ 研究会長は。

本会の会長の任期は現在2年で再選をさまたげない規則になっている。しかし、都合により任期半ばで退かれた方もおるようである。初代会長から現在の会長まで9の方々が本研究会の発展のため盡力されている。

## 2、主たる活動と事業

本研究会が設立された目的は、どうすれば子どもをよくすることができるか、現場の教師の教育実践の研究である。従つて、その活動も、実践にもとづいた学級経営であり、教育相談を中心とした=児童生徒理解と指導=ものである。

子どもをよくすることは、子ども一人ひとりをよく知ることである。そのための一方法として、本研究会が県下の先生方のために実施してきたものに、田中ビネー個別知能検査の技能講習会がある。本会の事業として毎年実施しているものである。また、教育心理研究発表会を行つて、どうすれば子どもをよくすることができますか、にこたえようとしている。

研究活動の集約である研究集録も19集になっている。

## 3、特色のある活動

今から10年前に刊行した研究小冊子「子どもの心理と指導=心にとけこむ指導のあり方=」について述べてみる。

### ① 刊行にあたって

当時、「すべての子どもにゆきとどいた教育を」養護学校の義務化が叫ばれる中、子どもに対して、期待過剰・教育過剰・保護過剰の家庭があまりにも多くなってきた。そして、遊びたいばかりの子どもに、学習塾・ピアノ・お絵かき等もりだくさんのスケジュールをあてがい、一方、母親は、アルバイト等により、子どもと

の対話の時間を失い、家庭料理の味を、家庭団らんのふん囲きを忘れさせ、そのひずみが問題視されてきた頃であった。

このような時代背景の中で、毎日の実践上起こるいくつかの問題につき、保護者と教師が心を合わせ、子どもの幸せのために共に考えたいことからを記述し、問題解決に役立てていただきたく刊行することになった。

#### ② 研究の方法

広く、県下から教育心理・教育実践にすぐれた実績を持つ先生方を選出し、研究のための専門委員会を作り、共同研究に取り組んだ。

研究は、40名をこえる専門委員会で、「教育心理研究に対して教育界が求めるものは何か」の話し合いからすすめられ、各委員から百数十項目もの研究内容が出され、1つ1つ研究協議し、体系化を行い、ある項目は、同一として統合し、また、新たに項目を加えるなどして全体構造を作った。

そして、これらの研究協議を参考にし、小委員が各項目についてまとめ、これを専門委員の全体会で徹底的に討議研究してまとめた。

#### ③ どんな内容

当時強く望まれていたものは何かがよくわかる。項目は端的で、しかも、読んでみたくなるような工夫がなされた。そのいくつかをあげてみると、

- ・ 親の態度と子どもの性格。
- ・ これだけは、ぜひ入学前に。
- ・ よい習慣は、学習向上要因となる。
- ・ すすんで勉強させるには。

#### ④ 印刷した冊数

県下小中学校、県内教委、教育センター、教育事務所等関係機関に配布した。その他、県内の教師や父母の要望にこたえて配布した。その結果、1万3千部にのぼった。

### 4、運営にあたっての問題点

どの会にしても、問題点のない所はないであろう。そんな中で、まず、嬉しい問題点から述

べ、次に、どうにもならないであろう問題点について述べることにする。

#### ① 会場の設営

近年、教育心理研究会の事務に参加する先生方が増え、そのための会場設営に苦慮している。県下各地区に会場をうつして研究会を開催し、当研究会の発展を計りたいと考えているが、参加人数とそれにみ合う設備のある会場が確保できず、会場が固定化していることである。

1会場100名の研究会参加者を収容できる会場には限度がある。(暑い真夏の1日間の研修で、しかも交通便、駐車場等を考慮すると)それでは、参加者をしほって、会場を多くすることも考えられるが、実施するとなると、また、種々問題が出てくるようである。

#### ② 少ない予算

本研究会の昭和59年度の予算は31万円である。研究集録を作成すると、残りは7万円あまり、これで1年間運営していくのは容易なことではない。通信費が生み出せないので、秩父まで開催文書を運ぶこともしばしばである。勿論、会場費などの余裕もなくて無償の所を探すほかみちがないのが現状である。

### 5、昭和59年度の研究活動

#### ① 研究主題

##### 「実践にもとづいた学級経営と教育相談」

##### ——児童生徒の理解と指導——

#### ② 主題設定理由と方針

いうまでもなく、学級経営は、学校教育目標を効果的に達成するために必要な諸条件の整備を、学級を単位として考えることである。そして、学級を構成している集団は、あらゆる教育活動を進めていく最も基本的な子どもの集団であり、指導者は担任である。したがって、学級経営の実践をより効果的に充実発展させることが強く望まれる。

ところで、現在の児童生徒の様子をみると、基本的生活習慣の欠如、暖かみのある人間関係の希薄さ、自主自律の精神の欠如、耐性なくな

げやりになってしまふなど、多くの問題がうかがわれる。そして、校内暴力や家庭内暴力、万引といった反社会的問題行動、また、登校拒否や心身症といった非社会的問題行動等が急増し低年令化している。その中で、学校、家庭、社会はそれぞれどうあるべきか問われると共に、教師、親、おとの立場でどう対応すべきか強く迫られている。児童生徒の理解と指導こそ重要であると考えたわけである。

また、学級経営の中で、児童生徒の教育活動に視点をおき、児童生徒の理解の上に立った授業の創造、一人ひとりを生かした効果的な指導の実践研究をすすめることが急務である。

これらのことから、本主題を設定し、具体的な実践研究の推進をはかることにした。さらに、全教育活動の展開にあたって、全職員の共通理解のもとに、子ども同志、教師と子どもの信頼感にうらづけられた望ましい人間関係の確立をはかりながら、「人間性豊かな児童生徒の育成」を達成するよう努力していきたい。

### ③ 活動の状況

#### ア 総会並びに研究協議会

期日 昭和59年6月9日

会場 埼玉県立南教育センター

内容  
・昭和58年度事業並びに決算報告  
・新役員承認の件

本年度は会長退職にともない、新会長の承認を得た。その結果川島中学校長、関口武先生が新会長に就任された。

・昭和59年度事業計画予算案審議  
・研究協議

昨年度実施した事業の反省の上に、今年度はさらに充実発展させていくための方策について研究協議した。特に、研究会の会場については、全県下の教師が参加しやすくなること。本会の底辺を広げる配慮をした会場設定をする事。同一会場に固定しないようにすること等が各理事から強く出された。

また、児童生徒理解のための心理検査講習会の内容について、昨年度の参加者アンケートを

もとに、今最も望まれているものは何か。県内の先生方に、そして、一人ひとりの子どものために役立つことのできる諸検査は何かについて集中討議がなされた。

#### イ 児童生徒理解のための諸検査講習会の開催

本年も、東西南北の県下四会場で実施した。なお、講習内容については、本研究会の長い歴史の中に位置付けられていた個別知能検査を、昨年実施しなかった二会場で実施した。会場別の実施状況をまとめてみると、

・ 東部地区 8月17日 9時～16時

会場 杉戸中央公民館

内容 親子関係診断検査と田中ビネー知能検査

参加者 80名

・ 西部地区 8月23日 9時～16時

会場 東松山中央公民館

内容 親子関係診断検査と問題行動予測検査

参加者 121名

・ 南部地区 8月22日 9時～16時

会場 大宮合同庁舎

内容 親子関係診断検査と田中ビネー知能検査

参加者 81名

・ 北部地区 8月8日 9時～16時

会場 北教育センター

内容 親子関係診断検査と問題行動予測検査

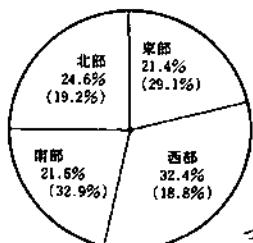
参加者 92名

以上のような結果であった。どの会場においても熱心に参加する受講者の姿が印象的であった。なお、受講者について、地区別・男女別・小中学校別にまとめてみると次のようになつた。

### ～諸検査講習会（受講者）の分析結果～

(( ))は昨年度)

(ア) 地区別

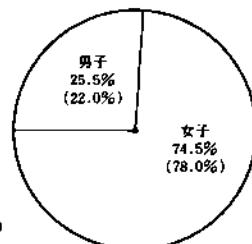


西・北部の参加者が多い。昨年と比較すると、東・南部が大変少なくなっている。そして、昨年大変少なかった西部が増加している。このことは講習内容と関係が深いようだ。

(イ) 男女別

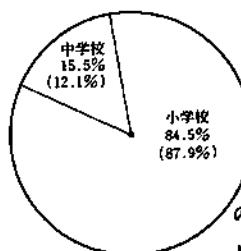
絶対数の関係から男子職員の割合が少ないのは当然である。昨年と比較した時、やゝ男子の

受講者が多くなった。



(ウ) 小中学校別

小学校が圧倒的に多いのは当然といえる。昨年と比較した時、中学校の職員の受講者がやゝ増加したのは喜ばしい。



### ウ 第2回 理事研究協議会

日時 昭和59年11月上旬予定

会場 南教育センター予定

内容 事例研究発表会についてを中心に研究協議の予定

### エ 事例研究発表会の開催

1月下旬～2月上旬に、県下4会場において研究発表会開催の予定

### オ 第3回 理事研究協議会

日時 昭和60年2月下旬～3月上旬予定

会場 南教育センター予定

内容 昭和59年度事業の反省と次年度への方策等研究協議の予定

### 6、今後の課題

最近の教育の現状を見ると、知育面の指導にのみ走っているように思われる。子どもを知ろうとしていないのではないか等よくいわれている。今最も必要なことは子どもを伸ばす研究である。それには、どうしたらよいか。それは、学習を子どもに返すことである。子ども一人ひとりを知ることである。これこそ、教育心理の役割りであるといえる。

このように考えると、実践にもとづいた児童生徒の理解と指導の研究が益々重要となってくる。そのためには、組織の充実と一人ひとりの地道な実践研究者の輪を広げていくことが今後の大きな課題である。

# 埼玉県特殊教育研究会

本研究会は、昭和25年9月25日埼玉大学教育学部附属小学校講堂で、創立総会を開き結成された。その当時は、県内でわずか埼玉小学校と元加治小学校の2校のみ、それぞれ1学級ずつ特殊学級が設置されていたにすぎないという状況であった。以来30数余年、幾多の曲折を経て今日に至っている。中でも54年養護学校の義務制施行、56年国際障害者年、本研究会の創立20周年の記念誌発行といったことなどが研究活動の大きな節となって進展してきたと言える。

現在、本研究会としての主な事業は、総会、埼玉県特殊教育研究協議会、特殊教育研究発表大会、研究委嘱、会報発行などである。そしてこれらの事業を円滑に進めていくため年6回程の理事会を開催している。更に関プロ大会、全国大会への参加を促すことや、県内研究資料の収集を行っている。

以下に、会のあゆみ及び主な事業について特筆すべきことがらを記す。

## 1 会のあゆみ

### 年度

- 25 ○埼玉県特殊教育研究会規約制定  
○創立総会 9月25日
- 29 ○「特殊教育の歩み」第2号発刊
- 30 ○担任者会を県下全体で年3回集まることにした。
- 35 ○「精神薄弱児教育の実際」10周年記念発刊  
○学習帳作成小学校算数、音楽、中学校生活、作業。
- 36 ○第1回精神薄弱研究協議会開催
- 38 ○「学習ハンドブック」の作成
- 39 ○実態調査委員会発足
- 40 ○実態調査委「運動能力」について調査
- 41 ○実態調査委「算数能力」について調査  
○言語障害研究会がサークルとして発足  
42年に特殊教育研究会の組織の中に位置づける。
- 42 ○理事を各班より選出し、理事の互選により、常任理事を各事務所単位に選出することにした。  
○実態調査委「国語能力」について調査  
○教材教具作成委員会発足 ドリルブックを作る。
- 43 ○教材教具作成委員会と学習書編集委員会を合併し、教材教具作成委員会として、ドリルブックやワークブック作成  
○特殊教育研究会の規約改正  
○「会報」創刊号発行。
- 44 ○第9回精神薄弱教育研究協議会は第3回関東甲信越地区精神薄弱教育研究協議会埼玉大会とあわせて開催する。参加者、延人数約2000名  
○特殊学級、養護学校担任者の研究組織の確立（言語、数量、音楽、図工、体育、作業、視聴覚、言語障害）  
○特殊教育研究会第1回発表大会開催
- 45 ○聴覚言語障害班を組織の中に位置づけ部とする。  
○「戦後の埼玉県精神薄弱教育史」発刊  
○特殊教育研究会結成20周年記念式典挙行
- 54 ○第19回埼玉県特殊教育研究協議会は第13回関東甲信越地区精神薄弱教育研究協議会埼玉大会と合わせて開催する。  
参加者数586名、県内769名
- 56 ○国際障害者年、研究会創立30周年を記念し「埼玉の障害児教育」—実践と課題—発刊する。

## 2 埼玉県特殊教育研究協議会の推移

本研究会の最大の事業である研究協議会について、年度ごとにテーマ、分科会数、参加者数等についてまとめてみる。

回	年度	テ　ー　マ　等	分科会	参加者
1	36	「精神薄弱児の指導法について」「特殊学級の教育課程の編成について」	2	不詳
2	37	(実践報告、教育課程講義と質疑)	3	"
3	38	「設置・管理・運営」「開設当初の問題」「指導計画と指導法」	3	"
4	39	「新しく設置される特殊学級」「設置後の諸問題」「身辺自立」「集団生活」「職業指導」	5	"
5	40	前年の分科会に「教育課程に関する問題」が加わる。	6	"
6	41	「特殊学級設置の諸問題」「特殊学級開設当初の問題」「生活総合学習の位置」「作業総合学習の位置と内容」「題材学習の位置と内容」「能力差に関する問題」	6	"
7	42	「特殊学級設置上・設置当初・運営上の諸問題」「特殊学級卒業生の実態とその諸問題」「生活総合学習と言語の系統的反復的学習」「生活総合学習と理科的社会科的学習」「作業総合学習と統計的指導」	9	"
8	43	「特殊学習開設当初の学級経営 小・中」「地域社会・父母への連絡啓蒙」「生活総合学習のすすめ方 小・中」「作業総合学習のすすめ方」「題材学習のすすめ方」「教材教具の研究」「能力差に応ずる指導」「特殊学級の問題児扱い」「言語障害児の指導」	10	381
9	44	(第3回関東甲信越地区精神薄弱教育研究協議会とあわせて開催 分科会名略)	15	延人数 約2000

10	45	「言語・数量・音楽・園工・体育・作業・視聴覚・言語障害児の指導」「学級経営」「生活単元学習」「軽度の子どもの指導」「問題行動をともなう子の指導」	12	
11	46		15	600
12	47	「ひとりひとりの子どもの能力をみつめた教育実践をめざして」	15	490
13	48	(同上)	17	691
14	49	(同上)	14	425
15	50	「ひとりひとりの子どもの能力をみつめ、持てる力を最大限に發揮させる教育実践を求めて」	15	470
16	51	「ひとりひとりの子どもの持てる力を最大限に發揮させる教育実践をめざして」	17	502
17	52	「ひとりひとりの実態に即した指導法の探求」	15	520
18	53	(同上)	18	624
19	54	((第13回関東甲信越地区精神薄弱教育研究協議会埼玉大会とあわせて開催)	22	県外586 県内769
20	55	「ひとりひとりの実態に即した指導法の探求」	20	555
21	56	「一人ひとりに即応した教育を目指して」	21	
21	57	「一人ひとりの実態に即した指導の探求」	22	613
23	58	同上	22	610
24	59	同上	22	600

## 3 研究委嘱校の発表

会発足以来の研究委嘱校の発表について、テーマ発表校を年代順にまとめてみる。

### 年度

- 25 「テーマ不詳」北埼玉・埼玉小
- 26 「特殊教育の研究」(精神遅滞児)  
入間・元加治小。 「能力別指導の実際」  
比企・野本小。「精神薄弱児の識別と指導」北葛飾・幸手小。
- 27 「普通学級および特殊学級における精神薄弱児の取扱い」北葛飾・幸手小。

- 「特殊教育の実践」(特殊学級・普通学級)浦和・常盤小。「学業の振るわない児童の指導」比企・野本小
- 28 「特殊教育の実践」(普通学級…特殊児童の取扱い・特殊学級…生活指導と基礎学習の関連)浦和・常盤小。
- 29 「精神薄弱児の職業教育」浦和・常盤中  
「養護学級の教育計画と特殊児童の治療教育」川越・第二小。「情緒不安定の研究」春中部・柏壁小。
- 30 「生きぬく力を育てる教育」(生活教育)浦和・常盤小。「精神薄弱児の職業教育」浦和・常盤中。「ちえの遅れた子供の言語教育」行田・埼玉小。
- 31 「遅れた子どもの算数指導」所沢・小手指小
- 32 「個々を生かす教育」所沢・所沢小
- 33 「能力に即した教育の実践」—おくれた子どもの学習指導—熊谷・西小
- 34 「遅れた子どもの指導」飯能・第一小。
- 35 「遅れた子どもの指導」加須・加須小。
- 36 「能力差に応じた指導」秩父・花の木小
- 37 「小・中一貫の教育課程の編成、小・中一貫の作業内容の分析」加須・小、中。  
「特殊学級における教育課程と指導法の研究(職業指導およびそれにつながる小学校の情操と生産の教育を中心として)」大宮・大宮小、東中
- 38 「特殊学級の教育課程と指導法」所沢・小、中。「特殊学級経営の実践・普通学級における遅進児の指導」岩槻岩槻小
- 39 「精神薄弱児の心身の発達を促進するには、どうしたらよいか」行田・中央小。
- 40 「特殊学級における精神薄弱児教育の研究」(基礎的な作業学習の指導、普通学級における学業不振児の事例)与野・上落合小。「同上」(男女別作業総合学習と能力別編成による指導)与野・与野東中。
- 41 「実態に応じた特殊学級の運営はいかにあるべきか」熊谷・地区小。玉井中。  
荒川中。
- 42 「小学校特殊学級における題材学習」本庄・地区小。「中学校の作業総合学習」本庄・地区中。「生活総合学習ならびに作業総合学習の指導をどのようにしたらよいか」川越市立養。
- 43 「精神薄弱児の学習能力の追求」東松山・第一小、東松山松山中。
- 44 「社会自立のための生活能力を高める生活総合学習の展開」熊谷・大沢小、大袋小「社会自立のための生活力を高める作業学習」越谷・地区中
- 46 「学習意欲を高める指導」蕨・北小。  
「子どもの自立性を伸ばす特殊教育はどのようにしたらよいか」桶川・川田谷小
- 47 「特殊教育の推進」—特に学習資料の研究—白岡・篠津小。
- 48 「ひとりひとりを生かす教育」秩父西小
- 50 「ひとりひとりを生かす教育をめざして」春日部地区4校(共同)
- 51 「障害を持つ子どもの指導体制づくり」—ひとりひとりを伸ばす教育」東松山・第一小。
- 52 「特殊教育教育課程(数学の指導)研究」—ひとりひとりの能力を伸ばし自立できるための指導—伊奈・伊奈中
- 54 「適正な就学指導と障害の種類や程度に応じた教育を求めて」行田班
- 55 「心身に障害をもつ子の理解と指導法の研究」川越・川越小
- 56 「重度・重複化する児童生徒一人ひとりの実態に即した養護・訓練の指導はいかにあるべきか」県立越谷養。
- 58 「社会的自立をめざす学習」—試みとしての陶工作業—浦和・岸中。

#### 4 昭和59年度の研究活動

##### (1) 研究活動の方針

会員一人ひとりが共に学び、共に研究し合いながら特殊教育を推進する教師としての専門性を高め、さらに下記の事項を配慮し、障害に応じた指導の充実を期していくたい。

「一人ひとりに即応し、充実した教育を目指して」

○障害別に指導内容・方法を確立し、教育活動の実践につとめる。

○適正な就学指導のあり方、交流教育の推進、進路指導の充実を図る。

○地区・班活動の推進ならびに地域への啓蒙を図る。

○研究活動の情報交換と県内資料の収集。

##### (2) 活動内容

①昭和59年度 総会 6月12日(火)

②第24回埼玉県特殊教育研究協議会

8月9日(木)～10日(金)

③第16回特殊教育研究発表大会 12月7日

④研究委嘱校の発表 「生活する力を育てる指導」県立春日部養 11月9日(金)

⑤その他 関プロ、全国大会への参加。地区、班活動、常任理事会、理事会、会報の編集、発行。

#### 5 今後の課題

会発足以来30有余年、この間社会の変容と関わりながら多くの曲折を経て発展してきたと言える。現在、組織的に非常に大きくなつておらず、そこから派生する問題が私たちの大きな課題ともなっている。一つは養護学校教員の占める割合が増えている中での研究活動のあり方。二つ目に会員相互の意志疎通をいかに有効的に高められるか。三つ目として、研究活動を内容的にどう引継ぎ、会員に伝達し積み上げていけるかといった点等を課題として掲げることができる。

参考引用文献：「戦後の埼玉県精神薄弱教育史」「埼玉の障害児教育」一実践と課題一會報15、16集（埼玉県特殊教育研究会編）

## 埼玉県へき地教育研究会

### 1. 会のあゆみ

昭和29年に「へき地教育振興法」が制定され、交通条件や自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間へき地の学校に対して、教育の地域差を是正し、教育水準の均衡ある向上を図るために、さまざまな施策が実施されるようになつた。このような国の施策とあい前後して、へき地教育振興の機運が全国的に大きな盛り上がりを見せ、本県においてもこれに呼応して、この教育進展のための手がうたれてきたのは、昭和28年度からである。

記録によれば、県教委の指導により、昭和28年5月、文部省実験学校発表会に参加（東京学芸大学）。同年6月寄居中学校においてへき地教育研究協議会を開催し、その認識を深めて直

後の7月6日から、同11日に渡って宇都宮で開催された。関プロ小学校研究集会「へき地教育研究班」へ代表が参加。同7月16日、埼玉県へき地教育研究会創設準備委員会が開かれ、これによって本会の結成が緒についたのである。

28年10月、第2回全へき研大会島根県大会に、指導主事森田芳一氏の引率により、岡田、廣瀬、市川の三氏が本県代表として始めて大会に参加し、多大の示唆を得て帰県。同年12月埼玉県へき地教育研究会幹事会（仮称）を持ち、全国の情勢分析その他今後の施策について協議し、同年16日にはへき地教育振興に対し県に陳情した。更に同月18日から3日間全国へき地教育立法促進運動陳情団に代表が参加し、文部省国会等に強く陳情を行つた。

越えて昭和29年2月25日を期して、県教委の主唱により、埼玉県へき地教育研究協議会並びに総会が、寄居中学校を会場として開催され、関係各教育委員会及び学校代表が出席して、(1)全国へき地教育運動の現況と本県の対策。(2)埼玉県へき地教育の振興について。

①本年度の反省。②本年度の計画。について報告協議し、統いて埼玉県へき地教育研究会規約が制定され、ここに本会は強くその第一歩をスタートしたのであり、本年は31周年めに当り、この間の本会の活動が、埼玉県のへき地教育の振興に果たしてきた役割はまことに大きなものがある。

代	氏名	在任期間	付記
1	黒沢政次	29.2~30.5	秩父郡国浦、金沢日野沢村教育長
2	岡田要作	30.5~42.5	能市教育長
3	浜田武男	42.5~47.9	大瀧村教育長
4	山中義一	47.10~48.5	秩父郡大滝小長
5	伊藤暢勇	48.5~49.5	" 大滝中長
6	柄原義雄	49.5~50.5	秩父市浦山小長
7	大野豊治	50.5~51.5	飯能市北川小長
8	廣瀬哲丸	51.5~53.5	秩父郡大滝小長
9	林明治	53.5~55.5	" 大滝中長
10	木村良康	55.5~57.5	" 大滝小長
11	町田重文	57.5~59.5	皆野町日野沢小長
12	廣瀬哲丸	59.5~	秩父郡大滝中長

初代から3代までの会長は、へき地校をもつ教委の教育長であり、へき地の教育条件の整備充実のため国や県に対し、諸施策を要請する必要から、教育長が適任者として選任されたもので、当初から約18年間の会の実務は、大滝小長のち大滝中長の、廣瀬龍巳氏が副会長として12年間、統いては大滝小長の山中義一氏が6年間(会長6ヶ月)、同じく副会長の職にあって会務をとりしきり、本会の運営発展に努めたものである。

## 2、主たる活動と事業

29年から毎年、へき地学校1~2校が、文部省、県教委の委嘱をうけ、埼へき研と共に研究発表会を開催してきたが、30年代には視聴覚教

具を中心とした各種設備の充実が、へき地学校ですみ、研究主題もそうした事情を反映したものが多く、研究発表会の参加者は少ない時で70人前後、多い時では200人以上に達する状況であった。

また複式学級の経営、指導に関する研究会も30年代にはいって活発になり、県教委と埼へき研の共催で、毎回数十人から100人ちかくの参加者が、熱心に研究討議をした。

分校主任連絡協議会も開かれ、分校経営上の問題点、困難点の研究討議を行うと共に、一方において分校をもつ校長や、小規模学校の校長はその立場から、それぞれ共通のなやみ、問題点をもっていたが、その問題点の解消につとめるべく、31年以来小規模学校運営協議会が開催されるようになった。

その他教員の夏季研修会が33年から、秋の研修会が36年から開催され研修の成果をあげた。このように埼へき研は県教委と共に多くの研究会を開催して、へき地教育の進展につとめたが、33年3月には、「埼玉県へき地教育研究集録」を刊行するにいたった。

この集録は以後毎年出され、へき地学校における学校経営の諸問題をはじめ、学習指導生活指導上の諸問題について取り上げ、へき地教育の進展に寄与するところが多かった。

40年代の前半は、学校経営、学習指導、生活指導等に関する研究主題をかけて研究、実践に取り組み、その成果を上げた。

同年代後半には、このあとを受けて「へき地関係教育の現代化をめざして」の主題を設定し、へき地小規模学校等教育において、その現代化を進めることは非常に困難であったが、この難題に積極的に取り組み、教育機器を研究し、直接経験の少ない子どもに豊かな情報を与え、学習意欲の拡大と、効率化をはかる仕事が進められた。

40年代の頃からの高度経済成長の落とし子ともいえる過疎過密の現象は、低成長時代になつてもその勢いは衰えず、各方面にいろいろな問

題を惹起してきた。

教育界もその例外ではなく、とりわけへき地農山村の過疎現象は深刻なものがあり、小中学校は年々小規模校化して学校経営の困難さを増し、学校をとりまく教育条件もまた一段と悪化の状況が見られるようになってきた。

このような状況をふまえ、埼へき研としては、過疎化の中のへき地小規模校の教育の在り方を一層確かなものにするために、「へき地小規模学校における教授組織及び、学習形態の改善について」の研究主題を設定し、教育の前進をはかることにした。

教授組織や学習の形態にはいろいろあり、また種々の問題点が介在している。一部教担制、個別学習、共同学習等を取り入れ、指導の在り方を解明し、その効率を高めるべく実践面を主として、各校の実態に即した研究主題の具体化に努力すると共に、新教育課程の研究を深め、ゆとりと充実した学校をめざしての研究実践への取り組みを進めてきている。

### 3、特色ある活動

埼へき研発足当初の活動には、相当苦心したことがうかがえる。へき地校の所在地が、秩父、児玉、大里、比企及び入間の5郡にわたり、この広い地域に小中64校が散在し、これらの学校自体もまたへき地をへき地たらしめている諸般の悪条件を背負っている状態であり、これらの学校が連携しての会の運営、研究活動となれば当然幾多の困難があった。

しかし会長及び各役員は在任中「へき地教育開発」の推進力となり、へき地教師の教育愛と相まって大きな成果をあげてきた。

具体的には、①文部省、県教委、県へき研委嘱校の研究発表。②県教委と県へき研共催事業の、へき地小規模学校経営研究協議会（8月）、小規模学校学習指導研究協議会（6月、9月）の開催。③研究集録の刊行。④本会独自の前期、後期へき地教育研究大会の開催（5月、2月、5月は総会を兼ねる）。へき地学校児童、生徒文集「山鳩」の発行。

へき地教育充実振興のための、県当局及び関係者への陳情活動などである。

また55年度より、へき地複式小規模小学校の集合指導を計画的に組織し、適性規模の集団の中での自己をみつめ、学力や体力を伸ばし、協力性、適応性を向上させることは、へき地性を克服し、社会性を育成する上で有益であるとして、「山鳩学校」を開設した。

56年度はへき地校所在の秩父、大里、入間比企の4郡を3会場に分け、15校が集合して延べ5回実施した。

同じ56年には、東部地区へき地教育指導者講座の開催県として、秩父地区を中心5部会場校を委嘱して10月研究成果を発表した。

その他毎年いずれかの県で開催されている、全国へき地教育研究大会及び、東へき指導者講座には、それぞれ10人前後が選ばれて出席し、報告書の作成、後期研究発表大会の席上での研究報告を行っている。

### 4、運営に当っての問題点

32年5月1日の県調査による本県のへき地学校数は、分校を含めて小49校、中15校合計64校で、県学校総数の7.5%であったが、59年度には小23、中5計28校と減少し、明年度にはさらに2校が廃校するので、埼へき研加盟校は26校となり、このようなことが本研究会の運営の上にいろいろな影響が生じてくることが心配される。このような状況は今後も依然として続くであろうし、また本県の特殊性から、へき地校が主として県西部に偏在していることもあり、全へき研等の大会などの開催もますます困難になっていくと思われる。

また他教科等の研究会と違って、研究会員がへき地校を去れば全然関係のない立場になり、へき地校での経験も、直接には必要でなくなってしまう。昔はへき地校のみの勤務で終った者も相当いたが、今は平場との交流がはかられる異動が普通になり、人事の停滞が刷新されてこの点大いに結構であるが、反面へき地校勤務期間が比較的短かく、腰掛け的な者もいないでは

ない。このような状況からへき地教育全般の経験が浅く、会の事情にも全くうとい者が、会務を担当させられるような実態が生じてきていることも問題点である。

### 5、昭和59年度の研究活動

#### 本年度の研究主題と方針

##### (1) 研究主題

「たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子どもの育成」

##### (2) 設定の理由及び方針

われわれは、へき地小規模校にこそ教育本来の姿があるとの認識に立ち、へき地に学ぶ子どもの明るい未来を志向し、人間性豊かな教育を確立したい。

そのために、情報を選び、自ら思考し、正しい判断力をもって行動する態度や、新時代を切り開く、たくましい実践力の育成を図る教育を推進する。

○へき地の特性（優位性と劣性）をふまえた、指導計画の創造と実践に努める。

- ・地域に根ざし、アイデアのあふれる経営
- ・地域素材の教材化につとめるとともに、勤労体験学習の重視。

○個性豊かな思考の論理を確立するために、言語表現力を高め、主体性、創造性を伸ばす教育を探求する。

○集合指導の一層の充実を図る。

##### (3)組織と会務分担

部	担当者	業務内容
総務部	会長	・文書発送、会場借用、庶務経理に関する事
	理事長幹事	・連絡、調整に関する事
研究部	副会長理事	・研究主題の設定、研究大会の開催等に関する事
		・研究の推進、調整
編集部	副会長理事	・研究集録、文集「山鳩」の編集
		・全へき東へき報告書編集
調査部	副会長理事	・資料の収集
		・陳情書の作成
集合指導連協	理事事(2名)	・集合指導山鳩学校の開催 ・庶務、経理及び連絡、調整

### (4)活動計画

月日	内 容	場 所
4. 25	第1回理事研修会	秩父市
5. 8	山鳩学校連絡協議会	〃
5. 22	総会、前期へき研大会	長瀬青年の家
6. 2	へき研研究委員会	有峰寮
7. 6	全へき東へき参加者会	秩父市
8. 27	へき地学校経営研究協議会	石間小
9. 8	第2回理事研修会	有峰寮
9. 19	文集山鳩編集委員会	〃
10. 12	陳情活動	県庁
10. 17~19	全国へき地教育研究大会	山形県
10. 24~26	東へき指導者講座	岐阜県
11. 7	小規模学級学習指導研修会	上吉田小
11. 10	第2回文集山鳩編集委員会	有峰寮
11. 24	第1回研究集録編集委員会	〃
11. 30	全、東へき参加報告書編集	秩父市
12. 7	第3回文集山鳩編集委員会	有峰寮
1. 11	第2回研究集録編集委員会	〃
1. 11	第3回理事研修会(午後)	〃
2. 13	へき地教育研究委員会	長瀬青年の家
2. 13	後期へき地教育研究大会	〃
3. 16	第4回理事研修会	秩父市

### 6、今後の課題

4、経営に当つての問題点のところでも述べているが、今後においてもへき地の人口激減の現象は、少しも止まる兆候がない。このことからへき地の小中学校はますます極小規模校化し、遂には廃校を余儀なくされ、研究会加盟校もまた年々減少していくことが予想される。この実体を秩父郡大滝村の例にとって見ると、面積約340方秆、山また山の広大な地域の中に、昭和47年当時小学校5校と分校が2校、中学校2校が点在し、児童生徒総数約900人であった。これが59年には小3校、中2校合せて240人で4分の1近くに減少し、さらに今年度限りで小倉沢小中校の廃校が確立しているので、小2、中1校となる。

このようなことから、埼へき研独自の活動も次第にむずかしくなることが予想されるので、これが打開のために全へき連との関係を一層密にする必要が考えられる。また埼へき研30年の歩みから、へき地教育関係者の共有財産ともい

うべき、多くの研究の蓄積がなされてきた。この成果を今後のへき地教育に生かすことに努め、へき地の教育が子どものため、地域に果たしている役割の重大さを再認識し、地域と共にある

へき地教育の実践と研究を、意図的、組織的に実施し、推進していくことを今後の課題としていきたい。

## 学校図書館協議会

### 1. 埼玉県学校図書館協議会の歩み

#### (1) 創生期 昭25年～35年

本会が小中学校及び高校の連合組織として結成されたのは昭和25年で、今年は創立34周年にあたる。

大戦後の教育の大きな変化の一つとして学校図書館法（昭28年施行）があげられる。この施行に先だつこと2年前より、県教育局、県立図書館の絶大な応援のもとに、本協議会が結成されたのである。

研究活動としての最初の盛り上がりは、昭和35年の第5回関東地区学校図書館研究大会熊谷大会である。

県教育局、県立図書館、小中高校が一体となって、新しい教育のあり方としての、学校図書館の振興をめざした10年間と言える。この10年間にすぐれた現場の学校図書館教育実践者が多く輩出したのも事実である。

#### (2) 発展期 昭36～50年

学校図書館法改正への努力と、小中学校と高校が研究団体として分離独立し、それぞれ独自の研究活動をめざしたのは昭和36年度からである。

この時期のわが国は、高度経済成長の波が徐々に高まり、後半からはその勢いも急激な加速を見せて、教育の場も学力偏重の影響をうけて、学校図書館の影がうすれ気味になってきた時代であった。

しかし、昭和43年には研究員制度をつくり、各地区の研究活動促進の先導的な役割を果たす組織固めがされた。

およそ3年間の準備期間を経て、学校図書館利用指導の児童生徒用手引書（学習書）を作成し、県下小中学校で採用し活用されるようになった。

昭和50年度、この発展期の総括として、第13回関東地区学校図書館研究大会大宮大会を迎えたのである。

この大会は、「現代の教育的課題にこたえ児童生徒の創造的思考力を育成し、主体的かつ、人間性豊かな生きかたを追究させるために学校図書館はいかにその機能を発揮したらよいか」を主題として、一都七県の関係者が参加し、行われた。

#### (3) 研究活動定着期 昭50年

関東地区大会を契機として、研究活動に自信と余裕が生まれ、学校図書館がめざす方向もたしかなものになった。

この時期から、各地域ブロック単位による研究活動が活発になり、各小中学校図書館も活性化し、研究実践者も、その教室に、その学校に、その地域に密着した活動を推進する原動力となつた。

#### (4) 学校図書館と公共図書館の提携

特筆しておきたいことのひとつに、公共図書館との提携があげられる。本会発足の時点から今日まで続けられている。とくに県立図書館は、当初は浦和のみであったが、現在では熊谷、川越、久喜を加えて4館を数え、他県には見られない数である。

また、市町村立図書館は55年度には51市町村に設置され、地域の利用の便がはかられている。

市立図書館の中には、夏休み中の児童生徒の利用に際して、地域の図書主任とタイアップして、利用相談、書架別置コーナーの工夫等が実践されている所もある。

さらに、地域住民に開かれた学校図書館の試みとして、学校図書館の図書資料を一般市民の利用に資するという形で、わずかであるが実現されはじめている。

## 2、活動と事業の推移——その主なるもの——

### 昭和25年度

- ・埼玉県学校図書館協議会創立総会。
- ・図書館技術講習会（6会場）

### 昭和28年度

- ・学校図書館法施行される。
- ・学校図書館振興協議会。（4会場）

### 昭和33年度

- ・第1回埼玉県学校図書館研究大会。
- ・高等学校図書館研究会が結成される。

### 昭和35年度

・第5回関東地区学校図書館研究大会が熊谷市を会場として開催される。小中校、高校合同で研究成果が集約される。

### 昭和36年度

・高等学校が本会より独立し、小中校一本として歩みを続ける。

### 昭和38年度

- ・県読書感想文優秀作品集「真珠」第1号。

### 昭和43年度

・研究員制度が発足し、三部門（管理運営、利用指導、読書指導）に分かれての研究活動が進められる。

### 昭和46年度

・県独自の学校図書館教育体系表及び、利用指導計画が作成される。

### 昭和48年度

・利用指導児童生徒用学習書（小学校低中高3分冊中学校用）を作成、各校で採用される。

### 昭和50年度

・第13回関東地区学校図書館研究大会が大宮市を会場として開催される。

### 昭和56年度

・全国図書館大会が浦和市で開催されるに当たり、全国学図協及び本会が初めて後援団体となり、県内より多数の教職員が参加をする。

### 昭和59年度

・全国学校司書研究大会が嵐山町、国立婦人教育会館で開催される。

## 3、特色ある活動

### (1) 研究大会

昭和33年度第1回より毎年行われ、会場は県内を4ブロックに分け順送りに開催している。当初は、図書館利用学習、読書指導等による実演授業と研究発表の形式であったが、昭和40年度以降から管理運営、利用指導、読書指導の3分科会による研究発表と研究協議の形をとっている。

### (2) 関東地区研究大会

・第5回大会熊谷大会は昭和35年度に開催され、小中校、高校合同で取組む。主題は学校教育の実践において、学校図書館のもつ機能はどのように位置づけられ、また活用されなければならないか。

・第13回大会大宮大会は昭和50年度に開催される。主題は、現代の教育的課題にこたえ、児童生徒の創造的思考力を育成し、主体的かつ人間性豊かな生き方を追究させるために、学校図書館はいかにその機能を發揮したらよいか。

なお、この大会では従来なかった、学校図書館の理念と教育、障害児教育と学校図書館の二つの分科会が設定されたことは大きな特色といえる。

### (3) 研究員による研究推進活動

昭和43年度より発足した研究員制度は、当初は各地区より小中校各1名が選出され、学校図書館全般にわたる研究活動をしてきたが、昭和58年度より組織を改変し、研究実践力のある者を各地区より推せんし、人数の減少にもかかわらず、その研究活動は更に活発化してきた。また研究領域を3分野（管理運営、利用指導、読書指導）に分け、研究観点が明確にされ、従来

より研究の深まりをみせている。

#### (4) 研究員夏季宿泊研修会

昭和38年度より現在まで欠くことなく毎年8月中に主に秩父地方を会場として続けられている。参加者は各自で研究レポートを作成して、発表しあい話し合いを深めている。教育としての学校図書館のあり方や、各学校や地域の問題、実践上の問題点など、密度の濃い会話が持たれるのもこの研修会の特色と言える。

#### (5) 埼玉県読書感想文優秀作品集「真珠」の発行、毎年度発行して、すでに第21号を数える。

(掲載作品18編、部数1300部) この中から最優秀作品9編を全国コンクールに出品をして、毎年1編は全国上位作品として受賞している。この作品集は、読書指導のよき資料として各校で活用されている。

### 4 運営に当たっての問題点

(1) 本部役員の任期は、転出や勇退等による以外は5年～10年と長期にわたっているため、運営企画の面で手慣れている良い点と、斬新さを欠く点が見受けられるので、新しい視点に立った研究活動の方向づけに脱皮していくなければならない。

(2) 学校図書館法の改正要望にもかかわらず好転が見られない。特に小中学校には、学校司書はおろか司書教諭の配置も皆無である。図書館主任の熱と努力によって図書館運営が支えられている現状である。そのための学校間格差があることも事実である。

(3) また、図書主任の若年令化と交代の激しさも研究活動の進展を阻害している。毎年半数近い主任の交代があり、図書館技術講習会は、毎年同じような内容をくりかえさざるを得ない状態である。いつまでも初任者研修の域を脱することができない。

(4) 子どもの学習活動に寄与することが学校図書館のあるべき姿にもかかわらず、図書購入予算の不足、学級増による学校図書館へのしわ寄せ、教科等と並列的な見方といった認識の不足が、教育の中での重要な機能としての学校図書

館のあり方から程遠い所にある。「学び方を学ぶ」ことや「読書力即學力」「読書は心を豊かにする」など、学校図書館をよりどころとするための理解を一層高めていかなければならぬことを痛感する。

(5) 研究成果の刊行とはいえ、読書感想文作品集のみで、予算の関係で研究集録的なものが出せないことも悩みの一つである。

### 5、昭和59年度の研究活動

#### (1) 本年度研究主題

すべての児童生徒に読書の喜びと自ら学ぶ力を育むために、学校図書館のあり方と役割を実践を通して究明する。

#### (2) 設定の理由および方針

教育課程のめざす、自ら考え正しく判断できる力を持つ児童生徒の育成のためには、図書資料の利用技術や読書は欠くことのできない能力といえる。学校図書館の計画的利用をもとに、自ら学ぶ力と読書による豊かな心の育成を期する学校図書館のあり方を、管理運営、利用指導、読書指導の三部門の実践をもとに研究を進める。

#### (3) 活動の内容

##### 研究員活動の推進

###### ・学校図書館協議会理事研究員研修会

(6月8日 熊谷市文化センター)

本年度の研究員は昨年度より2年間の任期であり、昨年度からの引き継ぎの研究課題のもとに、3部門の分科会で本年の研究計画を立案する。

・全国学校図書館研究大会（山口県山口市、8月6～8日）に本会より発表者司会者、参加者として8名出席する。

・学校図書館図書整理技術講習会（県内4会場、7月29日、合計200名参加）本部役員より8名が指導者となり、学校図書館運営概論、図書整理技術の講義内容で行われる。参加対象は、図書主任初任者である。

・埼玉県図書館研究協議会（熊谷福祉センター、8月24日）県図書館協会主催により、学校図書館と公共図書館の提携を目的とした情

報交換の場である。双方から発表者、司会者を出して活発な協議が行われた。

・学校図書館研究研修会（小鹿野 8月27～28日） 本年は研究員、本部役員計33名の参加により3分科会による研究レポートの発表及び研究協議が行われた。

・埼玉県小中学校読書感想文コンクール（10月30日締切） 県審査点数千点余、最優秀9編、優秀9編、優良、佳作を選び、最優秀作品を全国審査に出品する。

・埼玉県学校図書館研究大会（県北会場 1月25日、本年度研究活動の総まとめとして、全体会及び管理運営、利用指導、読書指導の各分科会による研究発表と研究協議を行う。

・会報「埼玉SLA」第26号発行

・埼玉県読書感想文優秀作品集「真珠」通巻22号発行、各小中学校に配布。

・夏休み、冬休み推せん図書選定。

・昭和59年度研究紀要作成

## 6、今後の課題

- (1) 埼玉県学校図書館運営基準（仮称）の作成。
- (2) 利用指導の定着化と指導資料の改定。
- (3) 読書の時間、図書館の時間の構想と研究。
- (4) 研究活動の長期的展望と活動計画の立案
- (5) 研究員活動と地域研究活動の推進。
- (6) 公立図書館との協力提携
- (7) 学校図書館実態調査（設備、意識）

昭和28年（30年前）に施行された学校図書法には、「学校図書館は学校教育において欠くことのできない基礎的な設備である……」とうたわれている。戦後教育改革の一つの柱でもあった。そして現在たしかに学校図書館を持たない学校は皆無である。

しかし、それが教育の中で大きな存在価値として機能を發揮しているかといえば、はなはだ疑問である。教科活動と比して、図書館活動は、学校格差が大きいことも事実である。貸本屋のような所、9分類文字が半分を占めている所など様々である。かたや、生き生きとした学習が展開されている学級や学校では、必ずといってよい程、図書館の活用や直接経験的な活動が存在している。

これは、やはり学校図書館にたずさわる人の問題となってくる。それは、図書主任ばかりでなく、管理職、教職員の理解と協力と意欲の問題であろう。

種々のマスコミの影響で、本を読もうとしなくなりつつある子どもたちをいかにしたらよいかを、読書教育という観点で研究を進めなければならないと考えている。

学校図書館を教育という視点に立ってもう一度見直し、設備の充実、機能の高揚、人的問題、などについて、更に一層の研究意欲と努力を傾けていきたい。

# **第5章**

# **地域教育研究会**

# 埼玉大学教育学部附属小学校教育研究会

## 1. はじめに

本校は、明治7年に埼玉県師範学校の附属として設置され、埼玉大学教育学部附属小学校となつて今日に至る間、初等普通教育を行うとともに、本校の使命である教育実習生の指導や教育研究を行つてきている。

現在の学校規模は、学級数18、児童数702名、教員数25名となっている。

## 2. 研究活動

本校では、埼玉県教育委員会と埼玉県連合教育研究会の共催をいただき、毎年春には各学年の学習指導を問題にした研究協議会を、また、秋か冬には、学校で取り組んだ研究の成果を発表する研究協議会を開催してきている。

ここに、この20年間の小学校教育研究協議会を開催した期日と研究主題をとりあげてみた。

○春の研究協議会

昭40～59年 每年5月下旬から6月上旬

研究主題 各学年における学習指導

○秋または冬の研究協議会

時期 研究主題

昭42年12月 学力の定着をはかる効果的な学習指導法（第1年度）

昭43年10月 同上（第2年度）

昭45年11月 学習意欲を育てる指導

昭47年10月 同上

昭48年10月 同上（2教科ずつ4日間）

昭49年10月 同上（2教科ずつ4日間）

昭51年10月 ゆとりのある充実した学校生活をめざして（第1日）—道徳・特活（第2日）—各教科

昭53年11月 同上（道徳・特別活動・みんなの活動）

昭55年1月 ゆとりのある充実した学校生活をめざして（4教科ずつ2日間）

昭55年10月 これから授業をめざして

昭57年2月 生きる力を育てる教育の追求  
—各教科、中間発表—

昭58年2月 同上

昭59年11月 同上（4教科ずつ2日間）  
—各教科のまとめ—

## 3. 本校で刊行した研究資料

昭42年12月 '67研究集録

学力の定着をはかる効果的な学習指導法

昭43年10月 '68研究集録  
同上

昭44年8月 研究紀要—第1集—

昭45年8月 研究紀要—第2集—

昭45年11月 '70研究集録  
学習意欲を育てる指導

昭46年12月 生育歴についての研究

昭46年12月 研究紀要—第3集—

昭47年10月 学習意欲を育てる授業（北辰図書）

昭48年3月 研究紀要—第4集—

昭49年10月 総・学習意欲を育てる授業  
(明治図書)

昭50年1月 附属小学校開校百年教育小史

昭51年10月 ゆとりのある充実した学校生活をめざして

昭53年1月 同上(道徳・特活・みんなの活動)

昭55年1月 同上（各教科及び教育課程・学級経営・教育的環境・合的な指導）

昭57年2月 生きる力を育てる教育の追求  
(各教科)

昭57年3月 授業研究—第1集—

昭58年3月 授業研究—第2集—

昭59年3月 授業研究—第3集—

昭59年11月 いきる力を育てる教育の追求  
(各教科)

# 埼玉大学教育学部附属中学校教育研究会

## 1. はじめに

本校は、昭和22年に埼玉県師範学校の附属として発足し、埼玉大学教育学部附属中学校となって今日に至る。その間、中等普通教育を施すとともに、本校の使命である教育実習生の指導や、教育研究並びにその実証を行ってきている。

現在の学校規模は、学級数12、生徒数551名 教員数29名となっている。

## 2. 研究活動

本校では、埼玉県教育委員会・連合教育研究会の共催をいただき、研究成果発表のために開催される研究協議会と、実践研究のまとめとしての研究紀要の発刊とを二大柱として研究を進めている。第一回からの研究主題を次に掲げる。

### 昭和23年度 学習指導計画の試案

学習計画の立案

### 昭和24年度 本校の教育活動

自治組織 教科経営 教科指導

### 昭和27年度 学習指導の諸問題

本校生徒の特質と指導の重点

個人差に応じた学習指導

### 昭和28年度 学習指導の改善

中学校教育の性格、ホームルーム  
の経営

### 昭和29年度 学習指導の改善

問題解決と基礎学力をめぐって

### 昭和30年度 学習指導の改善

### 昭和31年度 学習指導の改善

### 昭和32年度 学習指導の改善

### 昭和33年度 中学校における道德指導

特設時間「道徳」の実施にあたって

### 昭和34年度 学習指導の研究—指導法の研究—

### 昭和35年度 学習指導の改善

改訂学習指導要領実施にあたって

昭和36年度	学習指導上の諸問題				
	道徳・特別教育活動・学校行事等				
昭和37年度	教科外領域の指導計画と問題点				
昭和39年度	学習指導の改善 (社会 数学 理科 保健体育 技術・家庭)				
昭和40年度	学習指導の改善 (国語 音楽 美術 英語)				
昭和41年度	教科外領域の研究 「道徳」の授業研究				
昭和42年度	学習指導の改善				
昭和43年度	学習指導の改善				
昭和45年度	学習指導の現代化 新学習指導要領完全実施を前に				
五年次計画	「個性を伸ばす教育」				
昭和46年度	1年次	理論研究			
昭和47年度	2年次	教科外活動			
昭和48年度	3年次	教科指導			
昭和49年度	4年次	教科指導			
昭和50年度	5年次	教科指導			
昭和51年度	学習指導の改善—重点の具体化				
昭和52年度	効果的な学習指導を求めて				
五年次計画	教育課程改善へのとりくみ				
昭和53年度	1年次	理論研究			
昭和54年度	2年次	教科外活動			
昭和55年度	3年次	教科指導			
昭和56年度	4年次	教科指導			
昭和57年度	5年次	教科指導			
昭和58年度	学習指導の改善—自ら学び、自ら				
昭和59年度	問題に取り組み自分を伸ばして いく生徒の育成をめざして—				

# 浦和市教育研究会

## 1、会のあゆみ

浦和市教育研究会の発足は、研究会会則第21条「この会則は、昭和29年5月24日から実施する」と記されていることから言えば、昭和29年に発足していることになる。

しかし、現在、記録をたどってみると、実質的な組織を確立し、研究会の活動をはじめたのは昭和31年からと言えそうである。

以下、年度を追いながら、会のあゆみを紹介したい。

年度	会員数(人)	会費(年額)(円)	会長(学校)	専門部数	専門部名	備考
31	?	120	高橋正吉(高砂小)	19	社会、理科、国語、数学、音楽、体育、美術、家庭、外國語、職業、特活、映画、放送、特殊、保険、書道、図書館、教育心理、新聞、保導	
	?	"	"	"		
34	919	"	"	"		
36	961	"	"	"		
37	1,010	"	"	20		
38	?	"	"	"		
39	?	"	吉沢光平(岸中)	"	数学→算数、数学 保導→補導	
40	1,090	240	" "	21	道德(職業→技術)	
41	1,075	"	小島 熙(木崎小)	22	学校事務	
42	1,045	480	" (仲本小)	23	学校給食	
43	1,101	"	野口良雄(大谷場中)	"		
44	1,155	"	" "	"		会報発行開始
45	1,200	"	吉野時過(常盤小)	"		
46	1,258	"	" "	25	教育機器、学級経営	
47	1,345	"	" "	"		
48	1,461	"	宗像憲治(本太中)	"		
49	1,546	"	古田島登(木崎中)	27	同和教育、演劇	一斉研修開始
50	1,650	720	" "	"	特殊教育→障害児教育	
51	1,720	"	黒沢義夫(仲町小)	"		
52	1,793	"	" "	"		
53	1,905	"	高井哲郎(田島小)	"		
54	1,950	1,000	" "	"		
55	2,040	"	松本真一(岸中)	"		
56	2,091	"	" "	"		
57	2,151	"	丸山健二(南浦和小)	"		
58	2,143	"	" "	"		
59	2,134	"	鎌口 清(尾間木小)	"		

## 2、主たる活動と事業

本研究会の目的は、会則第2条に次のとおり示されている。

「この会は、浦和市内学校の現職教職員が主体となって職能の向上、教育の振興をはかり、浦和市教育の進歩、県教育の発展、ひいては、文化日本の建設に寄与することを目的とする。」

本研究会の活動の中核をなすものは、本研究会に所属する27部の専門部の自主的研究活動といつて過言でないであろう。

しかも、研究推進にあたっては、浦和市教育委員会との連携、協力をあおぎながら、研究の質を高めている。

専門部の所属は、小・中・高、各教職員のそれぞれの希望によるもので、部の研修計画も参加全員の意見を尊重し、特色ある年間計画を立案し、実践している。

その他主たる活動と事業をあげると次のとおりである。

### 昭和59年度 浦和市教育研究会事業計画

#### 1、全體計画

- (1) 総会 1回 (6月7日)
- (2) 常任委員会 6回
- (3) 学校委員会 4回
- (4) 専門部代表者会 1回
- (5) 専門部長会 4回
- (6) 講演会 2回 (6月7日、3月7日)
- (7) 一斉研修 2回 (6月27日、11月8日)
- (8) 会報発行 2回 (No30、No31)
- (9) 研究紀要発行 1回 (No.6)

#### 2 各専門部会

- [国語]
  - (1) 授業研究会 2回
  - (2) 文集「うらわ」26号発行
  - (3) 「こくごの窓」発行 (年3回)
  - (4) 文学遺跡めぐり 夏冬2回
  - (5) 講演・夏季研修

#### [書道]

- (1) 硬筆展 6月～7月

- (2) 一斉研修会 (講演会) 6月
- (3) 夏季研修会 8月
- (4) 一斉研修会 (書き初め実技研修) 11月
- (5) 書き初め展 (児・生・教) 1月
- [社会]
  - (1) 一斉研修会 (授業研究) 6月・11月
  - (2) 臨地研修 8月
  - (3) 部会
  - (4) 代表者会
  - (5) その他
- [算数・数学]
  - 〈小学校〉
    - (1) 講演会 6月
    - (2) 授業研究会 11月
    - (3) 小・中連絡協議会 1月 or 2月
    - (4) 会報発行 1回
  - 〈中学校〉
    - (1) 授業研究会 6月・11月
    - (2) 中・高連絡協議会 11月
    - (3) 小・中連絡協議会 1月 or 2月
    - (4) 会報発行 1回
- [理科]
  - (1) 授業研究会 (小・中別) 6月・11月
  - (2) 科学教育振興展覧会
  - (3) 児童理科研究発表会
  - (4) 臨地研修会
  - (5) 実験実技研修会 (小6ブロック)
  - (6) " (中2ブロック)
  - (7) 教員研究発表会
- [音楽]
  - (1) ブロック別授業研究会 5月～7月
  - (2) 一斉研修会 6月・11月
  - (3) 管弦楽鑑賞教室 6月
  - (4) 北足立歌唱研究協議会 6月
  - (5) 小・中音楽会 11月
  - (6) 北足立器楽研究協議会 11月
  - (7) 合唱実技研修会 1月～2月
  - (8) 教職員音楽会 2月
- [美術]
  - (1) 授業研究会 3回

(2) 実技研修	2回	(2) 改訂給食指導の手引学習会	9月
(3) 臨地研修	2回	(3) 講演会	11月
(4) 講演会	1回		[学校新聞]
(5) その他		(1) 学校新聞の利用・サンプル配布	
〔家庭科〕		(2) 学校新聞コンクールの企画相談	6月
〔小学校〕		(3) 学校新聞コンクール合評会	
(1) 一斉研修(研究協議会)	6月	(4) 埼玉県学校新聞コンクールへの参加	11月
(2) 創意工夫展(県・市)	9月	(5) 学校・学級新聞の編集技術講習	2月
(3) 児童研究発表会(県・市)	9月		[映画]
(4) リサイクル工作展に出品	10月	(1) 映画教材を利用しての授業研究	
(5) 一斉研修会(授業研究)	11月	(2) 一斉研修会	6月・11月
(6) 研修会(授業研究会)	1月	(3) 各種研究会参加	
〔中学校〕			[学校事務]
(1) 一斉研修(実技研修)	6月	(1) 全体研究会	3回
(2) 研修会	7月・9月・2月・3月	(2) 一斉研修会	2回
(3) 一斉研修(授業研究)	11月	(3) ブロック研究会	5回
〔技術〕		(4) 初任者研修会	1回
(1) 一斉研修会	6月		[学校図書館]
(2) 工場見学	8月	(1) 一斉研修(絵本の読み聞かせ・お話会)	6月
(3) 一斉研修会(授業研究会)	11月	(2) 一斉研修(授業)利用指導	11月
(4) 実技研修会	2月	(3) 読書感想文審査会	
〔英語〕		(4) 読書感想文集“いぶき”発行	
(1) 代表者会	5月・9月	(5) 図書館だより発行	
(2) 一斉研修	6月・11月	〔教育機器〕	
(3) 英語弁論大会	10月	(1) パソコンのCMI的利用	6月
〔体育〕		(2) 見学と実習(城北埼玉高校)	8月
(1) 授業研究会	小1・中1	(3) ワープロの実技講習	11月
(2) 講演会(小・中)	1回	(4) 同好会研修	月1回程度
(3) 実技講習会	小1		[補導]
(4) 研究協議会	中6	(1) 一斉研修会(研究協議)	6月
(5) 発表会	中1	(2) 講演会	7月
(6) 研究のまとめ印刷		(3) 一斉研修会(研究協議)	11月
〔道徳〕		(4) 街頭補導	12月
(1) 授業研究会(一斉研修会)	年2回	(5) 部報(No.17)	3月
(2) 講演会	8月		[放送]
(3) 県研究大会参加	1月	(1) 一斉研修会(授業研究会)	6月
(4) 研究発表会	2月	(2) 放送センター見学	8月
(5) 部報発行	3月	(3) 一斉研修会(授業研究会)	11月
〔学校給食〕		(4) 研究集録発行	3月
(1) 講演と会食	6月		[教育心理]

- (1) 事例研究
- (2) 講演会と技術研修
- (3) 会報発行
  - 〔学級経営〕
  - (1) 研究協議会 1回
  - (2) 講 演 会 1回
  - (3) 授業研究会 1回
  - (4) 部報発行
- 〔特別活動〕
- (1) 一斉研修
  - ・学級会を成功させる議題の選び方 6月
  - ・学級指導題材のねらいの立て方 11月
- (2) 会報発行 3月
  - 〔保 健〕
  - (1) 一斉研修会 6月・11月
  - (2) 常任委員会 8回
  - (3) 常任研究委員会 4回
  - (4) 養護部会 2回
  - (5) ブロック別研究会 4回
  - (6) 一日視察 1月
- 〔障害児教育〕
- (1) 授業研究
- (2) 実技研修
- (3) 授業研究
- (4) 講 演 会
- 〔同和教育〕
- (1) 同和教育といじめの問題、スライド
- (2) 講 演 会
- 〔演 剧〕
- (1) 部 会 5月・7月
- (2) 講 演 会 6月
- (3) 演劇交流会（予選） 8月
- (4) " (本選) 10月
- (5) 観劇会又はけいこ場見学 11月

### 3、特色ある活動

- (1) 市内一斉研修（年2回）

市内一斉研修は、年2回主として授業研究、研究会を中心に、市内同一日に一斉に研修を行う活動である。

研究のテーマ、内容は、日々の教育実践にか

かわるもの、当面する問題等、さまざまであり、授業者、指導者を中心に、活発な研修がすすめられている。

#### （一斉研修の内容 後掲）

- (2) 教育講演会（年2回）

教育講演会は、6月の定期総会時と翌年3月2回実施している。講演内容は、教育にかかわるものも含め、教師としての教養を高める、人生の生き方を学ぶなど、幅広い内容を求めての講演会である。近年の講演会は下記のとおりである。

#### 昭和57年度

桜桃記	桂 英澄
寅さんと私	映画監督 山田 洋次

#### 昭和58年度

日本の美術の展開11

埼玉県美術館館長16

本間 正義

音楽との交際	作曲家 芥川也寸志
--------	-----------

#### (3) 会報の発行

本研究会の会報も今年7月発行で30号となつた。一斉研修の分科会の研修活動の概況、研究会への要望、会員の声などを掲載、会員から喜ばれる会報づくりに専念している。

#### (4) 研究紀要の発行（年1回）

研究紀要の発行は昭和54年度からであるので歴史も浅いが、講演会要旨、専門部の活動、実践記録等、記録としての性格も考えるとともに、貴重な実践の積み上げをまとめている。(70ページ)

浦和市教育研究会 市内一斉研修計画一覧（昭和58年の例 第2回略）

# 浦和市教育研究会 市内一斉研修計画一覧

(昭和58年の例 第2回略)

No.	専門部	研修テーマ (第1回)
1	国語	講演 理解を深める言語事項の指導
2	書写・書道	講演 硬筆習字の基本的な指導法
3	社会	授業研究 中学校との内容の関連をはかった産業学習・歴史学習
4	算数・数学	講演 充実した算数指導を目指して(小) 授業研究(中)
5	理科	授業研究 自主的・意欲的な子どもを育てる美術の授業を目指して
6	音楽	実技研修 合唱指導について
7	美術	授業研究 自主的・意欲的な子どもを育てる美術の授業を目指して
8	家庭	研究協議 子どもが変り実践的態度を促す授業(小) 実技研修(中)
9	技術	実践研究 安全指導に関する資料づくり
10	英語	講演 英語教育の諸問題
11	体育	授業研究 体育指導のこつ
12	道徳	研究協議 道徳の時間における基本的展開—テレビ利用の道徳授業—
13	学校給食	講演・実習 調理場でできる簡単な衛生検査
14	学校新聞	研究協議 学級新聞の効果的な利用法
15	映画	鑑賞 泥の河 校内暴力
16	学校事務	講演 地域文化と学校 —浦和市の変遷
17	学校図書館	見学 学校図書館の運営の仕方(大宮馬宮東小)
18	教育器機	講演・実技 学校教育におけるパソコンの活用について
19	補導	講演・研究協議 青少年の非行の実態と防止対策
20	放送	授業研究 「郷土さいたま」を利用した学習の展開について
21	教育心理	研究協議 多様化する子どもの実態とその指導
22	学級経営	授業研究 学級指導の授業研究
23	特別活動	学級経営部と合同
24	保健	講演 児童生徒の健康上の諸問題とその指導について
25	障害児教育	授業研究 社会自立をめざす作業学習
26	同和	実践交流 同和教育をどうすすめるか
27	演劇	研究協議 今年度の活動計画

# 川口市教育研究会

川口市教育研究会が発足し、現体制に再編されたのは、昭和45年度で、今年度で15年目を迎えた。この間本市の教育の充実発展のために、多くの会員の教職員によって、組織の整備、研究活動の充実に努力を続けられ、今日の基盤が確立された。本年度もすでに、授業研究会、各部の研究活動等、数多くの事業を持っている。以下、本研究会の概要を述べてみたい。

## 1、会のあゆみ

昭和27年4月 川口市教育研究会発足

昭和44年3月 川口市教育研究会再編委員会発足。代表世話人二名選出

千田恒二郎（元郷中学校長）

新井 忠雄（本町小学校）

昭和45年5月～昭和59年5月

川口市教育研究会第1回総会～川口市教育研究会第15回総会

川口市教育研究会歴代会長並びに事務局長

初代会長昭和45年度～48年度 千田恒二郎

（元郷中学校長）

初代事務局長45～48 新井 忠雄

（本町小学校）

二代会長 49～50 金室 博

（芝中学校長）

二代事務局長49～53 斎藤 晴雄

（前川小学校）

三代会長 51～53 石塚 一郎

（青木中学校長）

四代会長 54～56 小林徳之助

（並木小学校長）

三代事務局長54～ 小川 祐一

（青木中学校）

五代会長 57～58 相川 卓一

（東中学校長）

六代会長 59 中村 剛毅

（青木中央小学校長）

## 2、主たる活動と事業

本会は、教育基本法、その他学校教育に関する諸法規に基づき、会員の研究を保障し、組織的な教育研究活動を充実させ、川口市教育の民主的発展に寄与することを目的とする。

### 1、事業

- (1) 個人、共同研究の援助
- (2) 研究会、講演会、講習会
- (3) 発表会、研究物の刊行、その他必要事項

### 2、組織

・会員は、昭和59年度、市立小・中学校（小44校・中22校）計66校（2101名）で組織されている。

#### 総会・評議員会・運営委員会

・総会は、会の最高の議決機関で、全会員をもって構成し、定期総会を年1回開く。本年度は、5月11日、川口市民会館で開催、ここで59年度の役員の承認、研究活動方針の審議が決定なされた。活動の基本方針では、活発な意見、要望が出され、盛り上りのある総会であった。

・評議員会は、各学校長・各校選出の評議員1名、各研究部長（21名）運営委員によって構成されている。評議員会は、総会につぐ議決機関で、各種原案の審議決定、各部事業の調整や承認、その他重要案件について、審議承認を行う。例年4、6、11、2月の年4回開催している。

・運営委員会は、正副会長、事務局長、会計、庶務、そして各地区選出の委員をもって構成されている。ここでは、総会、評議員会の決定事項の処理、各種原案の作成、各研究部との連絡、協議、緊急事項の処理、会運営に関する、意見についての処置、その他広報活動（年5回教育研究会情報を全会員に配布）や記録の処理など

を行い年8回程度開催している。

#### 研究部活動組織

教科10、教科外11からなり、5月中に市内各会場で各教科部総会、教科外各部総会を日時を別にして、一齊に開催し、役員の選出や、本年度の部の活動方針、事業計画をたて、研究活動が深化できるように組織づくりをすすめた。

#### 地区連絡協議会組織

市域が広く、学校数も66校と多いので、効率的な研究を進めるために、最も密接な地区を中心とした推進が必要である。小・中の交流を深めて、研究部との連携を図り、地区連絡協議

会の充実につとめている。地区は次の9地区である。

(1)新郷 (2)安行 (3)戸塚 (4)横曽根 (5)中央  
(6)芝前川 (7)青木 (8)芝 (9)南平

#### 役員

(1)会長1名 (2)副会長2名 (3)事務局長1名  
(4)会計1名 (5)庶務1名 (6)運営委員各地区2名 (7)会計監事2名

#### 評議員各校1名

(1)研究部長各部1名 (2)副部長各部2名 (3)主任各部各校1名

#### 3、授業研究活動

地区	学校名	(研究年度)		(研究教科)					
		S 44	45	46	47	48	49	50	51
東	新郷 小	算数	国語・社会 算数			国語・算数 音楽		国語・算数 体育	
	安行 小			国語・体育					
	戸塚 小				国語・社会				国語・算数 音楽
	新郷南 小					国語・体育 社会・理科 英語			
	新郷東 小			技家・保健					
	東 中				音楽・数学	国語			国語・美術 体育
西	安行 中	社会・体育	社会・体育	英語					
	仲町 小		国語・社会			視聴覚生活・音楽	国語・図工 音楽		
	飯塚 小		算数		社会・算数				
	飯仲 小				図工・理科				
	原町 小				体育・家庭				
南	西 中	視聴覚				音楽・道徳	算数・図工		国語・社会 道徳・美術・英語 特活
	仲町 中		英語・道徳		社会・数学	国語・家庭			
	本町 小				国語・算数 音楽	国語・理科 体育・特殊 音楽			算数・理科 体育
	幸町 小					音楽・図工 体育			
北	舟戸 小	音楽・特活	算数			社会・英語	社会・算数 道徳		
	並木 小			国語・理科					
	南 中				理科・数学				
	幸並 中			国語・音楽 技術・道徳	理科・家庭 英語				
	神根 小		算数・音楽 家庭						理科・音楽 体育
北	前川 小	国語			算数・理科 音楽				
	神根東 小					杜会・算数 音楽・図工			
	柳崎 小			国語・道徳					
	芝 東 小				国語・理科 家庭				
	根岸 小					杜会・算数 音楽・図工			
	芝中央 小					国語・数学			
青木	北 中	社会・理科			英語・美術	杜会・技術 英語	国語・音楽 特活		
	芝東 中								理科・道徳 特活
	岸川 中								
	上青木 小								
青木	青木北 小	算数・図工 体育	算数				杜会・算数 体育・家庭		
	青木北 小								

地区	学校名	(研究年度)								(研究教科)							
		S 44	45	46	47	48	49	50	51	国語-算數 体育	国語-英語 美术	社会-理科 数学	社会-英語 数学	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐
青木	青木中央小 前川東小 上青木南小 青木中 上青木中	国語-理科 家庭		社会-理科 社会-英語 特殊	国語-算數 道德	算數-理科 数学-音乐 体育				国語-英語 美术	国語-英語 美术	社会-理科 音乐	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐	社会-英語 音乐
芝	芝 小 芝 西 小 芝 南 小 芝 富士小 芝道ノ爪小 芝 中 芝 西 中	算数	算数	社会-理科 國工	社会-國工 道德	社会-國工 音乐	国語-國工 道德	国語-國工 音乐	国語-國工 音乐	国語-社會 理科	国語-社會 理科	国語-音樂 音乐	国語-音樂 音乐	国語-音樂 音乐	国語-音樂 音乐	国語-音樂 音乐	国語-音樂 音乐
南平	元郷小 領家小 十二月田小 元郷南小 朝日東小 朝日西小 元郷中 十二月田中	社会	国語-理科 國工	理科-音樂 家庭-体育 國工	国語-音樂 音乐			算数-國工		算數-理科 道德	国語-理科 道德	国語-國工 特活	国語-國工 特活	国語-國工 特活	国語-國工 特活	国語-國工 特活	国語-國工 特活

地区	学校名	(研究年度)								(研究教科)							
		S 52	53	54	55	56	57	58	59	国語-社会 音乐	算数-体育 国語-理科	国語-社会 音乐	算数-理科 国語-社会	国語-理科 数学-英語	国語-理科 数学-英語	国語-理科 音乐-英語	国語-理科 音乐-英語
新郷	新郷小 新郷南小 新郷東小 東本郷小 東中 様松中	国語-國工 特活			国語-社会 体育					国語-社会 音乐			算数-体育 国語-理科			国語-理科 国語-理科	
安行戸塚	安行小 戸塚小 慈林小 安行東小 戸塚東小 安行中 戸塚中		国語-算數 体育		国語-國工 道德					国語-理科			算数-國工 国語-技术 家庭			国語-算數 社会-美術	
横曾根	仲町小 飯塚小 飯仲小 原町小 西中 仲町中	国語-理科 國工	国語-社会 体育	国語-体育 體育兒		国語-算數 音乐-技术 家庭		国語-理科 体育		算数-理科 体育-英語			算数-体育 体育-英語			社会-理科 国語-社会	

地区	学校名	(研究年度)		(研究教科)					
		S52	53	54	55	56	57	58	59
中央	本町小	国語・算数 体育・道徳 障害児		社会・算数 体育	社会・算数 音楽	算数・体育 障害児			社会・団工
	幸町小								
	舟戸小	社会・算数 体育		算数・音楽 体育		算数・体育			
	並木小	数学・美術 家庭		算数・音楽 体育	体育・特活 道徳	社会・理科 音楽	社会・算数 体育		
	南中						英語・特活	数学・英語	
	幸並中	数学・美術 体育		国語・技術 家庭	理科・音楽 道徳				
神根	神根小	社会・団工 特活					国語・音楽		
	神根東小			算数・団工 体育					
	根岸小				理科・音楽 団工			国語・体育	
	差間小				美術・英語 特活				
	在在家小	理科・音楽 体育					社会・数学		
	北中						体育・英語	社会・美術	
芝前川	神根中								
	前川小	国語・算数 体育					社会・団工		
	柳崎小							国語・体育	
	芝東小								
	芝中央小								
	芝東中								
青木	岸川中	社会・音楽 特活		国語・数学 体育					
	上青木小								
	青木北小								
	青木中央小								
	前川東小	算数・理科 団工		国語・算数 体育					
	上青木南小								
芝	青木中	国語・音楽 技術家庭		国語・算数 体育					
	上青木中								
	芝小								
	芝西小								
	芝南小								
	芝富士小								
芝	芝越ノ爪小	社会・理科 体育		国語・算数 体育					
	芝園小								
	芝中								
	芝西中								
	芝園中								
	小谷場中								
南平	元郷小	算数・音楽 団工							
	領家小								
	十二月田小								
	元郷南小								
	朝日東小								
	朝日西小								
東領家小	東領家小								
	元郷中								
	十二月田中								
	領家中								

### 3、特色ある活動

#### 1、授業公開および研究協議会

本会の最も重要な事業のひとつであり、各地区ごとに小・中各1校（全市18校）が授業研究公開し、それをもとに、学習指導改善のため、研究協議会を開く。教科は授業研究校が選定して、全市的視野から、授業研究公開期日を調整して授業研究協議会を行う。授業公開を行うに当っては、事前研究会をもって、それぞれの授業研究の課題を追求し、磨きぬかれた研究素材の提供を図っている。助言者には、市教委指導主事の他、当該研究部の正副部長がこれに当っている。研究公開校は前年度に決定し、公開校の教育目標、その校の課題の具現化が研究テーマとなっていることは言うまでもない。

#### 2、地区の問題別協議会

地区を中心とした研究活動であり、具体的な活動としては、中学校を単位に、小・中学校の教員が、現在重要な課題になっている非行・問題行動をどう克服したらよいかについて、協議会をもっている。小・中の関連において、問題の解明と対策指導の充実につとめている。

#### 3、市文集「かわぐち」の編集

国語研究部が中心となり、児童・生徒のすぐれた作文を全市の小・中学校から募集し、「かわぐち」なる文集を作成している。小1～小6と中学校の7分冊となっており、各校に配布し、作文指導・生活指導にも資料として活用、今年は15号を発行し、16号の編集に着手している。

#### 4、研究集録・広報紙

年度末に、研究の成果を集録にまとめて、刊行。広報紙としては、機関紙「教育研究会情報」を年5回会員に配布し、研究活動の活性化を図り、身近な活動として情報を提供している。

#### 4、運営に当っての配慮

- 1、日常の教育活動の深化充実を図るために、研究会活動は、充分に吟味された事業内容であることを確認して、事業の遂行につとめている。
- 2、研究会活動は、授業に支障をきたさないよう、開催期日の同一開催の集中排除、時間設定

にも配慮し、すすめている。

#### 5、昭和59年度の研究活動

##### 1、活動の基本方針

(1)子どもから出て、子どもに還る研究態度を堅持する。(2)すべての研究活動をとおして、非行・問題行動の克服をめざす。(3)研究部・地区並びに専門委員会等の一層の充実をはかり、相互の効果的な結合につとめる。(4)会員の相互の創意工夫により、常に生氣ある活動を進める。(5)十分吟味された事業の実施につとめる。

##### 2、研究部活動

(1)研究テーマを明確にし、周到な計画のもとに意欲的に専門領域の研究を深める。(2)課題別や領域別の研究などの工夫を加え、主任だけの活動でなく、幅広い活動を行う。

事例 算数数学研究部「研究テーマ」一人一人の子どもの個人差、能力差に応じて、わかり易く解決の喜びを味あわせる授業の展開の研究。

##### 3、授業研究

研究校は、小・中各地区1校、全市で18校の授業公開・研究協議会を実施する。授業校及び研究教科は、前の資料に示した通りである。

##### 4、地区別問題協議会 非行問題専門委員会 文集編集委員会 研究集録編集委員会

昭和59年度の事業として、それぞれの専門領域の継続研究を行い、研究部活動の充実をはかっている。

##### 6、今後の課題

研究会活動が、安定した活動を続けるために常に、前向きな姿勢で、マンネリズムに陥ることなく、日々新たな気持で研究の深化充実をめざしたい。そして、吟味された事業、研究活動が常に、創意によって、活性化を図り、生き生きとした、研究活動の発展を願っている。

# 与野市教育研究会

## 1. 会のあゆみ

与野市における教育研究会は、20年前というと、名称はあったがあまり活発な活動はしていなかったように思う。

当時は、有志が各研究部ごとに集まってサークル研究という形態が多く、市を挙げての研究体制というものは出来ていなかった。

現在では、20年前の状況について詳しく知っている人も少なくなってきたので、はっきりしたことは不明であるが、幸いなことに、市の教育委員会で、昭和45年から「与野の教育」第1号を発刊し、以来毎年市内の教育についてまとめており、それを参考としてまとめて見たいと思う。

与野市の教育研究会は、市としての連合体といったものはないが、小学校体育連盟、国語科の書道書写研究会、社会科、理科などという県の教育研究会とつながりのあるものは大部分下部組織として、各校の研究主任を中心となり自主的な活動を続けてきている。

したがって各学校の教職員は、主任の報告により、県の行事を知り、それにしたがってそれらの行事に参加することが多かった。現在でも、こうした形態とあまり変わっていないところもあるが、これとは異なった研究会づくりが行われたところも多くある。「与野の教育」・第6号

## 科学展



によると、その一例が掲載されている。それによると、

C 小学校で算数の授業研究会が開催された。当時は算数科では、集合や関数に関する問題が現場の教師の関心を集めていたのでこの研究会に参加した教員もひとりわ多かった。授業終了後の研究会の中で、今後の算数教育のことについて話が及び、研究授業の必要性が叫ばれ、自分たちの手で算数教育の研究をやろうということになったとのことである。ただちにその席上で世話を選出され、算数・数学教育研究会の発足にこぎつけたとある。

こうした研究会に市の教育委員会でも大いに期待をかけ、助成もしたので熱心な研究会となり今でも活発に活動している。

## 連合運動会



以上は研究会の発生したときの状況であるが、他の研究会も、これと似かよった形で生れてきた。現在では、各教科、領域ごとの研究部が年度はじめに、各学校に会員募集の要項をくばり、会員を募り、研究会を組織している。各学校の教職員は、自分の希望する研究部へどれか1つ参加している。人によっては2つもかけもちで加入している人もいる。

各部の部長、副部長は、校長、教頭が多くなっているが、それぞれ年間計画をたて活発な活動を続いている。

## 2、主たる活動と事業

市として連合会の事業や活動は、特にないので、各研究会の活動状況について述べる。

各研究会の主たる事業は、授業研究が中心である。与野市は、小・中学校合計して11校という小さな規模であるので、1校で授業研究会を開くと、各校は1名以上必ず参加させ、研究の成果を自校へ持ち帰るようしている。

講師の招聘も経費の関係もあり、招聘したり、しなかったり一定していない。したがって極めて地味な研究会ということである。

次が展覧会の開催である。市内物展に合流しての国工美術作品の展示、特殊学級による作品展、理科研究会による科学展、技術家庭科による発明工夫作品展など研究会による展示活動は活発である。

上記のほか、社会科研究会による臨地研究会も、年を数えると20年近くになるのではないだろうか。また昭和47年頃、与野市の社会科副読本づくりで毎日遅くまで頑張ったのも一つの思い出の事業となっている。

理科研究会で主催する市内の植物に関する実地研修会も毎年20名～30名位の参加を得て盛大に実施されている。

小学校教育連盟でも、春に全市内小学校5・6年生によるポートボール大会、夏に水泳大会、秋に陸上記録会と数多くの行事を消化しているが、これも小学校8校というまとまった小さな市であるから出来るものと自負している。

最近では、視聴覚教育研究会が盛んになり市の教育センターの指導を受けながら自作教材（VTR）づくりに取りくみ、県の表彰をいたくまでに成長してきている。

## 3、特色ある活動

### (1) 音楽鑑賞教室について

与野市では、音楽教育研究会が中心になり毎年市内の小・中学生に生の音楽を聴かせている。

これは、昭和48年頃音楽研究会の人たちが小・中学校の鑑賞教材としてあげられてあるものをレコードで聴かせて済ませていたものを、ぜ

ひ、ほんものの音楽で学習させたいという強い念願からついに市教委を動かし、市内小・中学校教職員全員の賛同を得て実施に移されたものである。

市内の小学生5年6年と中学生全員を対象とするこの行事は並大抵のことでは実施できない訳である。

市立体育馆を借用して2日続きの音乐会である。1日2交替制で午前と午後の部の催があるので遠い学校から参加する児童などは、給食時間の変更やら時間割の変更など、さまざまな問題がおきてくる訳であるが、その調整をしたり、演奏者との関係などを処理したり大変な事業である。然し、これも、児童・生徒たちが、生の音楽に接し、音のもつすばらしさにふれることができれば教師としては何よりも嬉しいことであり、このためには、どんな困難な仕事もやり遂げようとお互いに努力している。ちなみに昨年度のプログラムは下記のようである。

小学生	中学生
1 序曲 軽騎兵	1 序曲 セビリヤの
2 交響曲 連命	理髪師
3 組曲 アルルの女	2 交響詩 我が祖国
4 楽器の話	3 引き潮 ハープ
5 引き潮 ハープ	4 歌劇 カバレリア
6 旧友	5 旧友
7 ラプソディー	6 組曲 アルルの女
8 みんなといっしょに	7 楽器紹介
(2) 幼小研究会	

これは、市内の小学校長と市内の幼稚園長9人との研究会である。これは、昭和48年頃よりはじめられたように思う。昭和46年に出された中教審の答申により、幼小一貫教育が打ちだされたので一段と活発になったように思う。事業としては

(1)定例会 学期1回程度開催し年間計画の樹立や情報交換、反省会など行っている。

(2)保育公開 每年2月に各幼稚園で保育公開をして、小学校の教員が参観し、後、研究会を開催している。特に、小学校入学前の指導につい

て、幼小の各先生方が遠慮のない話し合いを行い、幼小一貫教育の一助にしようというねらいである。

(3)授業公開 每年5月頃各小学校で1年の授業公開を行い幼稚園の先生方に見ていただき、お互いに児童理解を深め合うということである。

#### 児童会まつり



#### 水泳大会



(4)講演会 每年11月頃開催している。

これには、幼稚園の全先生と小学校では主として低学年担任の先生が参加している。テーマも幼小に關係するものを取りあげて、午後のひとときを共に学習をしている。

#### 4、運営にあたっての問題点

現在市の教育研究会としては、連合会といった組織がつくられていない。したがって各教科研究会との行事の調整がつけにくい状態にある。

各研究会は、各校の研究会員から各校の行事を探りながら事業計画をつくり実施している。

また、与野市は、大宮市、浦和市という大きな市に囲まれており、こじんまりまとまってしまった感じがあるので、浦和市や大宮市との共

同研究などの道が開けたら有難いと思う次第である。

#### 陸上記録会



#### 5、昭和59年度の研究活動

市教育連合会としての研究活動は計画がなされていない。

したがって、各研究会で活動している状況を報告し紙面をふさぎたい。

(研究会名) (主な活動) … (1つのみ)

1 国語研 書きぞめ指導書の作成

2 社会科研 社会科副読本の見なおし

3 算数数学研 小・中・高を通じての授業研究

4 理科研 市内植物採集現地研修

5 音楽研 音楽鑑賞教室

(小5、6、中全員対象)

6 園工美術研 夏休み実技研修

7 技術家庭研 授業研究

8 体育研 市内スポーツ大会、実技講習

9 道徳研 授業研究

10 特活研 児童会活動と学校行事の研究

11 図書館研 学校図書館と公共図書館の提携

12 視聴覚研 自作教材 (OHP、VTR)

13 学級経営研 實践報告会

14 学校同和研 年間指導計画の総仕上げ

15 特殊教育研 指導法の研究、合同作品展

16 幼小研 授業、保育参観研究会、講演会

17 英語研 授業研究

18 養護研 性教育

19 事務研 予算の効率的利用について

## 図工美術の作品展



### 6. 今後の課題

与野市には、連合会としての組織が出来ていないので、この組織づくりが何よりの課題であると考えている。

各研究会ごとの活動は活発に行われているので、今後はこの各部の活動がより一層充実発展するためにも、調整機関として一日も早く組織づくりが行われるべきである。

なお現在は、教育臨調ともいわれる臨時教育審議会が設置され、教育問題が大きく取り上げ

られている重要な時期だけに、市の教育発展の推進力となるこの連合会に寄せる期待は大きいものがあると思う。

また、それだけにこの会の組織づくりは慎重に対処しなければならないと思う。そのほか経費面においても、活動面においても、自らの会であるので自らの力で会を盛りあげていこうという意識を高めることも課題であると考えるものである。

### 特殊学級と普通学級の交流会宿



## 草加市教育研究会

戦後相次いで教育に関する法律が出され、整備されていくなかで、学校教育に新しいいぶきを全国民が期待していた時代、本会は昭和25年5月1日に発足しました。

当時は「社会科」という名の授業や「地域社会や児童・生徒の特性や物の見方」に応じた教育実践の研究等が新しい学習指導要領一般篇（試案）により動き始めていたところでした。もちろん「草加町教育研究会」という名で出発している。会員数もわずかで百名足らず、現在とは隔世の感がある。以来当研究会も着実に試行および実践を重ねていった。その後町村合併により、会員数も一気に増加し、運営組織、研究組織自体も急速に大きくなり、研究体制そのものの改革を漸次すすめていくことになっていった。

自作プリントの研究物の発行や各種展覧会の年ごとに積極的に企画運営していった。

運営組織については、昭和47年までは各校の校長が会長等ほとんどの役員を分担し、更に教科・領域等の各研究部長も分担してその運営活動にあたっていた。が、職員団体や多くの職員から、もっと開かれた研究組織に改め、すべての教師が自主的に研究に対する問題意識をもって参加できるようにするべきだとの発議が出され現在の組織の基礎ができあがった。昭和47年度の総会には、新しく生まれ変わった苦しみも手伝って議論百出大いに紛糾したことでも事実でした。

役員は、評議員を各小中学校長、各研究部長各小中学校の代表1名とする。この評議員の中

から運営委員として、校長を代表するもの2名、研究部長を代表するもの2名、各校を代表するもの2名の計6名とする。そして評議員会で会長を選考し総会の承認を得ることになりました。このことが翌昭和48年度の総会で承認され民主的に運営されるようになり今日に至っているわけです。

研究部は、学校運営、国語、社会、算数数学理科、音楽、図工美術、保健体育、技術家庭、家庭、英語、道徳、特別活動、視聴覚、書写、図書館、養護教諭、教育心理、給食、学校行事進路指導、安全教育、障害児教育、教育相談、同和教育、学校事務、保健主事、栄養職員、生徒指導の29研究部となっている。各研究部とも年間5～7回の連絡協議会、授業研究会を開きそれぞれの課題等について研究をすすめている。

現在（昭和59年度）会員数1140名（小学校22校、中学校10校）という大きな組織となっている。会の運営費は会費800円（年額）と市の補助金によりまかなっている。

昭和53年度からは各研究部の研究活動の記録や研究委嘱校の概要などを「研究紀要」に載せ、

全会員に配布し研究成果をお返ししている。そして、本市における教育活動への感謝のしるとして10年、20年、30年……という節目にあたる教職員には、永年勤続の功労者として記念品を添え表彰することにしている。

また会員の10%にあたる教職員を毎年順番に県外学事視察員として派遣し先進校を視察させ研修の推進の一助としている。これは教員相互の交流親睦もはかられ、会員から大変な好評を得ている。

さらに昭和57年度からは、上記29の研究部の中からその年度の重点教科・領域を指定し、研究テーマを設定して研究にあたっている。この研究は草加市教育委員会の「グループ研究助成金」も加えて充実した研究にもなっている。この研究の成果は総会において発表されることになっている。

以上当研究会の活動の歩みと現況について述べましたが、これからもすべての分野での研究活動のいっそうの充実が期待できると自負している。

## 戸田市各教科領域等研究部会

本市は、昭和60年度国鉄通勤新線開通に伴い3駅が設置され、急速な環境の変化が予想されている。教育行政においても、新しい自治体への変容に対応できる施策が樹立され実行されつつある。しかし、その施策一つ一つの効果は、市立小・中学校の教職員のひとりひとりの資質が向上されなければ、現実のものとして定着することは不可能である。本研究部会は、これを前提として諸活動の活発化を図り、市民の期待に応えられる教職員の育成に努力している。

### 1、各教科領域等研究部会の組織、構成の概要 昭和44年地方自治法の一部改正を機に、戸田

市教育委員会に指導課が設置されたことに伴い、各研究部会は、市教委との緊密な連携が可能になった。また、同時期に研究部会の統合、新設を行った。現在、研究部会は23部会あり、市内全教職員が各学校の校務分掌によって、それぞれの研究部会に所属している。研究会活動は和気あいあいの中で推進され、教育行政担当者や市民からもその評価は高い。

各研究部会は、部長1名、副部長1名、部員は各学校選出の教員によって構成され運営に当っている。部長は、市内各学校の校長が当り、副部長は、各学校の教頭が担当している。部員の人数は、研究部会によって多少の差異はある

が20名前後である。なお、研究部会を開催する場合は、必ず市教委指導主事の参加を要請し、指導助言をいただいている。

## 2. 主な活動の概要

各研究部会は独自の年間計画に従って、活動を行っているが、市教委、市校長会の調整により問題は起きていない。諸活動の目標とするところが、教職員の資質の向上と、児童生徒の能力の伸長にあるので、地味な活動を前提としているが、質の高い研究活動が活発に推進されている。また、行政との関連に立って、市、県、文部省教委の研究発表校への援助、協力、各展覧会、競技会の実施等広範囲な活動も行っている。

## 3. 特色ある活動の概要

第1は、市教委や校長の指導のもとに、独自の研究活動を実施していることがあげられる。

第2は、研究部会に市教委から研究補助金が支給され、活動の効果的な運営が行われていることである。

第3は、研究部会の活動内容が、部員によって各学校に報告され、その学校の教育内容の改善等に利用されていることがあげられる。

第4は、研究集録が部員ばかりでなく、各学校に配布され、校内研修等の資料として活用されていることである。

## 4. 各研究部会の活動内容の概要

### (1)国語科教育研究部会

本部会は、国語教育の向上をめざし、会員の意欲的な取り組みによって活動が活発に推進されてきた。活動の主なものは授業研究である。

「魅力ある授業」を目標に小・中の関連をおさえ、文学教材をとりあげ毎年小中4校の授業研究を行ってきた。また、特に中学校は古典教材による研究授業を行い研修を進めてきた。指導者も市内外からお迎えして効果的な研修が定着している。

### (2)書写教育研究部会

本研究部会は、教師の書写技術・書写指導法の向上を目的として各種研究会を行ってきた。

毎年実施している研究会の主なものは次のとおりである。

(イ)硬筆指導法 (ア)授業研究会（公開授業と研究会）(ウ)評価研究会（児童の作品）(エ)書道作品鑑賞会（東京都立美術館見学）(オ)書初め手本実技研修会。

### (3)社会教育研究部会

戸田市では、小・中17校の社会担当者をもつて研究部会を構成し、校長会、教頭会代表が正副部長を受けもち、市予算から部費を受け、市指導主事のアドバイスを得て次の研究をしている。

(イ)授業研究会（各校輪番制と希望制）(ア)臨地研修会（1泊2日と日帰り）(ウ)副読本の改訂（小3・4年の差し換え）

### (4)算数・数学科教育研究部会

本研究部では、授業研究による指導法の研究と、子どもの実態を客観的な観点からとらえるための学力調査を主な活動としている。

授業研究は年間小中学校それぞれ2回行ない指導力の向上をはかっている。

学力調査については、中学校では「数と計算」について調査を重ねたが、57年度より「文章題」の調査を実施している。小学校では昨年度より5年生を対象に「数と計算について調査した。

### (5)理科教育研究部会

戸田市理科研究部では、本市理科教育の振興を図るため、例年概略次のような計画を立て実施している。

(イ)夏休み理科自由研究相談会（2日間）

(ア)戸田市科学展覧会 (ウ)戸田市児童生徒作品展への協力 (エ)理科授業研究会(年間2回実施)

### (6)理科実技研修会

### (7)音楽教育研究部会

音楽研究部としては、市内の音楽教育の高揚を目指し、又常に新しさを求めながら研究を進めている。特に授業研究会・実技研修会は年々

充実してきており、多くの先生方の力となってきている。

又、本年17回目を数える音楽会や埼玉大学管弦楽団にご協力頂いている音楽鑑賞会は、本市音楽教育推進に大きな役割を果している。

#### (7)図画工作・美術教育研究部会

美術教育に対する本市の関心は高い。本研究部会はこれに対応して、市の行政施策にも協力し市民の各種意識の高揚等に成果を上げている。

教師の指導技術の向上についても、市教委指導のもと、各領域の研究会を実施している。

現在実施している研究活動は次のとおりである。  
(イ)授業研究会（小中学校各1校）  
(ロ)実技研修会（毎年各領域毎）  
(ハ)評価研究会  
(ダ)他校視察。

#### (8)家庭科教育研究部会

「実験的・体験的学习を通し家庭生活における基礎基本を学ぶ」を目標に職員の資質向上を目指し主に食物・衣服領域の実技研修を毎年実施し、先進校、織維工場等の視察、又教育機器を生かした授業研究を実施し諸先生方の共通理解を得ている。現在も年間指導計画の検討、施設設備の充実や安全管理について研究を進めている。尚創意発明工夫展や市内小・中作品展に出品している。

#### (9)技術家庭科教育研究部会

(イ)研究事業を実施（年3回）し、研究を深めている。57年度は授業の導入時の研究。58年度は基礎基本の定着、評価について研修を深めた。

(ロ)発明創意工夫展に参加。特に優れた作品はないが、年々参加作品数が増加していることは喜ばしい。

(ハ)戸田市児童生徒作品展に参加。年々質の向上が見られ今後に期待が持たれる。

(ダ)技術家庭安全講習会へ参加し、研修を深めた。

#### (10)体育科教育研究部会（小学校部会）

本研究部会は例年3つの実技伝達講習を実施している。また、長い間授業研究会の開催に力

を入れ、全校にわたって一人でも多くの教師が授業者としての経験を持つよう配慮し成果を得ている。昭和54年度から学年ごとの月例指導カードを作成して全学級担任に配布し、日常の体育指導に活用を図ってきた。又5、6年生全員参加の球技大会や管外の研究校参観等を通じて本市体育指導の振興に努めている。、

#### (11)保健体育科教育研究部会（中学校部会）

研究内容及び活動は、ここ数年県より示される研究協議会の研究主題に基づき研究活動を行っている。59年度は、第1主題「体操」と第2主題「水泳」を選択した。そのねらいは、学習指導要領に基づく体育授業の実践をめざして、よりよい授業の展開と、能力、特性、体力を高める指導のあり方の研究である。

#### (12)外国語科教育研究部会

本研究部会のこれまでの活動は、「教育機器」を活用し、生徒の表現活動を高める指導はいかにあるべきかを主眼に置いて事業を推進している。全体部会では、L L教材の協同製作及び指導法の研究の推進。また授業研究会を毎年1回実施し、機器を利用した授業と普通授業との関連の工夫について研究を推進している。更に生徒の表現活動の向上の一環として弁論・暗唱大会を実施している。

#### (13)道徳教育研究部会

道徳教育の推進研究のため、協議して定めた年間活動計画にもとづいて活動している。

昨年度は「全体計画」「年間指導計画」について講師を招き研究を深め「道徳指導年間指導計画作成資料」を冊子としてまとめあげた。これは各学校での指導計画改訂等の参考に役立てるためのものである。また授業研究会2回、全国道徳教育研究会千葉大会にも参加した。本年度は、さらに資料分析を重点にした授業研究を行い、研究の積み重ねが毎日の指導に生きるようにしたい。

#### (14)特別活動研究部会

集団の一員としての自覚と、心身の調和のとれた社会人の育成をねらいとして、県の特活の

重店・努力点にそって研修を進めている。

本年度は、「豊かな児童・生徒会活動の推進と積極的参加」をとり上げ、「話し合い活動のあり方、教師のかかわり方」を課題として、相互研修、授業研修、指導者を招聘しての研究会等行ない課題解決にせまりたい。

(15)学校安全教育部会

本研究部会は、学校安全教育の基本の方針をふまえて、学期ごとの実践項目を設定し、部員一丸となって鋭意努力を続けている。

内容は、通学路の指定と問題点の改善。安全指導の全体計画の改善。実践活動である安全教育のあり方。避難訓練・交通安全指導の実施方法等である。

(16)学校同和教育研究部会

同和教育研究部では、年間4回ほどの部会を開催し、次のような事業を実施している。

(イ)各校で同和教育全体計画や年間指導計画を作成するための資料作成。

(ロ)同和教育映画の視聴及び研修会。

(ハ)同和地区の実践に学ぶために、同和教育推進校視察。

(ヘ)同和教育の観点に立った授業研究。

(17)学校図書館指導研究部会

各校の主任を中心にして、管理運営、利用指導、読書指導等について実践例をもとに、研修会を実施している。更に毎年青少年読書感想文全国コンクールに応募することにより読書の深化と広がりをはかり、読書の習慣化を育てている。又、各種図書館教育協議会や大会に積極的に参加し、図書館の充実と振興をはかっている。

(18)教育機器研究部会

本研究部の発足当初は、ラジオ、テレビ、16ミリ映写機、幻灯機、O H P 等の効果的活用をめざした実技研修会、授業研究会が中心であり、効果を上げてきた。50年代に入ってからは、更にV T R・L L 及び先進校の視察等を加え、年々充実している。そのために、毎年実施している市内小・中学校教員対象の実技研修会も、ここ数年研究部会独自で指導できるまでに成長し

た。

(19)学校給食指導研究部会

学校給食研究部は、本市学校給食センターとの連携のもとに、毎月の献立をはじめ各校における給食指導のあり方ならびにその改善についての活動を行っている。

本年度は特に市教委の配慮により、給食時における「正しいはしの持ち方」についての指導が全市的に行われ、最近の諸調査に見られる現代っ子の日常生活における生活技能面の指導への一助を図っている。

(20)心身障害児教育研究部会

本研究部は、心身障害児教育を正しく理解し、いつ、どこにおいても、心障児に積極的に働きかける姿勢、また障害の程度がどの様であっても、ただちに対応できる指導の体制を作ることをねらいとしている。本年度は、障害児理解を前面にとり上げ、心障児学級担任者会で計画した行事（スポーツレクリエーション大会・校外学習）等に積極的に参加した。

(21)心身障害児教育担当者連絡会

本会は、市内小・中学校の特殊学級担当者で構成されている。その活動は、月1回の担当者連絡会を基盤にして行われている。主な行事としては、市内の特学の児童・生徒による「合同レクリエーション・合同遠足」を年1回行っている。

合同レクリエーションは、リズム運動・歌・ゲームなどを小・中学生がいっしょになって行うものである。また、合同遠足は、市のバスを使って自然と触れ合えるような施設を選んで訪れている。

(22)進路指導研究部会

本研究部は、駿班もち回わりで授業研究を実施している。また、年3回の研究会の内容は次のとおりである。

(イ)学級指導の中での計画的な進路指導のあり方。(ロ)公立校・私立校の情報交換。(ハ)能力に応じた進路選択について。(ヘ)新入生テストの実施方法について。

### (23)養護教諭研究部会

昭和48年度から研究会組織として月1回の部会を開き、歯・目・姿勢・性教育等の保健指導について研究を進めてきた。又、健康診断の充

実を図るため、寄生虫（回虫年1回から蟇虫年2回へ）喘息（肺機能・アレルギー）脊柱（モアレ写真）等の検査を市教委と話し合いながら実施して来た。

## 鳩ヶ谷市教育研究会

### 1、会のあゆみ

鳩ヶ谷市は、昭和15年4月、川口市に合併され、昭和25年分離独立し、鳩ヶ谷町として、鳩ヶ谷、草加地区の中心的な町として成長してきました。昭和42年3月1日、県下26番目の市として新生のスタートをきりました。都心から15km圏に位置し、南の一部が東京都足立区に接し、周囲は川口市になっています。東西2.8km、南北3.8km、面積6.2km<sup>2</sup>の小さなまちであり、昔から、日光御成街道の宿場町として栄えたところでもあります。

教育事務所管内では、蕨班に属し、すべての教育的な行事等は、蕨、戸田、鳩ヶ谷の三市がお互いに協力しあって行ってきました。

鳩ヶ谷市が単独で、教育研究会を組織したのは、昭和46年6月10日（木）鳩ヶ谷中央公民館に於いて、教職員236人、会の運営費1人当り2,400円（年額）、市の補助金1人当り18,000円でスタートをしたのがはじまりになります。当時として、鳩ヶ谷のような小さなまちが教職員1人当り18,000円の金を出すことは破格のことだったとおもいます。

学校数も、小5、中1の6校しかなく家族的な雰囲気の下に運営されたのではないかとおもいます。現在、小6、中3の9校になっており、市の補助金、会の運営費も全く同じ、異なるのは教職員の人数のみという状況になっています。

### 2、主たる活動と事業

#### ◎ 各種会議

- (1) 定期総会 年1回 毎年5月に開催
- (2) 正副会長会 年3回 会務の計画執行

- (3) 合同役員会 年2回 会務の審議

- (4) 部会全体会 年1回 部長選出企画立案
- (5) 研究部会 隨時 事業の執行

#### ◎ 申しあわせ事項

研究会（各教科毎）は毎月第1、第3の木曜日とする。

時刻は特別な場合（展覧会、作品展への出席）を除き、PM 2:30以降とする。

授業を伴なう研究会はPM 1:30以降の授業を活用する。

部長（一般教員）は会場校の校長に会場の借用許可を求める。等々であります。

現在19の教科毎の研究部から成りたっていますが、部により研究の深浅はあり、他市との交流などにより、研究を進めねばならないのではと考えています。

#### 3、特色ある活動

各教科毎に部長を中心に、研究授業、作品展、美術展等の研究視察などを行なう研究を深めていますが、教育研究会、全体になってやるものは、年1回開かれる総会時に於ける教育講演会のみであります。

#### 4、運営に当つての問題点

教育研究会は市や市教委も全面的な援助をしてもらっていますが、運営面では、役員構成を決める時点で、校長会、教頭会、教組の三分野から選出されます。年度はじめに、各学校毎に教科別の希望をとり、それを持ちよつて各部の構成が出来、部毎に部長、副部長が決ります。

正副部長に校長、教頭は一人もいないため、活動にやや弱いような点があります。これらを

改善していくことが肝要におもわれます。また、同じブロックの駒、戸田との交流も、もっとやる必要が感じられます。

## 5、昭和59年度の研究活動

### ◎ 各研究部の事業

#### (1) 本部

講演会は、各部でも個々に実施しているが、本部では毎年定期総会終了後開催している。本年は5月24日（木）下記のとおり開催し非常に感銘を与えました。

講演「子どもの自立をうながす教師のしごと」  
川口芝中央小教諭 斎藤晴雄先生

場所 増谷小学校 体育館

#### (2) 研究部

##### ア 国語・授業研究会

・観劇会

##### イ 書写・県硬筆展作品鑑賞

・毛筆書写実技研修会  
・県書きぞめ展作品鑑賞及び評価研究  
・書道書写研究

##### ウ 社会・県内史跡見学研修会

・増谷の歴史研究会

##### エ 算数・授業研究会（里小）

数学・算数・数学指導研究協議会

##### オ 理科・夏季現地研修会（児玉）

・理科指導実技講習会

##### カ 図工・美術館見学（西洋近代美術館）

美術・やきもの実技研修会

・市内児童生徒美術展

##### キ 音楽・楽器博物館見学研修会

・授業研究会（里小）

・音学会鑑賞

##### ク 家庭・食品加工工場見学研修会

・ミシン講習会

・食品添加物研究会

##### ケ 体育・授業研究（器械体操）（増谷小）

・体育夏季研修会

##### コ 特殊・授業公開事例研究会（桜小、増谷中）

教育・障害児等の研究

#### サ 英語・英語夏季研修会

・英語指導者研修会

#### シ 技術・研究部会

・整流作用研究会

#### ス 道徳・道徳教育研究部会（年3回）

・道徳授業研究部会

・県道徳研究大会参加

#### セ 同和・市同和部会

・同和教育指導計画、研究

#### ソ 生活・生活指導事例研究会

指導・学校別研究レポート協議

#### タ 健康・部会（年3回）

・保健指導研修

#### チ 事務・事務研究会

・実務研修会

#### ツ 栄養・食品加工工場見学研修会

・新献立調理実習会

・栄養価研究

・資料収集

以上19の研究部が、それぞれ計画をたて、児童・生徒の教育の面で寄与するべく努力を続けています。

本年度は市補助金は601万2,000円（内訳18,000円 '323人）研究会会費は80万1,600円（内訳2,400円 '323人）で運営をしています。

## 6、今後の課題

駿駒3市の中で一番小さいまちであり、本市の職員だけでは、どうしても小規模にならざるをえない。そのためマンネリ化の傾向がありはしないだろうか。

小さなまちのため、家庭的な雰囲気の中で、各自が一致協力し、資質の向上に努力をしていますが、少しずつ、特定の教科だけでも（書写は行っている）他市との交流により進歩発展を促すことができるのではないかとおもいます。今後、工夫と改善を加えて、会の発展に努力していきたいと存じます。

# 志木市教育研究会

## はじめに

志木市は昭和42年頃から人口の社会増がはじまり、小・中学校各2校であったものに加えて新設校が年を追って増設されていった。現在は志木市の将来人口を8万人と見通した教育計画に基づき、小学校8校、中学校4校、計12校が完成し、教員330人がそれぞれの研究部に属し教育研究活動に取り組み成果をあげている。

## 1. 研究活動のしくみ

教育研究については、市教育委員会の指導の下に、連合教育研究会の研究主題にも添つて活動しようとしている。学校数も少ないので、校長会が連絡調整の役割を果す方式で、県の各教科等研究団体の理事を推せんし、その理事を中心として、各校の教科等・領域別研究主任が研究推進の役割を果している。

## 2. 主な活動と事業

例年実施する各研究部の事業は下記の通りである。

研究部	事業
国語	主任研究協議会・授業研究会
書写	主任研究協議会・硬筆・書初審査会
社会	主任研究協議会・現地研修会 基礎学力調査の実施とまとめ
理科	主任研究協議会・科学展の実施 実技研修会
算数・数学	主任研究協議会・授業研究会
音楽	主任研究協議会・実技研修会 小中学校音楽会・授業研究会
図工・美術	主任研究協議会・授業研究会 市内図工展覧会の実施
家庭(小中)	主任研究協議会・授業研究会
技術	創意工夫展・児童生徒研究発表会
体育	主任研究協議会・実技伝達講習会 授業研究会・他校参観・各種競技会
英語	主任研究協議会・スピーチコンテスト

道徳	主任研究協議会・授業研究会
図書館	主任研究協議会・読書感想文審査
特殊教育	特担研究協議会・教材教具の作成 作品等子どものあゆみ展(太陽展)
生徒指導	主任研究協議会・事例研究会
保健	主任研究協議会・保健統計資料作成・保健だより(啓蒙活動)
給食	主任研究協議会・献立研修会
同和教育	主任研究協議会・授業研究会
特活	主任研究協議会・学級指導研究会

以上であるが、回数は年間各4回程度であり、朝霞班4市の合同事業も含まれている。他に、県の各教科等研究団体の主催する研究発表会や研修会に積極的に参加するよう努めている。

## 3. 特色ある活動

志木市教育計画の中ある重点研究課題として、次の教科領域については特に研究予算が組まれ、自主的な研究活動を展開している。

### ① 郷土学習研究委員会

社会科主任を中心とした委員会で、郷土志木の社会科副読本を編集し、その資料の調査研究をすることにより、その内容の充実や改訂も重ねている。

### ② 道徳教育研究委員会

道徳主任を中心として組織し、道徳の指導計画案を作成し、それに添った授業案の研究・授業研究会を実施している。

### ③ 同和教育研究委員会

同和研究主任をもって組織し、学校同和教育年間指導計画を作成し、これに基づき授業研究も実施している。

### ④ 体力向上推進委員会

体育主任が中心となり、本市の体力の調査や体力向上のための方策を検討し、広報紙等により、体力向上に関しての啓蒙を図っている。

- ⑤ 少年自然の家研究委員会  
市内小中学校代表からなる研究委員会で、宿泊学習の計画例や、野辺山周辺の自然について研究し、少年自然の家宿泊学習の手引書を編集して市内小中学校の参考資料を作る。
- ⑥ その他 研究課題を持ち計画的に実践研究をする個人にも研究助成金が組まれて、自主的に研究にとり組む研究費が支給される。これらの研究集録も毎年作成し、各校の研究に資している。

#### 4. 運営に当っての問題点

志木市教育研究の専門部活動の予算はなく事業は各学校から持ち出しになつたり、校長会費から助成することになる。したがつて、事業活動をふやすことはむずかしい。

#### 5. 59年度の主な研究活動

- ① 学校研究課題の研究発表・公開授業の計画
  - イ 体育 志木二小 59. 11. 1 公開  
主題「たくましく健康な子ども」一励まして一  
合意、意欲的に運動する喜びをめざして一
  - ロ 算数 宗岡三小 60. 1. 23 公開  
主題「算数の基礎学力を高める指導法の研究」一図や表をとり入れて数学的考え方を伸ばす授業展開の工夫一
  - ハ 算数 志木三小 60. 1. 29 公開  
主題「算数科の基礎学力の定着をはかるための指導法の研究」一筋道を立てて考える力を伸ばす指導法一
  - ニ 国語 宗岡二小 60. 2. 7. 公開  
主題「読み深めさせるための指導法の研究」  
—物語文を中心として—
- ② 市内公開授業研究会の実施
  - 家庭科 59年9月 宗岡二小にて
  - 道徳 59年9月 志木小
  - 同上 59年10月 志木中
  - 同上 59年12月 宗岡四中
  - 数学 59年10月 志木中

- 美術 59年11月 志木中
- 体育 59年11月 志木中
- 特殊教育 59年11月 宗岡中
- 同和教育 60年2月 宗岡二小

#### 6. 今後の課題

- ① 市内各小中学校の公開授業はできるだけ多くの教員が参加し、身近な研修の機会とする努力が更に必要である。
- ② 各研究部の活動は計画的、継続的に内容を深めるよう運営の工夫をする。その活動を通して各校の研究部主任としての資質の向上を図りたい。
- ③ 各教科等研究団体の理事は、各研究団体の活動内容に精通するよう努力する。

# 和光市教育研究会

## 1. 和光市教育研究会のあゆみ

本研究会は過去19年間の研究の実績をもって発展して来た研究団体である。その間二年前に全員加入による再発足を遂げ、長谷川会長を中心とし19年目の研究活動に励進している。

発足当初は、一部の教職員のみの加盟であったので、加盟数をふやそうと努力されたが、その後も余り会員は増加できなかつた。このことをうれえた現会長長谷川先生を始め、職域団体の有志が、五年前から市教研問題協議会を発足させ校長会代表、市教研代表、職域団体代表その他で会を構成し20回以上の会合を重ねて慎重審議の末、全員加入による和光市教育研究会を昭和57年10月21日に再発足する運びとなつた。

従つてこのあゆみも再発足後のものとした。

全員加入による再発足総会を開催し、会長に和光三小校長長谷川智彦先生が就任された。19の研究部を設け会員数270名であった。

昭和57年度は研究期間が下半期の11月から3月までであったが、その間運営委員会、評議員会三回、研究部長会、一斉研究部会、体育実技研修大会、教育講演会、研究発表会（発表者3名）、一斉研究部反省会等多彩な全体行事を消化し終了した。また各研究部の研究活動は、主として、授業研修会、部会、見学、市教委委嘱による研究会への参加、地域の教材づくり、音楽鑑賞会、市内音楽会、図作品研修会、体育実技講習会、教科研修会、研究部紀要作成、現地研修会、授業研究、習字実技研修会等かなりのハードスケジュールで実施された。また研究活動を活発にするため第三金曜日を当てることにした。

昭和58年度は、総会を昭和58年5月13日（金）に和光三小で開催され、和光三小校長長谷川智彦先生が会長に再選された。全体研究活動の方

は一斉研究部会、研究部長会議、運営委員会、評議員会年三回、体育実技研修大会、教育講演会、教育研究発表会（発表4名）、研究紀要作成委員会、一斉研究部反省会、役員選考委員会が開催された。各研究部のあゆみは、主として部会指導案研修会、書写実技研修会、研究事業、郷土学習地域教材のテキスト作り、理科実技研修会、オーケストラ鑑賞会、器楽実技講習会、市内音楽会、体育実技伝達講習会、各種研修会、現地研修、管外視察等の研究活動が実施された。

昭和59年度の全体研究活動は後述するので省略するが各研究部のあゆみは、部会、現地見学授業研究、学習会、三小研究発表参観、実技研修会、オーケストラ鑑賞、市内音楽会、絵画作品研究会、図工美術市内展、市内科学展、英語研修会、他校参観、技術研修会、現地研修等の研究活動を実施する予定である。

## 2. 主たる活動と事業

年度	主たる活動と事業	説明
57	○57年10月21日(木) 和光市教育研究会総会 ・場所和光市立第三小学校体育館	○和光市立第三小学校校長谷川智彦先生会長に就任する。 会員数270名
	○57年11月12日(金) 一斉研究部会 ・場所和光三小体育馆	○全体会、研究部会
	○57年11月29日 体育実技研修大会 ・場所和光二中、和光三小、広沢小体育馆	○優勝北原小チーム
	○58年1月10日(月) 教育講演会 ・場所市民ホール	○演題「人間形成と科学」 ・講師埼玉大学学長理博 須甲鉄也先生 参加者220名

	<p>○58年2月7日(月) 教育研究発表会 ・場所理化学研究所</p> <p>○58年5月13日(金) 和光市教育研究会総会及び一斉研究部会 ・場所和光市立第三小学校体育館及び関係室</p> <p>○58年9月2日(金) 体育実技研修大会 ・場所和光二中、和光三小、広沢小体育館</p> <p>○58年11月16日(木) 教育講演会 ・場所和光市立本町小学校体育館</p>	<p>○発表者テーマ ・新倉小進洋子教諭 「表現力を高めるた レーザー棟会議室め に」一書くことは 自己実現の道ー ・和光市小中学校養 護教員研究協議会 北原小阿部伊織養護 教諭「児童生徒の生 活状況」 ・広沢小本谷宇一教 諭 「とびだした子ども たち」一低学年の文 学教材の指導ー</p> <p>○和光市立第三小学校長谷川智彦先生 会長に再選させる。 会員数273名</p> <p>○全体会、研究部会 ○優勝大和中チーム</p> <p>○演題「これから の小中学校教育に望 むこと。」 ・講師立教大学文学 部長浜田陽太郎先 生参加者184名</p> <p>○発表者テーマ ・国語「スイミの絵 本づくりの読み取り」 新倉小柳沢裕美教諭 ・算数、数学 「マイクロコンピュ ーター利用の学習」 和光三中相原寛教諭 ・理科 「地学教材のテキス ト作り」 市教研理科部代表 白子小石田勝明教諭 ・放送教育 「放送教育前進のため」 和光三佐々木明教諭</p>
58	<p>○59年2月10日(金) 教育研究発表会 ・場所理化学研究所 レーザー棟会議室</p>	
59	5. 昭和59年度の研究活動 にて述べているので省略	

### 3. 特色ある活動

特色ある活動としてここでは、教育研究発表会に焦点をあててみる。

教育研究発表会は19年前の会が発足した当時から毎年開催され、過去17年間のテーマの合計は57本に達している。さらに57、58年度と7本の研究が発表されたことは、会員の研究活動がかなり活発になされたことを物語っている。

ここでは58年度研究発表の中から地域に根ざした地学教材のテキスト作りと時代の先端のマイクロコンピューター利用の学習についてのあらましを述べてみる。

#### (1) 地学教材のテキスト作り（和光市の地層を中心とした資料集め）

市教研理科研究部では、研究活動の反省から研究授業会や実技研修会を実施し、一応の成果があったが、活動内容に一貫性が乏しかったのではないかとの反省から、その一貫性を考え、しかも部員自らの手で作り残していくものを作りながらの活動に取り上げることとした。地域の教材作りとして第一に取り上げたいのは、地学関係である。

和光市の位置は、武蔵野台地の東端、沖積層と洪積台地の境目にあたり地学的にもかなり興味のあるところである。更に露頭が数か所あり地学学習に適していると考えられる。しかし最近宅地化が進み、せっかくの露頭も段々となくなり、教材が破壊されていく現状から、何らかの形で記録しておく必要もあり、またそれが地学教材の資料として活用できれば一石二鳥といえる。

テキスト作りの第一歩として新倉牛王山のVTR、スライド、写真を撮影した。さらに、本年度はテキストの内容について検討し決定した内容は、

- ①関東平野の地層の変遷②和光市の地形図
- ③和光市および付近の地層
- ④和光市内の小・中学校の地層柱状図
- ⑤指導展開例とした。

58年度の夏休みを中心に部員が分担し資料集

めをして作成したものである。更に次年度はこのテキストを活用して授業研究を実践していくと考えている。

#### (2) マイクロコンピューター利用の学習

和光三中では、数学科の相原教諭が中心となって、五年前から、マイコンのソフトの研究が盛んになっていた。特に必修クラブにマイコンクラブが設置され、生徒もかなり熱心に学習を開始した。また生徒の中には小学校の算数がわからない者もいるのでマイコンを使って学力の補習ができないものかと考えた。しかし導入に当って次の点で困難を生じた。それは、機材とプログラムにつまずいたことである。特にプログラムについて市販のソフトは無く、他校にもないので、独自で開発するしか方法がないという状況であったが、しかし幸い富士通（株）が機材・ソフトの両面で協力してくれることとなり問題は一挙に解決した。

導入にあたって、考慮したこと

①内容は分数の計算練習とし、中学生が使用するので必ずしも小学生が学習する順序にはこだわらない。

②対象は小学校レベルでの分数計算につまずいている生徒とする。

③複数人数の同時利用でなく、完全な個人利用とする。（授業での使用でなく補習用）

④～⑥まで省略 ソフトの内容省略

試用の結果(1年生20名1か月間の使用結果)

使用結果

事前テスト10問の平均点7.3点

事後テスト10問の平均点7.8点

使用回数1人3回、使用時間1人平均10分32秒、使用結果ではよい結果が出でていないが、生徒の感想から、楽しかったけれど時間がかかる。●1回にたくさんやらせて欲しい。●おもしろいけどつかれる。●もっとやりたい。●コンピューターでも頭を使うけどおもしろい。などがあるが、この形式の学習に対して意欲ははっきりとプラスの方向に向いている。今後の課題（省略）

#### 4、運営に当っての問題点

昭和57年度全員加入で発足したわけであるが現在の会員は和光市の全教職員の約94%であり今後会員が100%になるように努力しなければならない。運営の問題をあげれば、

(1) 研究時間の確保である。これは一応市内各校では申合せにより毎週金曜日は、午前中授業で午後市教研等の研究活動に当てるよう配慮されているが、研究活動の諸会合には、研究部によっては、集まりが悪いことがある。

(2) 一員が二つ以上の研究部に所属して研究活動ができるよう保障しているが、実際上は、一つの研究部の研究活動に参加するのが精一杯である。

(3) 各研究部の研究活動が、部によってかなり落差があるように思われる。

(4) 市教研の全体活動行事の参加は、だいたい良好であるが、各研究部の参加が、かぎられた人に片寄りがちである。

#### 5、昭和59年度の研究活動

##### (1) 全体研究活動

###### ○総会

・期日昭和59年5月11日(金)午後2:00～3:00

・場所和光市立第三小学校体育館

・内容

①開会のことば ⑤議事、事業報告、決

②会長あいさつ 算報告、会計監査報

③来賓あいさつ 告、役員選出、新旧

④議長団選出 役員あいさつ、事業

・和光三小校長長谷 案審議、予算案審議

川智彦先生会長に⑥議長団解任

三選される。 ⑦閉会のことば

###### ○一斉研究部会

・期日昭和59年5月11日(金)午後3:00～4:00

・場所和光市立第三小学校体育館及び関係室

・全体会及び研究部会

###### ○研究部長会議

・期日昭和59年5月18日(金)午後3:00～

・場所和光市立第三小学校会議室

###### ○第一回運営委員会、評議員会

・期日昭和59年6月8日(金)

- ・場所和光市立第三小学校会議室
  - ・議事内容 各研究部計画の発表、体育実技研修大会について、講演会について
  - 体育実技研修大会（バレー・ボール大会）
    - ・期日昭和59年9月4日(火)午後1：30～
    - ・場所和光二中、和光三小、広沢小体育館
    - ・優勝 和光市立大和中チーム
  - 教育講演会
    - ・期日昭和59年11月9日(金)午後2：00～
    - ・場所和光市立第三小学校体育館
    - ・演題「今、子どもの心とからだは」
    - ・講師日本体育大学教授体育研究所長 正木健雄先生
  - 第二回運営委員会、評議員会
    - ・期日昭和59年12月14日(金)午後2：00～
    - ・場所和光市立第三小学校会議室
    - ・議題研究紀要の作成について、規約検討委員会より、一斉研究部会について、研究発表会について
  - 教育研究発表会
    - ・期日昭和60年2月8日（金）
  - 一斉研究部反省会
- ・期日昭和60年2月22日(金)午後3：00～
  - ・場所和光市立第三小学校体育館及び関係室
  - 第三回運営委員会、評議員会
    - ・期日昭和60年3月5日(火)午後2：00～
    - ・場所和光市立第三小学校集会室
    - ・議題本年度の部会の事業計画実践の評価
  - 次年度の研究事業計画の展望
    - (2) 各研究部の研究活動は省略
  - 6、今後の課題
    - (1) 和光市教育研究会は全員加入を目的として再発足しましたのでこれからは名実共に全員加入で研究活動ができるようにしたい。
    - (2) 各研究部の研究活動を活発にするために毎年研究会全体が一つのテーマを考えて、それに向って研究活動を実践するようにしたい。
    - (3) 各学校の研究に協力するために、市教育研究会の委嘱校を設定したい。
    - (4) 研修や研究活動の時間を確保するためになんらかの方法を工夫したい。
    - (5) 市内の中学校区を一つのブロックと見なして、小中ブロックの共同研究組織を確立して研究するようにしたい。

## 大宮市教育研究会

### 1、会のあゆみ

本会は昭和25年7月13日に桜木中学校に於いて創立総会を開き、当時の市内教職員全員を集めて自主的な教育研究活動をすすめ本市教育の振興を図ることを提案した。初代会長中村忠治氏（大宮北小学校長）の下に13の研究部が組織され、研究部長には市内の学校長が之に当り、各学校の教科主任が母胎となって、全職員がいずれかの研究部に所属して研究活動を行うという全市的な活動を展開した。

本会を支える、この研究部の変遷をたどれば以下のようになり、当初の13研究部から現在までに22研究部へと発展を示している。

### 昭和25年度

1 社会科	8 音楽科
2 国語科	9 保健体育科
3 数学科	10 家庭科
4 理科	11 職業科
5 工科	12 視聴覚
6 外国語科	13 教育一般
7 普通科	以上13研究部。

### 昭和28年度

学校図書館が新設され、14研究部となる。

### 昭和29年度

教育心理が新設され、15研究部となる。

### 昭和33年度

道徳が新設され、16研究部となる。	昭和26年度
昭和34年度	「教育研究大会」の開催
職業科が、技術家庭科（女）・（男）と分化され、17研究部となる。	これは、市研究会と市教職員組合との協調の下に、市指導課との連携をとりながら行われる。（昭和41年度まで）
昭和35年度	昭和30年度
学校事務が新設され、18研究部となる。	「教職員家族慰安会」開催
昭和37年度	市研究会、市教委、市保導協会、市教組との四者共同による開催。
教育一般の代わりに特別活動が新設される。	昭和38年度
昭和39年度	埼玉県連合教育研究会へ参加を決める。
特殊教育が新設され、19研究部となる。	昭和42年度
昭和42年度	市教組との共催による「教育研究大会」から手を引き、「大宮市教育研究会研究紀要」を創刊する。
学校行事、学校給食の2研究部が新設され21研究部となる。	昭和45年度～
昭和44年度	研究発表の要項を製本し、各校・機関へ配布する。
数学科は算数・数学に、図工科は図工・美術に、習字科は書道・書写に改名され、新たに学校保健が設けられ、22研究部となり現在におよぶ。	昭和54年度
尚、このような研究部を統括してきた歴代会長を下記に列挙する。	創立30周年記念研究大会開催。
昭和25～28年度 中村忠治氏（北小）	記念誌を発行する。
昭和29・32・35年度 中島春義氏（大宮小）	
昭和30～31年度 小島保佐氏（北中・市立高）	
昭和33年度 榎本 雄氏（片柳中）	<b>3、特色ある活動</b>
昭和34年度 有山宗六氏（北高）	毎年行われる「総会」には、先生方全員が集まり、永年勤続者が表彰され、記念講演が催される。（資料参照）第1回（昭和29年）の講演は、東京安部学院高等学校長安部彦治氏を招いて大好評を博し、第2回（昭和30年）は、前文部大臣天野貞祐氏、第6回（昭和34年）は、評論家臼井吉見氏、第8回（昭和36年）は、文学博士金田一京助氏という、一流の講師を招き、それは経済・社会・自然科学・人文学等多方面にわたる講演となっている。
昭和36年度 水村 實氏（馬宮中）	
昭和37年度 岡 梯一氏（大宮高）	
昭和38年度 宇田 平氏（大成小）	
昭和39年度 黒須元治氏（植竹中）	
昭和40年度 黒崎勝雄氏（大宮高）	
昭和41・44年度 尾崎馨太郎氏（桜木小）	
昭和42年度 高山敏一氏（北中）	また、昭和41年度まで毎年行われた「教育研究大会」は、普段研究を積んでいる各研究部所属の会員が研究発表する機会であり、準備の段階で、研究会の役員と教組の役員が数回にわたり、指導課指導主事を交え、テーマ等について研究討議を重ねて決定されたため、教育進展に大きな効果をあげてきた。
昭和43年度 野崎正雄氏（大宮高）	
昭和45～48年度 松崎益司氏（南中）	
昭和49～50年度 菊地正一氏（大砂土東小）	
昭和51～52年度 石井喜八郎氏（日進中）	
昭和53年度 若田せつ氏（北小）	
昭和54～58年度 原田三郎氏（日進中・東中）	
昭和59年度 小豆沢幹夫氏（大宮小）	

## 2、主たる活動と事業

しかし、昭和42年からは、種々協議の結果、市教組との開催を中止し、かわって「研究紀要」を先生方全員に配布することを決定した。これは自分の問題点への追求と、教育実践活動の伸長を図ろうとしたものであり、先生方に参考資料として活用されるのである。

#### 4、運営にあたっての問題点

年々増える会員数と社会状勢の変化によって運営上改善を要する点も生じてきた。会の予算は、当初市助成金のみでまかなわれてきた。だが会の性格上、昭和30年度より会費制を採用しこれが予算の大半を占めるようになった。会費50円から出発して、100円、200円、300円、400円、600円と社会経済の状況に合わせ値上げを強いられてきたが、これに比して、市助成金の増額の度合は少ないようである。現在の会費1,400円である。

また、急激な人口増による学校数の膨張及び先生方の数の急増によって、教育指導上の問題が複雑化し、先生方個人の活動が多方面にわたってきた。このため、密接な連絡のもと組織的に意図的に活動しにくくなってきた。こうした点から、本会活動の原点になる場所を設定すべきであり、研究活動に専従できるような環境を作らなければならないだろう。

#### 5、昭和59年度の研究活動

##### I 各研究部で隨時行われる活動

研究部委員会、幹事会、専門委員会

研修会、研究発表会、基礎研修会

授業研究会講演会

実技研修会、講習会

研究集録、会報の発行

研修視察

##### II 月別の主な活動

4月会計監査

5月定期総会（市保導協会と共に）並びに記念講演会

6月児童・生徒管弦楽教室

硬筆競書会

7月植物採集会

8月社会科臨地研修会、理科等臨地研修会

9月地区文集編集

読書感想文コンクール、同編集

10月科学展

創意工夫展

英語弁論大会

11月学徒美術展

社会科展

弁論大会

小中高合同音楽会

大宮市教育研究大会

1月書きぞめ展

児童・生徒研究発表会

作文コンクール

3月教育研究大会発表要項の発行

III ベンシルバニア州との国際交流

半月ずつ交互に、小中高の教師を受け入れ、またこちらからも派遣して、毎年研修を行うものである。

#### 6、今後の課題

創立以来30余年、地域とともに発展し、巨大化してきた本会は、解決をせまられている問題が山積されている。その主なものをひろってみると、

学校運営の中で日ごろ校内研修と本市の研究会の研究活動との調和を図るために、本会はどうあるべきか。

各研究部等の活動を更に有効なものにするために、連絡調整の機関、機能はどうあるべきか。

事務量等の増大化にともない、事務局はどうしたらよいのか。

などである。

年1回の研究発表大会（会員2,400有余）の会場確保が困難である。現在大宮小・東中の二会場に教科別に各分科会を開催し研究発表を行っている。

## 7、その他

4年前より米国ペンシルバニア州との小中高校教員と市内教職員との交流を深めている。

毎年40名～50名の参加者がおり、今年は米国へ、来年は米国からと相互に往来し親睦を深めている。これは国際教育交流の一環として、また国際化時代を迎えて行われている。

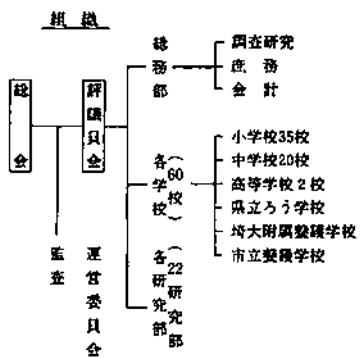
本年は40名参加のもとにペンシルバニア州の教職員宅に1週間のホームステイをし、交流を図った。これは文字通り、ことばを越え、世代を越えての交流を深め、一段と深い心の触れ合いの中に7月24日から8月4日まで行われた。

(資料その1) 記念講演

年度	演題	講師
昭29	「講演と奇術」	東京安部学院高等学校長 安部彦治
昭30	「ものの考え方」	前文部大臣 天野貞祐
昭31		学習院長 安部能成
昭32		東京都教育委員長 木下一雄
昭33	「南極探検 越冬の話」	南極越冬隊員朝日新聞特派員 佐久間敏夫
昭34	「文学と教育」	評論家 白井吉見
昭35	「内外石油事情について」	日本石油調査課次長 奥村武二
昭36	「アイヌ文化について」	文学博士 金田一京助
昭37	「日本経済の現状と将来の見通し」	評論家 小汀利得
昭38	「原子力について」	埼大校長 藤岡由夫
昭39	「経済における教育の価値」	評論家 益田金六
昭40	「詩人の生き方」	詩人 宮沢章二
昭41	「国際問題の見方・考え方」	東大教授 寺沢 一
昭42	「学校教育の当面する問題」	評論家 堀秀彦
昭43	"	"

年度	演題	講師
昭44	「学生運動と教育問題」	NHK解説課員 岡村和夫
昭45	「情報化社会と教育」	埼玉県校外教育会長 竹井博友
昭46	「月の石」	埼大教授 関陽太郎
昭47	「日本経済の現状と将来」	日本経済教育センター 岩尾 一
昭48	「環境(公害)教育の捉え方・考え方」	日本経済教育センター 森龍太郎
昭49	「現代世界の中の危機と教育」	NHK解説課員 田島栄治
昭50	「秩父風土記」	郷土史家 清水武甲
昭51	「エベレスト登山活動について」	登山家 田部井淳子
昭52	「教育課題の改善について」	慶應大学塾長 石川忠雄
昭53	「円高問題と日本経済」	日本経済教育センター 副会長 岩尾 一
昭54	「私の文学」	児童文学作家 打木村治
昭55	「歴史と人間」	井出孫六
昭56	「人間を描く」	NHKディレクター 和田 効
昭57	「教育の原点に立つ指導と実践」	篠の井高校長 若林繁太
昭58	「子供の世界とまんが」	岡部冬彦
昭59	「日本人の生活の智慧・風俗習慣」	国学院大教授 橋口清之

(資料その2)



# 鴻巣市教育研究会

## 1、会のあゆみ

本地区は長い間、鴻巣市、北本市及び吹上町の二市一町の小・中学校の教職員を会員とする鴻巣地区教育研究会で研究活動が続けられてきた。しかし、昭和54年頃から、二市一町では学校数も多くなってきており、地域もかなり広範で活動にも何かと不便なので、それぞれの市町で独立した教育研究会を作りたいという声が強くなってきた。それから2年間ほどの準備期間において鴻巣地区教育研究会は発展的に解消し、昭和56年度にそれぞれの市町で教育研究会が発足したのである。

鴻巣市教育研究会は昭和56年6月に設立総会を開いて発足したが、当時の学校数は小学校9校、中学校3校の計12校、会員の数は360名であった。当初、研究部によっては従来のように合同して事業を行った部もあったが、現在はそれぞれ独立して事業を進めている。

3年を経過した現在、新設校が2校あり、小学校10校、中学校4校となっているが、会員数は児童数の減少もあって380名と発足当時より20名の増加にとどまっている。中学校だけで実施する事業では学校数が少なすぎる感はあるが、それ以外では地域的によくまとまって円滑に運営されている。

研究会は正副会長、各校の校長理事、各研究部の部長が兼ねる部長理事と幹事によって運営されるが、その活動の中心となっているのは各研究部の活動である。研究部は各教科、領域をはじめとして、学校保健、学校図書館、特殊教育、視聴覚教育、学校給食、会計、安全教育、同和教育の20部から成り立っており、会員はいずれかの部に所属している。各研究部とも年度当初の主任会において年間の事業計画を作成して、総会の承認を得て活発に活動し、会員相互

の研修を深めるとともに、本市教育の進展のために寄与している。

また、本会の経費は会員の会費及び補助金、その他をもってあてることになっている。発足時には会費は年額1,200円であったが、今年度から1,500円と改めたので会費分が57万円となった。市からは1校当たり3万円の補助金がでて42万円、さらに展覧会等の助成金を20万支出していただいているので、総額約120万円である。

## 2、主なる活動と事業

会則第4条は事業について述べているが、それによると

- (1) 教育課程の研究および指導法の研究
- (2) 教科内容の研究および教育各般の調査
- (3) 講習会、研究発表会、展覧会の開催
- (4) 関係諸機関との連絡提携
- (5) その他本会の目的達成に必要な事業

となっている。このうちの主なものを記すと次のようである。

### ○授業研究会

授業を通して研究できる研究部ではその事業に授業研究会を入れている。これは授業が我々教育活動の中心であり、授業の充実は学校を魅力あるものとする大切な要素であることを考えれば当然のことである。

計画をみると各部とも市内の学校を順にまわるように配慮されており、小学校1校、中学校1校というところもあって、授業研究を通して小中の連携も図られている。

### ○展覧会等の開催

市内の小中学生の作品の展示、発表等を含めて次のような事業が毎年行われている。

- |            |      |
|------------|------|
| 小・中学生の文集編集 | (国語) |
| 硬筆展、書き初め展  | (書写) |

小・中学校科学展	(理科)
小・中学校音楽会	(音楽)
小・中学校児童生徒美術展	(図工・美術)
小・中学校体育大会	(体育)
発明創意工夫展	(技術・家庭)
英語弁論大会	(英語)
読書感想文コンクール	(学校図書館)

### 3 地区交歓会、生徒発表会(特殊教育)

#### ○講習会、研修会の開催

教職員を対象とした研修会、講習会としては次のようなものを行っている。なお、実施にあたっては多くの会員が参加できるよう、できるだけ長期の休業日に行うようにしている。

書き初め実技研修会	(書写)
実験講習会	(理科)
天体観測研修会	(〃)
実技研修会	(音楽)
実技研修会	(図工・美術)
水泳実技講習会	(体育)
実技講習会	(技術・家庭)
O H P 実技研修会	(視聴覚教育)

#### ○管外視察

広く管外の先進校を参観して自校や地域の教育実践にそれを生かしてもらう目的で行っている。しかし、これを各部がまちまちに計画し実施されては学校運営上の支障が大きい。そこで市教委、校長会等の了解を得て、20の研究部を3班に分け、交替で毎年1班ずつ県内または隣接県の学校を視察するようにしている。

#### ○講演会

会員研修の一環として総会終了後に毎年講演会を開いている。当初この予算はわずかであったが、研修としての重要性を考えて会費値上げを機に講演会費も増額して講師選択の幅を広げるようにした。59年度は浦和在住の漫画家岡部冬彦氏をお招きして、「漫画家からの現場報告」という演題で大変興味深い示唆に富むお話を伺うことができた。

#### ○研究委嘱校

鴻巣市教員委員会では毎年市内の小中学校か

ら2校を2年間の研究期間で研究委嘱をしているが、本会でもこの委嘱を受けた学校に委嘱をすることにしている。

委嘱校には会から初年に15,000円、2年次に35,000円の学習指導研究費を出している。金額はわずかであるが自由に使える金であるので、学校からは喜ばれている。

なお、委嘱校の研究には研究部も協力して合同の研究会を開くこともあるし、発表会では、役割を分担して協力する。

### 3、特色のある活動

本会では研究大会や研究集録の作成等は行っていない。研究団体としては研究紀要など是非作っておきたいと思うが今後の課題である。

本市の小・中学校では、研究委嘱を受けなくとも、それぞれの学校が自主的に課題研究を行って、研究集録も作成し交換している。また、市教育委員会には指導委員、研究委員の制度があり、これらの方々の協力で毎年1回は他校を交えての授業研究会を実施している。このような状況の中で研究大会や研究集録を作成することは、少し無理があるようと思われる。

特色ある授業というほどではないが、本会では永年勤続者の表彰を行っている。

細則によると次の事項に該当する会員が退会する場合には表彰状と記念品を贈呈することになっている。

①本市に20年以上勤務し、退会する場合

②20年以上の教職経験を有し、且本市を最後に勇退する場合

なお、顕彰の方々には、表彰のあと長い教職生活を回顧しての感想や現職の会員への期待をお話いただくようにしている。

### 4、運営に当っての問題点

現在特に大きな問題点はないが、今後検討しなければならないのは研究部の活動を活発にするような予算編成についてである。

本会では20の研究部に一律17,000円の研究部

費を出している。そのほかに展览会や発表会などを実施する部には特別にその費用を支出しているので、十分とはいえないが活動できるようになっている。

しかし、研究部が広く会員を対象とした研修会や講習会を開こうとすれば、割当られた部費だけでは不足してくる。なるべく講師には市内の先生をお願いして協力していただいているが、これだけでは解決できない。

研究部費のほかに講師謝金等を別わくで用意し、事務局で調整しながら支出できるようにしたいと考えている。

#### 5、昭和59年度の研究活動

昭和59年度の総会は5月30日に行われ、本年度のスタートでしたが、事業内容は例年と比べて大きな変りはない。

本年は、現行の教育課程が全面実施されて小学校では5年目、中学校では4年目に当たる。

私どもは今回の改訂の趣旨をもう一度想起して確認するとともに、実施上の問題点について十分な検討を加え、学習指導の改善、生徒指導の充実等に一層の努力をしなければならない年と考えている。

#### 6、今後の課題

本会は会員各位のご協力と役員の方々の献身的なお骨折によって、順調な歩みを続けている。各研究部は地味ではあるが着実な活動を行い、本市の教育振興に寄与していると信じている。

しかし、本会も発足以来4年目、事業等が定着してきたことは喜ばしいが、反面マンネリ化の傾向も生まれてくる時期である。

一つ一つの事業について見直すとともに、活動の方法についても工夫し、その活性化を図っていかなければならないと考えている。

## 北本市教育研究会

#### 1、会のあゆみ

北本市は從来吹上町とともに鴻巣地区教育研究会に属し、三地区の先生方とともに教育研究会の実績をあげてきた。しかしながら昭和40年から50年代にかけ、高崎線、国道17号線を利用し通勤が便利なため、急速に人口増加を見るに至った。本地区は市制が昭和46年施行され、現在人口5万7千を数えるようになった。したがって急激な人口増にともなって児童生徒数も増加し、昭和42年を皮切りに51年までの10年間で小学校5校、中学校1校の新設校ができた。現在小学校7校、中学校4校となり、教職員数も370名余りとなった。そこで本市の教職員の間から分離独立の声が出て、昭和55年、吹上町とともに分離の準備の話し合いがもたれ、翌年昭和56年4月より北本市教育研究会として発足した。

会長 伊藤 明（昭和56年）

田島栄作（昭和57年～現在）

研究部 各教科研究部（10）道徳、特活、保健、図書、給食、事務、同和、生徒指導、特殊、視聴覚

#### 2、主な活動と事業

- ・総会と講演会
- ・授業研究会 各部2～3回
- ・文集「野ざく」発行
- ・書初め展
- ・現地研修会（社会、理科）
- ・天体研修（市立プラネタリューム）
- ・地区科学展
- ・実技研修会（図工美術、技術家庭、体育）
- ・美術展
- ・球技大会（小学校）

- ・陸上競技会（小学校）
- ・発明創意工夫展（北足立北部班）
- ・英語弁論大会（鴻巣地区）

### 3、特色ある活動

発足以来日も浅いが、若い教師が比較的多く研究意欲が旺盛である。運営について、部員会を主体として多く実際活動をすすめている。主任会は最低限にとどめられている。市内の学校のみの研究会組織であり、学校間の距離も割合近い。したがって会合や研修会への参加も容易にできる。人口増とともに次第に都市化され開発されつつあるが、未だ自然が豊富に残されている。この地の利を得て理科教育研究は昔から活発に行われてきている。毎年行われる科学展の上位入賞を得ているのも伝統的なものがあるようと思われる。その他各部とも地味ではあるが、質の高い研修が行われている地域もある。次に会の発足以来の目に見える数例をしげすことにする。

- ・ソニー理科教育振興基金（優良校）M校  
(昭和56年)
- ・学研教育賞（国語） K校  
(昭和58年)
- ・文部大臣賞（給食指導） H校  
(昭和59年)

なお本市教委では、同和教育の全校委嘱研究をすすめている。毎年各校よりその実践報告が行われているのも特色といえるであろう。また行政として、教委も教育研究会への側面的支援ともいえる会場提供がなされ、市の施設、文化センター、勤労福祉センター、コミュニティーセンターなど容易に教育研究の場として快く貸してくれるのも有難い次第である。

市内小・中学校だけの組織であるので、学校間の距離が近い。また各校とも同じような地域環境にあるので、児童生徒のもつ問題点なども共通性をもっている。従って各校の教師のもつなやみも共通性がある。会員相互の研修意欲の強いこともこれに起因しているのではないかと

考えられる。

### 4、運営に当たっての問題点

各部の活動は前述のとおり、部員会を主とするが、中学校は4校であり、中学関係のみの教科、領域についての部員が少ないので盛り上がりが弱い傾向にある。こうした研究部については鴻巣、吹上地区と合同して活動をする方策を講じている。

年度当初の各部の行事計画で会合の回数なども一応4～5回程度としているが、部によってはその性格上どうしても会議の回数を制限しきれず、各部の差が生ずる。現場の仕事を大事に考えているが、どうしても研修（活動）と現場即ち授業時間の確保との矛盾がある。

一定の会費を徴集し、会員になるべく会の恩恵を均しくするのがたてまえではあるが、前述の部の性格上予算計上の均分化は不合理が生ずる。

以上のような問題解決策として、本会では、会合の時間は授業に支障のなるべく少ない時間午後3時以降を原則としている。実技研修、現地研修などは長期休業中に実施している。

### 5、昭和59年度の研究活動

今年度の本研究会の重点として、市教委の教育方針にあわせ、学校生活に適応し、やる気のある児童生徒の育成をめざしている。学習指導に於いては、学び方を学ぶ指導を求めている。生徒指導に於いては、基本的習慣形成をめざし同和教育については、本市では全校委嘱をうけ実践化をはかっている。また図書館教育、視聴覚教育の推進をはかり、文化センターの図書館充実とともに読書指導に力を入れている。視聴覚教育については、本研究会は今年度新設し、この研究推進の母体とした。

### 6、今後の問題

鴻巣地区教育研究会から分離独立して4年、地域に根ざした教育研究会のあり方を求めて今日までの歩みをつづけている。まだまだ難しい

問題が山積みしている。一つには各校の研修課題と研究会課題の一一致できにくい点である。この両者の課題の一致によって、現場での研修が生きてくるであろうと考えるからである。第二には、研究紀要の作成の問題である。規模が小

さい故に費用とのかかわりがある。手刷りでもよいので研究の足跡を残したいと考えている。本研究会は若い研究会である。今後会員相互の力の結集によって、地域に根ざした研究会としたい。

## 上尾市教育研究会

昭和33年7月15日上尾町が上尾市に昇格する以前の教育研究会は、上尾町・桶川町・伊奈村が一つの組織を結成し、主任会的な存在であり、連絡調整については効果的でありましたが自主的な研究活動はやや低調でした。

上尾市の誕生と共に上記三市町村別々の組織をつくることになり上尾市教育研究会が誕生いたしました。しかし活動は以前の主任会的な研究活動だったようです。

ついで昭和37年度上尾市校長会と上尾市教職員組合が市教育委員会との連絡のもと現在の上尾市教育研究会の発足をみたわけです。

つぎに発足当時その組織づくりに骨折られた先生が研究集録に寄せた当時の事情を書いた文を載せ発足時の模様を紹介すると共に、以後昭和37年度からのあゆみを記してまいります。

昭和33年、全国的に勧評反対のうごきが高まってきた。この中心は当時の日教組・埼教組でした。(この頃は校長を含めてほとんどの教職員が組合員でした)

この頃は教育行政も組合の組織も北足立地区の上尾・桶川・伊奈班という単位の活動となっていましたので、中学校の駅伝なども、上尾(五校)・桶川(三校)・伊奈(一校)の各中学校前を一周するという形で実施されていました。

教育研究会も上尾、桶川、伊奈が一つの組織で、活動は低調、年1回集まって終わるという状態でした。

昭和33年7月15日、上尾町が上尾市に昇

格いたしました。これを期に班单位では教育研究会も組合活動も進歩がないではないかということで、上尾・桶川・伊奈と別々の単位組織をつくりこの連合体(上桶支部)が誕生しました。

上尾市教組の勧評反対闘争は翌年までつづきました。

昭和36年には、文部省学力テスト反対闘争へと進みました。このことはそれまで仲のよかった行政側と、組合側との対立を生み、校長、教頭、一部教師の組合脱退となり、残務命令違反で懲戒処分も出される結果となりました。

埼教組の教育研究会も県教委の後援がなくなりました。各職場にも、教委・校長の指示に従っていこうというグループと、組合の方針を堅持していこうという、2つのグループができ、本来一つであるべき職場が政府の文教政策によって分断されました。

昭和37年、上尾市教組は上尾市校長会に対して申し入れを行いました。それは「行政側と組合とで対立をしているが、教育研究活動は現場の教職員が一体となって行われるべきものであるので、上尾市教育研究会組織を新く作りませんか。」というものでした。校長会側も積極的に関心を示され、市教委との連絡もうまくいき、両方で規約作成にあたり同年7月に結成総会となりました。

この教育研究会には、市議会・市教育委

員会からも予算及び運営面で多くの補助を受けることとなりました。毎年定期総会資料が配布されますが、この資料の終わりに当研究会の規約がのっています。

### I、会のあゆみ

#### 歴代会長

年度	会長名	勤務校
37	野本米吉	上尾小
38	野村文治	上尾小
39	小林良男	富士見小
40	"	"
41	"	"
42	山田幸	上尾中
43	"	"
44	"	"
45	小林弘	上尾小
46	"	"
47	"	"
48	"	"
49	黒須島一郎	鴨川小
50	福島正義	原市中小
51	甘利美義	上尾中小
52	福島正義	西中小
53	秋谷博	西中小
54	伊藤利男	上尾中小
55	小森春雄	原市南小
56	細井利治	西中小
57	三沢重雄	富士見小
58	橋本一夫	上尾中
59	三宅一郎	東小

#### 年度別予算の推移と経費の内容

年度	予算額(円)	経費内 容
37	281,336	○分担金(学校平
38	244,255	等割・学級割)
39	261,651	と市教育委員会
40	290,980	よりの研究助成
41	276,348	金を経費にあて
42	309,057	る。
43	339,000	
44	340,615	
45	424,238	
46	451,000	
47	460,000	
48	569,000	
49	692,000	
50	792,000	
51	985,000	
52	1,500,000	
53	1,080,000	
54	1,192,000	会費(500円)
55	1,225,000	を徴集すること
56	1,465,000	に決定。
57	1,537,000	会費と市の補助
58	1,566,000	金を経費にあて
59	1,689,000	る。

昭和51年度より予算をつぎのように分割して執行している。

- ・本会計 (会費と市補助金)
- ・レクリエーション費 (会費と1人500円の分担金)
- ・県外視察費 (会費と市補助金)
- ・夏季実技講習費 (会費と市補助金)

#### 2、主たる活動と事業

##### ○教科等研究部会

・昭和36年度までは下記の17研究部

- ①国語 ②習字 ③社会 ④理科
- ⑤算数・数学 ⑥保健 ⑦体育
- ⑧音楽 ⑨図工・美術 ⑩技術
- ⑪家庭 ⑫外国語 ⑬生活指導
- ⑭進路指導 ⑮図書館 ⑯視聴覚
- ⑰学校事務

・昭和37年度より、つぎの2研究部が加わり19研究部組織となる。

⑯特別教育活動 ⑰教育心理

・昭和52年度より、つぎの研究部が加わり20研究部となる。

##### ⑲障害児教育

・昭和58年度より、つぎの研究部が加わり21研究部となり現在にいたる。

##### ⑳栄養士

現在研究部への所属は、教科主任とは関係なく希望により1研究部を選んで参加する。

#### ○諸事業のあゆみ

本研究会発足以来、年度によって多少の違いはありますが、下記のような事業を実施して大きな実績をあげてまいりました。

##### ①各教科等研究部活動

・17研究部で発足し、現在21研究部で研究会・授業研究会・実技講習を中心に自主的に活動している。

##### ②講演会

・以前は単独で行われたこと也有ったが、現在は、研究発表会時に実施する。

### ③研究大会→研究発表会

・昭和39年度より、研究発表会を実施し、希望と年次計画で、いくつかの研究部が発表する。

### ④県外視察者への補助

・初めは研究部毎に参加していたが、現在は各校の職員数に応じて人数を割り当てて、補助金を出している。(1人3,000円)

### ⑤夏季実技講習会

・各研究部が計画し、参加は部員でなくても参加できる。

### ⑥教職員レクリエーション大会

・昭和46年度より、ブロック別の体育レクリエーションと、文化レクリエーションの2回実施している。

### ⑦研究指定校発表補助

・現在は、市の指定校への補助金が増額されたので補助していない。

### ⑧市内音楽会・県市書初め展補助

・現在は、補助していない。

### ⑨科学展補助

### ⑩就職生徒激励会

・現在実施していない。

### ⑪研究集録の発行

・昭和39年度に第1号を発行、現在20号を発行した。

## 3、運営に当っての問題点

○小学校22校・中学校10校合わせて32校という大世帯なので、定期総会・研究発表会・文化レクリエーション大会等の全体集会を開催する際、期日・会場の決定が困難であるが、現在各校の協力と早期協議によって何とか実施している。

○夏季実技講習会を各研究部が有益な計画を立て実施しているが、参加者の少いものがあり、何とか啓蒙方法を考えねばと思っている。

## 4、昭和59年度の研究活動

本年度の市教研テーマ（昨年に引き続き）  
「教育実践をもととした市教研」

—わかる授業・楽しい学校を目指して—

5月9日（水） 福祉会館

定期総会時に総会終了後、つぎの2校の実践報

・原市中——クラス別修学旅行のとりくみ

・大石南小——テーマ日記の実践

6月中 各ブロック会場

9ブロック毎に体育レクリエーション大会を実施した。

・バレー・ソフトボール・卓球

・バドミントン

・スポーツ傷害保険に加入

夏季休業中

19研究部会が24回にわたる夏季実技講習会を開催した。

・延べ人員で約450名参加

11月9日（金） 福祉会館

文化レクリエーション大会の実施

・劇団 五月舎——

井上ひさし作「11びきのネコ」

1月18日（金） 福祉会館

研究発表会と講演会の開催

・3研究部の発表

・講演会内容は未定

2月下旬～3月上旬

告会を実施した。

研究集録 第21号の発行

年間を通して

授業実践・研究会を通しての21研究部会の活動

県外視察者へ1人3000円の補助金を交付

・本年度対象者は、小学校65名・中学校43名の計108名

# 桶川市教育研究会

## 1 桶川市のようにす

桶川市は東を元荒川、西を荒川の二つの川によって限られ、中央部を旧中山道が貫通している。元荒川右岸の篠津には足立四座の一つ、多気比売神社が、西の荒川左岸台地には泉福寺があり、国指定の重要文化財の阿弥陀如来像が安置され、更に南には熊野神社古墳があり、県下最古の円墳といわれ、出土した“まが玉”等も国の重要文化財に指定されている。

以来、首都近郊都市として発展を続け、昭和45年に市制を施行し、現在に至っている。

## 2 桶川市の学校

明治5年学制が発布された当時は小学校が3校であった。昭和22年の学制改革によって中学校が3校できる。昭和30年頃より人口増がはじまり、昭和32年に小学校1校、43年にもう1校増、47年に高校1校新設、54年に小学校1校増、55年に2つ目の高校新設、更に小学校1校増、56年に中学校1校増、58年に小学校1校増と発展し、現在では小学校8校、中学校4校、高校2校となっている。義務教育の小中学校で桶川市の教育研究会は組織されているが、本年（昭和59年4月現在）の県費教職員数397名、学級数274学級、児童・生徒数は10,492名となっている。

## 3 会のあゆみと研究会規約

桶川市の教育研究会のあゆみについては資料不足のため定かではないが、手もとにある資料によると、今より21年前の昭和38年に現在のような研究会のもとができたよううかがえる。その後何回かの改正が行われて現在のような規約となったようである。この改正をみると、時の流れ、教育の内容の流れ、その時の重要課題などがうかがえるような気

がする。

以下、本市における現在の規約を掲載する。

### 桶川市教育研究会規約

第1条 この会は桶川市教育研究会といい、事務所を会長所在の学校に置く。

第2条 この会は市内教育の振興を図り、文化の進展に寄与することを目的とする。

第3条 この会は前条の目的を達成するために下記の事業を行う。

1 学校教育、社会教育に関する研究協議会、各教科の研究会、各種競技会、講習会、学校参観、レクリエーション。

2 その他目的達成に必要な事業。

第4条 この会は市内公立学校に勤務する教職員をもって組織する。

第5条 この会に次の部を置く。

1 教科に関する研究部

(1)国語、(2)書写、(3)社会、(4)算数・数学、  
(5)理科、(6)保健体育、(7)音楽、(8)図工・  
美術、(9)技術、(10)家庭、(11)外国語。

2 特別教科に関する研究部。

(1)道德、(2)特別活動、(3)視聴覚、(4)学校  
図書館、(5)学校給食、(6)進路指導、(7)心  
身障害児教育、(8)保健、(9)生徒指導、(10)  
学校事務、(11)同和教育、(12)安全教育

第6条 この会に次の役職員を置く。

(1)会長1名、(2)副会長1～2名、(3)部長各1名、(4)副部長1～2名、(5)監事2名、  
(6)幹事1名

第7条 役職員の任務は次の通りとする。

1 会長はこの会を代表し、会務を総理し、各種会議を招集する。

2 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

- 3 部長は各部の中心となり、企画運営に当る。
- 4 副部長は部長を補佐し、部長事故あるときはその職務を代行する。
- 5 監事は会計を監査する。
- 6 幹事はこの会の事務を行う。

第8条 役員の選出はこれを会員の中から行い、その方法は次の通りとする。

- 1 正副部長は各部会において選出する。
- 2 会長、副会長、監事は正副部長会において選出し、総会の承認を経て決定する。
- 3 幹事は会長が委嘱する。

第9条 役員の任期は1か年とする。但し重任を妨げない。補欠役員の任期は前任者の残存期間とする。

第10条 会議は次の通りとする。

- 1 総会は年1回5月に開き会則の制定と変更、会務の報告、予決算、正副会長、監事の承認、その他必要事項を決定する。
- 2 正副部長会議は必要によって開き、正副会長、監事の選考、予決算、その他必要事項の審議連絡に当る。
- 3 正副主任会は必要によって会長または部長これを招集し、部活動の企画運営に当る。

第11条 会計は次の通りに行う。

- 1 本会の会費は会員（会費1人年額 1,000円）並びに補助金その他の収入をもってあてる。
- 2 会計年度は毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日に終る。

第12条 この規約は昭和38年5月22日より実施する。

（付則）この規約は昭和41年5月31日より実施する。（注 第5条特殊教育研究部新設）

この規約は昭和42年5月24日より実施する。（注 第5条保健研究部新設）

この規約は昭和44年5月30日より実施する。（注 第5条生徒指導研究部、学校事務研究部新設）

（注 第11条会員1人月額20円）

この規約は昭和45年6月17日より実施する。（注 第5条同和教育研究部、交通安全教育研究部新設）

この規約は昭和49年5月27日より実施する。（注 第5条2項心身障害児教育）

#### 4 主たる活動と事業

規約にもある通り、市内に勤務する教職員が、教科に関する研究部か、教科外に関する研究部に所属し研究活動を行っている。教科に関する研究部11部会、教科外の研究部は12部会である。各部とも部長を中心に年度当初の計画に基づいて、計画的な研究活動が展開されている。特に全員が一度に参加する行事等を見ると

- 5月中旬に市教育委員会と共に総会にひき続いての講演会の開催がある。
- 2月の上旬には、教育研究部と教科外研究部の各部が隔年に研究発表会を全員参加のもとに行っている。
- 3月下旬には、各部とも1年間の研究のまとめとして研究紀要の発行にあたる。昨年度は第7集を発行した。本年は第8集となる。

#### 5 特色ある活動

##### （1）研究大会について

年1回、2月中旬の午後をつかって、全会員が1校に集まり、各研究部毎に研究会を開く。研究会は主に発表形式により、小・中各1名位の発表者が決まる。指導者には県教委、県センター、事務所又は市の指導主事の先生方をお願いしている。この日は来賓として、市より補助金等を頂いている関係上、市長さん、市議会の代表の方、文教委員さん、教育委員さんにも参観してもらい、教育に対してより理解していただく機会にもなっている。本当に意義ある日となっている。

(2) 研究集録について

本年は第8号になる。各研究部による一年間の研究のまとめの紀要である。紀要のはじめには、市内12の小・中学校の校章、学校の写真、住所、電話番号等を載せた学校紹介のページからはじまり、各部の一年間の様子がよくわかる。

編集にあたっての表紙には、児童・生徒の図工美術の作品から、学校順に選んだものをのせてある。出来上った後は全会員に配られ、次年度の研究の指針として活用している。研究は積み上げこそ大切なことである。



(3) 普段の活動について

研究協議会や授業研究会等が主である。授業研究については、小中合同で行われている関係上、小・中各1校ずつ行われている。その他書写部では、硬筆、毛筆実技講習会、社会科部では、小学校3年の担任を中心とした郷土現地学習会、学校図書館部では読書感想文集作り、保健部では保健統計のまとめの冊子、生徒指導部では、夏祭り、盆おどりの補導等が行われている。



(4) その他の事業

前記の他、毎年行われる事業として、県主催の行事とタイアップして、書写部の硬筆展、書初展、理科部の科学展、保健部の水泳大会、音楽部の音楽発表会、図工美術部の市内美術展、外國語部の弁論大会などが上げられる。これ等の行事に対しては

少額ではあるが特別に補助金も出している。

6 運営に当たっての問題点

(1) 研究日、研修日で部によって重なることがある。学校によって多少の差はあるが、月曜日は職員会、木曜日は校内研修日とする会合が他の曜日に集中することになる。各部会には会合の度ごとに事務局にて発番を出すことにはなっているので、ここで3つ以上の会議が同時に催されないよう調整をしている。

(2) 研修時間が少ないこと

部員の大部分はクラス担任である。従って授業確保の面から授業研究会は別として一般的の研修会は午後の3時からという内規がある。一時間位の研修時間では深化に困難な面があるが、そこは研修方法などの工夫によって補うよう努力をしている。

(3) 研究費用などに關係してのこと

研究費が少ないのでこれの捻出方法等に関するところ。

(4) 出張を伴う研修と旅費との關係のこと

県外優良校視察などの計画の場合に旅費を伴う。旅費については各学校の実態により異なる。この辺の調整に苦慮している。



## 7 昭和59年度の研究活動

### 昭和59年度 桶川市教育研究会 事業計画

<p><b>◎事務局</b></p> <p>5/15 総会、講演会 2上 研究協議会(教科外) 3下 研究紀要発行 4中 研究部会 " 正副部長会</p> <p><b>◎国語部</b></p> <p>=生き生きとした国語科 =授業をめざして= 2学期 授業研究会 南小 3 " " 中学校 8月 文学散歩</p> <p><b>◎書写部</b></p> <p>=文字を正しく、 美しく速く書くようにする= 5月 硬筆実技講習会 6月 硬筆展 11月 毛筆実技講習会 1月 書初展</p> <p><b>◎社会科部</b></p> <p>=資料の収集と効果的活用= 1学期 農・工・商の ビデオ作り 2 " 授業研究小1,中1 随时 地図資料学習室 活用について 8月 現地学習会</p> <p><b>◎算数・数学部</b></p> <p>=わかる喜びを味わわせる 授業展開の工夫= 6月 授業研究会(西中), 研究発表(桶川中) 10,11月 " (西小), " (東小) 2月 " (川小), " (北小)</p> <p><b>◎理科部</b></p> <p>=児童生徒の自然認識を 深めるための指導のあり方= 6月 研修会 天体望遠鏡の使い方 8月 " 地学 10月 科学展 11月 授業研究会(西中) 2月 " (川小)</p> <p><b>◎保健、体育部</b></p> <p>=その運動の持つ楽しさを十分に味わわせる授業の計画と実践= 授業研究会 水泳大会 実技伝達講習会</p>	<p><b>◎音楽部</b></p> <p>=楽しい表現活動の中に美しさ を導きだす指導の工夫= 12月 授業研究会(加小) 2月 " (東中) 6月 実技講習会(北小) " (桶中) 11,12月 青年発表会(日小)</p> <p><b>◎図工、美術部</b></p> <p>=作る喜びを持たせる 工芸の指導= 7月 実技講習会(やき物) 11月 授業研究会(中学) 1月 市、県美術展 9月 身障者のための美術展 10月 郷土を描く会展</p> <p><b>◎技術科部</b></p> <p>=選択教科としての 技術の指導計画= 1学期 研究会 指導計画の検討 2 " 先進校視察 3 " 研修会 反省</p> <p><b>◎家庭科部</b></p> <p>=視聴覚機器をとり入れた 効果的な授業= 6月 夏休み 教材づくりの研究 2学期 研究授業</p> <p><b>◎外国語部</b></p> <p>=表現力を高めるための 指導と評価の研究= 10月 弁論大会 6月 授業研究会 9月 主任会 2月 研究協議会</p> <p><b>◎道徳部</b></p> <p>=指導過程の研究= 2学期 授業研究会(西小、加納中) 指導案検討会 模範授業 県道研大会参加</p> <p><b>◎特活部</b></p> <p>=指導法の研究 (学級会 学級指導)= 7/5 研究協議会 年間指導計画について 11月 授業研究会(西中) 2/7 研究協議会(北小)</p> <p><b>◎視聴覚部</b></p> <p>=器機の効果的な利用法= 5下 研修会 11月 授業研究会(北小) 1月 研修会(桶中)</p>	<p><b>◎学校図書館部</b></p> <p>=図書館運営のあり方= 6月 学校訪問 10月 読書感想文募集と審査会 11月 図書部会(西中) 2月 教研発表</p> <p><b>◎学校給食部</b></p> <p>=給食活動のムードづくり= 6月 研究協議会 1学期 他校の見学 2 " 研究のまとめ 3 " 発表校の発表 研究のまとめ</p> <p><b>◎進路指導部</b></p> <p>=進路指導を核とする 学級指導について= 学年日程計画と作成と会議 11上 授業研究会 10/23 私立高校説明会 10中 &gt; 授業研究会 6月</p> <p><b>◎心障児教育部</b></p> <p>=障害児に応じた指導法= 授業研究協議会(東小、北小) 優良校視察</p> <p><b>◎保健部</b></p> <p>=効果的な保健指導のあり方= 給食室衛生検査 保健統計のまとめ 施設見学 初潮調査</p> <p><b>◎生徒指導部</b></p> <p>=学級経営を中心とした 生徒指導= ・情報交換・夏祭り盆踊り補導 ・講演会・先進校視察</p> <p><b>◎学校事務部</b></p> <p>=当面する諸問題について= 6,10,12月 研修会</p> <p><b>◎同和教育部</b></p> <p>=学級経営における 同和教育のあり方= 6,11,12月 研修会</p> <p><b>◎安全部</b></p> <p>=学校における安全教育の すすめ方= 6上 研究課題の分析と資料の検討 11中 研修会「課題解決のための」 1中 研究課題のまとめ</p>
---	--	--

## 8 今後の課題

今後の課題については、前記の運営に当たつての問題点でふれておいたが、問題点の解決と、更には会の目的達成のための諸計画、諸活動を更に研究し、実行することが必要と思われる。但し授業時間数の確保と研修時間の問題となると一方をとれば他が減することになり、又予算面でもただ研究費が多ければよいという事だけ

ではすまされない。教育問題が多様化している現在、教育の組織と活動はより多面的な、又は統合的に構築される必要があるかもしれない。人間性豊かな児童・生徒の育成のために、地域の学校が一体となって、協力し合い、お互いに資質の向上と努力を続けていきたいものである。更に工夫と改善を加え、尚一層の充実を期していきたい。

# 伊奈町教育研究会

## 1 はじめに

伊奈町は、上尾市と蓮田市の間に位置し、伊奈氏館跡をはじめ障子堀遺跡等史跡が多くしかも果樹栽培の盛んな純農村地域であった。

昭和45年11月町制が施行され、伊奈村から伊奈町となり、現在は、東北・上越新幹線の通過に伴ない、新交通システム「ニューシャトル」の開通、全国でもはじめてと言われる選択制総合高校「県立伊奈学園総合高校」の開校及び埼玉県伊奈新都市建設事業等により人口も年々増加し、町も大きく変貌しつつある。

学校数も小学校2校、中学校1校から、ここ数年の間に小学校3校、中学校2校、高校1校となり、教育優先の町政と相まって学校教育も年々充実発展してきているところである。

## 2 研究会のあゆみ

伊奈町教育研究会は相当以前（少くとも昭和37年以前）から伊奈村教育研究会として活動していたもようである。

しかしながら、昭和46年度以前の資料が無く、研究会の設立年度をはじめ、昭和46年以前の活動状況は不明である。

### (1) 規約からみた変遷

#### ア 目的

○昭和46年度～昭和51年度

この会は、伊奈町内の小中学校職員の親睦をはかり伊奈町教育の進展のため教育研究活動を強力に推進する。

#### ○昭和52年度～現在

本会は、伊奈町小中学校職員相互の連絡、交流、親睦をはかると共に職能の向上につとめ、もって伊奈町教育の振興を期することを目的とする。

#### イ 事業

##### ○昭和46年度～昭和51年度

- 各種研修会、講習会
- レクリエーション
- その他目的達成に必要な事項

##### ○昭和52年度～現在

- 各教科領域の研修、研究会
- 講習会
- 親睦会
- その他目的達成に必要な事項

#### ウ 役員

##### ○昭和46年度～昭和51年度

- 会長 1名 ●部長 若干名
- 副会長 若干名 ●副部長 若干名
- 幹事 1名 ●顧問 若干名
- 監事 2名

部長副部長とは、研究部長副部長研修部長副部長をさし、いわゆる教科領域等の研究部の代表をさすものではない

○昭和52年度～現在

- 会長 1名 ●理事 若干名
- 副会長 4名 ●監事 2名
- 常任理事 ●若干名 幹事 2名

※常任理事は小中各教科領域主任の互選により各教科領域の部長があたる  
※理事は小中各教科領域の主任をもつてあてる。(主任は各校の教科等の主任)

エ 教科領域の研究部

○昭和46年度

国語 習字 社会 算数 数学 理科  
図工 美術 保育 技術 家庭 英語  
道徳 視聴覚 事務 教育心理 特活  
保健 音楽

○昭和47年度～昭和50年度

47年度より同和教育が新設される。

○昭和51年度～昭和52年度

昭和51年度から教育心理を特殊教育に変更する。また新たに給食を設置する。

○昭和53年度

特殊教育を特殊・教育相談に変更する。また、図書及び教務を新たに設置する。

○昭和54年度

昭和54年度に生徒指導及び進路指導を新に設置し現在にいたる。

昭和45年度、町制施行により規約の一部改正がおこなわれたが、昭和52年度に大幅な改正があり、従来の部長制から理事制となり現在に至る。

この大幅な規約改正は、規約を近代的な形に整備するほか、会員ひとりひとりにとって研究会がより身近なものとして理解され、研究会の目的達成のための諸活動がより積極的に展開されることを願ったものと思われる。

### 3 会員数・予算額の変遷

(1) 会員数

年 度	48	49	50	51
会員数	73	77	82	89
年 度	52	53	54	55
会員数	98	110	126	138
年 度	56	57	58	59
会員数	154	160	163	168

(2) 予算額(円)

年 度	48	49	50	51
予算額	226,457	220,001	217,486	237,519
年 度	52	53	54	55
予算額	292,649	380,938	420,780	472,379
年 度	56	57	58	59
予算額	471,552	464,975	563,465	572,274

### 4 主たる活動と事業

(1) 研究発表

教育研究員による研究発表(48)

会員研究発表 (49, 50)

(2) 講演会

昭和51年度以降、その時々の教育上の諸問題について、文部省教科調査官をはじめ、県立教育センターの先生方、作家、大学教授等を招聘し講演会を開く。

(3) レクリエーション大会の開催

毎年、秋に全会員が一堂に会し、スポーツ等をおこない親睦をはかる。

(4) 小中学校児童生徒理科展の開催(58)

支部展(上尾支部)の予選会を兼ね、町教育委員会の共催を得て、昭和58年度から開催する。

### 5 特色ある活動

(1) ビデオ作り

社会科副読本「いな」の視覚的教材として、副読本の記述に沿ってビデオを作る。

(2) 交流学習

- 特殊学級児童と他校普通学級との交流。
- 特殊学級児童と県立上尾養護学校児童との交流。

## 6 運営にあたっての問題点

### (1) 研究部会等開催時間の問題

小中学校の日課の違いにより開催時間の調整がむずかしい。

### (2) 役員（専任理事）の集中問題

専任理事は各研究部理事の互選によるので、ある学校に集中してしまう場合がある。学校数が少く、規模の大きさにも相当の差があるので学校運営への支障が心配される。

## 7 昭和59年度の研究活動

### (1) 講演会の開催（5月、1月）

### (2) 研究助成

○各校学校課題研究への研究助成金交付  
○教科等の研究指定と研究助成金交付

### (3) 各研究部活動の概要

国語	授業研究会
習字	硬筆、書初実技講習会
社会	副読本指導資料作り 県内めぐり、授業研究会
算数数学	授業研究会
理科	現地講習会「地学分野」理科展
音楽	音楽会についての検討
図工美術	児童・生徒美術展
保健体育	伝達講習会、授業研究会 小学校体育大会
技術	授業研究会
家庭	食物、保育領域教材研究
英語	授業研究会
道徳	年間指導計画の検討
視聴覚	視聴覚機器利用について
事務	諸公簿の整理について
特殊・教	交流学習、授業研究会
育相談	教育相談事例研究会
特活	児童会の運営と集会活動
保健	保健室の運営について
同和教育	各校の取り組みについて

給食	実態調査、優良校視察
図書	図書館の運営について
教務	公文書等諸様式の検討 年間行事の精選と年間研修事項の反省 教務研修関係にかかる情報交換
生徒指導	小中連絡会（小学校旧6年担任と中学校新1年担任との連絡会） 事例研究会 情報交換
進路指導	卒業生との懇談会 進路調査 高校説明会 情報交換 授業研究会

## 8 今後の課題

研究会は、各研究部を研究の核として、部長を中心に、熱心に研究が進められ、着々とその成果をあげているところであるが、ますます多様化の傾向が進んでいる社会に、主体的に適応できる児童生徒の育成という教職員の職務を考えたとき、教育研究会の果す役割は、極めて大きなものがある。したがって、教職員一人ひとりが意欲的に参加し、研究の成果が日々の教育活動に生かされるよう創意と工夫を凝らした運営が必要ではないかと考えられる。

また、折角の研究が、一研究部にとどまることなく、広く教職員全体に理解され、活用されるための伝達の機会や方法を、今後考えなければならないものと思う。

今後、小中学校の日課の違いによる時間的な問題もあるが、研究会の一層の充実をはかっていきたいものである。

# 川越市教育研究会

川越市は、現在約27万の人口を有し、県下で初めて市制がひかれ、文化財にもとみ、県西部の中心的役割を果しています。

本市の教育研究会の発足は、つまびらかでないが、昭和30年隣接9ヶ村を合併した翌年の昭和31年、当時の小学校15校、中学校13校の教職員が、川越市教育の振興と職能の向上をはかるため誕生したようです。その後、幾多の変遷をへて現在は、小学校32校、中学校20校、養護学校1校の教職員、約1,600名の会員をもって組織されています。

## 1 主な活動と事業

### (1) 昭和41年

#### ア 主な事業

- 教育に関する研究及び調査。
- 青少年文化活動の研究。
- 講演会、講習会、研究協議会、体育会等の開催。
- 研究観察。
- 各種教育団体との連絡提携。
- その他必要事項。

#### イ 研究部 次の21研究部が中心に活動。

国語、社会、習字、算数、数学、理科  
音楽、図工美術、技術、家庭、保健、  
体育、外国語、特別教育活動、視覚教育、  
聴覚教育、教科書、学校図書館、  
特殊教育、道徳、生活指導。

#### ウ 必要経費 会費1人月額30円を、年2回に納める。

### (2) 昭和43年

生活指導研究部を、児童・生徒指導部に改める。

### (3) 昭和45年

児童・生徒指導部を生徒指導部に改

め、交通安全部を新設。

### (4) 昭和46年

進路指導部を新設。会費1人月額40円に改める。

### (5) 昭和52年

同和部新設。会費1人月額50円に改める。

### (6) 昭和53年

教科書部を教科書採択事務部に改める。

### (7) 昭和55年

教科書採択事務部をなくす。会費1人年額1,000円に改める。

### (8) 昭和56年

交通安全部を安全教育部に改める。

### (9) 昭和59年

下記22研究部を中心活動している。  
国語、書写、社会、算数・数学、理科  
音楽、図工美術、技術、家庭、保健、  
体育、外国語、特別活動、視覚、聽覚  
学校図書館、特殊教育、道徳、生徒指導、  
安全教育、進路指導、同和教育

## 2 特色ある活動

### (1) 一斉主任研修会

毎学期初めに一斉に開催、学期中の事業の細部について協議。

### (2) 全体研修会

年1回、全会員が一堂に会し教育講演会等を開催。

### (3) テーマ別研究協議会

毎年9月、テーマ別に会員が分れ、提案内容について研究協議。

### (4) 学校研究等に研究委嘱（59年度11校）

## 3 運営に当っての問題点

- (1) 研究部毎の研修会は、月・木曜を除き、2時30分以降に開催しているが、他の教育機関等の研修会とダブり、不参加の学校がある。
- (2) 1研究部で研修会を開催すると、53名が集合する。自動車通勤の教職員が増加しているため、特定の学校が会場にあてられる。

#### 4 昭和59年度の研究活動

- (1) 役員
- |     |      |    |     |
|-----|------|----|-----|
| 会長  | 1名   |    |     |
| 副会長 | 3名   |    |     |
| 理事  | 101名 | 部長 | 22名 |
| 幹事  | 5名   |    |     |

(2) 主な活動

ア 本部

- ・一斉主任研修会（3回）
- ・理事、部長研修会（5回）
- ・本部役員研修会（5回）
- ・テーマ別研究協議会
- ・全体研修会

イ 国語

- ・入間地区国語学力調査（小・中）
- ・授業研究会
- ・国語科同和授業研究会
- ・文集「かりがね」発行
- ・演劇教室
- ・国語講演会

ウ 書写

- ・硬筆展
- ・全書研埼玉大会授業公開
- ・書初実技講習会
- ・書初展

エ 社会

- ・臨地研修会
- ・授業研究会
- ・社会科同和研修会

オ 算数・数学

- ・おけいこ道具講習会
- ・授業研究会

- ・講演会
- カ 理科
- ・授業研究会
- ・現地研修会
- ・科学展
- キ 音楽
- ・授業研究会
- ・オーケストラ鑑賞教室
- ・音楽実技研修会
- ・作曲コンクール
- ・市内小・中音楽会
- ク 図工美術
- ・実技研修会
- ・授業研究会
- ・研究協議会（3回）
- ・市内美術展
- ケ 保健
- ・主任研修会
- ・学校環境衛生器具取扱い講習会
- コ 体育
- ・授業研究会
- ・理事授業研究会
- サ 技術
- ・技術系列担当者研修会
- ・実技研修会
- ・創意工夫展
- ・授業研究及び題材開発研修会
- シ 家庭
- ・指導計画検討会
- ・実技研修会
- ・作品展
- ・家庭科協議会
- ・授業研究会
- ス 外國語
- ・授業研究会
- ・英語祭
- ・L L研修会
- ・学力調査分析
- ・研究紀要作成
- セ 道徳

- ・授業研究会
- ・主任同和研修会
- ソ 特活
  - ・授業研究会
  - ・主任同和研修会
  - ・児童・生徒連絡協議会
- タ 生徒指導
  - ・校外補導
  - ・施設見学研修会
  - ・研究集録発行
- チ 視覚
  - ・T P 自作講習会
  - ・16ミリ認定講習会
  - ・マイコン研修会
- ツ 聴覚
  - ・V T R 講習会
  - ・校内放送に関する調査
  - ・機器利用授業研究会
  - ・「波動」発行
- テ 特殊教育
  - ・講演会
  - ・主任研修会
  - ・合同作品展
  - ・施設見学
- ト 学校図書館
  - ・初任者研修会
  - ・図書館協議会
- ・課題図書研修会
- ・優良図書館見学
- ・読書感想文審査会
- ・読書感想文集「光」発行
- ナ 安全教育
  - ・通学路施設改善要望
  - ・防火管理者研修会
- ニ 進路指導
  - ・公・私立高校との会
- ヌ 同和
  - ・講演会
  - ・授業研究会
  - ・主任研修会

## 5 今後の課題

### (1) 教育関係団体等の研修会期日の調整

本会では、月・木曜日を除き、1日2研究部まで2時30分以降の会合を認めていますが、他の団体等が主催する研修会と重なり、1日に半数近い職員が出張することがある。生徒指導上にも問題があるので、今後調整方法について検討が必要である。

### (2) 全体研修会等について

会員が市民会館に集合して、教育講演会を開催することは有意義であるが、駐車場が狭く近くの小学校のグラウンドを駐車場にしている。雨天の日など問題があるので検討が必要である。

# 所沢市教育研究会

## 1 会のあゆみ

所沢市は、西武池袋線、新宿線が乗り入れ、東京のベットタウンとして、人口が急増（昭和30年5万5千人）現在26万人となっている。学校数46校（小…31中…15）で教育研究会に組織されている会員数は、1511名である。

本研究会の発足時の記録については、散逸してしまっておりよくわかりません。昭和44年の

定期総会で、研究会のあり方、運営等について意見の一一致をみるに至らず、休会となってしまった。その後、校長会と市教組との間で、再建にむけ努力がされてきた。その結果、昭和50年2月21日に旧理事が解任され、再建準備委員会が発足した。以後、次のように年次総会がもたれてきている。

昭50. 7. 2 会長 粕谷津男

51. 6. 4 会長 鈴木政一  
 52. 5. 20 会長 鈴木政一  
     記念講演「アメリカ社会と教育」若松頸治  
 53. 5. 18 会長 稲谷庄助  
     記念講演「私の出会った師」高橋玄洋  
 54. 5. 24 会長 多田 力  
     記念講演「エベレストまでの道」  
         田部井純子  
 55. 5. 23 会長 田村芳男  
     記念講演「所沢の地名」内野 弘  
 56. 5. 28 会長 小野寺良逸  
     記念映画「ブリキの勲章」  
 57. 5. 27 会長 小野寺良逸  
     記念映画「教育は死なず」  
 58. 5. 25 会長 小野寺良逸  
     記念映画「裸の天使」  
 59. 5. 25 会長 加藤 勝  
     記念映画「ふるさと」

## 2 特色ある活動

### ①授業研究を中心とした活動

「わかる授業」を展開することは、わたくしたちに課せられた責務です。基本的には、一人一人の教師の創意工夫や努力に負うことが多いわけですが、お互いの率直な批判、検討を通じて励まされる。こうした意義をふまえ、58年度には、45回も授業研究会が開催された。

### ②地区活動

研究活動への参加を容易にし、あわせて小中の連絡を密にするため、市内を6地区にわけて連絡協議会が設置されている。最近では、特に生徒指導を中心とした研修会が開催されている

### ③全部員を対象とした活動

各研究部に所属しながら、なかなか授業研究会にしても多くの会員が参加できません。そこで総会時の記念講演（映画）や、部員の要望に添った実技研修、現地研修が開催されている。

### ④研究紀要の発行

研究成果の発表と記録ということで、授業案調査結果を中心にした内容で、総会時に発行す

るようになった。

## 3 昭和59年度の研究活動

### ①各研究部

- 国語 授業研究…中学校1回 小学校3回  
     語りの会  
 社会 授業研究…各地区1回  
     現地研修会 資料交換会  
 算数・数学 授業研究 研究発表  
 理科 現地研修会 科学展  
     授業研究会2回 自然観察ガイドの作成  
 図工・美術 授業研究 美術展  
 音楽 授業研究 親善音楽会  
 保健体育 授業研究  
 技術・家庭 実技研修 教材教具の開発  
 外国語 L.L. 授業 弁論暗唱大会  
 特別活動 授業研究  
 学校図書館 本の修理講習 読書感想文作成  
     書館見学  
 生徒指導 講演会・施設見学  
 道徳 授業研究会・講演会  
 教育機器 授業研究2回 実技講習会  
 学校事務 講習会・テーマ別研修  
 同和教育 授業研究会講演会  
 教育相談・特殊教育 事例研究 施設見学  
     講演会  
 学校保健 講演会 保健統計の作成  
 安全教育 授業研究 講演会  
 進路指導 授業研究講演会 資料交換

### ②各地区

- 授業研究 生徒指導協議会

## 4 今後の課題

各研究部の活動が活発化してきた結果、出張も多くなり学校運営にしさわりも出てきている。（開催時刻は、授業に影響ないようにといふことで2:30となっている）だからといって一律に制限したのではなく、教師の自主的研修権の確保という点から問題が出てくる。本会が自主的に組織された研究団体だという自覚の上にたって事業の精選を考えいかなければならぬと考える。（文責 事務局長 佐々木）

# 飯能市教育研究会のあゆみ

## 1 本会のあゆみ

昭和22年7月 飯能地方教育研究会 発足  
(飯能・日高・名栗の公立小中学校で組織する)  
昭和29年5月 本会が分離し、飯能班教育研究会、西部班教育研究会(日高と飯能西部地区)の二つの組織となる。  
昭和32年5月 飯能班、西部班教育研究会が合併し、飯能地方教育研究会となる。  
昭和37年度 会則一部改正、組織が整う。  
昭和38年度 埼玉県連合教育研究会に加盟。  
昭和41年度 本会と別に飯能市教育研究会(飯能市内小中学校のみで組織)が発足  
昭和58年5月 本会が発展的にそれぞれ市町村毎に独立し、飯能市・日高町・名栗村各教育研究会に分離し、現在に至る。

## 2 主たる活動と事業

昭和22年度 総合および研究発表会、(以後現在まで継続実施しているので、次年度以降は省略する)  
昭和26年度 埼玉県カリキュラム実験地区的指定を受け、飯能班協議会発足(7月)  
ワークショップの実施 高麗小(7月)  
昭和28年度 県カリ実験校発表会(11月)  
(小学校5校 中学校2校)  
昭和44年度  
・研究会の歩み編集 以降45年度49年度と編集する。  
・研究紀要第1集刊行 内容は個人研究を中心としたものであったが、現在も継続して刊行している。  
昭和45年度  
・会報第1号発刊 現在も引き続き年1回刊行  
・学年集会の開催 小・中学校別に実施

以後継続の事業としている。

## 3 特色ある活動

### (1) 研究委嘱学校の研究発表

市内小学校14校、中学校6校が4年に1度研究発表を行うことを申し合わせ、市教育委員会と本会で委嘱し、研究発表会を開催している。昨年度は小学校で「子どもが主体的に問題を見つけ、解決をめざす理科教育」「主題を明確にとらえ豊かに表現するための絵画指導」「自ら意欲的に取り組む体育学習の展開—課題・カード利用・グループ活動をとおして—」の3校、中学校で「物事に積極的に取り組む態度を養うために一学級会活動、生徒会活動を通して」という研究テーマで研究発表会を行い会員の研修を深めた。

### (2) 管外研修視察

飯能市教育研究会(昭和41年度 飯能地方教育研究会と別個の研究団体)では発足以来研修視察を11月頃日帰りでバス旅行を実施している。同一目的地を3年間訪れ、毎年会員の1/3ずつ参加し、3年間で全会員が参加できるよう実施してきた。主な目的地は「平林寺、安行」、「高倉寺、国分寺跡、神代植物園」、「喜多院、埼玉古墳、利根大堤」、「東山記念館、丸木美術館、吉見百穴」、「塙記念館、金ニ神社、下久保ダム」、「柄本関所跡、三峰神社、横瀬村歴史民族資料館」で会員の研修と親睦につとめている。

※ 従来の市研究会の事業であったが、組織が一体化した58年度以降も継続実施している。

### (3) 研究紀要の発行

昭和44年度より毎年度末に刊行し、会員

全員に配布し、本年度第15集の刊行をすすめている。

58年度の内容はつぎのとおりである。研究委嘱校の研究発表概要（4校）

各校における研究発表推進状況（発表校以外の16校）

心臓検診の充実をはかるための取り組みについて（養護教員部会）

姉妹都市ブレア市訪問報告（中学年12名訪米団長一校長一）

海外教育事情視察報告（ハンガリー、フランスを中心として一参加教諭一）

#### （4）会報の発行

昭和45年度より毎年1回年末に発行し全員に配布。研究会の事業報告や会員の声などを掲載。本年も第15号発行に向けてすすめている。

#### （5）学年担任者研修会

同一学年の担任が互いに問題点を持ちより話し合い、その解決への方針をさぐり、明日からの学級経営の向上に資するというねらいをとて、昭和45年度より引き続き実施されている。

毎年小学校は2個学年、中学校は1学年ずつ実施。会場は持回りとし、研究授業、研究協議等指導者の指導を受け、実のある研修が行なわれている。また開催期日は1学期中に実施することを原則としている。

#### 4 運営に当たっての問題点

本研究会は会員数430全名で小学校14校中学校6校の規模であり、平地部と山間部をかかえ、相当広い地域である。そのため平地部の学校から山間部の学校までの距離は20数キロ（最遠）もあり、交通の便が悪く相当時間がかかるてしまう。

また学校規模の格差も大きく、学校別の教員数は次のようにある。

##### 小学校

6人～10人 6校  
13人・18人 2校

##### 中学校

12人 3校  
29人 1校

20人～27人 4校 37人・42人  
37人・41人 2校 2校

このため小規模学校では、教員1人とで3教科から5教科の教科（教科外）主任を兼任している学校が数校あり、教科研究部の研修会に全部の学校の主任の顔ぶれがそろうこと殆んどない。これが教科研究推進に当たり大きな隘路となっている。

いま山間部小学校の統合が検討されているが、これが実現すれば少しは改善されることが予想されるが、この地域の特長としての格差をふまえて、さらに円滑な運営をはかることが本研究会の課題でもある。

#### 5 昭和59年度の研究活動

##### （1）研究部の研究活動

本研究会には25の研究部があり、次のような研究テーマ及び内容でそれぞれ研究をすすめている。（ ）内は主な内容

国語 確かな読みの力をつける。

（文章の叙述に即して内容を読みとる能力を高める）

書写 書写指導の充実

（硬筆指導・毛筆指導の充実）

社会 小・中・高の関連をふまえた授業研究

（「明治維新」の扱いを中心として）

算数 一人ひとりの子どもが意欲的に問題解決に取り組む

（指導法の研究）

理科 自然をみつめ自然の中から問題を見つけ、科学的に正しく判断できる理科教育

音楽 一人ひとりを高める歌唱指導

（発声を主にした指導）

図工 表現の意欲を高める指導法の研究

美術 （児童生徒の実態に即した偏りのない教材の研究 基礎技術の向上をはかる）

家庭 実践力を高める指導法の研究

	(実践力を身につける指導の工夫)	
技術	技術・家庭科の相互乗り入れの研究	(ゆとりと充実をどのように給食指導にとり入れるか)
家庭	(技術・家庭系列の授業研究)	・給食のマナー
体育	志向性を高める指導法の研究 (体操、器械運動の効果的指導について) スポーツテスト結果の考察)	・学級指導にどのような指導内容をとり入れているか)
英語	一人ひとりが意欲的に取り組む授業をめざして (英語を開きとる能力をつけさせる工夫) 授業に役立つ資料の収集)	安全 安全な生活を営む態度や習慣を育成するにはどうしたらよいか (交通安全の指導 地震、火災等の安全指導)
道徳	豊かな心を育てる道徳教育	事務 事務内容の検討 (管理備品、給与諸手当、市予算、旅費)
特活	学校行事を改善し、充実させるための工夫について (学校行事の精選と指導計画 一人ひとりの児童を積極的に参加させるための手立て)	同和 ひとりひとりを生かす学級づくり (班づくり、班ノートの活用 一人ひとりの児童理解)
特殊	学級内における情緒不安定の子の教育指導	進路指導 望ましい進路決定のための手立て (自己理解をどうさせるか)
保健	保健指導における性教育のすすめ方	養護 ・脳貧血症状をしめす児童・生徒の実態に関する研究 ・健康管理、教育のすすめ方にについての研究 (脳貧血症状を示す児童・生徒の生活調査等について 性教育のとりくみ方と効果的な健康管理の実践方法について)
衛生	(性教育の年間指導計画案の作成と指導事項の検討と作成)	栄養職員 ゆとりある給食をするためには、どのような献立がよいか (食事のバランス調査)
図書館	子どもが足をむけたくなるような魅力ある図書館づくり (委員会活動と運営のしかた たくさん本を読ませるために工夫)	(2) 本年度の研究発表 本年度の市教育委員会と本会の委嘱校の研究発表は次の7校であり、既に発表の終ったもの、目下着々成果をまとめつつある学校などがあり、概要は次のようである。
視聴覚	授業における視聴覚機器の効果的用法の研究 (視聴覚機器を使った授業研究 校内放送の研究と実践)	生徒の学習意欲を高める研究 —作業化を重視した授業の展開 6月20日南高麗中学校
生徒指導	問題行動の背景を考える (児童・生徒の実態に立ち、小中の連携をいっそう深めて実際的な研修を深める。基本的な指導の統一性に配慮)	確かな教材化と児童の実態把握に即した国語学習指導の改善
給食	児童・生徒の教育効果を高めるための給食指導	11月8日 吾野小学校

一人ひとりが問題解決に取り組む学習指導（算数）

11月13日 飯能第二小学校

複式学級における指導法の工夫（算数）

11月2日 北川小学校

一人ひとりを見つめた生徒指導の実践

——小規模校のあゆみ

11月29日 原市場中学校

自然を見詰め、自然の中から問題を見付け、科学的に正しく判断できる理科教育

12月4日 原市場小学校

友達を大切にし、共に伸びようとする児童の育成

2月14日 精明小学校

なお県教育委員会及び県小学校体育連盟の研究委嘱を受けて小学校体育授業研究会が去る6月14日双柳小学校で行なわれ、研究授業、研究協議会が実施され、多数の参加者とともに体育授業のあり方について研究を深め、益するところ大であった。

## 6 今後の課題

本研究会はわれわれ会員の職能の向上と教育の振興を図ることを目的として、研究協議会及び研修会、教育に関する調査研究、講演会や講習会、各種発表会等の事業を実施している。

会員の意欲は十分だが、さきに述べたようにこの地域の特長として学校格差が大きく、数教科の主任をひとりで兼任している学校が何校もあり、これが会の運営上の隘路となっている。

そこで本年度から各教科書の研究部は、事業内容の精選を申し合わせた。それは従来各部で実施してきた研究発表への協力、指導者講習会、視察見学のうちのひとつを、必要に応じて重点的に実施するよう計画してもらった。

この精選によってそれぞれの事業へ各校の主任等の参加者が増え、盛り上がることを予想したものだが、実施第1年めの成果が期待

されるところである。

## 7 会報「飯能教育だより」から

会報14号に管外研修視察の報告が掲載されているのでご紹介しておく。

「8月6日8時半、奥秩父方面へ管外研修に出かけた。夏草繁る山峡の吾野街道を秩父方面に進路をとり、バスは一路ばく進した。竣工なった正丸トンネルを僅か2分でくぐり抜けると頬に当る風も急に冷たくなった。

まもなく横瀬歴史資料館につくと、館長の山中教育長自ら尺玉花火を上げる大筒、榊の使う品々、木作りの幻燈、根古屋の鍾乳洞武甲山近辺に棲息する昆虫などを紹介いただいた。次は大滝村の折本関所跡である大村家を訪れた。ここでは大滝村公民館長の太田巖氏から、中山道の峻険な要所の関所の守り方など説明を直に拝聴できた。…（以下略）

# 名栗村教育研究会

## 1 会のあゆみ

現在の名栗村教育研究会の前身である名栗村教職員会は、昭和24年4月1日に発足し、小学校3校（東・中央・西の各小学校）と中学校1校の計4校の全教職員で構成された。

その後、昭和40年4月1日、3つの小学校が名栗小学校に統合され、昭和43年6月1日には、村立の名栗幼稚園が開園されるによんで、昭和44年4月1日、現在の名栗村教育研究会が発足を見るにいたった。幼稚園、小学校、中学校の一貫教育を目指して、それぞれの現職教職員により、この研究会は構成され、今日に至っている。

なお、現在、使用されている各名栗村教育研究会規約は昭和46年4月1日付けで、施行されたものである。

## 2 主たる活動と事業 [研究発表会]

名栗小・中学校の研究発表会は、昭和57年度まで、当研究会が所属していた飯能地方教育研究会の方針に基づき、昭和40年代後半以降、4年に1度の発表会であったが、それ以前は3年毎が多かったようである。また、昭和30年代前半までは毎年のこともあり、不定期であった。

### 昭和年度

- 25 東小（社会）名栗中（職業家庭）
- 26 名栗中（特活社会）
- 27 中央小（家庭）
- 28 東小（国語）
- 29 西小（理科）名栗中（体育）
- 30 東小（社会）西小（理科）名栗中（体育）
- 31 西小（社会）名栗中（体育）
- 33 東小（理科）
- 34 西小（体育）中央小（算数）名栗中（理科）

- 35 東小（理科・音楽）名栗中（職業家庭）
- 36 東小（音楽）
- 37 東小（音楽）西小（視聴覚）
- 38 名栗中（技術家庭）
- 39 西小（視聴覚）
- 41 名栗中（理科）
- 42 名栗小（図工）
- 43 名栗小（交通安全）
- 44 名栗中（数学）
- 45 名栗小（算数）
- 47 名栗中（英語）
- 48 名栗小（社会）
- 50 名栗中（交通安全）
- 50 名栗小（算数）
- 54 名栗中（生徒指導）
- 56 名栗小（体育）
- 58 名栗中（特別活動）

## 3 特色ある活動

### 教育懇談会

幼稚園、小学校、中学校の全教職員と名栗教育委員会委員との懇談会が毎年一回開かれている。人数の少ない利点を生かして一同が会することにより、教育現場の声が教育行政に直接反映されることをそれは大きな目的としている。同時に、地域の要請等が、この会を通して、教育現場に伝わることをも目的としている。今後もこの懇談会を有意義に活用して行きたい。

### 現地視察研修会

主に名栗の地域、産業等を知るために、会員研修会の名目で現地視察研修会が年一回、行われている。他地域から赴任する会員が多い今日、特に地域を知ることが大切であり、有馬ダム工事現場や鋼管鉄道の視察、棒の峰登山、史蹟廻等、数多く行って

いる。

#### 授業研究会

年2～3回行われる授業研究会は名栗村教育研究会の大きな特色となっている。1村1幼、1小、1中学校の一貫教育を目指して、幼小中の先生方が一つの授業を参観することにより、子供の実態、成長振りを知り、合わせて、指導法の研究を行っている。幼小中の相互間で授業を見せ合い、研究し合うことは、新しい発見にもつながり、その効果は測り知れない。また、児童・児童・生徒の理解にも効力を發揮している。

#### 幼小・小中分科会

この2つの分科会も年1～2回行われている。児童が進学するにあたって、その実態を各進学先に申し送ったり、児童生徒の現状を把握することによって、教育の実態を知って、今後の教育実践の糧としている。また、具体的な指導法も研修することにより、幼小・小中の移行をできるだけ振幅の少ないものにしていく。今後の課題として小・中学校間の教科の系統性を見直し、教科指導の改善へと発展して行きたい。

#### 4 運営にあたっての問題点

昭和58年4月1日をもって飯能地方教育研究会が発展的に解消し、飯能市、日高町、名栗村の各教育研究会が独立したため、名栗村教育研究会の占める位置が大きくなり、他研究会とのつながりに、一層、注意を払わなければならなくなってきた。幸いにも、飯能市教育研究会との連携は確立しているので、今後もこのつながりを続けて行く必要性があり、運営上の大きな配慮となっている。

当研究会の幼小中の縦のつながりは確かに強いが、小規模校（園）であるため、それぞれに教職員は体的的にも忙しく、また学校（幼稚園）も行事等に追われるため、その間げきをぬって、いかに研究会の事業を効果的に進めて行くかも大きな運営面での問

題となっている。

#### 5 昭和59年度の研究活動

- 5月12日 教職員歓送迎会
- 6月8日 会員研究協議会（総会）
- 7月17日 公開保育（名栗幼稚園）
- 10月下旬 授業研究会（名栗中学校）
- 11月下旬 会員研修会——視察見学
- 〃〃 教育懇談会
- 2月上旬 授業研究会（幼稚園または小学校）  
※その他に幼小・小中分科会 各一回

#### 6 今後の課題

1つの村の幼、小、中各1校より成る小規模研究会（会員総数27名——幼3・小12・中12）であり、内容の深さや活動の範囲には限界がある。教職員も同じ専門分野を担当する者が1～2名しかいないので、実践の経験や情報が不足し勝ちである。

そこで、研修会や指導者講習会は隣接する飯能市の教育研究会と合同で実施している。しかし、学校数、教員数とも10倍の規模を有する研究会とすべて同一歩調では対応できない。したがって、重点的な活動と協調が必要となる。

現在、名栗村教研の会員が飯能市教研の役員の一部を担当するという変則的な組織が見られるが、今後の組織、運営についても検討されるべき課題が多い。

また、村内をみても、教育委員会に指導主事もいないし、小・中学校に養護教諭も配当されていないといいった問題について、行政当局への働きかけを続けなければならない。

文化的施設の乏しい地域なので、社会教育をはじめ、父母住民の啓蒙や文化活動の充実についても、教員団体の指導性を必要とする面が多く、今後の課題の一つとなっている。

#### 7 その他

##### 名栗村教育研究会規約

###### 第1章 総 則

- 第1条 本会は名栗村教育研究会と称し事務所を会長所在の学校におく。

**第2条** 本会は村内現職の学校職員が主体となって村教育の振興会員の親睦を図ることを目的とする。

**第3条** 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 会員の教科研究に関する事項
2. 会員の教養に関する事項
3. 教育の調査研究
4. 会員の親睦に関する事項
5. 社会教育に関する事項
6. 会員の慶弔に関する事項
7. その他必要な事項

## 第2章 組織

**第4条** 本会は村内現職の学校職員をもって組織する。

## 第3章 役員

**第5条** 本会に次の役員をおく。

- (1) 会長1名 (2) 副会長3名
- (3) 書記1名 (4) 会計1名
- (5) 監査2名

**第6条** 役員の任務は次のとおりとする。

1. 会長は本会を代表し会務を管理し各種会議を召集する
2. 副会長は会長を助け会長事故あるときはこれを代行する。
3. 書記会計は本会庶務会計を行う。
4. 監査は本会の会計を監査し総会において報告する。

**第7条** 役員の選出は次の方法によるものとする。

1. 役員はすべて現職学校職員中より推薦する。
2. 会長副会長は役員の推薦による。
3. 書記会計は会員中より会長が委嘱する。
4. 監査は会員の推薦により決定する。

**第8条** 役員の任期は1ヶ年とし毎年4月に推薦する。但し再任を妨げない。

**第9条** 補充役員の任期は、残任者の残任期間とする。

## 第4章 会議

**第10条** 本会の会議を分けて総会 役員会とする。

**第11条** 総会は毎年1回会長が召集する。但役員会でその必要を認めた時は臨時総会を開くことができる。

総会では次の事項を協議決定する。

1. 規約の決定と変更
2. 役員の決定
3. 会務の報告
4. 予算・決算の報告および承認
5. その他必要事項

**第12条** 役員は会長・副会長・書記・会計をもって構成し次の事項を協議執行する。

1. 事業案の審議決定
2. 重要原案の審議作成

## 第5章 会計

**第13条** 本会の経費は会費による。

**第14条** 会費は役員会で協議し総会において決定する。6月に全額徴収し、なお必要により徴収することができる。

**第15条** 本会の会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

## 第6章 條則

**第16条** 本会の規約施行に必要な細則は別に定める。

**第17条** 事務所に備える帳簿は次の通りとする。

1. 会員名簿
2. 記録簿
3. 会計簿
4. その他必要な帳簿

**第18条** 本会規約は昭和44年4月1日から実施する。

### 内規

規約第3条の第4項および第6項に関する内規として次の通り定める。

転退職者の慰労金会員の慶弔の細部に関しては役員会で決定する。

規約第2条の学校職員とは幼稚園小学校

・中学校で決定する。  
本規約の改定（昭和53年4月26日…改定）

(昭和57年6月14日…改定)  
(以上)

## 入間市教育研究会

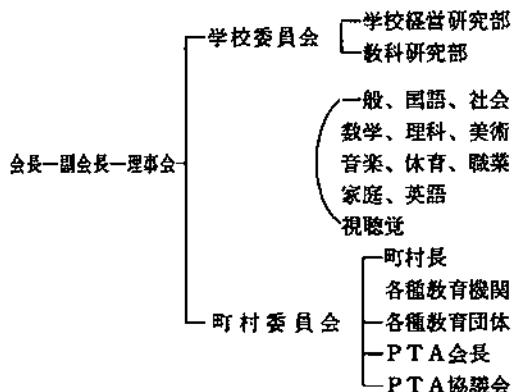
### 1 会のあゆみ

昭22・8・15

現教育事務所からの連絡をうける機関として臨時に豊岡部会連絡事務会が豊岡小学校を事務所としてできた。会長越阪部丈治先生  
昭24・6・17

豊岡部会教育研究会結成総会、豊岡小学校で開かれ、規約決定される。会長、豊岡町長井田西之助氏。会費月額5円。市助成3,000円。PTA助成生徒1人2円。予算38,645円。

### 組織図



### 昭25年度より現在まで

年度	研究会長	予算総額
25	豊岡町長 井田西之助	40,950
26	藤沢村長 石田 弥一	112,000
27	" "	126,000
28	宮寺小学校長 中野喜代春	139,508
29	金子中学校長 大沢 辰雄	156,000
30	東金子小学校長 長沢 正雄	136,000
31	豊岡小学校長 越阪部丈次	145,047
32	" "	142,307
33	西武中学校長 町田善太郎	146,517
34	金子中学校長 大沢 辰雄	210,671
35	" "	242,320
36	" "	257,786
37	藤沢小学校長 新井新一郎	256,492
38	" "	266,594
39	藤沢中学校長 斎藤 四次	310,679
40	" "	286,000
41	金子中学校長 小谷野寛一	358,000
42	" "	373,332
43	" "	466,849
44	金子小学校長 星野清五郎	565,795
45	西武中学校長 木村 光輔	
46	西武小学校長 久保 道夫	640,465
47	" 久保 道夫	628,815
48	藤沢小学校長 渡辺 綱麿	565,355
49	" "	822,058
50	藤沢中学校長 栗原 保	564,865
51	藤沢中学校長 白井 新作	574,207
52	" "	677,866
53	藤沢東小学校長 中野 平八	650,539
54	" "	628,857
55	扇小学校長 岩田 一	724,497
56	" "	1,080,271
57	藤沢北小学校長 小谷野五郎	1,177,533
58	" "	1,138,152
59	黒須小学校長 比留間田光志茂	1,143,432

## 2 入間市教育研究会研究発表録（個人・グループ）

(集録記載による)

年度	学校	氏名	発表題目
31	豊小	関根英皓	計算学習体系の改善について
32	豊小	関根英皓	図形指導の一考察
34	豊小	関根英皓	関数観念養成のための指導
〃	豊小	中義智	生活指導資料の活用
36	藤小	下田路雄	道徳評価について
〃	東金小	野村順三	やつ池周辺の植物について
〃	金小	秋元光次	郷土写真集とその活用
〃	金中	発智弘雄	道徳教育の方法に関する実証的考察
〃	東金小	土屋惣一	石と地層
37	豊小	関根皓	三角形の求積と思考
〃	金中	発智弘雄	生徒指導の統合的構造
〃	西小	大野勲	短文をいかに指導してきたか
38	金中	発智弘雄	構造主義的教育論への提案
〃	〃	石川哲三	読解指導の中で行なう文法指導
39	武中	砂長高久	バス学習について
〃	〃	神田三芳	同上
〃	豊中	山川滋	英語発音指導について
〃	金小	河野米吉	思考力を高める理科学習
40	金小	金子茂雄	主体的読解の力を育てるために
41	金小	秋元光次	社会科指導法の改善
〃	豊中	高根信夫	中学校における詩歌指導
〃	東金小	大高秀夫	漢字の書写力を伸ばす指導について
42	西小	西沢八千代	頭声発声への歩み
〃	狭山小	水野和子	文章題における読解指導
〃	豊中	原田友衛	特殊学級経営の一部面
〃	豊小	金井久子	視唱力をつけるための方法とその実際
〃	〃	井上栄次	童話、物語をどう読みとらせるか
43	東金小	野村順三	視聴覚教材の利用を児童はどのように受けとめているか。
〃	藤小	吉沢基博	WISC知能診断検査
〃	〃	山川誠一	漢字の記憶に関する実験と、その指導法についての提案
〃	西中	横田武志	生徒理解を中心とした学級指導
〃	金中	発智弘雄	中学校における依存性と自立性
44	宮小	木村忠夫	創造性（創造的思考）についての一考察
〃	金小	高橋拓	業間体育で培われた道徳性
〃	藤小	顛訪国輔	社会科授業における第4学年の第一単元の扱い方について

年度	学 校	氏 名	発 表 題 目
44	藤 中	宮崎道夫	中学校における漢字指導について
〃	〃	福島和一郎	科学的方法と理科教育
45	金 小	栗原 勇	学校における問題児
〃	東金小	守谷芳子	どもりの子を指導して
〃	豊 小	奥泉アヤ子	幅曲の技能をのばす指導はどう進めたらよいか
46	金 小	高橋 拓	学級指導という場での道徳性の指導について
〃	藤 小	山川誠一	古地図収集
〃	西 中	高柳克身	放送教育における文学指導
〃	〃	石川哲三	国語科「読むこと」の学習における読書指導、およびせいぶ中学生の読書標準よみものリスト
〃	東金小	村田 勇	教え子とのドラマ
47	金 小	栗原 勇	特殊学級における放送教材の利用
〃	東金小	与 芝 茂	図工科における共同製作の学習について
48	理 科 同 好 会	鈴木三佐男他	魔物利用、海の生物、化学実験の研究
〃	藤沢小	菱信三	算数、科学指導における学習課題の在り方
49	武藏中	西沢栄一	正の数、負の数の指導について
〃	藤沢小	間根英始	集合以前の集合の指導
50	藤沢中	小林繁	修学旅行実施委員会の指導をめぐって
〃	藤沢南小	高橋 拓	「学ぶ力」をどう引き上げるか
51	豊岡中	久木 真	計算におけるつまずきの原因とその解明
〃	豊岡小	橋村充三	小学生の文法能力の実態とその考察
52	豊岡中	古谷尚子	「仮説実験授業」による楽しい理科を
〃	東金子小	長崎泰典	絵画指導の一考察
53	算 数 グループ	南小田中他2	算数科における「学習の事前研究と準備」
〃	理 科 同 好 会	濱田他2	「理科・臨海実習」—ウニの受精について—
54	武蔵中	大河原圭作	昭53. 海外教育事情視察報告
〃	向原中		情操豊かな学校づくりをめざす美術科の指導「1人1額」の推進
55	藤沢中	吉川充他2	道徳教育に関する一考察
〃	黒須小	磯谷悦子	児童会活動を通して集団への意識化をどうはかるか
56	東金子小	5年研究会	社会科における地域教材の収集と活用いわつきの人形

### 3 会報「入間市教研」発行

昭和41年度第1号発行（4ページ）より昭和58年度第19号（10ページ）と積み重ね現在に至っている。

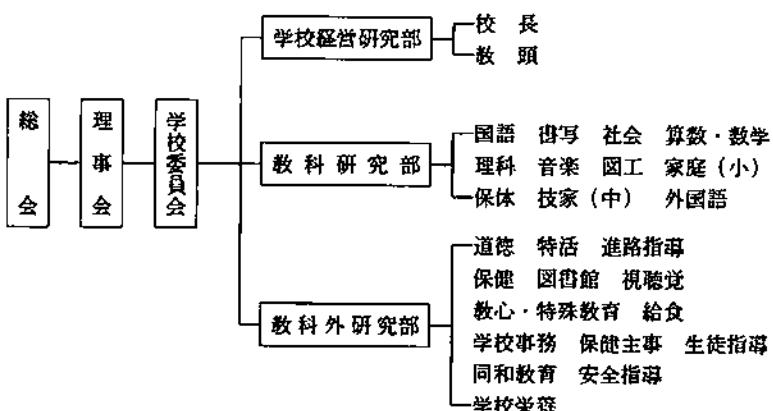


#### 4 入間市教育研究会規約

- 第1条 本会は埼玉県入間市教育研究会と称し、事務所を会長所在の学校におく。
- 第2条 本会は入間市各小・中学校の教職員をもって組織する。
- 第3条 本会は会員相互の研修と入間市教育の振興と充実を図ることを目的とする
- 第4条 本会は前条件の目的を達成するため
- 第5条 本会の組織は下記のとおりとする。

下記の事業を行う。

1. 学校経営に関する研究
2. 教育活動に関する研究
3. 研修会の開催及び研究の助成
4. 会員の融和親睦をはかるための事業
5. その他前条の目的を達するための事業



#### 第6条 本会に下記役員をおく。

- 会長1名 副会長2名 理事 若干名  
学校委員 若干名 部長各部1名  
幹事2名 監査3名

#### 第7条 本会に下記の機関をおき、次の事を行う。

1. 理事会は学校長及びその学校の代表者1名をもって構成し、予算、決算及び本会の運営について審議する。
2. 学校委員会は理事及び学校経営研究部正副部長と各教科研究部長、教科外研究部長をもって構成し、事業について協議執行する。
3. 学校経営研究部は校長、教頭をもって構成する。
4. 教科研究部は各学校の教科研究部員

をもって構成する。

5. 教科外研究部は各学校の教科外研究部員をもって構成する。

#### 第8条 会長、副会長は教職員の公選による（選挙規定は別に定める）

- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統べ、各種の会議を召集する。  
副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれにかわる。

幹事は会長が委嘱し、本会の庶務会計にあたる。

監査は理事会において選出し、会計の監査にあたる。

- 第10条 各部長は各部員の互選によって選出する。

#### 第11条 本会に理事会の推薦によって顧問を

おくことができる。

第12条 役員の任期は1カ年とし再選を妨げない。ただし、補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。

第13条 本会は毎年1回総会を開き次の事を行う。ただし、必要に応じ臨時総会を開くことができる。

1. 規約の審議決定

2. 役員の承認

3. 予算決算の承認

4. 事業報告計画の承認

5. その他重要事項の決定

第14条 本会の経費は教職員の会費（1人年額1,000円）及び市捕助金ならびに寄附金をもってこれにあてる。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日をもって終わる。

## 附 則

第1条 この規約は昭和58年4月1日より施行する。

### 5. その他

(1) 研究委団

毎年7～8校の研究委団を入間市教育委員会とあわせて行い、1万円の研究補助を行っている。

(2) 文集「茶の花」（低中高）

(3) 全体研究会……講演会、個人発表会を午後に実施。

# 富士見市教育研究会

## 1 会のあゆみ

### (1) 発足当時を振り返って

昭和50年頃の当地区教育研究会は、富士見市上福岡市、大井町、三芳町の二市二町で組織され、東部班教育研究会という名称であった。

当初は10校程度の学校であったものが、50年頃になると30校ちかくにふくれあがり、もともと地域も広範囲にわたっていたため、役員会、教科の研究会等の会合も集りにくくなり、活動が停滞ぎみになってきた。役員の選出においても困難になり、各市町もち回りのようなかたちになり、教育研究会活動もやむなく、理事会を中心とした、各市町の連絡会のようになってしまった。そこで、各市町に教育研究会が設立された段階で、発展的解散をということになり、それぞれの市町で教育研究会の設立を考えるようになった。

富士見市に於ても、それ以前の昭和49年頃から、市教委の指導により、市独自の教科研究部のみの組織をつくり、各教科の研究及び事業活

動をすすめてきた。昭和51年度頃から、東部班教育研究会の現状や、他市町の教育研究会設立の状況を見ながら、当市に於ても教育研究会をつくるべきであるとの声があつて来、当時の富士見台中学校長、平野正夫氏が中心になり、各校、各団体より代表者を選出し、準備委員会を発足させた、準備委員会は巾広く意見を聴取し、特色のある教育研究会の設立を志向し、16回にわたる協議を重ね、教科研究部と合わせ、研究班をつくり、事業と研究を活発化させることをねらったものとした。年度内発足めざしてきた関係から、昭和53年3月10日、鶴瀬西小学校を会場にして、発足総会を開催し、出発した

### (2) 本会の組織及び運営について

本会を結成することに当り次の項目が確認され、発足することになった。

### 本市研究会会則（抜萃）

私たちは、教育基本法の精神に基づいて、教師自らの研修と研究を大切にし、富士見市の子どもと教育に対する責務を果していきたいと考え

え、次の4項目

- (1)会員が主体的に参加し、自主的に研修する
- (2)民主的な組織づくりと運営を行う。
- (3)わかる授業をめざす。
- (4)他地域との交流を図る。

を基本姿勢とする富士見市教育研究会を結成する。

#### 目的

この会は自主的・組織的な研究活動を推進し、もって職能の向上と、富士見市教育の推進を図ることを目的とする。

#### 組織

この会は、会員の研究活動を進め、また必要事項を処理するため次の研究部をおく。なお必要な研究を行うため、別に専門委員会をおくことができる。

主任会（26研究部）各校より  
研究部 小中養護学校研究班  
研究班 3校以上の学校から10名以上  
以上の希望で成立。中学校独自  
専門委員会の場合、2校以上5名  
いざれも理事会の承認が必要  
以上のような組織づくりがなされている。

#### (3)本会歴代研究会会长

初代会長(53・54) 平野正夫 西中長  
2代〃 (55) 江田昭司 勝瀬中長  
3代〃 (56~58) 吉田正男 みずほ台小長  
4代〃 (59) 津岡福治 関沢小長

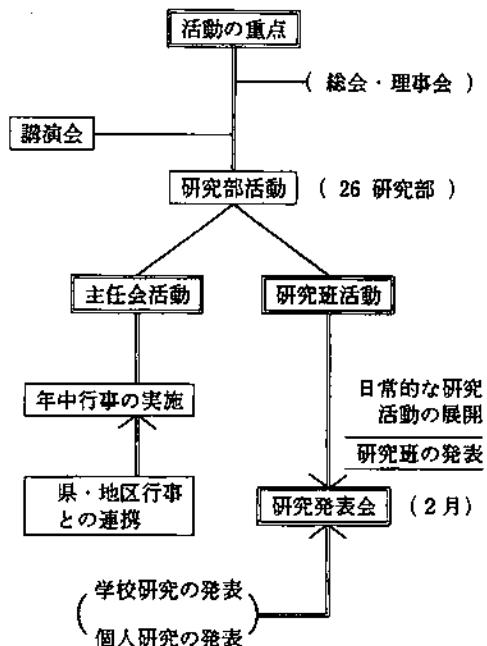
### 2 特色ある活動

本市の教育研究会の研究活動は各研究部を中心とし、その年度の重点施策に沿って展開されているが、概略次のように構造化されている。

主任会活動については、会員の研修（学校間の情報交換・研究会・講習会等）、調査研究及び資料作成・諸行事の実施等、他地域の活動と差異はないと思うが、研究班活動については、他にはあまり例を見ない活動だと思う。そこでこの班研究について以下述べることにする。

#### (1)研究班活動

毎年理事会において研究班の改廃、新設の承



認が行われ、毎年20内外の研究班が活動をすすめている。この研究班は、3校以上の学校からおおむね10名以上の希望者（中学校の研究班は2校以上、5名以上）があれば独立研究班としての活動が認められる。基本的には自主研修の形をとっており、会員の創意による自由な研究活動が保障されている。この種の組織については、同好会の形ではあっても、本市のように研究会の中に位置づけられている例は特異ではないだろうか。

班研究で最近集中的に力を入れているのが指導過程の研究である。本市研究会の基本課題である「わかる授業の創造」を目指すものとして、56年度より継続的に取り組んでいた。現在、国語・社会・算数・理科の4教科にわたって組織化されているが、推進に当たっては教育委員会との共同研究の形をとっている。

尚研究活動の内容については、年度末に報告資料集を作成（全会員に配布）し、班相互の交

流と会員の主体的な研究参加の一助にしている  
(2)研究発表会

一年間の研究活動の総括として、毎年2月に研究発表会を開催している。前回に示したとおり、班研究、学校研究、個人（グループも可）研究等の一年間の成果が、ここで発表される。内容的には極めて多岐にわたるので、本市教育委員会指導主事、校長、教頭が総出で各分科会の指要助言にあたっている。

尚、発表資料は後日製本し、あらためて各校に配布されるが、全会員に配布されるところまでには至っていない。

### 3 運営上の問題点

班研究を中心とした活動は、本研究会の大きな特色であるが、この個人を背景とした研究班活動と学校を背景とした主任会活動をどう調和させるか、このことは学校運営の視点と個人の研究保障の視点から統一的に把えていかねばならない問題となっている。会発足の精神をふまえて、これらの問題点を克服し、会員の主体的参加による研究活動の充実推進は、本会にとって避けることのできない課題となっている。

### 4 昭和59年度の研究活動

昨年の研究活動も発足依頼の研究推進体制を中心に推進することとして、次のような重点及び活動を計画している。

#### (1)活動の重点

わかる授業をめざすために「指導過程の研究を継続してとりくむ。（小中学校の系統的な指導をめざす研究が望まれる）

研究班の自主的研究を活発にし、研究の積み上げをめざす。

- ・班研究の年間計画の作成
- ・研究班の研究発表
- ・研究収録の作成
- ・「指導過程研究班」の組織化
- ・学校研究の交流をはかる
- ・授業研究会による研究の公開
- ・市教研究発表会への参加

#### (2)事業計画

### 教育研究会本部の主な事業

・教育講演会…本年は広く教養を見につけるため、講師としてNHK、シルクロードチーフディレクター鈴木肇先生…11月

演題「ローマへの道」

参加対象、市内 小中養護学校教職員

・研究発表会…12月

学校研究並びに班・個人研究の成果の発表の場をもうけ、会員の資質の向上と富士見市教育の発展に寄与するため、会の特色ある活動と位置づけて実施するものである。

研究部による主な活動（児童・生徒の参加）

- ・国語部…国語学力調査(入間教育研究合同)
- ・書写部…市内小中 硬筆 書き初め展
- ・社会科…社会科展
- ・算数部…算数・数学学力テスト
- ・理科部…科学展
- ・音楽部…音楽会・音楽鑑賞会
- ・図工美術…美術展
- ・技術家庭…発明創意工夫展
- ・保健体育…連合運動会
- ・英語部…英語弁論大会
- ・学校図書館…読書感想文コンクール
- ・視聴覚……放送交換会

などが、各研究部によって推進される予定である。

#### その他

・主任会 研究班による授業研究会、実技、事例研修等の開催が挙げられる。なお、学校研究、研究部（各教科等研究主任会・研究班）には、研究費を支出して、研究活動の活発化を図っている。

### 5 運営上の諸問題と今後の課題

本市の研究会は、小11校 中6校 養護1校 計18校 会員数 572名によって構成され、研究部 26主任会 16研究班（本年）による活動が計画されている。

発足当初の会の構成から比較すると、小2校 うち3校が新設され、会員数も100名程の増加となり、運営上も学校数、会員数の増加とともに

に若干の問題が挙げられている。

- (1) 学校研究と研究主任会・研究班の研究活動内容と時間確保の問題。
  - (2) 会員の研究活動参加への意欲の問題
  - (3) 学校研究体制と研究会行事との関連などである。
- こうした諸問題の解決の視点として

- (1) 会員自信の参加意欲を盛り上げるための魅力ある研究内容と主任会・研究班のあり方。
- (2) 学校研究や行事と主任会・研究班の行事の調和と統一をはかる検討が必要である。今後もこうした視点に立って、富士見市教育研究会の充実と発展が期待されている。

## 上福岡市教育研究会

### 1 本会のあゆみ

上福岡、富士見、大井、三芳の二町二村からなる「入間・東部班教育研究会」に平行して昭和45年題に本会の前身は誕生した。昭和47年4月の市制施行に伴って、上福岡市教育研究会は、他の一市二町の教育研究会と共に単一研究団体として独立。ここに東部班教育研究会は発展的に解消した。

昭和35年までは、小学校1校、中学校1校であったのが、住宅化による住民、児童・生徒の急増に伴い、現在は小学校7、中学校4計10校 329名の会員を擁するまでになった。

発足以来10年 本会は、会員の資質の向上と親睦をはかることを目的として、本部、各研究部会をあわせて、毎年150余りの事業計画が実施され、本市教育の進展にも寄与している。また、市当局も発足以来研究補助費音楽鑑賞教室等の予算を計上し援助の手をさしのべてくれている。

### 2 主たる活動と事業

本会では、次のような活動を行っている。

#### (1) 教育に関する調査・研究

年度によって内容等も違うが、3年継続して行われた小・中関連して実施した社会科の調査 一年間づけた生徒指導の実態調査と環境衛生について等、学習・生徒指導上における調査を各研究部単位ごと、あるいは市教委主催、各種専門委員会に協議

して実施している。

#### (2) 講習会の開催

毎年1回、全会員を対象としての教育講習会 昨年は、登山家 田部井淳子氏の、「エベレストまでの道」という感銘深い講演をいただいたり、各研究会単位でも（たとえば本年、埼大教授 西村章次先生をお招きしての障害児教育部会のように）計画実施し、各研究部会単位の実技研修会もさかんである。

#### (3) 音楽会・展覧会・体育行事・授業研究会の開催及び他団体との共催による催し、部主催による市内音学会の他にロータリークラブとの共催による音楽会 技術 家庭科・理科・書写・図工美術等の展覧会は、毎年児童・生徒・市民に公開され各種の授業研究会と共に会員の研修にも寄与して来た。

#### (4) 視察・見学

各学校2名ずつ計20名による「優良学校視察」は、昭和49年、山梨県南部中学校から昨年の仙台市立生出小・中学校の「道徳的実践を高める指導」に至るまで続いている。小・中学校ぐるみで取り組んでいる生徒地域に学ぼうと努めて来た。

部会単位では、O・Aセンター、県学校給食岩槻パン製造工場、川越児童相談所、出版社、松本私立二子小等、今年度、実施済みのところもある。

### 3 運営に当つての問題点

(1) 事業の精選と研究の機会、時間の確保、  
日常の教育実践と研修は、私達教職員の職務遂行の上で車の両輪と言える。授業時間の確保、校務の遂行、学校運営上の問題等を考慮して、事業内容と開催時間の申し合わせが有り、事務局でもできる限り調整している。しかし、講師招聘や材料と予算、事業内容と時間、学校規模や職員構成からくる会員個々の負担の違い等を考えると、個々の期待には答えきれないでいる。

#### (2) 役員の選出について

発足当時から各学校選出による理事以外、会長、副会長、幹事が輪番制による一年交代という点、長所も多い反面、活動の深化精通した会運営上で問題を残す。

### 4 昭和59年度の事業計画

国語	学力テスト分析、主任研修会 授業研究会（小・中各1回）
書写	主任研修会 実技研修会 市内書き初め展
社会	古文書研究会3回 授業2回 正副主任研究会
算数数学	発達段階をふまえた指導法の研究5回
理科	主任研究会 市科学展 現地研究会 小中授業研究会各1回
音楽	授業研究会・鑑賞教室各2回 市内音楽会 指導者講習会
図工美術	実技研修会 市内小中学校美術展 主任研修会
小学体育	サッカー指導法研修会 水泳指導及び体育実技伝達講習各1回 優良校視察 授業研究会2回
中学体育	スポーツテスト集計分析 授業研究会 主任研修会
技術家庭	市発明創意工夫展 主任研修会
英語	市内英語弁論大会 二市二町英語弁論大会
道徳	指導過程について主任研修会4回

特活	児童会・生徒会活動の内容と指導法 集会行事の内容と指導法4回
障害教	授業研究会3回 施設見学 学習発表会 主任研修会
障害担	授業研究会3回 施設見学 講演会 学習発表会 主任研修会
教育心理	主任研修会3回
図書館	指導法講習会、読書感想文審査会 主任研修会 出版社見学
給食	主任研修会 パン工場見学
視聴覚	教育機器の活用状況及び活用した授業について授業研究会2回
養護	実態調査・健康管理・環境衛生について主任研修会8回
保健	優良学校視察、地区研究大会にむけて主任研修会3回
学校運営	諸行事・学校運営・学習生徒指導全體について主任研修毎月1回
進路指導	主任研修会 日程調査 情報交換
学校事務	事務職全体研修2回 予算 備品管理 服務等テーマ別研修5回
生徒指導	実態調査 情報交換研修12回 児童相談所見学 市内パトロール
安全教育	学校安全 交通安全 避難訓練等について主任研修会3回
同和教育	外国人女子教育及び市同推協との共同研修の他に主任研修会3回
通知票	更に検討 改善にむけて3回
本部	理事部長会3回 教育講演会 県外視察（各校2名）

### 5 今後の課題

本市は、昭和37年の町制施行から47年市制施行を経て今まで単位自治体が村（町）市へと推移した地域で、住民の教育や地域への関心は高く、教育、文化施設も序々に整い、文化活動も盛んになってきた。また、教職員、PTAも各学校間、会員相互の交流も密でまとまりがある。  
部によっては市内の県立高校に呼びかけ、共催事業を組んでいるように広く研修の場を

求め、今後さらに地域に根ざした教育の実践、 研磨に努めていきたい。

## 坂戸市教育研究会

### 1 坂戸市教育の概要

本市はほぼ県の中央に位置し、都心より45km圏内の距離です。昭和48年頃より急速に都市化が進み昭和51年9月1日 県下39番目の都市として市制を施行、本年8周年を迎える現在人口約8万4千人を超える現状です。

また、15年前は小・中学校合わせて8校であったが56年には20校と2倍以上に増え、若い躍進する市として意欲的行政が進められています。

学校教育においては現在小学校13校、中学校7校、合計20校全て体育館・プールを備え学校給食は単独調理校方式をとり、なお本年9月には市立教育センターも完成、今後は教育内容の充実に一層の努力を向けるべく進められている現状です。

### 2 坂戸市教育研究会の発足

昭和51年、市制施行にともない坂戸町から坂戸市となり、教育研究会も従来の坂戸町立教育研究会（坂戸町立及び鶴ヶ島町立の小・中学校11校で組織）より独立すべきだという声を耳にしながら54年迄4年間旧組織で研究活動を続けてまいりました。

昭和55年、鶴ヶ島町においても人口増による学校数の増加で両者分離独立の機が熟し、昭和55年5月21日、坂戸市立千代田中学校体育館において設立、第1回総会が行われ今日、5周年を迎えたわけです。

### 3 坂戸市教育研究会の沿革

#### 昭和55年度

- ・学校数 小12校・中6校 計18校
- ・会員数 488人 会費（年）600円
- ・予算総額 1,028,800円
- ・会長 城山中学校長 斎藤幹男

#### 昭和56年度

- ・学校数 小13校・中6校 計19校
- ・会員数 538人 会費（年）600円
- ・予算総額 1,281,640円
- ・会長 泉小学校長 勝又福志

#### 昭和57年度

- ・学校数 小13校・中7校 計20校・会員数 566人 会費（年）600円
- ・予算総額 6,350,223円
- ・会長 泉小学校長 勝又福志

#### 昭和58年度

- ・学校数 小13校・中7校 計20校・会員数 600人 会費（年）600円
- ・予算総額 6,784,236円
- ・会長 城山中学校長 細野 豊

#### 昭和59年度

- ・学校数 小13校・中7校 計20校・会員数 608人 会費（年）600円
- ・予算総額 5,237,389円
- ・会長 北坂戸小学校長 青柳 熨

### 4 主たる活動と事業

#### 毎年度共通した事業

- (1) 主任研修会（28の各研究部）
- (2) 授業研究会（〃）
- (3) 硬筆展
- (4) 書き初展
- (5) 現地研修会（社会科・理科）
- (6) 実験講習会（理科）
- (7) 理科展・家庭科展
- (8) 実技研修会（音楽・図工・美術）
- (9) 市内小・中学校音楽会
- (10) 市内小・中学校美術展
- (11) 教材研究会（家庭・技術家庭科）
- (12) 水泳実技伝達講習会

- (13) 体育実技伝達講習会
- (14) 講演会（生徒指導・心障部）
- (15) 読書感想文コンクール（図書館）
- (16) 視察・見学（給食・保険）
- (17) 教育講演会並びに研究会総会
- (18) 各教科等研究部長会
- (19) 理事会
- (20) 研究紀要発行
- (21) 研究委嘱校への協力

## 5 特色ある活動

坂戸市教育研究会は毎年、1年間の活動をまとめ、研究紀要「あゆみ」を発行しています。特に内容面で非常によく工夫され充実しているのではないかと自認しております。その主な内容を下記に紹介します。

- (1) 各研究部の研究と活動
- (2) 各校の校内研修
- (3) 会員の広場
  - ・新任教員の声
  - ・転入職員の声
  - ・研究会、研修会参加報告
  - ・地域（学区内）の地誌紹介
  - ・旧会員（退職者）の隨想等

## 6 59年度の研究活動

（本年度研究委嘱校の公開研究発表会）

坂戸市立坂戸小学校

- ・教科、領域 生徒指導（算数）
- ・テーマ  
自ら判断し行動できる子を育てる教育を目指して。

・発表 60年2月未定日

坂戸市立泉小学校

- ・教科、領域 図工
- ・テーマ  
心豊かな子どもを育てる指導法の研究

・発表 59年11月29日（木）

坂戸市立片柳小学校

- ・教科、領域 算数
- ・テーマ

子どもを考え大切にした学習児童法の研究

・発表 59年11月30日（金）

坂戸市立城山中学校

・教科、領域 体育

・テーマ

校内における体育活動の充実を目指して

- (1) 活動量の確保を考えた授業展開
- (2) 運動の特性に応じた準備運動の工夫

・発表 60年2月未定日

坂戸市立千代田中学校

・教科、領域 道徳

・テーマ

指導過程の研究

・発表 59年12月4日（火）

## 7 今後の課題

- (1) 研究会の各教科、領域等研究部の研究のあり方については色々あると思うが、ややもすると各学校の主任だけの活動に止どまり、校内の研究組織との有機的連携がとれていないのである。

やはり、各学校の研究部、主任に根を下し、そこから問題を見つけ、それを集約してテーマを設定するという姿勢が今後必要ではないか。

- (2) 研究会の活動が活発になると、どうしても出張回数が増加し、授業時間の確保との関係が問題になり運営上の課題もある。

以上

# 鶴ヶ島教育研究会

## 1 会のあゆみ

鶴ヶ島町は、肥沃な土地と豊かな自然に恵まれた純農村でしたが、昭和41年に町制が施行され、昭和47年ごろから都市化の波とともに第二次産業、第三次産業が次第に増え県のほぼ中央、東京都心から約450キロメートルの位置にあることも手伝って、全国でも屈指の人口急増地域になりました。それまでは小学校2校、中学校1校、計3校の時代が長い間続き、隣接する坂戸市と提携することが多く、教育研究活動も、昭和23年に「坂戸地方教育振興会」が結成されて以来、名称を昭和31年に「坂戸班教育研究会」と改めた経過ををちらながら、昭和55年3月まで、坂戸市内の小中学校と共に活動して多くの実績を積み重ねてきました。しかし、坂戸市、鶴ヶ島町のいずれも40年代後半から小中学校の新設があい次ぎ、本町では6年間に3校から10校になるという驚異的な激増をみました。学校数教職員数の大幅な増加と、行政の異なる点からの問題も起き、それ等の解決のため、昭和55年4月に「坂戸班教育研究会」は発展的解散をし、坂戸市、鶴ヶ島町はそれぞれ単独の教育研究組織を設けました。

「鶴ヶ島町教育研究会」は54年度から設立準備会をもち、55年5月21日に町立栄小学校体育館において設立総会を開き、鶴ヶ島町立杉下小学校長 関口博司先生を会長に教育研究組織が誕生しました。

初年度に 活動の基本線を打ち出し運営された実績を基に、小中一貫した各教科、各領域、分野別の研究活動が活発に展開されて現在に至っています。

## 歴代の役員

	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度
会長	関口博司	松本有輔	中村博一	吉野延子	吉野延子
副会長	松本有輔	中村博一	吉野延子	岸田 総	新井達男
監事	小島弘一 中島 進 長島喜久枝	相庭輝三 玉利秀雄 土屋玲子	大島喜一 中島 進 糟川道子	田沢義正 吉塙武治郎 高橋喜美子	田沢義正 齊藤 総 関口伊津子
幹事	八木原光雄 玉利秀雄	吉沢 敏 中島 進	相庭黒三 吉場式治郎	野口広美 齊藤 総	野口広美 中島 進
理事	小林定雄	関口博司	関口博司	関口博司	関口博司
	高沢幹夫	高沢幹夫	高沢幹夫	後藤行義	勝俣京子
	長野佐七	千葉公明	千葉公明	宮崎仙蔵	宮崎仙蔵
	土屋玲子	糟川道子	柿沼由美子	関口伊津子	近藤博子
	吉野延子	吉野延子	掛川重信	佐々木七郎	森野 一
	宇佐美義久	大野久江	岸田 総	森野 一	長島喜久枝
	宇野信夫	岸田 総	長岡恭夫	筋井道子	大島喜一
	新井松子	今野信夫	松本有輔	松本有輔	長岡恭夫
	中村博一	新井松子	田中晃芳	守田誠一	小島弘一
	内野郁子	守田誠一	高橋喜美子	新井達男	飯田浩子
	落合一男	内野郁子	落合一男	中島 進	小谷野淑子
	小峰祿郎	落合一男	小峰祿郎	高沢幹夫	高沢幹夫
	内田 桂	小峰祿郎	宮崎 進	落合一男	山口澄子
	田島佐助	内田 桂	田島佐助	小峰祿郎	落合一男
			玉之内淳	宮崎 進	小井川広久
			大塚道人	武井 誠	岸田 総
				玉之内淳	田島佐助
				大塚道人	藤井欣象
					関根博夫

## 会員数と予算額

年 度	会 員 数	予 算 額
55年度	224人	898,000円
56年度	260人	922,287円
57年度	292人	1,050,828円
58年度	306人	1,123,393円
59年度	326人	1,354,151円

## 2 主たる活動と事業

### ○55年度

- 5月21日 設立総会  
 6月30日 体育実技研修会  
 11月21日 一斉授業研究会  
     小学校6校 中学校2校において 学年別の授業研究  
 11月18日 県外視察研修会  
     19日 町教育委員会と共に催  
     16名参加  
     神奈川県平塚市立神田小学校  
 2月13日 教育講演会  
     「子どもの認識と表現の力をどう育てるか」  
     講師 鹿児島短大教授  
     西郷竹彦先生

### ○56年度

- 6月29日 体育実技研修会  
 11月18日 一斉授業研究会  
     小学校6校 中学校3校において 小中学校とも全学年  
 11月26日 県外視察研修会  
     27日 町教育委員会と共に催  
     17名参加  
     長野県長野市立松代小学校  
     同 松代中学校  
 2月19日 教育講演会  
     「教師の良心」  
     講師 元川越市立川越第一小学校  
     校長  
     清水 英先生

### ○57年度

- 6月28日 体育実技研修会

### 11月19日 一斉授業研究会

小学校6校 中学校3校において 小中学校とも全学年

### 11月16日 県外視察研修会

町教育委員会と共に催

19名参加

栃木県那須郡那須町立芦野小学校  
 那須町立黒田原中学校

### 2月18日 教育講演会

「ことばと教育」

講師 飯能市教育委員会教育長  
 野々宮高成先生

### ○58年度

- 6月27日 体育実技研修会  
 11月22日 一斉授業研究会  
     小中学校9校における学年別の  
     授業研究に、特殊学級担任者の  
     授業研究も加えた。

### 11月24日 県外視察研修会

町教育委員会と共に催

21名参加

福島県白河市立白河第一小学校  
 白河市立白河第二中学校

### 2月22日 教育講演会

「教育と人間関係」

講師 元埼玉県教育局学務第一  
 課長 仲 栄先生

### ○59年度

- 7月 日 体育実技研修会  
 11月20日 一斉授業研究会 中学校3校  
     22日 同 小学校7校  
     小学校、中学校とも全学年の授  
     業研究に、本年から音楽、特殊  
     学級の担任者部会も同日に実施  
 11月29日 県外視察研修会  
     30日 町教育委員会と共に催  
     21名参加の予定  
     福島県二本松市立二本松

### 2月 日 教育講演会

講師 元

松平康隆氏の予定  
以上の本部事業と、下記の教科等研究部による、教材研究会、授業研究会、主任研修会及び各行事を開催しています。

国語部 書写部 社会部 算数・数学部  
理科部 音楽部 図工・美術部 家庭（小学校）部 技術・家庭部 小学校体育部  
中学校体育部 英語部 道徳部 特別活動部  
生徒指導部 同和教育部 視聴覚部  
心身障害児教育部 図書館部 進路指導部  
学校給食部 養護部 学校事務部 安全教育部  
栄養部 保健部  
理科・家庭科作品  
読書感想文コンクール  
小中学校音楽会  
硬筆展会 喜きぞめの展覧会  
図工・美術作品展

### 3 特色ある授業活動

#### (1) 一斉授業研究会

教科、領域ごとの授業研究は数多く行われており、積みあげた実績が大きな成果を収めていますが、ここでは同一の発達過程にある児童・生徒を担任する者が町内各校から集まって、公開授業を見て授業研究をし、同一学年が抱える課題の解明に当たりたいと、それぞれ指導者を招いて研究協議を行っております。

町内の学校数が小学校6校、中学校3校という小中共、学年の数と一致していたこともあって好都合でしたが、その後新設校が出来たり、音楽専科教員と、特殊学級担任教員の研究会を加え、本年度は下記のような実施です。

期日 11月20日（火）中学校  
22日（木）小学校

学年・部	会場	教科・領域	授業者	指導者
小1年	新町小	道徳	土屋 康子	大野 札子
2年	第二小	道徳	市川 浩	村田 泰一
3年	第一小	国語	浦田 弥生	伊藤 君子
4年	藤小	理科	大沢 幸弘	佐藤 安夫

5年	栄 小	体 育	閑 利男	渡辺 康久
6年	長久保小	学級指導	山口 栄子	神保 わか
中1年	藤 中	学級指導	石本 典秀	鶴葉 日出夫
2年	鶴ヶ島中	学級会活動	吉田 順	大島 稔
3年	富士見中	進路指導	吉沢 勝	平野 正夫
特殊学級	鶴ヶ島中	国語	渡辺 庄一	特殊教育課長
音楽専科	杉下小	音楽	市野塚 晶子	持田 保二

会場は理事会で決定し、各校において教科や授業者・指導者を選び当日は会場校の校長が実施の責任者となり、運営は会場校で行う

#### (2) 会報の発行

研究会の設立以来、年度ごとに研究活動の成果をまとめて発刊し、次年度への積み重ねの資料としています。

B5版 78ページ 370部

#### 内 容

- 1 教育長あいさつ
- 2 会長あいさつ
- 3 事業の報告
  - (1) 教科書研究部報告
  - (2) 本部事業報告
    - 本部事業実施概要
    - 一斉授業研究会報告
    - 県外視察研修会報告
- 4 役員一覧
- 5 研究部組織一覧
- 6 おわりに

#### 4 運営に当っての問題点

教育研究会の内容で、最も重要であり、活動しなければならない部門は教科等研究部だと考え、教材研究会と授業研究会をそれぞれ1回、主任研修会を3回程度と予算組みをし、計画時に事務局で開催日が重ならないように調整しているが、他の研究団体等の研修会と時期的に一致する傾向にあって、期日の調整が困難の現状です。

#### 5 昭和59年度の研究活動

##### (1) 研究委嘱

鶴ヶ島第二小学校 「道徳教育」

発表日は未定  
 新町小学校「豊かな心をもつ児童の育成」  
 ——国語科・図工科・道徳の教育活動を通じて—  
 1月25日発表予定  
 藤中学校 「道徳指導」  
 11月28日発表予定  
 (2) 教材研究会 実務研修会 28回  
 (3) 授業研究会 18回  
 (4) 主任研修会 78回  
 (5) 体育実技研修会 2会場  
 (6) 一斉授業研究会 12会場 全員参加  
 (7) 県外優良校視察研修会 1泊2日  
 1校2名

- (8) 教育講演会
- (9) 行事
- 硬筆展
- 理科・家庭科作品展
- 読書感想文コンクール
- 音楽会
- 書きぞめ展
- 図工・美術展

#### 6 今後の課題

現在10校326人の会員で組織しているが、来年度は小学校1校、中学校2校が、新設になるので、激動する本町の教育界独特の研究活動が来年度は加えられてよいのではないかと考えます。

## 越生班教育研究会

### 1 会のあゆみ

越生班は入間郡内では小規模の班である。そのため会員は一致協力のかけごえのもとによくまとまり運営されてきた。初めは越生班教育振興会という名称により発足（初代会長五十嵐金平校長）越生と毛呂で交互に事業がおこなわれたらしいが、その後越生班教育研究会となり、会員相互の研究充実と職能の向上をめざし、更に会員の親睦も兼ねて年々その事業も充実していった。時代の進展と社会情勢の変化にともない学校数も増加の昭和50年には光山小学校ができ、同54年には泉野小学校がふえて現在では小学校6校、中学校3校会員264名となっている。

### ◎昭和40年から20年間の会長と庶務幹事

年度	会長名	庶務幹事名	学校名
40	畠 仲 佳 甫	土 壇 吉 英	越 生 中
41	岩 沢 定 吉	浅 見 芳 太 郎	越 生 中
42	小 高 愛 治	吉 沢 源 一 郎	川 角 中
43	新 井 新 一 郎	浅 見 芳 太 郎	越 生 中

44	村 田 齐 正	畠 仲 鶴 雄	川 角 小
45	新 井 一 郎	齐 藤 幹 男	越 生 中
46	野々宮 高 成	紫 藤 啓 治	毛 呂 山 中
47	野々宮 高 成	紫 藤 啓 治	毛 呂 山 中
48	大 岡 幹 雄	吉 澤 源 一 郎	川 角 中
49	岩 上 利 二	大 澤 英 男	梅 園 小
50	村 野 守 雄	吉 田 敏 雄	毛 呂 山 中
51	守 谷 弘	山 岸 悅 二	越 生 小
52	平 井 鍾 夫	浅 野 実	越 生 中
53	岡 野 福 一	嶋 田 理 一 郎	川 角 小
54	青 柳 黙	浅 野 実	越 生 中
55	浅 見 芳 太 郎	嶋 田 理 一 郎	川 角 小
56	吉 田 英 男	相 庭 福 三	泉 野 小
57	浅 見 武 市	堀 田 重 雄	光 山 小
58	村 田 文 男	荒 井 茂 昌	越 生 中
59	小 澤 敦 介	山 崎 節 子	梅 園 小

### 2 主たる活動と事業

越生班教育研究会では、各部において研究

部名	活 動 と 事 業
国 語	○書く力を伸ばすには ·主任研修会 ·国語授業研究会

書 写	<ul style="list-style-type: none"> <li>○毛筆、硬筆の基礎的な指導法について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・毛筆実技研修会</li> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
社 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>○たのしくわかる教材開発           <ul style="list-style-type: none"> <li>・副読本の編集</li> <li>・現地研修会</li> </ul> </li> </ul>
算 数 数 学	<ul style="list-style-type: none"> <li>○よくわかる指導法の研究           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>・授業研究会</li> </ul> </li> </ul>
理 科	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体験を通して自然を探求する           <ul style="list-style-type: none"> <li>・埼玉県自然博物館見学</li> <li>・班、科学教育振興会</li> </ul> </li> </ul>
音 楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学級全員の喜びを高める音楽指導           <ul style="list-style-type: none"> <li>・班、小中学校音楽祭</li> <li>・実技研修会</li> </ul> </li> </ul>
図 工 美 術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○版画指導の効果的指導法について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・木版画の実技研修会</li> <li>・班小中学校美術展</li> </ul> </li> </ul>
体 育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○一人ひとりを見つめた体育授業をめざして           <ul style="list-style-type: none"> <li>・審判講習会</li> <li>・班体育大会</li> </ul> </li> </ul>
体 育 (中)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基礎技能を高める指導           <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会</li> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
家 庭 (小)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○5、6年教材「おやつの作り方」「ごはんとみそ汁」について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会</li> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
技 術 家 庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>○授業研究と教材教具の研究           <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会</li> <li>・主任研究会（教材の作成）</li> </ul> </li> </ul>
英 語 -	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基礎学力を身につけさせる指導研究           <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会</li> <li>・暗唱大会</li> </ul> </li> </ul>
道 德	<ul style="list-style-type: none"> <li>○実践力を高める指導           <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会</li> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
視聴覚	<ul style="list-style-type: none"> <li>○視聴覚機器のよりよい活用を求めて           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>・実技研修会（VTR）</li> </ul> </li> </ul>
図 書	<ul style="list-style-type: none"> <li>○公立図書館との連携を図り利用を高める工夫           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>・感想文集の作成</li> </ul> </li> </ul>
特 殊 教 育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○授業研究と教材教具の研究           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>・実地研修会</li> </ul> </li> </ul>
特 活	<ul style="list-style-type: none"> <li>○発達段階にみあった学級会活動のすすめ方           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>・授業研究会</li> </ul> </li> </ul>
生 徒 指 導	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域の実態に即した生徒指導           <ul style="list-style-type: none"> <li>（小中の連絡を密にする）</li> <li>・主任研修会</li> <li>・事例研修会</li> </ul> </li> </ul>
進 路 指 導	<ul style="list-style-type: none"> <li>○一人ひとりの能力に応じた指導           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>め合同説明会</li> </ul> </li> </ul>

保 健	<ul style="list-style-type: none"> <li>○保健室へ訪れる児童生徒の追跡調査           <ul style="list-style-type: none"> <li>・保健指導資料の作成</li> <li>・保健主事との合同研修会</li> </ul> </li> </ul>
保 健 主 事	<ul style="list-style-type: none"> <li>○保健主事の役割について（職務内容）           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
給 食	<ul style="list-style-type: none"> <li>○望ましい給食指導のあり方           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> <li>・給食感謝祭</li> </ul> </li> </ul>
同 和 教 育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人権意識を培うための指導法のあり方           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
学 校 行 事	<ul style="list-style-type: none"> <li>○修学旅行の運営について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・主任研修会</li> </ul> </li> </ul>
事 務	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校事務の能率化について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・実務研修会</li> <li>・主任研修会</li> <li>・年度末事務連絡会</li> </ul> </li> </ul>

主題を設定し活動をおこなっている。各部は研究主題にもとづき実践をしている。又、各部では活動を反省し、次年度の研究年間計画を立案している。前記の例は58年度の活動と事業である。

### 3 特色ある活動

年度	内 容	学校名
48	○県・班委団による技術家庭科の発表会	越生中
	○県立教育センターの委嘱による音楽の基礎的系統的指導法研究	川角中
	○郡・班委団による国語科研究発表会	梅園小
49	○郡・班委団による理科教育研究発表会	越生中
49	○郡・班委団による図工科研究発表会（絵画とつくること）	川角小
	○郡・班委団による算数教育研究発表会	毛呂小
	○文部省委嘱による道徳教育研究会の発表	毛呂中
50	○越生中学校生徒会「しらこばと賞」受賞	越生中
	○県・班委団による交通安全教育推進校の研究発表会	川角中
	○県・班委団による理科教育研究発表会	越生中

51	○県・班委団による交通安全教育推進校の研究発表会 ○郡・班委団による国語教育研究発表会 ○郡・班委団による図工教育研究発表会	施園小 毛呂小 川角小
52	○郡・班委団による学校図書館教育の読書指導と利用指導の発表 ○班委団による生徒指導研究発表	越生小 光山小
53	○郡・班委団によるスライド利用による授業研究発表会 ○ゆとりある授業の研究	越生小 川角小
54	○県・班委団による学校給食研究発表会 ○班・委団による生徒指導の研究 ○郡・班委団による社会科教育研究発表会	越生中 川角中 毛呂中
55	○県・郡・班委団による数学教育研究 ○県・班委団による体育授業研究発表会 ○読みを深める指導法の研究	川角中 光山小 川角小
56	○県・郡・班委団による数学教育研究発表会 ○国語科の表現力を高める指導	川角中 越生小
57	○班・町委団による算数指導の研究発表会 ○班・入間北部連教委団による国語教育研究発表会 ○班委団による中学進路指導の研究 ○県・委団によるテレビ利用授業研究会 ○系統性あふれる学級会活動研究	泉野小 毛呂小 川角中 越生小 川角小
58	○郡・北部連協・班委団による国語科のひ表現力を高める指導研究 ○北部連協・町委団による特別活動の研究	越生小 川角中

越生班教育研究会は各校各部を中心にして意欲的な活動がなされ、大きな成果を修めて

いる。

この10年間の活動は下記のようである

#### 4 運営に当っての問題点

##### (1)全員の研究に対する時間の確保の問題

授業時間の確保ということと、研究に要する時間も確保したいということだが、あくまでも学校では授業第一と考えなければならない。しかし研究者側にたつともう少し時間をとってほしいと思っているのではないかという意見もあり、そういう調整をどうするかが問題である。

##### (2)予算充当の問題

班研究会の予算は会費と補助金でまかなっている。ところが理事会、部長会等で予算配分の折にでる問題は、行事的な研究内容をもった部では、いつも予算ぶそくを訴えてくるということである。展覧会を行うとか科学展とか体育的行事を行うとか、研究の内容を行事とする面で予算的な不足があるのではないかろうか。

##### (3)研究のありかたについて

研究はあるが、学校教師がやることなので、是非授業を主体とした研究をやってほしい。いろいろ机上で書物などを集めて分析するなども必要と思うが、子どもを媒介とした研究態勢が更に進めばよいと思う

##### (4)班の主体性について

上からおりてきた下うけ的な研究ではなくて、足もとからの研究であり、その研究が校内だけでは視野が狭い。では班でまとまってやってみようということになり、それをどう調整するかが、班の主体性となるのではないか。最近の研究の傾向について一考を要する面があるように思う。

##### (5)部長のまわりもちについて

部長のまわりもちということも、大きい研究会なら問題はないが、越生班のような小さい班にとっては問題である。これは極端なようであるが、新任でも部長になるとという場合がある。部長になると入間地区、

更に上へとつながることも考えられる。そうした場合、出張も多くなることだし、問題も多くなる。

また毎年、予算の出し方の説明会はもっているが、それが毎年新しい部長になるとなかなか徹底しない。小規模な班や学校の苦しい立場とでも言う問題である。

## 5 昭和59年度の研究活動

### 各研究部研究主題

昭和 五 九 年 度	各 研 究 部 研 究 主 題	部名	主題名
国語	思考力を伸ばす読みの指導		
書写	毛筆・硬筆の基礎的な指導法について		
社会	資料の効果的な利用について		
算数・数学	一人一人を生かした評価方法の研究		
理科	体験を通して自然を探求しよう		
音楽	学級全員の喜びを高める音楽指導		
図工・美術	版画指導の効果的な指導法について		
体育(小)	一人一人を生かした体育授業		
体育(中)			
家庭(小)	基礎をおさえた生活に生かす指導の工夫		
技術家庭	教材・教具の研究・各領域に於ける教材の試作		
英語	基礎学力を身につけさせる指導法の研究		
道徳	道徳的実践力を高める指導(授業)		
視聴覚	視聴覚機器のよりよい活用を求めて		
図書館	読書感想文の書かせ方		
特殊教育	教材教具の研究と情報交換会		
特活	意欲的にとり組む学級会活動のすすめ方		
生徒指導	小中の相互理解に立った生徒指導の推進		
進路指導	子どもの能力と適性に応じた進路指導		
保健	保健統計と性教育の資料作り		
給食	児童の自主性を生かしての望ましい給食委員会活動のあり方		
同和教育	人権意識を培うための指導のあり方		
安全	大規模地震の発生に備えて		
学校行事	卒業式の企画・運営		
事務	事務の能率化をめざして		
保健主事	保健主事の職務内容について		

## 昭和59年度 事業計画

月日	事業内容	会場
	○本部	
5. 4	定期総会	
6	理事・部長協議会	
9	理事研修会	
10	小体育大会	
11	体育講演会	
2	理事・部長協議会	
	○国語	
5	入間地区学力テスト集計	
7	主任研修会	
10	" (指導者)	
11	授業研究会( " )	越 小
1	入間地区研究発表会	
3	主任研修会	
	○書写	
6	主任研修会(硬筆指導)	光 小
7	" (巡回展準備)	"
8	毛筆実技研修会	"
11	実技研修会(書き始め)	
1	主任研修会(書き始め)	光 小
2	" ( " )	"
	○社会	
年5回	主任研修会	
8	現地研修会	
	○算数・数学	
6	主任研修会	越 小
9	授業研究会	
1	"	
	○理科	
7	主任研修会	泉 小
8	現地研修会	"
9	主任研修会	"
10	班科学展	梅 小
11	授業研究会	

月日	事 楽 内 容	会 場	月日	事 楽 内 容	会 場
3	主任研修会 ○音 樂	泉 小	11	" (地区)	
6	実技研修会	川 小	2	主任研修会 ○技術・家庭	越 小
10	主任研修会	梅 小	8	主任研修会(教材作成)	川 中
11	"	福社会館	9	" (創意・工夫展)	"
11	班音楽祭 ○図工・美術	"	11	"	"
6	主任研修会	川 中	2	" ○英 語	"
7	実技研修会(木版画)		6	授業研究会	毛 中
10	授業研究会	川 小	9	主任研修会	越 小
1	班美術展	毛呂コミ	10	暗唱大会	毛 中
1	県展準備会 ○体 育(小)		2学期	授業研究会 ○道 德	越 中
5	主任研修会	毛 小	4	主任研修会	光 小
5	審判講習会(ポートボール)	"	10	"	"
5	ポートボール大会	"	11	授業研究会	
8	主任研修会	川 小	11	"	
8	実技研修会	"	3	主任研修会 ○視 聴 覚	光 小
8	主任研修会	毛 小	5	主任研修会	
9	ルール講習会(体育大会)	毛 小	8	" (校内放送)	
10	主任研修会	"	11	実技研修会(VTR)	
10	班体育大会	"	2	主任研修会 ○図 書 館	
12	主任研修会 ○体 育(中)	"	5	主任研修会(感想文)	泉 小
6	主任研修会	毛 中	7	" (" )	
6	授業研究会	"	10	主任研修会(審査)	
12	"	"	11	" (文集作成)	
3	主任研修会 ○家 庭(小)	"	2	" (反省とまとめ) ○特 殊 教 育	
4	主任研修会		5	主任研修会(教材製作)	光 小
5	主任研修会		7	見学会	
8	"		10	実地研修会(川越養護)	分 教 室
9	"		6	主任研修会(情報交換)	泉 小
9	地区創意工夫展		11	"	越 小
10	授業研究会				

月日	事業内容	会場
2	主任研修会 ○特 活	毛 中
6	主任研修会	毛 小
10	授業研修会	川 小
2	主任研修会 ○生徒指導	毛 小
6	主任研修会	
8	" (連絡会、パトロール)	
10	"	
11	事例研修会	
12	生徒指導パトロール	
2	" 連絡会	
3	主任研修会 ○進 路	
8	主任研修会	越 中
10	" (私高準備)	"
10	合同説明会	毛 福祉
11	主任研修会	越 中
1	" ○保健室	"
6	保健主事と合同研修会	光 小
8	主任研修会	川 小
11	主任研修会(性教育)	川 中
2	" (反省会) ○給 食	越 小
6	主任研修会(情報交換)	川 小
10	" (給食委員会活動)	"
1	" (給食週間行事) ○同 和 教 育	"
5	主任研修会(計画)	越 小
11	" (映画視聴)	
2	" (反省) ○安 全	
6	主任研修会	毛 中
11	主任研修会	毛 中

月日	事業内容	会場
2	" ○学校行事	"
6	主任研修会	越 小
11	"	
2	" (卒業式資料)	
3	" ○事 務	
6	主任研修会	梅 小
8	事務研修会	越 中
10	年末調整準備会	毛 小
12	実務研修会	毛 中
2	年度末事務連絡会 ○保健主事	泉 小
6	主任研修会	越 中
7	"	毛 小
1	" (反省)	越 中

## 6 今後の課題

- (1) 主題や研究課題が全員の努力によって研究されようとしているが、それを短期間で終結させようとする気持ちが多い。そのことから研究の内容や研究の成果に深まりがないという傾向にあるのではないだろうか。
- (2) 組織や部長の変動があっても課題は課題として残し継続研究をしていくようにしてほしい。それには経過やけんきゅうの方法をよく記録に残し明確に一つの冊子にまとめ公のものに残しておくようにしてはどうか。
- (3) 指導者選定の問題を今後どうしていくか。現在各部で自由に指導者をご依頼申し上げているのだが、その指導者のかたがたの考え方によって相当違う研究方途が出てくるよう思う。そのへんをどうするか。あらゆる角度から研究するのはよいが、公教育に寄与する研究でなければならない。価値観が沢山でできている世の中である。また年度末になってのかけこみ予算消化という感じの部もあり指導者選定については、充分検討しなければならない課題であろう。

# 大井町教育研究会

埼玉県県連合教育研究会が創立されて20周年と聞きその年輪の大きさと重さを感じながら記念誌への投稿できる喜びで一杯です。わが大井町は、国道254号線（旧川越街道）が中央に走る東京都に最も近接した宿場町として古くから繁栄した川越城下に属した町として名を馳せた町だといわれ、隣町三芳町には当時を忍ぶに相応しく郷土の歴史として有名な多福寺ならびに三富の開拓地として樹齢百有余年を誇る「けやき並木」も古老を物語る素材の一つとなっている。また、教育環境も古くから教育の地と呼ばれ「旭学校」の名は近隣数ヶ所に及ぼし、勉学を心ざす若者等が相集い教育の実践の地として現在まで古文書の中に記されている。

## 1 本会のあゆみ

大井町教育研究会の発足は、研究会規約第17条の規程によると、「本会は昭和44年7月22日より施行する」とあるが、それ以前は東部班、すなわち、現富士見市、上福岡市、大井町、三芳町の二市二町の小中学校の連合をもって教育研究会を組織していたものと思われる。尚、その後各市町に於いて新たな教育推進するための各市町単独規約が誕生した。しかしながら、昭和44年度の大井町の例をとれば、大井小学校及び鶴ヶ丘小学校と大井中学校三校であったため、教育研究会はあるもののその活動の大半は二市二町連合により教育研究の諸事業及び諸活動が行われて来ていた。

しかしながら東上線沿線の都市化開発に伴い各市町とも人口の社会急増地域となっており、大井町に於いても人口増と市街化に伴い昭和41年11月3日町制を施行した。その後昭和46年より48年にかけて急激に人口の社会増の現象により昭和49年度より昭和56年度にかけ小中学校合

わせて6校の新設校をみるに至り教育研究会の活動も昭和50年度あたりを境に各市町村単独活動に移行し合同事業もほとんどなく各市町の実態に即応した研究活動を行い本会も昭和59年度小学校6校、中学校3校、教員数(会員数)242名を数え、会員の資質向上のため、全体研修、各部活動(教科・領域指導)を推進し、自主研修の場として児童生徒の健全指導のために取り組み、大井町教育研究の中核とし充実しつつある現状である。

## 2 主たる活動と特色ある活動

前述の通り全体研修及び各部研究と二面に別けて活動をしている。

### (1) 全体研修(講演会)

ともすると教育研究会の活動は主任及びそれに従する者の研修活動機関となる恐れが大である。そのためには全体研修の場である講演会の充実はかかすことのできない活動の一つである。本教育研究会の過去数年を振り返ったとき、今日的課題である生徒指導に対する関心度が高く「特別活動のあり方」から「生徒指導の実際」に至る、児童、生徒の健全育成に関する主題が注目されており、特に昨年度(58年)に於ける講演会は過去とその内容を若干異なる特記すべき内容であったと思われる。

#### 演題「幌馬車隊による非行青少年教育」

講演者 東京新聞社 田中 実氏

アメリカに於ける非行青少年が幌馬車隊に入隊し、大陸を野宿しながら集団生活をしながら肉体的、精神的な訓練を過酷と思われる行動を通して更生していく若者の姿を、田中氏を含む東京新聞のスタッフが起居を共にし取材し、その更生過程をスライドによる映写をしながら、体験と現実描写をの話材は大変迫力もあり説得性

もあり、耐え得る力のない若者が起こす非行現象古今東西をとわず共通課程であったように思えた。生徒指導にかかる全体研修の内容のとり上げ方を、身近な問題の解決は急を要する教師の欠く可らざるものではあるが、58年度は視野を海外に求めたこともそれなりに評価できる内容であった。

(2) 町内小中学校合同音楽会

情操を陶冶することは体力向上と共にあらゆる機会を通して実施しなければならない。小中学校音楽会は本会の発足と歩みを共にした事業の一つである。当初は、各学校の体育館を持ち回りをし準備段階に於いても、また当日の演奏効果に於いても問題をかかえながらも、音楽会に出場するまでの過程を大切にし、指導者の適切な指導助言を次年度の糧としながら年を重ねると共に実力向上に寄与した実績は大である。幸にして数年前より町立公民館の大ホールの建設により会場の苦渋は一変し、より内容も充実した音楽会を開催するに至っている。

(3) 小学校ミニバスケット大会（小体連との共催事業）

6年生を対象に町内を二ブロックに別れ三校対抗により優勝を競い合う、時期は6月に定められているため1学期の大きな町内行事として各校の児童の意気込みは相当なものである。

(4) 小学校連合運動会（小体連との共催）

中学校の新人戦に匹敵する時期に開催する小学校連合運動会は6校対抗で10月中下旬に開催し、走・跳・躍動美を競い合う。尚最高記録は東部圏(富士見市・上福岡市・大井町・三芳町)で持ち寄り記録会とし二市二町の新記録の評定をしているのも体力の向上の基本姿勢として特筆できることである。

(5) 各部活動

主任協議会に於いて各教科・領域及び他の教育機能の研究協議を行い、それぞれの運営及び指導方法の改善するための促進をはかっている。

また、授業研究及び技能研修を実施し、指導

の充実及び指導技術の高揚を企画し、ほとんどの教科領域に於いて研究授業を各学校輪番制により実施をし、数多くの教職員の参加により教材研究や指導技術を互いに高め合っている。尚、近来相互研究も当然であるが、指導者を招き、なお深い研修にと発展して来ている。

(6) 研究集録の発行

みんなの教育研究会の主旨に基づき一年間の研究実践を集録し、3月中全会員に配布し研究の成果を周知する。

### 3 運営に当っての問題点

本研究会員は総数242名であり小学校6校中学校3校により構成しており、大変家族的である。全体集会に於いてもその数は極めて適性であり、また教科・領域に於ける分科会活動も大変に活動し易い人員規模である。それぞれ年間事業計画に基づき年々実績をあげつつあるが、次のような問題点もあり漸次改良しなければならない事項である。

(1) 教科・領域に於ける分科会研究も活発であるが、ともすると主任・副主任等を中心とする活動になり勝ちのため会員の関心度が少なく、研究会に所属する機会が極めて少ない。

(2) 全体研修を一つでも多く企画し全員が共通課題をもつ研修の場の設立が欲しいわけであるが、長期休業中を除くと各校の教育計画の中に割り込む時間的余地がない。

(3) 各研修会及び行事等が一時期に集中しやすく、同一日に数教科同時開催など学校運営上好ましくない状況になる場合があるので、同一日2教科を原則としているがその調整が大変困難である。

(4) 年間を通した会の運営の評価段階で、大多数の会員に充実感までとはいかなくても何か手ごたえのあった研究会である運営でありたい。

以上のように本研究会の運営に当っての問題点及び課題は前述の如く、理事会を中心とし、

1人1人の会員が研究課題を究明できる一員として充実した年間活動であるよう運営することであり、今までのマンネリ化から脱皮する手段を考えることにあると思う。

#### 4 昭和59年度の研究活動

##### (1) 全体的事業

○総会 5月28日

○体育実技研修会

各校毎に企画し、自校の体力向上推進に寄与できるよう計画実施する。

○教育講演会

内容は未定であるが、会員の意向を聴取の上明日の教育実践に直結できる講演内容で企画し、第2学期後半を実施予定している。

##### (2) 各部の事業

国語研究部をはじめ、学校事務研究部に至る24研究部が、それぞれの教科・教科外の独自性及び特質を生かし、年間事業計画を立案している。

教科に於いては、授業研究会を中心に指導内容の精選や指導方法の追及に主任協議会等で充実ある研究会にすべく企画している。また芸術・技能教科に於いては、発表会・展示会により水準高揚のため計画している。

##### (3) 会報の発行

運営上の問題点の解決の一方途として発行をし、各部活動の状況や実践状況を全会員に

周知するため3月中に発行予定であるが、内容については記述の事務量の問題や予算に系わる問題もからみ必ずしも満足できる会報として発行出来得ないのが現状のようである。

#### (4) 共催事業

○小学校6年生を対象とした二ブロック制によるミニバスケット大会（3校対抗）

○小学校5、6年生による大井町小学校連合運動会

○町内小中学校合同音楽会は共催事業より離れ、音楽研究部の行事として開催。

#### 5 今後の課題

わたしたち教職員から研修を切り放すことはできない。そして、わたしたちを取り巻く研修・研究の場はこれまた多様にわたっている。しかし、教員研究会こそ最も身近に存在する各地域に根ざした研究団体であり、地域及び各校の児童、生徒の現実の姿の中から学びとれる唯一のものであると思う。しかしながら、主体的に取り組み、現実の問題として受けとめそれを改善し児童、生徒の指導をより良い方向に試行することはあまりにも問題が大であり、問題が多様である。教育をとりまく情勢が目まぐるしく変化してはいないだろうか。その変化に伴い、変化と行動を共にし研究の歩みゆとりと充実を模索しながら教育研究の実践を立体的に受けとめながら主題追及することが現在各教育研究会のかかえている課題のような気がする。

## 三芳町教育研究会

### 1 会のあゆみ

東部圏教育研究会（富士見市・上福岡市・大井町・三芳町内各小・中学校）として教育研究団体活動をしていたが、市制施行・市町小・中学校数増加に伴い、各市町教育研究会が独立し設立された。

(1) 発足 昭和46年1月22日

(2) 役員

○初代会長 大河内豊（三芳中校長）

事務局長 小島善八（三芳小教諭）

（昭和46年度より48年度まで）

○第2代会長利根川宇平（三芳中校長）

事務局長 安見正之・吉川英治・川上和男・平岡正晴（三芳中教諭）  
 （昭和49年度より52年度まで）

○第3代会長富田信男（三芳東中校長）  
 事務局長 柳井 弘（三芳東中教諭）  
 （昭和53年度より54年度まで）

○第4代会長真仁田剛（三芳中校長）  
 事務局長 高橋芳藏・小林 明（三芳中教頭）  
 （昭和55年度より56年度まで）

○第5代会長小高一郎（藤久保小校長）  
 事務局長 奥村順一（藤久保小教頭）  
 （昭和57年度）

○第6代会長沢田敏雄（三芳小校長）  
 事務局長 野原敏郎（三芳小教頭）  
 （昭和58年度）

○第7代会長栗原利夫（三芳中校長）  
 事務局長 小林 明（三芳中教頭）  
 （昭和59年度）

### (3) 会員数

発 当初のものははっきりしない。

年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
会員数	110	129	142	161	175	189	198	212	217	219	225

## 2 主たる活動と事業

(1) 三芳町教育研究会は急激に会員が増加した。会員の中には他県出身者のものも多い。そのため郷土を知らない新しい会員、県外出身者も多く、本会ではこれ等会員のために毎年夏期休業中の一日を利用し、研修視察を行っている。目的地は県内に限定し、多数の参加を得るために日帰りとする。会員希望をアンケートしてその中から目的地を本部で決める。交通機関は町役場のマイクロバスを利用して、経費の節減を図っている。町教育委員会指導主事を招へいして、特に埼玉県の特色について指導を得る。他校の職員と親睦を図るため、ささやかな昼食会等を計画している。

(2) 会員全体の研修事業として教育講演会を行なう。経費として5万円を計上し、町内

の公民館を利用し、各校から「会員に是非聞いて貰いたい、聞くためになる講演会」をもちより、会としてその中から、演題、講師を選び、一学期の午後をあてている。各校が教育講演会に理解を示して、殆んど100%の会員の出席をみている。

### (3) 各部事業

教科として国語、書写、社会、算数数学、理科、音楽、図工美術、小体・中体、家庭技術家庭、英語の12部。教科外として道徳、特別活動、特殊教心、学校団体、給食、視聴覚、生徒指導、学校安全、同和、保健、学校運営、養護、学校事務、進路の14部がそれぞれの研修計画にもとづいて事業を行っている。主任研修会による理論的な研修。伝達講習、授業研究会、実技研修会、視察研修等それぞれの部の特色を生かした研修事業を行っている。

## 3 特色ある活動

### (1) 各学校部会の研修活動が活発であること。

ここ数年の各校の発表を記述すると

○昭和55年度 三芳小学校 安全教育  
 ○昭和55・56年度

三芳東中学校 生徒指導

○昭和56・57年度

三芳東中学校 視聴覚

○昭和57年度 上富小学校 体育

○昭和57・58年度

藤久保小学校 生徒指導

○昭和58年度 唐沢小学校 理科

○昭和58年度 三芳東中学校 特別活動

各校の研究発表会には三芳町内学校は積極的に参加し、研究の過程のや成果をわけあっている。

### (2) 各部の活動の情報交換につとめる。

各教科等研究部の活動は積極的に研究を進めている。その研究の過程なり、成果なりが各部だけの研究活動になりがちであった。研究の共同化の観点から反省にあたって、各部の活動をお互いに交換しあおうという

機運が盛りあがり、本年度から総会時に、各部の情報を交換しあうことになった。

(3) 町教委指導主事が積極的に援助してくれること。

#### 4 運営にあたっての問題点

現在三芳町内に小学校5校・中学校3校がある。発足当時小学校2校、中学校1校あった。会員数も現在は200名を越えている。学校が増えると同じ研究会会員でありながら他校の先生の名前と顔が一致しない。すなわち他の会員を知らないという現象が現われてしまつた。

#### 5 昭和59年度の研究活動

##### 本部行事

###### (1) 研修視察

日 時 昭和59年8月30日（木）

目的地 羽生市三田ヶ谷宝蔵寺751-1

埼玉県立さいたま水族館  
羽生市 円照寺（田舎教師史跡）  
川越市 蔵造り資料館

###### (2) 教育講演会

日 時 昭和59年10月22日（月）

会 場 藤久保公民館ホール

演 題 生徒指導の今日的課題

——低年齢化する性非行——

講 師 田能村祐麒氏（元新宿区立西戸山中学校長・日本性教育教会理事）

###### (3) 教科研究部

授業研究会

国語、英語、道徳、同和教育

実技研修会

書写、音楽、視聴覚、中学校体育

## 東松山市教育研究会

### 1 はじめに

東松山市は、埼玉県のほぼ中央に位置し、昭和29年7月1日市制が施行され今年はその30周年を迎記念すべき年にあたっています。比企丘陵の縁に囲まれ、その美しい自然を守りながら、近年首都50km圏内に位置しているため、住宅や中小企業の進出が目立ち小都市としてますます発展を続けています。

面積66,096m<sup>2</sup>、人口およそ67,500人世帯数19,400を数えています。毎年11月には、本市において歩け歩け国際大会、日本スリーデーマーチが開催され、市内小中学校の教職員及び全児童生徒も参加し、ウォーキングを通して健康とふれあいの輪を広げています。こうした環境の中にあって、現在、小学校11校、中学校4校

計15校に勤務する教職員をもって組織される当教育研究会は30年の伝統を有し、和と創

意に満ちて児童生徒の幸せと教職員ひとりひとりの成長を願って努力を重ね今日にいたっています。

以下、本市教育委員会の組織運営の概要について紹介したいと思います。

### 2 組織・運営の概要

#### (1) 目的

本会は、東松山市教育研究会と称し、教育の振興と会員の資質向上発展を図ることを目的として組織されています。

#### (2) 役員及び組織

本会の役員は、会長1名、副会長1名、理事若干名、監事2名、幹事若干名よりなり、昭和38年までは会員の互選により、主として中心校にあたる校長が会長に就任し、会の掌理運営にあたっていましたが、民主化、合理化の思潮によって、昭和39年度会則の大幅な改正がおこなわれ、会長、副会長、監事は、

各校より推せんされた候補者の中から会員全員の投票によって選出されるようになりました。理事は、各校の校長と各研究部の部長及び各校教職員代表1名で構成されています。また、役員選出のため各校1名からなる選舉管理委員が選出されています。現在、市内15校の教職員447名の会員を擁し、27の研究部を設けています。

#### (3) 事業

本会は、その目的を達成するため

- 学校教育に関する研究及び調査
- 社会教育・青少年文化活動等に関する事
- 講演会・講習会・研究会・研究視察等
- その他

等々を行っています。具体的には別紙の通りですが、基本的には各研究部ごとに、主催行事2、共催行事2を目途に行事計画を立案しています。なお、研究会主催行事については特定の曜日に行事が集中しないよう、あらかじめ研究部と連絡をとりながら事務局で調整をとるようにし、その運営にあたっています。

#### (4) 会費

昭和47年度までは、本市の研究会は市からの交付金（教職員1人当たり2320円）〔59年度〕のみによって運営されていましたが、諸般の事情によって、昭和58年度から会員一人当たり年額500円と市からの交付金をもって会の運営にあたるようになりました。このことによって、各研究部費や、展覧会、音楽会、研修会、講演会等に対する助成が多少増額されるようになり、従前と比較し活動の充実が期待されています。

#### (5) 研究部組織と主な事業

研究部	主たる事業
学校運営 (校長)	学校運営研究 学校運営協議会 厚生文教委員・教育委員との教育懇談会
学校運営	学校運営研究

(教頭)	教頭研究協議会 都市教頭研究発表会
教務	教務主任研修会 研修視察
庶務	庶務部全員研修会 庶務主任研修会 郡市学校事務研究大会
国語	文集「まつやま」発行 主任研修会 研修視察
書写	主任研修会 硬筆展 実技・授業研究会 書初展
社会	授業研究会 研修視察
算数・数学	授業研究会 研究視察 指導法研修会
理科	授業研究会 児童生徒理科研究発表会 児童生徒科学展
音楽	主任研修会・音楽会 実技研修会・授業研究会
園工・美術	主任研修会・実技研修会 各種美術展参加・授業研究会
体育	授業研究会・研修視察 水泳・体育実技講習会
保健	主任研修会・講習会
技術・家庭	主任研修会・実技研修会 授業研究会・発明創意工夫展
家庭	主任研修会・授業研究会等
外国語	授業研究会・弁論暗唱大会 比企地区英語テスト・研究発表
教育心理	主任研修会・事例研究発表会 諸検査研修会
特殊教育	授業研究会・宿泊訓練 主任研修会
視聴覚	主任研修会・放送教育研究会参加
道徳	主任研修会 郡市道徳授業研究会
特活	主任研修会・授業研究会 研修視察
学校給食	主任研修会・給食標語作成
進路	進路指導研修会・市内研究会
同和教育	主任研修会 市内同和教育研修会
安全教育	主任研修会

	交通法規講習会
生徒指導	中学校区別研修会 事例研修会
保健主事	研修会 郡・県・関プロ研究集会参加
本部事業	各教科等主任会並びに部長会 理事研究協議会 全員研究協議会（総会） 教育講習会 監査会

#### (6) 会議

会議は、総会・理事会・主任会とからなり  
総会は会員の1/2以上の出席をもって成立し、  
議決は出席者の過半数を必要とします。理事会は、正副会長及び理事で構成され、予算決算・年間計画その他必要事項について審議されます。主任会は、各校の主任をもって構成し、研究部事業の運営について協議したり、実際の研修活動も行われています。さらに、年度初め、役員の改選時には、選挙管理委員会が開催され、役員選出の管理運営にあたっています。

#### 3 本会の特色

本会では、夏季休業中の出張研修に限り、  
○目的が旅行的色彩の強いもの  
○個人の資格取得に関するもの

#### ○学校旅費で支給できるもの

を除き、自主的に各種研修に参加した会員に研修参加補助金を支出しています。これは、長期休業中を利用して、資質向上のため自主的自発的に研修に参加したものに対する助成で、予算の問題で経費の金額を支給することはできませんが、意欲的研修参加への一助となっていると思います。

また、各研究部について、3年ごとに8～9研究部ずつ、研修視察を実施し見識を高めるようにつとめています。さらに、年1回会員全員参加による講演会や交通法規講習会を実施し、教養を深めたり意識の高揚を図るための努力をしています。

#### 4 おわりに

各地区の教育研究団体が、地域を愛し、地域に根ざした教育活動を開催し、その伝統を築き上げて参りました。しかしながら、反面時代に即応し、教育研究会が名実ともに教育を高める組織として進展するためには、事業内容や活動内容について絶えず評価反省し、改善への志向が大切であると思います。そのため、今後とも埼玉県連合教育研究会のご指導ご支援をお願い申し上げ、本会活動の概要紹介を終わりといたします。

## 比企郡小川町教育研究会

#### はじめに

小川町は、東京から60km圏にあって、埼玉県の中央部を占める比企郡の西部に位置し、南は玉川村・都幾川村、西は秩父郡東秩父村・大里郡寄居町、北は寄居町の一部、東は嵐山町に接しています。東西に約11km、南北は約10kmで面積は、およそ60㎢です。

町の中心部をなす市街地一帯は、いわゆる小川盆地で西南方には笠山(842m)、堂平山

(876m)を頂点とする標高約500～600mの山々がそびえ、その尾根は盆地東南隅の仙元山に続いています。また北方には、富士山、金勝山を中心とする200m級の丘陵が連なり、八幡台、新屋敷、能増、中爪等の比較的低い丘陵と合わせると、小川盆地の縁のふちどりのようになっています。日あたりがよく、水に恵まれたこの地は、昔から住みやすいところだったと言われています。

明治22年町村制施行により、小川町、大河村、八和田村、竹沢村が生まれ、昭和30年2月11日町村合併促進法により4ヶ町村合併して現在に至っています。昭和20年の町発足当時25,333人だった人口は、現在世帯数7,632、人口28,874人と漸増傾向がつづいています。首都近郊の住宅都市、緑地都市として、将来大幅な人口増が予想されます。

そして、自然の美しさと由緒ある歴史を残している小川町には、現在小学校5校、中学校2校が設置され、そこに在勤する教職員で、小川町研究会が組織されています。

## 1 会のあゆみと主たる活動

本会の発足について、確かな年月日が詳らかではないが、この会の前身に昭和25年頃から、各校の代表として校長を理事とした小川部会教育研究会があり、活動していましたが、校長が理事であることによる問題があるとして、校長は理事から身をひくという一時期がありました。しかし、会長には校長が存続して、活動は主任会が中心となって行われていたようです。

その後、この会の規約が新たに昭和34年4月21日に制定されて、小川町教育研究会がスタートしたとみられます。小川町立小・中学校在勤の教職員で組織された本会は、小・中学校教育の進展を図ることを目的としています。

会長については、会員全体の選挙によって決定し、任期は一年（但し、重任を妨げない）であるが、歴代小川小学校長に決定するケースが多くなったようです。最近では、東中の校長が就任することもあり、当初からみるとやや流動的であるようです。

主たる活動と事業については、教育に関する研究会、講演会、講習会、体育会、音楽会等を本部又は各研究部門で開催しています。又教育に関する諸調査、教育に関する研究の委嘱に対する助成や教育に関する各種団体との連絡提携がなされています。

本部の事業の中には、毎年2学期に学識経験

者を招聘して講演会を開催していますが、今日的課題をテーマにした講演であるので好評を博しています。又、3学期には教育研究発表会を実施しています。これは各小・中学校から代表者が出て、校内研修のまとめや個人研究の成果を発表して、指導者から講評をいただき、個々の研究意欲の高まりや研修活動の活発化が図られています。当初は、この事業を通して比企都市の優秀な研究発表者の代表を招いて、本会員全体にその研究成果を聞く機会をつくりました。それから教職員体育実技研修会の企画と運営は体育部と共催しています。これは教職員の実技の向上と各学校間の親睦が図られ、その意義は認められています。

また、専門部別の事業の主たるものには次のようなものがあります。

- 教科・領域別の授業研究会を開催して質の向上を図っています。
- 各専門部の独自事業（講演会・研究会・体育大会等）及び主任研修会を開催しています。
- 比企地区で開催される各教科・領域別の研究会や講演会へ積極的な参加と協力をしています。

例えば

- |        |                                      |
|--------|--------------------------------------|
| ・国語    | 「むぎ笛」編集委員会<br>比企地区作文研究会              |
| ・書写    | 比企地区硬筆展並びに書初展                        |
| ・英語    | 比企地区英語弁論大会<br>中高英語教育研究会<br>英語教員研究発表会 |
| ・道徳    | 比企都市講演会                              |
| ・特殊教育  | 比企都市講演会                              |
| ・技術家庭  | 比企地区発明創意工夫展                          |
| ・学校図書館 | 都市読書感想文発表会                           |
| ・進路指導  | 比企地区進路指導研究協議会                        |
| ・安全    | 都市講演会                                |

本会での特色ある活動の中の1つに、27専門部が隔年ごとに管外視察が実施できることです。これは、それぞれの研究先進校等を視察して意

識の高揚を図り、今後の研究推進のあり方を考えるよい機会にしています。次に、小川町を愛し郷土をみつめる機会として町の行事である七夕祭の七夕俳句会や七夕美術展に出品参加して効果をあげています。そして、会計専門部では事務の能率化をめざして、研究収録を発行して大いに活用されています。又特殊教育部では、特別予算を計上して文集「やまびこ」の発行がつづけられています。

## 2. 59年度の研究活動

今年度も例年と大幅な変りなく、次のような事業計画に基いて、時期を考慮して実施されています。

- 本部 ・講演会 ・教員研究発表会 ・教職員体育実技研修会
- （専門部）
- 国語 ・「むぎ笛」編集委員会 ・七夕俳句審査会 ・地区作文研究会 ・授業研究会 ・管外視察
- 書写 ・地区硬筆展及び書初展 ・管外視察
- 社会 ・主任研修会 ・臨地研修会 ・授業研究会
- 算数数学 ・主任研修会 ・授業研究会
- 理科 ・主任研修会 ・小川班児童生徒研究発表会
- 音楽 ・音楽会（歌唱・器楽） ・授業研究会
- 図工美術 ・主任研修会 ・七夕展作品審査会 ・実技研修会 ・授業研究会 ・管外視察
- 体育 ・体育実技研修会 ・班水泳記録会 ・班小学校体育祭 ・体力向上推進校（八和田小）への協力 ・管外視察
- 英語 ・主任研修会 ・地区英語問題作成 ・地区英語弁論暗誦大会 ・地区中高英語教育研究会 ・地区英語教員研究発表会 ・授業研究会

- 道德 ・主任研修会 ・講演会 ・授業研究会 ・比企入間研究協議会 ・管外視察
- 特活 ・主任研修会 ・管外視察
- 会計 ・事務機器研修会 ・会計事務担当研修会 ・研究資料作成
- 特殊教育 ・主任研修会 ・講演会 ・文集「やまびこ」編集
- 教育心理 ・主任研修会 ・各種技能研修会 ・教育心理事例研究発表会
- 保健主事 ・保健主事研修会 ・講習会 ・管外視察
- 視聴覚 ・16ミリ映写技術講習会 ・放送利用授業研究会 ・VTR技術講習会
- 技術家庭 ・主任研修会 ・地区発明創意（中学）工夫展 ・授業研究会
- 家庭 ・主任研修会 ・地区発明創意（小学）工夫展
- 学校図書館 ・班読書感想文コンクール審査 ・地区読書感想文発表会 ・管外視察
- 学校行事 ・学校行事実施上の問題点について研究
- 給食 ・献立検討 ・衛生講習会伝達 ・給食週間行事の検討 ・主任研修会
- 進路指導 ・主任研修会 ・地区進路指導研究協議会 ・中高連絡会
- 養護 ・養教研修会 ・管外視察
- 教務 ・主任研修会 ・管外視察
- 同和教育 ・主任研修会 ・実践報告会 ・管外視察
- 安全 ・主任研修会 ・子ども自転車大会 ・講演会 ・管外視察
- 生徒指導 ・小川町行事及び年末年始・卒業期の補導活動

## 3. 問題点と今後の課題

会の発足以来着実な歩みがつづけられています

す。しかし、規約の改正は、ほとんどなく、活動の内容も大幅に変ることなく、マンネリ化のきざしがみられる部分もあります。

例えば

- 理事の選挙について
- 予算について
- 専門部独自事業のみなおしについて
- 教員研究発表会の運営方法について
- 教職員体育実技研修会のあり方について

問題点の1つで、本年度特にとりあげられた教職員の体育実技研修会について述べてみます

この研修会開催の意義については認めながらも平日の午後実施することについて問題が投げかけられ、各学校から存続、廃止と両方の考えが出された中で、再度検討し理事会で決定する方向がうち出されました。経過についていろいろありました。実施する意義を確認して存続することになりました。問題点を解消するために、2会場を使い時間の短縮をはかり、開始

は午後2時30分として授業への支障がないように配慮しました。今まで一堂に会して実施した盛りあがりや各学校の対抗意識が消え若い教職員には、やや物たりなさを感じさせる面もでたようですが、所期の目的に達することができました。

今後の課題として、問題点を真剣にとりあげ発展的な解決策をみいだすを講じることが大切なことがあります。それには、これから時代の要請に応える運営をすることで、活動に係る予算、時間、内容ともに特色ある方向性をうちだすことが、課題と思われます。

#### おわりに

埼玉県連合教育研究会の御指導をいただきながら、本会もよりよく発展するよう努力して参りたいと思っています。そして本会をつつむ小川町のよき環境の中で児童生徒が大きく飛躍することを期待するものです。

## 菅谷班教育研究会

### 1 本会のあゆみ

埼玉県のはば中央部にある比企郡の、更に中心に位置する当菅谷班の教育研究会が、「菅谷部会教育研究会」の名の下に呱々の声をあげたのは、まだ戦後の混乱期のさなかの昭和24年のことである。

記録によると、その年の6月25日の菅谷小学校における発会式をもって、当研究会は誕生した。当時の学校数は小学校が菅谷小、鎌形小、七郷小、宮前小、福田小の五校、中学校は菅谷中、七郷中、宮前中、福田中の四校、合計九校で会員数は市132人であった。その後、町村合併、町制施行等の行政上の変動とともに学校の統廃合もいくつかあったが、以来35年、当研究会は地味ではあるが着実な

歩みを続けて現在に至っている。

### 2 主な活動と事業

- 昭和32年6月 県委嘱保健体育研究発表会  
(菅谷小学校)
- 昭和34年11月 県指定体育研究発表会  
(菅谷小学校)
- 昭和37年2月 県指定理科研究発表会  
(菅谷小学校)
- 昭和38年10月 県指定視聴覚教育研究発表会  
(七郷中学校)
- 昭和42年12月 安全教育研究発表会  
(滑川中学校)
- 昭和47年6月 文部省委嘱交通安全教育研究発表会  
(滑川中学校)

昭和49年4月 県指定生徒指導研究発表会  
(菅谷中学校)  
昭和50年11月 県指定給食研究発表会  
(菅谷小学校)  
昭和53年6月 県指定体育授業研究会  
(菅谷小学校)  
昭和53年11月 文部省指定道徳教育研究発表会(宮前小、福田小、滑川中)  
昭和54年11月 文部省、県指定同和教育研究発表会(七郷小、七郷中)  
以上はいずれも当研究会が共催の形で協力し仕事を推進したものである。

### 3 主な活動

当教育研究会は次のような行事を定例化して行なっている。

#### (1) 班指定研究発表会

年度ごとに1校を指定し、研究発表を行う。

#### (2) 体育実技研修会(1学期)

会員全員による球技等の実技の研修。

#### (3) 音楽会(2学期)

班内各校児童生徒による演奏会

#### (4) 同和教育全体研修会(2学期)

講師を招いての会員全員による研修会

#### (5) 理科研究発表会(3学期)

各校代表児童生徒による理科研究の発表会。

### 4 運営上の問題

当研究会は現在、学校数が9校、会員数188人、規模としては県下でも恐らくもっとも小さい部類に入ると思う。

決して活発な活動がなされているとはいえない状態であるが、運営上の問題点として、行事がややマンネリ化しつつある。活動費が十分でない。学校間(特に小学校中学校間)の連携が不十分。会員の研修意欲が不足がち。等があげられると思う。

いずれも解決するためにはさまざまの道が

存在するものばかりだが、会員相互の協力によって解決していきたい。

### 5 昭和59年の研究活動

去る4月26日の総会で、前年度の反省の上に立って、より実践的な活動をめざして本年の事業を進めていくことが確認され、各部の具体的な事業計画も承認された。全体的な活動計画としては、体育実技研修会(6月に実施)、同和教育全体研修会、班指定研究発表会、理科発表会等が予定されている。

### 6 今後の課題

研究や研修は、教師が自らの足らざるを自覚し、子供のため、又自分のために教師としての資質と技能の向上をめざして行うべきものである。

教育研究会ではそうした教師個々に課せられた課題を解決するための一つの補助的機関と考えた場合、当教育研究会の今後の課題としては次のようなものがあげられる。

- (1) 活動をより活発化する。
- (2) 教師自身の研究発表の場を設定する。
- (3) 授業研究を主体とした活動をより多く取り入れる。
- (4) より身近な、より実態に即した活動を取り入れる。

以上

# 玉川班教育研究会

## 1 会のあゆみ

会則には、「本会則は昭和39年5月7日より施行する」という条文があり、これより推察すれば、玉川班教育研究会は発足以来、本年度で満20年が経過したことになる。

しかし、詳細な記録がないので定かなことはわからないが、昭和31年度以来の会計帳簿によると、大門村・平村・明覚村・玉川村・亀井村・今宿村の6か村11校によって、玉川班教育研究会が組織され、負担金を徴収していたことが記録されている。

昭和31年度の「班教研理事会・」「班内教職員・」等の支出項目や、下って昭和37年度の部分に添付された「昭和37年度玉川班教育研究会負担金一覧表」等によても、当時から組織されていたことは明確である。

さらに、ずっと以前から大門村を除く5か村による組織があり、一体となって活動を進めて来ている証言もあるので、班教育研究会の発祥は大正時代にまでさかのぼることができそうである。

従って39年の条文は、会則が確定され、それに基づいて研究会が運営されるようになったと受けとめることが正しいと考える。

昭和39年当時は、都幾川村・玉川村・鳩山村3か村の小中学校教員を会員として組織されている。学校は、大門第一・大門第二・平・明覚・玉川・亀井・今宿の7小学校と、大門・平・明覚・玉川・鳩山の5中学校の計12校であった。

その後、中学校の統合や小学校の新設等により、現在では大門第一・大門第二・平・明覚・玉川・亀井・今宿・鳩丘・松栄の小学校9校および、都幾川・玉川・鳩山の中学校3校の計12校となり、会員数も212名となって

いる。

予算面を見ると、昭和31年当時は各校よりの負担金を主として約4万円であったが、昭和49年には約7万円、昭和42年には負担金の他に会費も徴収するようになり、17万円程が予算化されている。

その後、各事業の活発化に伴い予算の見直しが行われ、昭和52年度には負担金等の倍増が決定され、一挙に予算は47万円余となつた。現在では、児童・職員の増加による負担金等の漸増により、約82万円で運営されることになっている。

歴代会長については記録が残されていないため、不明の年度があるが、以下は、判明している会長名とその在任校である。

(年度)	(会長名)	(在任校)
昭 38	松本 包助	亀井 小学校
〃 39	小鷹 薫	鳩山 中学校
〃 40	"	"
〃 41	島田 右三	明覚 小学校
〃 42	"	"
〃 43	高山 次良	明覚 中学校
〃 44	"	"
〃 45	"	明覚 小学校
〃 46	"	"
〃 47		
〃 48		
〃 49	清水 一男	今宿 小学校
〃 50	簗藤 光慶	都幾川中学校
〃 51	島田 辰一	大門第一小学校
〃 52	石原 実	亀井 "
〃 53	上 正雄	鳩丘 "
〃 54	小高盛之助	大門第一 "
〃 55	小峰 清	松栄 小学校

〃	56	〃	〃
〃	57	〃	〃
〃	58	大野 養平	都幾川中学校
〃	59	萩原 和郎	明覚 小学校

## 2 主たる活動と事業

### (1) 昭和38年以前

伝統のあるものは班体育祭である。この歴史はたいへん古く、10年以上前に退職された元会長が、「小学生の時、玉川小学校の運動場で走ったことがある。」と話されたことから考えて、大正時代の後期にはすでに開催されていたと思われる。その他、戦前では各校持回りによる朗説会、戦後になつては学芸発表会・音楽会なども実施されてきた。また、教職員の球技大会も計画され、ソフトボール・バレー・卓球・テニスなど技能の向上と親睦の意味を兼ね、長年にわたって続けられて来た。そしてこれらの行事の中には、現在でも実施されているものがある。

### (2) 昭和39年以後

本会の目的は、教育の新興と会員の資質の向上につとめ、あわせて相互の親睦をはかることにある。東西に細長い3町村の組織体であり、班内全校の交流が中々取りにくく現状なので、本会の活動はその役割を果たす上で誠に意義深いものがある。

全体としては各研究部（26部）を中心とした活動が主で、各部の部長が中核となり、目的達成に向つて大きな成果をあげてきてゐる。

会全体での活動も、研究会・講演会・研究助成・各種展覧会・体育大会・音楽会等が計画実施されているが、これもそれぞれの研究部によって運営されるものが多い。各部の研修活動は、授業研究が中心である。それぞれ年数回の主任会や研究会を持ち、相互の意見交換や実践事例の話し合い等により、親睦を深めつつ互いの資質の向上を

図っている。

会全体での研究会については、本会独自で委嘱するという形はとらず、国・県・郡などより研究指定を受けた学校へ、協力・後援する形で運営されている。

研究助成は、会員の中で教育上意義のある研究をしている個人またはグループに対し、金額は些少であるが、毎年研究助成費をおくる制度である。研究期間は1年を原則とし、応募者の研究成果は各校へ配布している。

体育大会は伝統のあるものであり、一般的の関心も高い。かつては小中学校合同で実施され、優勝旗の争奪を競つたが、その後中学校のみの各種大会が開催されるようになつたため、今日では小学校だけで実施している。また、従来の内容も改め、陸上競技会として各種目の記録の向上を目指すこととした。

音楽会も古くから行われているものである。最初の頃はコンクール形式をとっていたが、現在では各校1チーム（学級単位）以上が参加し、互いに鑑賞しあっている。これは小中学校合同で実施している。

### 3 運営に当つての問題点

本会を組織する各学校は、過疎地にある小規模校から、団地の造成に伴い児童生徒数の急増している大規模校に至るまで、規模の格差は激しい。

小規模校では職員数が少ないため、主任をいくつもかけ持つことになり、すべての主任会への参加は、補欠授業の関係から不可能である。反面、大規模校ではなかなか主任になれず、研修会への参加の少ない教員も出てくる。この不均衡は種々の面で問題である。

規模の格差は、研究会の役員選出についても配慮が必要となってくる。小規模校では事務職員もおらず、職員定数にもゆとりがない従つて、事務局の組織づくりが大きな負担であり、どうしても中規模以上の学校に依存せ

ざるを得ない。

また、児童数の格差は各種の大会でも問題となる。体育大会では、同一学年でで1チームできず下位学年から人類を補充する学校と、多人数の中から選抜されてできたチームの学校とが競うわけである。当然記録の上でも差が生じてくる。

音楽会も同様である。大勢の児童生徒がいる学級を持つ学校は別として、全校をあげて取り組まなければならない学校では、練習時間の確保や曲の選定等にむずかしさがあり、さまざまな面で配慮する必要がある。

さらに、これらの大会を実施する会場にも苦労がある。体育大会や音楽会等に利用できる十分な広さを持つ施設を有する学校は、数が少ない。また、できれば中心的な位置にあることが望ましいが、それも困難である。従って、体育大会については中心部にある公共施設を借用し、音楽会については東西の地区で交流して2校の体育館をあてているのが実情である。

次に、主任会についてはなるべく授業に影響を及ぼさないという配慮から、夏期は午後3時、冬期は午後2時30分から開催することを原則としている。しかし、玉川班は東西に長い地域から成り立っているため、会場によっては、どうしても授業を自習にして参加せざるを得ない学校もある。

また、班の主任会のみならず、都市連合教育研究会でもかなりの研修会が計画されているため、両者では相当な回数となり、学校運営上問題となる面もある。

#### 4 昭和59年度の研究活動

5月11日に都幾川中学校において総会が開催され、新役員のもと、承認された予算・事業計画に基づいてそれぞれの活動が進められることになった。その内容は、前述の目的達成のため、

##### (1) 教育に関する調査研究

- (2) 研究会・講演会・研究発表会・展覧会・体育会・音楽会等の開催
- (3) 会員の学術文化に関する研究助成
- (4) レクリエーションの開催
- (5) その他本会の目的達成のために必要な事業

などがあげられている。

次は、各研究部ごとの計画の概要である。

- ① 国語主任研修会及び研究事業（3回）
- ② 社会主任研修会（2回）  
臨地研修会（2回）
- ③ 算数数学主任研修会及び研究事業等（8回）
- ④ 理科主任研修会（5回）  
科学展参加  
児童生徒理科研究発表会
- ⑤ 音楽主任研修会（4回）  
音楽祭
- ⑥ 図工美術主任研修会（4回）  
美術展参加
- ⑦ 保育主任研修会（4回）  
ミニバスケットボール大会  
陸上競技会
- ⑧ 技術家庭主任研修会及び授業研究会等（4回）
- ⑨ 家庭主任研修会・実技研修会等（4回）  
発明創意工夫展参加
- ⑩ 英語主任研修会・授業研究会（4回）
- ⑪ 教務主任研修会（4回）
- ⑫ 道徳主任研修会・授業研究会（3回）  
都市道徳教育研究会参加
- ⑬ 特活主任研修会（3回）
- ⑭ 視聴覚主任研修会・実技研修会（3回）
- ⑮ 進路主任研修会（2回）  
情報交換会（2回）

- |        |                                 |
|--------|---------------------------------|
| ⑯ 書 写  | 主任研修会（3回）<br>硬筆展・書初展参加          |
| ⑰ 学校事務 | 主任研修会（4回）                       |
| ⑯ 図 書  | 主任研修会（3回）                       |
| ⑯ 保健主事 | 主任研修会（3回）                       |
| ㉑ 犬 護  | 主任研修会（6回）                       |
| ㉒ 教育心理 | 主任研修会・事例研究発表会等（3回）              |
| ㉓ 特殊教育 | 授業研究会及び情報交換会<br>児童生徒作品展<br>施設見学 |
| ㉔ 学校給食 | 主任研修会（3回）                       |
| ㉕ 同和教育 | 主任研修会及び授業研究会等（6回）<br>人権作文集の作成   |
| ㉖ 安全教育 | 主任研修会（3回）                       |
| ㉗ 生徒指導 | 主任研修会（3回）                       |

なお、このほか会全体の行事として、教育講演会、放送利用研究校への協力・後援・教職員実技研修会・会員の研究に対する助成等も計画されている。

## 5 今後の課題

先きにも記したように、本研究会は比企郡市連合教育研究会に所属しているため、両者の研修会は合わせるとかなりの数にのぼる。

本会の主任研修会は、郡市連合教育研究会が原則として出している「開催は年3回以内に」の線ではまかない切れない面もある。しかし、今後は開催の回数に基準を設けることや、班と都市あるいは他団体との関連をどう調整していくか等がひとつの課題であろう。

また、授業時数の確保という面と、会員の資質の向上とをどう調整していくかも、上記とのつながりにおいて、今後研究すべき点であろう。

経費については、昭和52年度に各教育委員会の格別な配慮をいただき、負担金が倍増されたのでだいぶゆとりが出てきた。

しかし、各種事業の拡大による費用の増額もあり、また、負担金については厳しい情勢にあるので、今後の支出については相当な配慮が必要と思われる。

# 比企郡川島班教育研究会

## 1 はじめに

川島町の変遷をみると昭和29年11月町村合併により中山・伊草・三保谷・出丸・八ツ保・小見野の6ヶ村が併合して川島村となり、その後昭和47年11月町政が施行され今日に至っている。したがってこの地区的教育研究会もこれに伴つていくつかの変遷を経て現在の形になったわけである。しかし、その資料について当つてみたものの殆んど得られないため、そのあゆみについては近年の概要しか述べられないのは残念である。

川島町は見渡す限りの水田で昔からの穀倉地帯であつて、所々に集落が散在する純農村であった。が最近254国道沿いの伊草・中山

地区に住宅が続々と建造され、また中山地区には昭和55年から住宅団地が造成され翌年から入居が始まるにつれて両地区的児童数にも逐次増加の一途をたどりつつある。

町内には小学校6校、中学校1校あり、前記2地区の外は4小学校とも小規模校で学年単級である。

## 2 主たる活動と事業

教育研究会の組織・活動並びに運営は研究会規則に基づいて編成・実践されている。

### （目的）

本会は、教育の振興と会員の資質の向上につとめ、あわせて相互の親睦をはかるを目的とする。

#### (事業)

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

- 1 研究会・発表会・講演会等の開催
- 2 教育に関する調査研究
- 3 会員の学術文化に関する研究の助成
- 4 リクリエーションの開催
- 5 その他目的達成に必要な事項

であり、この目的にそった事業を実施している。

ここ5年来実施している主な事業として、総会・歓送迎会  
小学校体育実技研修会  
指導者を招へいして小学校教員の体育実技指導の研修  
スポーツ交流会  
全会員による学校対抗球技大会  
班内連合水球大会  
班内小学校高学年選手による競泳  
中学生の模範泳法  
交通安全講習会  
全会員を対象として警察署員による講話  
と映画の会

班内連合運動会  
班内小学校高学年と中学1年の児童生徒による運動会  
班内音楽会

班内小中学校。1校1~3クラス出場  
教員研究発表会  
教職員4~5名の研究発表で個人または団体の発表会  
管外研修視察  
各校1名ずつ管外先進校を参観  
各研究部ごとの研修会・授業研究会  
全27研究部

### 3 昭和59年度の研究会の活動

#### (組織)

会長・副会長 各1名  
理事 23名（内常任理事8名）  
幹事 若干名（通常2名）

研究部長 研究部ごと1名

監事 3名

会員 128名

- 1 会長・副会長は理事会において推薦し、総会で承認する。
- 2 理事は各小学校3名、中学校5名を各学校ごとに選出する。
- 3 監事は理事以外の会員中より全員により選出し、総会で承認する。

#### (活動)

5月15日 総会及び歓送迎会

総会を開催するに当り、4月当初より各種準備会をへて総会となる。

7月30日 小学校体育実技研修会  
低学年ブロック（1~4年担任）

なわとび・輪・ボールを使った遊びについて指導者より実技指導を受ける。

高学年ブロック（5~6年担任）

リズムに合わせての跳躍運動、長・短なわの組合せ跳びを指導者より実技指導を受ける。

7月30日 スポーツ交流会

各校より教職員1~3チーム出場。バレーボール大会を開催。トーナメント方式による熱戦に汗を流した。

8月4日 連合水泳大会

町営プールにおいて小学校5~6年生選手による競泳18種目を実施。  
なお、中学校水泳部員による模範泳法を見学、小学生の参考となる。

8月21日 交通安全指導講習会

全会員を対象として、東松山警察署員より最近の交通事情と事故発生の原因等につき講話を聞き、また映画をとおして、児童生徒への交通安全指導のあり方と教職員自身の心構えにつき一層の注意を喚起する。

今後の予定として

10月 連合運動会  
班内音楽会

11月 教職員研究発表会

管外研修視察

(予算)

本会の経費は、会費・負担金・補助及び交付金で充てる。

会費は月額約200円（給料月額により段階がある）。町教育委員会からの助成金30万円で年間収入予算約67万円である。

支出は会議費・事務費・事業費等で80%は事業費である。

4 おわりに

班内小学校は学年単級の学校が4校ある。そのため研究会の中に1年から6年までの同学年担任で組織する学年会があり、ここ

で学年ごとの年間指導計画の検討・教材研究・授業研究会等が実施され横の連絡が密になされていることも特色の一つと思われる。

また各種の研究部が活発に開催されると出張等が多くなり、授業に支障を生ずるので開催時刻をおくらせたり、回数も制約されることになる。

教育研究会は全教職員の唯一の教育研究団体であり、日々教育実践の原動力であると考えている。したがってその運営の巧拙が児童生徒の教育指導に影響するところ大であり、その責任の重いことを痛感し、一層の努力をしていかなければならぬ。

## 吉見教育研究会

### 1 はじめに

吉見の百穴といえば、全国的に有名であるが当町西南部には松山城跡もあり、他に吉見観音御所の息障院等由緒ある遺跡・遺物が点在し、田園地帯と西地区の丘陵地帯とが調和して、自然の景観に恵まれている。しかし、最近は工場の進出・宅地化も徐々に進み、町も次第に変容しようとしている。

こうした環境の中で、昭和33年4月、町内4中学校が総合されて1校となり、小学校5校と合わせ、会員は121名の小さな研究団体ではあるが、教育に理解のある町当局と、町民の純朴さに支えられ、会員も熱心に教育に取り組んでおり、その成果もみるべきものがあると確信している。さらに県立吉見高校設立により、中学生の進路も拡大され、恵まれた環境に変貌した。以下、本研究会の構成・予算・事業について述べる。

### 2 歴代正副会長

年 度 会 長 副会長

33~36	小高 準	秋元 福次
37~39	綿貫 重美	江中 良朔
40~45	村田 信男	中村 恒治
45	中村 恒治	三角 党治
47	三角 党治	金井 武夫
48	金井 武夫	三角 党治
49	三角 党治	奥泉 勝三
50	三角 党治	大沢 昇
51	千島 春吉	大沢 昇
52	千島 春吉	加藤 忠男
53	久保田仲一	加藤 忠男
54	久保田仲一	加藤 忠男
55	久保田仲一	国島 判七
56	岡安 忍	国島 判七
57	岡安 忍	国島 判七
58	岡安 忍	小島多喜治
59	高山 文男	国島 勇司

### 3 本会の構成について

会則により、目的や組織等を抽出すると  
○第2条 本会は、吉見に在職する教職員が

主体になって、職能の向上・教育の振興を図り、比企地区及び埼玉県の教育の発展ひいては文化日本の建設に寄与し、併せて会員相互の親睦修養を図ることを目的とする。	別活動部
○第3条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。	13 教育心理部 14 心障児教育部
1 研究会・発表会・講習会・講演会などの開催	15 同和教育部 16 進路指導部
2 教育に関する調査研究	17 生徒指導部 18 安全教育部
3 会員の教育・学術・文化に関する研究の助成	19 図書館部 20 視聴覚部
4 家庭及び社会教育の普及徹底	21 保健部 22 養護部
5 青少年の文化活動の振興	23 給食部 24 校長会部
6 各種団体との連絡提携	25 教頭会部 26 教務部
7 レクリエーションの開催	27 庶務部
8 その他、本会の目的達成に必要な事項	
○第4条 本会は、次の会員で組織する。	
1 正会員（町内現職教職員）	4 選出及び会議について
2 賛助会員（本会の趣旨に賛同する個人と団体）	(1) 会長・副会長
○第5条 本会に、次の役員をおく。	各校より1名の候補者を選出し、会員の全員投票により、選挙管理委員会の管理のもと総会前に投票・開票を行い、高点順に総会において会長・副会長が選出される。
1 会長1名 2 副会長1名	(2) 監事 (年1回、その他必要により)
3 常任理事15名 4 監事3名	選出する法は、正副会長に同じ。
5 理事若干名 6 幹事若干名	(3) 常任理事 (年3回、その他必要により)
○第12条 研究部の組織を次のとおりとし、部長、副部長は各研究部会において選出し、部長は主任会を招集する。	校長6名と理事中より9名を、理事会の互選により選出し、15名で構成する。
1 国語部 2 書道部	(4) 理事 (年2回、その他必要により)
3 社会部 4 算数・数学部	各教科領域主任の互選により部長が選出され、その選出された部長が理事となる。
5 理科部 6 音楽部	(5) 幹事
7 図工・美術部 8 体育部	会長が指名し、総会の承認を得る。
9 家庭・技家部 10 英語部	
11 道徳部 12 特	

5 零収入	2,000	預金利子	班内水泳大会	(昭和55年度より)
合 計	692,312		授業研究会	(昭和56年度より)
歳出の部				
1 事務費	8,000		教育講演会	(昭和58年度より)
2 会議費	21,000	総会等	各研究部とも、年度当初予算化の範囲内で、いくつかの事業を計画するが、それら事業の中で、本部とかかわりをもつて行っている事業及び本部の事業をあげたが、主なものを記すと	
3 事業費	620,000		〔実技研修会〕	
(1)教科等研究費	80,000	主任研等	本研究会では、理科・音楽・家庭・図工・技家の5教科を対象として、毎年それぞれ指導者を外部より招き、授業に支障のないよう夏季休業中を利用して研修会を実施している。具体的実施については各主任会に一任し、実施しているが、各教科とも、会員の積極的参加により、すばらしい成果をあげている。	
(2)研究指定費	30,000		〔管外優良校視察〕	
(3)実技研修費	35,000	理音図技家	「井の中の蛙」とならぬよう、長年本会の行っている事業である。1泊2日の日程で先進校を視察し、素晴らしい学校環境と研究の取り組みに触れて、大いなる感銘をうけ、明日からの教育実践に役立てる事業である。	
(4)音楽会費	40,000		参加者は、小学校各1名、中学校2名の他管理職1名を含めた計8名からなり、その参加者の話し合いにより、日時、場所等を決定していく。なお、この事業実施にあたり、教育委員会、各校PTAからも若干の援助をうけている。	
(5)競書会費	5,000	書初用紙等	〔教育研究発表会〕	
(6)同和研究費	5,000		教師には研修が義務づけられ、常に研修に励んでいるが、この発表の機会を得ること、与えてやることは、更に意欲を高揚する動機となることと思う。	
(7)管外視察費	40,000	8人分	比企郡では、教員研究発表会を毎年実施しており、この代表1名を選出するための予選会も兼ねている研究発表会もある。	
(8)弔慰費	150,000	記念品代等	当日は、町内全教職員が一堂に会し、各小学校1名、中学校2名の口頭発表が行われる。発表者の研究期間は2年で、1年目は紙上発表者として当日研究物を提出し、2年目に口頭発表者となる。	
(9)レク費	40,000			
(10)選手派遣費	50,000			
(11)研究奨励費	5,000	班代表補助		
(12)研究発表会費	15,000			
(13)体育競技会費	130,000	水泳・陸上		
(14)心障児宿泊費	40,000			
4 予備費	35,312			
合 計	692,312			

## 6 主な事業の概要（本部）

- 4月 教科等主任会、役員選出、事業計画の立案、新旧理事会、総会
- 7月 常任理事会
- 8月 教職員体育実技研修会（レク）、水泳大会
- 9月 常任理事会
- 10月 陸上競技大会
- 11月 教員研究発表会、音楽発表会、授業研究会
- 1月 教育講演会
- 3月 理事会
- ※ 同学年会（随時）、管外視察
- ※ 教育研究発表会（昭和33年度より）
- 班内音楽発表会（昭和33年度より）
- 教職員レク（昭和36年度より）
- 班内陸上競技大会（昭和42年度より）

研究期間が2年そのため、その内容も充実したものとなるために、教育委員会も重視し、奨励費として若干の補助が予定されている。

## 7 教科等の主題・事業内容

- 国語 理解を深める読みの指導  
授業研究会、文集編集、作文研究会等
- 書写 基礎的な毛筆の初步指導の研究  
硬筆展、書き初め展、主任研修会
- 社会 副読本「よしみ」の評価、工夫活用  
副読本の評価研究、県群市行事へ参加  
授業研究会、管外視察
- 算数 子どもをひきつける授業の工夫  
授業研究会、授業案検討会
- 理科 児童・生徒の主体的活動を重視した  
授業の実践  
実技講習会・先進地視察・科学展参加  
理科研究発表会・授業研究会
- 音楽 児童を主体的に活動させるグループ  
学習の工夫  
音楽会・実技研修会・授業研究会・管  
外視察
- 図工・美術の表現意欲を高めるため  
の指導法の研究  
主任研修会・授業研修会・実技研修会  
各種展覧会参加・町内視察
- 保育 児童・生徒の健康の増進と体力の向  
上を図り、強健な心身を養い、明る  
く豊かな生活を営む態度を育てる。  
授業研究会・水泳大会・陸上競技大会  
教職員実技研修会・実技講習・指導法  
の研究・指 校発表への協力
- 家政 資料を活用しての楽しい授業展開。  
自ら考え、充実した授業の展開。教  
材教具の開発。評価法。  
主任研修会、発表展等への参加、相互  
乗り入れの研究、先進校視察
- 英語 基礎学力の定着をはかる授業展開の  
工夫  
担当者会の定例化、授業研究会、各種
- テストの実施、弁論大会参加
- 道徳 副読本以外の資料作成  
授業研究会、先進校視察、資料の作成
- 特活 学級会活動を開催させる指導法研究  
主任研修会、群市授業研究会参加
- 教心 児童・生徒ひとりひとりの心情を大  
切にした学級経営  
知能テストの実施、県技能講習会参加  
班内研究発表会、主任研修会等
- 心障 能力に応じた指導法の研究  
主任研修会、宿泊訓練、先進校視察、  
群市事業研修会参加
- 同和 人権意識の高揚をめざした授業実践  
授業研究会、実践報告会参加、人権作  
文募集、授業実践の記録、実践の集録  
同推協事務に参加
- 進路 ひとりひとりを伸ばす進路指導  
各種テストの実施、進路相談の充実、  
授業研究、各種行事研修会への参加
- 生指 家庭と連携した校外での生活指導  
主任研修会、校外指導、管外視察
- 安全 日常生活における安全の意識を高め  
るための研究  
主任研修会、各種研修会参加
- 図書 読書活動の充実  
主任研修会、読書感想文の募集と審査  
読書発表会への参加と協力
- 視聴 授業におけるVTRの活用法研究  
VTR講習会、16ミリ講習会、管外視  
察
- 保健 体位の向上  
主任研修会、保健優良校視察、保健主  
事講習会参加、保健養護合同研修会
- 養護 環境衛生についての実態調査  
机、いす、照度等の調査、保健主事と  
の合同研修会
- 給食 給食のマナーを身につけさせる。  
献立部会参加、各種研修会参加、給食  
マナーの指導、管外視察
- 校長 創意ある学校経営の推進

## 自主研修会、各種研究協議会参加

- 教頭 学校運営における教頭のあり方。教育課程実施上の問題点
- 教育評価実施上の問題点についての研修、学校運営研修、関プロ大会参加
- 教務 教務内容の検討
- 教務活動の推進、主任研修会、視察
- 庶務 給与について
- 旅費請求事務の研修、年末調整事務事前準備、年度末人事に伴う書類作成についての研修

## 8 おわりに

本研究会では、会員相互のまとまりがよく、おだやかな気風のもとに教育実践が行われている。ここに、記念誌ということであるが、何としても資料不足のため、概略の紹介に終ってしまったことをお許し願いたい。

教育の重要さが呼ばれる現在、教師ひとりひとりの資質向上はもとより、地域教育振興のため、本研究会の果たす役割の大きいことを考えたとき、更に充実したものとなるよう努力していきたい。

(文責 高山)

# 小鹿野地区教育協会

## 1 本会の発足と目的

小鹿野小学校の沿革誌によると「昭和24年2月11日、磯田帝作校長、小鹿野地区教育協会長ニ就任ス」とある。この時、本会は発足したものと思う。

現在の会則は昭和34年から実施されたもので、その目的には「本会は教職員の職能の向上をはかり、教育による国家再建を企図するをもって目的とする。」とある。

発足以来30数年を経ている。物質的には国家は再建されたようにみえる今日であるが、人間性豊かな日本人の育成には教育の力に俟つかかではなく、われわれ教職員の職能の向上をはかる必要は変わっていない。

## 2 組織及び経理

小鹿野地区は西秩父ともいい、行政的には吉田町、小鹿野町、両神村の範囲である。この地区内の小・中学校15校の教職員で組織されている。本年度当初の会員数は200人である。役員はつきの通り。

会長 飯嶋 治男（小鹿野小長）

副会長 横田 岩夫（小鹿野中長）

監事 高野 昭生（両神小頭）

監事 坂本 忠三（吉田中頭）

理事 各校より1名選出（略）

会計幹事 沢畠 数重（小鹿野小頭）

本会の経費は会費年額1人800円と各町村からの負担金、小学校児童1人20円、中学校生徒1人30円によっている。その他、地区PTA連合会からの補助金、雑収入により予算額合計は、285,829円である。

会員の弔慰規定の他に児童・生徒弔慰規定がある。弔慰金の出金方法は、児童・生徒入学時に1人20円拵出し、死亡、住居の焼失、倒壊等に弔慰、見舞いをすることになっている。

## 3 本会の事業

### ○ 体育関係

- 小学校仲よし体育祭……各校の運動会の前後、9月から10月に地区小学校9校が陸上を中心に競技し、他校との交流を通じて、仲よしの輪をひろげている。

- 小学校水泳大会……夏季休業中、地区内9校の選手が集い、50~100mの平泳ぎ、自由形を中心記録を競っている。

- 中学校体育大会……夏季休業前、球技6種目、柔道・剣道を地区内6校で技を競ってい

る。

- 中学校駅伝大会……毎年11月、各中学校からチームが出場し、部門別に2200~2700mを走る。

● 教職員球技大会……夏季休業中、学校単位あるいは連合してチームを編成し、ソフトボール、バレーボールの試合をする。技を競うことのほかに、各学校との親睦の図れる機会でもある。当日の勤務は職専免とし、1日傷害保険に加入して実施している。

#### ○ 地区書初め展

毎年1月、各学校からの優秀作品を展示して一般に公開している。

#### ○ 中学校技術・家庭科作品展

主に夏季休業中の工夫をこらした作品の展示発表を行なっている。

#### ○ 教育講演会

よい講師を招くために特別会計を設け、積立金をつくりつつある。招へいに見合う額になると実施されるが、ほとんど隔年に実施されている。ここ2~3回は教育実践家を招いている。他団体と共に催して実施する案も検討されている。

### 4 各教科等研究部の事業

本会には下記のように28の研究部がある。

小学国語、中学国語、社会、算数、数学、理科、音楽、図工美術、小学体育、中学体育、小学校家庭、中学家庭、技術、英語、書写、道徳、特活、障害児、進路、視聴覚、保健、給食、進学、図書、事務、同和、栄養、生徒指導。

研究部長、同副部長を中心にして事業計画をたて、それに基づいて事業を実施している。主なものは授業研究会で、講師を招いて、授業観察後、研究協議を行っている。その他に実技研修、見学視察をしたり、展覧会、競技会などの開催を企画運営している。

これら事業のなかで中学国語では毎年秋、地区内中学6校の全生徒を集めて、演劇教室を実施している。生の演劇を見る機会に恵まれることの少ない生徒に深い感動を与えていた。最近では立川雄三作、演出“鬼になれぐづ丸”。

シートン原作、立川雄三脚色演出“森のロルフ”を観賞した。観劇の費用は生徒1人800円~1,000円である。

### 5 申し合わせ事項

本会には事業を円滑に進め、各学校の運営に支障をきたさないようにするために、つぎのような申し合わせ事項が定められている。

#### (1) 諸行事

ア 事業等の開催が1日に2教科以上にならないようにする。

イ つとめて授業に支障のないように心がける。

ウ 会議のみの場合は、午後3時からの開催を原則とする。

#### (2) 教科研究

ア 研究会を行なわない部には、研究費を支出しない。

イ 年度末に一括支出して懇談会に充当することは認めない。

ウ 講習会費等は、研究費に含まれているものと考える。

エ 主任会は学期1回ぐらい、授業研究会は年2回ぐらいにしたい。

オ 講師謝礼は、3,000円を限度とする。学校等視察する場合は、1校につき1,000円の謝礼を認める。

### 6 おわりに

われわれの教育活動推進の主体は、校長を中心とする学校にある。地域や児童・生徒の実情にもとづいて学校運営がなされ、それぞれ特色ある学校づくりから、児童・生徒を伸ばしていくようつとめている。

各学校の主体性は尊重しながらも、略々同地区にある地区内小・中学校が連携をとりながら進めていくことも必要である。

それに教科についての研究を深めるには1校だけの取り組みを1歩進めて、地区内の同じ問題を抱く教師達が集って研究協議することの必

要性もある。

以上のようなことが地区教育協会の本質的な存在意義であると思う。それに同じ地区内に勤

める同志、教職員の親睦交流が図れることも大きな意義であると考える。

(昭59. 9. 4. 飯嶋治男記)

## 皆野地区教育協会

### 1 会のあゆみ

秩父地区など他地区的教育研究会発足の動きの中で、本教育協会は皆野、長瀬地区など秩父群北部の小中学校教職員を会員として、昭和39年5月13日発足した。(ちなみに秩父群市内の教育研究会は、秩父市を中心にそれ以南、以東の地域を併せた秩父地区、西秩父の小鹿野地区、比企に接した東秩父地区そして当地区の4地区に分かれている。)

会則は、その後、一部変更はあるものの、概ね発足時のまま現在に至っており、会の事業内容、組織の上で基本的な変化はないと言える。そして本会活動の柱である研究部組織は発足時、教科、教科外で20部であったが、その後同和研究部が置かれ21部となり現在に至っている。各研究部とも自宣に応じ、会員の要請に応じたテーマを取り上げて計画、実施してきているが、組織人員が少ないこともあり他地区的研究会と共催の形をとることも多く見られてきた。

又、その間、役員選出に関する選舉規定が昭和46年に定められ、昭和55年には会員相互間の親睦に配慮がなされ、会員慶弔規定の制定をしている。

発足以後15年ほどの資料がないので略記する形となつたが、ここ8年ほど会員数も140~160名位で推移している。

### 2 主な活動と事業

- (1)各研究部会——研究会・実技研修・視察  
・研究発表
- (2)発明創意工夫展——皆野地区・秩父郡市  
県大会参加

- (3)音楽会——皆野地区・県中央大会
- (4)美術展——皆野地区
- (5)読書感想文集発行——夏季作品集約・図書館研究部担当
- (6)教育講演会——秩父教育研究会と共に・  
教育関係、一般教養関係講師
- (7)優良校視察　規模に応じて1~2名、  
事務局1名
- 51年度 平塚市金旭中(クラブ活動)  
浜松市泉小(健康優良校)
- 52 " 掛川市一小(3つのいっぱい運動)
- 54 " 千葉市緑町小
- 55 " 郡山市金透小(ゆとりと教育課程)
- 56 " 岐阜神坂小(生活つづり方)
- 57 " 愛知小坂井西小(実践力を高める生徒指導)
- 58 " 刈谷南中(子どもの心を育てる生徒指導)
- (8)会員研修会——昭和39年、教職員体育大会選手選考を兼ねて第1回がはじまる。  
ソフトボール、バレーボール等を主と  
していたが、58年度は行なわれなかつた。
- (9)水泳記録会——小学校のみ。第1回は昭和48年にはじまる。男女25m、自由、  
平泳。男女100mリレー。
- (10)仲よし体育祭——小学校。陸上競技中心
- (11)その他の事項
  - 1 事務職員、栄養職員も所属研究部(学校事務、給食)が置かれているが、校長、教頭の研究部は必要に応じて教委、教育事務所とのかかわりの上で研修会の機会があ

るということで設けられていない。

2 会員数並びに部員数が総じて少ないために、教育講演会など他地区と共に催するものもあり、各研究部も他地区と共に催を組んだり、県、関プロ、全国大会への参加をもって研究会としているものもみられる。

### 3 昭和59年度の活動

#### (1) 全体的事業

- 水泳記録会（東秩父地区共催）
- 会員研修会（インディアカ）
- 技術家庭科展（発明創意工夫展）
- 優良校視察（二本松市三中、14名  
・基本的な生活態度を育てる生徒指導）
- 仲よし体育祭
- 読書感想文集発行
- 教育講演会（講師・早乙女勝元、子供と家庭と地域と）
- 美術展
- 音楽会
- 書初め展

#### (2) 研究部の活動

- 1 国語 研修会 2回、観劇会
- 2 書写 " 5回、硬筆展、書初展
- 3 社会 " 1回、秩父事件史跡めぐり
- 4 数・算 " 5回
- 5 理科 " 3回、植物採集会、科学展
- 6 音楽 " 3回、音楽会、歌唱研究会
- 7 技家 " 2回、創工展
- 8 図工 " 3回、美術館見学、焼物実技
- 9 外国語 " 5回、英弁大会、雑談会
- 10 道徳 " 3回
- 11 特活 " 2回、視察
- 12 生徒指導 " 3回
- 13 図書 " 3回、演劇観賞、読書運動
- 14 視聴覚 " 3回、県大会参加
- 15 障害 " 3回、遠足、視察
- 16 同和 " 3回、実践報告会
- 17 安全 " 3回

- 18 保健 " 2回
- 19 学校事務 " 2回、事務機器視察
- 20 給食 " 3回、工場見学
- 21 保育 " 3回、体育祭、スキー研修

### 4 運営上の問題点

(1)各研究部の視察研修については当然学校の旅費負担が伴うものであるから、年度当初、理事会で検討、精選をしているが、旅費予算が苦しい中で、今後より厳選し、場合により研究部のローテーションを考えなければならないところにきている。

(2)小規模校又、小学校が多いために研究会が成り立たないこともあります、特に教科外の部ではその傾向が見られ、他地区との共催も止むを得ないと思われる。

(3)会員研修会の内容（体育実技、レク等）によっては服務上の問題、傷害保証の問題があり検討を要するところである。

(4)事務局は必ずしも中、大規模校に置かなくてもよい、各校持ち回りが良いのではないかとの意見もあるが、最終的な結論は出ていない。

# 東秩父教育協会

## 1 東秩父教育協会の現況とその推移

東秩父教育協会は、東秩父村立の2小学校（1校はへき地1級校で2分校を擁している）と1中学校に勤務する教職員39名で構成している。東秩父村は秩父盆地の東部に位置し、人口4700余人、世帯数1100余の林業を中心とした山村であり、村立3校に在学する児童生徒は636人である。

村全体としては非常に教育熱心であり、住民の教育に寄せる期待も大きい。また、村執行部の教育への情熱、村の将来を担う子弟を育成するため教育立村を掲げて、教育環境の整備に努めているところである。

そうした中にあって、小規模研究団体ではあるが、他団体には見られない研究活動を続けていている。

当協会の源流は終戦直後の昭和22年5月設立の準備会がもたれ、同年6月6日大河原部会設立総会が開催されている。以下、不十分な資料の中から主な活動と事業を記して、当協会のあゆみとしたい。

年月日	主な活動と事業
24・10・25	大河原教育協会主催研修会（国語、放送、家庭科、衛生講話、再教育講習等）
25・1・30	社会科研究会
25・2・15	算数科研究会
25・10・21	生徒体育会
25・11・25	国語部会
26・3・3	算数科研究会
26・5・17	大河原教育協会理事会
26・6・5	同 総会、職員体育大会
26・11・20	職員体育大会
27・6・5	大河原教育協会総会、職員体育会
27・10・9	教育講演会、講師館野守雄氏
28・2・6~7	教育協会職員他校参観（平塚市宗善小学校）
28・2・25	研究会（他校参観報告、懇親会）

28・9・7	図工研究会
29・5・25	大河原教育協会総会、体育大会
30・2・11	3か村教育協会総会（大河原村、櫻川村、大門そん村）
30・5・25	大門地区抹消のための調停（大門村が都幾川村との合併に伴うもの）
31・8・1	教育協会創立調停委員会
31・9・6	東秩父村誕生（大河原村、櫻川村の合併）
33・11・22	東秩父教育協会研究発表会（指導主事を招いて）
34・2・13	研究会
39・7・28	東秩父教育協会研究発表会
40・5・27	同 研修旅行（筑波山、懇親会）
40・7・28	同 総会
41・6・6	同 研修旅行（浅間高原）
41・8・2	同 総会
42・5・23	管外視察（科学技術館、国際劇場）
43・5・31	教育協会総会
43・8・28	同 総会
45・2・19	管外視察
50・6・28~29	教育を語る会開催
54・5・11	研修旅行
54・6・23	教育協会総会、歓送迎会
56・5・23	研修旅行（群馬県下）
56・6・13~14	教育協会総会、教職員実技研修会
56・7・3	研修旅行
57・5・1	3校合同研究授業（音楽、理科、図工、書写研究会） 理科展、書初展、写生会、歌唱指導
57・6・26~27	東秩父教育協会総会
57・7・1	研修旅行（会津若松市）
57・9・3	授業研究会（国語科中学校）
57・11・9	東西小学校水泳大会
57・11・25	教職員実技研修会（体育教材の開発）
57・11・27	生徒指導部研修会
58・2・24	3校絵画巡回展
58・5・7	教科研究会（国語、社会、数学、理科、生徒指導）
58・5・20	東秩父教育協会総会
	教科等研究部研修会（国語、算数、社会科、音楽、同和教育、特別活

年月日	主な活動と事業
	動、学校図書、道徳、理科、図工、体育)
58・6・18~19	研修旅行（草津方面）
58・8・26	地域学習研修会（社会科巡検）
58・11・29	授業研究会（体育、国語、算数）
59・3・22	理事会

## 2 特色ある活動

- (1) 本会の発足以来連綿と脈打っている事業に会員全参加の研修視察旅行がある。村当局からの助成を受けて県内から県外へと教育施設を見学すると同時に、会員相互の親睦を図ると同時に教職員の資質の向上をねらって今日に及んでいる。しかも、この旅行には村長をはじめ村議会関係者、教育長等行政関係者、PTA役員等も積極的に参加して教職員との意志の疎通をより密にしようとすることは、他団体では例のない本会の誇るべき事業である。
- (2) 各校代表による視察。本年度は8名を東京都大島町に派遣する予定である。
- (3) 小2、中1という学校設置ではあるが、小中合同の教科等研究会が非常に盛んであり、研究部長を中心とした研究活動は年々充実しつつあり、今後に期待するところとなるものがある。
- 特に、小中合同の研究テーマを設けて研究に取り組んでおり、本年度は学校給食をテーマに掲げている。

## 3 昭和59年度の研究活動

本年度の事業研究活動計画等は5月19日の総会において決定された。

### (1) 役員

会長 加藤録郎  
 副会長 二宮真澄 宮沢 清  
 理事 東小 二宮真澄 浅見政雄  
           大野昭二  
 西小 加藤録郎 塩旗国光  
           福島 明  
 中学 宮沢 清 小林容次

岡本伸一

会計 久保四郎  
 監事 持田嘉男 根岸正治  
 幹事 塩旗国光

### (2) 事業計画

月	事業内容
4	理事会、監査会
5	総会、教科等主任会
6	研修視察（群馬県）
7	理事会、仲よし球技大会
8	皆野地区水泳大会、東西水泳大会
10	村内理科展、理事会
11	体育実技研修会、学校給食研究会、県外視察
12	3校巡回図画展
1	書初巡回展
3	理事会

### (3) 教科等研究部事業計画

別紙

## 4 今後の課題

- (1) 本会は、1村のみで組織しているために他協会との交流や情報交換を密にして研究活動の域を拡大し、推進する必要がある
- (2) 会員数が少ないので全教科全領域にわたって研究部を設けることはむずかしい。そのために年度計画による研究部の設置を配慮する必要があろう。

昭和59年度東秩父教育協会各教科等研究部事業計画

研究部	部長名	副部長名	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	大濱 佳子(刈)	浅見 敏子(刈)	主任会 書写主任会 硬筆展(刈)				書写主任会	授業研究会		書写主任会 書写展(刈)	主任会	
社会	新井 雄一(刈)	毛呂 伸一(西)	主任会		地域学習 研修会			主任会		主任会	授業研究会	
算数・数学	坂本 雅久(刈)	深田 住藏(刈)		主任会				授業研究会			反省会	
理科	吉田 幹雄(刈)	高橋 文展(中)		主任会	作成研修会	魚類標本 理科展	村内	研修会			主任会	
音楽	佐藤 尚子(中)	中田 貴子(刈)		主任会				研修会			主任会	
図工・美術	大野 昭二(刈)	保泉真理子(刈)					校内写生会 主任会	主任研修会 あるまとまつり 作品展出品	三校園画 巡回展			
体育	若林 進(西)	持田 嘉男(刈)	仲よし球技 大会	7		水泳大会 (東西小・中)	職員実技研 修					職員実技研 修(バレーボール)
特別活動	吉田 幹雄(刈)	千島 力夫(中)		13 主任会	研修会			主任会			主任会	
同和教育	深田 住藏(刈)	大野 昭二(刈)		主任研修会				ブロック 研修会			人権文集 作成	主任研修会
生徒指導	持田 嘉男(刈)	浅見 定男(中)	主任会		主任会			主任会		主任会		
学校図書	千島 力夫(中)	新井 雄一(刈)		主任会			読書感想文 審査			主任会		
道徳	岡本 イヨ(西)	関口実枝子(刈)			年間計画 の検討				主任会			主任会
学校給食	関口美枝子(西)	浅見 敏子(刈)	献立会議	13 主任会(刈)		献立会議		9 給食研究発 表会(刈)		献立会議	20 主任会(刈)	

# 本庄・上里教育研究会

## 1 はじめに

本庄・上里教育研究会は、県の最北部に位置する本庄市と上里町にある小学校10校・中学校3校の教職員を会員として16年前に発足したものである。現在は学校数も小学校13校・中学校5校と増加し500名を越える会員は、それぞれ研究分野において地域に根ざした教育、個性に富んだ人間性豊かな児童の育成を目指して、意欲的に研究活動に取り組んでいる。

## 2 主たる活動と事業

本教育研究会は、会員一人ひとりの専門職としての識見と教養を深めるとともに、会員相互の研究活動の高揚と地域の教育の振興を図り、また、班内小中学校間の連絡、提携を密にすることを目的としている。

### 活動と事業

- (1)講演会、講習会、授業研究会等の実施
- (2)教科等の研究、諸調査活動の実施
- (3)展览会、発表会、体育大会等の開催
- (4)学校、文化財等の視察
- (5)研究紀要の発行
- (6)その他、目的達成に関する諸研究、調査等の実施

## 3 特色ある活動

班内の各小中学校の経営の重点目標には、生徒指導の充実（基本的生活習慣の確立）と、一人ひとりを大切にした同和教育の推進（人権尊重の教育実践）がうたわれている。各研究部では、これらの重点目標を踏まえ「自らの力で判断し、主体的に行動し、自己の人生を切り開いていくことのできる児童生徒の育成」を目指して、各教科、領域の特質を生かした研究と実践活動に取り組んでいる。

具体的には、教育講演会、研究発表会、授業研究会、諸調査研究、先進校視察等の実践活動を重ねることを通して一人ひとりの教職員が専門的力量を高め、指導力を培い、人間としての深い教養を身につけるために研鑽に努めている。その活動は地道ではあるが、着々と実績をあげ、地域の教育振興のために重要な役割と使命を果たしきている。

また、年度の終わりには、各教育研究部の1年間の研修と活動の記録を「教育研究実践記録」としてまとめ、会員全員に配布している。

## 4 昭和59年度の研究活動

研究部	研究主題	事業内容
国語	表現と理解の関連 指導(小) 確かな表現力を身につけさせるための指導(中)	教材研究、授業研究会 担当者研修会
書写	表現力を育てる書写指導	担当者研修会 硬筆毛筆実技研修会 硬筆展・書き初め展
社会	望ましい社会科の評価(小) わかる授業、楽しい学習を目指しての指導法の研究(中)	現地研修会 研究校授業参観 授業研究会 評価の研究
算数 数学	学ぶ喜びを味わわせる学習指導(小) 基礎学力の向上(中)	担当者研修会 授業研究会 研究発表
理科	すくんで科学する子の育成を目指す(小) 神通川水系(地質・植物)の調査研究(中)	担当者研修会 授業研究会 講習会 自然観察・科学振興展
音楽	学級全員の学ぶ喜びを高める音楽教育を求めて(小) 生き生きとした音楽指導を求めて(中)	実技研修会(器楽オーディオ) 授業研究会 地区歌唱・器楽音乐会 地区合唱・器楽合奏大会
図工 美術	陶芸教育の基礎研究	やきもの実技研修会 授業研究会 作品鑑賞会 担当者研修会

体育	対外的行事のあり方と持ち方について(中) 鉄棒の効果的指導について(中)	担当者研修会 実技研修会（陸上・器械・水泳・演技） スキー実技講習会	進路指導	一人ひとりの生徒の適性に即した進路指導	進路指導研修会 担当者研修会
家庭	豊かな人間性を目指して実践的な態度を育てる学習指導法	担当者研修会 講習会 発明創意工夫展 実技研修会	学校事務	学校事務の能率化をめざして	諸表簿整理研究 管外研修 会計伝票事務処理に関する研修 学校備品管理研究
技術家庭	自ら考え意欲と実践力を高める学習指導法	安全指導研修会 実技研修会 担当者研修会 発明創意工夫展	校長	創意と活力に満ちた学校運営はどうあるべきか	主題についての研修会 同和教育研修会 教育家庭に関する研修
外国語	一人ひとりを生かす言語活動をめざして	担当者研修会 英語弁論大会 中高英語連絡会 授業研究会	教頭	教頭の職務	主題についての研修会 同和教育研修会
道徳	豊かな心を育てる道徳教育の指導法の研究	実態調査に関する研究 講演会 授業研究会 担当者研究会	5 今後の課題		
特活	望ましい教育課程のあり方	担当者研修会 研究校の参観（管外）	現在、研究部は28の分野にわたっているので、小規模校においては、一人の会員が4つの主任を兼ね活動しているのが現状である。この現実を認識し、今後、各事業の精選の上に立った活力のある運営と研究が実践されるよう工夫と改善を重ね、なお一層の研究活動の充実を期していくかなければならないと考える。		
同和教育	授業研究を通した実践と資料の開発	担当者研修会 授業研究会			
心障児教育	学習指導法の研究 入級生徒の人格、学力を保障する教育内容の研究	担当者研究会			
生徒指導	問題行動の早期発見と対策(小) きまりを守らせる生徒指導(中)	担当者研究会 休業中の生徒指導の取り組み 街頭植草			
視聴覚	視聴覚機器の積極的活用の指導法の研究	OHP講習会 16mm講習会 オーディオ機器研修会 担当者研修会			
図書館	図書館の運営と利用指導(小) 読書指導(中)	担当者研修会 図書館現地研修会 読書感想文研修会			
保健主事	効果的な学校保健活動をめざして	担当者研修会 研究校視察（管外研修）			
養護	性教育の指導のあり方について	担当者研修会 研究校視察（管外研修）			
学校給食	給食指導に必要な知識、理解の充実と深化	工場見学 実習（理想的な献立） 担当者研修会 先進校視察			
学校緑化	子どもを生かす学校緑化活動の研究	緑化先進校の視察 園芸試験場見学 実技研修会 担当者研修会 草花苗配布			
安全教育	児童生徒の安全を高める指導	担当者研修会 授業研究会			
女教師	女教師の認見と教養を高め充実を図る	担当者研修会 手芸実技講習会 テーブルマナー講習会			

# 児玉町教育研究協議会

## I はじめに

児玉郡市の教育研究推進は、かつて都市一円ブロック（本庄市・児玉町・上里町・美里村・神川村・神泉村の1市2町3村）で行われ、それぞれの分野ごとに、かなりの実績を上げてきた。その後、各地教委ごとの組織に改められて10数年を経過し、現在に至っているが、児玉町教育研究会の構成は児玉小・金屋小・秋平小・本泉小・共和小・児玉中の小学校5校、中学校1校の小規模集団で、会員数はわずか126名、あまり大きな研究成果は期待できない。

## II 特色ある活動

小規模ながら、研究部会によっては、かなりの成果を上げ、その後、児玉郡市一丸への拡がりをもたらしたものもある。その一例を紹介すると、まず、同和教育研究があげられよう。

昭和46年～7年度、児玉町ぐるみ小中学校一体となって同和教育研究指定発表を行ったが、これらが契機となり、児玉郡市一丸となっての解放教育研究集会へと発展し、その第1回大会を児玉中学校を会場として1,000名以上の参会者により成功させることができた。以来、第5回大会まで継続させる原動力となった。その後、この研究集会は各地教委ごとの同和教育研究集会に継承され、現在に至っている。この中核には同和教育推進教員や同和担当者がいるが、それらの人が所属するのが同和教育研究部である。

また、視聴覚教育研究部には、その道のベテランが所属しており、これも、10数年来この研究部が中心になり、児玉郡市の16ミリ映写機ならびにOHP技術講習を率先し実行している。さらにこの研究部は、郷土の偉人堀保己の一一代伝記スライドや端検校顕彰会とタイアップして完成しており、視聴覚機器による郷土紹介に尽力している。

## III 運営の問題点

顕著な研究事例を示したが、これがすべてに通ずるとは言いがたい。しかし、これらが盛んになると、単に児玉町だけに留まってしまうわけにはいかず、児玉郡市一丸への発展は、各研究部でも行われていった。

研究部によつては、展覧会や発表会・競技大会等の共通課題や交通安全・生徒指導等の緊急性を持つ研究部会が正式に郡市研究協議会組織を結成し、定期的な行事を行つてゐる。これらは全県的な研究組織に位置づけられ、県下の研究会との交流もはかられている。

しかし、一部の研究部では児玉町單一組織で郡市との交流もはかれない状況のものもある。（国語・社会・特活・特学等）その上に、規模が小さく、各研究部員も少ないので、児玉町独自の教育研究の推進もはかりにくい。

## IV 本年度の研究活動

### 1 昭和59年度活動予算

#### ○ 収入の部

前年度繰越金	96,015
本年度会費	25,200
" 補助金	240,000
利子	1,000
総計	362,215

#### ○ 支出の部

総会費	25,000
本部費	100,000
研究部費	200,000
予備費	37,215
総計	362,215

上記予算のうち研究部費20万円を27研究部に分割することになるので、各研究部では思い切った研究活動をすることは現状ではむずかしいところである。ここで改めて本会の目的を

確認しておこう。

## 2 本会の目的

本会は学校教育全般の自主的研究を行い、児玉町教育の振興を図ることを目的とする。

本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

### ① 教育に関する研究調査

- イ 小中学校にわたる系統的教育研究
- ロ 講習会・講演会・研究協議会・視察見学・学習・指導研究会の開催

### ハ 教育事務に関する研究調査

- ② 教育関係機関・諸団体との連絡
- ③ その他、目的達成に必要な事項

## 3 各研究部の主な事業

(1) 国語	年計画の立案 各校の実践交流	(14) 同和	同和教育研究集会 授業研究会
(2) 書写	毛筆実技講習 硬筆・書初展	(15) 特殊	先進校視察 小中の交流
(3) 社会	町内公共施設・史跡めぐり 副読本改訂作業	(16) 生徒指導	各休業中の指導 各校の情報交流
(4) 算数数学	基礎学力の実態把握 指導法の研究	(17) 視聴覚	技術講習(16ミリ・OHP) 教材映画制作
(5) 理科	植物・地質現地研修 施設・設備・備品実態調査	(18) 図書	読書感想文の指導 読書指導
(6) 音楽	リコーダー研修 音楽鑑賞会	(19) 保健	養護部会との合同研修 各校の交流
(7) 図工美術	各種展覧会準備 教材研修会	(20) 養護	肥満児指導 保健室指導について
(8) 体育	ポートボール・陸上大会 スキー講習	(21) 給食	肥満児指導 各校の交流
(9) 技術	教材内容の検討 文化祭・発明創意工夫展	(22) 交通安全	事故例の分析研究 休業中の安全指導
(10) 家庭	年間計画の立案 実技講習会	(23) 緑化	先進地研修 緑化実技研修
(11) 英語	英語弁論大会 中高連絡交流	(24) 女教師	女教師のあり方 各校の交流
(12) 道徳	推進上の諸問題 授業研究会	(25) 校長会	学校管理運営全般
(13) 特活	望ましい特活推進体制 各校の交流	(26) 教頭会	学校行事研修 教育課程研修
<b>V 今後の課題</b>			
最近とくに教職員の職務量が増加し、研修の機会に恵まれなくなった。その上、本会独自の研究が見失われがちであるので、次の諸点の改善をはかりたい。			
(1) 教職員の研修意欲の高揚と雑務排除により、子供達と接する機会ならびに研修できる体制を確立する。			
(2) 各研究部とも研究部自体の課題・当面の課題を明確に把握し、継続・積上げ研究ができる体制をつくる。			
(3) 研修の条件整備につとめ、研究しやすい予算の確保に努力する。			

# 美里村教育研究会

## 1 会のあゆみ

本会は昭和42年5月19日東児玉小学校において、美里村内小中学校教職員の期待と要望に答えて、美里村教育研究会が発足する。以来、本年度で17年目を迎えた。この会は学校全般の民主的かつ自主的な研修をめざして、村内小中学校の教育を進行させるため、幾多の業績を残し今日におよんでいる。

## 2 主な活動と事業

残された記録が不完全なため、全期間の実績を報告することができないが本部事業部等を中心におかる範囲内で年度別に列挙して見たい。

記

### 42年度

5月19日 美里村教育研究会発会式  
(於・東児玉小)

各研究部の活動をはじめる。小学校3校の球技大会をこの会が主催し、毎年実施する。

### 44年度

交通安全教育研究発表会に協力  
(於・松久小)

### 46年度

学校給食研究会発表会に協力  
(於・大沢小)

同和教育講演会 (於・東児玉小)

### 47年度

交通安全教育研究発表会に協力  
(於・美里中)

### 48年度

同和教育講演会 塚田先生  
(於・村商工会館)  
教職員体育実技研修会、会員全員参加親睦も兼ね今後毎年実施される。

### 49年度

同和教育講演会 松本先生

(於・村文化センター)

### 50年度

教育講演会 国分一太郎先生

(於・大沢小)

### 54年度

同和教育研修会 映画鑑賞「障害児教育」  
小学校体育授業研究発表会に協力

(於・東児玉小)

教育課程の編成についての発表会に協力  
(於・美里中)

### 55年度

同和教育講演会 行田市太田中教諭  
(於・美里中) 野口 実先生

### 56年度

副読本「みさと」編集 これから3年

同和教育講演会 熊谷女子高教諭  
(於・松久小) 石田 貞先生

### 57年度

同和教育研究発表会に協力 (於・松久小)  
同和教育講演会 行田高校教諭

(於・東児玉小) 保倉忠明先生

### 58年度

小学校体育授業研究発表会に協力  
(於・松久小)

同和教育講演会 東松山市大岡小教諭  
(於・美里村役場) 萩原幸助先生

## 3 特色ある活動

- 本部事業等では同和教育を中心に研修活動が進められてきた。

同和教育の講演会、研修会は発足以来続けられてきた。上記の主要な活動と事業の中に記録されていないが、4校もち廻りで同和教育授業研究会が続けられてきた。また、各校の研究の実践記録を解放教育のあゆみにのせ研究集録として残している。

- 小学校3校児童の体力の向上と親善をめざして村内小学校の球技大会、6年生が松久小に集まり、サッカー、ミニバスケットをとおして熱戦が2回開催されている、以前は水泳大会まで開かれていたという歴史もある。本年度より会場もち廻りで開催されることになった。
- 社会科副読本「みさと」の編集を、3年間かけ作成し発行した。
- 村内教職員の体育実技研修をとおして体力を高めると共に親睦も図ろうという目的で毎年研修会を開催している。

#### 4 運営に当っての問題点

- 小規模の研究団体の悩み

この研究会は村内小学校3校、中学校1校、教職員数（昭和59年4月1日現在75名）の研究団体であるため、各諸行事や研究部会に集まる人数も少なく、盛り上がりが少ない、特に中学校だけの専門部もあるが、校内の研修活動のような場合もある。また小規模では、一人で複数の主任を兼ねる時もあるので、授業時数確保の上からも参加が困難になる。

- 会員一人ひとりの日常継続的な研修活動を進める意欲をもたらすことこそ、この研究会の使命であるが更に工夫が望まれる。

#### 5 昭和59年度の研究活動

##### (1)本部事業

- 体育実技研修会 11月2日（金）  
希望により村内史跡めぐりに変更する案もある。  
同和教育講演会 2月19日 会場及び講師未定。

##### (2)各部事業

- 国語（小中）国語部研修会 6月・10月・2月  
書写（小中）書写実技研修会 5月・11月  
社会（小中）社会科担当者会 6月・11月・2月  
算数（小中）担当者会 5月・7月  
授業研究会 11月 研究物のまとめ 1月  
理科（小中）理科部会 9月・1月

- 音楽（小中）音楽担当者会 6月・9月・10月・2月 村内音楽会 11月  
図工、美術、計画立案 5月 作品観賞 6月  
実技研修会 8月 農協カレンダーに協力 10月 日展見学 11月 郡市美術展に協力 1月 まとめ 3月  
家庭技術 担当者会 7月・11月・2月  
調理実習 8月  
体育（小中）体育担当者 5・7・9・11・12・1・2・3の各月  
スキー講習 1月  
道徳（小中） 年間指導計画の反省 6月  
授業研究会 2月  
特活（小中）担当者会 7月・11月・2月  
特教（小）研修会 6・7・11・2・3の各月  
英語（中）年間教育計画案、授業研究会 6月  
図書（小中）図書担当者研修会 6・7・9・2月 現地研修会 8月 読書感想文審査 10月  
同和（小中）研修会 6・9・10・2・3月 実践報告会参加 8月 合同会議 10月 村内同和教育研修会 美教研同和教育授業研究会 11月 全同教、埼同教等の参加 11月  
保健（小中）健康診断処理と統計 6月 性教育資料検討とカリキュラム 8月 学校保健委員会運営と内容の検討 9月 う歯の報告書作成と問題点 10月 都市保健主事研究テーマ検討 1月 1年の反省と次年度計画 2月  
視聴覚（中小）視聴覚機器研究 7月 郡映写機操作講演会 8月 郷土「みさと」スライド最検討 11月 テープの扱い研究会 2月  
安全（小中）安全指導の研修会 10月  
緑化（小中）担当者会 7月 11月  
校長会（小中）月例研修会 4・5・6・7・8・9・10・11・12・1・2・3月の各月

教頭会（小中）夏期休業中の行事 6月 学校行事運営について 9月 諸表簿の整理等について 2月

事務（小中）年間研究テーマの選定と計画 5月 短期給付について 5・6・8・9・2月の各月、学校予算配分と執行状況について、7月10月1月集中研修3日間 旅費等 8月、年間調整の仕方について 11月 次年度学校予算要求書の作成について 12月 人事移動に伴う書類について 3月

生徒指導（小中）担当者会 6月・9月・3月 数学（中）、体育（中）、進路指導（中）以上3研究部について都市単位の研究部にて活動する。推進教員は4校に置かれている。同和教育研究部の中に入って活動している。また、都市及び県の研究部の計画に従い活動に進めている。

## 6 今後の課題

研究部の内容により積極的に進めている部と消極的な部ができている。その実情をくわしく調べて調整できるものは時代に即応した形で変えていく必要を感じる。

都市単位で活動を進めている部の配慮もし

ていきたい。

また、社会構造の激しく変化する今日学校では数多い課題をかかえている。特に生徒指導や交通安全等の社会問題にかかわることが多い。小中間、小学校間のかかわりも出てくる。

学校、家庭、社会の3者の協力体制もより提携の必要度も高まってくる。この課題解決への方途にこの会が積極的に参加していきたい。

美里村では、小中学校共通な学校観をもっている。「児童生徒が人間として、幸福に、自己実現の充足感をもって生きる場所、一人ひとりを大事にする村として成長してきている。

小中学校教育課程全体の調和と統一を図り人間性豊かな児童、生徒の育成を図るために、学校の一体性を盛りあげ、共に知恵を出し合い協力し、より協議し、充実した研究会に発展するよう格段の努力を重ねていきたい。

この報告書作成にあたって先輩各位に力ぞえをわざらわしたにもかかわらず、資料不足のため、立派な業績が報告できず申し訳なく思っている。

# 神川・神泉教育研究会

## 1 会のあゆみ

現在残っている「神川教育研究会経過報告」（昭和41年作製）という資料によると、本会の前身である神川班（神川村・神泉村）教育研究協議会は児玉郡・本庄市教育研究協議会解散（昭和34年）にともない、他地域と同様に昭和35年4月に発足した。

役員構成については会長は学校長の中から、副会長・幹事は教頭の中から輪番で選出され簡単な7ヶ条からなる会則にもとづいた運営がなされていた。事業内容は研究主任会を主

軸に主任を中心とした連絡的な研究部活動にとどまっていたようである。

当時の歴代会長は次の通りである。昭和35年長谷川鶴松校長、昭和36年蓮舎実校長、昭和37年岡野武夫校長、昭和38年岡本真澄校長、昭和39年倉林三郎校長、昭和40年田村利三郎校長、昭和41年小林茂夫校長（予定）だった。

昭和40年、田村会長の時、自主的研究推進のために、会の性格や運営について、現状に対する反省と今後のあるべき姿を求めて、真剣な話し合いがもたれた。研究部長会、各校

代表者会、理事候補者会、役員候補者会等々精力的に会合が重ねられた。その内容は①理事会制度の確立、②役員の選出方法、③全員参加の運営、④新しい会則の制定、⑤会費の拠出、等々であった。

昭和41年7月11日に臨時総会が開催され、①新会則（神川班教育研究会会則）と②理事は決定されたが会長はじめ3役については選出されないまま総会は解散になった。

昭和42年に作られた「神川教育研究会に関する討議資料」によると、昭和42年度の新役員づくりが理事会を中心に始まり、立候補者との話し合いがつかず、神川・神泉の教職員組合が斡旋し、校長代表や役員立候補者との話し合いが数回持たれ、合意に達したかにみえたが新役員選出問題は暗礁にのり上げた。その後、昭和43年から昭和46年まで「教育研究会」については「たな上げ」という状態で空白時代が続いた。

昭和46年、同和教育について神川村教職員組合OBは、被差別部落の人達との話し合いを積極的にすすめてきた。また、神川村田野村長は同和教育を重要課題に取り上げてきた。このような情勢の中から研究会の再開がささやかれるようになった。

昭和47年6月16日（金）14：00から渡瀬小学校を会場に定期総会が開催された。この総会で決定されたことは、神川・神泉教育研究会会則と会長坂本敬信校長はじめ諸役員が選出され、空白時代に終止符が打たれ、会の正常な事業運営が開始され、全会員による自主的教育研究活動が再出発した。

昭和50年度以後の通常総会資料と、昭和51年度以後の機関誌「研究のあゆみ」は完全保存され、毎年、通常総会で、①役員改選、②事業計画、③予算計画が承諾・決定され、会の研究成果である機関誌「研究のあゆみ」も充実したものが教育財産として年々積み上げられ、今日に至っている。

昭和50年以後の歴代会長は次の通りである。

昭和50年度	九山勝男校長（神泉中）
昭和51年度	松永広裕校長（丹荘小）
昭和52年度	吉川洋一校長（神川中）
昭和53年度	原俊一校長（神泉中）
昭和54年度	金井英雄校長（渡瀬小）
昭和55年度	原俊一校長（青柳小）
昭和56年度	井田松雄校長（阿久原小）
昭和57年度	森田清司校長（丹荘小）
昭和58年度	田島正治校長（渡瀬小）
昭和59年度	山中清校長（神泉中）

## 2 主たる活動と事業

昭和48年度以後は総会資料、「研究のあゆみ」会長・幹事等の保存資料により、ある程度事業内容を明らかにできる。ここでは会の主催事業である講演会等を中心を取り上げる。

### 〔昭和48年度〕

8月11日 レクリエーション・本庄木村BLボーリング大会

### 〔昭和49年度〕

6月22日 通常総会（会場神川中）後、同和教育「狹山の黒い雨」上映

9月4日 同和教育 狹山現地視察

11月21日 レクリエーション 神川青年の家オリエンテーリング

### 〔昭和50年度〕

9月4日 レクリエーション 神川・神泉中  
バレーボール・ソフトボール等

2月18日 同和教育講演会 神川村役場

演題 「同和教育と文化活動について」

講師 丸木美術館主 丸木俊先生

共催 神川・神泉解放教育研究会

同和教育推進協議会

神川村同和対策協議会

### 〔昭和51年度〕

7月14日 解放教育研修全体会 神川中

演題 同和教育資料「ひかり」の取り扱いについて

講師 県同和教育課 関根武義指導主事

9月3日 レクリエーション 神川中

2月15日（火）13：30教育講演会

神川就改センター

演題「埼玉県の動物と自然保護」

講師 埼大教授、理学博士 須甲鉄也先生

[昭和52年度]

3月6日13：20 教育講演会 渡瀬小

演題 「かしこい子どもに育てるには」

講師 文教大学教授 石田恒好先生

[昭和53年度]

2月15日（火）14：00講演会

神川就改センター

演題 「これからの中の教育のあり方」

——家庭教育・学校教育——

講師 文教大学教授 石田恒好先生

[昭和54年度]

1月21日 教育講演会 神川就改センター

演題 「これから日本の日本教育」

講師 政治評論家 飯島 清氏

[昭和55年度]

1月21日（水）14：30講演会

神川就改センター

演題 「子供の成長とそれをとりまく環境」

講師 国立横浜少年鑑別所長 奥村晋先生

[昭和56年度]

1月21日（木）14：00講演会

神川就改センター

演題 「児童文学と性教育」

講師 日本児童文学者協会会員

秩父児童文学の会副会長横田進先生

[昭和57年度]

2月3日（木）13：40講演会

神川就改センター

演題 「近頃の子供の問題と教育」

講師 埼玉県教育センター指導相談部

教育相談所研究室長 金子保先生

[昭和58年度]

2月2日（木）14：00講演会

神川就改センター

演題 「先生のための非行学入門」

講師 横浜家庭裁判所主任調査官

宮内邦夫先生

### 3 特色ある活動

教育研究会の中心事業は各会員が会費を拠出し、自主的に参加し、教育研究を推進する研究部会活動である。昭和50年度から、会の機関誌「研究のあゆみ」の発行が継続され、会員の日々の実践・研究・研修の足跡が汗と苦労の結晶である手がきの冊子として、既に9冊を数えた。それらは貴重な教育財産として、地域教育進展に貢献し、会員一人一人の手もとに残され実践の指針となっている。この貴重な報告書の中から、いくつかの特色ある研究を取り上げ年度別に照会する。

昭和50年度「研究のあゆみ」

(1) 研究報告部会。習学、理科、図工美術、家庭、道徳、同和教育、障害児学級、学校図書館、保健、交通安全、学校緑化、学校経営、幼児教育、以上13部会

(2) 特色ある研究活動

学校経営研究部会。小学校長部会は「子どもの公害生活の現状と問題点」について各小学校4年以上にアンケートを実施し、その実態分析、問題点を明らかにした研究。小中教頭会は「校内研修の実践の一体化をどのように図ってゆくか」のテーマで各校の研修計画と実践と問題点を追求した事例研究である。

昭和51年度「研究のあゆみ」

(1) 研究報告部会。国語、書写、理科、図工美術、体育、家庭、道徳、同和教育、図書館、養護担当、学校給食、事務担当、学校経営、幼児教育、以上16部会

(2) 特色ある研究活動

理科部会。児玉教育事務所引田先生を講師に「地質岩石現地研修会（鬼石・万場）」と、専門家を招いて「実験用器械使用法研修」を実施し、地域と教科の特性を生かした研修が行われた。その後、年々岩石、植物の現地研修会が定着し、地域に密着した着実な歩みを進めている。

## 昭和52年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 15部会

### (2) 特色ある研究活動

生徒指導部会。生徒指導実態調査を神川・神泉小中学校児童生徒を対象に実施。内容は鍵っ子、こづかい、お年玉、心配ごと相談について等、児童生徒の生活環境を知り、生徒指導の指針を得、指導法の改善に役立てるために、その実態が分析・考察されている。

## 昭和53年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 19部会

### (2) 事務職員部会 「旅費請求事務の再確認について」法規、旅行命令簿の記載、旅費請求書作成等実務の実際を明確にしている。事務職員部会は毎年テーマをきめ事務処理の実際について研修を積み重ねている。

## 昭和54年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 12部会

### (2) 特色のある研究活動

社会科部会。副読本「かみかわ」の改訂作業と村内文化財めぐりの二つの事業に年年とりくみ、教科と地域に根づいた教材づくりと現地研修が着実な歩みを進めている。やがて「副読本」による授業実践研究と、村外の現地研修を実施し、深まりと広がりのある研究活動が進められている。

## 昭和55年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 国語、社会、理科、体育、家庭、障害児教育、保健養護、学校給食、学校経営、幼児教育、以上10部会

### (2) 特色のある研究活動

小家庭科部会。12月15日、波瀬小学校において、授業研究会が開催され、戸谷とよ先生が5年家庭科（題材「便利な袋」）の研究授業を実施、都市先生方多数の参加を得、家庭科教育が一步前進した。このころから、授業研究会が持てるまでに成長した部会がいくつかしてきた。

## 昭和56年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 11部会

### (2) 特色ある研究活動

障害児教育部会、一人一人障害を持つ子どもを見つめ、具体的な目標を立て、何ヶ月もかけ、血のにじむような子どもと先生の努力で目標が達成されていく、忍耐と愛の教育実践である。年々頭の下がる実践が報告されている。

## 昭和57年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 11部会

### (2) 特色のある研究活動

体育部会。教師も取り組みが消極的である「表現運動」にあえてとりくみ、題材「力強く作業が進行する感じ」について、5校で同一の指導案をつくり、6時間あつかいの指導計画を立て、各学校ごとに授業研究をし、その結果を持ち寄り、研究協議するというユニークな実践報告書である。

## 昭和58年度「研究のあゆみ」

### (1) 研究報告部会 12部会

### (2) 特色のある研究活動

道德部会。2月7日、神泉小学校で、道徳授業研究会が開催され、小高弘美先生が4年生を対象に題材「みんなでヨーコソ」（NHKテレビ利用）を研究授業し、都市の多くの先生方の参加を得、研究協議も活発に行われ、有意義な研究会であった。

## 4 昭和59年度の研究活動

### (1) 組織の概要

・会員 108名（神川・神泉村立幼小中教職員）

・役員 会長1名、副会長2名、幹事2名  
監事2名、理事9名（各校代表）

### (2) 本年度予算

○収 入	180,447
会 費	32,400 (300×108人)
補助金	110,000
繰越金	37,047
雑収入	1,000
○支 出	180,447

会議費	34,000
事業費	145,000
予備費	1,447

### (3) 本年度事業計画

- ・総会 1回
- ・理事会 定例、学期1回
- ・三役幹事会 定例、学期1回
- ・部長連絡会 1回
- ・講演会 11月20日(火)宗像憲治先生予定
- ・研究のあゆみ、各部の研究を集録
- ・研究部会、教科等、12、領域等、15、合計27部会。各部会ごとに行事計画、予算計画、研究部会(組織・行事計画)により実施。

### 5 運営に当つての問題点と今後の課題

27の各研究部会は部長・副部長を中心に、地域や子どもの実態を見きわめながら、それぞれ着実な歩みを進めているが、

- (1) 勤務時間や学級事務の繁雑さ、小規模校による兼務の多さ、部員の少ない中学部会

(2校)等々、ややもすると消極的でないものの研究部活動になりやすいが、各会員の自覚や教育に対する危機感や問題意識を高めて、活発な研究部活動を推進したい。

- (2) 各研究部の研究計画は、教材研究、実態調査、現地研修、技能講習等、工夫をこらした研究をしているが、行事消化型でなく、自主的で地域に密着した積み重ね型の研究になるよう努力したい。
- (3) 教師は授業で勝負する。授業研究会を通して、子どもの顔や声や作品のある実践研究の増えることが望まれる。
- (4) 「研究のあゆみ」の内容を子どもの姿の見える実践記録として、教師の見識や技能や力量を高める研究集録として、地域の教育財産として、より充実させ積み上げていきたい。
- (5) 今後はさらに会員相互が協力しあい、研究を深め、民主的な運営を図り、よりよい研究の場となるよう努力したい。

## 熊谷市教育研究協議会

### 1 会のあゆみ

熊谷市教育研究協議会の会則は昭和25年4月1日より実施されている。その会則中

#### 第二章 目的 をあげると

第三条 本会は学校経営各般の研究に依り熊谷市教育の振興を図るを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成する為次の事業を行う。

- 1 調査研究
- 2 講習会・講演会・研究協議会・学習指導研究会の開催
- 3 児童生徒の音楽会・各種展覧会  
体育会・リクレーション等の開催
- 4 機関誌の発行
- 5 視察

### 6 図書教具の紹介

### 7 関係官庁への意見具申

### 8 其の他目的達成の為必要な事

この目的に関する事項については、一部字句の修正はあるが、現在に至るも内容的には全く変わっていない。

次に歴代会長名をあげさせていただきわかる範囲で予算額をあげてみたい。

昭和25年度会長 小久保為治 氏

昭和26年度会長 小久保為治 氏

昭和27年度会長 萩原 貞一 氏

同予算 317,271円

昭和28年度会長 萩原 貞一 氏

同予算 241,700円

昭和29年度会長 萩原 貞一 氏

同予算 250,600円  
昭和30年度会長 若旅 進一 氏  
昭和31年度会長 若旅 進一 氏  
同予算 277,180円  
昭和32年度会長 若旅 進一 氏  
同予算 294,000円  
昭和33年度会長 若旅 進一 氏  
同予算 268,010円  
昭和34年度会長 若旅 進一 氏  
同予算 285,230円  
昭和35年度会長 高橋 昇 氏  
同予算 279,047円  
昭和36年度会長 高橋 昇 氏  
同予算 279,996円  
昭和37年度会長 高橋 昇 氏  
同予算 284,736円  
昭和38年度会長 高橋 昇 氏  
同予算 292,852円  
昭和39年度会長 新井 久三 氏  
同予算 433,893円  
昭和40年度会長 新井 久三 氏  
同予算 459,756円  
昭和41年度会長 篠沢 貞一 氏  
同予算 510,032円  
昭和42年度会長 篠沢 貞一 氏  
同予算 549,998円  
昭和43年度会長 原口 昌純 氏  
同予算 584,817円  
昭和44年度会長 原口 昌純 氏  
同予算 795,325円  
昭和45年度会長 渡辺 房次 氏  
同予算 813,690円  
昭和46年度会長 渡辺 房次 氏  
同予算 820,157円  
昭和47年度会長 渡辺 房次 氏  
同予算 832,037円  
昭和48年度会長 土岐 光郎 氏  
同予算 1,100,929円  
昭和49年度会長 神沼新十郎 氏  
同予算 1,684,994円

昭和50年度会長 神沼新十郎 氏  
同予算 1,830,104円  
昭和51年度会長 柿沼 定雄 氏  
同予算 1,937,715円  
昭和52年度会長 柿沼 定雄 氏  
同予算 2,014,623円  
昭和53年度会長 須永 栄作 氏  
同予算 2,258,420円  
昭和54年度会長 柿沼 定雄 氏  
同予算 2,263,710円  
昭和55年度会長 新井 松三 氏  
同予算 2,311,116円  
昭和56年度会長 中村 邦夫 氏  
同予算 2,200,197円  
昭和57年度会長 梅沢 恭一 氏  
同予算 2,510,008円  
昭和58年度会長 櫻沢 近 氏  
同予算 2,507,845円  
昭和59年度会長 戸井田経世 氏  
同予算 2,443,190円

## 2 主なる活動と事業

前記した会則にもとづき学校経営各般の研究により熊谷市教育の振興に努力してきた。なお活動事業についても前記したとおりである。

各研究部の自主的活動は発足当初より盛んであったが、各部毎年次に研究課題を設け研究している。

昭和37年頃より研究要録の作成も行い現在に及んでいる。

又各研究指定校に対する、研究協力及び補助も行っている。総会資料中に各校の研究課題をあげ、各校相互の連携がとれるようにしてある

会報の発行・教育講演会・学習指導研究協議会（各年度毎に各校もちまわりで行う）先進校視察も行ってきた。又各年教育講演会をもち全員参加を原則として研修を深めている。

## 3 特色ある活動

研究要録については、20年以上の長きにわた

って作製し、研究の成果を示し又反省のもととし、つぎの出発の手がかりとして来た。その内容は主として次のようなものである。

各教科・領域研究部の研究成果の概略

学習指導研究協議会の研究報告

個人研究

教育講演会の内容の概略

その他各校の研究成果等

会報については、昭和46年10月20日号を第1号として現在に及んでいる。内容については個人又は研究部の研究成果、随想、各同好会紹介など広範囲にわたるが、必ず座談会を設け、その記録をのせている。

大きくは「熊谷の教育を語る」というテーマであるがそのつど小テーマをもうけて話し合いをすすめている。出席者は指導者を含めて、7～8人であり、校長・教頭・教諭、又は学識経験者等に依頼し、男女、年令等を考慮して構成している。そのつどとりあげるテーマを見ると当研究会及びその時々の教育問題の一部がうかがえる感がする。そこで各号のテーマを列記したいと思う。なお各年3号ずつ発行しているので発行年月日は約させていただくが、昭和46年度は2回他の年は3回ずつである。

1号 研修・研究の視点から

2号 学習のあり方を求めて

3号 創造的思考力を追求する。

4号 心のふれあいを求めて

5号 熊谷教育を求めて先輩に学ぶ

6号 ——教育の基盤——児童理解を追求する。

7号 より深い個人研修の姿を尋ねて

8号 望ましい児童生徒像を求めて

9号 児童生徒の遊びを追求する。

——豊かな人間性を育てるために子どもの立場から考える学習指導の問題点と改善

10号 教材の見方、生かし方、——教科書や資料をどう生かしたらよいか

- |     |  |
|-----|--|
| 12号 | 望ましい家庭学習のあり方                           |
| 13号 | 子どもを生かす評価                              |
| 14号 | ゆとりある学校の姿を求めて                          |
| 15号 | 学校における安全指導を考える                         |
| 16号 | 「わかる授業」とは何か                            |
| 17号 | 生き生きした児童生徒を育てる生徒指導                     |
| 18号 | 体力の向上を目指して                             |
| 19号 | 教師と子どもの人間関係の深まりをめざして——望ましい教師像を探る       |
| 20号 | 普通学級における心身の障害を持つ子の指導                   |
| 21号 | 豊かな人間性を育てる学級経営                         |
| 22号 | 基本的生活習慣の育成をめざして                        |
| 23号 | 子ども一人ひとりを生かす学習指導の改善と工夫                 |
| 24号 | 子供たちの学習意欲をどのように高めるか                    |
| 25号 | 学校と家庭の協力を求めて<br>——生徒指導のあり方——           |
| 26号 | ゆとりと充実をめざす教育活動                         |
| 27号 | 主体的に学習にとりくむ児童生徒の育成をめざして                |
| 28号 | 変化する子どもたちに対応するために——生徒理解の方法——           |
| 29号 | 現代教師の悩みを語る——子ども父兄・同僚とのあり方をめぐって         |
| 30号 | あすの熊谷の教育に夢を託して 新採用者八名大いに語る             |
| 31号 | 非行の芽をつむ生徒指導——教師と子どもの触れあいで              |
| 32号 | 「わかる授業」をめざして                           |
| 33号 | 学習のしつけをどうしたらよいか                        |
| 34号 | いきいきと運動する子をめざして<br>——体力づくりと健康安全——      |
| 35号 | 父母との心のつながりを求めて<br>——学校と家庭・地域との連携のあり方—— |
| 36号 | 基本的生活習慣の指導                             |

- 子どもの実態と対策——  
 37号 児童・生徒を取りまく環境と教育  
 ——教室の顔・家庭の顔——  
 38号 生徒指導上での学校と家庭の教育力  
 ——今教師に求められているもの  
 39号 今、改めて清掃活動を問う  
 ——その実態と意義——  
 なお各号はB5版8ページ程度であり、約半分の4ページ分ほどを座談会にあてている。  
 教育講演会・学習指導研究協議会の細部については略す事にする。

#### 4 運営に当つての問題点

どこでも考えられると思うが、予算の問題がある。特に当会の予算内における総合事業費、(会報・要録・研究助成・講演会等)の費用がどうしても少な目なのでその面の運営に苦慮する。

又会員の個々の考えをいかに反映して会の運営にあたり、常に新たな希望をもって目的にそった効果を上げて行くか考えなければならない問題である。

#### 5 昭和59年度の研究活動

##### 1 本年度の基本方針

- (1)会員の声を反映して、研究活動の合理化効率化をはかる。
- (2)各学校の教育活動を旺盛にし、本市教育の向上をはかる。
- (3)全体研修会を実施し、会員ひとりひとりの研究意欲を高め、資質の向上をはかる。
- (4)各研究部は研究課題を明確にし、日常の指導に密着した研究活動を行う。
- (5)教育課程の充実改善につとめる。
- (6)同和教育の推進につとめる。

##### 2 実施事項

- (1)研究課題に基づく調査研究活動の実施
- (2)研究要録・会報の発行
- (3)各学校における各教科等の研究への協力
- (4)学習指導研究協議会の実施

- 本年度協力校 石原小(理科)  
 奈良小(体育) 別府小(図工)  
 桜木小(特活) 11月29日実施  
 荒川中(数学・音楽) 中条中(美術  
 英語) 東中(特活) 12月4日実施  
 それぞれ小中別に全会員がいずれかの校の協議会に参加する。
- (5)講習会・講演会・実技練習会等の実施
  - (6)児童・生徒・職員の音楽会・展覧会・体育会・レクリエーション等の実施
  - (7)各教科・領域等の研究推進
  - (8)先進校視察  
 教頭・社会・理科・体育(小)技家(男)  
 道徳・学校給食・同和教育・視聴覚・保健主事の各研究部が行う。

#### 6 今後の課題

教育に関する内外の情勢の変化を考えた時常にそれを見とおして、現在の児童・生徒のために会の運営はいかになければならないか柔軟な心構えで、具体的にとらえていきたい。

歴史のつみ重ねの上に立つ当会の長所をより一層のばすとともに新しい活力をいかにしてとり入れるか今後の課題である。

# 深谷地区教育研究会

## 1. 会のあゆみ

### (1) 会の創立

本会は戦後間もない昭和24年5月10日にその産声をあげた。

役員構成は、会長・黒田義平（深中）、副会長・柳喜寿（深小）、董塙直四郎（藤中）、幹事・徳橋善四郎（深中）、杉本秀光（深中）、と、後に県教育界の大御所になって活躍された先生方が名を連ねていた。

当時の予算は26,930円、事業計画では校長会・教務主任会・女教師代表会のものと、教科研究会が小中別にそれぞれ作られて、主任会・研究会・研究事業・他校参観など、現在の研究会とほとんど変わらない原型をもう固めていた。

### (2) 会の発展

以後、戦後の教育振興のための母胎となって、多少の組織上・運営上の変動もあつたが生生發展の一途をたどって、深谷教研の名声を県下に響かせていった。

その一端を知らしめるものとして、初期のころの活動の状況をいくつか例示してみたい。

◎ 昭和29年度から、教科研究を重点的に取り扱う、いわゆる重点教科の選定が行われた。小学校は社会・算数・図工・中学校は社会・数学・職業・音楽であった。また校長が教科委員となるのもこの年度から始まった。

### ◎ 昭和30年度事業計画について

#### 1. 教科研究を重視する

本年度重点教科を左の通り選定する。

小学校 国語 理科 音楽 体育

中学校 国語 理科 図工 体育

#### 2. 右の教科を重点とし特に広汎にして積

極的な研究をのぞむが故にこの教科の主任の特別な研究視察のため出張を次の要領によってさだめる。

- 1 回数 年一回 必ずしも県外と限らない
- 2 単なる視察に終らず教科研究を中心とする
- 3 旅費は一人500円以内とし、学校負担300円、本会負担200円とする
- 3 次年度の重点教科は追って決定する。
- 4 教科全般に亘り左によって計画をたて充分にその研究目的を達成するようする。
  - 1 各教科研究会（主任会も含む）は年5回を原則とする。
  - 2 県外（内）視察は右回数に含めない。
  - 5 校長も教科研究会に参加する（教科委員）
  - 6 会合は特に協議研究を必要とする場合だけにとどめ文書その他によって間に合うときは極力そうする。

◎ 昭和30年度深谷班の小中学校数は、小学校11校、中学校11校となっている。まだ深谷町では小学校は1校だけ、中学校は統合以前のため小学校と同数。ちなみに深谷小の児童数は3224名。学級数は57学級、2年生などは667名で11学級、学級平均60名以上となっている。教員数は64名とものすごいマンモス校であった。

#### 2. 主たる活動と事業

創立以来の活動を点検してみると、発足して数年でほぼ現在の活動の母胎ができあがついて、それをずっと現在まで持ち続けてきたといえよう。

もちろん教育研究会であるから、文字通り教科や領域を中心としての研修、特に事業研究を重視したことはいうまでもない。

その上に小中各学校の行事活動も教育研究会で主催して実施するもの多かった。その行事にどんなものがあったか、昭和37年度の行事予定表を見ると、

○連合運動会

小 1500円 中 2000円

○長距離走

小 500円 中 1000円

○球技大会

小 500円

○図工制作会

小 1000円 中 1000円

○理科展

小 500円 中 500円

○発明工夫展

小 500円 中 1000円

○書初め展

小 1000円 中 1000円

○音楽会

小 1000円 中 1000円

○児童生徒協議会

小 1000円 中 1000円

○英語コンテスト

中 1000円

○感想文コンクール

1000円

○展示会

2000円

○教職員体育大会

2000円

○女教師研修

2500円

○研究発表会

3300円

○県研究指定発表会

5000円

○総合研究会

各 15000円

以上の行事は現在も続けられているものも多いが、行事精選によって既に淘汰されているものもある。しかし教研の重みというか歴史というか、教育的な期待は強く、教研行事の存在は依然として大きい。

### 3 特色ある活動

#### (1) 重点教科研究発表会

研究会発足直後から重点教科が指定され、それについては全員が集まっての研究発表会が昭和30年代前半から実施されていた。これはその年度の教育研修のしめくくりとして大変役に立ち、これに刺激されて研修意欲を高める教師が多かった。

この教科研究発表会は、昭和47年度で終止符を打ち、その後は研究紀要を発行することになった。その第一回の紀要の巻頭言に当時の持田千代吉会長は次のようなことばを寄せている。

「……この度、学校行事の精選・事業時間の確保という見地から、長年にわたって開催され、本地区教育の進展のためあずかって力の大きかった、全会員一堂に会しての重点教科の研究発表会をとりやめ、研究紀要を作成することになり、そのだい1号の発刊をみたことは、これまでと違った角度から、本研究会の内容の充実と発展を示すものと考え、限りない喜びを感じるものである……」

この発表会は単に教科研査ということだけでなく、教師間の親睦や、ユニークな教師の活躍とか発表形式のくふうとか、そんな副産物も出た楽しく有意義な一大イベントでもあったのである。

#### (2) 研究紀要の発行

昭和48年度から現在に至るまで、研究紀要を発行して、全職員や関係者に配布している。今年度はその第12集を発行する予定になっている。その内容は、重点教育のまとめ隨想・

特色ある学校経営など、読んでためになるだけでなく、読み親しみやすいものを志向している。

#### (3) 広報「きょうけん」の発行。

研究紀要が年度末の集大成となる性格のものなので、年度の途中で研究の歩み方と検討してみる機関紙のようなものがあれば、もっと活動の幅や広がるのでは、ということで、昭和56年度の宇野一会長の発案で年2回の発行の広報を発行することになった。

学校めぐりや郷土の偉人の紹介、会員の声などを集録しているが、座談会とか、授業研究の特集などをして紙面に変化を持たせるくふうもしている。

#### (4) 会員のための講演会

教研発足以来これは続けられている。教育問題を始めとして一般教養あり時局的課題ありで、今までにたくさんのはばらしい講師を迎えていた。今年度は、女性詩人高田敏子先生の講演を予定している。

#### (5) 合同授業研究会

教育研究会は各教科や領域の主任を中心として運営されている。そのため主任以外の者がなかなか授業研究に参加できない。また主任であっても他の教科や領域の授業には参加できないなどの理由で、昭和56年度から、小中ともに、合同授業研究会と称し、教科と領域の半分づつを公開する研究会を設定した。

これは授業研究の質と量を確立する意味で大きな意味を持つが、その運営についてはもうすこし改善する要がありそうだ。

#### (6) 連合運動会

これは1町10ヶ村（深谷町・明戸村・大寄村・幡羅村・藤沢村・中瀬村・新会村・八基村・岡部村・櫻沢村・本郷村）の戦前の時代から続いてきたものを、教育研究会が生れてから引き継いで実施されている。ただ中学校では行事が多過ぎるため、昭和58年度から実施を見合わせている。小学校は現在17校、来年度は中瀬小と新会小合併して豊里小となり

16校となるが、新築成了った深谷小で長い伝統と歴史を物語るこの運動会はなお續いていくことになるだろう。

#### (7) 小中音楽会

音楽教育の重要な一環として、歌唱や器楽演奏の発表の場として、永い間貢献してきた。そして、昭和57年度から深谷市民会館完成に伴い、会場をここに設定して、音響効果も高まり、情操教育のいっそうの実を結ぼうとしている。

#### (8) その他

小学校のサッカー大会などの運動面や、展覧会などの美術面で、この教研が主催して顕著な成果をあげている。

### 4. 運営に当っての問題点

(1) 研究会長の学校が事務局となるため、事務関係で係りの職員が多忙になる。

(2) 予算面が苦しいが、教委からの助成金と会費でどうにかまかなっている。重点教科とそうでないものを多少傾斜して配分したり、事業費などで、会場を借りる場合など特に高額（講演会や音楽会）になるとPTAと共に催して、一部補助を受けている。

(3) 教研活動が真に教師自身の研修や実践につながる運営になるよう努力はしているが授業時数や学校規模などでうまくいかなくなることもある。会議の時間を遅くしたり、回数をへらしたり、実質的なことのみしづつたり、くふうはこらしているが、これは発足以来のなやみとして現在まで持ちこしている問題点のようだ。

### 5 昭和59年度の研究活動

以上述べてきたことがらを継承して、今年度も順調に活動している。本年度の努力目標は、

- ① 会員の研修につとめ、資質の向上を期する。
- ② 学習意欲を高める指導法を推進する。
- ③ 生徒指導の力量の向上をはかる。

#### ④ 同和教育、安全教育の推進をはかる。

以上のように、今日的課題と不变の命題を調和させて深谷地区の教育地盤底上げの核となつて活動しているわけである。

### 6 今後の課題

教育研究会が長い歴史を持続しているのは、発足以来の関係者が確固として理念と情熱を

持つて運営に当られたからだと思う。

今後の運営についてもそのことがあてはまるし、特に教師の層が多面性を帯びたり、非行など教育状況が悪化していく中で、真に教育の礎を築いていく意味で、その課題はますます大きくなつていくだろう。

## 妻沼町教育研究会

### 1 妻沼町教育研究会のあゆみ

本会は旧妻沼町、長井村、秦村、男沼村、太田村、別府村、奈良村の一町六ヶ村（後日別府、奈良は熊谷市に合併のため分離）の各町村立小中学校教職員により、昭和24年7月13日設立総会が持たれ、それまで自然発生的であった教職員の連絡、調整、研修グループが研究団体として正式に発足した。

その後、昭和30年1月町村合併により、妻沼町立各小中学校となったが、本会の組織はそのまま存続され活動を続けている。

初代会長には石井金平会長が推せんされ、以来11代の会長を経て現在に至っている。本会の目的とする所は、「会員の資質の向上を期し、学校教育の振興を図る」であり、一貫として変わっていない。

いうまでもなく、当研究会は教職員の自主的研究団体ではあるが、特に当妻沼町は行政施策の最重点に教育の向上を掲げ、その振興に力を尽くしており、この面での強力なバックアップをいただき、年々充実した会の運営がなされている。

### 2 主たる活動と事業

本会はその目的達成のために、研究会・講習会・講演会・競技会・展覧会・練習会その他の行事を年間百数十回にわたって実施し、着実な実績を積み重ね、妻沼町教育界の伸展

に貢献している。

### 3 特色ある活動

#### (1) 研究発表会の開催

例年3月初旬、会員個人、グループ等により、年間に於ける夫々の研究実績を6～8研究文書による資料及び口頭で全会員対象に発表し、職能向上の資とする。

#### (2) 教育講演会の開催

毎年8月21日午後、各界の指導者の来会を仰ぎ、人格形成、教養の深化を目指し講演会を開催している。公演内容は会員の希望を集約し決定するが、過去の内容は教育・歴史・人物・時局・経済・健康等多岐にわたっている。

#### (3) 研究紀要の発行

各研究部の年間研究活動、個人研究、重点課題等を数十ページに集録し全会員に配布して研修の資としている。

#### (4) 先進校視察

例年、25研究部中約13程度の重点研究部（59年度8部）を指定し、優良校の視察によりその優れた面を学び、児童生徒の指導に生かしている。

#### (5) 教職員研修会

町教育委員会とタイアップし、新任教員研修会、年度別研修会、職域別研修会等の実施により職能の向上を図っている。

## (6) 研究校の指定

国、県、町、各研究団体等より委嘱された各校の研究に対し、その校のみの研究とせず、当会も研究委嘱をし、全会員の協力によってその研究の深まりと前進に寄与している。

## 4 運営に当たっての問題点

特に問題として挙げるべきものはないが、時間、経費、学校規模等から多少の支障は否めない。

### (1) 集会回数の制限

各研究部の研究を深めるためには、集会数を多く必要とするが、生徒指導・時数確保等に支障の恐れがあり、又、小規模校運営対策として1日2集会以内に制限を加えている。ために、研究が深奥をつけぬ怖れも生ずる。

### (2) 講師招へい等の制限

研究を一層深めるために、適切な指導者招へいや先進校視察による研修が望ましいが、経費の点から指導者については各部年1回、視察は1~3部に限定している現状である。

## 5 昭和59年度の研究活動

- (1) 会員数 198名 (男100女98)
- (2) 研究部 25部
- (3) 事業数 160回
- (4) 予算 899,463円

(内、町教委補助45万円)

- (5) 目的 会員の資質の向上を期し、学校教育の振興を図る

### (6) 事業

- ①研究会、講習会、講演会等に関する事項
- ②競技会、展覧会、練習会等に関する事項
- ③その他目的達成に必要な事項。

### (7) 各研究部の研究目標

研究部名	小学校	中学校
1 田舎	児童段階に応じた基礎的国語力の定着をはかる(説む→考える→書く)	学習のねらいを確かにすることと評価の工夫
2 書写	文字認識を高める書写指導	
3 社会	3年生評価問題の作成	作業を取り入れた社会科学習指導の研究
4 算数・数学	わかる喜びを育てる算数指導 (指導過程の研究)	意欲的な学習活動を促す授業の展開を工夫する
5 理科	先行経験を生かした導入時の事象提示の研究	
6 音楽	個人差に応じた指導の工夫について	
7 国工・美術	工作・工芸における用具の適切な取扱いについて	
8 保健体育	一人ひとりの見立てに運動の楽しさを味わわせる体育指導の研究	自動的に技能を高める体育活動の実践
9 家庭	衣服領域における指導内容の研究	
10 技術・家庭		男女相互乗り入れの指導法の研究
11 英語		生徒を生かす評価の研究
12 道徳	児童の道徳的な考え方や感じ方が深められる指導過程の創造	
13 進路指導		各学年の進路情報の収集と活用
14 生徒指導	基本的生活態度及び習慣の育成	
15 特別活動	連帯感を探め、学校生活をより豊かにするための係活動の実践	
16 食	よりよい給食指導を求めて(食事中のマナーについて)	
17 同和教育	授業実践を通しての同和教育の見直し	○児童生徒の実態把握 ○指導法の具体的な内容・方法について
18 特殊教育	障害の特性理解と指導法	
19 視聴覚	学習効果を高めるための視聴覚教材の活用	
20 図書館	学校図書館の利用と読書指導	
21 性教育	誰にでもできる性教育の指導資料づくり	
22 保健主事	誰にでもできる性教育の指導資料づくり	
23 学校事務	病休・休職等の事務処理について	
24 学校運営	学校運営の円滑化と計画的な評価	
25 学校運営	効率的な学校経営の研究	

(8) 各部の研究

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
小 国語 (評価) 8,500	年間計画作成会	国語教育研究協議会 ㊂		文集けやき原稿審査㊂ 評価問題作成打ち合せ会㊂	評価問題作成(2年) ㊂		授業研究会 ㊂ ㊂	国語調査実施上の打ち合せ、問題配布㊂国語調査実施		評価結果の分析㊂	本年度の反省㊂	
中 国語 (評価) 7,500	同 上		国語教育研究協議会 ㊂	文集けやき原稿審査 ㊂			授業研究会 ㊂ ㊂	評価問題作成㊂		評価結果の分析 ㊂		本年度の反省 ㊂
小 書写 中 ◎ 8,000	同 上		硬筆作品審査 ㊂				授業研究会 ㊂		実技研修 ㊂ ㊂	大里書初展 町書画展		
小 社会 2,000	同 上	問題作成会準備会 ㊂	問題作成会 ㊂					問題作成会 ㊂		まとめ ㊂		
中 社会 6,500	同 上		授業研究会 ㊂ ㊂				研究会 ㊂				研究のまとめと反省㊂	
小 算数 (評価) ◎10,000	同 上	学力調査問題作成準備会 ㊂	授業研究会 ㊂ ㊂					県外視察 ㊂ 学力調査11/6	学力調査の分析とまとめ ㊂			
中 数学 ◎ 4,500	同 上		県外視察 ㊂				授業研究会 ㊂	(算数研究発表会)	評価問題作成会(3年) ㊂		まとめと反省 ㊂	
小 理科 8,000	同 上		実験研修会 ㊂ ㊂			科学展打ち合せ会 ㊂	科学展搬出入			年間のまとめ ㊂		
小 音楽 中 ◎ 17,000	同 上		声楽講習会 ㊂	優良校参観 ㊂			大会準備会 ㊂	器楽講習会 ㊂			反省会 ㊂	
小 国工・美術 2,000	同 上	絵画展打ち合せ会 ㊂	小中校絵画展 ㊂							美術展打ち合せ会 ㊂		

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
小 中 保 健 体 育 中 12,000	年間計画作成会	授業研究会⑫	運動能力渠計⑬	水泳大会準備会、教職員体育大会準備会⑪	(小)水泳大会⑫ (中)水泳大会⑫	連合体育大会準備会⑪(小)	小連合体育大会⑫ (中)陸上競技大会準備会⑪(中) (中)陸上協技大会⑫	授業研究会⑫ 研究のまとめ⑪			研究協議会⑭	
小 家 庭 7,500	同 上	年間指導計画検討会⑪		5・6年教材研究会⑫		創意くふう 展出品審査会⑪		授業研究会⑫			反省会⑪	
中 技 術・家庭 2,000	同 上		教育課程研究協議会⑭		実技研修会⑫	町内スピーチコンテスト準備会⑪					授業研究会⑫	学力テスト結果分析とまとめ⑪
中 英 語 (評価) 2,000	同 上		研究授業⑫				町内スピーチコンテスト⑫		評価問題作成会⑪		評価問題結果分析⑪	
小 中 道 德 8,000	同 上	年間指導計画作成打ち合わせ⑪					授業研究会⑫⑬				反省会⑪	
中 進路指導 ◎2,000	同 上	進路指導計画作成⑪		時数確保検討会⑪			進路情報収集と検討⑪				進路結果のまとめと反省⑪	
小 中 生徒指導 ◎6,000	同 上		各校生徒指導上の情報交換と対策⑪				非行事例研究会⑪	西中研究発表会参加⑭	県外視察(千葉県)⑫		学年末生徒指導と反省⑪	
小 中 特別活動 3,000	同 上			授業研究会⑫				係活動事例実践研究会⑪			まとめと反省⑪	

小 中	学校給食 6,000	年間計画作成会 献立作成会 ④	献立作成会 給食時間、時程実態調査		調理講習会 献立作成会 ④		献立作成会 ④指導内容重点化とするいわけ		献立作成会 ④はし使用指導法研究会		献立作成会 ④		献立作成会 ④反省会
小 中	同和教育 3,000	同 上					人権作文編集委員会④		同和問題研修会 ④	研究授業参加	研究授業参加	研究授業参加	反省会 ④
小 中	特殊教育 ◎11,000	同 上		先進校視察 ④	研修会 ④			授業研究会 ④ ④	現地学習会 ④				反省会 ④
小 中	視聴覚 8,000	同 上		VTR実技講習会④④					自作VTR検討会 ④				まとめと反省 ④
小 中	図書館 3,000	同 上		読書感想文コンクール準備会 ④				読書感想文コンクール審査会 ④	読書感想文集コンクール作成会 ④				
小 中	養護 4,000	同 上		保健統計研究会 ④	性教育指導資料研究会 ④ ④		性教育指導資料研究会及び疾病異常統計 ④					反省とまとめ ④	
小 中	保健主事 8,000	同 上			性教育指導資料研究 ④		同 上 ④					反省とまとめ ④	
小 中	学校事務 ◎12,000	同 上		資料の持ち寄り ④			内容の検討会 ④	県外視察 ④	内容の検討 ④ ④		研究のまとめ ④		
小 中	学校運営 (頭) 8,000	同 上	研究主題の推進 ④	学校運営上の諸問題 ④	研究主題の推進(教育長と話し合い) ④ ④	各校訪問 ④ 同和教育の研究(校長会と合同) ④	学校運営上の諸問題 ④	学校運営上の諸問題 ④	学校運営上の諸問題 ④	学校運営上の諸問題 ④	研究発表準備会 ④	学校運営上の諸問題 ④	行事の反省と来年度への課題 ④
小 中	学校運営 (長) 11,000	同 上	学校経営の研究 ④	学校経営の研究 ④	生徒指導の研究 ④	同和教育の研究 ④ ④	学校経営の研究 ④	障害児教育の研究 ④	学校運営の研究 ④	学校運営の研究 ④	学校経営の研究 ④	学校経営の研究 ④	学校行事の研究 ④

- (9) 上記各研究部事業の他、各種大会が下記のとおり実施される。
- ①小中絵画展（6月 小中348名）  
 ②小学校水泳大会（8月 5・6年児童200名）  
 ③中学校水泳大会（8月 1～3年選手250名）  
 ④中学校陸上競技大会（10月 選手400名）  
 ⑤小学校連合体育大会（10月 5・6年1300名）  
 ⑥音楽鑑賞会（10月 小6・中全1900名）  
 ⑦読書感想文コンクール（10月 小中）  
 ⑧スピーチコンテスト（10月 中代表22名）  
 ⑨地区発明創意工夫展（9月 小中）  
 ⑩児童現地研修会（11月 小中）  
 ⑪地区書初展（1月 小中）  
 ⑫科学教育振興展（10月 小中）

## 6 今後の課題

妻沼町教育研究会は会員の自覚と情熱により着実にその実を挙げている。しかし、前記4に述べた問題点をはじめ、研究そのものの深化、全会員への浸透、実践化等にあと一工夫の要がある。今後それらを更に掘り起こし反省の上に立って改善の必要があろう。

又、当研究会にのみ籍ることなく、広く郡県教育研究会との連携を緊密にし、当会一層の発展を期したい。

# 寄居班教育研究会

## 1 研究会の歩み

寄居班は、大里郡の南西部に位置し、秩父への入口にあたる。昭和21年戦後の混乱の中から「教職員組合寄居部会」が発足。これが「寄居班教育研究会」の前身となる。

当時寄居部会は、寄居町・折原村・鉢形村・男衾村・本郷村・武川村・花園村・用土村の1町7か村によって構成される。内部組織は、法制部・人事対策部・給与対策部・福利厚生部・教育文化部の5部であった。

終戦後の混乱期を過ぎ、社会状勢も徐々に落ち着きを取り戻し、組合の活動と教育研究は別にすべきであるという提唱があり、昭和25年教職員組合から独立し、「寄居班教育研究会」が発足した。

昭和30年町村合併が施行され、さきの町村が寄居町・川本村（後に川本町）・花園村（後に花園町）となったが、班の編成には異動はなかった。

昭和32年、昭和38年、昭和42年、昭和51年に

改組があり今日に至っている。

## 2 歴代会長

寄居班教育研究会は、教職員組合寄居部会が前身となっているので、部会長であった吉田勝雄校長を初代として、歴代会長をあげることにする。

年度	代	氏 名	勤務校
昭和21年 ～昭和24年	初代	吉田 勝雄	寄居小
昭和25年 ～昭和32年	第2代	佐久間 登茂	寄居小
昭和33年 ～昭和38年	第3代	藤田 薫	寄居小
昭和39年 ～昭和40年	第4代	小暮 正夫	城南中
昭和41年 ～昭和43年	第5代	関口 利雄	花園中
昭和44年	第6代	町田 貞治	寄居小

昭和45年	第7代	馬場 和一	川北中
昭和46年 ～ 昭和48年	第8代	石田 美治	寄居小
昭和49年 ～ 昭和50年	第9代	清水 介良	寄居中
昭和51年 ～ 昭和52年	第10代	戸塚 大三	花園中
昭和53年	第11代	飯島 正雄	城南中
昭和54年 ～ 昭和55年	第12代	吉田 賢治	用土中
昭和56年	第13代	麻生 章一	寄居小
昭和57年	第14代	吉田 俊雄	川北小
昭和58年	第15代	大野 昌一	用土小
昭和59年	第16代	宇野 章	寄居中

### 3 主たる活動と事業

#### 《活動及び事業の三つの柱》

本会の活動及び事業は、発足当時より、次の三つの柱によって実施され、現在に引き継がれている。

- (1) 会員の研修。
- (2) 会員及び児童・生徒の研究発表・展覧会等の開催。
- (3) 会員及び児童・生徒の各種体育行事の開催  
以下、この三つの柱にしたがい主な事業についてあげてみる。

#### 《会員の活動及び事業》

- (1) 教科・領域等の研究部を中心とした授業研究、教材研究、実技研修会等。
- (2) 教科・領域等の研究部による先進校視察（偶数年教科、奇数年教科外）
- (3) 班指定授業研究会  
昭和38年から、教育研究会で小・中学校とも当番校を決め、その校の希望教科を選定、授業研究会を開催。
- (4) 一斉研究会

教科・領域等の主任を中心とした授業研究会、あるいは班指定の授業研究会が開催されていたが、各校とも学校運営の都合で、研究会に参加する人数は限られ、主任以外の者が授業を見学する機会は殆んどなかった。

主任以外でも、担当教科の研修の要望が出され、昭和46年より、一斉研究会が開催された。内容、方法等には多少の変遷はあったが現在、以下のように実施されている。

- ①教育研究会で毎年、小学校3校、中学校2校を研究校に指定。（指定は1年、各校3年に一度指定を受ける。）
- ②指定校は、研究教科がダブルないよう話し合い研究教科を担当する。
- ③研究会当日は、各校とも授業は半日で切り、日直以外の者は、いずれかの学校の授業研究会に参加する。

#### (5) 教育講演会

会発足当時、夏季休業中、夏季講座として教育講演会が開催されていた。いつの時代か中止されそのまままであったのを、昭和58年予算を計上し、8月23日第1回を開催。

演題「教育雑感」講師県教育長長井五郎氏

#### (6) 研究紀要の刊行

昭和49年第1号発行。

各校、各研究部の研究課題の研究、指定校の研究、個人研究の成果を集録す。それぞれの担当で印刷、企画委員会で編集する。本年11号発行予定。

#### 《会員及び児童・生徒の研究発表展覧会等》

会員のそれは殆んど開催されていない。児童・生徒の主なものについて記す。

- (1) 書き初め展・昭和22年より開催。各校とも学級数を出品、展示公開。会場は持ち回り。既に第38回を数える。
- (2) 硬筆展 書き初め展と同じ要領で実施。本年第23回。作品を各校に巡回したこともある。
- (3) 理科展 小・中合同。継続観察が科学実験調査研究等を展示公開。第1回は昭和25年

頃か。現在も継続。会場は持ち回り。

(4) 研究発表及び発明創意工夫展

技術・家庭科分野の研究及び製作作品を展示公開。各校1点研究を発表する。昭和35年頃より開催される。現在も継続。

(5) 音楽会 第1回は昭和25年頃か。各校とも課題曲、自由曲を歌唱。後に器楽演奏も加わる。現在も継続。

(6) 写生会 各校、5名の代表が一同に会し、写生大会を開催。玉淀、長瀬等を会場とした。昭和25年から実施か。交通事情等により、昭和40年代に中止される。

(7) 読書感想発表会

学校図書館部が担当、児童・生徒の読書感想文の発表会を開催。各校1名の代表。昭和20年代半ばから、昭和40年代前半まで続く。現在は中止されている。

《会員及び児童・生徒の各種体育行事等》

会の発足当時からしばらく会員のリクリエーションとして球技大会が開催されていた。班としては、現在行われていない。

児童・生徒の体育行事についてのみ記す。

〈小学校〉

(1) 連合運動会 昭和22年より毎年秋、各校の5・6年生が参加し開催。昭和44年より競技種目がスポーツテストの種目となる。現在は、親善運動会と名称を変え、6年生のみ参加して開催している。

(2) 球技大会

①ドッヂボール大会 昭和22年より開催。各校男女各1チーム参加。昭和35年まで続く

②ソフトボール大会 昭和36年より、昭和55年まで。方法はドッヂボールと同様。

③ポートボール大会 昭和56年より開催。昭和58年より、ミニバスケットに変更。

(3) 水泳大会 昭和44年より毎年8月開催。会場は持回り。現在も継続。

〈中学校〉

(1) 寄居班連合体育大会 昭和22年11月第1回

開催。中学生の陸上競技全種目を実施。各校全員参加、はなやかな応援合戦を展開。昭和44年、交通事情生徒指導上の問題等により3年に一度の大会とする。この年より、集団演技が加わる。昭和53年、昭和55年に開催。昭和56年交通事情により、連合体育大会は中止され、3年に一度円良田湖畔1周の親善駅伝大会となる。本年開催年にあたる。

(2) 球技大会

- ①昭和22年新しい球技が登場。寄居班は小規模校が多く、各校共通に実施している球技種目が少なく、野球とバレーに限って開催する。
- ②昭和23年寄居班球技大会として全種目開催
- ③昭和24年より、学校体育協会が発足。班の球技大会が、その年より郡大会の予選を兼ねる形で開催されることになる。

(3) 寄居班中学校駅伝大会

- ①昭和29年第1回開催。各町村の学校訪問の形で実施される。寄居→折原→鉢形→男衾→本畠→武川→花園→用土→寄居。

スタートは年度によって変更。

- ②昭和44年から交通事情の悪化により学校訪問形式から円良田湖一周となる。

- ③昭和46年、第18回大会で中止される。

(注) 児童・生徒の文化的行事、小学校の体育行事は現在でも班の事業として継続開催している。中学校の体育行事は、3年に一度の駅伝、水泳大会以外班の事業はない。

殆どの行事が、郡単位の大会となり、県の大会へつながる予選会として、開催されている。

#### 4 特色のある活動

(1) 「戦後体育たて直し」研究発表会

昭和22年寄居小学校が、日本体育指導者連盟から研究委嘱を受ける。

研究主題は、号令が使えない「戦後体育の立て直し」という異色の研究であった。このため、寄居部会体育研究部が、全面的に研究に協力応援し、研究発表を成功させた。

- (2) 寄居班図工美術部研究発表会  
寄居班図工美術研究部は、昭和37年、昭和38年埼玉県教育委員会、埼玉県美術連盟より研究委嘱を受ける。  
研究主題「豊かな表現を育てる描画指導の展開」  
班内小学校9校、中学校6校がそれぞれ独自に研究に取り組む。研究発表は昭和38年11月27日、寄居小学校で開催された。  
当日、各校の図工美術主任によって、児童・生徒が引率され、出張授業が展開された。
- (3) 同好者の主体的研究  
班教育研究会発足間もなく、各研究部の研究主任等をはじめ同好者によるグループ研究が盛んに行われた。図工美術、理科、若年の読書グループなどが特に積極的に活動していく。
- 昭和37年理科研究会は、県教委より研究助成金を得ている。それぞれの研究部ともメンバー、研究内容、方法はあってはいるが現在も継続されている。
- なお、教育研究会の教科領域等の主任会を中心とした研究会には回数等の制約があり、研究が充分できないため、夏季休業中の自主研究が積極的に行われるようになった。
- 進路指導、技術、理科、図工美術、道徳、視放、保健部等の研究部が本年も自主的に研究会を持った。
- ## 5 運営に当っての問題点
- (1) 寄居班は、寄居町、川本町、花園町の三教育委員会管轄下にあるため、研究、運営面とも一律に行かず、何かにつけ時間を必要とする不便がある。
- (2) 教科領域の研究分野が多く、寄居班の各学校は小規模校のため、一人で幾つもの主任となる場合が多く、充分な研究ができない。
- (3) さまざまの立場での出張が多く、教育研究会の出張が制限され、毎年研究を深めるまでの活動ができない。
- ## 6 昭和59年度の研究活動（主なもの）
- |                          |     |
|--------------------------|-----|
| (1) 各教科・領域の研究部の授業研究会等。   |     |
| (2) 各教科外研究部の先進校視察。       |     |
| (3) 小学校一斉授業研究会。11月16日（金） |     |
| (4) 中学校一斉授業研究会。11月22日（木） |     |
| (5) 教育講演会                |     |
| (6) 小学校球技大会（バスケット6年）     | 5月  |
| (7) 小学校水泳大会              | 8月  |
| (8) 中学校水泳大会              | "   |
| (9) 小・中理科展               | 9月  |
| (10) 英語弁論、暗唱大会（中学校）      | 10月 |
| (11) 小学校親善運動会            | "   |
| (12) 小学校球技大会（5年）         | "   |
| (13) 中学校親善駅伝大会           | 11月 |
| (14) 班内小・中学校音楽会          | "   |

## 7 今後の課題

- (1) 班内の教職員が若がえり、経験年数も少なくなっている。研究主任の異動も激しく、研究をどう積み上げていくか。
- (2) 教師主導の学習指導はまだまだ改善されていない。子ども主体の学習指導をめざし、一層の研究が必要である。

# 江南教育研究会

## 1 会のあゆみ

江南地区は大里郡の南東に位置し、荒川の右岸に東西にのびる地域で、北は熊谷市に隣接し、南は比企丘陵の北端で、緑と田園に囲まれた美しい自然環境の中に、江南村と大里村の二ヶ村よりなり、各村小学校二校、中学校一校の計六校で、江南教育研究会を構成している。現在児童生徒数は合計で2704人（小学校1881人中学校824人）会員数（職員数）は小学校84人中学校43人合計127人である。

本会は昭和30年4月1日に発足し、以後30年の長期にわたり会員の資質の向上に意欲ある研究と児童生徒に直結した教育実践が続けられている。この会の前進である江南教育研究会は昭和22年に創立された。当時は小原村、御正村（現在は江南村）と大里吉見村、市田村（現在は大里村）更に吉岡村で構成されていた。昭和30年に吉岡村が熊谷市に合併され現在の江南教育研究会となった。

## 歴代会長

年度	氏名	在職校	期間
昭和30年 ～昭和45年	小澤八郎校長	江南中学校	16年
昭和46年	滝田栄一校長	市田小学校	1年
昭和47年 ～昭和48年	横瀬繁雄校長	大里中学校	2年
昭和49年	森本澄校長	江南南小学校	1年
昭和50年	植野芳雄校長	吉見小学校	1年
昭和51年 ～昭和54年	橋本寿夫校長	江南中学校	4年
昭和55年 ～昭和56年	浜島清治校長	江南北小学校	2年
昭和57年 ～昭和59年	鯨井暗雄校長	大里中学校	3年

## 組織

### 役員

会長 1名 副会長 1名  
理事 若干名（校長、教頭代表 部長代表）  
幹事 若干名（教頭2名）  
監事 若干名  
予算（59年度）  
歳入  
繰越金 80,055円  
会費 127,000円（1,000円 '127）  
負担金 80,000円  
(小学校20,000円 '4, 中学校20,000円 '2)  
補助金 83,000円  
(教委40,000 '2、班P3,000円)  
雑収入 1,000円  
計 371,055円

歳出  
旅費手当 12,000円  
会議費 16,000円  
事業費 290,000円  
負担金 22,000円  
事務費 13,000円  
予備費 18,055円  
計 371,055円

## 2 主たる活動と事業

創立以来今まで主たる活動と事業は、伝統的に受けつがれ、殆んど変わっていない。

- (1)一校一研究の指定
- (2)各校各種の指定研究に対して共催
- (3)重点教科の研究指定
- (4)先進校等の視察
- (5)「江南」誌の発行（現在は中止している）
- (6)水泳大会（夏季休業中に実施）
- (7)球技大会（小学校のみ実施）
- (8)陸上記録会

(9) 教育講演会（全体研修会として夏季休業中に実施）

### 3 特色ある活動

- (1) 教科及び教科外の研究部は26部会あり、小中学校の主任が中心となって、合同で研究を進めている。
- (2) 一校一研究の指定 大里村、江南村のそれぞれ一校ずつ指定し、3年に一度のローテーションで研究成果の発表を行っている。研究はその校が主体となっているが関係の教科研究部も協力する。発表会には、原則として、村内は全員、その他は、各校学年1名及び関係教科が参加する。研究期間は2年である。

年度 地区	56	57	58	59
大里	大中(生指)	市小(特活)	吉小(特活)	大中(学指)
江南	北小(保体)	江中(同和)	南小(国語)	北小(特活)

(3) 重点教科の研究 江南教育研究会は会員数が少ないので、全教科領域の研究を総合的に推進することが不可能のため、教科を三つの群に分け、3年間のローテーションでその年度の重点教科として設定し研究を進めている。指定を受けた研究部には、予算の増額、研究授業の実施、(学校運営に支障のない限りできるだけ多くの会員が参加する) 先進校等の視察、研究会には、主任以外の教科の担当者も参加する。

年度	群	群の教科等			
57	2群	社会(北)	図書(吉)	技術(大)	家庭(南)
58	3群	理科(大)	音楽(北)	特活(江)	道徳(市)
59	1群	算数(吉)	図美(南)	保育(市)	英語(江)

(4) 先進校等の視察、重点教科の先進校等の視察の他に、教科外の領域について、3群に分けて3年に1回のローテーションで、年度内に日帰りの視察等を実施している。

年度	群	教科等					
56	1	特殊	教心	祝放	進路	給食	
57	2	事務	学連	保育	保主		

58	3	安全	図書	生指	同和	
59	1	特殊	教心	祝賀	進路	給食

### (5) 会員実技研修会

年1回第1学期に会員の親睦を兼ねたバーボールの実技研修会を実施している。

### (6) 教育講演会

毎年、8月21日に会員全体研修会として実施している。研修内容は教職に関する内容と一般教養に関するものを隔年とし、講師は大学の教授、研究所、郷土の文化人、郷土史研究家等にお願いしている。

昭和59年度は、埼玉県教育公務員弘済会の共催で、東京音楽大学 理事長 法学博士野本良平先生に「精神の発達課程」という演題で公演をお願いした。講師の深い研究と幅広い経験に基づく有意義な研修であった。

### 4 運営に当っての問題点

学校数が少なく、しかも小規模なので会員数が少なくて1人の教師がいくつかの主任を担当しなければならぬので、主任会を中心とした研究を進める場合に負担が多くなる。研究会の回数を多くすると学校運営に支障をきたすのでどうしても制限せざるを得なくなる。現在は年3~5回位にとどめている。昨年度はそれぞの部で、のべ合計104回実施をしている。研究会の時間も授業への影響を配慮し、できるだけ遅らせているので、研究時間が短くなり充分な研究討議をする時間が少なく成果をあげにくい。研究に対する裏付けとなる予算についても、小規模研究会のため充分な措置ができない。

### 5 昭和59年度の研究活動

#### (1) 基本的な方針

- ① 児童、生徒の学力向上のための会員相互の研究活動につとめる。
- ② 事業の遂行にあたっては、会員の積極的主体的な参加を求める。
- ③ 行事等の精選集約により、授業時数の確

保につとめる。

- (4) 教育課程の研究推進をはかる。  
(2) 江南教育研究会の本年度の目標  
「豊かな人間性を育てる学習の個別化」
- (3) 研究部の目標  
部名 目標  
国語 理解領域における基礎基本をおさえた学習指導。  
書写 基本をおさえてひとりひとりの個性を伸ばす書写指導。  
社会 教材を精選し、驚きや感動を呼び起こす教材の構成を図る。  
児童生徒の主体的な取り組みを重視した授業を工夫する。  
算数 ひとりひとりの児童生徒を生かす指導法の研究  
理科 身のまわりのものを活用した理科学習  
音楽 基礎的基本的事項をおさえ、偏りのない指導計画を作成する。  
図・美 絵画における豊かな創造性を育てる  
保・体 各種の体育行事を通して、運動に親しみ運動好きの児童生徒を育てる。  
技術 技術的能力を定着させる学習指導  
家庭 学ぶ喜びを味わわせる授業の研究  
英語 ひとりひとりが楽しく学べる英語学習  
給食 学・家連携による給食指導  
道徳 基本的生活習慣の意義理解と実践力の養成  
同和 部落差別をなくしていくことのできる生き方を着実に育てる。  
特活 話し合い活動を通して児童生徒の自主性を育てる。  
保健 児童生徒の健康管理と性についての指導  
保主 学校保健安全年間計画の立案と実践  
安全 安全な通学（交通規則をまもらせるには）  
視聴覚 授業での教育機器の効果的利用の促

### 進

- 図書 校園図書館の正しい利用のしかたを身につけさせる。  
たくさんの本を読ませる。  
特殊 個々の児童生徒の能力に応じた学力の向上と生活態度の確立  
教心 問題行動をおこす児童生徒の心をどう促えるか  
生指 基本的な生活習慣の徹底を図り、非行化防止に努める。  
進路 ひとりひとりの進路意識を高め生きがいをもたせる。  
事務 仕事の合理化をはかる。  
学運 休業中の生活指導対策・行事等の研究

### 6 今後の課題

- (1) 研究集録の発行を行いたい。現在は各教科領域ごとに研究の積み重ねとして集録しているが、一校一研究の研究集録と合せて、重点教科の成果等を加え、研究会の一年間の紀要として「江南」を復活発行したい。  
(2) 主任会等の研究会の在り方について、小規模校の小学校4校、中学校2校のため相互の研究成果の持ち寄り、実践結果の成果など研究推進に不都合が多い。従って研究の深みが充分とは言えない面がある。研究会の時間の取り方等の問題解決と合せて講師を招いての研究体制等考えて行きたいそれには予算の裏付け等充分な配慮が必要となってくる。  
(3) 隣接の教育研究団体との連携について中学校2校では、教科によっては主任だけとなり、研究協議を進めることができない。他の教育研究団体との連絡協議会等をつくって問題解決をはかり研究推進をしたい。  
おわりに  
本会員が予算面では極めて苦しいが、各主任会の活動は活発であり、その活動を通じて「授業の質の向上」のために真正面からとり組み、実績を上げていることはこの上ない喜びである。

# 行田班教育研究会

行田市21校、南河原村2校、教職員523名を会員とする行田班教育研究会は、児童生徒12,729名のよりよい育成をめざして、会員の資質の向上と会員相互の親睦を深めながら、地域教育の振興に向かって発足以来32年着実にその歩みを続けている。

## 1 会の歩み

昭和28年 行田班教育研究会が発足。

目的 行田班教育研究会と称し、行田市、南河原村小中学校の各種研究活動を促進すると共に、相互の連絡を緊密にし、行田市、南河原村の教育の振興を図る。

事業

- ・教育の研究に関する事。
- ・教育の調査に関する事。
- ・研究成果並びに資料の作成に関する事。
- ・教職員の研修に関する事。
- ・県都市及び地域の教育研究団体との連絡提携に関する事。

組織

- ・本会は、班内小中学校職員をもって組織し、本会には、各種教育研究部を置く。

以上の規約を設けて32年間、春、秋年2回教育の研修大会や各教科領域等の研究活動を重ねながら現在に至っている。

## 2 主な活動と事業

### (1)研究集録第1号を発行

昭和29年度

各教科研究部の研究活動を集録、毎年1冊ずつ発行し、現在は、研究紀要として集録に当たっている。

### (2)教育研修大会の開催

毎年、4月と2月、全教職員参加の研修大会開催、現在63回目を数える。

#### (主な内容)

- ・市教育行政重点施策
- ・研究会の活動方針
- ・各研究部研究課題を計画
- ・研究成果の発表
- ・講演

#### (3)各教科、領域研部の活動

各教科、領域部門に分かれて、年度の目標を定め、研修成果を2月の研修大会で発表する。

#### (4)研究推進の委嘱と発表会

市教育委員会と連携して毎年2～3校研究推進校を指定、これと同時に研究協力校も定めて、内総力をあげて研究の推進に努めている。

#### (5)教職員教養講座の開催

昭和54年度より毎年夏季休業中に講座を開く、教職員自らを高める教養講座に全会員参加する。

## 3 特色ある活動

### (1)教育研修大会

年2回にわたる全教職員参加による研修大会を開催している。

4月は、年度の計画と総会を行い、更に講演会を実施している。

2月は、1年間の研修効果の発表という形で、各教科領域より研究成果をまとめ発表し研修を深めている。

### (2)各研究部活動

研究部会を30ほどに分けて、それぞれ研究主題を定め研究活動をすすめる。各部会では年3回から5回程度研究協議会を設け計

画的継続的に研究の推進を行い、年度末にそれ等をまとめ研究記録としている。

### (3)研究集録

昭和29年に第1号発行

- ・漢字学習の断片
- ・児童画に見られる疾病及び家庭環境の表出について
- ・家庭科学習とホームプロジェクトの価値
- ・遅進児指導の一考察
- ・性格異常児の観察
- ・問題児指導の事例
- ・市史に関する歴史論評

現在は研究紀要となり、31年間の教職員の研究の足跡と行田班教育の歴史をたどることができる。

## 5 昭和59年度研究活動

「自らを高める研修活動の推進」

この課題を設け次のような活動を行っている。

### (1)理事会

校長23名、研究部長9名で構成し、会の企画運営、予算案、事業計画の立案に当る。

### (2)各研究部会

総数30におよぶ専門部会を設け、それぞれ研究主題をきめて、事業計画を立て、年4～5回の会合を開いてこれを実践し、年度末にはその実績報告書をまとめている。

校長研究部

「教育家庭の研究と実践」を研修主題とし、月1回研究協議会を開き、学校経営管理の問題等実践上の諸課題解決をめざし自ら学ぶ校長会として努めている。

教頭研究部

望ましい学校運営のあり方、管理職の指導性について研究し、教頭職のあり方を明確にし、中枢的な職務内容を拒否して学校運営上の諸問題について研修している。

教務研究部

教務主任の職務内容の明確化と活動の能率化、教務主任の機能を学校運営の諸問題等について各学級の連携を深めながら実践を通してその研究に努めている。

保健主事研究部

学級担任が行う性教育授業のあり方、特に指導上の問題点とを明らかにすることに努めている。本年の目標とし、研修会を開き、更に保健パトロール等、学校相互の保健安全環境づくりに努力している。

研修研究部

研修主任としての指導のあり方

各校の研修課題、方法、内容等を持ちより自らを高める校内研修のあり方について相互研修会をもっている。

養護研究部

学級指導にいかされる保健指導資料の作成と更には現在の児童の心や身体に触れ異常について日常の健康安全指導や実践的研修を深める。

学校事務研究部

年間事務を系統立てて考え、事務の能率化、効率化を図る。

国語研究部

読解指導を通して言語指導をいかにするか。文集の作成や文学散歩等も行い教師の資質の向上を図る。

書写研究部

作品の見方、指導のポイントをいかにするか、硬筆展や書初展、実技講習会の実施。

社会科研究部

社会科郷土学習副読本の内容検討とそのあつかい方についての共同研究。

郷土現地見学手引の作成。

算数、数学研究部

初めて算数、数学主任となった教師の研修のあり方、教師を育て個に応じた授業を実践するための研修。

理科研究部

授業実践の向上をどうはかるかを目標とし、科学展の実施、実践実技講習会、現地研修を実施している。

#### 音楽研究部

音楽主任として、生徒の心に残る校内の音楽活動をいかに進めるかについて授業中心として研究、都市の音楽コンクールへ参加。

#### 図工美術研究部

##### 児童画の見方と評価

作品展や各種展覧会の実施、夏季休業中を利用しての実技講習。

#### 保健体育研究部

小中の実技講習会の持ち方について、実技講習会を通しての教師の指導技術の向上と体育大会の運営についての研究。

#### 家庭、技術家庭研究部

下記実技研修の実施と家庭部会では実践的態度を育てる学習指導、技術家庭では木材加工領域における望ましい題材の開発と教具の工夫について研修している。

#### 外国語研究部

教科書の内容分析とその指導について、特に遅れている子の配慮について研修。

#### 道徳研究部

望ましい道徳の授業、全体計画の作成の仕方について、各校の全体計画について相互研修、また資料の見方についての講習会

#### 特活研究部

児童生徒の自主的活動意識を高めていくためにと言う研修主題を設け、よりよい集団生活の育成を図る。

#### 図書館研究部

##### 学校図書館の利用指導と読書指導

読書の楽しさがわかる指導法の工夫

#### 視聴覚研究部

視聴覚教材利用の普及、活発化の方法について

校内研修に於て、授業で放送利用をいか

にするか、効率高い授業の実施を目指して研修を深める。

#### 教育心理研究部

意欲的教材利用の普及活発化の方法について

一年生の国語、算数の基礎学力をつける授業を通し、意欲的学習を図る。

#### 特殊教育研究部

障害の多様化による指導法をどのようにしたらよいか。

障害者の施設設備、障害児学級の運営。

#### 給食研究部

毎日食べている中で、どのように作られたのだろうか、衛生面や食品添加物などどうなっているか疑問をもたせ指導に当る。

給食センター、パン工場の見学。

#### 生活指導研究部

校内生徒指導体制の整備をはかる、また学校教育相談のあり方について、個々で小集団での相談の仕方などについて、各校連携を図った指導体制の確立

#### 進路指導研究部

発達段階に応じた望ましい進路指導のあり方。現代の進路指導について研修し、共通理解をはかり、一貫した指導を目指す。

#### 幼年教育研究部

保育園、幼稚園と小学校とのかかわり方を考え、たえず連絡し、研修し合いながら効果的運営をする。

#### 学校安全研究部

安全主任の役割を明確にし、交通安全指導のあり方と学校安全点検と活用について研究する。

#### 同和教育研究部

##### 全体計画の作成

二教科2領域における同和教育の位置づけとその指導内容の検討。

行田市、南河原の同和教育研究協議会の専門委員会の活動との関連を図りながら地域に根ざした同和教育の推進に努める。

(3)研修大会

教育指導の重点施策と事業計画。  
研究組織と各部の研究主題の内容、方法の決定。  
研究委嘱校及び協力校の決定。

(4)教職教養講座、2回実施

8月10日

講演 第4の教育（ふる里教育）  
一たのしいふる里つくりー  
日本のふる里塾主宰 萩原茂裕先生

8月20日

講演 稲荷山古墳と金錯名鉄剣の歴史的意義

埼玉資料館教育係大熊達夫先生

(5)教諭代表県外視察派遣

毎年10~11名を選んで県外先進校の視察

を行っている。見聞も広め、かたかた他山の石で大いに玉を磨こうと視察結果等は研修報告書にまとめられ全会員に配布されるが更に年度末研修大会で発表される。

## 6まとめと今後の課題

利根川と荒川にはさまれ肥えた土地、埼玉県名発祥の地として恵まれた自然と輝かしい歴史を持つ行田班教育研究会研究会は発足以来30数年、激しく変動していく世情の中で、学校教育に求められているものは何かを教師自ら厳しく見つめ会員の総意と英知を結集して今日の課題の解決に努めている。

ことに、本年度は、重点目標として教師自らの自己教育力を高め3研修活動の推進をめざし、各研究部と各校の実践課題との関連を図りながら、研修、研究の方法、機会等の総意工夫、改善に努めている。

## 加須市教育研究会

加須市は、利根川の旧河道、会の川南岸の自然堤防上に発達した北埼玉郡東部の田園都市である。古くは加増と書き、元禄（1688~1703年）ごろから、加須となった。江戸時代は加須町といい、中仙道の熊谷宿と日光街道の幸手宿を結ぶ脇往還の宿場町であった。無地の木綿織物“青縞”の生産は、天保（1830~1843年）のころから盛んとなり、幕末から明治にかけては青縞の大集散地として、明治9年には3万5千反にも達したのであった。

明治22年（1889）町村制施行のとき、久下村を合併して加須町となり、さらに昭和29年（1954）加須町が中心となって、不動岡町、三俣、礼羽、大桑、水深、桶遺川、志多見の6ヶ村が解体合併して加須市となった。3年後大越村を編入合併して今日にいたっている。面積58.

81km<sup>2</sup>、人口約5万人。

利根流域の地味豊かな耕地に恵まれ、加須は有史以前から農業が栄えたところである。

一方、農村集落の中にあって、村落から町へと発展した純然たる商業のまちでもある。現在の会の川、つまり古利根川を母体として発展した独特の町で、その発祥は鎌倉時代と考えられる。商業や農業とならんで、伝統的な工業製品としては、衣料縫製品がある。青縞産地の伝統を受け継ぎ、時代にあわせて発展したもので、特殊なものとしては、鯉のぼり、剣道具、柔道衣があり、やはり衣料品の関連加工品である。

加須の鯉のぼりは全国的に有名であるが、江戸時代にはじまったといわれている。盛んになったのは明治中期以後で、現在は年間60万本、20億円の生産額をあげ、国内はもとより外国へ

も輸出している。伝統的な工業製品のほかに、最近造成されてきた工業団地で、各種の新しい工業製品が造られている。

本研究会は、幼稚園9園（加須、不動岡、三俣、礼羽、大桑、水深、桶遺川、志多見、大越各幼稚園）と、小学校9校（加須、不動岡、三俣、礼羽、大桑、水深、桶遺川、志多見、大越各小学校）、中学校4校（昭和、加須西、加須東、加須北各中学校）の9園13校で構成され、現在の会員数は330人である。

## I 歴代会長名（敬称略）

- 1 久保井七兵衛 昭和22年4月～39年3月  
在勤校 加須小学校・昭和中学校
- 2 若旅 進一 昭和39年4月～41年3月  
在勤校 加須小学校
- 3 小川美一郎 昭和41年4月～43年3月  
在勤校 昭和中学校
- 4 小菅 正夫 昭和43年4月～46年3月  
在勤校 加須小学校
- 5 田沼 正三 昭和46年4月～50年3月  
在勤校 昭和中学校
- 6 篠塚 保 昭和50年4月～52年3月  
在勤校 昭和中学校
- 7 町田 正夫 昭和52年4月～53年3月  
在勤校 大桑小学校
- 8 鈴木 宏 昭和53年4月～55年3月  
在勤校 加須小学校
- 9 関根 二郎 昭和55年4月～56年3月  
在勤校 不動岡小学校
- 10 程塚 幸雄 昭和56年4月～58年3月  
在勤校 加須小学校
- 11 吉岡 忠一 昭和58年4月～59年3月  
在勤校 大桑小学校
- 12 奥澤 静夫 昭和59年4月～  
在勤校 昭和中学校

## II 昭和59年度の研究会

### 1 本会の目的および事業

本会は、公立幼稚園・小中学校の教育活

動を促進するとともに、相互の連携を密にし、教育への振興をはかることを目的とし、次の事業を行う。

- (1) 会員の研修のための講演会、講習会の催。
- (2) 発表会、研修会、視察調査等の実施。
- (3) 幼児、児童生徒の発表会、展覧会、競技会等にかかる助成。
- (4) 会員や公立幼稚園・小中学校の研究助成。
- (5) 各種教育関係団体、機関との連絡・提携。
- (6) その他必要事項。

## 2 役員

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 2名
- (3) 理事 若干名
- (4) 監事 3名
- (5) 幹事 若干名

## 〈研究部〉 27部会

国語、書写、社会、算数・数学、理科、音楽、図工・美術、技術・家庭、保健・体育、英語、道徳、特別活動、生徒指導、心障児教育、同和教育、幼児教育、保健主事、安全教育、進路指導、養護、学校給食、学校図書館、視聴覚教育、教育心理、女教師研修、教務主任、学年経営

## 3 本年度予算

(1) 収入の部	877,173円
会費	396,000円 (1,200 '330)
助成金	400,000円
繰越金他	81,000円
(2) 支出の部	877,173円
庶務費	
総会費	40,000円
会議費	15,000円
通信費	5,000円

事務用品費	20,000円
旅 費	5,000円
涉外費	5,000円
慶弔費	70,000円
諸手当	5,000円
活動費	
研究発表費	80,000円
行事費	259,000円
研修費	341,000円
負担金	10,000円
予備費	22,000円

#### 4 各研究部の活動

研究部会	研究テーマ
国 語	○文学作品における読みの指導。 ○表現力を高める指導。
書 写	○書写指導における問題点。 —書く喜びを高める指導—
社 会	○社会科における学習指導法の研究。 (資料の効果的な活用について)
算 数 数 学	○ひとりひとりを生かす学習指導。
理 科	○実験觀察の実技指導や授業研究を通して、部員資質の向上を図る。
音 楽	○音楽を愛する心情を育てる。
図 工 美 術	○表現意欲の高まりを重視した指導過程の研究。(実技研修会をとおして)
技 術 家 庭	○実践力を育てる家庭科指導の研究 (小、特に衣の領域) ○木材加工の指導法の研究。 (中男、木工2) ○食物領域における実・技の評価。 (男女共通の観点から)
保 健 体 育	○運動の楽しさを味わい、自ら進んで学習に取り組む授業。
英 語	○生き生きとした言語活動の展開をさせるための指導法の研究。
道 德	○道徳的実践力を育てる指導過程の研究。
特 別 活 動	○自主的活動を促す学級会活動。
生 徒 指 導	○校内指導組織を生かした生徒指導の充実。 ○一人一人の児童・生徒理解の方法と指導の手立ての研究。 ○小中の連携を密にして、地域ぐるみの非行予防対策を推進する。

心 障 児	○心身の障害に応じた指導の充実を図る。
同 和 教 育	○同和教育資料の収集と効果的な活用。
幼 児 教 育	○教育課程の見直しと作成。
保 健 主 事	○保健教育の充実。 (特性を生かした指導の徹底)
安 全 教 育	○児童・生徒の事故防止の効果的な指導法。 ○職員の安全に関する意識の高揚。
進 路 指 導	○望ましい進路指導の推進。
養 譲	○性教育指導計画の検討。 (学年に応じた指導計画)
学 校 給 食	○きめの細かな給食指導はいかにあるべきか。 ——児童・生徒の発達段階・個人差を配慮した給食指導——
図 書 館	○実態をふまえたよりよい図書館利用のあり方。
視 聴 觉	○学習指導を効果的に行うための教育機器の活用。
教 育 心 理	○児童・生徒のなやみや困難の解決のための指導はどうあつたらよいか。
女 教 師 研 修	○女教師相互の資質を高め、相互の親睦を図る。
教 务 主 任	○教務主任の職務の実際。
学 年 経 営	○個性を生かし、調和のとれた学年経営の実際について。

各研究部会は、相談役、部長、副部長（小中各1名）、各校主任、研究部員によって構成されている。

各研究テーマを柱として、企画・実践のための主任研究協議会、研究実践のための実技研修会、授業研究会、講習会等を行い、会員の資質の工場・望ましい指導技術の開発に努めている。また、音楽会、体育大会、作品発表会等の行事も行っている。

#### III おわりに

昭和22年から37年間に亘る加須市教育研究会の活動は、時代に即応する組織へと改組を重ねてきた。歴代会長を中心として、加須市教育委

員会を初めとする諸関係機関の御指導のもとに、常に子供の健やかな成長を願い、より望ましい教師のあり方を求めてきた。

今後、全会員一致して、激変する社会に対応すると共に、不易の道を求めて続ける。

## 羽生市教育研究会

### 1 はじめに

羽生市は、埼玉県の北端、利根川のほとりにあり、昔は「青綿の市の立つ町」として知られ、江戸時代から200年をこえる長い伝統と歴史につちかわれた技術と品質で、「衣料のまら羽生」として発展して来た。近年は被服織物産業の他に、機械金属、電気電子等の近代産業の進出により、一層の活況を見せて いる。人口も5万人を突破して、首都圏の衛星都市として重要な位置を占めようとしている。また「田舎教師の町」としても知られ訪れる人が多い。

教育優先の市政は、教育施設の整備充実をはじめ、学校教育振興に大きな力をそいでいる。現在、市内には小学校11校、中学校3校、高等学校4校、私立短大1校あり、羽生市教育研究会は、市内小中学校教職員320名で組織され、市当局、市教育委員会の力強い援助と指導、あわせて研究会会員の熱意ある研究意欲により、地道ではあるが、充実した教育研究活動が進められている。

### 2 歴代研究会長

(代) (会長氏名) (年 度) (勤務校)

- |   |       |        |        |
|---|-------|--------|--------|
| 1 | 小宮軍治  | 昭23~30 | 羽生小学校  |
| 2 | 飯野政秋  | 昭31~37 | 羽生小学校  |
| 3 | 小川美一郎 | 昭38~39 | 羽生中学校  |
| 4 | 山中論吉  | 昭40~42 |        |
| 5 | 五月女修次 | 昭43~46 | 羽生中学校  |
| 6 | 湯橋孝夫  | 昭47    | 羽生小学校  |
| 7 | 台 知道  | 昭48~49 | 羽生中学校  |
| 8 | 藤間 敏  | 昭50~53 | 羽生小学校  |
| 9 | 大熊達夫  | 昭54~55 | 羽生北小学校 |

- |    |      |     |        |
|----|------|-----|--------|
| 10 | 埜本信雄 | 昭56 | 羽生南小学校 |
| 11 | 新井秀一 | 昭57 | 井泉小学校  |
| 12 | 折原浩一 | 昭58 | 羽生北小学校 |
| 13 | 宮澤友次 | 昭59 | 羽生北小学校 |

### 3 主たる活動と事業

#### (1)昭和23年度～昭和31年度

第二次世界大戦後の社会経済並びに教育の混乱期に当たり、日本国憲法及び教育基本法の精神に則り、人間尊重の民主主義の普及徹底を図るとともに、教育立国の悲願達成のために、羽生班教育研究会が組織され、教育研究活動が進められていった。

- 新教育実践への現職教育(各種講習講演会)
- 各教科主任会の組織化と研修の推進
- 教育課程の編成実施の研究推進
- 教職員の福利厚生事業

#### (2)昭32年度～昭和53年度

高度経済成長への歩みがはじまり、経済大国日本へと発展していった時であり、教育の多様化が叫ばれて來た。当羽生市にも近代化的波は押しよせ、教職員の資質の向上が強く求められて來たのである。

- 現職教育を充実するための各種講習講演会
- 各教科領域の主任会活動の質的向上をめざす授業研究会の実施
- 交通安全教育の並及徹底
- 同和教育実践への研究発表会
- 市教委、研究会共催による教育研究発表会

#### (3)昭和54年度

経済大国日本のひづみは、価値観の多様化とともに、人間疎外の社会情勢を生み出し、豊かな人間性の育成が強く求められて來た。

民主主義の原点にかえり、人間尊重の精神に徹して、心身ともに健康な国民の育成を図るために、教職員一人一人が、教育のあり方を再認識し、教育者としての使命感に燃えて、日々の教育実践に取り組まなければならない時である。当羽生市教育研究会も、その会のあり方を次のように改め、研究会会員一人一人の主体的活動を促進するとともに、研究活動の質的な充実を期することにした。

#### ●会則及び教育研究会運営上の了解事項

本会は、研究会の会則及び運営上の了解事項を次のように定め、会費及び研究部の積極的活動を期待するものである。

##### ①研究会の性格

研究会は自主的に組織された任意団体である。従って、⑦入会は自由である。⑦活動は自主的に行なうものである。⑦勤務時間外に行なうべきものである。②公費旅費支弁はないものである。⑦経費は会費でまかなうものである。②会員は会費を納入するものである。

しかし、研究会の活動やその成果は、行政機関が行なうべきものを含むものであり、学校運営に直接寄与したり、教育効果を高めるものである。従って、⑦市内小中学校全教職員の加入が原則である。⑦活動は行政機関と共催することもある。⑦勤務時間内で行ったり、出張扱いになることもある。②公費の旅費が支給されることもある。⑦市の交付金が経費に充てられたりする。

##### ②会則について

○理事会は、校長教頭全員と各研究部の部長をもって構成する。

○常任理事若干名は、校長2名、教頭2名、教諭4名とする。顧問はおかない。

##### ③研究部門の組織と活動

(ア)各部に世話係をおく。世話係は校長教頭があたる。

(イ)部長副部長は、主任の中より互選する。

(ウ)自主的活動の積極的推進を図るように努める。但し、通常の勤務時間内の会合は年4回。

(エ)主として、主任の職務上の会合は〇〇主任会とし、主として研究部の会合は〇〇研修会とする。研究部の研修会には、部員はできるだけ参加することを原則とする。

(オ)諸会合の実施手順

○部長が年度計画によって実施する。

○年度当初に提起された各部行事については、市教委の一括承認を受け、臨時の行事については、会長と相談の上決定する。

○文書は部長が作成し、発送する。

研究会活動の基盤として、会費一人一人の主体性と、自ら求める研修意欲が強調され、各研究部の自発的、積極的な活動が促進され、実質的な活動が展開されて、今日に至っている。

### 3 特色ある活動

(1)全体研修会

#### ●講演会の開催（5月・8月）

会員の資質向上を期して、一般教養を含め、現今の教育問題等について著名人を招待する。

#### ●同和教育実践研究発表会（12月）

同和教育の充実推進を期して、各学校の実践を発表する。PTA部会を含めて実施。

#### ●教育研究発表会（2月）

市教委との共催。教育研究費の実践発表。

(2)各研究部研究活動報告書の発行（年1回）

(3)羽生市教育研究会資料室の設置

（目的）

羽生市内小中学校及び羽生市教育研究会員、その他の教育関係機関の発表する教育研究資料を収集保存し、会員その他の教育関係者の回覧に供し、羽生市教育の進展に寄与する。

（運営）

- ・資料室の運営は、各班より選出された運営委員若干名がこれにあたる。
- ・運営委員は理事会において選出する。ただし、資料室所在校の1名を含む。

### 4 昭和59年度の研究活動

(1)教育研究会活動の重点と基本方針

①活動の重点

- (ヶ)羽生市学校教育の質的向上をめざし、研究部活動を主体的積極的にすすめる。
- (イ)地域の実態に即して、生徒指導、同和教育の質的充実をめざし、着実な実践研究をする。
- (ウ)市教委との連携活動を十分に図り、研究実践の効果を高める。
- ②基本方針
- (ヶ)各部ごとに研究課題を設定し、計画的にその解明を図る。
- (イ)現場の実践活動を通して、教育指導上の諸問題について、会員自らが研究をすすめることを原則とする。
- (ウ)部員会には、部員は全員参加するよう努める。
- (エ)通常の勤務時間内の会合は年4回までとし、授業研究を併せて行なう。(授業は年2回)
- (オ)各研究部研究活動報告を発行する。
- ③運営上の配慮事項
- (ヶ)各部の会合は原則として、午後3時以降とする。但し、授業を通しての研究はこの限りではない。
- (イ)同日の会合はできるだけ調整し、授業時間の確保につとめる。
- (ウ)年度当初に予定された行事は、一括承認を受けているので、部長の責任において隨時執行してよいが、臨時の場合はその都度会長の承認を受けるものとする。
- (エ)文書発送は様式に従い、まちがいのないようにする。また、内容は詳細に記述することがのぞましい。
- (オ)主任会と部員会は区別することがのぞましい。但し、研究部の実情、研究内容等により、主任・部員合同会をもつことは差支えない。
- (2) 予算
- (収入)
- (ヶ)会費 320,000(1人1,000円)
- (イ)交付金 1,900,000円(市交付金)
- (ウ)繰越金 190,000円

(=)雑収入	5,000円
合 計	2,415,823円
(支出)	
(ヶ)事務費	30,000円
(イ)会議費	52,000円
(ウ)事業費	2,104,000円
○研究費	834,000円
○振興費	1,091,000円
	(大会、展覧会、中体連関係事業)
○関連事業費	179,000円
○諸 費	219,000円
○予備費	10,000円
合 計	2,415,823円

### (3) 研修活動

研修活動は、全体研修と研修部活動、教育振興活動に分かれている。主たる活動は研究部活動である。

#### ①全体研修

講演会、研修会、発表会に区分し年3回実施する。

#### ②各研究部活動

年度当初の研究課題について、日常の実践活動を基盤として研究をすすめる。

#### ③教育振興活動

小学校 水泳記録会、陸上記録会等

中学校 体育大会・駅伝大会等

その他 美術展、書道展・音楽会等

### 5 今後の課題

複雑多様化しつつある社会の変動の中で、強く求められているものは、豊かなる人間性である。一人一人の児童生徒の人間性を、いかにしてより豊かなものに育成していくか、従来の教室の場を見つめ直す勇気と知恵が、今私たち教師に求められている。教育研究活動のより一層の充実推進こそ、このことに応えられる第一歩であろう。

# 騎西・川里地区教育研究会

## 1 会のあゆみ

騎西町は、かつては現在の加須市と共に研究会等の行事を進めてきた。また、川里村にしても行田市と共に歩んだ経緯がある。しかし、町村合併等により、それぞれの市町村が独立して教育研究会の組織がもたれ、研究・研修も進められていた。

騎西町では小学校5校中学校5校、川里村は小学校3校中学校3校であった。ところが、小規模中学の統合が昭和28年より進められ、騎西町では3校になり、更に、昭和50年1校が合併され、2校となる。その後、52年に残りの1校も統合されて現在に至っている。川里村も同様に、昭和35年中学校は2校になり、翌36年1校に統合された。

このような過程の中で、余りにも小さい研究会組織であり、活動の意欲、結果も低調であるというような反省も生まれてきた。

そのため、騎西町、川里村両教育委員会両校長会等、機会をとらえては話し合い協議をした結果、児童・生徒・教職員の活動をより活発にするみちとのことで意見の一一致をみた。それが昭和42年騎西・川里地区教育研究会の誕生である。

参考に各代の研究会長を列記すると

第1代 石井小四郎 騎西中長 1年  
第2代 桃田勝次 騎西中長 6年  
第3代 綱野三一 基小長 1年  
第4代 優田治 騎西中長 1年  
第5代 岡田正明 騎西小長 4年  
第6代 本郷義徳 共和小長 1年  
第7代 竹村晴男 高柳小長 1年  
第8代 根岸庄一 騎西中長 2年

○ 発足当初は、各教科領域別に研究部(29部)を組織し、その部長には校長・教頭が

あたりそれぞれの活動が行われていた。S52年組織の改革が行われ、校長・教頭は顧問となり、各教科領域別の代表が部長となったことによって活動が活発に行われるようになつた。

## 2 主たる活動と事業

- (1) 発会時から各研究部ごとに毎年研究テーマをきめ（毎年5研究部が発表と提案）全教職員が参加して指導者を招へいしての研究協議会を行っている。また、その結果を研究紀要としてまとめている。
- (2) 本地区の地域の実態から、S45年から同和教育全体研修会を夏季休業中に行つた。
- (4) 全教職員の資質の向上を目的とした両教委および研究会の共催による管外優良校視察を行っている。（S47年から、小規模校1名大規模校2名）
- (5) 各校とも研究研修は行つてはいるが主なものは次のようになっている。
  - ・「学習の中で人間理解をどう培うか」  
S35、36 田ヶ谷小 同和教育
  - ・「指導効果を高める指導法の研究」  
——心の変容を求めて——  
S42、43騎西中 道徳
  - ・「学級経営を基盤とした生徒指導」  
——自己指導力の向上をめざして——  
S44、45 川里中 生徒指導
  - 「遊び場を体力づくりと好ましい人間関係づくりに有効に生かす工夫と安全管理」——主として廃品を活用した遊び場において——  
S50 騎西小 学校管理
  - ・「子ども達が喜んでとりくむ体育活動」  
——体づくり・仲間づくり——  
S54、55、56 騎西小 保健体育

- (6) S42年から現在まで継続している事業または中止したもの
- ・小中連合運動会（S50から中学中止）
  - ・小中水泳大会
  - ・小中駅伝大会（S48から中止）
  - ・小中音楽会
  - ・小中競書会（S50から各校ごと）
  - ・小中写生会（同上）
- いずれも交通事情によるが中学校は2校のためと、学体県体新人とあるため。
- ・中堅教員研修会
  - ・新任教員研修会（3年次まで）

### 3 特色ある活動

#### (1) 同和教育に対するとりくみ

S45から全教職員による全体研修会 S57から全小中学校で授業実践を行い、実践記録報告書の作成と配布

#### (2) 研究紀要「ほしかわ」の発行

S46から全教職員に配布、13号 各校の校内研修、個人研究、各研究部の研究報告、新任、中堅、女教師等の感想や意見などを紀要にまとめ毎年1回発行

#### (3) 教職員の研修

S47から全教職員の資質の向上を目的とした教育委員会および研究会との共催による管外優良校の視察を行っている。（小規模校各校1名大規模校2名。視察後報告分書を作成）

### 4 運営上の問題点

- (1) 小規模校が多いため1人でいくつもの主任をもっている者が多く、研修会等の日時が重複してしまう。また、幅広くはなるが深い研究ができない。
- (2) 研究員数が少ないためなれ合いになりやすく、やや積極性に欠ける。
- (3) 理事会を開くと、各校の教職員数が少ないので、学校運営上問題がある。

### 5 昭和59年度の研究活動

各教科領域等の研究部でそれぞれが年間活動目標をたて活動している。その他のことに

ついて記す。

#### (1) 管外視察研究部

- |        |        |      |
|--------|--------|------|
| ・学校経営部 | ・道徳部   | ・養護部 |
| ・技術家庭部 | ・進路指導部 |      |
| ・生徒指導部 | ・幼稚園部  |      |

#### (2) 研究発表部

- |      |       |       |
|------|-------|-------|
| ・国語  | ・特別活動 | ・安全教育 |
| ・幼稚園 | ・同和教育 |       |

#### (3) 町村教委・研究会による研究委嘱校

- |           |       |  |
|-----------|-------|--|
| ・S58、59年度 |       |  |
| ・騎西中学校    | 数学・体育 |  |
| ・鴻茎小学校    | 福祉教育  |  |
| ・広田小学校    | 社会    |  |
| ・種足幼稚園    | 言語領域  |  |

### 6 今後の課題

- (1) 職員会議・校内研修・学校行事等により教育研究会としての活動時間をどのように確保していくか。
- (2) 幼・小・中一体となっての研修活動は非常によく行われている。反面、それぞれの（幼、小、中）分野の研究となると人員の関係から問題を残しているようである。

文責 増田

# 大利根地区教育研究会

## 1 会のあゆみ

当研究会発足の時期はさだかでないが、活動の歴史は60年以上に及ぶものと思われる。

本地区は、北埼玉郡の東北部に位置し、昭和30年の町村合併前は、利根川をはさんで、旧利島、川辺並びに、原道、元和、東、及び、現在加須市に入っている大越、樋遺川の7ヶ村から成り、原道部会と称していた。

現在の教育研究会が、新たな規約のもとに発足したのは、大利根、北川辺の両村が、町村合併で誕生して間もない昭和33年4月であった。しかし、名称は依然として、原道部会教育研究会と称していた。大利根地区教育研究会という名称が始めて用いられたのは、昭和45年度からである。なお、昭和46年から町制がしかれた。

ちなみに、過去20ヶ年間の学校数及び会員数の推移をたどってみると、校数は変化なく（小・6校、中・2校）会員数は表の通りである。

年度	会員数		年度	会員数			
S.40	小 87	中 60	(147)	S.50	小 91	中 49	(140)
S.41	小 86	中 56	(142)	S.51	小 88	中 48	(135)
S.42	小 86	中 53	(138)	S.52	小 90	中 46	(136)
S.43	小 83	中 52	(135)	S.53	小 91	中 44	(135)
S.44	小 80	中 51	(131)	S.54	小 95	中 46	(141)
S.45	小 88	中 53	(141)	S.55	小 96	中 48	(144)
S.46	小 88	中 55	(143)	S.56	小 93	中 50	(143)
S.47	小 86	中 51	(137)	S.57	小 92	中 51	(143)
S.48	小 87	中 51	(138)	S.58	小 93	中 51	(144)
S.49	小 89	中 46	(135)	S.59	小 99	中 51	(150)

## 2 会の主たる事業

地域ぐるみの活動として特筆すべきものは少いが、埼玉県教育委員会の研究委嘱を受けて取り組んだ、昭和27、28年度における「地区実践教育課程の研究」及び、昭和38年度の、「実践を目指す道德教育——地域に即した道德指導過程の研究並びに望ましい道德教育と学級活動のあり方——」の研究は、現存する実践記録として貴重なものである。

## 3 本会の活動の基調

本会は、現在2町の小学校6校、中学校2校の教職員で組織される小規模の研究会である。したがって、会の運営は、校長会3名、教頭会3名、各校教諭1名、並びに養護部1名、及び事務部1名の各代表から成る理事会において、活動の原案を審議し、また、実際の研究活動は24から成る教科、領域等の研究部において、それぞれ独自の年間活動計画案を作成し、総会の承認を経て、更に、運営の基準に基づいて実施している。なお、本会の主たる事業内容は次のとおりである。

- ① 教育課程の研究 ⑤ 研究発表
- ② 学習指導の研究 ⑥ 講演会、講習会
- ③ 生徒指導の研究 ⑦ 各種教育機関及び
- ④ 児童生徒の競技 団体との連携  
会及び実技発表会

本会の運営費は、会員の個人会費、公費、及び、教育委員会連絡協議会助成金によりまかなわれ、概要は次のとおりである。

○個人会費 264,600円@1,800×147

○負担金 学校割 81,000円

④10,000×6+④10,500×2

児童割 23,880円 10×2,388

生徒割 13,800円 12×1,150

○助成金 教委連絡協議会 184,000円

P T A 連絡協議会 6,000円  
 ○ 繰越金等 77,311円  
 合 計 650,591円

#### 4 昭和59年度の研究活動

##### (1) 研究の重点

- (教科) 学ぶ喜びを味わわせる授業の工夫と実践
- (領域等) 基本的生活態度の育成・強化  
各研究部は、次の点に留意し計画を立て活動する。

- ① 研究の目的・内容を明確にする。
- ② 繼続的に積み重ねる。
- ③ 活動は、計画に従い確実に実施する。

##### (2) 研究部活動の基本事項

###### ① 開催時間

- ・研究協議会は午後3時以降を原則とする
- ・授業研究を含む場合は最終校時を充てる
- ・月・木曜日は原則として開催しない。

###### ② 開催回数

- 学期1回を基準とする。ただし展覧会・発表会・競技会・研究委嘱等の事業実施は除く。

###### ③ 研修視察

- ・研修視察を認められた研究部は、計画を立て研究会長に届ける。
- ・研修視察は、日帰りを原則とする。  
〔昭和59年度——社会、書写、算数、数学、技術、家庭——〕

###### ④ 文書発送

顧問と連絡のうえ部長が行い、行事実施一週間前までに各校に届ける。

(枚数) 各校分8、両教育長分2、研究会長分(事務局控)1、(11通)

###### ⑤ 文書や電話で処理できるものは、主任会を開かないで済ませる。

###### ⑥ 予 算

- ・各研究部 5,000円とする。
- ・研修会等については、別に予算を加える

###### ⑦ 記録簿

各研究部毎に、活動記録を保管する。

#### (3) 各教科・領域等の事業計画

	研究部	授業 内 容
国 語	研究協議会(7/3, 9/18)	授業研究会(11月)
書 写	研究協議会(6/15, 1/23, 2/18)	書き初め実技講習会(11/16) 研修視察(11月)
社 会	研究協議会(5/23, 2/5)	授業研究会(11/7) 研修視察(未定)
算 数	数学研究会(6/27, 2/5)	授業研究会(6月) 研修視察(未定)
理 科	研究協議会(6月, 1月)	地学現地研修会(8月) 実験観察研修会(10月)
音 楽	研究協議会(6/12, 11/6, 2/6)	
保健体育	研究協議会(6/5)	実技講習会(8/2) 競技会(10/11, 12月) 授業研究会(2/6)
図工美術	研究協議会(5月, 9月, 1月)	
家 庭	研究協議会(6/1, 2/27)	実技研修会(8/9) 授業研究会(10/26)
技術家庭	研修視察(5/25)	実技研修会(8/24) 研究協議会(10/16, 3/20)
英 語	授業研究会(6/13)	研究協議会(9/20, 2/22)
道 德	授業研究会(6/27, 10/16)	研究協議会(1/29)
特別活動	研究協議会(6/6, 1/23)	授業研究会(10/24)
視 聴 觉	授業研究会(6月)	研究協議会(8/28)
学校図書館	研究協議会(4/19, 7/4, 11月)	
障 害 児 教育心理	授業研究会(7/5)	研究協議会(10/24, 2/26)
生徒指導	研究協議会(6/13, 12/5, 2/22)	
同和教育	研究協議会(6/20, 2月)	授業研究会(10月)
給 食	研究協議会(6/22, 11/21, 2/21)	

安全教育 研究協議会（4/19, 6/27, 11/20）  
保健主事 実技講習会（6/19）研究協議会  
(10/31, 2/15)  
養護 実技講習会（6/19）研究協議会  
(11/20, 2/13)  
教務 研究協議会（7月, 10月, 2月）

事務 研究協議会（5/8, 10/19, 1/25）

### 5 今後の課題

- (1) 授業時間確保の観点から、研究協議会等の開催時間、参加人数の調整が必要である。
- (2) 実践記録の効果的な活用を工夫したい。

## 岩槻市教育研究会

### はじめに

岩槻市は、埼玉県の南東部に位置し、南北に長く、西は綾瀬川を境に大宮市と接し、東は元荒川が流れ春日部市と接している。このような地理的位置から近年東京のベッドタウン的様相を呈してきている。

また、本市は歴史的にも古く、今から520年前（戦国時代）太田氏の築城として知られている岩槻城（白鶴城）を中心に城下町として栄えてきた。戦後生活圏の拡大に伴って昭和29年5月、1町6ヶ村の町村合併がなされ、同年7月1日に市制が施行されて近代化に向って大きく前進した。中でも昭和41年には、国道16号バイパス、122号バイパス、更には昭和47年東北自動車道の開通により交通の要地としての条件が整備され全国的に販路を持つ岩槻人形（在来工業）に加えて近代工業が誘致され年々工場が増加してきた。それに伴って人口も市政施行時の3万4千人から10万都市を目標とする市政の施策によって年々人口も増加し、現在約10万の人口を要する市として発展している。この人口の増加に伴って必然的に児童、生徒数の増加をもたらし、当初小・中学校合わせて12校であったのが現在小学校14校、中学校8校、計22校の規模にまで発展した。従って、教職員の全市的研修の組織である教育研究会も年々規模が拡大され現在664名を要する組織体となる一方、着実な成果をあげている。以下本会のあゆみを追いながらその概要を述べてみたい。ただし発足当

時から数年間記録がないため欠落した部分や当を得ていない面があることは誠に残念なことであるがご容赦いただきたい。

### 1 本会のあゆみ

はじめに述べたように本会の発足当初は記録がないので正確性を欠いていることである。発足は昭和25年6月1日、岩槻班と隣接の蓮田班との連合体として発足したようである。その後昭和29年7月1日市政施行により蓮田班と分離独立して現在の組織になったものである。従って、これから記述する内容も発足当初のこととは記憶によるものであり、あるいは事実と相違する点があることをあらかじめお許しいただいて、以下研究集録を参考にしてその概要について述べてみたい。

### (1)研究部組織の変遷

本会組織の中核になる各教科等の研究部は25年の研究部に組織されている。この組織を年度別に見てみると、昭和44年度では道德、養護教員、教育心理、学校安全、同和教育の研究部はなく別に現在の組織にない学校行事研究部が組織されていた。そして、これが昭和46年度になると研究部の呼称の違うものが1・2あるが現在の組織とほとんど変わらない。ただ新たに女教師会が組織され47年度まで続きその後廃部となった。そして翌48年度になり現在の25部会の組織となった。

[教科等研究部の組織]

	教科等研究部名		教科等研究部名
1	国語科研究部	14	特殊教育研究部
2	書写教育 "	15	視聽覚教育 "
3	社会科 "	16	学校図書館 "
4	算数・数学 "	17	学校保健 "
5	理科 "	18	生徒指導 "
6	音楽科 "	19	進路指導 "
7	図工・美術 "	20	教育心理 "
8	保健体育 "	21	学校給食 "
9	技術・家庭 "	22	学校安全 "
10	家庭 "	23	同和教育 "
11	外国語科 "	24	養護教員 "
12	道徳 "	25	学校事務 "
13	特別活動 "		

(2) 歴代役員表

役職名 年度	会長	副会長	監事	幹事				
25	小花堅作							
26	"							
27	"							
28	"							
29	"							
30	"							
31	"							
32	閔根登							
33	"							
34	"							
35	"							
36	"							
37	"							
38	"							
39	間宮喜平							
40	"							
41	"							
42	"							
43	小林得治	齊藤誠	若田せつ	小川原登美男	閔根徳三郎	進藤栄一	田畠正昭	閔野潤
44	齊藤誠	田島輝夫	小河原正夫	"	"	金子光男	"	
45	田中寿徳	金井塙隆治	田島輝夫	持木喬	小林一三	小川原登美男	金井昭次	白田善次郎
46	"	"	"	中村尚	中村勉	御武内正次	"	長谷川一男
47	"	"	"	齊藤忠雄	内田進三	"	"	"
48	金井塙隆治	田島輝夫	小林昌	御武内正次	閔野潤	金井昭治	池田実	"
49	田輝夫	原十郎	齊藤富四郎	折笠賢二	池田実	長谷川一男	齊藤忠雄	内田茂
50	北川秀	原鶴三郎	"	勝田泰次	内田進三	池田実	"	"
51	"	"	新井英彦	"	"	"	"	森田宜夫
52	"	"	"	平野徳次	"	"	但木幹夫	"
53	"	田中仁	杉山顯司	"	野本源太郎	"	平野鞠子	藤野岩雄

54	北川 秀	小川原登美男	杉山 順司	新井 正彦	野本源太郎	川羽田豪介	金子 春之	藤野 岩雄
55	小川原登美男	大島 始	"	川羽田豪介	柿沼泰六郎	石井 和克	新井 正彦	野本源太郎
56	"	並木 達夫	斎藤 忠雄	佐々木正仁	大熊 一男	"	金子 春之	柿沼泰六郎
57	持木 留	御武内正次	長須房次郎	"	藤野 岩雄	関根 浩	小川 仁	大熊 一雄
58	"	"	杉山 順司	"	"	"	"	仁部 弥生
59	御武内正次	ト沢 重男	斎藤 達	福富 悅夫	仁部 弥生	小川 仁	千歳栄一	藤野 岩雄

## 2 主たる活動と事業

### (1)教科等研究部の活動

本会の主たる活動は、各教科等研究部（25部会）による研究活動である。この研究部の研究活動は、年度当初部長を中心にその年度の研究テーマを設定し、その研究テーマに基づいた研修計画（原則として年3回～4回）をたて研修活動を実施している。

### (2)実技研修会活動

実技の研修を必要とする研究部（書写、理科、音楽、図工・美術、保健体育、技術・家庭、家庭、視聴覚）は、市教育委員会が本会の研究部とタイアップして別予算で計画（年間2回～3回）し実施している。

### (3)管外研修視察事業

本会では、各教科等研究部の研究活動の一つとして管外先進校の研修視察事業を実施している。この管外研修視察事業が実施された当初は3部会ないし4部会で実施されていたが現在は一定のローテーションにより5部会実施している。実施にあたっては原則として関東周辺、一泊二日の日程で実施している。

## 3 特色ある活動

### (1)市教育委員会の研究委嘱校による研究活動

昭和46年度あたりから毎年小学校2校、中学校1校の計3校が市教育委員会より研究委嘱をうけて研究発表会が開催されている。本研究会では研究委嘱校の研究教科あるいは領域等を重点教科とし当該研究部は他の研究部より研修会の開催回数を多くし、研究校の研究活動を側面的に援助している。

なお、研究発表校に対しては重点教科等研究補助を予算化している。

### (2)研究集録の作成

本会の研究集録は、昭和43年度に第1集が刊行され爾来毎年発刊され、昭和58年度で第16集を数える。刊行当初と現在では内容に多少の違いがあるが大綱はほとんど変わらない。以下現在の研究集録の内容を示すと次のとおりである。

#### 〈内容〉

##### I 各教科等研究部の事業報告

各教科等研究部が年度当初計画した事業について実施した事業を一覧表にしたもの

##### II 各教科等研究部の研究概要

各教科等研究部の研究の概要について、

##### 1 研究主題 2 研究経過 3 今後の課題、としてまとめたもの。

##### III 研修会、研究発表会等の研究概要

##### 1 教頭会としての研究報告

##### 2 管外研修報告—当該年度実施した5部会の管外研修視察報告

①期日 ②研修校 ③研修内容

##### 3 研究委嘱校の研究発表の概要について

##### IV 教育隨想—新任教員の教育隨想

##### V 岩槻市教育研究会役員表

##### VI 岩槻市教育研究会会則

## 4 運営にあたっての問題点

### (1)予算上の問題点

現在25の教科等研究部には、年間1万円の研究費が予算化されているが講師等を招へいして指導をうけることになると現在の予算では1回程度の研修会を開くだけで終ってしまうという問題がある。

(2)研修活動についての問題点	現在各教科等研究部の研修活動は一週間のうち原則として月曜日と木曜日を除いて研修活動を実施している。従って研修会の開催はいきおい火曜日、水曜日、金曜日の3日間に集中して開かれているのが実態である。開催にあたっては集会許可を出す段階で事前に調整はしているが講師、会場校等の都合で調整機能が十分果せないのが現状である。従って1日に2教科等を原則としているが、時には4教科等の研修活動が重なる場合が出てくるために研修は必要だが多数参加すれば学校運営に支障をきたすという現象が出てくる。特に小規模校では参加者が多くなると補充がつかないという問題がある。いわゆる極端ないい方をすれば専門職としての教師として研修はかかすことのできない大事なことであるが研修に参加することにより教師不在の学級が出来るという矛盾がある。	9技術・家庭 意欲的に学習させる授業法の研究。 10家庭 実践力を高める授業の展開を工夫する。 11外国語 楽しく、よくわかる授業の創造 12道徳 豊かな心を育てる道徳教育はいかにあったらよいか。 13特別活動 ひとりひとりを生かす児童・生徒の活動。 14特殊教育 障害に応じた指導のあり方。 15視聴覚教育 視聴覚機器の効果的利用。 16学校図書館 学校図書館の利用指導。 17学校保健 児童・生徒の健康安全管理の推進について。 18生徒指導 共通理解から共同実践へ向けての生徒指導。 19進路指導 進路に関する情報収集、整備とその活用。 20教育心理 孤立する生徒の発見とその指導法。 21学校給食 食事作法の基礎的な進め方。 22学校安全 交通安全指導の充実。 23同和教育 ひとりひとりをみつめた学校同和教育の推進。 24養護教育 学校における性教育について。 25学校事務 学校予算について。
5 昭和59年度の研究活動		
(1)各教科等研究部の研究活動		
本年度の各教科等研究部は次のような研究主題を設定し研究活動を実施している。		
1 国語科	表現力を高めるための指導法の研究。	
2 書写	書く喜びを味わわせる書写指導	
3 社会科	楽しい社会科学習のあり方	
4 算数・数学	意欲的な学習活動をうながす指導法の研究。	
5 理科	直接経験をとり入れた指導法の研究。理科的環境を整え効果的に活用する。	
6 音楽	音楽性を育てる授業展開の工夫 児童の心に残る音楽体験をさせるために。	
7 図工・美術	表現の喜びを味わわせる指導法の工夫。	
8 保健体育	進んで運動に親しみ子どもの育成。	
(2)市教育委員会の研究委嘱校の研究活動		
本年度は次の3校が2年間にわたる研究の成果を発表する。		
・新和小学校（特別活動）		
研究主題 「進んでやる子を育てる特別活動」—学級会（話し合い）活動をとおして—		
・城南小学校（算数）		
研究主題 「学習の喜びを育てる授業の工夫」		
・川通中学校（学習指導）		
研究主題 「生徒指導をふまえた学習指導」—意欲的にとりくむ生		

### 徒の育成一

#### (3)管外研修視察事業（5研究部会）

本年度の管外研修視察研究部は次の5部会が予定され2学期から3学期にかけて実施される。

- ・書写研究部　・社会科研究部
- ・算数・数学科研究部　・理科研究部
- ・音楽科研究部

## 6 今後の課題

4の運営にあたっての問題点で述べたとおり25の研究部の研修活動と実技を伴う研究部の研修活動とその他外部団体が主催する研修会への参加などをどう調整するか今後の大きな

課題であると思う。さもないと研修の必要は認めながら実際問題として学校運営に大きな支障をきたすという現象が起り現場では一つの悩みともなっている。

## 7 おわりに

県連合教育研究会20周年記念誌の発行に寄せて、本研究会の発足から現在にいたるまでの活動を中心に項にしたがって述べてみたが果して当を得た内容かどうかその責任の重さを痛感している。記述にあたっては、発足時の資料が不十分であったことと加えて拙い文章のために一層内容を貧弱にしたことである。ここにお許しをいただき稿を終りたいと思う。

# 越谷市教育研究会

## 1. 本会のおこり

越谷市教育研究会は、以前越谷班教育研究会と言って、現在の八潮市がいっしょになっていた。各教科等の研究会・校長会・教頭会があると、潮止村まで自転車で行ったことが思い出される。

昭和45年11月、越谷市教育研究会設立準備会第1回会合が開かれ、その後20回にわたって○研究会の性格○教育委員会との関係○会員組織とその運営のあり方○会則案等について慎重審議してきた。

そして、いよいよ昭和46年12月14日に越谷小学校講堂に於て、設立総会が開催され発足したのである。

- 初代会長 田中 保先生（昭和46年度）
  - 二代会長 松永誠一先生（47年度～53年度）
  - 三代会長 斎藤 徹先生（昭和54年度）
  - 四代会長 中里順道先生（55年度～現在）
- この間の14年間は、市内教職員全員が会員としてよく団結し、子どものよりよい指導を目指して、市の教育発展のために努力してき

た。

## 2. 主な活動と事業

毎年各教科等の研究会・県教委及び市教委主催による研究会及び行事等への協力・音楽会、展覧会、理科展、発明創意工夫展、読書感想文コンクール、英語弁論大会等が開催された。

特に越谷市は、市教委と共に研査による研究校を小学校3校・中学校2校を推選し、2か年の研究期間をもって研究していただき、研究発表をしている。その成果は大きく各学校の指導が向上に役立てている。

また、昭和56年度より市内小・中学校教職員が市ミニティーセンター大ホールで一堂に会して、市教育研究大会を1月下旬に開催している。

### 「越谷市教育研究大会」

教職員の研究心を高めると共に、親睦を深めるために、

- 研究発表 3名（実践的な内容のもの）
- 音楽発表 音楽部会の先生方中心でコーラ

### ス 楽しく全員合唱

○講演 教師としての資質向上的なもの  
又は、指導上参考となるもの

大会終了後は、三三五五親しみを深め、明日の教育の糧としている。大成功

### 「各教科領域等の専門部会」

市内の各先生方が各自研究しようとする教科領域等に所属し、同じ研究部会の先生が全員集合して、研究テーマ・活動内容等について研究協議する。

同じ研究部門なので、真剣であり、自己の研究活動を高めると共に、研究委嘱校の協力に大きな効果をあげている。

### 「国際理解图画展」

市内小・中学校児童生徒及び教師の国際理解のための图画展を毎年11月中旬に行ない、郷土の絵・自分の特意とする絵等各学年2点（小学校12点・中学校6点）を出し、市コミュニティーセンターに展示して一般に公開するものであるが、開催期間中同時に市内小中学校音楽会を大ホールで開催する。

特に图画展については、越谷南ロータリークラブの共催を得て、世界各国の子どもの絵を送っていただき展示するもので、市内の子どもはもちろんのこと、市民の皆様に観覧していただき大きな評価を受けている。

金賞（各校2点）に入賞した作品は、外国に送り、展览してもらっている。

### 「学校保健養護教員研究発表会」

各学校の養護教員が、各ブロック毎に、研究テーマを定め1年間の研究成果を2月に発表会を開催するものである。

学校保健に関する指導・保健管理等について発表、各学校に持ち帰って活用してもらい大きな成果をあげている。

「障害児学級宿泊学習」岩槻青年の家にて、その他、理科展・発明創意工夫展・書道展

英語弁論暗誦コンクール・陸上競技大会・サッカー大会等がある。

### 昭和59年度の研究活動

5月上旬 各教科領域等専門部会  
(役員の選出・事業計画等)

5月中旬 理事会及び評議員会（総会）  
総会後各研究活動がはじまる。

7月中旬 理事会（活動費配分）

10月～11月 各研究発表会参加

12月中旬 理事会（研究大会準備）

1月下旬 教育研究大会

3月中旬 理事会・評議員会

（本年度の反省と新年度の希望）

各教科領域等の研究活動は、1教科につき年間3つぐらいの行事にするようにしている。

研究委嘱校へ助成

市教育委員会委嘱研究校へ、市教育研究会も助成援助している。（年6,000円）

本年度は8校となる。

研究推進事業

6月 硬筆展・歌唱音乐会

9月 水泳大会

10月 理科展・発明創意工夫展

英語弁論暗誦コンクール

陸上競技大会・読書感想文審査会

11月 器楽音乐会・图画展

1月 書初め展・サッカー大会

### 4. 問題点と今後への課題

#### (1) 総会のもち方について

本会は、会員総意のもとに運営されるべきであるが、越谷市内小中学校職員1,500が一堂に会して実施するのには、会員の問題・運営・経費の問題等いろいろと準備、連絡出張等難かしい点が多いので、各学校からの代表2名を評議員として参加し、執行部である理事と合同の会議をもって、総会にかかるようにした。

これは、会員全体の意見を聞くというわけにはいかないが、本会の運営上には支障なく、うまくいっていると思われる。

しかし、今後改善されるべきであろう。

## (2) 会費と活動費について

会員の会費は、年額500円で750,000円、市当局より同額の研究助成金をいただいているので、150万円で活動している。

各教科領域等の各部会の活動費が3万～5万円位、研究推進事業が50万円位となっている。もっと活動費がほしいところであ

るが、すくない予算で効果的な活動を展開している現状である。

今後、市当局の助成金補助金の縮小策も考えられるので、会費の値上げについて検討しなければならないと思う。

(文責 中里 順道)

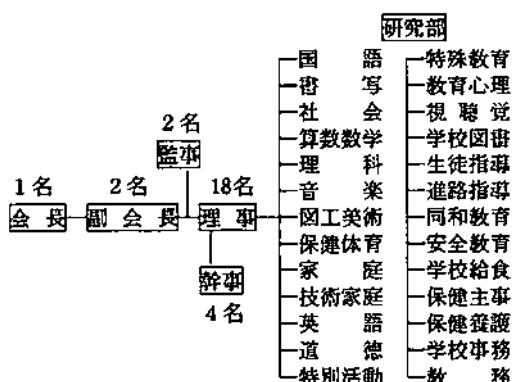
# 久喜市教育研究会

## 1 本会のあゆみ

本会の前身は、1市4町による班組織で構成し活動を続けてきたが、教育行政施策が市町単位に移行して行く中で、研究会組織もすべての面でのメリットを考慮し班構成組織を協議の上発展的に解消することとなり、昭和54年3月2日に会則等整備の上、設立総会をもって久喜市教育研究会として発足し、今日に至っている。

### (1) 研究組織

本会の研究組織は、小学校、中学校の密接な連携を基本とし次のような組織構成によって運営されている。



### (2) 会の財政

本会は、市内各校のすべての教職員による年間1人600円の会費と市からの研究助

成金800,000円によって執行されているところである。

### (3) 歴代役員

本会運営の中心となる執行機関の歴代役員は次の通りである。

#### 昭和54年度

会長	杉山岩雄	幹事	野口武治
副会長	金子善雄	萩原信司	
	矢野 誠	遠井利夫	
		出井 実	

#### 昭和55年度

会長	杉山岩雄	幹事	大塚 仁
副会長	金子善雄	萩原信司	
	春日 進	遠井利夫	
		田口敬子	

#### 昭和56年度

会長	腰塚麟也	幹事	加藤 実
副会長	高山靖男	幹事	大塚芳子
	春日 進	遠井利夫	
		田口敬子	

#### 昭和57年度

会長	腰塚麟也	幹事	平沢 窓
副会長	高山靖男	大塚芳子	
	小川勝信	遠井利夫	
		大岡一郎	

#### 昭和58年度

会長	齊藤富四郎	幹事	田村俊一
副会長	高山靖男	柴崎 一	

小川勝信

清水富寿也

森本一成

#### 昭和59年度

会長 斎藤富四郎 幹事 田村俊一

副会長 高山靖男 柴崎 一

小川勝信 清水富寿也

也

森本一成

### 2 主たる活動と事業

本会設立のねらいである会員の資質と職能の向上を計るために、毎年度の事業計画に沿って、研究活動を進めてきたところである。以下その内容を要約すると次の通りである。

#### (1) 全体研究会の開催

毎年度はじめに全会員が一堂に会し、資質向上を目的として、講師を招へいしての研修会を開催している。

#### ○昭和54年度

講演テーマ “教育における若さと賢さについて”

講師 元埼玉県中学校長会長

徳橋善四郎先生

#### ○昭和55年度

講演テーマ “新教育過程の実践について”

講師 文教大学教授 木川達爾先生

#### ○昭和56年度

講演テーマ “人間性豊かな児童生徒育成と学級の人間化”

講師 文教大学教授 木川達爾先生

#### ○昭和57年度

講演テーマ “人間性豊かな児童生徒の育成をめざしての教師の果す役割”

講師 元埼玉県教育局義務教育課長

仲 栄先生

#### ○昭和58年度

講演テーマ “生徒指導と教育相談”

講師 埼玉県立教育センター指導

相談部長 金子 保先生

#### ○昭和59年度

講演テーマ “教育過程とこれからの教育”

講師 国立教育研究所 研究室長 牧 昌見先生

#### (2) 重点目標の設定

本会は、研究会として毎年度の重点目標を設定し、これに向かって研究活動を進めているところである。

#### ○新教育過程の研究と実践

#### ○教職員の研修と推進

以上の重点目標は 昭和54年度に設定し6年後の現在も同じ目標をもって研究にあたっている。

目標は短期間で達成されるはずもなく、研究の地道な積み重ねによって初めて成就されるという理由からである。

これを受けて、26教科領域等研究部も、それぞれ年度毎に重点目標を設定し、各研究部の活動を進めてきている。

### 3 特色のある活動

#### (1) 各教科領域等年間指導計画の作成

教育過程の作成は、各学校において校長を責任者として全教師の協力のもと十分研究して作成されるべきものである。しかしながら、久喜市内の小中学校では、学校の実情や地域の実態において共通するところが多く、また、市内各校の教科担当者が、日常の教育活動において常に緊密な連携を保ちながら、各校の教育指導を実践している。そこで、新教育課程の完全実施にそなえて、昭和53年9月市教育委員会の委託を受けたことにより年間指導計画の作成にあたった。

この年間指導計画は、小中別に全教科領域・全学年にわたって作成した。作成にあたっては、児童生徒に各教科等の基礎的・基本的事項を確実に身につけさせため指導内容の精選をはかること、小中の一貫性、学習負担の適正化、学習の適宜性等について留意する

とともに、授業時数の確保等について配慮した。小学校の各教科領域等年間指導計画は、学年別に作成され、6学年B5版160ページにまとめられ、昭和55年4月配布された。中学校編は、教科領域別で、B5版226ページであり昭和56年4月から利用されている。会員には、小学校は、学年別分冊が、中学校では教科別分冊が担当教師に配布され、修正を加えつつ現在も各校で活用されている。

#### (2) 市内小学校親善球技会

##### ① 楽旨

球技会を通して、児童の心と体の健全な発達をはかるとともに、市内小学校の親善交歓の機会とする。毎年6月に実施。

##### ② 対象

市内小学校6年生で日頃健康な者

##### ③ 種目と競技規則

サッカー（男子）

- ・時間（15分—5分—15分）・ボール（教3号）

- ・選手は前半と後半で交替学級全員出場
- ・コート（50m, 35m）

バスケットボール（女子）

- ・時間（10分—10分）・人数（6人）
- ・サッカーと同じように全員出場
- ・コート（22m, 12m）・ボール（教3号）

④ この親善球技会は、小学校生活のよい思い出の大会として親しまれ定着しつつある。年々きたえられた高い技術で熱戦が行なわれ、よりよい指導や審判ができるように、先生方の審判講習会等も開催し、より充実した大会運営をめざしている。

#### (3) 市内小中学校特殊学級合同遠足

市内には小中あわせて12校あるが、特殊学級設置校は7校である。この児童生徒を対象に毎年10月初旬合同遠足を実施している。

##### ① 目的

- ・市内小中学校特殊学級の児童生徒並び

に関係職員の交流と親睦を図る。

- ・校外学習の一つとして公園等を見学
- ・乗り物、公園等でのマナーを学習する

##### ② 目的地

東武動物公園（S58）久喜菖蒲公園（S57）

③ 児童生徒にとって、楽しい体験と実際の場での生活学習であり、教師にとって、各校の学級の実態を知るとともに、相互研究と親睦を深めるのに道義深い催しである。

昨年度は、児童生徒44名余、引率教師20名が参加し、市の福祉バス2回で送迎を行った。当日は障害児教育に理解の深い人々の好意で、ぶどう狩りを受け、遠足の内容が豊かになった。このように、関係各位の援助・協力により本市の障害児教育も着実に推進している。

#### (4) 会誌「久喜の教育」の発行

各年度の貴重な研究実践を集約し記録にとどめるとともに、今後の久喜市教育の振興に寄与することをねらいとし、会誌「久喜の教育」を発行している。内容は、各教科領域研究部と市教研主催の諸行事の研究実践活動の概要が120ページ余にまとめられており、本年度は第6号を発行予定である。

### 4 運営上の問題点とその対策

#### (1) 研究部活動の日程調整

年度当初、各研究部ごとに開催日程について事務局あて届出させ調整の結果によって活動をする仕組になっているが、いざ活動が開始されると、講師の都合、会場校の都合等により同日に数部が同時開催されるようなことが起る。

また、小規模校においては教職員の配置上の関係から教科領域等の主任を重複している場合もある。

これらのことを考え、日程調整は必須の要件である。

#### (2) 教研特別行事の開催問題

本会は、特別行事として、小学校球技会、音楽会、美術展等10種の行事を実施しているが、会場担当校としての平均化をはかること、児童生徒の鑑賞の機会均等を考慮し、会場校の輪番制を取り入れているが、特に音楽会等多数の児童が参加する場合の輸送問題が大きな課題として残っている。

## 5 昭和59年度の研究活動

本年度は、市教育研究会発足6年目を迎え教職員一人一人の職能の向上と市内各校の教育活動の一層の充実をめざして、研究と実践に取りくんでいる。以下、その概要を略記する。

### (1) 久喜市教育研究会重点目標及び各教科領域等の重点目標

#### ① 久喜市教育研究会重点目標

- ・ 教育課程の研究と実践
- ・ 教職員の研修の推進

#### ② 各教科領域等の重点目標

26の教科領域等の研究部は、それぞれ年度の重点目標を掲げて研究活動に取りくんでいる。

教科領域等	重 点 目 標
国 語	確かな国語力の定着を図る指導法の研究。
書 写	書写の指導法の研修を通じ

### (2) 市教研主催の諸行事

- ・ 小学校球技会・科学展・音楽会・美術展
- ・ 書き初め展・特殊学級遠足・読書感想文
- ・ 硬筆展。・創意工夫展・スピーチコンテスト・「久喜の教育」編集（期日、会場略）

### (3) 教科領域等の事業計画

各研究部は、年2回を原則として、主任、部員研究協議会を実施している。本年度は、26研究部で62回の活動計画が立てられている。

### (4) 研究部の予算

本年度の予算は、1,141,000円で会費(256,200円)、市の助成金(800,000円)、繰越金(84,780円)でまかなわれている。

支出は、605,000円が事業費で、教研主催の諸行事費(290,000円)と研究部部費(315,000円)に分けられる。事務費は387,000円でほとんど会誌印刷代である。その他会議費(120,000円)負担金、予備費等である。

## 6 今後の課題

教育研究会の研究活動を生きたものとするためにはどのようにすればよいか。

特に、市内各学校で独自に実施している校内研修の成果を、その学校のみにとどめず市内全会員の供覧に資する機会を考えねばならず、如何に有機的に結びつけるかが課題として残っているように思う。

# 八潮市教育研究会

## 1 はじめに

八潮市は埼玉県の最東南に位置し、東は中川の流域を境に、三郷市、吉川町に接し、さらに綾瀬川を隔て草加市、南端東京都に接している。

古来武蔵野の東南端にあって、江戸時代より米穀野菜の生産地として大江戸の台所を賄い農村地帯として発展して来たが、昭和30年

代後半より工場の進出めざましく、1,000有余の工場、事業所を数え、商店、金融機関も年々増加都市化の一途をたどり、昭和47年1月15日市政施行で八潮市となる。

教育優先の市政は、教育施設の整備充実をはじめ学校教育振興に大きな力をそいでいる。

現在、市内には、小学校10校、中学校5校、

高等学校2校があり、八潮市教育委員会は、市内小・中学校の教職員で組織し、会員451名余を有し、市当局、教育委員会の力づよい援助と指導、合せて会員の熱意ある研究意欲によって、地味ではあるが充実した研究活動を進めている。

以下活動の概況を述べる。

## 2 本会の目的および事業

### (1) 目的

八潮市小・中学校教育の振興をはかり、教職員相互の研修活動を目的とし次の事業を行う。

### (2) 事業

- ① 教育に関する研究調査
- ② 市内各校並びに教育関係機関との連絡提携
- ③ 展覧会、音楽会、体育大会等の開催
- ④ 教職員の研修
  - ・後援会、講習会、学習指導研修会等
- ⑤ その他目的達成に必要な事項

### (3) 研究会の性格

本市の研究会は自主的に組織された任意団体である。

- ① 入会は、自由であるが、市内小・中学校教職員全員加入がたてまえである。
- ② 活動は、各部会が自主独自に行う。
- ③ 行政機関と共催する。
- ④ 勤務時間内で行ったり、出張扱いになる。
- ⑤ 市の助成金が活動運営費に充てられている。

### (4) 研究部の組織と活動

- ① 各研究部門に世話係として、顧問を置く。顧問は、校長・教頭があたる。
- ② 部長・副部長は主任の中から互選する。
- ③ 諸行事の実施と手順について
  - ア 部長が年度計画によって実施する。
  - イ 年度当初に計画された各部の行事については、教育委員会及び、研究会長の承認を受ける。

ウ 会合は、事前に顧問と連絡を密にし部長が文書を作成し、発送する。

〈発送までの手順〉

- ① 発案→② 研究会長に承認申請→③ 共催承認申請→④ 承認→⑤ 文案→所属長原文提出指導依頼→⑥ 印刷→⑦ 発送

※各部顧問に①の段階で連絡

### (4) 各研究部の基本方針と運営上の配慮事項

ア 各部は、年度当初研究課題を設定する。

イ 2部以上の同日会合は調整を行い学校運営に支障のないようつとめている。

ウ 月・木曜日は、学校運営上各部の会合はおこなわない。

## 3 役員

会長 1名 (校長)

副会長 2名 (校長)

理事 若干名

監事 3名 (教務主任)

幹事 若干名 (会長校、教頭、会長校以外の教頭、会計も含む)

評議員 (会長 副会長 幹事)

・理事の構成

校長、教頭の全員と各部の部長をもって構成する。

・評議員会は、会務の企画運営並びに理事会に提出議案、その他重要事項について審議する。

## 4 研究部

本会は、現在26の研究部門を置き研究活動を進めている、各部の研究活動は、運営事項に従い部長が実施している。

## 5 昭和59年度研究会活動

### (1) 教育研究会の重点

- ・ 研究部の活動をとおして研修の実をあげる。
- ・ 教育指導実践上の諸問題について研究する。

市教育委員会との連携活動により研究の成果を高めていく

### (2) 予算

#### ① 収入

ア 会費	536,400円(1人1,200年間)
イ 繰越金	70,644円
ウ 助成金	300,000円市交付金
エ 雑収入	10,000円
合 計	917,044円

#### ② 支出

ア 会務費	293,000円
総会費	135,000円
事務費	64,000円
会議費	54,000円
印刷費	40,000円
イ 事業費	577,700円
教育振興費	513,000円 (各研究部助成)
補助費	64,700円
ウ 予備費	46,344
合 計	917,044

以上が、本年度の予算の概況である。教育振興費は、各研究部へ配当されるが、配当は一率ではなく、各部の要求と事業内容によって配布される。

### (3) 研修活動

研修活動は、全体研修、各研究部の活動であるが、主たる活動は、研究活動である。

#### ① 全体研修

講演会は、総会に、研修会は各研究部において、自主独自におこない、発表会は2学期におこなう。

#### ② 各部研究活動

講習会 実技研修会 授業研究会  
事例発表会 先進校視察等

#### ③ 教育振興活動

小学校——陸上競技大会  
中学校——駅伝大会  
その他

理科展 作品展 (技術・家庭・図工)

美術) 音楽会 硬筆展 書初展  
教職員球技大会等である。

### 昭和59年度研究部活動

No.	研究部	研究活動の重点
1	国語	表現を高める国語指導
2	書写	字形を正しく認識させ表現力を育てる書写指導
3	社会	効果的な資料の使い方
4	算数・数学	基礎学力の向上と課題の与え方の工夫
5	理科	理科学習指導の改善
6	音楽	児童・生徒が喜んで学習する指導の工夫
7	図工・美術	実技を通し資質の向上をはかる
8	体育	運動の特性に応じた楽しい体育授業の工夫
9	英語	わかりやすく、たのしい授業の創意工夫
10	家庭	授業に役立つ教材づくり
11	技術家庭	意欲と実践力を育てる学習指導 (視聴覚機器の利用とその研究)
12	道徳	児童・生徒の本音をやま場に設定した授業展開の工夫
13	特別活動	望ましい特別活動をめざして
14	教育心理	問題をもつ子の指導
15	視聴覚放送	VTRを使った授業づくり
16	図書館教育	学校図書館における効果的な読書指導
17	生徒指導	積極的な生徒指導のすすめ方
18	安全教育	学校生活における安全教育の進め方
19	障害児教育	ひとりひとりの障害に応じた指導のあり方
20	進路指導	適正な進路を目指して
21	保健	効果的な保健指導について
22	事務	事務処理の効率化
23	保健主事	保健計画の実践と改善について
24	同和教育	差別を許さない学級集団作りを

		めざして
25	給食指導	学校生活を楽しくする給食指導のあり方
26	教務主任	修業時数と学校行事

## 6 今後の課題

研究会の活動を充実させるため、今後の改善策として

### (1) 参加への配慮

各部会の方針や計画を所属部員に明確に示し、できるだけ多く参加させる。主任に代って参加することも必要である。

### (2) 代表者の選出

代表者（部長）が年ごとに変わる部も多い、一考を要する。研究記録によって、後任者に引継ぎ、継続的な研究も考慮し研究のつみ重ねをしていく。

### (3) 事業の進め方

各部会とも計画にしたがって予定を消化するが、学期末に集中することのないように、各部の研究成果をまとめる。

市教育研究会の活動については、前述の如く校長・教頭が各部の顧問になり指導・助言に当っている。若い教職員が多く、教師としての指導力、資質を高めることも大きな目的となっている。主任中心の動きから全員に参加の機会を多くし、少しでも新しい方策を取り入れ魅力ある研究会にしたい。

## 7 おわりに

以上、本会の概要について述べたが、会員の研修意欲、参加意欲も年々高まり、地味ではあるが着々と実績をあげている。これからも、会員一人一人に、日常継続的な研修活動をすすめるとともに、創意と工夫及び努力の積み上げを図り、教育の実を高めていきたい。

# 三郷市教育研究会

## 1 会のあゆみ

三郷市は東京都に隣接した農村であったが、昭和30年代後半より都市化が急速に進み、昭和47年5月2日に三郷市が誕生した。

それまで本研究会は吉川班教育研究会に所属していたが、市の誕生を機会に昭和47年度当初から吉川班を円満に脱会し、市教委の指導の下に、加えて本市校長会の努力により三郷市教育研究会の発足をみるといたった。

しかしながら本市は前に述べたとおり都市化が進み、それとともに人口が急増し、したがって年々学校数は増加する一方で、それと相まって新任教員の需要が伸びていった。その上、昭和48年度よりマンモス三郷団地に入居が始まり、団地校が新設されていった。

このように学校数が増えてくると、当然経験の浅い教員が増加し、リーダー的教員の不足を

きたし、本市教研の運営にも支障をもたらした。幸い市教委の多大な指導・助言があり、その上一小校当たり3万円の補助金は現在までも続いている。以下小中学校数及び会員数の変遷を記すこととする。

年 度	小学校	中学校	会員
昭和47年度	6校	2校	248名
昭和48年度	7	2	277
昭和49年度	11	3	340
昭和50年度	12	4	405
昭和51年度	13	4	529
昭和52年度	14	4	572
昭和53年度	16	4	646
昭和54年度	17	5	688
昭和55年度	18	6	725
昭和56年度	19	7	749

以上学校増のなかった年度は省略したが、本市教研は、三郷市の急増人口と、それに伴う児童・生徒増による教員の需要が大幅に伸びた相関関係による歪みはいなめかった。しかしこの間、教員としての力量を充分に身につけた会員のいる事は見逃せない。

## 2 主たる活動と事業

### (1) 年間の研究活動と組織運営の概略

本市教研は小中校合同で組織され、教科等の研究部会が24あり、研究会運営要項に基づいて4月中旬に教科等の主任会が開かれ、世話役（管理職）の指導助言により部長・副部長・書記が選出され、研究主題、研究内容、会場等の計画がつくられる。

4月下旬には、教科等の研究部長と学校委員（各校長と各校代表2名）との合同委員会をもち、事業計画、予算等を審議する。

5月中旬には定期総会が開かれ、総会前の1時間30分講演会を位置づけ、会員の研修会としている。

また開閉会の後と前には県歌齊唱、三郷市民歌を齊唱し、雰囲気をもり上げ、意気の高揚をはかり、現在では板についた感がある。

この定期総会が終了すると、教科研究部の活動が始まる。実施については研究会運営要項に基づき、研究部と事務局で連絡調整を図り3以上の研究会が重複しないよう配慮して、市教委の共催承認を得て開催の運びとなる。

研究会の内容は、授業研究会・実技研修会・実践報告会・情報交換・講演会等である。

1月上旬には研究部長と学校委員の合同委員会がもたれ、その年度の反省評価と、研究集録の作成及び次年度の総会までの日程を決定しておく。

### (2) 毎年実施される行事

読感文の審査会・硬筆展及び競書会・文

集審査会・発明創意工夫展・科学振興展・小中合同音楽会・英語弁論大会がある。

### (3) 発足以来市教研が関係した行事

昭和49年度 文部省研究委嘱による道徳及び学校給食研究発表が、吹上小、彦成小で行われ研究協力がなされた。

昭和51年度 通信票作成特別委員会が組織され、2か年にわたり研究し、53年にはその通知票が市内小学校で使用された。

昭和53年度 埼玉県硬筆展会場が南中となり、特に書写部会が協力した。

昭和55年度 県教委研究委嘱による特活研究発表が彦成中で行われ、特活部が中心となり研究協力した。

昭和57年度 県教委委嘱による体育研究発表が彦成小で、放送教育は新和小で研究発表された。特に多くの参観者があった。

昭和58年度 埼葛美術展が団地校彦糸小・彦糸中で行われ、3千人以上の参観者があった。今年度も同校で行われる。

昭和59年度 栄中が県の委嘱による体力向上と推進校として、10/29研究発表が行われる。

三郷市民文化会館7/28オープンしたので、市内小中音楽会がこの会館で行われる。

## 3 特色ある活動

- (1) 授業研究会（公開）及び実技研修会が多く見られるようになった。59年度の研究活動を参照されたい。
- (2) 硬筆展・競書会、音楽会、科学新興展、発明創意工夫展の水準が年々高くなっている。
- (3) 研究集録は48年度より現在まで引き続き作成されている。43×32を1頁とし、各教科等の研究部の活動を4頁以内にまとめ、全部で75頁程度におさめている。配布先は会

員に1冊、各学校へ1冊、それに市教委埼  
葛事務所、県立久喜図書館等である。

- (4) 講師招へいについては、県内外から指導者が来られているが、市教委指導主事の陣容が漸次整えられてきたので、その指導を受ける機会が多くなった。

#### 4 運営に当っての問題点

- (1) 各教科等研究部長の在任期間が短い。定着している研究部もあるが、一般には上記のことが言える。各校の教科主任が代る事が多く、副主任を育てる経営上の問題にもつながる。

##### (2) 授業時数の確保について

年々小学校の学級数は減少しており、出張者の補欠授業が困難になっている。開催回数を制限したり、授業に支障をきたさない時刻に開始する事、また研究会が3以上重複しないよう配慮し、授業時数の確保をはかっている。

#### 5 昭和59年度の研究活動

国語 研究主題 国語力の定着をはかる指導法の研究。

- よしきり、さざなみの文選
- 授業研究会（2回）

書写 研究主題 書写技能を伸す指導法

- 硬筆展作品指導研究会
- 県硬筆中央展出品（羽生市）
- 書写授業研究会
- 市内小中書きぞめ鏡書会
- 市内小中書きぞめ審査会
- 県書きぞめ中央展出品
- 書きぞめ作品巡回

社会 研究主題 豊かな見聞と指導力の向上をめざして

- 講演会
- 三郷市跡めぐり
- 授業を通した資料交換

算数数学 研究主題 数学的な見方、考え方を伸ばす指導

- 授業研究会（3回）

理科 研究主題 思考を重視した指導過程

- 実技研（水溶液の系統をふまえ）
- 市内科学振興展
- 授業研究会（水溶液）

音楽 研究主題 豊かな音楽性を養い、音楽を愛好する心を育てる。

- 管楽器実技研修会
- 埼葛地区歌唱大会
- 授業研究会
- 埼葛地区器楽大会
- 市内音楽発表会

図工美術 研究主題 生き生きとした表現力を育てるための指導法。

- 授業研究会 絵画
- 実技研究会 版画
- 絵の見方について

保健体育 研究主題 体操領域における動きのねらいに基づく適切な動きの方法を工夫し、課題をもって自己の体力を高める学習指導と学習に役立てる評価について。

- 動きのねらいを明らかにし、ねらいをもって行われる動きを高める運動。（授業研）
- 自己の体力向上を目指す自主的学習を行うための形成的評価（授業研）
- 研究協議 ボール運動の楽しさを味わわせる計画と実践
- 授業研究会（ボール運動）

家庭 研究主題 実践的態度を育てる家庭科指導。

- 実技研修会 エプロン作成
- 市内発明創意工夫展
- 授業研究会

技術家庭 研究主題 意欲と実践力を高める学習指導をめざして。

- 研修会（教員研究発表のための）
- 実技研修会
- 研修会（教員研究発表のための）

- 教員研究発表会
- 英語** 研究主題 教育機器を生かした効果的な授業をめざす。
- 授業研究会
  - 市内英語弁論暗唱大会
  - 埼玉英語弁論暗唱大会
- 道徳** 研究主題 資料の分析と授業の組立て。
- 資料分析
  - 授業にのせるためにはどうしたらよいか
  - 実践授業
- 特別活動** 研究主題 児童生徒の自主的自発的活動の育成をめざして（活動意欲のあふれる学級づくり）。
- 講演会
  - 授業研究会（学級会活動）小中校
- 心障児教育** 研究主題 心障児理解と、能力適正に応じた指導。
- 普通学級の障害児理解
  - 県指導課の訪問
  - 授業研究会（2回）
- 教育心理** 研究主題 学習意欲を育てるための指導法の研究。
- 講習会（検査の方法）
  - 事例報告会
  - 講演会（事例に基づく指導）
- 視聴覚** 研究主題 視聽覚教育の推進（VTR、校内放送）。
- ビデオテープ選択
  - 実技研修会（OHP、スライド）
  - 校内放送のあり方
  - 埼玉学視連実践研究発表会
  - 自作ビデオの作成とまとめ
- 学校図書館** 研究主題 望ましい図書館利用法。
- 三郷市年間指導計画の説明
  - 読書感想文審査会
  - 授業報告会と運営方法の交流
- 生徒指導** 研究主題 生徒指導の基本をふまえた経営のあり方。
- 講演会（現場実践をふまえた指導）
  - 各校実践の交流会
  - 映画と年間の反省
- 進路指導** 研究主題 生徒の適性を生かす進路指導。
- 進路指導計画研修会
  - 各校の進路情報交換
- 安全教育** 研究主題 組織的な安全指導。
- 交通安全指導
  - 効果的な避難訓練
  - 安全点検のあり方
- 給食** 研究主題 よりおいしく食べる盛りつけ方と食べ方について。
- 各校の実態報告
  - 給食指導の講演
  - 実践報告会
- 保健主事** 研究主題 児童生徒の健康安全を保つために。
- 講演会
  - 資料交換
- 保健** 研究主題 保健室経営上かかえている問題。
- 事例研究の形成及び分担
  - 事例研究の討議
  - 講演会
- 同和教育** 研究主題 部落差別の歴史、学年別指導計画の作成。
- 講演会（部落差別の歴史）
  - 指導計画作成のための資料集収
  - 指導計画作成

## 6 今後の課題

### (1) 校内研修の充実

研究部の活動は、各校校内研修の実践が基盤になると考える。したがって校内研修の充実が、市教研研究部に、より効果をもたらす。

### (2) 中堅教員の育成

30才代教員が多い。学校運営の中堅としての期待は大きい。個々の自覚と一層の努

力を望む。

## 蓮田市教育研究会

### はじめに ——蓮田市の概況——

蓮田市は、埼玉県の東部に位置し、古代の東京湾に突き出た関東ローム層の台地に発達した街です。

この関東ローム層の台地は、人々の生活の場として恵まれた条件を備えていたのでしょう。市内の台地の各所から先住民の遺跡である住居跡、貝塚や土器・石器等の遺物が多数発見されて居り、縄文文化、弥生文化を解明する手がかりとなっています。

蓮田の発展の基礎は、東北本線が開通したことに始まります。明治18年7月に東北本線が敷かれ、蓮田駅が開設されましたが、その頃の蓮田は、いばらで覆われた寒村で林野と畠の多い土地でした。明治40年代になって駅前の道路が拡張され商店や医院、運送店、駐在所が出来ると駅を中心に街村型の地域が形成されるようになりました。

明治22年に蓮田町の前身である綾瀬村が出来ましたが、昭和9年に綾瀬村は町制を施行し蓮田町と改称しました。

昭和29年、地方自治体の強化、行政の広域化の政策を受け、平野村と黒浜村を合併し、その後昭和31年に岩槻市の川島地区、馬込地区を統合、この頃から人口が急に増加しました。

当市は、首都圏40km圏内にあり、環状衛星都市としての立地条件を備えていますので、首都圏の急激な膨張と相まって商工業地域、住宅地域として急速な発展を遂げつつあります。

昭和47年市制を施行し、人口34,457人の蓮田市が誕生しましたが、昭和59年5月1日現在、人口52,000人の都市となりました。

県道大宮栗橋線、東北縦貫自動車道、国道122号線、市道の整備と相まって都市化が進み

市の総合新興計画では、昭和60年の人口を60,000人と想定し、住みよい町、働きやすい町、そして緑と太陽の豊かな町づくりをめざして開発を続けています。(市教育要覧より)

### I 蓼田町教育研究会発足まで

戦前から中部16校と言われ、春日部市、岩槻市、蓮田町(平野小学校は北部に属していました)が1つのブロックとして、教職員の研修会、児童の球技会、陸上競技会等の会合が持たれていました。交通事情が現在と異なり車両等が少なかったとは言え、研修会に参加する教師は自転車で、また、競技会の折には児童を引率して遠い距離を徒步で参加したことなど、隔世の感じがします。

当時から、当地域の人々の教育への期待は、殊の外、大きかったようでした。

町制施行以後、近隣地域からの二男、三男の居住によってつくられた人々の気風は、当然、町の雰囲気に大きな影響を与えました。①東北本線を積極的に導入した心意気と旧来の風習を打破した先人の見識、②新たに居住した人々の自分達の町づくりは自分達の手で、③その母胎は教育にある、の斬新な風潮は、教育への期待の増加、協力体制の確立となってあらわれていました。

やがて、あの忌わしい第二次世界大戦に見舞われましたが、終戦と共に従前の気風は更に押しすすめられ、学制改革による六三制の発足と共に、県下第二番目の独立校舎を持った蓮田中学校の開校が、昭和22年4月1日行なわれました。

蓮田中学校は、上尾市の日本光学の寄宿舎を購入し、中廊下型式で左右に各々5教室と、そ

の中央部に職員室（南側）と宿直室（北側）の計237坪を有する校舎で昇降口も天井もありませんでした。声の大きい男の先生の講義と、楽しそうな音楽の歌声が天井裏に反響し、教室の床板はあちこちに穴があき、窓はガラスがなく窓枠に板が打ちつけてありましたので、常時、窓枠をはずしての授業でした。雨露は、それでもどうやらしのげましたが、雑木林を切り開いてつくられた校庭からは、関東ローム層の黄塵が降りそそいで、学習は困難をきわめていました。

それでも16名の教職員と378名、10クラスの生徒・保護者は、県下第二番目の独立校舎を持った自覚と誇りを持っていました。1,488坪の狭い運動場を活用し、昭和25年の県民体育大会では、バレーボール部が優勝の栄をかちとりました。これが町民の教育に寄せる期待を更に高め、協力体制は更に確固たるものとなってきました。

町村合併より、昭和29年5月3日、平野村、黒浜村が蓮田町に併合され、蓮田町教育委員会が発足しました。当時の学校は、小学校4校（蓮田南小学校、蓮田北小学校、平野小学校、黒浜小学校）と中学校3校（蓮田中学校、平野中学校、黒浜中学校）の計7校でした。

昭和29年7月1日に春日部市、岩槻市の誕生により、それぞれの教育研究会が独立しましたが、蓮田町は岩槻市と一緒に岩槻・蓮田班教育研究会をつくりました。（戦前からの中部16校は、ここに解消しました。）

昭和32年に東北本線が電化され、列車の本数もふえ東京までの所要時間が短縮されるにつれて、住宅や人口は更に増加していきました。このような環境の変化の中で、町当局、町教育委員会等のご指導やご援助のおかげで、教育体制は年々充実して確固たる教育基盤づくりができました。

この頃までの研修活動は、それぞれの学校が校内研修を中心に進めてきました。時には、県教育委員会や教育研究団体等の研究委嘱を受け

た研修もありましたが、それも学校単位の研究でした。

昭和34年頃から、研究活動を地域ぐるみのものとし、町内の全小中学校が共同で研修する共同研修体制がとられるようになったことは、画期的なものでした。

## II 蓮田町教育研究会誕生から

昭和35年、民主的・能率的な教育研究を推進するために蓮田町教育研究会が設立されました。同年5月14日 平野中学校講堂で設立総会が盛大に開催されました。この時から岩槻・蓮田班は分離して、蓮田は独自の研究活動を行なうことになりました。

### （発足当時の研究部会名）

国語	書写	社会	算数・数学
理科	音楽	図工・美術	家庭
技術家庭	保健体育	英語	道德
特別活動	特殊教育	教育心理	
視聴覚	放送教育	学校図書館	
生徒指導	進路指導	学校保健	
学校給食	学校安全教育	学校事務	
同和教育	助教師会		

### （研究部の呼名の変更、新設）

昭和49年	特殊教育→障害児教育
昭和53年	養護部 新設
昭和54年	学校安全教育→安全教育
昭和55年	視聴覚→視聴覚教育
昭和56年	同和教育→学校同和教育

小学校4校（児童数2,829名）中学校3校（生徒数1,402名）小中学校の教職員127名のミニ研究会でした。

それでも、いち早く、当時の県教育委員会のご指導のもと、昭和35年に町内全小中学校が図工・美術科の研究委嘱を受け、翌昭和36年に全校による研究発表を行いました。更に昭和38年6月20日には、再度、町内全小中学校理科教育の研究委嘱を受け、翌39年に共同発表をするなど、意欲に満ちた研究実績を積みあげてきました。

また、一面においては、教育内容を向上させるためには、施設を整備し、学校規模を適正化することは大切です。この頃までの人口急増によって、蓮田南小学校がマンモス化しましたので、その解消のため、昭和44年4月1日蓮田中央小学校が開校しました。

昭和47年10月1日市制が施行され、また蓮田駅も橋上駅となり、東口もでき、これによって更に住宅化が進んできました。

人口の増加により、新設学校の開校が下記のように急速におすすめられてきました。

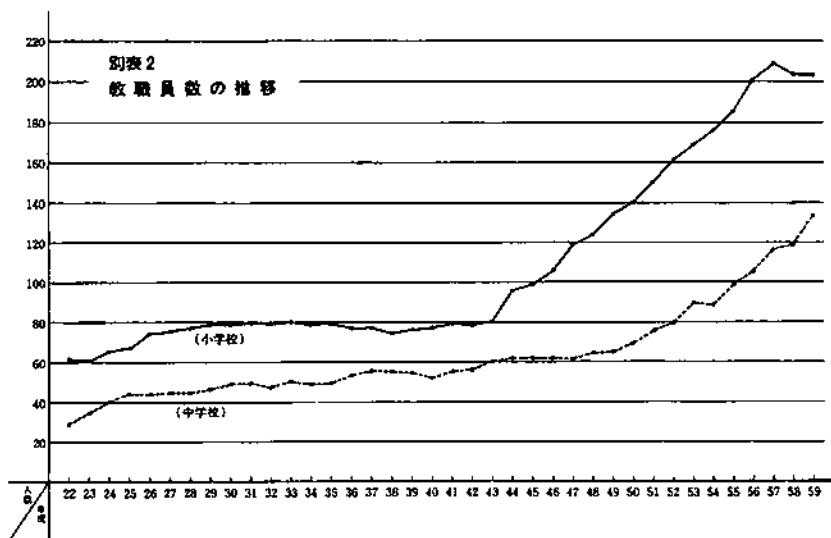
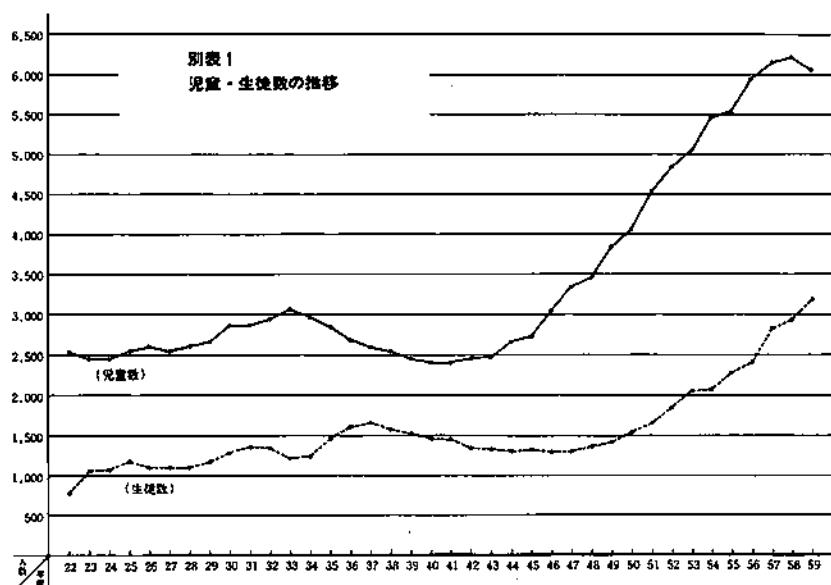
昭和42年4月1日……黒浜西小学校開校

昭和55年4月1日……蓮田南中学校開校

昭和56年4月1日……黒浜南小学校開校

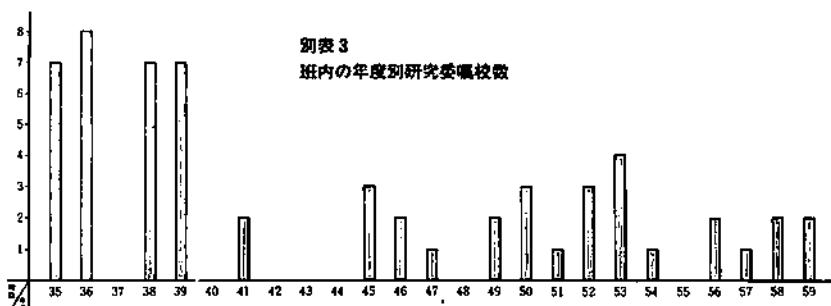
昭和59年4月1日……黒浜西中学校開校

なお、昭和60年4月には黒浜北小学校が開校する予定です。



このような状況の下で、昭和39年以降も班内の各小・中学校は県教育委員会をはじめ各種の教育研究団体等から研究委嘱を受けて研究にと

りくみました。その結果、関係学校は、県教育委員会賞、文部大臣賞、その他の褒賞をいただき、県下、地域の教育振興に貢献してきました。



### III 会報の発行

たび重なる研究発表や受賞により盛り上がりをみせてきました当研究会にも、会報発行の機運が芽ばえ、昭和48年度、遂にその悲願が達成されて創刊号が発行されました。

当時の研究会長佐藤清先生は、創刊号のあいさつの中で、次のように述べています。

「わが国の教育は、明治初年学制発布以来百年の歩みをつづけ、大きな理想のもとに、世代の推移とともに発展し続けてまいりました。特に戦後においては、教育の爆發時代ともいわれ、世界的に教育が再認識され、いくたびかの教育改革が行なわれて今日に至っています。

将来の日本を背負って立つ、有為な青少年の育成は極めて重要な問題とされている今日、私たち教師の責任は重大なことと思考されます。

本研究会の目的も“市内教職員の職能向上と教育の振興をはかり、地域社会の文化の発展に貢献する”とうたわれており、発足以来この目標にむかって、教師個人として又各教科の部員として、激変する社会状態と変動する教育界の要望にこたえるべく、研究と実践を懸命の努力で重ねてまいりました。」

このような経過をふまえて、本年も会報第12号を発行します。27の研究部は、それぞれの年間研修計画をふまえて堅実に、かつ、積極的に事業を推進し、子弟の教育に貢献しています。

(紙面の都合で、内容は省略)

### おわりに

マスコミをにぎわしていた学校内暴力も下火になったとは申せ、低年令化、女子非行の抬頭陰陥化と残虐化、対教師暴力の粗暴化などは、ますますエスカレートの方向に走っていると言われています。

市内の小・中学校12校には、そのような事例は、未だ1件も発生して居りません。これも、本市の教育への気風(期待と体制づくり)、保護者の方々、市当局ならびに市教育委員会のご指導とご協力、教職員ならびに先輩各位の教育への情熱のしからしめた賜です。

私達現に教職にあるものは、いっそう努力してこの教育環境、教育機能の保持・向上に邁進しなければなりません。

本市の教育の向上と当教育研究会の基盤づくりをなされた歴代の役員名を掲載して、お礼のことばといたします。

(資料不備のため、全容が掲載できませんことをお詫び申し上げます。)

(文責 池田 実)

## 歴代役員表

## 蓮田市教育研究会

登録年 会員名	会長	副会長	監事	幹事
昭和35 原島勇太郎				佐藤 清
36 原島勇太郎				岡根聰夫
37 原島勇太郎				岡根聰夫
38 原島勇太郎				岡根聰夫
39 岡根義雄 斎藤 誠				原 十郎
40 岡根義雄 斎藤 誠				原 十郎
41 岡根義雄 斎藤 誠				金井昭次
42 斎藤 誠 岡根武之進				江原繁夫
43 長沢正義				金井昭次
44 細田理一				金井昭次
45 細田理一				岩崎利雄
46 平沢正三 矢島賢治	大熊信一		岡根武之進	江原繁夫 二宮 栄
47 岡根武之進 石井武彦	矢島賢治	大熊信一	吉住 雄 岩崎利雄	江原繁夫 小林一三
48 佐藤 清 石井武彦	大熊信一	田口謙一	岩崎利雄 小林一三	長須房次郎 田中 仁
49 佐藤 清 石井武彦	大熊信一	田口謙一	岩崎利雄 中村政夫	長須房次郎 田中 仁
50 佐藤 清 石井武彦	大熊信一	田口謙一	中村政夫 町田善雄	吉岡道広 中村 尚
51 大川原了祐 田口謙一	金子源一郎	黒須 豊	中村政夫 吉岡道広	佐久間照夫 可田善雄
52 田口謙一 大川原了祐	金子源一郎	黒須 豊	中村政夫 町田善雄	佐久間照夫 吉岡道広
53 金子源一郎 大川原了祐	黒須 豊	長谷川一男	佐久間照夫 飯野敏雄	黒木 豊
54 金子源一郎 大川原了祐	黒須 豊	藤木謙佑	佐久間照夫 鈴木 豊	小山栄一
55 金子源一郎 大川原了祐	黒須 豊	藤木謙佑	飯野敏雄 小山栄一	吉岡道広 米沢昭一
56 黒須 豊 大川原了祐	藤木謙佑	小林一三	加藤金作 吉岡道広	高田三朗 中田 茂
57 岩崎利雄 黒須 豊	細村雄二郎	原 徹	高田三朗 中田 茂	森 国造 加藤金作
58 岩崎利雄 黒須 豊	原 徹	重盛三夫	吉岡道広 中田 茂	森 国造 高田三朗
59 池田 実 岩崎利雄	安岡正治	重盛三夫	高田三朗 森 国造	小林正治 森 国造

## 幸手町教育研究会

## 1 会のあゆみ

## (1) 発足以来現在まで

幸手町(班)教育研究会は、昭和40年に発足した。現在小学校11校、中学校4校の計15校。教職員(会員)376名で組織されている。

現在の会のほかに、古くから幸手班教育研究会があって、隣接の栗橋町及び鷺宮町と共に研究活動をしてきた。年々児童、生徒の増加に伴い規模が大きくなつたことから、昭和52年度を最後に発展的解散をした。そして昭和53年度よ

り町独自の、今の幸手町教育研究会となり、現在に至っている。

次に幸手町の概要の一部を参考までに述べる。

幸手町は県の北東部にあり、その一部は千葉茨城両県に接している。昭和29年に1町6村が合併してできたものである。四号国道が通り、また東武日光線幸手駅もあり、都心へ通勤できる便利さもある。そのためか年々人口増が著しく、団地もでき、現在の人口は5万1千余人を数え、近いうちに市政への移行も夢ではない。

行政上でも意欲的に教育優先の諸施策がなさ

れていて、まさに「教育の町幸手町」と言える。校舎も本年度改築される一校が完成すると15校全校が鉄筋造りとなり、いわゆる木造校舎はゼロとなる。

他に保健センター、武道館、図書館、中央公民館があり、加えて新たに西公民館完成も近い。

#### (2) 本会の目的及び事業

本会は町内小・中学校教職員の連絡、提携を密にするとともに、会員相互の研究活動をさかんにして、町教育の振興を図ることを目的としている。

なお、この目的を達成するため次のような事業を累加、発展的に行ってている。

イ、研究会・講演会・講習会等の開催。

ロ、学校や文化財等の視察研修。

ハ、展覧会・発表会・体育大会等の開催。

ニ、教科等の研究会の開催。

ホ、学校相互の交流・交歓会等。

ヘ、会報・研究集録等の発行

ト、その他、目的達成に必要な事項

#### (3) 組織及び役員

本会は幸手町小中学校に在職し、会則を認め、会費を納入する教職員をもって組織する。

会長（1名・校長）

副会長（3名・校長・教頭・教諭より各1名）

監事（3名・校長・教頭・教諭より各1名）

幹事（5名・会長が委嘱）

理事 各校長・各校教諭1・2名

専門部・・・教科等の研究部があるが、専門部活動の項で述べる。各委員会についても同様。

#### (4) 総会、理事会について

総会は会の議決機関で年一回定期総会を開催。

理事会は各学期毎に二回程度開催し、会務の報告、予決算、事業等について協議し、連絡、調整を図っている。

### 2 主たる活動と事業

前に記した各教科等の活動であり、本会の最も重要な事業である。各部が自主的に研修計画をたてて実践している。ただし熱心さのあまり活動日の日数（回数）が多くて、各学校の運

営に支障をきたさないよう、各部とも年間3回程度の会合にとどめている。

この中で授業研究や、実技の研修、他校の参観等を実施して研修を深めている。

また管外観察は、その年度に、全部が実施することのないよう、三年に一度の割合という規定に基づいて実施している。

以下活動の主なるものを紹介しよう。

- |          |                                |
|----------|--------------------------------|
| ① 教務部    | ・教務主任のあり方<br>・学校行事・校内研修のとりくみかた |
| ② 国語部    | ・授業研究会・埼葛文集応募                  |
| ③ 書写部    | ・硬筆展・書初展<br>・毛筆実技研修会           |
| ④ 社会部    | ・授業研究会・郷土の研究                   |
| ⑤ 算数・数学部 | ・授業研究会                         |
| ⑥ 理科教部   | ・科学展・授業研究会<br>・実験講習会           |
| ⑦ 図工・美術部 | ・焼物実技研修会                       |
| ⑧ 家庭部    | ・指導案研究・授業研究会<br>・創意工夫展・発表会     |
| ⑨ 技術部    | ・実技練習・創意工夫展<br>・生徒研究発表会        |
| ⑩ 保育部    | ・授業研究会・実技講習会                   |
| ⑪ 英語部    | ・スピーチコンテスト<br>・授業研究会           |
| ⑫ 道徳部    | ・授業研究会<br>・指導上の問題点の洗い出し        |
| ⑬ 特活部    | ・現況報告会・交歓会                     |
| ⑭ 心障児教育部 | ・事例研究会・交歓会<br>・就学指導研修会・作品展     |
| ⑮ 教育心理部  | ・実践事例研修会                       |
| ⑯ 視聴覚部   | ・校内放送の研修                       |
| ⑰ 学校図書館部 | ・読書感想文の作品審査<br>・運営研究           |
| ⑱ 学校栄養士部 | ・工場見学・栄養研究                     |
| ⑲ 学校給食部  | ・工場見学・マナー研究                    |
| ⑳ 養護部    | ・安全生活研究                        |
| ㉑ 進路指導部  | ・進路指導連絡協議会<br>・研修会             |

- (22) 安全部      ・交通安全指導研修会
- (23) 音楽部      ・町内小中学校音楽部発表会  
                      ・授業研究会
- (24) 学校事務部    ・給与事務研修    ・庶務研究  
                      ・服務研修会
- (25) 同和教育部    ・同和教育研修    ・授業研究
- (26) 生徒指導部    ・生徒指導のあり方の研修
- (27) 保健部        ・保健主事の任務のあり方  
                      ・性に関する教育研究
- (28) 養護教諭部    ・保健室経営研修会    ・実態調査

※発足以来、頻度の多いもののみ列挙。

### 3 特色ある活動

#### (1) 常任委員会

本会の特色ともいえるもので、各校から選出された理事は次に示す三つの委員会の中の、どれか一つに所属して、総会、理事会の決定事項の研究・処理に当っている。

従って理事は、理事会を構成して協議すると共に、その実践、処理に充たる。

#### ① 総務委員会

財務、調査、視察、学校交歓、講演会、発表会、研究助成、表彰、会則等。

#### ② 教育政策委員会

教育行財政、教育内容等。

#### ③ 広報出版委員会

広報活動並びに出版等。

#### (2) 各委員会が実施している主なもの

①総務・・・文化財や優良校の研修視察  
                      町有のバスを利用して、町内や近隣の文化財、史蹟、施設等を視察研修するもので、社会科、特に郷土学習の教材研究に役立っている。

県外の優良校視察は、これも町有バスを利用して実施している。先進校の教育実践の事情が参観でき、各校にもちかえって生かす努力をしているので、文字どおり有益な実践といえる。

②教政・・・社会科副読本「さって」資料づくり

三年生の社会科学習の副読本として「さって」をつくり、さらに指導書の編集もしている。

昭和58年度は前年度に引きつき、その資料づくりを行った。特に教材を中心にして、現地に行かなくても理解できるよう、スライドづくりに努力したことが特記できる。

#### ③広出・・・広報活動

会員の声、感想・意見等の発表の場として、学期に一回「幸手の教育」を発行している。

また研究の成果のまとめを「研究集録」として一回、年度末に発行している。

#### ④特に昭和58年度から新たに始めた活動 (小中連絡協議会)・・・総務担当

本町には中学校が4校ある。その中学校区内の小学校と連絡協議会をもっている。小・中学校間の連絡を密にするため、研究協議授業参観、レクリエーション等を実施して、小・中の一貫教育の運動したあり方の実施につとめている。

#### ⑤研究委嘱

毎年数校に町教育委員会の研究委嘱にあわせて、本会からも委嘱している。

### 4 運営に当っての問題点

#### (1) 事務所は、どこに置いたらよいか

幸手町教育研究会会則第1号に、本会は幸手町教育研究会と称し、事務所を会長指定の学校に置く、と明記してある。

発足 당시にさかのぼって事務所所在場所を調べてみたところ、ほとんど会長所在校になっている。したがって会長が代るたびに事務所も移動するわけである。もちろん、そうするほうが実際に便利だし、会長が指定したものと解してもいるわけである。

舞台と楽屋裏の例ではないが、大道具・小道具等の移動作業の大儀さはいざ知らず、重要財産の紛失等防止のためにも、固定指定はどんなものであろうか。20周年ということだ

から、あえてこのことを提起し、県内各研究会皆様のお知恵を拝借したいと考えるものである。

(2) 備品台帳、諸記録の管理保存

研究集録、総会要項等永久保存管理が望まれる。全会員の財産化を図るためにも。また先輩の有益な諸活動の足跡に学ぶことが多い

ことは申すまでもない。備品台帳整備と共にこれらを今年度の目玉としたい。

5 昭和59年度の研究活動

(1)教科等専門部会年間事業計画予定表

教科研…授業研究

月	総務	教育財政	広報出版	教務	国語	書写	社会	算数	理科	音楽
4	理事会 選管委 幹事会 新・旧理事会	副読本 製作		組織 年間計画		専門部会				
5	専門部会 総会 委員会									
6	文化財 めぐり				文集編集	硬筆 審査会			植物 研修会	実技 研修会 (小)
7	幹事会 委員会		46号発行	研究協議 (授業分掌)			研修会			
8						管外視察				
9	理事会 部長会 県外視察									
10					授研			授研 (西中)	科学展 (長小)	
11	理事会					実技 講習会 (毛筆)	授研 (西中)	授研 (吉小)		音楽会 (東小)
12			47号発行							
1	理事会 部長会			研究協議 (学校行事)		書初展			児・生研 究発表会 (幸中)	
2										授研
3	幹事会 理事会 監査会		48号発行 研究集録 発行							

月	国・英	技・家(中)	家(小)	保 体	英 語	道 德	特 活	心 教	視 聴	学 国
4	金工実技研修会 (西中)								ビデオ編集・操作 (八代小)	
5	金工実技研修会 (西中)	研 協 (西中)								
6			発表会計画 授 研 (行小)		授 研 (幸中)		交歓 会 計	研究観察		
7					スピーチコンテスト打合会 (栄中)					
8							交歓 会	県教研参 加		
9		指導案検討	創意・工夫発表会 (東小)	授 研 (幸小)						読書思想文 コンクール
10		創意工夫実践 (幸中)		授 研 (栄小)	スピーチコンテスト				放送授研 (緑台小)	管外視察
11	七宝焼 研修会 (栄一小)	授 研 (栄中)	授 研 (吉小)			授 研 (栄中)				
12		管外視察 (関プロ)						培養研 參 加		
1								交歓 会		
2			反省会 (東小)	授 研 (栄小)	研 協 (東小)		授 研 (吉小)	作品展 授 研 (吉小)	放送授研 (緑台小)	研 協 (西中)
3										
月	学業給食	養 教	進 路	安 全	事 務	同 和	生 指	保 健		
4										
5	親子給食 視察 (八代小)	救急講習		自転車の り研 (長倉小)		同和研協	研 協 (東小)	救急講習		
6					研 協					
7										
8										
9		研 協								
10		研 協								
11			中・高連 絡会 管外視察			授 研 (上小)		研 協		
12			道路連絡会 中高連絡会	研 協 (栄一小)						
1		研 協			研 協		研 協 (東小)			
2	研 協 (西中)	研 協								
3			進指連協会							

(2) 役員組織

会長	川辺 幾三（上高野小長）		
副会長	田村 包雄 (東中長)	小森谷幸治 (西中頭)	長塚 宏行 (西中論)
監事	出井 実 (行幸小長)	中里 忠博 (栄小頭)	関根 雅彦 (東中論)
幹事	柿沼 敏雄 (幸手小頭)	関 唯男 (八代小論)	船木 富重 (幸手中論)
	神白 祥二 (上高野小論)	茂田 信雄 (栄二小論)	

3	44~48	山岸一夫	吉田第一 上高野 小学校長
4	49~50	岡 広男	幸手中学校長
5	51~53	樋口 栄	長倉小学校長
6	54~55	新井恭治	西中学校長
7	56~58	奥原精哉	東小学校長
現8	59~	川辺幾三	上高野小学校長

(3) 発足以来の歴代研究会長  
(先輩への敬意と感謝をこめて)

代	年 度	氏 名	備 考
初	昭和40	山本義範	幸手小学校長
2	41~43	飯田 豊	幸手小学校長、現幸手町教育長

6 今後の課題等

会としての研究テーマを設定して各部での活動はどんなものだろうか。

7 その他

- (1) 予算(会費等)については省略した。
- (2) 本年度活動についても、予定のあらましのみにした。

## 栗橋班教育研究会

1 昭和53年4月 幸手班教育研究会より分離し、栗橋町内小中学校に勤務する教職員で構成する栗橋班教育研究会が発足する。

- 昭53.4 会長 小林正男（栗橋東小）
- ～54.3 副会長 竹村茂次郎（栗橋西小）
- 昭54.4 会長 小林正男（栗橋北小）
- ～58.3 副会長 加藤好一（栗橋西中）
- 昭58.4 会長 加藤好一（栗橋西中）
- ～59.3 副会長 加藤昭二（栗橋東一中）
- 昭59.4 会長 渡辺昭乎（栗橋東中）
- ～現在 副会長 塚田和夫（栗橋東二中）

2 主な活動

教科及領域等25の専門部を設け、各部毎に研究テーマを設定し研究を進めている。

- 主なものは
- 硬筆展 書初展
  - 理科展 児童生徒理科研究発表会
  - 音楽鑑賞会 音楽会
  - 美術展 町内巡回展

- 発明工夫展
  - 英語スピーチコンテスト
  - 讀書感想文コンクール
  - 水彩画実技研修
  - 町内史頃めぐり
  - 教育相談の体験発表
  - 授業研究
- これらは毎年実施しそれぞれの部に於いて研究し考察してその成果をまとめて、「栗橋の教育」として発行している。

昭56.57年度には文部省指定道徳教育共同推進校として、町内小学校5校、中学校2校が、教育研究会を中心として研究推進にあたった。

3 昭和59年度各専門部の研究テーマ

- |     |                     |
|-----|---------------------|
| ○国語 | 語いを豊かにするための指導法の工夫   |
| ○書写 | 正しく美しく書かせるための指導法の研究 |
| ○社会 | 問題解決学習の授業展開の工夫。     |

	「1小単元、1サイクル」の探求方式の学習課程	○義務児童生徒の視力異常の実態調査
○算数数学	ゆとりある充実した授業展開の工夫	○進路指導 学級指導における進路学習の展開
○理科	科学的分野の実践研修	○安全教育 安全な登下校の研究
○音楽	音楽性を育てる授業展開の工夫	○学校事務 公金輸送の諸問題について
○図工美術	水彩画の指導法	○同和教育 発達段階に即した同和教育の展開
○保健体育	運動のもつ楽しさを味わわせる 業の計画と実践（ボール運動を通して）	○生徒指導 全職員の協力体制の確立と家庭や関係機関等との連携のはかり方
○技術家庭	ひとりひとりを生かし実践力を高める指導法	○保健主事 保健主事の役割
○英語	学習に役立つ評価を工夫するL Lの効果的活用の研究。	○教務 教育課程実施上の諸問題について
○道德	道徳的な考え方や感じ方を深める指導課程の工夫	
○特別活動	自主的自発的な態度を育てる学級会活動のあり方	
○心障児教育	普通学級における知恵おくれ (学習不振)の児童生徒のあつかいをどうするか。	4 今後の課題
○教育心理	児童生徒理解の一方法 —教育相談による—	○発足からまだ日が浅いため、いろいろの面で改善しなければならないことがある。 今後は内容等の充実をはかるべく研究していきたい。
○視聴覚教育	パソコンを活用した指導法の研究	○会員相互の親睦と研修の場を多く設け、個々の資質の向上に努めていきたい。
○学校図書	読書に親しませる指導の工夫。	○各専門部の連携を密にし、それぞれの研究内容を全員が理解し、日常の教育活動に生かしていきたい。
○給食	望ましい配膳の工夫。	

## 庄和町教育研究会

### 1 会のあゆみ

本研究会の発足は、昭和39年8月21日である。それは、庄和町の町制施行の年である。庄和町は、昭和29年7月1日に川辺、南桜井、富多、宝珠花の4か村が合併して庄和村が誕生した。その後昭和35年11月に杉戸町のの倉常、芦橋、木崎の3地区が庄和村に編入、昭和39年4月1日に町制施行となった。庄和という名は庄内領

の村々が一致和合して、将来の発展を期するという趣旨だという。

本町は、埼玉県の東部にあり、東は江戸川、西は庄内古川に囲まれている。ここ数年のうちに、町の中央を東西に16号線、南北に国道4号線が相次いで開通し、庄和インターの交差により一躍道路交通の要衝になっている。更に、東武野田線の南桜井駅周辺に広がる住宅街の急激

な増加、産業では、農業を中心とする近代化、水稲、ナス、きゅうり、麦等の生産が盛んである。人口は、34,559人（昭和59年5月1日現在）である。

本会は、昭和54年度まで、杉戸町の教育研究会と共に研究活動を推進してきたが、各地域で市町村単位の教育研究会に独立する動きが出てきたので、本会も、昭和55年度より庄和町だけの小中学校で活動を展開している。現在は、小学校6校、中学校3校である。会員数は、現在250名である。学校名は下記のとおりである。

庄和町立宝珠花小学校	江戸川中学校
富多小学校	葛飾中学校
南桜井小学校	飯沼中学校
川辺小学校	
桜井小学校	
中野小学校	

## 2 基本方針と主要事業

### ① 基本方針

会則第2条、第3条の規定に基づいて会員相互の連帯を深め、教職員としての資質の向上と人間性豊かな児童生徒の育成に努め、庄和町教育の振興と充実を図る。

（付記）

会則第2条 本会は庄和町教育の振興を期するため教職員の資質の向上と人間性豊かな児童生徒の育成を図ることを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行なう。

1 学校教育に関する調査、研究の奨励並びに助成

2 研究会、講演会、講習会の開催 3 その他必要な事項

### ② 主要事業

4月 選挙管理委員会・理事会	
各教科等主任会	
5月 理事会・各教科等部長会	
総会・研修会	
8月 研究視察旅行・体育実技研究会	

9月 理事会

3月 理事会

○各教科等研究の事業 5月～3月

○管外視察実施教科等

年次計画で実施 本年度は次の研究部会である。

○算数・数学 ○保健・体育 ○外国語

○学校給食 ○保健主事

本会活動の中心は、教科等研究部（現在24部）である。教員の資質の向上、特に指導力の向上をめざして、授業研究を始めとする研修活動を推進している。

## 3 組織と運営について

(1) 本会の事務所は、会長所属の学校に置く。

(2) 組織 庄和町の小中学校の教職員をもって組織する。

(3) 役員 ①会長 1名 ②副会長 2名

③常任理事各校1名

④理事 各校3名

⑤監事 2名 6幹事 2名

(4) 役員の任務

①会長は本会を代表し、会務を総理する。

②副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは職務を代理する。

③常任理事は常任理事会を構成し会務の企画執行にあたる。

④理事は理事会を構成し、総会で委任された事項について審議決定するとともに各学校の連絡に当る。

⑤監事は会計を監査する。

⑥幹事は庶務会計をつかさどる。

(5) 役員の選出

①会長、副会長、監事の選出規定は別に定める。（役員選挙規定）

②理事は各学校ごとに校長を含め3名互選

③常任理事は理事会で互選

④幹事は会長の委嘱

(6) 役員の任期 1年とする。但し重任を妨げ

ない。補欠役員の任期は前任者の残任期間

#### (7) 本会の機関

①総会 ②理事会 ③常任理事会  
◎総会では、○会務の報告・決算の承認 ○事業計画並びに予算 ○会則の変更 ○その他必要な事項

◎理事会は主として総会に提出する原案作成  
常任理事会は、総会、理事会決定事項の処理である。また必要に応じて、理事会と各教科等部長の合同会議を開き、行事の調整と推進を図っている。

◎専門部会 研究部は下記の23部である。

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| ①国語    | ②書写    | ③社会    |
| ④算数数学  | ⑤理科    | ⑥音楽    |
| ⑦図工美術  | ⑧保健体育  | ⑨家庭    |
| ⑩技術家庭  | ⑪外国語   | ⑫道德    |
| ⑬特別活動  | ⑭同和教育  | ⑮障害児教育 |
| ⑯生徒指導  | ⑰学校安全  | ⑯学校給食  |
| ⑯視聴覚教育 | ⑲学校図書館 | ⑰教育心理  |
| ⑳学校事務  | ㉑保健    | ㉒保健主事  |
- 上記の研究部は各学校の教科等の主任をもって組織し、部長・副部長を置く。

#### ◎総務部

本会組織の特色の一つである。この事業部は、各学校の理事1名をもって組織し部長、副部長を置く。主な事業として、管外研修視察、全会員による体育実技研修等を企画し運営している。

#### (8) 会計について

○本会の経費は、会費及び補助金その他の収入である。  
○会計年度は、4月1日～3月31日  
○会費、1人年額600円

#### (9) 役員選挙規定の主なもの

○選挙管理委員会を設する。  
○上記委員は各校から1名あて選出する。

○任期は1年 立候補者は委員になれない  
○委員長1名 副委員長2名は互選する。  
○選挙管理委員会は  
①選挙の公示  
②立候補の受付と発表  
③投票及び開票の管理  
④当選の確認と発表  
⑤その他選挙管理に必要な事項  
○選挙は、全会員の直接無記名投票による。  
○会長、副会長、監事を選出する。

#### 4 運営に当っての問題点

- (1) 本会は小学校6校、中学校3校の9校である。まとまりのよい反面、中学校3校では、研究協議が深まらない場合もある。
- (2) 小学校6校のうち2校は小規模校であるため、教科等研究部の開催が重なると、学校運営上支障が起きる場合もある。また、小規模校では主任を兼務するので、出張回数が多くなり、授業時数にも影響を及ぼす。
- (3) 教科等研究部の行事は、10月、11月ごろに多くなる。  
④ 本研究会の組織は小さいので予算規模も少ない。しかし、専門部は、24部門あるので、予算の配分には苦労する。
- (5) 若い教師が多いので、各組織のリーダーを育成する必要がある。

#### 5 昭和59年度の研究活動

本年度は5月17日に南桜井小学校で定期総会を開催し、昭和58年度の事業報告並びに決算の承認、本年度の役員承認、昭和59年度の事業案並びに予算案の承認を行ないスタートした。当日はつづいて全員研究協議会、同和問題の映画「まごころの川」を鑑賞、同和問題に対する認識を深めた。

##### (1) 本年度の予算について

###### ①歳入について

歳入合計は、627,000円

内訳 会費 149,400円 (600円×249人)

補助金435,000円 (町その他)

繰越金 36,179円

雑収入 6,421円  
 ②歳出について  
 歳出は 627,000円  
 内訳 事務費 64,100円  
 会議費 12,000円  
 事業費 540,000円  
 (内訳)  
     ・研究部費300,000円  
         (各専門部に配分する)  
     ・総務部費 170,000円  
     ・研究発表費70,000円  
 渉外費 5,000円  
 予備費 5,900円

(2)各教科等研究部(専門部)の事業計画

- 4月・中学学徒大会予選
- 5月・書写実技研修　・社会町内めぐり  
     ・算数数学授業研修・障害教育主任研修  
     ・視聴覚主任研修　・学校保健主任研修  
     ・学校事務主任研修
- 6月・よしきり審査会　・書写町内硬筆展  
     ・家庭主任研修　・道徳主任研修  
     ・特別活動主任研修：学校安全主任研修  
     ・視聴覚主任研修　・学校保健主任研修
- 7月・社会主任研修　・図工美術授業研修  
     ・中学県体予選　・外国語授業研修  
     ・同和教育主任研修・障害教育主任研修  
     ・学校図書館主任研・教育心理主任研修
- 8月・図工美術主任研修・学校図書館主任研
- 9月・理科主任研修　・保健体育主任研修  
     ・発明創意工夫展(小中)・外国語スピーチコンテスト　・生徒指導主任研修  
     ・学校事務主任研修・外国語管外視察
- 10月・社会主任研修　・町内科学展  
     ・音楽主任研修　・体育新人選予選  
     ・保健体育主任研修・陸上競技大会  
     ・特別活動主任研修・技術家庭授業研修  
     ・障害教育担任者会・視聴覚主任研修  
     ・読書感想文審査会・学校保健主任研修  
     ・保健主事研修

- 11月・国語授業研修　・書写実技研修  
     ・音楽会準備会　・町内音楽会  
     ・町内美術展　・保健体育授業研究  
     ・道徳授業研究　・同和教育授業研究  
     ・障害教育小中合同交換会  
     ・教育心理主任研修・保健主事管外視察  
     ・学校事務年末調整研修会

- 12月・算数数学管外視察・理科天体観察  
     ・学校図書館主任研・保健体育管外視察

- 1月・町内書初展　・算数数学授業研究  
     ・音楽実技研修　・家庭主任研修  
     ・技術家庭授業研究・外国語(スペイングコンテスト研究会)  
     ・学校安全主任研修・教育心理研修

- 2月・社会授業研究　・算数数学授業研修  
     ・道徳主任研修　・特別活動主任研修  
     ・同和教育主任研修・生徒指導主任研修  
     ・学校給食主任研修・学校保健主任研修  
     ・保健主事主任研修・学校事務(杉戸庄和合同研修)

- 3月・国語主任研修　・図工美術主任研修  
     ・障害教育主任研修・学校事務主任研修

以上月別回数では、

4月1回	5月7回	6月8回	7月8回
8月2回	9月9回	11月13回	11月12回
12月4回	1月8回	2月10回	3月4回

年間合計86回である。この専門部会は、本会活動の中核をなすものであり、この活動がより活発に、効率よく展開するように、理事会で企画立案調整を行なう。理事会は、年4回、4.5月は本年度の計画づくり 9月は1学期の反省と2学期の計画 3月は年度の反省、まとめ、次年度の計画である。

常任理事会は、必要に生じた場合に開催する。4月の各教科等主任会は、各専門部の部長、副部長の選出と年間行事の計画である。各部の行事は、年間3回を原則として、主任研究協議会は、授業終了時の3時を原則としている。

5月の理事・各教科等部長会は、各専門部の年間行事と予算配分の調整を行なう。

昭和59年度 庄和町教育研究会役員  
会長 関野 潤（南桜井小）  
副会長内田祥三（飯沼中）世利文夫（葛飾中）  
監事 坂巻寿男（桜井小）世利 公（飯沼中）  
幹事 浜田切夫、今井寿々子（南桜井小）  
理事（○印常任理事 総務部員）  
宝珠花小○駒崎 潤 毛塚治子 高木健治  
富多小 ○中島龍一 内田恒次 秋間泰三  
南桜井小○関野 潤 三枝芳則 米川芳男  
桜井小 ○沢田三四 森田 弘 大戸洋子  
川辺小 ○橋本二郎 山崎一一 清水愛子  
中野小 ○横川準一 小島秀夫 小島広司  
江戸川小○平川有一 上司高浩 佐藤柄司  
葛飾中 ○小野寺舜司 笠原昭男 丸林純子  
飯沼中 ○寺田新市 宇田川勝 山門義武  
総務部 部長 宇田川 勝 副部長 森田 弘

## 6 今後の課題

- 本研究会は、県下各地の教育研究会の中でも小規模であると思う。小規模としての長所まとまりのよいこと、会合も短時間で開くことができる等よい面は伸ばし、短所とする研究の深まりの弱さ等は、各地教育研究会の研究等を積極的に受け入れ強めていきたい。
- 庄和町は本年町制施行20周年で、とくに「ふるさと庄和づくり」をめざしている。本会は、一層地域社会と密接な結びつきを持ち児童の願い、父母の願いを受けとめた、研修実践活動を推進したい。
- 本会運営のための予算は苦しい。予算増をはかるにはどうすればよいか、また、限られた予算の効率的運用の工夫等これから課題である。

# 杉戸町教育研究会

## 1 会のあゆみ

なが年杉戸町・庄和町2町による、杉戸地区教育研究会というものが、昭和55年3月18日臨時総会に於て発展的に解消することにより、昭和38年に誕生発足し、杉戸町独自で育てられてきた教育振興会なるものを包含して、新に杉戸町教育研究会が発足する。5年目に入る。

初代会長として斎藤富四郎校長（現在久喜中校長）、2代目会長として渋谷康校長（現在杉戸・西小校長）、その後を継いで現在古谷好男校長（杉戸小）が、その任にあたっている。

従って、その歴史は浅いものの、内容的には、以前からあった2町による地区研究会の内容に、杉戸町教育振興会の内容を包含、吟味精選したもので誠に充実したものになっている。

目的として会則2条に、「本会は、杉戸町教育の振興を期するため、教職員の職能の向上と、人間性豊かな児童生徒の育成を図ることを目的とする」となっている。

発足時に於ては、学校数7校（小5、中2）会員数223名、予算1,039,000円であったが、現在、中学校が1校増え、小中会わせて8校、会員数250名、予算1,300,000円をもって、小さい地域ではあるが鋭意充実した研究活動を推進してきている。

### (1) 組織について

- 会長1 ○副会長2 ○監事3
- 幹事2 ○理事（学校2名、内常任理事1名～校長）
- 専門部の構成（理事をもって構成する）
  - ・総務部
  - ・企画部
  - ・研究部
- 教科等研究部
  - ・25教科等に分け各校よりそれぞれ主

任が入っている。

## (2) 運営方針

会則2条(目的)3条(事業)の規定に基づいて、関係機関、団体との緊密な連帯のもとに、会員相互の連帯を深め、教職員としての資質の向上と、人間性豊かな児童生徒の育成に務め、杉戸町教育の充実を図る。

## (3) 重点目標

- 事業の組織的、計画的、重点的な推進
- 新教育過程についての実践と研究
- 教職員の研修の推進

## 2 主な活動と事業

### (1) 専門部活動

#### ア 総務部

##### ○教職員スポーツ大会

発足年度より毎年9月初旬の午後、町内全教職員により学校対抗で実施する。種目は、バレーボール・ソフトボール・バトミントンとする。

##### ○研究収録の刊行

年度の研究実践のあとを、各専門部、教科等研究部のそれぞれについて、約100ページ程度のものとしてまとめる。

#### イ 企画部

##### ○町内現地研究会(町内めぐり)

地域をよく理解することをねらいとして、町へ新しく着任した教職員を対象に、終日学校を中心とした現状を実地に研修する。(着任はやい時期に、2回に分けて)

講師、説明資料等については、社会科主任の中から、または教委社教主事に依頼する。

##### ○管外優良校視察

広く教育現場の実践を優良校から学びとることをねらって、各校の規模に応じ参加人員を配分し11月に1泊2日で実施する。

・参観校 年度

①栃木県阿久川小・中学校 (55)

②千葉県津田沼小学校 (56)

③栃木県宇都宮市立東小学校 (57)

④栃木県今市市立今市小学校 (57)

⑤千葉県野栄町立野田小学校 (58)

⑥千葉県野栄町立栄中学校 (58)

#### ウ 研究部

##### ○全員研究協議会

町内全教職員が参加、8分科に分かれ、各校から提案された協議題を中心に協議する。

研究課題としては生徒指導の問題をとりあげる。

##### ・年度別研究課題

(55) 生徒指導について

(講演) 教育センター

野崎好雄先生

(56) 教育相談からみた生徒指導

(講演) 教育センター

金子 保先生

(57) 生徒指導実践上の問題点

(58) いじめっ子、いじめられっ

子の問題について

(59) 現代っ子の気持ちをふまえた実践上の問題点

##### ○研究校の委嘱とその推進

(55~56) 委嘱校 東中学校

「学習効果を高めるための集団つくりの研究」

(57~58) 委嘱校 杉戸小学校

「個々をみつめた指導法の研究—算数科」

(59~60) 委嘱校 杉戸中学校

「自ら学ぶ生徒の育成」

##### ○研究助成

(55) 杉戸第三小(同和) 泉小(福祉)

(56) 泉小(福祉)

(57) 泉小(福祉) 西小(意欲性)  
杉戸中(充実感) 広島中(個を生かす)

(58) 泉小(福祉) 広島中(能力適性)

○各教科等における課題研究の推進

研究会は授業研究を中心としたものにし、集会回数は年3回を原則とする。集会時刻は午後1時以降、内容によっては3時以降とする。

月・木・土は除く。

年度の研究課題を現場で実践し、それをもちよって話し合えるような方策を考え、少ない回数でも極力実のあるものにするために努力していく。

### 3 特色ある活動

#### (1) 全員研究協議会

杉戸町勤務の教職員全員が一同に会し、実態のうえにたった共通の課題をもって協議し、日々の教育実践に役立てていくことをねらって、開催5年目なる。会を重ねるに、テーマがいろいろ絞られ、観点を変えて生徒指導を深めていくこうという傾向になってきておる。

昭和58年度実施したものをあげてみれば、問題行動の芽として、「いじめっ子、いじめられっ子」について研究してみた。

各学校の教師が8分科会に分かれ、それぞれの学校でとりくんできた問題が提起され話し合われた。指導者としては各学校の校長があたる。

各分科会別の協議題をあげてみる。

第1分科会～「いじめっ子、いじめられっ子」の指導の一考察

第2分科会～「いじめっ子、いじめられっ子」

第3分科会～「いじめに関する調査」

第4分科会～「いじめについての事例研究」

第5分科会～「電話によるいやがらせ」

第6分科会～「いじめっ子、いじめられっ子」

第7分科会～「いじめの傾向」実態調査

第8分科会～「いじめっ子、A子」

以上が各分科会の協議題であるが、これらの中にある調査には、人権問題はあるし、父兄の協力も必要、それに調査項目のたて方等、難しい問題がかなりあったようである。いずれも生の声がだされ話し合われる中で、町内全教職員の共通の理解をはかることや、連帯意識の問題や、より深い教育実践による子どもの見方、家庭、学校の連帯など、教育の見直しの面からも、現場に大きく生かされてきている。

ある分科会で、いじめられっ子は、「正しい生活習慣の欠如に多い」という結びをだしているが、これも現場を見直すことで、ひとつの方向をあたえたのではないかとも考えられる。

#### (2) 研究集録・記録誌の発行

年度のまとめとしての研究集録を、発足以来今日まで4号を発行する。各教科等の年間の研究成果はもちろん、専門部の活動、研究会全体の動きなどを集録している。

本年は発足5年目ということで、研究会の歩みに一区切りをつけたいということで、記録誌を発行する。内容については検討中であるが、「これから教育を考える」ということで、町内各方面から代表者による教育座談会の掲載や、研究部活動の5年間の成果と今後の方向や、先輩からの提言、戦後から戦後までの研究活動の歩みなどをもりこんだものとする方向で進めている。

### 4 運営にあたっての問題点

町内8校の少人数による主任協議のため、集まる各自がそれぞれ責任のある参加を考えていかなければならない。

#### (1) 各教科等の研究課題が、毎年変わること

によって深まりを欠く。これは集会回数にも問題があるが、授業時数の確保、正常化とも考えて、各自の充実した実践活動とあわせ、課題を2～3年継続して考えていくことにしなければならない。

#### (2) 集会回数を減らしたことは、当然各自が

その集会を有意義にしかも効率あるものにしていかなければならない。

そのひとつとして、事前の準備または計画など、細い配慮が必要になってくる。

## 5 今後の課題

全員研究協議は5年の経過をふり返ってみて、それなりの成果をまたと思う。時間的には午後開催ということで、日程が非常に苦しいところが残された問題である。

各教科等の活動に於ては、それぞれテーマを設けることも必要であるが、本会としての重点課題というものを、更に具体的にいかなければならない。例えば、充実感のことや、意欲的な学習の成立や、教育過程の検討や、評価のことなど。これをもって各教科等の研究活動が、更に具体的なテーマでとりくまれることが今後の残された問題である。

# 吉川班教育研究会

## 吉川班教育研究会のあゆみ

昭和22年4月1日、吉川部会教育研究会と称し初代会長 出井昂 吉川小学校長が就任する。

本会は吉川町、旭村、三輪野江村、松伏村、金杉村、早稻田村、八木郷村、戸ヶ崎村、彦成村の1町8か村内の小中学校教職員をもって組織する。

初代会長 出井 昂 昭和22年～23年

2代 " 上原麟之助 昭和24年～30年

3代 " 鈴木和三郎 昭和31年～38年

4代 " 利根栄次 昭和39年～42年

5代 " 中島 英 昭和43年～46年

6代 " 上坂隆善 昭和47年～51年

7代 " 木村斗三造 昭和52年～53年

8代 " 田中昭一 昭和54年～58年

9代 " 山崎芳夫 昭和59年～

昭和30年町村合併により吉川町、旭村、三輪野江村が廃され吉川町が設置された。

昭和40年頃三郷村が三郷町と改名される。後に三郷市となる。この頃の主たる活動として吉川部会陸上競技大会、文化祭、ロードレース大会、小学校ソフトボール大会、吉川・草加地区写生大会、教職員レクリエーション大会等が盛大に行なわれた。児童、生徒数が急増とともにない学校数も増え一同にかいして諸行事等が開催

不可能となり南北に分けて諸事業を行なう。

昭和47年吉川班から分離、独立し三郷市教育研究会が設置された。その後吉川町、松伏町の2町教職員、2教委14校で吉川班教育研究会として現在に至る。

## 昭和59年度の研究活動と事業

教科等研究会25部門と本部事業とにより、職能向上と教育の振興をはかることを目的とし講演会、講習会、研究会、展覧会、音楽会、各種競技会等の開催をしている。

## 活動状況

国語	主任研究会 授業研究会、文集編集
書写	硬筆、毛筆の実技研修会
社会	現地研修会 授業研究会
算数数学	授業研究会 主任研修会
理科	実技研修会 授業研究会
音楽	音楽会 主任研修会
図工美術	実技研修会 主任研修会
家庭	発明創意工夫展 主任研修会
技術家庭	研究発表会 実技研修会
保健体育	水泳講習会 実技伝達講習会、陸上競技大会、各種球技大会
英語	スピーチコンテスト 主任研修会
道徳	授業研究会 主任研修会
特別活動	授業研究会 主任研修会
特殊教育	実践報告会 授業研究会

教育心理 管外視察 事例研究会  
 視聴覚 実技研修会 主任研修会  
 学校図書 読書審査会 研究協議会  
 生徒指導 事例研究会 主任研修会  
 進路指導 主任研修会  
 安全教育 実践報告会 主任研修会  
 学校給食 優良校視察 主任研修会  
 保健主事 主事研修会 講習会  
 同和教育 研究協議会 授業研究会  
 養護 講習会 主任研修会  
 学校事務 研修会 実務研修会  
 本部事業 常任委員会 教科等主任研修会 新  
     旧委員会 総会並びに講習会 低中  
     高別研修会 教科等研究部長会 委  
     員会

#### 昭和59年度予算

(1) 収入 921,742円

##### 内訳

会費 156,240円 (30円×12月×434)

補助金 (町560,000円)

継越金 185,502円

雑収入 20,000円

(2) 支出 921,742円

##### 内訳

事務費 40,000円 会議費80,000円

教科研究費 432,000円

事業費 178,000円

研究補助費 40,000円

報償費 131,000円

予備費 20,742円

##### 学校別会員数

金杉小学校25名 松伏小学校37名 松伏第二  
 小学校23名 吉川小学校26名 旭小学校22名  
 三輪野江小学校24名 北谷小学校37名 関小  
 学校34名 栄小学校30名 中曾根小学校24名  
 松伏中学校49名 東中学校24名 南中学校39名  
 中央中学校40名

総計 松伏町134名 吉川町300名

434名

##### 学校別児童数・生徒数

金杉小学校645名 松伏小学校1159名 松伏第  
 二小学校608名 吉川小学校746名 旭小学校  
 523名 三輪野江小学校683名 北谷小学校  
 1085名 関小学校1048名 栄小学校932名  
 中曾根小学校692名 松伏中学校1242名  
 吉川東中学校535名 吉川南中学校987名  
 吉川中央中学校968名  
 総計 松伏町3653名  
       吉川町8210名  
           11863名

#### 主たる本部事業について

##### (1) 総会並びに講演会

昭和48年度から56年度まで講演会が年2回開催されていたが行事等の精選によって年1回となり総会行事と併せて講演会を開催している。過去五年間に開催された講演会の内容、講師等について記してみる。

55年5月 動物の教育から考えた人間教育 東  
    武動物公園長 西山登志雄氏

9月 子ども理解について

草加市立栄中学校長藤井光雄氏

56年5月 青少年の非行と生徒指導

武藏野学院長 戸田森夫氏

9月 わが詩 わがうた

詩人 宮沢章二氏

57年5月 生徒指導の今日的課題と

一教育相談

教育センター 深田きよ氏

58年5月 非行と非行児童の訴え

鬼怒川学院調査官 武川 篤氏

59年5月 生徒の自主性と教師の指導力

浦和原山中教諭 坂本光男氏

##### (2) 低中高別全体研修会 (小学校部会)

昭和52年度より実施、それぞれの部会ごとに年度始めにテーマを持ち、各校において実践研究したものを発表しあい研究を深めていく。研修会の指導、助言者は各校の校長、教頭があたる。

### 問題点

行事の持ち方、能率的な研究の進め方、講演会の講師の選定、2教委に関連する1つの研究会のため連絡等事務上不徹底がある。

### おわりに

実践上の問題をとらえこれを着実に解決し、その成果があがるよう努力していきたい。

(文責 山崎芳夫)

## 白岡町教育研究会

白岡町教職員の積極的な研修意欲により、昭和52年5月20日、白岡町教育研究会が発足した。児童生徒の幸せと、よりよい教育実践を営み、真に実のある研修をめざし発足されたものである。

当時は、まだ久喜地区教育研究会が存続していた。然し、久喜地区教育研究会も急激な人口増と学校数の増加により諸行事の運営に支障をきたし、存続についてしばしば論議されるようになっていた。全会員の意見を尊重し慎重な協議を重ね結論を出すことが約束された。その結果、自主的に創造性の發揮できる地教委単位の研究会が望ましいという意見が圧倒的に多く長年存続した久喜地区教育研究会も解散することになった。その間、各地教委では独自の研究会発足の準備をすることになり、久喜地区教育研究会の解散前に設立されるようになっていた。本町でも教育委員会の交渉、教職員の理解を促す啓蒙等を行い漸く発足の運びとなった。以来、本研究会も順調に堅実な歩みを続け、年々内容も充実し本年8年目を迎えるに至っている。以下本研究会の歩みの概略を記述する。

#### ◆ 昭和52年度 ◆

1 会長 遠藤健太郎

2 会員数 162名

3 予算 227,000円

4 研究会組織と主な活動

●組織発足時であり、また、久喜地区教育研究会と並行して運営しなければならない現況にあり大ざっぱな組織であった

・小中学年別研究部・事務職員部・養護教諭

部・学校同和教育部・心障児部

#### ●活動

##### (1)小中学年別研究部

- 小1部 1年生の学校生活の諸問題
- 小2部 2年生のお手つだい
- 小3部 白岡町内めぐり
- 小4部 学年 学級経営
- 小5部 林間学校のありかた
- 小6部 学年経営の現状と問題点
- 中1部 生徒指導上の問題点
- 中2部 生徒指導上の問題点
- 中3部 中高進路研究協議会

##### (2)事務職員部 実務的な書類作成研究

##### (3)養護教諭部 保健資料の作成

##### (4)同和教育部推進状況 地区の実態 差別映画鑑賞 資料の活用等

##### (5)心障児部 心障児の適切な指導の在り方 以上のテーマのもとに年間数回の会合を持ち研修する。教科領域等の研究は従来通り久喜地区教育研究会で実施する

##### (6)研究会諸行事

- 教職員体育大会
- 小中合同社会科研修視察
- 町内小学校児童音楽会
- 町内小学校児童陸上競技大会
- 町内小中学校連絡協議会

##### 5 運営にあたっての諸問題

発足の年であり、予算も少く運営面で無理があつた。然し、当初予定した事業は終了できた久喜地区教育研究会事業とのかかわりを配慮し重複をさけ運営するので気苦労があつ

た。

◆ 昭和53年度 ◆

1 会長 岡安 章

2 会員数 179名

3 予算 309,000円

4 研究会組織と主な活動

●組織

前年度と殆ど同じであるので省略するが、新しく教務部が設けられた

●活動

前年に準じ、年度当初各部毎に年度の研究課題を設定し、部長を中心に研究を推進した。新設した教務部の研究課題は下記の通りである。

教務部、授業時数、過案、学校評価等、尚研究会諸行事も前年度と同様継続実施され、特記すべきこともないで省略する。

5 運営にあたっての諸問題

発足して2年目であり、昨年一通り運営されてきているので昨年に比べ幾分円滑に運営できたように思われる。予算面も多少増額にはなっているが、本年から西小学校が開校され会員数も増えたので経理面は前年同様苦しい面があった。本年も教科領域等の研究は久喜地区教育研究会に参加し研修した。

◆ 昭和54年度 ◆

1 会長 岡安 章

2 会員数 187名

3 予算 731,000円

4 研究会組織と主な活動

久喜地区教育研究会の解散に伴い本研究会独自の組織作りを考える年にきた。昨年から引き続き検討会を重ね全面的に組織がえをし出発することにした。教科領域等の専門部組織を中心に活動し易い配慮をした25部会編成とした。

●組織と活動

①国語 文章による表現力を高める指導法の研究

②社会 新教育課程（指導計画）の作成と

移行の完全実施

- ③算数数学 図形領域における基礎的、事本的事項のおさえ方
- ④理科 移行措置をふまえた指導法の研究
- ⑤音楽 創意を生かした音楽朝会の在り方
- ⑥図工美術 新教育課程をふまえた教材、及び指導法の研究
- ⑦技術家庭 移行期間中における教材の指導法の研究
- ⑧保健体育 児童生徒の体力の向上
- ⑨英語 四技能の調和と発展を図る指導
- ⑩道徳 道徳指導の改善と工夫
- ⑪心障児 ひとりひとりの児童生徒 実態に即した指導法
- ⑫特活 ゆとりの時間と活用
- ⑬教育心理 学校不適応児についての研究
- ⑭視聴覚 学習の効率化を図る教育機器の活用
- ⑮学校図書 図書室の管理と運営
- ⑯学校給食 配膳と後片づけ時間の効率化
- ⑰養護 保健のお話資料作成（放送用）
- ⑱進路指導 学級における進路指導
- ⑲安全教育 安全行事の効果的な運営
- ⑳事務 学校事務の効率化
- ㉑同和教育 人権教材の指導法の工夫
- ㉒生徒指導 学級経営における生徒指導
- ㉓書写 指導法の研究と作品研究
- ㉔保健主事 保健組織と保健計画の作成
- ㉕教務 新教育課程に伴う年間指導計画の作成
- ㉖研究会諸行事
- 教職員体育大会
  - 町内小中学校児童生徒美術展
  - 町内小中学校児童生徒書初展
  - 町内小学校児童陸上競技大会
  - 町内小中学校児童生徒音楽会
  - 町内小中学校児童生徒科学展
  - 町内小中学校連絡協議会
  - 町内教職員社会科研修視察
  - 尚発明創意工夫展、中学校生徒英語スピーチ

コンテスト等は久喜地区連絡協議会の協力を得て共催の形で実施された

### 5 運営にあたっての諸問題

前述した通り、久喜地区教育研究会の解散に伴い、すべての運営が独自となった。まず予算の大巾増額、専門部活動を強化すべく積極的に推進したが、行事が多く月に集中し行事調整に苦労した。また、美術展、書初展科学展等久喜地区教育研究会で実施された諸行事が町単位ということで初経験で運営上かなり苦労されたようである。然し、半面尊い体験をしたこと、町内出張ということで集まりも極めてよく効率的な研修ができた。中学校教科英語、進路部会では二校の中学校二名の集まりでさびしい感もあった。来年度改善の方向で善処したいと考えている

#### ◆ 昭和55年度 ◆

1 会長 矢島賢治

2 会員数 201名

3 予算 1,424,000円

#### 4 研究会組織と主な活動

前年度と同じで、各部会とも年度当初協議の上本年の研修課題を設定し必要わく内で研修会を持ち積極的に事業を推進した。また研究会独自の全体諸行事も昨年に準じて行われた。特に本年新しく付記したいことは予算額が昨年より大巾に増額した。各校の校内研修のもり上がりを考慮し増額されたものである町内小中学校が共通理解の上にたって各校独自の研修課題を設定し、それぞれの立場で積極的に継続研修を積み重ね、その研修結果を研究紀要に掲載し広く本研究会会員に知らせる意図のもとに実施された。以下参考までに各校の研修課題名を記述する

#### ◎各校の校内研修課題名

●子どもが感動し、熱中する授業をめざして  
篠津小学校

●喜んで取り組む算數学習をめざして  
菅野中学校

●主体的学習（算数）指導は どのように進

めたらよいか

大山小学校

●特活指導における 効果的な学級会活動

児童会活動の手立てについて 南 小学校

●分かる喜びを味わわせる学習指導法

西 小学校

●ゆとりと充実をめざした計画と実践

篠津小学校

●主体性を伸ばす学習指導法の研究

菅野中学校

◎就学就職連絡会、中学校の進路指導を適切に然も効率化を図るべく予算化し、中高連絡会をはじめ就職に対する職安等との連絡を密に積極化した。

### 5 運営にあたっての諸問題

集会を持つにあたっての行事調整には、昨年度同様苦労した。然し、昨年より若干円滑化されたように思える。本研究会も新組織になり、二年目を迎えた軌道にのった感もある。予算面も町の協力的な理解により増額していただき以前から比べると運営も苦労なくできるようになった。また、前述した通り校内研修費の予算化で各校の校内研修が積極的にかつ活発に展開できたことは誠に喜ばしい限りである。就学就職についても大変仕事が効率化されるようになった。来年度は更に充実させたいと願っている。

#### ◆ 昭和56年度 ◆

1 会長 飯野初男

2 会員数 211名

3 予算 1,563,000円

#### 4 研究会の組織と主な活動

昨年度と変わりはないが、会員の要望により、本年から学校内で重要な位置を占め学校運営面で欠くことのできない学年主任専門部会を特設した。小学校低学年主任部会（1年2年3年）小学校中学年主任部会（4年5年6年）中学校学年主任部会の三部会が増設され、専門部会は全部会28部で編成され活動することになった。更に、運営面で町内の研修機会だけでなく、28部会中14部会先進校研

修として管外視察を設け、研修の機会を拡大した。特設した学年主任部会のテーマは下記の通りである。

●小学校低学年主任部会

学年主任としての心構えはどうあるべきか

●小学校中学年主任部会

望ましい学年経営の在り方について

●中学校学年主任部会

学年経営上の諸問題

5 運営にあたっての諸問題

本年は円滑に然も活発に運営ができた。一部会員より研修の場、特に授業研究会、実技研修会等には主任だけの集まりでなく多くの会員が研修できるよう配慮してほしいとの要望があった。研究会としては善処したいと考えている

◆ 昭和57年度 ◆

1 会長 飯野初男

2 会員数 221名

3 予算 2,077,000円

4 研究会の組織と主な活動

昨年度と同様、専門部活動、研究会諸行事、校内研修課題活動の推進をめざし、積極的に活動を展開した。本年度から普教中学校が分離し南中学校が開校した。本研究会の学校数も小学校5校中学校3校計8校となり運営の面で昨年より張りが持てるようになった。

5 運営にあたっての諸問題

内容の充実をめざした活発な活動を展開すべく諸行事を計画したが、会員の研修意欲の盛り上がりによりよい運営ができたように思える。更に、学校数の増加により会員数も増え研究会としては大変嬉しく思っている

◆ 昭和58年度 ◆

1 会長 飯野初男

2 会員数 229名

3 予算 2,106,000円

4 研究会の活動、運営にあたっての諸問題

昨年度の反省に基づき更に内容を充実拡大すべく会員の協力を得て活発に活動し、より

よい成果があげられたように思う。特に本年から町委嘱の指定校が決まり、二年間の研究結果を発表することになった。本研究会も若干の助成をし、会員が揃って研修できる機会が与えられたこととは嬉しい限りであり、発表校の成果を期待したい。運営は至極円滑に運ばれ別に問題はなかったように思う。

◆ 昭和59年度 ◆

1 会長 飯野初男

2 会員数 230名

3 予算 2,162,000円

4 研究会の組織と主な活動

前述した通り本研究会も発足して8年を迎えた会員一丸となり本研究会の発展のため積極的に活動を展開している。5月7日無事定期総会を終わり各組織を通じ年度当初に計画された事業計画に従い順調に仕事が進められてきている。本年は特に活動の中心を専門部活動におき多くの会員が研修に参加しできるだけ研修の成果をあげていただきたいと思っている。尚校内研修指定校の発表がありより上がった研修の成果を期待するものである。会員ひとりひとりが職務を自覚し、自ら求める教師を目指し大いに研修し、伸びゆく児童生徒の幸せのため本研究会を母体として益々発展されて行くことを念願するものである。

紙面の都合で後半大分省略しましたがご了承願う次第である

(文責 飯野初男)

# 菖蒲町教育研究会

県の東部を縦断する国道122号線の道筋にある菖蒲町は久喜市と桶川市のほぼ中間に位置し、江戸時代には見沼代用水の起点となり、宿場町として栄えたところですが、鉄道から離れているため、近郊都市とはいえ人口2万1千人、戸数5340戸の田舎町で、梨の出荷や野菜類（キウリ、イチゴ等）の生産が米作りに次いで盛んである。近年は久喜、菖蒲工業団地やNHKラジオ放送所等開発も着実に進められている。

## I 菖蒲町教育研究会の発足

30余年の長い間、久喜、菖蒲、白岡、宮代、鷺宮の1市4町で久喜地区教育研究会を組織し、数々の伝統を築いてきましたが、広域組織という運営上の支障や周囲の状況から各市町毎の組織改革に気運が高まり、昭和53年度をもって発展的に解散することとなり、早速菖蒲町教育研究会準備委員会を結成し、昭和54年5月25日、創立総会を開催し、初代会長には島田保氏（菖蒲南中学校長）を選出した。  
(学校数、小学校4校、中学校2校)

設立総会は規約等に慎重な審議を経て、引き続き行われた前埼玉県中学校長会長、日向雅雄先生による「期待される教師の研修」と題する教育講演会等により、時間もかなり延長されたようである。

草分け期ともいべき初年度の各顧問、部長はじめ全会員には、小型化した研究会活動に大変な苦労の跡がみられ、特別行事等の児童の参加にも従来に増して努力され、立派な軌道を駆かれたことに感謝している。

## II 本会の目的及び組織の概要について

### 1 会の目的と事業

菖蒲町における教育の振興と、町内に在職する職員の職能向上をはかることを目的とし、次の事業を行うことにつとめる。

- ア 児童生徒の資質の向上をはかる諸行事
- イ 職員の研修及び福利厚生に関する諸行事
- ウ 教育に関する調査、研究、優良教育施設の視察等
- エ 各種教育研究団体、関係機関等との連絡
- オ その他必要な事項

### 2 役員の組織

会長	(1名)	理事会で選出
副会長	(3名)	
監事	(2名)	
理事	各校4名、各校毎に選出	
幹事	(2名)	会長の委嘱

### 3 研究組織

- (1)埼葛連合教育研究会との連携をはかる。
- (2)全会員はそれぞれ各教科領域の研究部に所属し、希望により2部門以上に所属し、活動に参加できる。
- (3)部長、副部長は部員の互選による。  
校長、教頭は各研究部の顧問として所属する。
- (4)研究部(26部門)  
国語、書写、社会、算数数学、理科、音楽、保健体育、図工美術、技術、家庭英語、道徳、特活、心障児、図書館、教育心理教育相談、視聴覚、保健養護、安全教育、進路指導、生徒指導、女教師、学校事務、同和教育、保健主事
- (5)特別事業  
学年学級経営発表会、教育計画の調整  
泊をともなう研修視察  
児童の各種展覧会、発表会  
町内小学校球技会、陸上競技会  
教職員レクリエーション研修大会

### III 研究会のあゆみ

#### 1 歴代役員について

	会長	副会長	幹事
54年度	島田 保 (菖蒲南中長)	中村 義良 大熊ハツ	新井 浄憲 外山貞一
55年度	島田 保 (〃 〃)	柿沼忠四郎 高沢和夫	服部清一 木村秀幸
56年度	柿沼忠四郎 (柏間小長)	堀越敏男 遠井清夫 大熊千鶴子	戸田政夫 滑水 守
57年度	平川仁一 (菖蒲南小長)	金井昭次 石井琢也 大熊千鶴子	齊藤栄達 森山カネ子
58年度	平川仁一 (〃 〃)	金井昭次 山岸敬一 森山カネ子	齊藤栄達 子熊利枝子
59年度	金井昭次 (菖蒲小長)	加藤昭二 石井琢也 平川和子	齊藤栄達 蓮実五喜

#### 2 特別行事の実践

##### (1)教育講演会

教師が研修に精進し、幅広く力量を伸ばす一助として、毎年定期総会時に全職員参加により学習の機会としている。

最近は同和教育全体学習の場として、地域の指導者を招いて相互学習の場としている。

年度	講演内容
54年	期待される教師の研修
55年	遺伝と人間形成
56年	子どもの非行例について
57年	同和問題について
58年	同和教育について
59年	差別を許さない教育

#### 3 学年学級経営研究会

各学校（小学校5、中学校2）は隔年毎に発表提案者を出し、町内過半数の職員が参加して行われていたが、先年度から日直以外の全教師が参加しての研究会となった。

講師の指導をいただきながら、それぞれに質疑応答を繰り返す熱意は年々高まり、

小中学校交流の面からも成果は非常に好調である。

近年の発表題目を参考に列記すれば

##### ○57年度

- (小、低) 話し方を育てる学級経営
- (小、中) 明るく楽しい学級づくり
- (小、高) 児童と教師の心のふれ合う学級づくり
- (中学) 考える生徒を育てる学級経営。

##### ○58年度

- (小、低) 働くことに喜びを持たせる学級づくり
- (小、中) 一人一人を生かす学級づくり
- (小、高) 一人一人が積極的に行動できる学級づくり
- (中学) 主体的な生徒を育てる学級経営

#### 4 町内小学校球技会・陸上競技会

中学校は運動クラブをはじめ、他校との交流行事が沢山もたれるが、小学校も町内児童の親睦を深め、技術を競いながら体力増進をはかるために、6月に各校6年生を全員参加させてミニバスケットボール大会を催し、10月には各校5、6年の全児童参加により、100m、走り幅跳び、走り高跳び、ボール投げ、持久走、400mリレーの陸上競技会を実施し、賑やかな楽しい一日を過ごさせている。

#### 5 町内小中学校音楽会

11月上旬の行事として開催し、小学校は各校2学級、中学は1学級づつ出場して、日頃の練習の成果を発揮させて盛大に行われ音楽教育の振興に貢献しているが、会場の都合で出場者数を制限されることはやや淋しいところである。

#### 6 町内美術展

12月上旬の行事として各校持ち回りで行い埼葛展への出品を兼ねて審査し、特に日曜公開の便を図りながら美術教育の振興にとどめている。

#### 7 書初展覧会

12月下旬又は1月上旬に各校毎に実施した優秀作品を一堂に集めて展示し、県中央展への出品を兼ねて審査している。

#### 8 町内科学展

概して夏休み中の児童生徒の観察、実験の作品が多く見られる。各校各学級1点以上の優秀作品を展示し、学校持ち回りで科学への関心を高めるよう配慮している。

#### 9 教職員研修大会

教職員体育振興会との共催で9月上旬に中学校を会場にして町内全職員が集まり、バレー、ソフトボール、卓球に分れて親睦、融和、健康増進を求めて楽しく汗を流せる場である。

### IV 今年度の研究活動

町内教職員139名の年齢構成は比較的に若く、平均年齢36.2才である。

当研究会としても、とりわけ青年教師への研修啓蒙をはかり、自己啓発を求めて専門部活動の充実にとりくんでいる。

#### 1 各専門部の活動要領

(1)各部とも年度当初に研究目標を設定する  
(2)各部の事業は学習指導研究会を含めて、  
2回程度とする。

(3)会合は午後3時以降とし、授業時数の確保につとめる。

但し授業研究会はその限りでない。

(4)2部以上の同時会合はできるだけ調整する。

(5)先進校の視察は専門部の三分の一とする  
59年度の視察部会は次の通り、

社会、音楽、技術、道徳、教育心理、  
養護、生徒指導、同和教育、女教師

(6)年度当初に承認をうけた事業は部長の責任において随時執行する。

(7)分書発送は様式に従い、内容は詳細に記述する。

(8)配分された予算は有効に運営し、明細を年度末に本部に報告する。

(9)部長は研究紀要の原稿を作成する

### 2 本年度事業計画

内 容		内 容	
4月	理事会、教育主任会	10月	小学校陸上競技会、科学展
5月	総会、教育講演会	11月	音楽会
6月	部長会、小学校球技会	12月	美術展
7月	文集原稿審査	1月	書初展、学級経営研究会
8月	人権作文審査	2月	
9月	教職員研修会	3月	理事

#### おわりに

昭和54年度に町単位研究会に組織替えしてまだ数年ですが、小学校5校、中学校2校の小規模研究団体として、各教師は複数の専門部に研修参加の機会があり、また各専門部とも地域的連帯感に結ばれ、小中学校の連携も順調に行われ、家庭的雰囲気の中で協議され、資質向上も相協力して努力しているというか、むしろ相互に積極的に参加せざるを得ない立場におかれている。

本会運営のために町当局からも多額の支援をうける中で、研究会事業も更に充実を期して各学校に還元し、教師の指導力向上に貢献できるよう、会員各自の一層の協力を期待するものである。

# 宮代町教育研究会

## 1 会のあゆみ

宮代町教育研究会は、当初学校数5校、(小学校3校、中学校2校)、会員数も少ない研究団体であった。現在は、やや規模が大きくなり、学校数7校(小学校4校、中学校3校)、会員数204名の団体である。

会の運営として、会員の研鑽を奨励し、互いに切磋琢磨しつつ資質の向上を図る一方、研修成果をより高めるため、久喜市、菖蒲町、白岡町、鷺宮町の各教育研究会と連繋を取り、久喜班教育研究会を組織して研究していた。その後各市町とも学校規模の増大、学校数の増加が見られ、教育研究会も市町単位に独立して研修する気運となり、昭和54年に久喜班教育研究会は発展的解散をした。現在は久喜班教育研究会連絡協議会が組織されていて、当研究会も、独自の研修を進める一方で、連絡協議会に負う所が多大である。

当研究会は昭和44年度より研究記要「宮代の教育」を発刊し、会員の研究成果を集録して供覧した。昭和46年度より研究発表会を開催して、研究紀要と共に宮代町の教育振興に大きく寄与している。研究活動も次第に充実し、現在は研究発表会の他、小中学校研究協議会、講演会、生徒指導協議会、小中連絡協議会等が行われている。

### 歴代会長名

昭和43~44年度	岡安 敬会長
昭和45年度	柿崎寿郎会長
昭和46~47年度	梅沢 進会長
昭和48~50年度	増田 栄会長
昭和51~52年度	島沢 式会長
昭和53~55年度	松村 実会長
昭和46~57年度	大島 祐会長
昭和58~	岡田康繁会長

## 2 主たる活動と事業

発足当初は、教科等の研究協議会を中心とした活動であったが、後に管外視察を始め、小学校3校陸上競技大会、町内音楽会、町内科学展、美術展等、児童生徒の教育的行事も取り入れ、幅広い研究活動を行うようになった。

## 3 特色ある活動

### ① 研究発表会

昭和47年度を第1回として、12年間続いている総会に次ぐ一大行事である。

例年2月に開催し、指導者(埼葛教育事務所長、指導課長の先生方)を招聘して1年間の研究成果を各校代表が発表する研修会である。

初めは会員から研究希望者を募り、個人研究、グループ研究に分けて研究助成金を交付していた。研究テーマは研究者の選択にまかせ自由研究としていたが、より一層研究を深めるため、昭和58年度より学校課題として取り組んでいる問題に研究テーマを絞り、全会員が何らかの形で研究に参加できるようにした。従って研究助成金も学校単位に支出されるようになった。

この研究発表会を始めた頃は学校数も少く、1校2名(又は2グループ)ずつ発表を行っていたが、現在では学校数もふえ、各校の研究内容も深まり、発表に多くの時間を必要とするようになったので、1校1研究の発表となった。

発表の方法が実に多彩である。研究成果をいかに伝達するかが各発表者の苦心するところであって、この発表方法もまた研修の大きな眼目となる。グラフ、解説図を始め、スライド・O.H.P.、8ミリ映画、V.T

R等の機器を駆使して展開される様子は、発表内容と相まって参加者に大きな感銘を与える。

#### 近年の研究発表会の内容の1例

- ◎ 生き生きと行動する子を育てる勤労生産学習（須賀小学校、57・58年度文部省研究委嘱）。8ミリ映画使用。
- ◎ 問題解決能力をそだてる学習指導  
副題…解決能力を高める課題の設定と指導  
課程の設定と指導課程のくふう。（笠原小学校、58・59年度文部省研究委嘱）。  
O・H・P使用。

#### ② 専門部会

27の部会で構成している。各専門部会は年3回の研修会を開催し、研究活動を行う他に、管外視察も計画し、先進校の視察、実技研修、現地研修等、巾広い研究活動を展開している。

#### ③ 講演会

定期総会後の記念講演と、11月の講演会の二回行われている。

テーマは教育問題だけに限らず、視野を広げ教養を高める意味で、いろいろな専門分野の方々を講師としてお願いしている。

- 笹川正博先生（文京大教授）  
パレスチナ問題について。
- 関根武義先生（教育局同和教育課長）  
同和問題と学校同和教育。
- 茂木友三郎先生（キッコーマンKK常務取締役）  
国際社会の中における日本。
- 犀目篤郎先生（N・H・K時代考証家）  
日本の服装の変遷
- 藤井 均先生（教育局義務教育課長）

#### ④ 小中学校研究協議会

全体の講演会とは別に行う小中学校別の研修会で、それぞれの学校における教育問題を深く掘り下げる、明日からの指針にしようと云うものである。町内各校の校長が講師となって身近な問題を取り上げて解説し

又は外部より指導者を招いて講義をうける等多彩な運営がなされている。

#### 研修の一例

##### ○ 学年学級経営について

前崎萬教育事務所長 永野吉一先生

○

尾鈴教育研究所長 渋尾延之助先生

#### ⑤ 研究集録の

「宮代の教育」と題して昨年度に第15号が刊行された。

先述の研究発表会の要項が記載されている研究成果を、発表者がガリ版して持ち寄り、作りあげたもので、第12号までは1校から2名又は2グループの研究が記載されていたが、第13号からは1校1研究となり、今では活版印刷の立派な研究集録となっている。巻末には第1項からの執筆者名が集録され、そこからも研究会の歴史を読み取ることができる。

#### 4 運営に当っての問題点

- ① 27の専門部会がそれぞれ年3回の研修会を開催するが、開催時期が6月、10月、11月に集中する傾向である。管外視察、実技講習会等はできる限り8月の夏期休業中に実施することにしているが、訪問先の学校も休業中で研修成果が期待できない悩みもある。また県主催行事、体育的行事もこの期間に多く組まれ、それらの調整が非常に困難である。

- ② 専門部会の中には、所属する職員が目まぐるしく交替する部門があり、専門部として継続研究を進める上に極めて不都合である。そのような専門部は毎年同じ事を繰り返すようになり、進展が見られない。

- ③ 年度当初の教科等主任会で事業計画案が作られるが、実施段階で各校の学校行事等と重なり、研修時間の確保が困難である。

#### 5 昭和59年度の研究活動

今年度は県の「指導の重点・努力点」のまえがきに、学習意欲の欠如が、学業不振の主

な要因であるとしている学校が50%あり、学習意欲を高めることが重要な課題の一つとなっている……本年度は、これらの課題のうち、特に児童生徒の学習意欲を喚起することに真正面から取り組まねばならない……と示され、重点施策の指針が述べられている。

これを受けて、本会の59年度の方針を次のように定めた。

- 1 生気にあふれる、特色ある学校づくり
- 2 学ぶ喜びを味わわせる授業の創造。
- 3 魅力ある学校づくり。
- 4 差別をなくしていくことのできる生き方を育てる。

この方針をもとに、各校の研修課題をそれぞれ次のように決定した。

#### 59年度、学校研修課題

##### 須賀小学校

基礎・基本を踏まえ、自ら学びとる読解の指導（国語）。

##### 百間小学校

学ぶ喜びを育てる図工科の指導。

##### 東小学校

児童の主体性を育てる学年・学級経営。(特

活。相手の心を思いやる学級会活動)。

##### 笠原小学校

問題解決能力を育てる学習指導。

(個人差に応ずる問題解決の指導のあり方)。

##### 須賀中学校

一人一人の生徒を生かす教科の指導法。

##### 百間中学校

学習意欲を高めるための授業充実。

##### 前原中学校

学ぶ喜びをあじわわせる授業の展開。

#### 6 今後の課題

本会の活動を、永年の伝統を踏まえながら、「地域の中の学校」としての機能を発揮できるよう、新しい視点からの研究活動としなければならない。

それには学習を成立させる「児童・生徒」、「教師」、「教材」のかかわりを有機的に結びつけ、常に改善とくふうをはかりながら、知的に、情意的に、広い視野を持ち、豊かな感覚を持ち、未来を力強く生きる子どもの育成を確かな学力としてつけられるよう、今後一層の努力が必要である。

## 鷺宮町教育研究会

### 1 はじめに

鷺宮町は、埼玉県の北東部に位置し、町全体が都心部から50km圏内にある。北葛飾、南埼玉及び北埼玉の三群の境界にある、東は幸手町、西は加須市、南側に久喜市、北に栗橋町に接している。

昭和30年1月1日。当時の南埼、鷺宮町と北葛桜田村が合併して、今の鷺宮町となり、北葛飾郡に所属することになった。当時的人口は一万人に足りなかつたが、昭和46年、日本住宅公団による鷺宮団地の完成をはじめ、民間住宅産業の小林住宅、大栄住宅等相次いで建設され人

口も急激に増加して現在は26万を数えるに至った。さらに桜田地区に東北線東北鷺宮駅が昭和57年11月15日開業となり、それを拠点として、大規模な産業団地、住宅団地が造成され、道路が整備されて、大きな変化がもたらされた。桜田小の児童数も急増し、55年に358名であったものが、59年8月現在908名となつた。また東武伊勢崎線鷺宮駅前には、県営住宅が完成したり、前沼団地の開発も進められたりしている。

この様な社会変化に伴い、桜田地区内に鷺宮東中が、57年、鷺宮中の分離校として開校となつた。しかし、鷺宮中の適正規模化を図るため

昭和60年開校を目指し西中の建設が急ピッチで進められている。既に学区も決定している。昭和60年には、小学校4校中学校3校となる。

## 2 研究会の沿革

長い歴史を持つ久喜地区研究会（久喜、白岡、菖蒲、宮代、鷺宮）及び幸手地区研究会（幸手、栗橋、鷺宮）が、昭和53年で発展的に解消したことにより、従来からの鷺宮教育研究会の組織機構に改組が行われ一切の活動が開始された。

さきに述べたように、旧鷺宮町の3校（鷺小、上内小、砂原小）は、久喜班に。桜田小、鷺中は幸手班に属して、研究活動を続けてきたわけである。鷺宮町を単位とした教員研究会は、従来からあって、地域の特殊性や実情に即した研究活動を推進してきたと言え、久喜、幸手の研究会に負うところが大きかった。

54年から完全に独立し、一切の教育研究や諸行事を独自に実施することになった。

## 3 本会の目的及び事業

本会は、鷺宮町における教育の振興と町内に在職する教職員の職能向上を図ることを目的とし、下記の事業を進めている。

- (1) 児童生徒の資質の向上を図る行事
- (2) 教職員の研修、福利厚生に関する行事
- (3) 教育に関する調査研究、優良教育施設の視察等。
- (4) 各種教育研究団体、関係機関との連携
- (5) その他必要な事項

## 4 本会の組織

本会は、鷺宮町小中学校に在職する教職員をもって組織する。

- (1) 学校数 6校（小4、中2）

- (2) 会員数 189名

- (3) 本会の役員

- ・会長 1名

- ・副会長2名（校長1、教頭1）

- ・理事 （各校3名、校長及び教職員2名）

- ・監事 2名

- ・幹事 若干名

・専門部 （顧問・部長・副部長）

### (4) 専門部

県や埼玉連合会との関係上24部門とし各校の教科主任及び部員で組織する。校長及び教頭は、各専門部に属し顧問となる。他に専門部長、副部長を置く。

## 5 本会の総会

### (1) 総会 年1回開催する

鷺宮町教職員全員協議会と名称し、総会終了後、教育講演会や映画会などを行っている。

### (2) 理事会 年4回から5回開催し、総会の準備や重要事項を審議する。

### (3) 理事・部長合同協議会、年2回開催する予算の執行行事開催等について、基本事項を審議する。

### (4) 専門部会 原則として年3回の事業を主催する。特に月曜日は除く、開催時刻も授業を伴った研究会を除き、学校運営に支障の少ない時間帯を考慮して実施する。

### (5) 管外視察

1日出張を原則とし、年間12回  
専門部数の半分、2年間で終了。

### (6) 特別行事等の実施

行事の内容が特に関係の深い専門部に運営実施の主管を委任し、特別な予算で運営する。

### (7) 会報・集録等

研究会は紀要を発行している。57年度創刊。今年度は、第4号目になる。内容は教育長さんのあいさつ。研究会長のあいさつ、各専門部の活動、次年度への希望等が一定の規格で紹介されている。

## 6 本会の事業

特別行事は、児童生徒の資質の向上をはかる諸行事と教職員の研修及び福利厚生に関する諸行事等に大別される。以下実践の概要について述べる。

### (1) 町内小中学生硬筆展

例年、県の硬筆展に呼応して6月に開催、

会場は各校持ち回り、埼葛展、県展への審査も兼ね、一般に公開している。

町展の前に各校とも校内展を開催

(2) 町内小学校サッカー大会

例年3学期に開催していたが、諸行事の精選と授業時数の確保という立場で、参加者が6年だけになったため、5月～6月に実施するようになった。これは昭和58年度から実施されるようになり、学級対抗という形で、親睦と友好を深め、あわせて、体力の増強をめざしている。

(3) 町内小学校連合運動会

陸上競技を中心にして、毎年10月に開催、各校5年全員参加、(昭・57年度より)以前は、5・6年生が全員参加して開かれていた。参加者全員、学級対抗リレーに出場する。親睦と融和をねらいとした親善大会であり、その目的がほぼ達成されつつある。都市型の上内昭、農村型の桜田昭との間に「かっぺ」という差別言語が生れていたと聞くにつけ、この親善大会に寄せる教師の教育指導にも熱がはいっている。

(4) 町内昭中学校科学振興展覧会

例年10月に開催、各校持ち回り。埼葛展への審査も兼ね、一般公開もする。

(5) 町内小中音楽会

例年1月に開催、各校持ち回り。各校3学級出場。音楽教育振興に多大なる貢献をしている。なお、出場希望学級が多く各校主任さんも、その選択に苦慮するのが実状のようだ。

(6) 町内小中学校美術展

例年11月に開催、各校持ち回り。埼葛展への審査も兼ねる。土・日をはさんで一般公開もしている。

(7) 町内小中学校書初展

一月下旬開催、各校持ち回り。かつて町の中央公民館を借用して開催したこともあるそうだが児童生徒数の増加に伴い各校体育館が主会場となっている。

(8) 創意工夫展

研究会独自では行わず、久喜地区教育研究会連絡協議会の名において、県展への審査を兼ねて実施され、作品を出品している。

(9) 英語スピーチコンテスト

中学校が2校となり、持ち回りで実施。57年度までは、幸手教研に合流して開催していた。60年度からは町内3中学校で開催予定。

(10) 町内小中学校読書感想文コンクール

例年10月に開催。埼葛展への予選を兼ねる。児童の「読書ばなれ」とか「青少年健全育成」を考える時、読書指導の重要性を一層認識、さらに、照明を当てたい分野である。

(11) 町内教職員レク大会

9月上旬(5日前に開催)。教職員体育振興会と協力して、親睦と融和、健康への関心を目指して、日番を除き全員参加を原則としている。バレーボール、卓球等で、個人・学校対抗とし、個人・優勝チームには、表彰状を与える。

(12) 通信票改訂委員会

昭和54年度発足。57年度まで継続審議しながら改訂が行われた。一応の決着はみたものの、各校においては、継続審議して、教頭教務を核に、情報交換を行いながら続ける方向になっている。

(13) 専門部の研究活動

4月に専門部会を開催し、事業計画を立案。それぞれの部会の研究主題、具体的事業内容の検討、総会を経て、研究協議会が開始される。内容は授業研究会、実技講習、他校視察等にわたっている。経費は教育委員会よりの補助金に負うところが多く、将来、個人負担により、自主研究団体としての意識の高揚に努力することが必要となろう。各専門部の予算は1万円程度である。

7 本会の予算(昭59年度)

(1) 収入

会 費	113,400円
補助金	475,000円
繰越金	165,626円
雑収入	4,000円
	合 計 758,026円

## (2) 支出

通 信 費	1,500円
印 刷 費	105,000円(事務用品含む)
総 会 費	50,000円
理 事 会 費	25,000円
会 場 費	6,000円
専 門 部 費	276,000円(管外視察費含む)
特別行事費	280,000円(厚生費含む)
予 備 費	4,626円
旅 費 手 当	10,000円
	合 計 758,026円

## 8 特色ある活動

教育の近代化が進み、視聴覚教材利用も活発になってきた。本会では、視聴覚部の主催で(2年計画)8ミリ映写技術講習会を開催している。今年度は、二回めである。各校に技術者が多いということは、質の高い授業展開も期待できる。今年度でほとんどの教職員が認定書を持つことになろう。

毎夏、8月10日前後、1日8時間、視聴覚教育の理論と実技に汗だくで取り組む姿は尊い。特に部員の計画や準備は緻密である。会場は中央公民館大ホール。2日目の午後1時より、認定試験、どの教師の表情も真剣で、いくつものチェック、ポイントに、慎重に視線を移す姿はたのもしい。

今後は、2日間位の予定で教材研究の研修も考えている。例えば、同和教育、道徳教育等の教材研究から指導案まで、個人の創造的展開の交換ができれば、生き生きとした授業展開も期待できよう。

## 9 運営に当っての問題点

- (1) 各事業が6月中旬から、翌年2月頃までに実施される。この期間およそ160日位に

なろう。各部会が年3回として、24部会で延72回となり、22日に1回の部会が開催される。特別行事を入れると(10回)およそ2日間に一回の事業が実施されることになる。しかも、計画通りに実施できないのが現実であり、重なる日が多くなり勝ちなのが問題になっている。

### (2) 主任だけの参加になり易い

各校、それぞれ諸行事が展開されており、その上授業の確保に専念しており、研究協議会の出席者は、各校の主任に片寄りがちである。授業研究のある時は、部員の参加も見られるので、すべて授業実施を前提にした会合にしなければならない。といつても、すべてこの方法で実施すると、また多忙になり易い。

### (3) 他地区研究会との交流を考慮する必要がある。

固定的、閉鎖的に流れ易いので、時には、他地区研究会との交流も配慮し、求心的努力はもとより、遠心的努力に務める必要がありそうだ。従来、町教委の研究委嘱事業の公開に当って、埼葛地区連教の中で、共催を申込むこともあった。そこで、単なる交流ではなく、研究実践を土台にしての交換が必要となってくるようだ。

### (4) 小中の関連をいっそう重視する。

各専門部には、小中の主任や部員が属しているわけだが、授業を通して、いっそう意識的に接触を密にすることを考慮したい。小中9か年の義務教育を見通す上で、さらに、担当学年の特色や重点のおき方等も、明確に把握することが大切である。

### (5) 生徒指導部会は、各教科領域の中でも急務を要する部会になっている。

したがって会合も緊急を要する問題が多く、問題解決に知恵を集めている現状である。今後は、さらに、充実した活動にすると共に、問題発生以前の対策も充分に研究したい。「不思議な勝ち方はあっても、不思議な負け方はない」と言われる。非行の原因は「げん

ぜん」として「ある」ことに注目したいものだ。

## 10 今後の課題

教育研究会は、会員相互の教育実践を土台にして成立するものと考える。

そのための情報交換や収集の場である。求められる教師は敏感であり、謙虚であり、研究物は宝物。それはまた共通の財産でもあろう。

また、共同研究の場である。ひとりではできない研究も、共同思考は、時間的にも、質的にも高いものを産み出す。その上、出会いの場と言える。他校の教師の、さりげない話の中に心打たれた経験も多いものだ。自己の欠けている部分を反省し、自己修復をはかる。それは、自己拡大に必要な研修となる。

求める歎び。問題を持つ歎び。わかった歎び。人柄にふれた歎び。歎びは人生最大の健康法と言われる。この教師の歎びが、児童の生命に、新しい価値発見の感染体となろう。

歎びの多い学校。歎びの多い研究団体の創造は、歎びの多い児童生徒の育成につながるものと確信する。

自由で楽しい雰囲気の中で、教えるとは何か育てるとは何かを追及し、個人的にも、1歩また1歩と、着実な研修を期待している。

# **第6章**

# **資 料 編**

## 会費ならびに配分金、補助金の変せん

昭和39年度より各教科活動を円滑にするため教科別に少額ではあるが補助金を配分してきた。各教科の配分金は均等に配分するのが正常ではあるが教科により会員数のバラツキ等もあり配分にも考慮している。

昭和39年度の教科数16、昭和40年～43年までが20教科、昭和44年度は21教科、昭和45年～48年までが22教科となりこのさん下の研究団体も10年の間に教科数も増え続けた。しかも配分金も同様に支給しなければ会の運営もあやぶまれる状況と事務上の煩雑化を防ぐため、また行事の精選などもあり、視聴覚、放送教育、教育機器の3教科を整理統合し昭和49年度には20教科となる。統いて昭和51年度には地域研究会が独立し現在19教科団体が活発な研究活動を展開している。

また配分金の増配は、関東地区、全国等の研究大会等の主催する教科については特別補助金10万円を増額し支給している。

本研究会の発足当初の会費は、会則の規定により小中学校の学級数による均等割りであった会費は出来得る限り各教科へ配分すると云う配慮から本部会計の財源は少なかったようである。

発足時の教科は16団体、平均12万円の配分であった（教科により若干の差がある）以後増え続ける教科に本部は財源確保に追われて、止むなく昭和41年に学級数割りと同時に教職員の個人負担の値上げを要請したのである。

この財源を基に各教科への配分金を増額したのである。なお昭和45年度の教科数は22団体となり本県教育界の指針として研究成果を挙げ研究活動を大いに盛りあげたものである。

その後、昭和47年度には学級数の均等割の値上げ（500円）昭和51年度には教職員の個人負担20円の値上げなど諸物価の高騰とこれに対処

するための財源確保に苦慮してきた。

### 補助金の変せん

昭和35年11月、文部省は地方教育研究団体の育成をめざし一定の組織と運営をもつ適正規模の研究団体に対して補助金を交付することを決定した。しかし日教組と県教組の反発により、文部省の意図した補助金の交付も思うように進展しなかった。

このような情勢のなかで文部省は、昭和37年9月以降、各都道府県教育委員会に対して、教育研究団体の育成について強力な指導を展開した。

これに応えて埼玉県教育委員会教育長は、このような中央情勢に呼応し、代表者を招き教育研究団体の結成を要請した。

こうした県教育長の要請に応じて埼玉県では既に結成されていた各教科研究団体に呼びかけ昭和39年4月1日、大同団結し、埼玉県連合教育研究会を結成して文部省からの補助金を受け入れることになった。その後の機構改革により文部省からの補助金は全国教育活動振興会を窓口として交付されるようになっている。

この振興会（文部省）ならびに埼玉県からの補助金は、教育研究活動事業補助金交付要綱の第3条の別表に規定された教育研究調査事業に対して交付されるものであり、その項目は、研究大会・研究成果刊行・研究調査・研究図書の4種目に限定されている。

経理の煩雑化を防止するために本研究会では補助金の配分に当たり種々論議を重ね、補助金+会費より各教科への配分を行っている。

なお補助金関係の各教科会計担当者会も年3回程度実施し、予算表、決算表、事業計画等の作成段階の事務処理等について検討を重ねてき

た。

結成当時の補助金は他の年度と比較してやや少ないが、あの年度は少額ではあるが増額の傾向にある。以後昭和51年度より年々減少しつつあるが県内の教育活動は益々活発な動きを示している。これらの事態に対処するべく本部としては研究活動を助長すべく会費の値上げを断行せざるを得ない立場に追いこまれている。

これらは近年における国の財源不足、行政改革による補助金の見直し等による削減が行われており前途はまことに暗い見通しである。

昭和39年度の本会結成以来の補助金の変せんを示すと次の通りである。

年 度	国・県補助金	会 費
昭和39年度	1,400,000	603,800
40	2,160,000	600,380
41	2,600,000	2,988,300

42	2,330,000	3,120,600
43	2,530,000	3,190,100
44	2,530,000	3,341,000
45	2,530,000	3,476,740
46	2,530,000	3,614,500
47	2,530,000	4,174,600
48	2,530,000	4,379,000
49	2,530,000	4,594,350
50	2,530,000	4,807,500
51	2,024,000	5,976,000
52	1,924,000	6,553,350
53	2,024,000	6,735,150
54	2,342,000	7,038,580
55	2,282,000	7,349,760
56	2,382,000	7,582,240
57	2,225,000	7,777,500
58	2,225,000	7,796,400
59	2,143,000	7,921,000

## 予 算 の 概 要

本会の課題は埼玉県小中学校教育の振興を図るためいかにして研究活動を充実発展させていくか、また研究推進の礎となる財政をいかに確立していくかであった。

特に本会が発足した当初の予算額200万円から現在1,050万円と5倍の増を示している。

これに引き替え補助金の伸び率は極めて低く現在では発足当時の補助金より低額となり、従って会費の充當に頼らざるを得ない。

会員数の増加と反して補助金の削減ということから歴代の役員各位が本研究会の財政基盤の確立のために、いかに心血を注いでこられたかをうかがい知ることができる。

こうした財政基盤の確立により各教科の研究活動も年々、充実発展し県下小中学校の振興に大きく貢献しているわけである。

### 年度別予算

年 度	予 算	年 度	予 算
昭和39年度	1,998,864	昭和50年度	7,988,930
40	3,127,053	51	8,350,565
41	5,459,801	52	9,047,502
42	5,845,207	53	9,400,862
43	6,164,513	54	9,472,816
44	6,747,384	55	10,450,413
45	6,791,859	56	10,951,006
46	7,082,239	57	10,766,939
47	7,404,904	58	10,489,505
48	7,600,768	59	14,456,234
49	7,513,436		

こうした財源の確保に伴い研究活動も年々と活発となり関東地区・全国大会など例年3教科程度・大会主催県として運営されてきた。

本部ではこの大会を助成する意味からこうし

た大会主催教科に対して助成金を支給し大会運営の円滑な経営をはかつて来たが本部会計に実質的なしわよせがきていた。これに対処すべく本部では昭和57年度に会費値上げのために論議を重ね、その改正案をまとめ、理事会の承認を得て評議員会に提案する。種々論議を重ね昭和58年度1ヵ年間の暫定期間（会費値上）において昭和59年度より月額10円（年間120円）の値上げの承認を得たのである。

この内容は次に示すようなものである。

・昭和59年4月1日より会費1人当り月額20円とする（年額240円）

この会費の改正案で注目されることは個人会費をはっきりとしたことである。過去2ヵ年にわたり本部会計より会報を年2回と増刊発行加えて大会等主催教科への増加配分など…なお本年度は本会創立20周年と云う記念すべき年度であり埼玉県連合教育研究会20周年のあゆみと云う記念誌発行と云う大事業を控えて財政面の確保で増額したわけである。

しかしこの改正案については本会計の増額ということで評議員会では種々の議論も続出したが、地域研究会長の理解とご協力によりこの改正案も昭和58年10月28日の理事会・評議員会で改正されるはこびとなつた。

このように本研究体制の確立とともに、その基盤となる財政の確保についても大きな課題をかかえている。

次に本部及び各教科の配分金を別記してみよう。

年度別各教科団体配分金一覧

	昭和39年度	40	41	42	43	44	45
本 部	283, 800	310, 380	600, 000	700, 000	820, 100	1, 120, 000	1, 074, 500
国 語	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	360, 000	390, 000
書 写	120, 000	150, 000	260, 000	200, 000	210, 000	200, 000	200, 000
社 会	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	250, 000
算数数学	120, 000	150, 000	330, 000	260, 000	270, 000	260, 000	250, 000
理 音	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
美 術	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
英 保	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
道 德	100, 000	110, 000	200, 000	200, 000	210, 000	200, 000	210, 000
特 進	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
路 指 導	60, 000	70, 000	200, 000	200, 000	210, 000	200, 000	200, 000
放 梅	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
視 慶	60, 000	90, 000	330, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
教 育機器	120, 000	150, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000
心 理	120, 000	150, 000	200, 000	200, 000	210, 000	200, 000	200, 000
特 殊	120, 000	150, 000	200, 000	200, 000	210, 000	280, 000	200, 000
僻 地	60, 000	70, 000	200, 000	200, 000	210, 000	200, 000	200, 000
國 書 館	100, 000	260, 000	260, 000	270, 000	260, 000	260, 000	260, 000
中 學 技 家	70, 000	200, 000	200, 000	210, 000	280, 000	200, 000	200, 000
小 学 家 譲	70, 000	150, 000	150, 000	160, 000	150, 000	150, 000	150, 000
地 域	2, 003, 800	2, 760, 380	5, 410, 000	5, 370, 000	5, 720, 100	6, 200, 000	6, 124, 500
計	2, 007, 423	2, 895, 741	5, 756, 132	5, 709, 090	6, 274, 098	6, 444, 237	6, 516, 383

年度別会費・補助金一覧

	39年度	40	41	42	43	44	45
会 費	603, 800	600, 380	2, 998, 372	3, 120, 600	3, 190, 100	3, 341, 000	3, 476, 740
補 国 費	1, 400, 000	2, 160, 000	2, 600, 000	2, 330, 000	2, 530, 000	2, 530, 000	2, 530, 000
補 保 費	1, 864	126, 053	150, 451	244, 207	517, 281	529, 656	471, 622
操 越 費	1, 759	9, 308	7, 309	14, 283	36, 717	43, 581	38, 021
維 収 入							
計	2, 007, 423	2, 895, 741	5, 756, 132	5, 709, 090	6, 274, 098	6, 444, 237	6, 516, 383

	46年度	47	48	49	50	51	52
本 部	1,074,050	1,054,600	1,229,065	1,564,350	1,227,550	1,809,010	2,277,350
国 語	260,000	280,000	380,000	300,000	310,000	329,000	340,000
書 写	200,000	220,000	320,000	240,000	250,000	269,000	280,000
社 会	260,000	280,000	280,000	330,000	310,000	329,000	340,000
算 数	260,000	280,000	280,000	330,000	310,000	429,000	340,000
理 音	260,000	380,000	280,000	350,000	310,000	329,000	340,000
美 保	360,000	280,000	280,000	300,000	310,000	329,000	340,000
英 道	260,000	280,000	280,000	300,000	310,000	329,000	340,000
特 活	260,000	380,000	280,000	300,000	310,000	429,000	340,000
進 路	200,000	220,000	220,000	240,000	250,000	269,000	280,000
指 導	260,000	280,000	280,000	300,000	310,000	329,000	340,000
放 送	260,000	280,000	280,000	300,000	310,000	329,000	340,000
視 聽	260,000	280,000	280,000	300,000	310,000	329,000	340,000
教 育	150,000	170,000	270,000	500,000	610,000	529,000	640,000
機 器	200,000	220,000	220,000	240,000	250,000	269,000	280,000
心 理	200,000	220,000	220,000	240,000	250,000	269,000	280,000
特 殊	200,000	220,000	220,000	240,000	250,000	269,000	280,000
僻 地	260,000	280,000	280,000	300,000	410,000	329,000	340,000
國 書	260,000	280,000	280,000	300,000	310,000	429,000	340,000
中 學	200,000	220,000	220,000	240,000	250,000	369,000	280,000
技 家	150,000	170,000	170,000	190,000	200,000	219,000	230,000
小 學	150,000	170,000	170,000	170,000	180,000		
家 庭							
地 域							
計	6,144,500	6,704,600	6,909,065	7,124,350	7,337,550	8,000,010	8,477,350

	46年度	47	48	49	50	51	52
全 費	3,614,500	4,174,600	4,379,065	4,594,350	4,807,550	5,796,010	6,553,350
捕 国	2,530,000	2,530,000	2,530,000	2,530,000	2,024,000	1,924,000	
捕 金	655,449	757,110	812,094	807,892	841,249	683,938	977,568
雜 収 入	38,150	41,341	47,705	83,616	60,427	61,609	58,101
計	6,888,099	7,503,051	7,768,864	8,015,858	8,239,226	8,745,557	9,513,019

	53	54	55	56	57	58	59
本部	2,269,150	2,860,580	2,681,640	2,724,240	2,862,500	2,171,465	2,291,500
全国書写社会	350,000	360,000	490,000	400,000	400,000	390,000	390,000
算數数学科	350,000	360,000	390,000	400,000	340,000	340,000	330,000
理音美術体語德活	450,000	360,000	390,000	400,000	400,000	400,000	400,000
進路指導放送視聽覚教育機器	450,000	360,000	390,000	400,000	370,000	370,000	360,000
心理特殊地	290,000	300,000	330,000	340,000	340,000	430,000	330,000
図書館	350,000	360,000	390,000	400,000	400,000	390,000	390,000
中学校家庭地城	240,000	250,000	280,000	290,000	340,000	330,000	330,000
計	8,759,150	9,380,580	9,631,640	9,964,240	10,002,500	9,321,465	9,341,500

	53年度	54	55	56	57	58
会員費	6,735,150	7,038,580	7,349,640	7,582,240	7,777,500	7,909,080
捕国庫費	1,012,000	1,012,000	952,000	1,052,000	895,000	895,000
補助費	1,012,000	1,330,000	1,330,000	1,330,000	1,330,000	1,330,000
繩越金	812,605	764,409	1,022,783	963,465	1,140,952	1,111,413
雜収入	31,630	47,610	81,081	81,603	68,176	2,081,841
計	9,603,385	10,192,599	10,735,504	11,009,248	11,211,638	13,327,334

# 昭和37年～38年教育研究団体国庫補助金

38.10.16

No.	研究団体名	37年	38年	昭和39年分		
				埼玉県連合教育研究会会費並びに 補助金の部会配分額		
1	市町村教育委員会連合会		60万	会費603,800円	補助金1,400,000円	
2	小学校長会		40			
3	中学校長会		40			
4	高等学校長会		40			
5	国語教育研究会	20万	40			
6	" (高)	10	20	部会名		
7	社会科教育研究会連合会	20	40	会費配分金		補助金配分金
8	" (高)	10	20	1 国語	40,000	80,000
9	数学教育研究会	30	60	2 社会	40,000	80,000
10	科学教育振興会	20	40	3 数学	40,000	80,000
11	音楽教育連盟	20	40	4 科学	40,000	80,000
12	音楽教育研究会 (高)	10	20	5 音楽	40,000	80,000
13	美術教育連盟	20	40	6 美術	40,000	80,000
14	美術教育研究会 (高)	10	20	7 書道	40,000	80,000
15	産業教育振興会	20	40	8 特殊教育	40,000	80,000
16	外国語教育研究会	20	40	9 教育心理	40,000	80,000
17	書道書写教育連盟	20	40	10 放送教育	40,000	80,000
18	放送教育研究会	20	40	11 外国語	40,000	60,000 (中学校のみ)
19	" (高)	10	20	12 特活	40,000	80,000
20	特殊教育研究会	10	40	13 道徳	40,000	80,000
21	学校図書館協議会	10	20	14 視聴覚		60,000 (会費別)
22	" (高)	10	20	15 進路		60,000 (中学校のみ会費別)
23	統計教育研究協議会	10	20	16 へき地教育		60,000 (会費別)
24	特別教育活動研究会	20	40	17 本部	83,800	200,000
25	" (高)	10	20	計	603,800	1400,000
26	教育心理研究会	10	20			
27	地域研究会	10	20			
28	視聴覚教育研究会 (高)	10	20			
29	進路指導研究会	10	20			
30	職業指導主事協議会 (高)	10	20			
31	へき地教育研究会	10	20			
32	道徳教育研究会		20			
		400万	1,000万			

39数指収第204号  
昭和39年8月5日

文部大臣 愛知揆一殿

埼玉県知事 栗原 浩

## 昭和39年度都道府県教育研究団体 教育研究費国庫補助金交付申請書

昭和39年度教育研究団体教育研究費について  
下記のとおり国庫補助金を交付されるよう関係  
書類を添えて申請します。

記

1. 国庫補助金申請額 金1,700,000円也

### 2. 補助事業の目的

本県下教育研究団体を育成し、その自主的  
研究活動を促進し、もって教職員の資質の向  
上に努めるとともに、初等中等教育の教育効  
果を高め、その振興をはかることを目的とす  
る。

### 3. 補助事業計画

番号	県費補助金配分予定の教育研究団体名	配分予定の県費補助金
1	埼玉県連合教育研究会	140万円
2	埼玉県高等学校連合教育研究会	82万円
3	埼玉県市町村教育委員会連合会	14万円
4	埼玉県小学校長会	12万円
5	埼玉県中学校長会	12万円
6	埼玉県高等学校長協会	12万円
7	埼玉県学校教育担当指導主事研究会	10万円
8	埼玉県産業教育振興会	18万円
9	埼玉県公立幼稚園教育研究会	10万円
10	埼玉県地域研究会	10万円
11	埼玉県統計教育研究協議会	10万円
12	埼玉県学校図書館協議会	10万円
	合 計	340万円

### 添付書類

- 補助金交付予定の各研究団体の基盤一らん
- 収支予算書一らん

## 役員及び運営機関

埼玉県連合教育研究会の運営は発足以来、会則の定めるところにより円滑、適応に運営されている。

なお本研究会の役員構成ならびに、その任務について述べると次の通りである

- ・会長1名 本会を統轄し、本会を代表する
- ・副会長4名 会長を補佐し会長事故のあるときはこれを代行する。  
(県内を東西南北4地区に分け各地区より1名選出する)
- ・監事3名 本会の会計を監査する
- ・事務局長1名 本会の会務を統轄し、事務局の運営にあたる
- ・幹事若干名 事務局長の指示により、本会の事務に従事する。
- ・常任理事9名 会長の諮問に応じ、緊急事項を処理する(各教育事務所単位で1名選出)

- ・理事若干名 本会の会務を審議し執行する  
教科・国語・書道・社会より1名  
算数・理科・音楽・美術より1名  
道徳・保育・英語・技術より1名  
家庭・特殊・心理・図書より1名  
特殊・進路・視聴覚・僻地より1名
- ・顧問若干名 本会の重要事項について、会長の諮問に応じて意見を述べる
- ・評議員若干名 本会の重要事項を審議する  
(19教科団体長・75市町村教育研究会長)
- ・編集委員若干名 本会の研究集録及び会報の編集等にあたる。

以上が本部関係の組織であるが、このさん下に19の教育研究団体と75市町村教育研究団体があり、本会はこの連合体の活動を活発にするため配分金を支給し、それぞれ独自の運営を助けながら活動している。

# 埼玉県連合教育研究会会則

- 第1条（名 称） 本会は埼玉県連合教育研究会と称え、事務所を会長指定の場所に置く
- 第2条（目 的） 本会は埼玉県内における各種教育研究活動を促進すると共に相互の連絡を緊密にし、本県教育の振興を図ることを目的とする
- 第3条（事業） 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う
1. 教科等の研究に関すること
  2. 教科等の調査に関すること
  3. 研究成果並に資料等の作成刊行に関すること
  4. 教職員の研修に関すること
  5. 地域研究団体並に教科等研究団体の連絡提携に関すること
  6. その他目的達成に必要な事業
- 第4条（組織） 本会は県内地域教育研究団体並に教科等研究団体をもって組織する
- 第5条（役 職 員） 本会に次の役職員をおく  
会長1名 副会長2名 評議員若干名 監事3名 幹事若干名
- 第6条（役職員の任務） 本会の役職員の任務は次の通りとする
1. 会長は本会を代表し会務を総理する 必要に応じ会議を招集しその議長となる
  2. 副会長は会長を助け、会長事故あるときはその職務を代理する
  3. 評議員は評議員会を構成し会務を審議する
  4. 監事は会務並に会計の監査をする
  5. 幹事は会長の命を受けて庶務会計に当る
- 第7条（役職員の選出） 本会の役職員の選出は次のとおりとする
1. 会長、副会長、監事は評議委員会で選出する
  2. 評議員は地域教育研究団体並に教科等研究団体の代表者をもってこれに充てる
  3. 幹事は会長が委嘱する
- 第8条（役職員の任期） 本会の役職員の任期は1年とする 但し重任を妨げない  
補欠役員の任期は前任者の残任期間とする
- 第9条（会 議） 本会に評議員会を置く 評議員会は6以上出席者をもって成立し  
議事はその過半数をもって決する
- 第10条（経 費） 本会の経費は負担金及補助金をもってあてる
- 第11条（会 計 年 度） 本会の会計年度は4月1日より翌年3月31日までとする
- 第12条（会 則 変 更） 本会則の変更は評議員会の決議による
- 付 則
1. 本会則によるほか各構成団体の自主性が尊重される
  2. 本会の教科等研究団体並に負担金については別に定める
  3. 本会則は昭和39年1月18日より施行する

## 埼玉県連合教育研究会教科等研究団体に関する規程

1. 付則第2項により本規定を設ける

2. 本会の教科等研究団体は次の通りとする

埼玉県国語教育研究会

埼玉県書道書写教育連盟

埼玉県社会科研究会連合会

埼玉県数学教育会

埼玉県科学教育振興会

埼玉県音楽教育連盟

埼玉県美術教育連盟

埼玉県外国語教育研究会

埼玉県特別教育活動研究会

埼玉県道徳教育研究会

埼玉県特殊教育研究会

埼玉県教育心理研究会

埼玉県放送教育研究会

3. 教科等研究団体は本会より交付金を受けるものとする

4. 教科等研究団体は年度はじめに予算、決算、事業内容を本会に報告するものとする

5. 本規程の変更は評議員会の決議による

昭和38年度より施行

## 埼玉県連合教育研究会負担金に関する規程

1. 付則第2項により本規定を定める

2. 本会の負担金は地域教育研究団体より年度はじめに納入するものとする

A. 納入の基準は学校を単位として次の表の示すところによる

小学校	10学級まで	20学級まで	30学級まで	40学級まで	50学級まで	51学級以上
	600円	700円	800円	900円	1,000円	1,100円
中学校	5学級まで	10学級まで	15学級まで	20学級まで	25学級まで	26学級まで
	700円	820円	940円	1,060円	1,180円	1,300円

B. 小・中併設校は小学校の基準による

3. 本規程の変更は評議員会の決議による

昭和38年度より施行

# 歴代役員名簿

本部役員

設立年月39.1.18

39年度

会長 中島 春義 大宮市立東中学校長  
 副会長 高橋 昇 熊谷市立荒川中学校長  
 " 飯野 政秋 春日部市立柏壁小学校長  
 監事 小高 準 東松山市立東松山第一小学校長  
 " 吉沢 光平 浦和市立岸中学校長  
 " 田高 金一 行田市立行田中央小学校長  
 幹事 高坂 良助 大宮市立東中学校教頭  
 " 高沢 初子 " 事務

## 教科

国語 德橋 善四郎 深谷市立深谷中学校長  
 社会 村田 孝之 川口市立青木北小学校長  
 数学 中島 春義 大宮市立東中学校長  
 科学 藤岡 由夫 埼玉大学学長  
 音楽 飯野 政秋 春日部市立柏壁小学校長  
 美術 町田源三郎 埼玉大学教育学部教授  
 書写 木村 栄一 浦和西高等学校教諭  
 特殊 田村 正雄 川越市立中央小学校長  
 教育心理 小山 辰吉 川越市立第一小学校長  
 外国語 山中 諭吉 加須市昭和中学校長  
 特活 倉林嘉四郎 川口市立本町小学校長  
 道徳 笠井 義一 深谷市立深谷小学校長  
 放送 君塚啓太郎 浦和市立仲本小学校長  
 視聴覚 関根 登 岩槻市立岩槻中学校長  
 進路 鈴木 仲治郎 加須市立西中学校長  
 僕地 岡田 要作 飯能市教育委員会

会長 飯野 政秋 春日部市立柏壁小学校長  
 副会長 德橋善四郎 深谷市立深谷中学校長  
 " 倉林嘉四郎 川口市立本町小学校長

## 教科

国語 德橋 善四郎 深谷市立深谷中学校長  
 社会 村田 孝之 川口市立青木北小学校長  
 数学 佐久間安三郎 熊谷市熊谷高  
 科学 松岡 照雄 浦和市埼玉付小  
 音楽 飯野 政秋 春日部市立柏壁小  
 美術 町田源三郎 埼大教育学部  
 書写 木村 栄一 浦和西高  
 特殊 田村 正雄 川越市立中央小  
 心理 井上 政平 与野市東中  
 放送 君塚 啓太郎 浦和市仲本小  
 外国語 山中 諭吉 加須市昭和中  
 特活 倉林嘉四郎 川口市立本町小  
 道徳 笠井 義一 深谷市立深谷小  
 進路 鈴木 仲治郎 加須市立西中  
 僕地 岡田 要作 飯能市教育委員会  
 視聴覚 若旅 進一 加須市立加須小

年 度 別 本 部 役 員 名 簿

	39	40	41	42	43	44	45
会長	大宮 東 中 中島 春義	柏 壁 小 飯野 政秋	川口本町小 倉林嘉四郎	大宮 北 中 高山 敏一	大宮 北 中 高山 敏一	大宮 東 中 高山 敏一	大宮 東 中 高山 敏一
副会長	熊谷 荒川 中 高橋 升	深 谷 中 徳橋善四郎		行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄
	柏 壁 小 飯野 政秋	川口本町小 倉林嘉四郎		所 沢 小 中島 豊	所 沢 小 中島 豊	大宮 桜木 小 尾崎馨太郎	秩父 二 中 斎藤 広一
				秩父 二 中 斎藤 広一	秩父 二 中 斎藤 広一	秩父 二 中 斎藤 広一	松山 一小 瀬戸 治郎
						松山 一小 瀬戸 治郎	大宮 北 小 金子 栄清
事務局長				大宮 北 中 島中 ひさ	大宮 北 中 島中 ひさ	大宮 北 中 島中 ひさ	大宮 東 中 関根 升
幹 事				大宮 北 中 松下サチ子	大宮 北 中 松下サチ子	大宮 東 中 関根 升	大宮 東 中 松下サチ子
						大宮 東 中 松下サチ子	大宮 北 中 島中 ひさ
監 事				岩 槻 中 間宮 喜平	越 谷 東 中 小林 信一	越 谷 東 中 小林 信一	岩 槻 中 田中 寿徳
				江 南 中 小沢 八郎	江 南 中 小沢 八郎	本 庄 西 中 吉川 正雄	江 南 中 小沢 八郎
				松 山 一 小 瀬戸 治郎	松 山 一 小 瀬戸 治郎	所 沢 小 中島 豊	川 越 小 栗原 貞雄
常任理事							
理 事							

	46	47	48	49	50	51	52
会長	大宮 東 中 高山 敏一	柏 壁 小 福島 正	柏 壁 小 福島 正	柏 壁 小 飯田 豊	柏 壁 小 飯田 豊	柏 壁 小 石川 正美	柏 壁 小 石川 正美
副会長	秩父 二 中 齊藤 広一	秩父 一 中 齊藤 広一	杉山 一 小 設樂 秀夫	川越城南中 国田 正雄	与野本町小 荻島 淳	草加高砂小 熊倉 正利	熊谷荒川中 柿沼 定雄
	常盤 小 吉野 時過	常盤 小 吉野 時過	川口幸町小 山田 利平	与野本町小 荻島 淳	熊谷石原小 神沼新十郎	熊谷荒川中 柿沼 定雄	東越谷小 松永 誠一
	川越 小 栗原 貞雄	川越 小 栗原 貞雄	秩父 一 中 齊藤 広一	熊谷石原小 神沼新十郎	日高高麗中 中島 照光	越谷南越谷小 松永 誠一	狹山入間川小 椎橋 武信
	羽生 中 五月女修次	騎 西 中 梶田 勝次	騎 西 中 梶田 勝次	行田中央小 秋山 徳明	狹山入間川小 椎橋 武信	北浦和小 黒沢 義夫	
事務局長	大宮 東 中 関根 昇	柏 壁 小 柴崎					
幹事	大宮 東 中 松下サチ子	柏 壁 小 石田 幸吉	柏 壁 小 平塚佐千子	柏 壁 小 五月女弘子	柏 壁 小 五月女弘子	柏 壁 小 中村	柏 壁 小 中村
	大宮 北 中 畠中 ひさ	柏 壁 小 蟹本 則子	柏 壁 小 蓮見美佐子	柏 壁 小 鈴木 俊子	柏 壁 小 鈴木 俊子	柏 壁 小 蓮見美佐子	柏 壁 小 鈴木 俊子
	教育センター 田中島忠利		柏 壁 小 鈴木 俊子	柏 壁 小 蓮見美佐子	柏 壁 小 蓮見美佐子	柏 壁 小 鈴木 俊子	柏 壁 小 五月女弘子
			柏 壁 小 石田 幸吉	柏 壁 小 齊藤 克夫	柏 壁 小 中村	柏 壁 小 五月女弘子	柏 壁 小 前野弥栄子
監事	吉川 南 中 合田善次郎	小川 東 中 杉田 一夫	上福岡第五小 武田 武雄	東松山野本小 石川 浩通	東松山野本小 石川 浩通	深谷常盤小 柿澤 進	上尾西中 福島 翁
	小川 東 中 杉田 一夫	本庄 東 小 野沢 実雄	北本 中 宇野 一	青木 北 小 黒石 孝一	青木 北 小 黒石 孝一	浦和仲町小 黒沢 義夫	秩父西小 柄原 義雄
	本庄 東 小 野沢 実雄	越ヶ谷中央中 小林 健一	熊谷玉井中 渡辺淳一郎	本庄 西 小 松本 政雄	大宮 南 中 田島 尚	東松山野本小 石川 浩通	東松山野本小 笠原 島平
常任理事				妻沼 泰 小 新井 祐二	戸田 東 中 新井 邦雄	蕨中央東小 和田 信	蕨北小 和田 信
				松 山 中 大谷 好夫	鴻巣 中 坂本 金作	鴻巣 中 坂本 金作	鴻巣北中 森島 實一
				戸田 東 中 新井 邦雄	川越中央小 松岡 雄	入間藤沢中 白井 新作	入間藤沢中 白井 新作
				鴻巣 中 坂本 金作	松 山 中 大谷 好夫	松 山 中 大谷 好夫	松 山 中 大谷 好夫
				上福岡四小 篠沢 輝郎	秩父花の木小 有本 治郎	秩父花の木小 有本 治郎	長瀬一小 田中 義二
				皆野 小 門平 忠夫	本庄 東 小 小島 三郎	花園村花園中 戸塚 大三	児玉中 海北堅太郎
				本庄 東 小 小島 三郎	寄居 中 清水 介良	加須市昭和中 篠塚 保	熊谷荒川中 柿沼 定雄
				行田 東 小 中村 審繼	加須昭和中 篠塚 保	鷺宮 中 遠藤 晃司	羽生北小 藤間 敏
				幸手 小 高田 福松	鷺宮 中 遠藤 晃司		鷺宮 中 遠藤 晃司
				行田荒木小 村辻 幸三	大宮桜木中 範島新太郎	草加高砂小 熊倉 正利	川越武藏野小 新井 康
理事				羽生 中 台 知道	草加高砂小 熊倉 正利	大宮 東 中 塩田 穎男	川越中央小 松岡 輝雄
				大宮 栄 小 若田 せつ	飯能東吾中野 大野 政己	加須昭和中 篠塚 保	川口本町小 磯田 米作
				大宮宮原小 平野 槟一	大宮 南 小 平野 槟一		熊谷富士見中 渡辺淳一郎
				所沢 東 中 越阪部三郎			大宮 北 小 若田 せつ

	53	54	55	56	57	58	59
会長	柏壁小石川正美	浦和高砂小杏掛義男	浦和高砂小杏掛義男	大宮東中原田三郎	大宮東中原田三郎	大宮東中原田三郎	大宮東中原田三郎
副会長	蕨北小和田信	大宮日進小原田三郎	大宮日進小原田三郎	与野大戸小村田茂雄	宮代須賀中大島替	日高高萩中新井好一	日高高萩中新井好一
	猿山入間川小椎橋武信	富士見西中平野正夫	富士見西小平野正夫	小川東中吉田栄治	熊谷南小梅澤恭一	深谷小堺知久	秋父花の木小黒沢哲夫
	熊谷石原小須長栄作	皆野小柄原義雄	皆野小柄原義雄	妻沼東中長谷川真一	毛呂山泉野小吉田英男	川口青木中丹羽尊照	川口青木中丹羽尊照
	南越谷小松永誠一	行田中央小尾城英一	久喜小杉山岩雄	柏壁小岡広男	蕨二中角田樹	宮代須賀中大島替	宮代須賀中大島替
事務局長	柏壁小柴崎	浦和高砂小吉岡喜代隆	浦和高砂小吉岡喜代隆	大宮東中閑根昇	大宮東中閑根昇	大宮東中閑根昇	大宮東中閑根昇
幹事	柏壁小中村満	浦和高砂小星大三	浦和高砂小星大三	大宮東中中里伊知子	大宮東中小竹悦子	大宮東中鈴木茂子	大宮東中池田朗子
	柏壁小鈴木俊子	浦和高砂小坂井百合子	浦和高砂小坂井百合子	大宮東中池田朗子	大宮東中池田朗子	大宮東中池田朗子	大宮東中小島良司
	柏壁小五月女弘子		浦和高砂小奥平光江				大宮東中新島佳子
	柏壁小前野弥栄子		浦和高砂小寺村勉				
監事	鴻巣北中森島賢一	鴻巣北中森島賢一	鴻巣南小白根南藤吉	鴻巣南小白根南藤吉	日高高萩中新井好一	大宮大谷中内田道夫	大宮大谷中内田道夫
	東松山新明小消水角三	深谷小田村武久	深谷小田村武久	日高高萩中新井好一	大宮大谷中内田道夫	川口東中相川卓一	川口西中相川卓一
	小鹿野小猪野	岩槻慈恩寺小北川秀	岩槻慈恩寺小北川秀	蕨二中角田樹	川口東中相川卓一	与野本町小黒須義男	与野本町小黒須義男
常任理事	草加小金子浩	蕨第一中岩上進	蕨第一中岩上進	浦和岸中松本進一	松山一小坂本友次郎	和光第三小長谷川智彦	和光第三小長谷川智彦
	上尾西小秋谷	上尾中伊藤利男	上尾原市南小森春雄	桶川川田谷小荒井得治	久喜南中腰塚鹿舞也	桶川西小加島亮克	鴻巣東中長谷川貴一
	富士見富士見台中平野正夫	所沢若狭小多田力	毛呂山町川角小浅見芳太郎	坂戸泉小勝俣福志	大利根東小伊藤弘道	川越東中新井一	川越仙波小小松公平
	東松山松山中大谷好夫	松山中岡野融一	東松山南中清水	秩父二中岩田正久	妻沼小木村	松山一小坂本友次郎	東松山松山一小坂本友次郎
	長瀬第一小田中義二	東秩父西小福島志	東秩父西小福島志	東松山神明小関田保夫	本庄旭小武政高夫	秩父花の木小黒沢哲夫	小鹿野小飯島治男
	上里中新井徳信	妻沼妻沼東中長谷川真一	本庄東小青木	熊谷荒川中村邦夫	秩父一小岩田正久	本庄南小田中誠一	児玉中田中誠一
	深谷中齊藤年茂	北川辺中小林英雄	妻沼東中長谷川真一	北川辺東小林英雄	桶川西小加島亮克	妻沼小木村	妻沼小木村
	羽生北小藤間敢	久喜中杉山岩雄	北川辺東小林英雄	宮代須賀中大島替	与野八幡小上村松雄	大利根東小伊藤弘道	越谷大相模小中里順道
	幸手町長倉小樋口榮	本庄東小青木	杉戸中齊藤富四郎		坂戸泉小勝俣福志	蓮田南小岩崎利雄	北河辺中杉山岩雄
	川越武藏野小新井	浦和木崎小長島	熊谷西中新井松三	熊谷西中新井松三	嵐山志賀小山伸	浦和原山中橘栄一	浦和原山中橘栄一
理事	川越中央小松岡輝雄	与野大戸小村田茂雄	与野大戸小村田茂雄	嵐山町志賀小山伸	越谷富士中齊藤宥雄	浦和北浦和小吉田元治	草加中藤井光男
	越谷中央小齊藤宥雄	越谷富士見中齊藤宥雄	越谷富士見中齊藤宥雄	越谷玉井小堺塚知久	熊谷玉井小堺塚知久	浦和常盤小高井哲郎	横瀬芦ヶ久保小湯本トヨジ
	熊谷富士見小渡辺洵一郎	所沢中内野要之	大宮桜木小平野楨一	大宮桜木小平野楨一	所沢中内野要之	志木第三小村田美代	皆野日野沢小田島久夫
	大宮北小若田せつ	大宮桜木小平野楨一	所沢中内野要之	所沢中内野要之	浦和仲本小島村	吉田町太田部小田島宏造	川越初雁中若尚男

	昭 39	昭 41	昭 42	昭 43	昭 44	昭 45	昭 46
国語	深谷中 徳橋善四郎	浦和岸小 池沢 国彦	浦和谷田小 池沢 国彦	浦和谷田中 池沢 国彦	秩父二中 齊藤 広一	秩父二中 齊藤 広一	秩父二中 齊藤 広一
書写	浦和西高 木村 栄一	浦和西高 木村 栄一	栗橋西小 長岡 佳治	栗橋西小 長岡 佳治	大宮北中 齋島新太郎	大宮北中 齋島新太郎	大宮北中 齋島新太郎
社会	川口青木北小 村田 孝之	川口舟戸小 村田 孝之	川口仲町小 村田 孝之	川口仲町小 村田 孝之	飯能一小 新井 滉寿	飯能一小 新井 滉寿	柏壁小 福島 正
算数	熊谷高 佐久間安三郎	埼大中 伊藤 武	埼大小 伊藤 武	大宮桜木小 尾崎馨太郎	大宮桜木小 尾崎馨太郎	松山中 恩田 利夫	松山中 恩田 利夫
理科	埼大附小 松岡 輝雄	埼大小 藤岡 由夫	浦和常盤中 渋谷 宣二	浦和常盤中 渋谷 宣二	浦和常盤中 渋谷 宣二	浦和常盤中 渋谷 宣二	鷺ヶ谷中 小林 太郎
音楽	柏壁小 飯野 正秋	大宮北中 高山 敏一	大宮北中 高山 敏一	大宮北中 高山 敏一	大宮東中 高山 敏一	大宮東中 高山 敏一	大宮東中 高山 敏一
美術	埼大 町田源三郎	蓮田南小 斎藤 誠	蓮田南小 斎藤 誠	戸田喜沢小 新井 邦雄	戸田喜沢小 新井 邦雄	戸田喜沢小 新井 邦雄	戸田二小 新井 邦雄
保育		入間川小 須永 九重	桶川中 加藤 雅信	桶川中 加藤 雅信	浦和別所小 小松崎兵馬	蕨塚越小 高橋 直	浦和大原中 加藤 雅信
英語	加須昭和中 山中 諭吉	羽生中 山中 諭吉	羽生中 山中 諭吉	深谷大寄中 篠田 茂章	深谷大寄中 篠田 茂章	深谷大寄中 篠田 茂章	深谷大寄中 篠田 茂章
道徳	深谷小 笹井 義一	深谷小 笹井 義一	深谷小 笹井 義一	小針小 河野 敏雄	西浦和小 猪野 廣治	西浦和小 猪野 廣治	西浦和小 猪野 廣治
特活	川口本町小 倉林嘉四郎	川口本町小 倉林嘉四郎	寄居中 柴崎 栄一	寄居中 柴崎 栄一	寄居中 柴崎 栄一	大里寄居中 柴崎 栄一	浦和大原中 加藤 雅信
進路	加須西中 鈴木伸治郎	熊谷大原中 内田忠袈裟	熊谷大原中 内田忠袈裟	川越初雁中 須賀 精一	初雁中 須賀 精一	浦和原山中 宗像 慶治	浦和原山中 宗像 慶治
放送	浦和・仲本小 君塚啓太郎	浦和仲本小 君塚啓太郎	南浦和小 竹内 栄助	大利根中 台 知道	大利根中 台 知道	大利根中 台 知道	大利根中 台 知道
視聴覚	加須小 若旅 進一	行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄	行田中央小 樋口日出雄	川口幸町小 山田 利平
教育機器						影森中 持田 茂雄	浦和大原中 持田 茂雄
心理	与野東中 井上 政平	杉戸桜井小 塚田 猶介	杉戸桜井小 塚田 猶介	杉戸桜井小 塚田 猶介	杉戸泉小 塚田 猶介	幸手中 高田 福松	幸手中 高田 福松
特殊	川越中央小 田村 正雄	飯能西川小 行平鹿太郎	飯能西川小 行平鹿太郎	加須小 小菅 正夫	加須小 小菅 正夫	加須小 小菅 正夫	与野本町小 荻島 淳
僻地	飯能教育委員会 岡田 要作	飯能教育委員会 岡田 要作	秩父大滝小 山中 義一				
図書館		熊谷西小 新井 久三	大宮北小 金子 栄清	大宮北小 金子 栄清	大宮北小 金子 栄清	大宮北小 金子 栄清	柏壁小 福島 正
技家		与野東中 井上 政平	与野東中 井上 政平	浦和大原中 宗像 慶治	浦和大原中 宗像 慶治	浦和原山中 宗像 慶治	浦和原山中 宗像 慶治
家庭		川越小 山本 せつ	慈恩寺小 若田 せつ	慈恩寺小 若田 せつ	東大成小 若田 せつ	東大成小 若田 せつ	東大成小 若田 せつ
地域					浦和高砂小 岡登 益蔵	浦和高砂小 岡登 益蔵	熊谷荒川中 鳥塚恵和男

	昭 47	昭 48	昭 49	昭 50	昭 51	昭 52	昭 53
国 語	秩父一中 斎藤 広一	秩父一中 斎藤 広一	熊谷石原小 神沼新十郎	熊谷石原小 神沼新十郎	川越武藏野小 新井 康	川越武藏野小 新井 康	川越武藏野小 新井 康
書 写	大宮北中 庵島新太郎	大宮北中 庵島新太郎	大宮桜木中 庵島新太郎	大宮桜木中 庵島新太郎	東大成小 高坂 良助	東大成小 高坂 良助	川越月越小 栗原 肇
社 会	柏壁小 福島 正	柏壁小 福島 正	大宮南中 田島 尚	大宮南中 田島 尚	大宮小 田島 尚	大宮小 田島 尚	浦和木崎小 長島 均
算 数	松山中 恩田 利夫	行田荒木小 村社 幸三	行田荒木小 村社 幸三	北本中 宇野 一	北本中 宇野 一	羽生南小 荒木 恒則	羽生南小 荒木 恒則
理 科	鳩ヶ谷中 小林 太郎	羽生中 台 知道	羽生中 台 知道	川越中央小 松岡 雄	川越中央小 松岡 雄	川越中央小 松岡 雄	川越中央小 松岡 雄
音 楽	羽生中 湯橋 孝夫	浦和高砂小 熊倉 正利	草加高砂小 熊倉 正利	草加高砂小 熊倉 正利	草加高砂小 熊倉 正利	北本東中 峰尾 良平	北本東中 峰尾 良平
美 術	戸田二小 新井 邦雄	戸田二小 新井 邦雄	戸田東中 新井 邦雄	戸田東中 新井 邦雄	和光三中 須藤 嘉彦	和光三中 須藤 嘉彦	和光三中 須藤 嘉彦
保 体	川口元郷中 長島 敏男	元郷中 長島 敏男	庄和南桜井小 秋葉 錠	浦和常盤中 石黒 硬	大宮東中 塩田 権男	大宮東中 塩田 権男	大宮三橋小 森田 寛
英 語	南高麗中 大野 政己	東吾野中 大野 政己	飯能吾野中 大野 政己	東吾野中 大野 政己	大宮北中 原田 三郎	大宮北中 原田 三郎	大宮日進中 原田 三郎
道 德	浦和仲本小 猪野 廣治	浦和仲本小 猪野 広治	浦和仲本小 猪野 広治	浦和仲本小 猪野 広治	川口本町小 磯田 米作	川口本町小 杉田 儀作	越谷中央中 齊藤 宿雄
特 活	浦和大原中 加藤 雅信	浦和大原中 加藤 雅信	浦和大原中 加藤 雅信	浦和岸中 加藤 雅信	浦和岸中 加藤 雅信	川口上青木中 遠藤 晃司	川口上青木中 杉田 儀作
進 路	浦和原山中 宗像 憲治	浦和本太中 宗像 憲治	騎西中 樋田 勝次	鷺宮中 遠藤 晃司	鷺宮中 遠藤 晃司	鷺宮中 遠藤 晃司	松伏中 利根 栄次
放 送	羽生中 台 知道	羽生中 台 知道					
視 聴 党	川口幸町小 山田 利平	川口幸町小 山田 利平	羽生中 台 知道	所沢東中 越阪部三郎	加須昭和中 篠塚 保	所沢東中 越阪部三郎	秩父南小 持田 茂雄
教育機器	秩父皆野中 持田 茂雄	秩父大田中 持田 茂雄					
心 理	杉戸中 山中 明	杉戸中 山中 明	越谷富士中 川島 朝昭	行田荒木中 黒田 達男	行田荒木小 黒田 達男	行田荒木小 黒田 達男	行田北小 黒田 達雄
特 殊	与野本町小 荻島 淳	与野本町小 荻島 淳	与野本町小 荻島 淳	与野本町小 荻島 淳	熊谷富士見中 渡辺淳一郎	熊谷富士見中 渡辺淳一郎	熊谷富士見中 渡辺淳一郎
僻 地	秩父大滝小 山中 義一	秩父大滝中 伊藤 暢勇	秩父浦山小 柄原 義雄	飯能北川小 大野 豊治	秩父大滝小 廣瀬 哲丸	秩父大滝小 廣瀬 哲丸	秩父大滝中 林 明治
図 書 館	柏壁小 福島 正	柏壁小 福島 正	大宮宮原小 平野 祯一	大宮南小 平野 祯一	大宮南小 平野 祯一	大宮南小 平野 祯一	大宮桜木小 平野 祯一
技 家	浦和原山中 宗像 憲治	浦和本太中 宗像 憲治	与野東中 新井 義憲	与野東中 新井 義憲	与野東中 新井 義憲	与野東中 新井 義憲	与野東中 新井 義憲
家 庭	東大成小 若田 せつ	大宮栄小 若田 せつ	大宮栄小 若田 せつ	大宮北小 若田 せつ	大宮北小 若田 せつ	大宮北小 若田 せつ	大宮北小 若田 せつ
地 城	熊谷荒川中 鳥塚恵和男	熊谷荒川中 鳥塚恵和男	上尾中 金井塚隆治	上尾中 金井塚隆治			

	昭 54	昭 55	昭 56	昭 57	昭 58	昭 59
国 語	熊谷西小 新井 松三	熊谷西小 新井 松三	熊谷西小 新井 松三	川越一中 滝嶋 壮三	川越一中 滝嶋 壮三	飯能西中 村田 守男
書 写	日高高麗中 新井 好一	日高高麗中 新井 好一	日高高萩中 新井 好一	日高高萩中 新井 好一	日高高萩中 新井 好一	日高高萩中 新井 好一
社 会	浦和木崎小 長島 均	蕨一中 岩上 進	浦和原山中 橋 栄一	浦和原山中 橋 栄一	浦和原山中 橋 栄一	浦和原山中 橋 栄一
算 数	鴻巣中 長谷川貴一	鴻巣中 長谷川貴一	浦和仲本小 島村 照夫	浦和仲本小 島村 照夫	久喜中 斎藤昌四郎	久喜中 斎藤昌四郎
理 科	与野大戸小 村田 茂雄	与野大戸小 村田 茂雄	与野大戸小 村田 茂雄	庄和葛飾中 小野田舜司	庄和葛飾中 小野田舜司	庄和葛飾中 小野田舜司
音 樂	幸手東小 奥原 稔哉	加須不動岡小 関根 二郎	嵐山志賀小 小山 伸	嵐出志賀小 小山 伸	浦和北浦和小 吉田 元治	川越初雁中 茗 尚男
美 術	杉戸小 高山 靖男	杉戸小 高山 靖男	久喜小 高山 靖男	久喜小 高山 靖男	久喜小 高山 靖男	久喜小 高山 靖男
保 体	鳩山村鳩丘小 小峰 清	鳩山村松栄小 小峰 清	鳩山村松栄小 小峰 清	鳩山村松栄小 小峰 清	浦和本太小 並木 義夫	浦和常盤中 岩崎 武夫
英 語	大宮日進中 原田 三郎	大宮日進中 原田 三郎	深谷幡羅中 田島 光治	深谷幡羅中 田島 光治	深谷幡羅中 田島 光治	深谷幡羅中 田島 光治
道 德	越谷中央中 齊藤 有雄	越谷富士中 齊藤 有雄	越谷富士中 齊藤 有雄	越谷富士中 齊藤 有雄	浦和常盤小 高井 哲郎	草加中 藤井 光男
特 活	川口上青木中 杉田 銀作	川口芝西中 丹羽 尊照	川口芝西中 丹羽 尊照	川口芝西中 丹羽 尊照	川口青木中 丹羽 尊照	越谷向陽中 木村 恵俊
進 路	熊谷荒川中 柿沼 定雄	本庄東中 堀堀内伊勢治	本庄東中 堀堀内伊勢治	本庄東中 堀堀内伊勢治	所沢南陵中 鈴木 正治	深谷明戸中 本庄陣太郎
放 送						
視 聴 覚	秩父南小 持田 茂雄	岩槻中 新井 英彦	蕨二中 角田 樹	浦和沼影小 原 真次	浦和沼影小 原 真次	川越武蔵野小 小久保幸郎
教育機器						
心 理	行田北小 黒田 達雄	行田北小 黒田 達雄	幸手長倉小 中島 孝次	幸手長倉小 中島 孝次	幸手長倉小 中島 孝次	川島川島中 閼口 武
特 殊	所沢中 内野 要之	所沢中 内野 要之	所沢中 内野 要之	大官小 小豆沢幹夫	大官小 小豆沢幹夫	大官小 小豆沢幹夫
僻 地	秩父大滝中 林 明治	秩父大滝小 木村 良康	秩父大滝小 木村 良康	皆野日野沢小 町田 重文	皆野日野沢小 町田 重文	秩父大滝中 広瀬 哲丸
図 書 館	大官桜木小 平野 権一	大官桜木小 平野 権一	大官桜木小 平野 権一	熊谷玉井小 堺塚 知久	深谷小 堺塚 知久	鴻巣田間宮小 黒田 義男
技 家	与野東中 新井 義憲	白岡齊義中 岡安 章	所沢向陽中 小林 茂吉	所沢向陽中 小林 茂吉	所沢向陽中 小林 茂吉	所沢向陽中 小林 茂吉
家 庭	大宮蓮沼小 堺脇 和子	大宮蓮沼小 堺脇 和子	志木三小 堺脇 和子	志木三小 村田 美代	志木三小 村田 美代	横瀬芦ヶ久保小 湯本トヨジ
地 城						

## 歴代地域研究会長

昭和41年度以降の各地域研究会長及び在勤校を掲載した。現在75市町村教育研究会があるが、本会の発足当初は地域により班・地区編成で近隣町村と合併し研究会を組織し活動していたものである。

市町村ごとの研究会に分離したのが昭和51年度以降54年にかけて整理され現在の組織となる。

従って、この表のとおり会長不在の研究会がかなり見られているが、近隣市町村と合併して研究組織を作り活動していたのである。

例	蕨班教育研究会	戸田・鳩ヶ谷・蕨
	朝霞地区教育研究会	志木・新座・和光
	鴻巣地区教育研究会	北本・吹上
	飯能地方教育研究会	日高・名栗
	東部班教育研究会	富士見・福岡
	坂戸班教育研究会	鶴ヶ島
	越生班教育研究会	大井・三芳
	久喜地区教育研究会	菖蒲・白岡
	幸手班教育研究会	栗橋・鷺宮
	杉戸地区教育研究会	庄和・宮代

教育事務所	番号	研究団体名	41年		42年		43年		44年	
			会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
北足立南部	1	埼大附属小学校	星野 末吉				井上 敏夫		鈴木 裕隆	
	2	" 中学校					井手 達郎		野間 郁夫	
	3	浦和市教育研究会	小島 照	木崎 小	小島 照	木崎 小	野口 良雄	大谷 場 中	野口 良雄	大谷 場 中
	4	川口市 "	倉林嘉四郎	川口本町小	引間 賢弘	元郷 中	村上 政三	幸町 小	干田恒二郎	元郷 中
	5	与野市 "			荻島 淳	本町 小	荻島 淳	本町 小	荻島 淳	本町 小
	6	草加市 "	吉田 茂	草加 中	吉田 茂	草加 中	野口 康司	高砂 小	野口 康司	高砂 小
	7	蕨市 "	大熊 族	蕨一中	大熊 族	蕨一中	大熊 族	蕨一中	大熊 族	蕨一中
	8	戸田市 "								
	9	鳩ヶ谷市 "								
	10	志木市 "								
	11	朝霞市 "	金子 俊一	足立 中	金子 俊一	足立 中				
	12	新座市 "								
	13	和光市 "					内田 麟治	大和 中	細野 正平	大和田 小
北足立北部	14	埼大附属養護学校								
	15	大宮市教育研究会	尾崎馨太郎	桜木 小	高山 敏一	北 中	野崎 正雄	大宮高校	尾崎馨太郎	桜木 小
	16	鴻巣市 "	三須 信安	鴻巣 中	三須 信安	鴻巣 中	三須 信安	鴻巣 中	高橋 英五	鴻巣 中
	17	北本市 "								
	18	吹上町 "								
	19	上尾市 "	小林 良男	富士見 小	山田 幸	上尾 中	山田 幸	上尾 中	山田 幸	上尾 中
	20	桶川市 "	田中 利治	桶川 北小	田中 利治	北 小	西木 武夫	南 小	西木 武夫	南 小
	21	伊奈町 "	柳沢 利得	伊奈 中	柳沢 利得	伊奈 中	上松 秀雄	伊奈 中	須田 幸助	小室 小
入間	22	川越市 "	須賀 清一	初雁 中	須賀 清一	初雁 中	須賀 清一	初雁 中	須賀 清一	初雁 中
	23	所沢市 "			中島 豊	所沢 小	中島 豊	所沢 小	中島 豊	所沢 小
	24	飯能市 "	市川 豊	原市場 小	半田喜吾士	東吾野 中	小島 一雄	精明 小	小島 一雄	精明 小
	25	日高町 "								
	26	名栗村 "								
	27	狭山市 "	須長 九重	入間川 小	須長 九重	入間川 小	野口 政	堀 兼 小	平野 太郎	西 中
	28	入間市 "	小谷野寛一	金子 中	小谷野寛一	金子 中	星野清五郎	金子 小	星野清五郎	金子 小
	29	富士見市 "	平岡 正次	鶴瀬 小	平岡 正次	鶴瀬 小				
	30	上福岡市 "					齊藤 克	福岡二小	齊藤 克	福岡五小
	31	坂戸市 "	星野 末吉	坂戸 中	細田 英雄	鶴ヶ島一小	永峰 房雄	若宮 中	飯島 啓吉	住吉 中
	32	鶴ヶ島町 "								
	33	越生町 "	永峰 房雄	毛呂山 中	小高 愛治	川角 中	中島 豊作	越生 小	新井新一郎	越生 中
	34	大井町 "								
	35	三芳町 "								
比企	36	栗松山市 "	瀬戸 治郎	松山一小	瀬戸 治郎	松山一小	瀬戸 治郎	松山一小	瀬戸 治郎	松山一小
	37	小川町 "	辻田 光三	小川 小	辻田 光三	小川 小	萩久保正平	小川東中	萩久保正平	東 中
	38	菅谷班 "	井上 錠介	福山 小	初雁不二彦	七郷 中	大野 武雄	首谷 中	野口都幾夫	七郷 小
	39	玉川班 "			小鷹 薫	鳩山 中	小鷹 薫	鳩山 中	高山 次良	明覚 中
	40	川島町 "	立川 政司	小見野 小	立川 政司	小見野 中	山口 右喜	川島 中		
	41	吉見 "	村田 信男	吉見 中	村田 信男	吉見 中	村田 信男	吉見 中	村田 信男	吉見 中

			41年		42年		43年		44年	
教育事務所	番号	研究団体名	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
秩父	42	秩父教育委員会	齊藤 広一	秩父二中						
	43	小鹿野地区教育協会	根岸長三郎	小鹿野小	根岸長三郎	小鹿野小	根岸長三郎	小鹿野小	坂本 忠雄	小鹿野小
	44	皆野地区 "	葛田 博治	野上中	新井 芳房	皆野中	新井 芳房	皆野中	新井 芳房	皆野中
	45	東秩父地区 "			神部 正吉	西 小	神部 正吉	西 小	保泉 正男	東 中
児玉	46	本庄、上里教育研究会			吉川 正雄	本庄西中	吉川 正雄	本庄西中	吉川 正雄	西 中
	47	児玉町教育研究協議会	長谷川鶴松	児玉小	長谷川鶴松	児玉小	長谷川鶴松	児玉小	内野 恵一	児玉小
	48	美里村教育研究会	上山 均	東児玉中	岡本 一延	美里中	岡本 一延	美里中	高橋 万二	美里中
	49	神川神泉 "	小林 茂夫	矢納小	田村利三郎	渡瀬 小	田村利三郎	渡瀬 小	小林 茂夫	丹 雄小
大里	50	熊谷市教育研究協議会	藤沢 貞一	富士見中	藤沢 貞一	富士見中	原口 昌純	石原 小	原口 昌純	石原 小
	51	深谷地区教育研究会	徳橋善四郎	深谷中	徳橋善四郎	深谷中	徳橋善四郎	深谷中	徳橋善四郎	深谷中
	52	妻沼町 "	渡辺 栄作	太田小	渡辺 栄作	太田小	渡辺 栄作	太田小	三沢 正七	妻沼小
	53	寄居班 "			閑口 利雄	花園中	閑口 利雄	花園小	町田 貞治	寄居小
	54	江南 "	福田 善正	吉見小	小沢 八郎	江南中	小沢 八郎	江南中	小沢 八郎	江南中
埼	55	行田班 "	樋口日出雄	中央小	樋口日出雄	中央小	樋口日出雄	中央小	樋口日出雄	中央小
	56	加須市 "	小川美一郎	昭和中	小川美一郎	昭和中	小菅 正夫	加須小	小菅 正夫	加須小
	57	羽生市 "	山中 謙吉	羽生中	山中 謙吉	羽生中	五月女修次	羽生中	五月女修次	羽生中
	58	騎西、川里地区 "	石井小四郎	騎西中	石井小四郎	騎西中	石井小四郎	騎西中	杣田 勝次	騎西中
	59	大利根地区 "	川島 正義	大利根中	川島 正義	大利根中	古 知道	大利根中	古 知道	大利根中
葛	60	春日部市 "	飯野 政秋	柏壁中	飯野 政秋	柏壁小	福島 正	柏壁小	福島 正	柏壁小
	61	岩槻市 "	間宮 喜平	岩槻中	間宮 喜平	岩槻中	小林 得治	慈恩寺中	小林 得治	慈恩寺中
	62	越谷市 "	菊地 正	中央中	菊地 正	中央中	菊地 正	中央小	田中 保	北 中
	63	久喜市 "	鈴木 徳次	久喜中	井上 徳男	菖蒲中	長沢 鮎	菖蒲中	長沢 鮎	菖蒲中
	64	八潮市 "								
	65	三郷市 "							酒井進三郎	南 中
	66	蓮田市 "	関根 義雄	蓮田中	齊藤 錠	南 小	関根武之進	黒浜中	細田 理一	蓮田中
	67	幸手町 "	長岡 佳治	栗橋西小	長岡 佳治	栗橋西小			長岡 佳治	栗橋西小
	68	栗橋班 "								
	69	庄和町 "								
	70	杉戸町 "	山中 明	杉戸中	塙田 猪介	桜井小	塙田 猪介	桜井小	塙田 猪介	泉 小
	71	吉川班 "	青木 秀夫	吉川南中	青木 秀夫	南 中	酒井進三郎	南 中		
	72	白岡町 "								
	73	菖浦町 "								
	74	宮代町 "								
	75	鶯宮町 "								

教育場所	番号	研究団体名	45年		46年		47年		48年	
			会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
北足立南部	1	埼大附属小学校	鈴木 義隆				松本 旭		松本 旭	
	2	" 中学校	野間 郁夫		野間 郁夫					
	3	浦和市教育研究会	吉野 時過	常盤 小	吉野 時過	常盤 小	吉野 時過	常盤 小	宗像 敦治	本太中
	4	川口市 "	千田恒二郎	元郷 中	千田恒二郎	青木 中	千田恒二郎	青木 中	千田恒二郎	青木 中
	5	与野市 "	荻島 淳	本町 小	荻島 淳	本町 小	荻島 淳	本町 小	荻島 淳	本町 小
	6	草加市 "	藤波 寿	草加 小	藤波 寿	草加 小	藤波 寿	草加 小	藤波 寿	草加 小
	7	蕨市 "	千頭 和孝	蕨 二 中	田中 一	戸田 中	村山 長二	鳩ヶ谷 小	江里 武敏	北 小
	8	戸田市 "								
	9	鳩ヶ谷市 "								
	10	志木市 "	渡辺 久治	朝霞 二 小	渡辺 久治	朝霞 二 小	伊藤 正久	志木 小		
	11	朝霞市 "							細野 正平	一 小
	12	新座市 "								
	13	和光市 "	新井 正敏	大和 中	新井 正敏	大和 中	新井 正敏	大和 中	植野 嘉久	四 小
北足立北部	14	埼大附属養護学校								
	15	大宮市教育研究会	松崎 益司	南 中	松崎 益司	南 中	松崎 益司	南 中	松崎 益司	南 中
	16	鴻巣市 "	高橋 英五	鴻巣 中	高橋 英五	鴻巣 中	坂本 金作	鴻巣 中	坂本 金作	鴻巣 中
	17	北本市 "								
	18	吹上町 "								
	19	上尾市 "	小林 弘	上尾 小	小林 弘	上尾 小	小林 弘	上尾 小	小林 弘	上尾 小
	20	桶川市 "	加藤 喜一	南 小	加藤 喜一	南 小	須田 幸助	西 小	高橋長三郎	西 小
	21	伊奈町 "	白田 信忠	小針 小	松本 秀雄	小室 小	松本 秀男	小室 小	松本 秀男	小室 小
	22	川越市 "	栗原 貞雄	川越 小	栗原 貞雄	川越 小	栗原 貞雄	川越 小	山内 勤	東 中
	23	所沢市 "	柏谷 庄助	所沢 小	柏谷 庄助	所沢 小	柏谷 庄助	所沢 小		
	24	飯能市 "	小島 一雄	精明 小	小島 一雄	精明 小	田島 功三	東吾野 中	中島 照光	高麗 中
	25	日高町 "								
入間	26	名栗村 "								
	27	狭山市 "	平野 太郎	西 中	栗原 鑑	柏原 小	木村 光輔	東 小		
	28	入間市 "	永村 光輔	西武 中	久保 道夫	西武 小	久保 道夫	西武 小	木村 光輔	東 小
	29	富士見市 "								
	30	上福岡市 "	川松 輝信	福岡 中	丸山 光男	福岡 四 小	小高 敬弘	藤久保 小	藤沢 輝郎	上福岡四 小
	31	坂戸市 "	吉野 武雄	鶴ヶ島二小	本郷 春治	坂戸 中	本郷 春治	坂戸 中	小峰 清	鶴ヶ島一小
	32	鶴ヶ島町 "								
	33	越生町 "	村田 睦正	川角 小	野々宮高成	毛呂山 中	野々宮高成	毛呂山 中	坂本友次郎	越生 小
	34	大井町 "								
	35	三芳町 "								
比企	36	東松山市 "	瀬戸 治郎	松山 一 小	設楽 秀夫	松山 一 小	宮島 城	野本 小	岩田三男次	南 中
	37	小川町 "	町田 芳平	西 中	町田 芳平	小川 小	町田 芳平	小川 小	町田 芳平	小川 小
	38	菅谷班 "	荻山 栄一	福田 小	小山 賢一	清川 中	藤井 巍	七郷 小	村田 睦正	菅谷 中
	39	玉川班 "	高山 次良	明覚 小	高山 次良	明覚 小	神澤 正吉	玉川 小	馬場 吉義	明覚 小
	40	川島町 "	山口 右喜	川島 中	久保田伸一	川島 中	久保田伸一	川島 中	千代田善治	八ツ保 小
	41	吉見 "	村田 信男	吉見 中	中村 恒治	吉見 南 小	大曾根武治	東 一 小	三角 党治	吉見 中

教務所	番号	研究団体名	45年		46年		47年		48年	
			会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
秩父	42	秩父教育委員会	齊藤 広一	秩父二中	小林 善行	南 小	小林 善行	南 小	横田 一美	秩父二中
	43	小鹿野地区教育協会	辺見健八郎	小鹿野中	坂本 忠雄	小鹿野 小	岡村 肇	岡神 中	坂本 忠雄	小鹿野 小
	44	皆野地区 "	新井 芳房	皆野 中	有本 治郎	皆野 小	有本 治郎	皆野 小	有本 治郎	皆野 小
	45	東秩父地区 "	栗島 研介	西 中	栗島 研介	西 中	栗島 研介	西 中	保泉 正男	東 中
児玉	46	本庄、上里教育研究会	萩原 荘次	旭 小	田沼 章次	東 中	田沼 章次	東 中	田沼 章次	東 中
	47	児玉郡教育研究協議会	内野 忠一	児玉 小	金井 政一	共和 小	金井 政一	児玉 小	金井 政一	児玉 小
	48	美里村教育研究会	岡本 真澄	東児玉 小	岡本 真澄	東児玉 小	岡根 正治	松久 小	高橋 万二	美里 中
	49	神川神泉 "	小林 茂夫	丹莊 小	小林 茂夫	丹莊 小	坂本 敬信	青柳 小	坂本 敬伯	青柳 小
大里	50	熊谷市教育研究協議会	渡辺 房次	富士見 中	渡辺 房次	富士見 中	渡辺 房次	富士見 中	土岐 光郎	大原 中
	51	深谷地区教育研究会	谷田 健八	岡部 中	谷田 健八	岡部 中	持田千代吉	岡部 中	持田千代吉	岡部 中
	52	妻沼町 "	三沢 正七	妻沼 小	三沢 正七	妻沼 小	鶴井 嘉則	東 中	新井 祐二	妻沼 小
	53	寄居班 "	馬場 和一	川本 中	石田 美治	寄居 小	石田 美治	寄居 小	石田 美治	寄居 小
	54	江南 "	小沢 八郎	江南 中	滝田 栄一	市田 小	横瀬 繁雄	火里 中	森本 澄	江南南小
埼	55	行田班 "	樋口日出雄	中央 小	秋山 徳明	中央 小	秋山 徳明	中央 小	秋山 徳明	中央 小
	56	加須市 "	小菅 正夫	加須 小	田沼 正三	昭和 中	田沼 正三	昭和 中	田沼 正三	昭和 中
	57	羽生市 "	五月女修次	羽生 中	五月女修次	羽生 中	湯崎 孝夫	羽生 小	古 知道	羽生 中
	58	騎西、川里地区 "	桙田 勝次	騎西 中	桙田 勝次	騎西 中	桙田 勝次	騎西 中	桙田 勝次	騎西 中
	59	大利根地区 "	古 知道	大利根 中	台 知通	大利根 中	高橋 薩	大利根 中	高橋 薩	大利根 中
葛	60	春日部市 "	福島 正	柏壁 小	福島 正	柏壁 小	福島 正	柏壁 小	福島 正	柏壁 中
	61	岩槻市 "	田中 寿徳	岩槻 中	田中 寿徳	岩槻 中	田中 寿徳	岩槻 中	金井塙隆治	岩槻 小
	62	越谷市 "	田中 保	北 中	田中 保	北 中	松永 誠一	大沢 小	松永 誠一	大沢 小
	63	久喜市 "	長沢 駿	菖蒲 中	石井 正信	菖蒲 中	石井 正信	菖蒲 中	石井 正信	菖蒲 中
	64	八潮市 "	関 嶽	八潮三 小	清水 義潔	八潮四 小	橋本 隆広	八潮 中	橋本 隆広	八潮 中
	65	三郷市 "					岡本 正春	三郷三 小	岡本 正春	三 小
	66	逆田市 "	細田 理一	蓮田 中	平沢 正三	南 小	岡根武之進	黒浜 中	佐藤 清	中央 小
	67	幸手町 "	長岡 佳治	栗橋西 小	長沢 正義	栗橋 東 小	長沢 正義	栗橋 東 小	長沢 正義	栗橋 東 小
	68	栗橋班 "								
	69	庄和町 "								
	70	杉戸町 "	矢島 春信	南桜井 小	矢島 春信	南桜井 小	矢島 春信	南桜井 小	山中 明	杉戸 中
	71	吉川班 "	中島 英	吉川 小	中島 英	吉川 小	中島 弘	松伏 小	中島 弘	松伏 小
	72	白岡町 "								
	73	菖浦町 "								
	74	宮代町 "								
	75	鷺宮町 "								

		49年		50年		51年		52年		
教育事務所	番号	研究団体名	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
北足立南部	1	埼大附属小学校	松本 旭		金山 広吉		金山 広吉		金山 広吉	
	2	〃 中学校							大村 喜吉	
	3	浦和市教育研究会	古田島 登	木崎 中	古田島 登	木崎 中	黒沢 義夫	仲町 小	黒沢 義夫	北浦 和小
	4	川口市 〃	金室 博	芝 中	金室 博	芝 中	石塚 一朗	青木 中	石塚 一朗	青木 中
	5	与野市 〃	荻島 淳	本町 小	荻島 淳	本町 小	新井 義恵	東 中	新井 義恵	東 中
	6	草加市 〃	藤波 寿	草加 小	中村 申	栄 中	中村 申	栄 中	中村 申	東 中
	7	蕨市 〃	江里 武敏	北 小	江里 武敏	北 小	和田 信	中央 東小	和田 信	北 小
	8	戸田市 〃	高橋 一二	戸田 一小	新井 邦雄	戸田 本中	草刈 栄芳	新曾 北小	草刈 栄芳	新曾 北小
	9	堀ヶ谷市 〃	山田 一男	堀谷 中	山田 一男	堀谷 中	山田 克己	里 小	山田 克己	里 小
	10	志木市 〃					香川 茂	志木 二中	香川 茂	二 中
	11	朝霞市 〃	新井 正敏	新座 二中	新井 正敏	新座 二中	橋本 勇	二 中	橋本 勇	二 中
	12	新座市 〃					金子 展治	新座 中	金子 展治	新座 中
	13	和光市 〃	須藤 嘉彦	和光 三小	須藤 嘉彦	和光 三小	坂本 守	広沢 小	坂本 守	広沢 小
北足立北部	14	埼大附属養護学校								
	15	大宮市教育研究会	菊地 正一	大砂土東小	菊地 正一	大砂土東小	石井喜八郎	日進 中	石井喜八郎	日進 中
	16	鴻巣市 〃	坂本 金作	鴻巣 中	坂本 金作	鴻巣 中	坂本 金作	鴻巣 中	森島 賢一	北 中
	17	北本市 〃								
	18	吹上町 〃								
	19	上尾市 〃	黒須 一郎	鴨川 小	福島 茂	原市 中	甘樂 正義	上尾 小	福島 茂	西 中
	20	桶川市 〃	峰尾 良平	南 小	峰尾 良平	南 小	峰尾 良平	南 小	西田 四郎	西 小
	21	伊奈町 〃	本郷 義徳	小針 小	坂田 英雄	伊奈 中	坂田 英雄	伊奈 中		
入間	22	川越市 〃	国田 正雄	城南 中	松岡 錠雄	中央 小	小高 一郎	川越 一小	松岡 錠雄	中央 小
	23	所沢市 〃	柏谷 喜三	所沢教委	柏谷 伸男	南 小	鈴木 政一	所沢 小	鈴木 政一	所沢 小
	24	飯能市 〃	中島 照光	高麗 中	中島 照光	高麗 中	鳥居 全	南高麗 中	鳥居 全	一 中
	25	日高町 〃								
	26	名栗村 〃								
	27	狭山市 〃			武居 富雄	西 中	椎橋 武信	入間川 小	椎橋 武信	入間川 小
	28	入間市 〃	平野 太郎	入間川 小	栗原 保	藤沢 中	白井 新作	藤沢 中	白井 新作	藤沢 中
	29	富士見市 〃							平野 正夫	富士見台中
	30	上福岡市 〃	藤沢 輝郎	上福岡四小	藤沢 輝郎	四 小	笠原 芳一	六 小	日出樹義男	一 中
	31	坂戸市 〃	清水 潔	鶴ヶ島 中	加藤 亀一	大家 小	加藤 亀一	浅羽野 小		
	32	越ヶ島町 〃								
	33	越生町 〃	岩上 利二	梅園 小	村野 守男	毛呂山 中	守谷 弘	越生 小	平井 雄夫	越生 中
	34	大井町 〃							衛宿 亮心	西原 小
	35	三芳町 〃							利根川字平	三芳 中
比企	36	東松山市 〃	大谷 好夫	松山 中						
	37	小川町 〃	馬場 吉雄	小川 小	馬場 吉雄	小川 小	馬場 吉雄	小川 小	須藤 章一	小川 小
	38	菅谷班 〃	吉野 元治	福田 小	吉野 元治	福田 小	千野 徳造	七郷 小	服部 武義	滑川 中
	39	玉川班 〃	清水 一男	今宿 小	蘿藤 光慶	都幾川 小	島田 敏一	大門第一小	岡野 勝一	鳩山 中
	40	川島町 〃	千代田善治	八ツ保 小	松本 敏男	中山 小	三角 寛治	川島 中	三角 寛治	川島 中
	41	吉見 〃	金井 武夫	南 小	三角 覚治	吉見 中	千島 春吉	吉見 中	千島 春吉	吉見 中

教育所番号	研究団体名	49年		50年		51年		52年	
		会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
秩父	42 秩父教育委員会	横田 一美	高階 中	有本 治郎	花ノ木 小	有本 治郎	花木 小	朽原 義雄	西 小
	43 小鹿野地区教育協会	坂本新太郎	吉田 中	坂本新太郎	吉田 中	猪野 勇	小鹿野 小	猪野 勇	小鹿野 小
	44 皆野地区 "	門平 忠夫	皆野 小	門平 忠夫	皆野 小	田中 義二	長瀬 一小	田中 義二	長瀬 一小
	45 東秩父地区 "	相沢 麻典	西 中	島田 忠甫	西 小	島田 忠甫	西 小		
児玉	46 本庄、上里教育研究会	小島 三郎	東 小	小島 三郎	東 小	小島 三郎	東 小	新井 徳信	上里 中
	47 要玉町教育研究協議会	倉本 辰次	金谷 小	江原 広浩	児玉 小	海北堅太郎	児玉 中	海北堅太郎	児玉 中
	48 美里村教育研究会	海北堅太郎	東児玉 小	海北堅太郎	東児玉 小	金井 俊策	美里 中	関根 秋夫	美里 中
	49 神川神泉 "	坂本 敏信	青柳 小	丸山 勝男	神泉 中	松永 広祐	丹荘 小	吉川 洋一	神川 中
大里	50 鹿谷市教育研究協議会	神沼新十郎	石原 小	神沼新十郎	石原 小	柿沼 定雄	荒川 中	柿沼 定雄	荒川 中
	51 深谷地区教育研究会	持田千代吉	間部 中	柿沢 進	常盤 小	柿沢 進	常盤 小	新井 政雄	蘇沢 中
	52 妻沼町 "	新井 祐二	秦 小	増田 寛一	西 中	増田 寛一	西 中	増田 貢一	西 中
	53 寄居班 "	清水 介良	寄居 中	清水 介良	寄居 中	戸塚 大三	花園 中	飯島 正雄	城南 中
	54 江南 "	森本 澄	江南南 小	植野 芳雄	大里吉見 小	橋本 幸夫	江南南 中	橋本 幸夫	江南 中
埼	55 行田班 "	秋山 徳明	中央 小	秋山 徳明	中央 小	秋山 徳明	中央 小	尾城 英一	中央 小
	56 加須市 "	田沼 正三	昭和 中	藤塚 保	昭和 中	藤塚 保	昭和 中	町田 正夫	大桑 小
	57 羽生市 "	台 知道	羽生 中	藤間 敏	羽生 小	藤間 敏	羽生 小	藤間 敏	羽生 北 小
	58 駒西、川里地区 "	桜田 勝次	駒西 中	鶴野 三一	鴻基 小	櫻田 侑治	駒西 中	櫻田 侑治	駒西 中
	59 大利根地区 "	高橋 藤	大利根 中	高橋 藤	大利根 中	高橋 藤	大利根 中	高橋 藤	大利根 中
葛	60 春日部市 "	飯田 豊	柏壁 小	飯田 豊	柏壁 小	石川 正美	柏壁 小	石川 正美	柏壁 小
	61 岩槻市 "	田島 雄夫	城北 中	北川 秀	慈恩寺 小	北川 秀	慈恩寺 小	北川 秀	慈恩寺 小
	62 越谷市 "	松永 誠一	南越谷 小	松永 誠一	南越谷 小	松永 誠一	南越谷 小	松永 誠一	東越谷 小
	63 久喜市 "	細田 理一	菖蒲 中	細田 理一	菖蒲 中	島沢 式	宮代東 小	長沢 正義	太田 小
	64 八潮市 "	原田 熊蔵	八潮三 小	恩田 仁治	八潮 一小	恩田 仁治	八潮 一小	恩田 仁治	三 中
	65 三郷市 "	岡本 正春	新和 小	岡本 正春	新和 小	岡本 正春	新和 小	豊間 清治	新和 小
	66 蕨田市 "	佐藤 清	中央 小	佐藤 清	中央 小	大川原了祐	蕨田 中	鶴口 瞳一	中央 小
	67 幸手町 "	高田 福松	幸手 小	遠藤 晃司	鷺宮 中	遠藤 晃司	鷺宮 中	遠藤 晃司	鷺宮 中
	68 草薙町 "							小林 正男	東 小
	69 庄和町 "								
	70 杉戸町 "	日向 雅男	杉戸 中	日向 雅男	杉戸 中	中島 弘	南桜井 小	中島 弘	南桜井 小
	71 吉川町 "	利根 栄次	松伏 中	利根 栄次	松伏 中	上坂 隆吾	吉川 小	木村斗三造	吉川 小
	72 白岡町 "								
	73 菖浦町 "								
	74 宮代町 "								
	75 笠置町 "								

教務所	番号	研究団体名	53年		54年		55年		56年	
			会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
北足立南部	1	埼大附属小学校	松下 康夫		松下 康夫		松下 康夫		宮瀬 重美	
	2	" 中学校	小暮 陽三		小暮 陽三		小暮 陽三		末永 国明	
	3	浦和市教育研究会	高井 哲郎	田島 小	高井 哲郎	田島 小	松本 真一	岸 中	松本 真一	岸 中
	4	川口市 "	石塚 一朗	青木 中	小林徳之助	並木 小	小林徳之助	並木 小	小林徳之助	並木 小
	5	与野市 "	新井 義慈	東 中	新井 義慈	東 中	石田 正之	本町 小	村田 茂雄	大戸 小
	6	草加市 "	金子 浩	草加 小			藤井 光男	栄 中	藤井 光男	栄 中
	7	蕨市 "	和田 信	北 小	岩上 達	一 中	岩上 達	一 中	千布 常雄	北 小
	8	戸田市 "	加藤 三郎	新曾 中	加藤 三郎	新曾 中	加藤 三郎	新曾 中	加島 亮克	美女木 小
	9	鳩ヶ谷市 "	山田 克己	里 小	鶴井 幸寿	辻 小	鶴井 幸寿	辻 小	島田 重造	桜町 小
	10	志木市 "	真泉 光存	志木 小			宮崎 仙藏	宗岡 中	宮崎 仙藏	宗岡 中
	11	朝霞市 "	栗原 政雄	八 小						
	12	新座市 "	金子 実司	大和田 小	香川 茂	新座 中	田中 武蔵	新座 中	田中 武蔵	新座 中
	13	和光市 "	高田 一夫	大和 中			長谷川智彦	五 小	長谷川智彦	五 小
北足立北部	14	埼大附属養護学校	福島 正義	埼大養	福島 正義	埼大養	福島 正義	埼大養	日沼 満治	埼大付養
	15	大宮市教育研究会	若田 せつ	北 小	原田 三郎	日進 中	原田 三郎	日進 中	原田 三郎	東 中
	16	鴻巣市 "	森島 賢一	北 中	森島 賢一	北 中	白根 藤吉	南 小	白根 藤吉	南 小
	17	北本市 "							伊藤 明	中丸 小
	18	吹上町 "							間中 忠男	吹上 小
	19	上尾市 "	秋谷 博	西 小	伊藤 利男	上尾 中	小森 春雄	原市南 小	細井 利治	西 中
	20	桶川市 "	金子 和雅	西 小	金子 和雅	西 小	金子 和雅	西 小	荒井 得治	川田谷 小
	21	伊奈町 "	河野十四郎	小室 小	河野十四郎	小室 小	河野十四郎	小室 小	柳沢 三守	伊奈 中
入間	22	川越市 "	梶田 逸	東 中	木村 稔督	川越 小	橋本 碩司	一 中	貢井 喜一	最関東 中
	23	所沢市 "	柏谷 庄助	向陽 中	多田 力	若狭 小	田村 芳男	西富 小	小野寺良逸	若狭 小
	24	飯能市 "	鳥居 全	一 中	鳥居 全	一 中	森田 良久	精明 小	森田 良久	精明 小
	25	日高町 "								
	26	名栗村 "								
	27	綾山市 "	椎橋 武臣	入間川 小	多加谷俊雄	東 中	多加谷俊雄	東 中	多加谷俊雄	東 中
	28	入間市 "	中野 平八	藤沢東 小	中野 平八	藤沢東 中	岩田 一	扇 小	岩田 一	扇 小
	29	富士見市 "	平野 正夫	富士見台中	平野 正夫	西 中	江田 昭司	勝瀬 中	吉田 正男	みずほ台 小
	30	上福岡市 "	笠原 芳一	二 中	細野 豊	三 中	佐々木七郎	一 小	石井 住夫	二 小
	31	坂戸市 "	小川 石造	北坂戸 中	青藤 駿男	城山 中	齊藤 幸男	城山 中	勝俣 福志	泉 小
	32	鶴ヶ島町 "					間口 博司	杉 下 小	松本 有輔	長久保 小
	33	越生町 "	岡野 福一	川角 中	青柳 煉	越生 中	浅見芳太郎	川角 小	吉田 英男	泉野 小
	34	大井町 "	石村 博龍	大井 小	野村 定夫	大井 中	伊藤 球子	亀久保 小	中沢 邦雄	鶴ヶ丘 小
	35	三芳町 "	富田 信男	三芳 東	高田 信男	三芳 東	真仁田 順	三芳 中	真仁田 順	三芳 中
比企	36	東松山市 "	清水 角三	新明 小	岡野 融一	松山 中	清水 清	南 中	関田 保夫	仲明 小
	37	小川町 "	須藤 章一	小川 小	須藤 章一	小川 小	須藤 章一	小川 小	吉田 栄治	東 中
	38	皆谷町 "	吉野 元治	惣田 小	小室 開弘	音谷 小	上 正雄	惣田 小	新井 茂男	七郷 小
	39	玉川町 "	上 正雄	鳩丘 小	小高盛之助	大門 一	小峰 清	松栄 小	小峰 清	松栄 小
	40	川島町 "	三角 覚治	川島 中	神山 王一	八ッ保 小	神山 王一	出 丸 小	持山 王一	出 丸 小
	41	吉見 "	久保田伸一	吉見 中	久保田伸一	吉見 中	久保田伸一	吉見 中	岡安 忍	西 小

			53年		54年		55年		56年	
事務所番号	研究団体名	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校	
秩父	42 秩父教育委員会	高野 厚	西 小	持田 茂雄	南 小	田中 義一	南 小	岩田 正久	秩父二中	
	43 小鹿野地区教育協会	猪野 勇	小鹿野 小	猪野 勇	小鹿野 小	高根 光信	小鹿野 中	高根 光信	小鹿野 中	
	44 皆野地区 "	田中 義二	長瀬 一 小	柄原 義雄	皆野 小	柄原 義雄	皆野 小	伊古田鶴恵	長瀬 中	
	45 東秩父地区 "	島田 忠南	西 小	福島 恵	西 小	福島 恵	西 小	二宮 真澄	東 小	
児玉	46 本庄、上里教育研究会	新井 徳信	上 里 中	青木 弘	東 小	青木 弘	東 小	木村 昌文	神保原 小	
	47 児玉町教育研究協議会	堀内伊勢治	児玉 中	飯田 武雄	金 屋 小	倉林 二三	金 谷 小	大久保健二	児玉 小	
	48 美里村教育研究会	荒川 龍乙	大 沢 小	藤原 長敏	松 久 中	大久保健二	東児玉 小	金沢 康治	大 沢 小	
	49 鍾川神泉 "	原 俊一	神 泉 中	金井 英雄	渡瀬 小	原 俊一	青柳 小	井田 松雄	阿久原 小	
大里	50 熊谷市教育研究協議会	須長 栄作	石 原 小	柿沼 定雄	荒 川 中	新井 松三	西 小	中村 邦夫	荒 川 中	
	51 深谷地区教育研究会	齊藤 年茂	深 谷 中	田村 武久	深 谷 小	田村 武久	深 谷 小	宇野 一	深 谷 小	
	52 妻沼町 "	井田 和夫	太 田 小	長谷川真一	東 中	長谷川真一	東 中	長谷川真一	東 中	
	53 寄居班 "	飯島 正雄	城 南 中	吉田 賢次	用 土 中	吉田 賢次	用 土 中	麻生 章一	寄居 小	
	54 江 南 "	橋本 寿夫	江南 中	橋本 寿夫	江南 中	浜島 清治	江南北 小	浜島 清治	江南北 小	
埼	55 行田班 "	尾城 英一	中 央 小	尾城 英一	中 央 小	漆原建次郎	中 央 小	漆原建次郎	中 央 小	
	56 加須市 "	鈴木 宏	加 須 小	鈴木 宏	加 須 小	関根 二郎	不動岡 小	程塚 幸雄	加 須 小	
	57 羽生市 "	藤間 敏	羽生 北 小	大熊 達夫	羽 生 中	大熊 達夫	羽生 北 小	笠本 信雄	羽生 南 小	
	58 駒西、川里地区 "	岡田 正明	駒 西 小	岡田 正明	駒 西 小	岡田 正明	駒 西 小	本郷 義徳	羽生共和小	
	59 大利根地区 "	小林 英雄	北 川 辺 中	小林 英雄	北 川 辺 中	小林 英雄	北 川 辺 東 小	小林 英雄	北 川 辺 東 小	
葛	60 春日部市 "	石川 正美	柏 壁 小	石川 正美	柏 壁 小	石川 正美	柏 壁 小	岡 広男	柏 壁 小	
	61 岩槻市 "	北川 秀	慈恩寺 小	北川 秀	慈恩寺 小	小川原登英男	城 北 小	小川原登英男	城 北 小	
	62 越谷市 "	松永 威一	東 越 谷 小	齊藤 徹	大 袋 北 小	中里 順道	大 袋 小	大 袋 小		
	63 久喜市 "	遠藤健太郎	白 岡 南 小	杉山 岩雄	久 喜 中	杉山 岩雄	久 喜 中	腰塚 錠也	南 中	
	64 八潮市 "	恩田 仁治	三 中	恩田 仁治	三 中	有馬 信重	三 小	山下 鉄也	二 中	
	65 三郷市 "	豊間 清治	新 和 小	豊間 清治	新 和 小	豊間 清治	新 和 小	豊間 清治	新 和 小	
	66 蓼田市 "	金子源一郎	黒 浜 小	金子源一郎	黒 浜 小	金子源一郎	黒 浜 小	黒須 豊	黒 浜 西 小	
	67 幸手町 "	樋口 荣	長 倉 小	新井 恭治	西 小	奥原 純哉	東 小	奥原 純哉	東 小	
	68 栗橋班 "	小林 正男	東 小	小林 正男	東 小	小村 正里	東 二 小	小林 正男	北 小	
	69 庄和町 "					関野 潤	中 野 小	関野 潤	南 桜井 小	
	70 杉戸町 "	中島 弘	南 桜井 小	中島 弘	南 桜井 小	齊藤富四郎	杉 戸 中	渋谷 康西	小	
	71 吉川班 "	木村斗三造	吉 川 小	田中 昭一	吉 川 小	田中 昭一	吉 川 小	田中 昭一	吉 川 小	
	72 白岡町 "			岡安 章	薄 菊 小	矢島 賢治	南 小	飯野 初男	芦 菊 中	
	74 茅浦町 "			島田 保	菖蒲南 中	島田 保	南 中	柿沼忠四郎	柏 間 小	
	75 宮代町 "			松村 実	東 小	松村 実	東 小	大島 曙	須賀 中	
	76 蝶宮町 "			平川 仁	上 内 小	矢野 誠	鷺 官 小	星野 昌二	砂 原 小	

事務所	番号	研究団体名	57年		58年		59年	
			会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
北足立南部	1	埼大附属小学校	宮瀬 重美		宮瀬 重美		中村 次郎	埼大附小
	2	" 中学校	末永 國明		末永 國明		福宿 光一	埼大附中
	3	浦和市教育研究会	丸山 健二	南浦 和 小	丸山 健二	南浦 和 小	簽口 肇	尾間木 小
	4	川口市 "	相川 卓一	東 中	相川 卓一	東 中	中村 開穂	青木中央小
	5	与野市 "	上村 松雄	八幡 小	佐々木公彦	東 中	渋谷 一雄	下落合 小
	6	草加市 "	藤井 光男	榮 中	藤井 光男	草 加 中	藤井 光男	草 加 中
	7	蕨市 "	千布 常雄	北 小	伊藤秀三郎	坂 越 小	伊藤秀三郎	坂 越 小
	8	戸田市 "	小島 美輝	戸田 中	今井智恵雄	戸田 一小	今井智恵雄	戸田第一小
	9	鳩ヶ谷市 "	島田 重造	桜 町 小	島田 重造	桜 町 小	石田 英三	鳩ヶ谷 小
	10	志木市 "	宮崎 仙藏	宗岡 二中	八卷 次男	四 小	村田 美代	志木第三小
	11	朝霞市 "	栗原 政雄	八 小	栗原 政雄	八 小	葛山 照久	朝霞第六小
	12	新座市 "	辻 幸男	片 山 小	池内 善行	大和田 小	池内 善行	栗原 小
	13	和光市 "	長谷川智彦	三 小	長谷川智彦	三 小	長谷川智彦	第三 小
北足立北部	14	埼大附属養護学校	日沼 滉治	埼大附養	日沼 滉治	埼大附養	岩崎 次男	埼大附養
	15	大宮市教育研究会	原田 三郎	東 中	原田 三郎	東 中	小豆沢幹夫	大宮 小
	16	鴻巣市 "	長谷川貴一	東 小	長谷川貴一	東 小	長谷川貴一	鴻巣東小
	17	北本市 "	田島 栄作	南 小	田島 栄作	南 小	田島 栄作	南 小
	18	吹上町 "	間中 忠男	吹 上 小	高橋 薫	吹 上 中	高橋 薫	吹 上 中
	19	上尾市 "	三沢 重雄	富士見 小	橋本 一夫	上 尾 中	三宅 一郎	東 小
	20	桶川市 "	加島 亮克	西 小	加島 亮克	西 小	須賀 実	桶川北小
	21	伊奈町 "	柳沢 三守	伊 奈 中	平川 恵作	小 室 小	平川 恵作	小 室 小
入間	22	川越市 "	関根 一夫	川 越 小	新井 一	東 中	小林 公平	仙波 小
	23	所沢市 "	小野寺良逸	若 狹 小	小野寺良逸	若 狹 小	加藤 勝	所沢 小
	24	飯能市 "	森田 良久	双 柳 小	荒島 弘	原市場 中	荒島 弘	原市場 中
	25	日高町 "			吉沢 静雄	高 混 小	吉澤 静雄	高 混 小
	26	名栗村 "			鯨井 孝彦	名 栗 小	吉田 武彦	名 栗 中
	27	狭山市 "	発知 敏郎	入間川東小	発知 敏郎	狭山南小	武活 富雄	人間川 小
	28	入間市 "	小谷野五郎	藤沢 北 小	小谷野五郎	藤沢 北 小	比留間日光茂	黒須 小
	29	富士見市 "	吉田 正男	みずほ台小	吉田 正男	みずほ台小	津田 福治	閑沢 小
	30	上福岡市 "	国分 俊一	三 小	佐々木治郎	四 小	藤野 一夫	第五 小
	31	坂戸市 "	藤侯 福志	泉 小	細野 豊	城 山 中	青柳 煎	北坂戸小
	32	鶴ヶ島町 "	中村 博一	榮 小	吉野 延子	藤 小	吉野 延子	藤 小
	33	越生町 "	浅見 武市	毛呂山光山小	村田 文男	越 生 中	小沢 敏介	梅園 小
	34	大井町 "	間仁田喜造	三 角 小	金井塙本次	大 井 東 中	山崎 昭次	東原 小
	35	三芳町 "	小高 一郎	森久保 小	沢田 敏雄	三 芳 中	栗原 利男	三 芳 中
比企	36	東松山市 "	石原 實	新 明 小	金井 恭市	青 島 小	坂上 浩	東 中
	37	小川町 "	吉田 栄治	東 中	千島 春吉	小 川 小	岡本 芳雄	東 中
	38	皆谷班 "	服部 武義	福 田 小	大久保祐次	志 賀 小	服部 正幸	滑川 中
	39	玉川班 "	小峰 滉	松 荣 小	大野 龍平	都幾川 中	萩原 和郎	明覚 小
	40	川島町 "	永井 隆明	川 島 中	利根川幸平	伊 草 小	長谷部庄平	中山 小
	41	吉見 "	岡安 忍	西 小	岡安 忍	西 小	高山 文男	吉見 中

教育事務所	番号	研究団体名	57年		58年		59年	
			会長名	勤務校	会長名	勤務校	会長名	勤務校
秩父	42	秩父教育委員会	岩田 正久	秩父一小	黒沢 哲夫	花の木 小	黒澤 哲夫	花の木 小
	43	小鹿野地区教育協議会	飯島 治男	小鹿野小	飯島 治男	小鹿野小	飯島 治男	小鹿野小
	44	皆野地区	内田 辰蔵	長瀬 中	野口 正	皆野 中	野口 正	皆野 中
	45	東秩父地区	横田 岩夫	東秩父中	大久保 亘	西 小	加藤 錄郎	西 小
児玉	46	本庄、上里教育研究会	武政 高夫	旭 小	田中 誠一	本庄南小	吉野 忠雄	七本木 小
	47	児玉町教育研究協議会	田島栄一郎	本泉 小	百田 昭道	共和 小	田中 誠一	児玉中
	48	美里村教育研究会	高橋 正昭	美里 中	内海 嘉一	松久 小	金沢 麻沼	東児玉小
	49	神川神泉	森田 清司	丹 祥 小	田島 正治	渡瀬 小	山中 清	神泉 中
大里	50	熊谷市教育研究協議会	梅沢 恒一	南 小	桜沢 近	東 中	戸井田経世	熊谷西小
	51	深谷地区教育研究会	宇野 一	深谷 小	豊島 通趙	深谷 中	八田島光治	幡巣中
	52	妻沼町	木村 稔	妻沼 小	木村 稔	妻沼 小	背木 次雄	男沼 小
	53	寄居町	吉田 俊雄	川本北小	大野 昱一	用土 中	宇野 章	寄居 中
	54	江南	鯨井 晴雄	大里 中	鯨井 晴雄	大里 中	鯨井 晴雄	大里 中
埼	55	行田町	漆原達次郎	中央 小	渡辺 彰吾	行田 中	栗原 子雄	中央 小
	56	加須市	程塚 幸雄	加須 小	吉岡 忠一	大桑 小	奥沢 静夫	昭和中
	57	羽生市	新井 秀一	井 泉 小	折原 浩一	羽生北小	宮沢 友次	羽生北小
	58	騎西、川喜地区	竹村 緯男	高柳 小	根岸 庄一	騎西 中	根岸 庄一	騎西 中
	59	大利根地区	伊藤 弘道	大利根東小	伊藤 弘道	大利根東小	杉山 岩雄	北川辺中
葛	60	春日都市	岡 広男	柏 壁 小	深井 亀雄	春日部 中	深井 亀雄	春日部 中
	61	岩槻市	持木 畿	慈恩寺 小	持木 畿	慈恩寺 小	郷武内正次	新和 小
	62	越谷市	中里 順道	大相模 小	中里 順道	大相模 小	中里 順道	大相模 小
	63	久喜市	腰塚 輝也	南 中	齊藤富四郎	久喜 中	齊藤富四郎	久喜 中
	64	八潮市	山下 鉄弥	二 中	山下 鉄弥	二 中	山下 鉄弥	八潮第二中
	65	三郷市	豊間 清治	新和 小	豊間 清治	新和 小	豊間 清治	彦郷 小
	66	越田市	岩崎 利雄	南 小	岩崎 利雄	南 小	池田 実	越田中央小
	67	幸手町	奥原 精哉	東 小	奥原 精哉	東 小	川辺 幹三	高野 小
	68	栗橋町	小林 正男	北 小	加藤 好一	西 中	渡辺 昭乎	栗橋 東中
	69	庄和町	閑野 潤	南桜井 小	閑野 潤	南桜井 小	閑野 潤	南桜井 小
	70	杉戸町	古谷 好男	杉 戸 小	古谷 好男	杉 戸 小	古谷 好男	杉 戸 小
	71	吉川町	田中 昭一	吉川 小	田中 昭一	吉川 小	山崎 芳夫	閑 小
	72	白岡町	飯野 初男	菖 菅 小	飯野 初男	菖 菅 小	飯野 初男	菖 菅 中
	73	菖蒲町	平川 仁一	菖蒲 小	平川 仁一	菖蒲 小	金井 昭次	菖蒲 小
	74	宮代町	大島 喬	須賀 中	岡田 康繁	前原 中	岡田 康繁	前原 中
	75	鶯谷町	程塚 竹士	上 内 小	程塚 竹士	上 内 小	程塚 竹士	上 内 小

## 編集後記

昭和39年1月、埼玉県連合教育研究会が発足して以来、はや20年経過しました。ここに、20周年を記念して本誌を発刊する次第です。

県内92研究団体、歴代会長、事務局長、関係各位の絶大なる御協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

関係各位に記念原稿をお願いすると共に歴代会長さん事務局長さんの座談会を開催し、関係者でなければ分からぬ御苦労も伺うことができました。膨大な資料と貴重なお話等、20周年記念誌として相応しい内容にすることができました。

これらは、各研究団体がそれぞれの特質を生かし、創意工夫に努めつつ研究活動を展開しているということ、長い歴史と伝統が、如何に埼玉県の教育向上に寄与しているかを物語っているものと考えます。

本誌発刊に際し、企画から収集、編集の中心になってお骨折りをいただいた、原田三郎先生、関根 昇先生に、会員の皆様ともども感謝申し上げ、編集後記といたします。

昭和60年3月31日

### 編集委員

井上喜代佳	大宮桜木小	野原 晃	埼 付 中
湯本茂夫	" 宮前中	関根 昇	大宮東中
小森俊秀	浦和常盤中	新島佳子	"
柴田房雄	埼 付 小		

---

## 埼教連 二十年のあゆみ

---

昭和60年3月31日 発 行

編集発行 埼玉県連合教育研究会

埼玉県大宮市堀の内1-99  
大宮市立東中学校  
TEL 0486(41)0808

印 刷 関東図書株式会社  
埼玉県浦和市別所3-1-10  
TEL 0488(62)2901

---